

图 70 SH29 平·断面·出土遺物 (1)

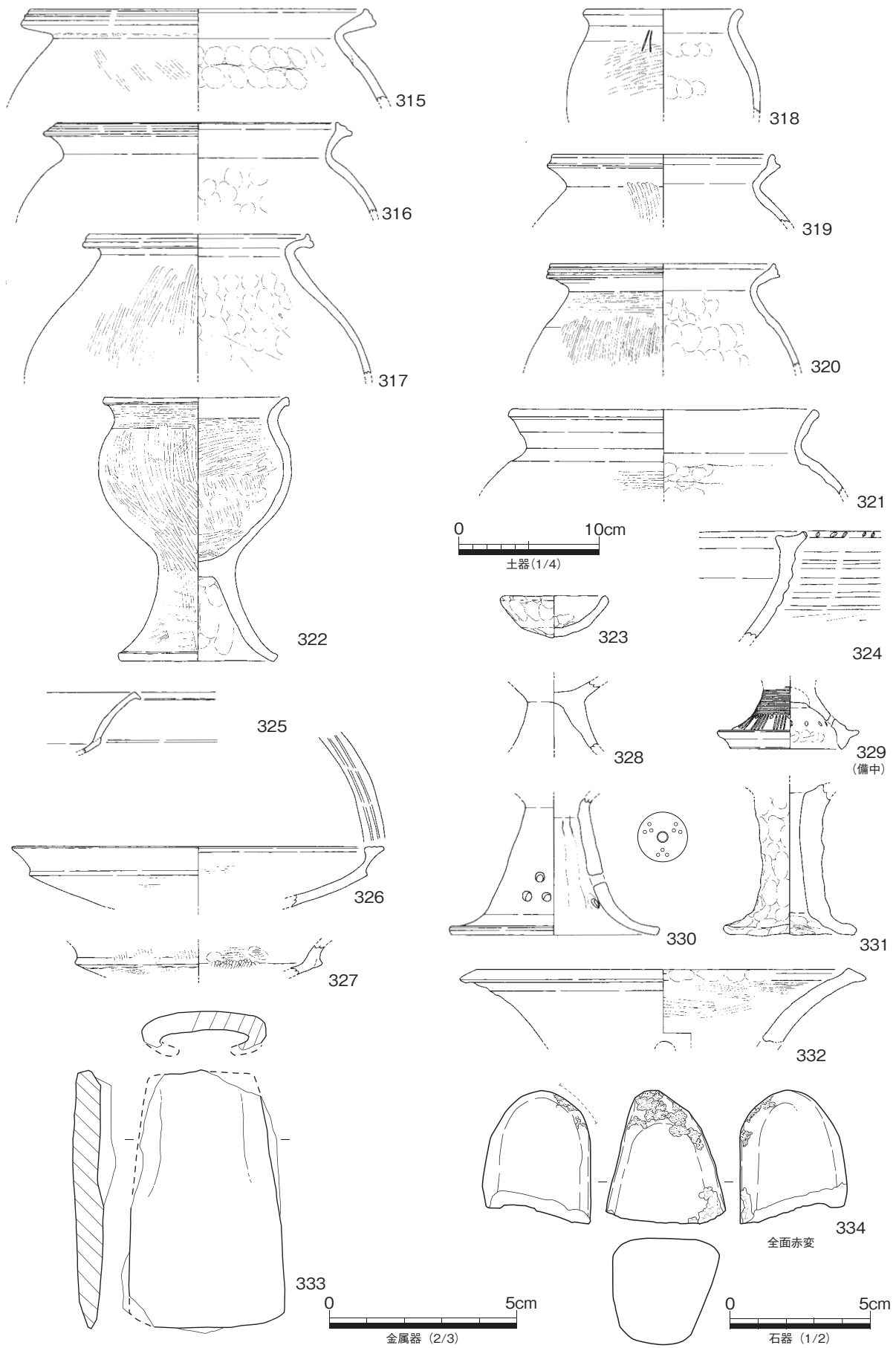


图 71 SH29 出土遺物 (2)

石器 334 は砂岩の垂円礫半欠片である。小口部に不明瞭な敲打痕が残る。破断面を含めて、全面が赤色化しており、高温被熱により変色したものと推定できる。(森下)

一部に混入品を含むものの、多くの土器は弥生後期前半中段階の特徴をもつ。出土状況からこれらの土器は住居廃絶に伴って一括廃棄された状況が復元できるため、本住居の廃絶時期は後期前半中段階に推定される。(森下・信里)

SH31 (図 72 ~ 76)

遺構 B区中央北側で検出した竪穴住居跡である。B区中央攪乱により埋土上部の削平を被るが、床面は比較的良好に残る。やや楕円形の平面プランである。長径6.7m、短径5.7mを測る。周縁に壁溝が回り、床面には7基の主柱穴跡がある。中央には2基の土坑がある。K1が最終埋没時の中央土坑、K2はその前段階の中央土坑である。主柱穴ラインより外側は、幅約0.5mの浅い溝跡が回り、その上部に貼床を施してベッド状遺構を設ける。このように貼床によりベッド状遺構を構築する手法は、当遺跡において普遍的に用いられる構築法である。貼床下部の溝跡についてはその機能は不明である。貼床層を掘り込んで廃絶時の壁溝が掘開される。ただし、当該遺構検出時には、そのすぐ外側で幅の狭い壁溝が回っていた。その平面記録は取れていないが、断面aラインの8層がそれに相当する。主柱穴の付け替え跡は見られないので、貼床や屋根材の補修等により一部が改修されたものと推定する。中央土坑のK2は層位的には古い段階の住居跡に伴うものと考えられる。

出土遺物は床面や中央土坑より多数の土器等が出土した。特に中央土坑では356の朱精製の片口鉢、335の土佐系壺、364の打製石剣先端部片、生粘土コンテナ1箱分等が出土した。また、中央土坑K1のすぐ西側では安山岩製の置き砥石1点が、同東側の炭化物エリアの東でサヌカイト製打製石鎌が2点が床面に貼り付くように平坦な状態で出土した。同様に炭化物エリア南で結晶片岩製打製石庖丁1点が出土した。

埋土中の焼土は約10点62.66gが出土した。いずれも5cm未満の小塊である。(森下)

土器 335は口縁部外面に粘土貼り付けによる段をもち、土佐地域の壺に酷似しているが、石英粒を多く含み赤褐色に発色する旧練兵場遺跡に通有の胎土をもつ。336は長頸壺の口縁部で、頸部外面の凹線文は沈線化しており、中期末のものと明確に異なる属性を備える。337~339は壺底部片であり、338は中期末の形態を留める。340の無頸壺の口縁部は蓋受用の2孔一対の穿孔をもつ。341の甕は上向きに外反する口縁部をもち、やや後出する属性を備える。343は完形の甕であり、口縁部や胴部から底部の形態に弥生後期初頭の属性を良好に留める。344は脚台状の底部をもつ無頸壺である。345・346は台付鉢の底部片と考えられる。347~349は壺底部片である。350は台付鉢の口縁部片で中期末の混入品と見られる。351・353・354は高杯口縁部であり、口縁部両側を拡張する351と直立する口縁部をもつ353・354の二者が見られる。355は高杯脚部である。

356は把手付片口皿であり、内面及び把手部付近に赤色顔料の付着が確認できる。把手部付近の胴部形態から甕の半裁による成形が想定できる。分析の結果、赤色顔料は水銀朱であることが判明した。(信里)

石器 357~363はサヌカイト製打製石鎌である。359は薄身の有茎式石鎌で、小剥片の周縁に僅かな

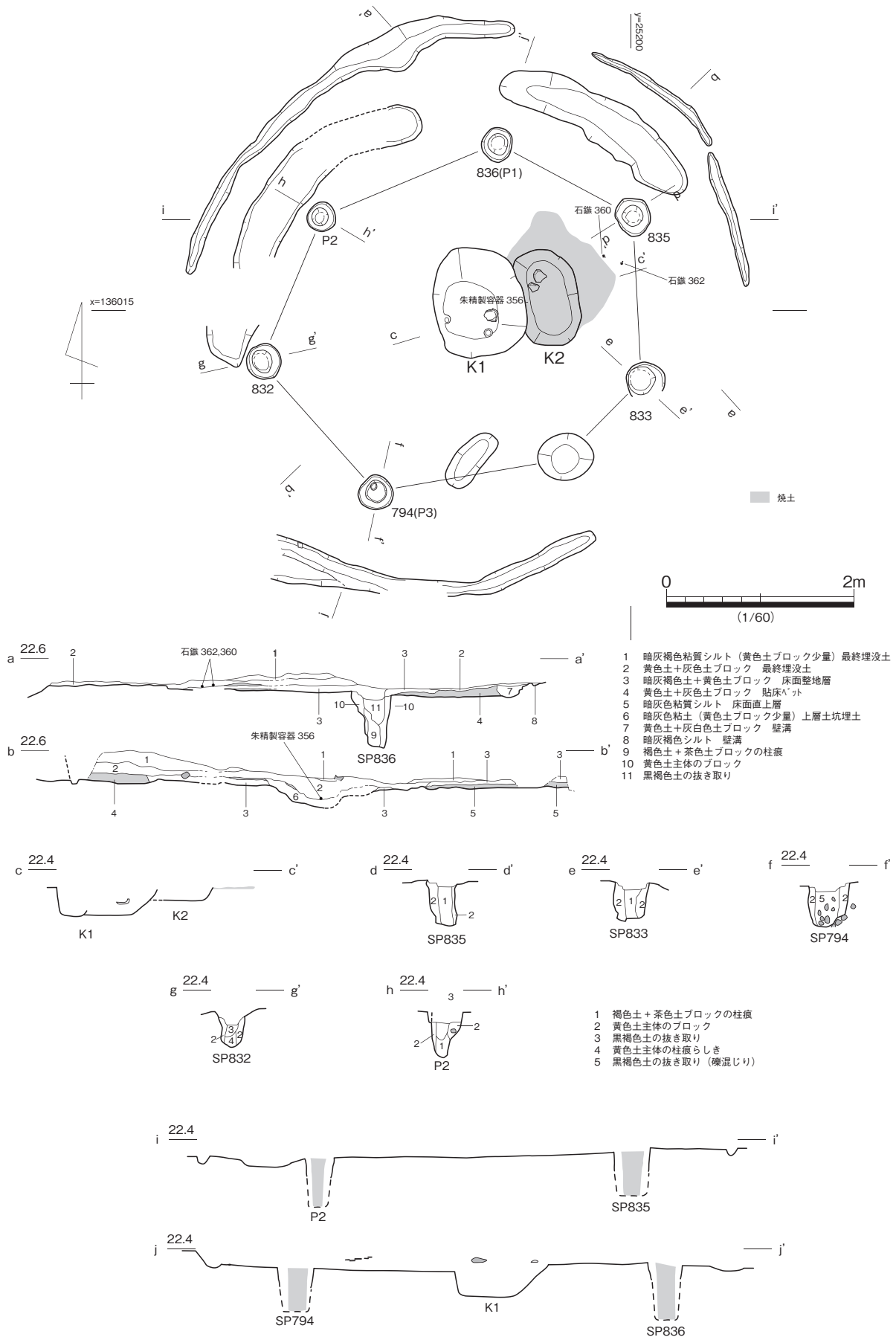


図 72 SH31 平・断面

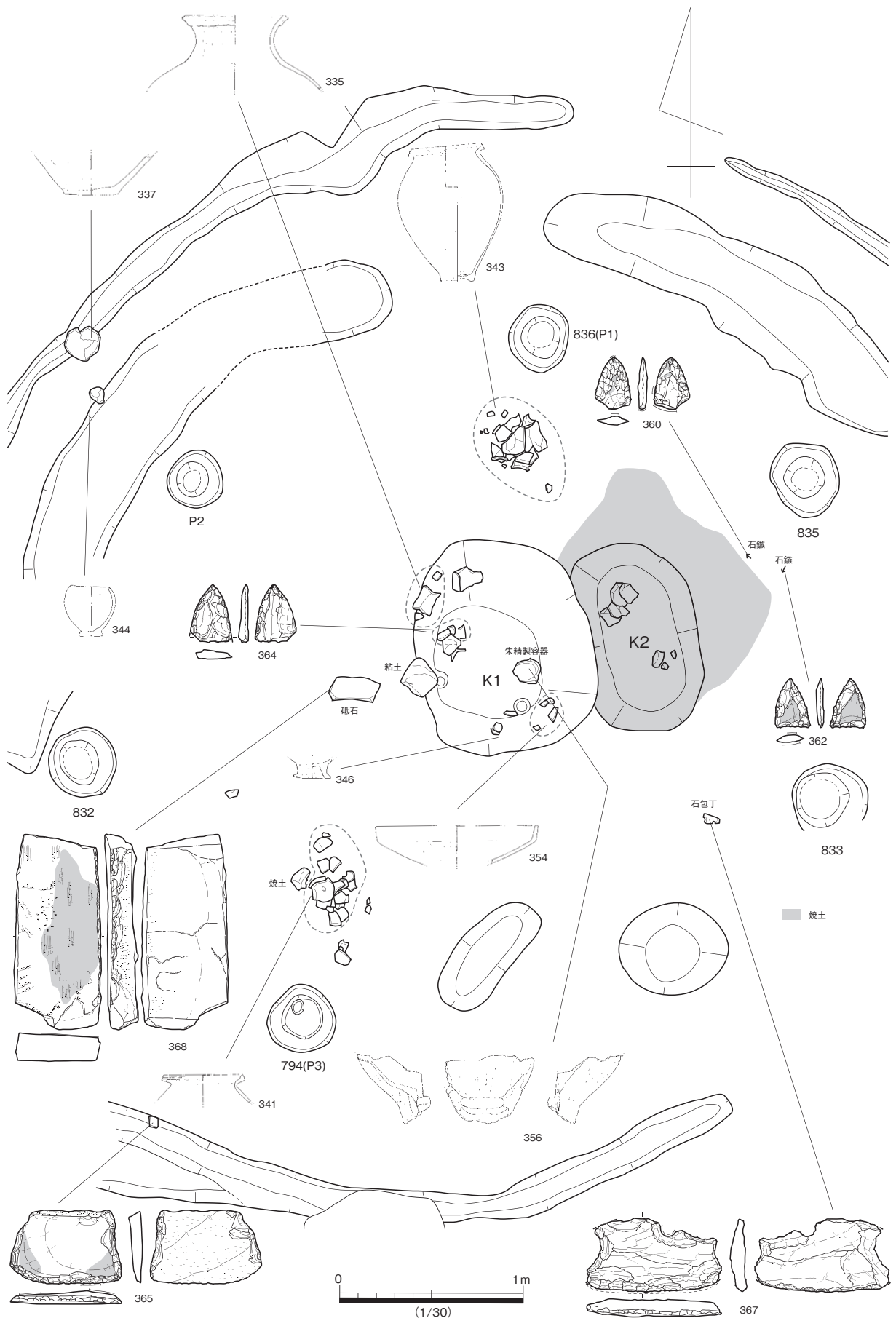


图 73 SH31 遺物出土状况

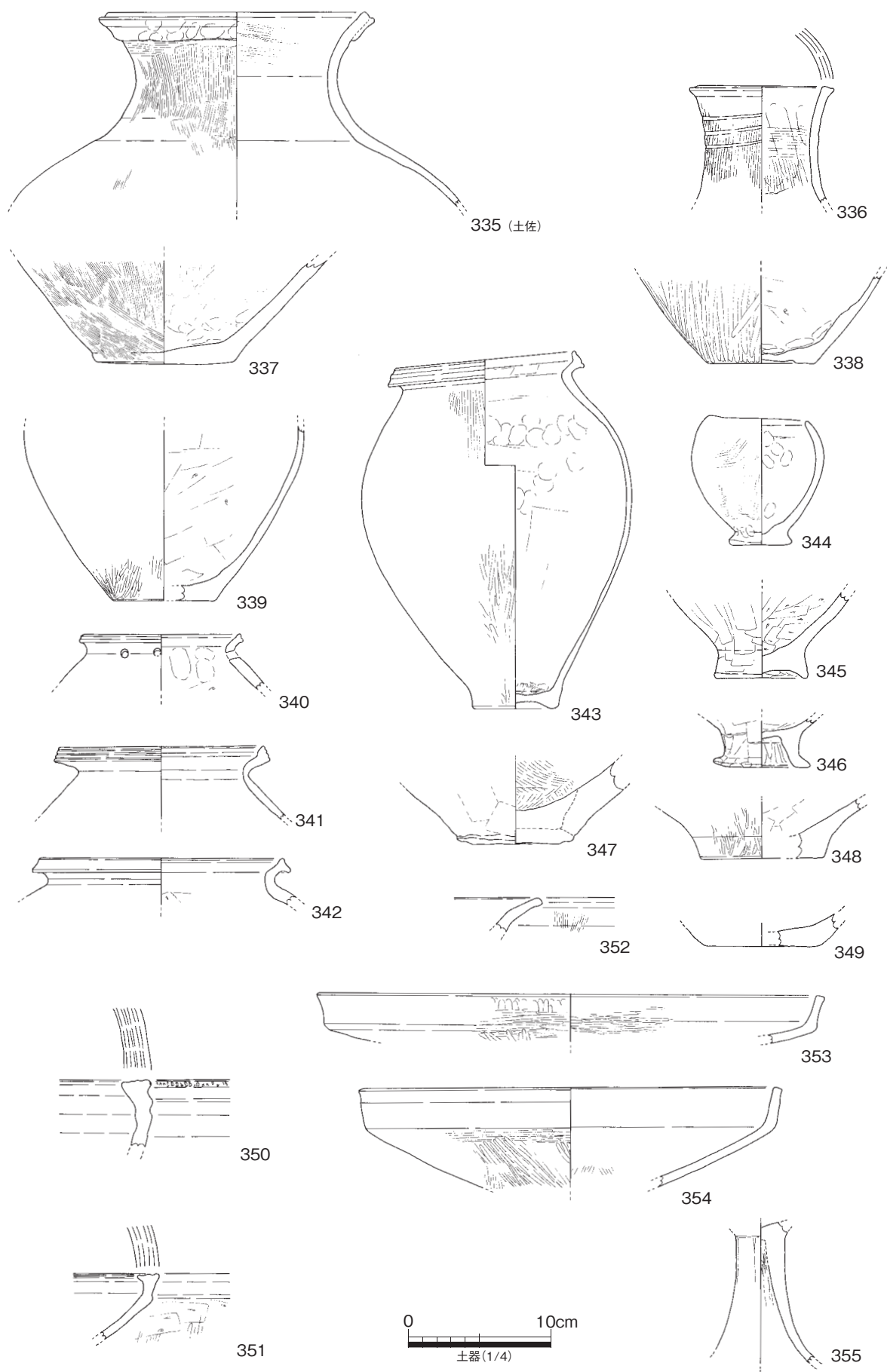


图 74 SH31 出土遺物 (1)

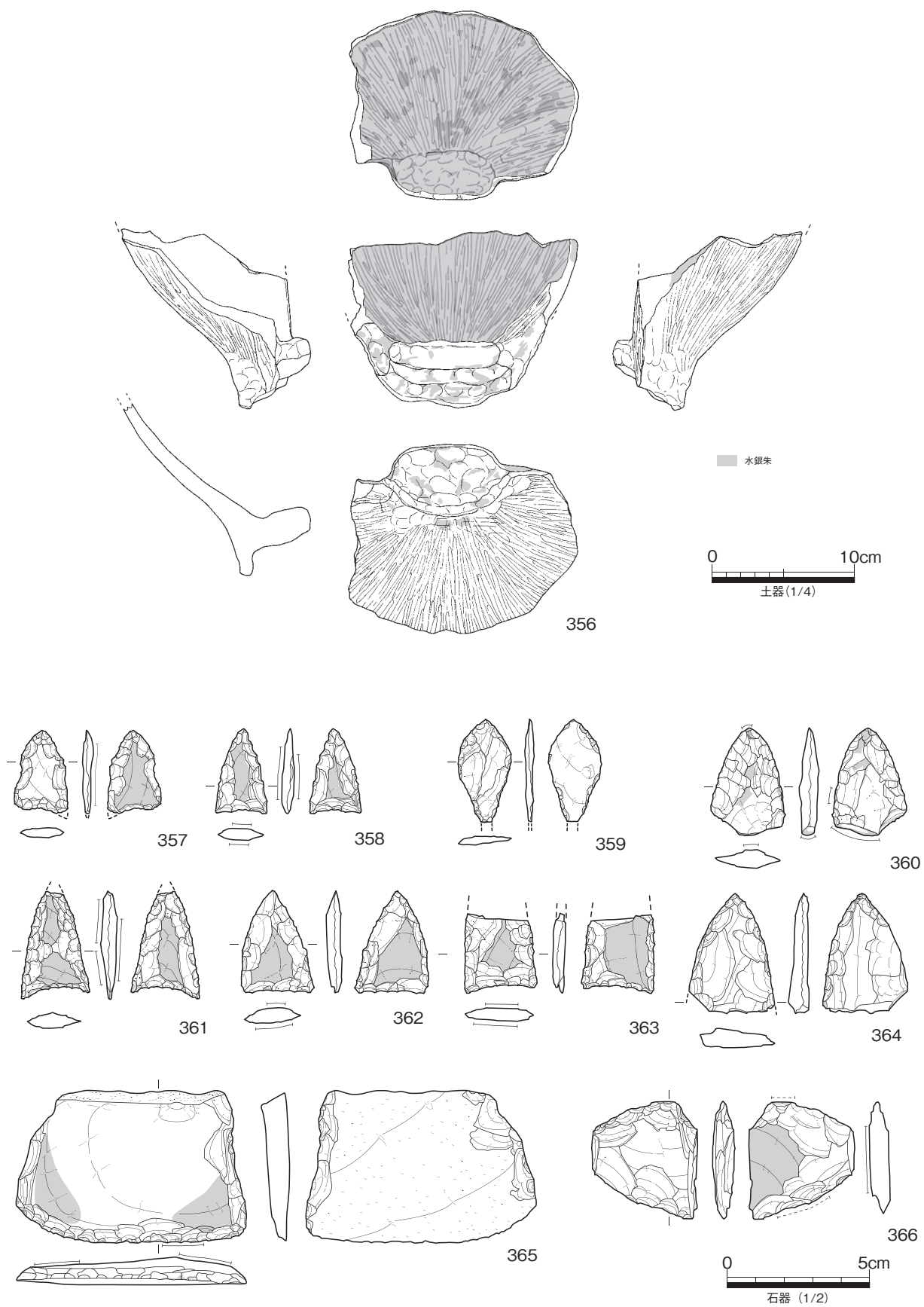


图 75 SH31 出土遺物 (2)

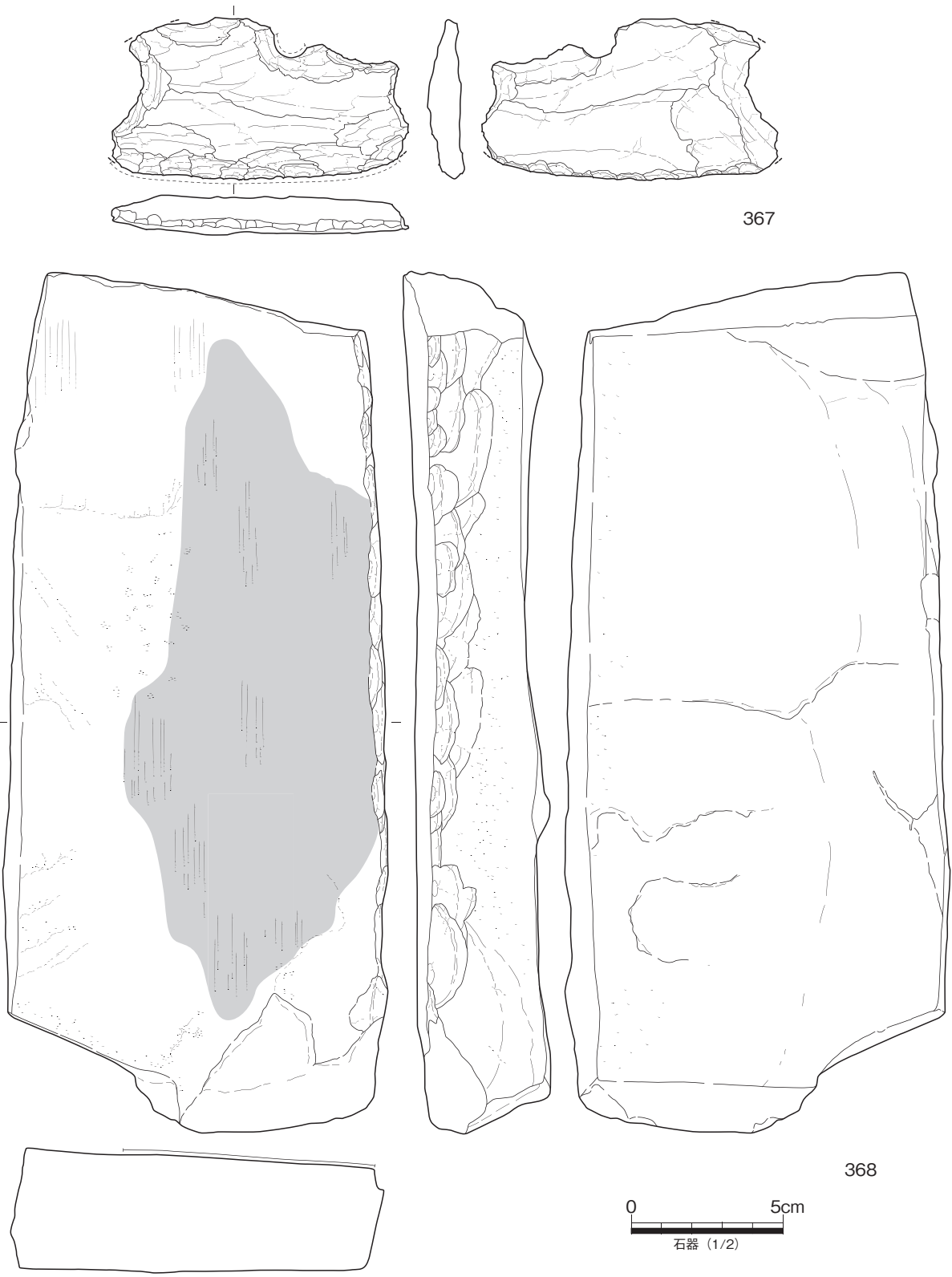


图 76 SH31 出土遺物 (3)

調整加工を施しただけの遺物である。360 はやや厚みある剥片の基部や表裏面、また先端付近に部分研磨を施すものである。切断具等に使用した可能性もあるが、器面の研磨を観察すると、鑄を作り出すような研磨が見られることから、サヌカイトを素材とした磨製石鏃を製作しようと試みたものである可能性が高い。このようにサヌカイトを研磨して磨製石器を作成する手法は讃岐地域では稀だが、近畿地方の打製石剣等に例があり、また九州の佐賀県吉野ヶ里遺跡で出土したサヌカイト製打製石庖丁の刃部付近には研磨を施した痕跡が見られる等、従来の剥片剥離のみの技術により収穫具の刃部形状を整える志向から逸脱した個体が遠方では見られる。讃岐地域において、このような遠方の製作志向が観察できる点で重要な資料と言える。その他の石鏃はいずれも表裏面に摩滅痕が残る。これらの摩滅痕はいずれも周縁の調整加工に先行する素材面に認められるものであり、打製石庖丁を転用した石鏃であるものと言える。

365 はサヌカイト製の打製石庖丁だが、長さ 8.0cm と短い形状に加えて、刃部の調整加工が一面に収まる個体であり、当地域の石庖丁としては異質である。使用痕は刃部付近の表面に若干摩滅が見られる他、刃部端の極めて狭い範囲に強い摩滅が認められる。この摩滅は、一見後述する切断具との区分が困難だが、摩滅痕を詳細に観察すると、調整加工による刃部の凹凸に沿って、凸部だけでなく凹部にも摩滅が及ぶことから、イネ科植物の接触に伴う摩滅と判断した。

366 は片面に摩滅が残る楔状石核である。打製石庖丁の転用である。367 は結晶片岩製の打製石庖丁とした。長さ 9.7cm で左右に挟りがあることから石庖丁の形態を呈すが、厚みが 1.3cm と厚いことや、刃部付近に摩滅痕が認められないことから、少なくとも刃部調整後の実用は認められない。また、器体上部に半円形の挟りを施しており、通有の形態とは異なるので、切断具等他の機能を考える必要があるかも知れない。

368 は長さ 28.5cm、厚み 4.0cm の安山岩製大型砥石である。砥面は平滑で一部光沢を帯びる程使い込まれている。裏面は未調整で側面に粗加工の痕跡がある。板状安山岩を若干加工した置き砥石と考える。(森下)

343 の甕や 356 の把手付片口皿等より、本住居の廃絶時期は後期前半古段階と推定する。(森下・信里)

SH32 (図 77)

遺構 A区中央部でA区中央攪乱に削平されながら、主柱穴跡のみを検出した竪穴住居跡である。柱間は 3.7m と通有の住居跡より長めであり、大型の竪穴住居跡と推定できる。同様の柱間をもつ住居跡は、平成 5 年度に調査が行われた 8 次調査 SH01 (一辺 8.1m) がある。(森下)

土器 369 は無頸壺の口縁部片で、口縁形態から弥生中期末に比定される。370 はボール状の小形鉢であり、弥生終末期と見られる。

373 は SH32 付近の不定形の落ち込みから出土した製塩土器である。薄手尖底タイプ、「倉浦式」とされた古代の製塩土器と考えられる。胎土中には石英・長石類を多く含み、成形に伴う凹凸が激しい。SH32 に伴う可能性がある遺構として提示しているが、明らかに後世の混入品である可能性が高いことを断っておく。(信里)

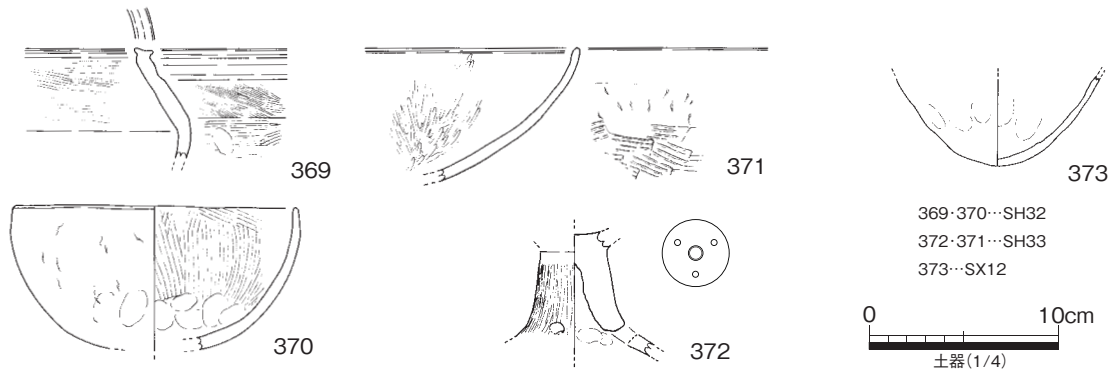
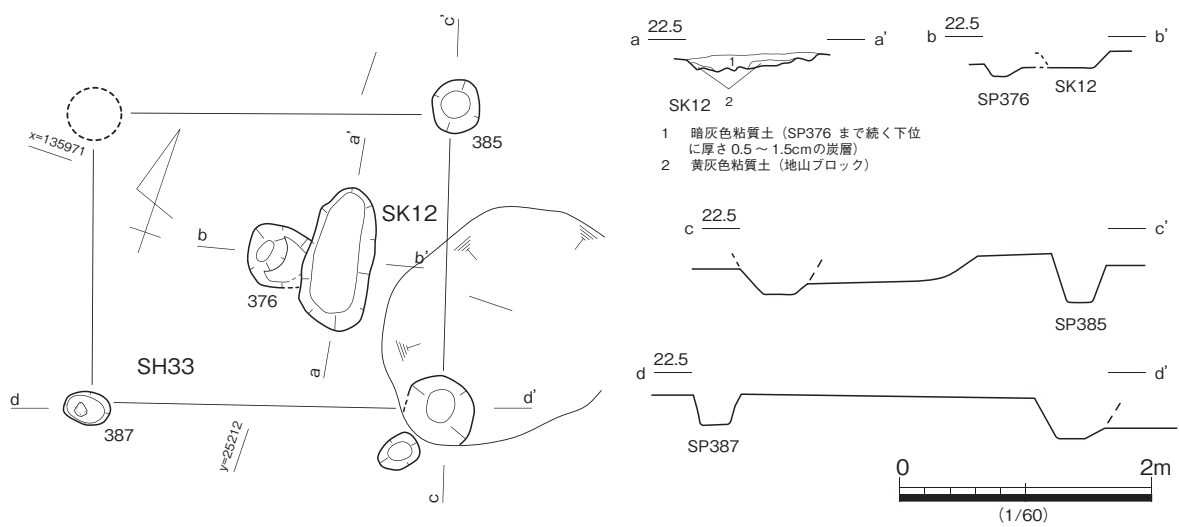
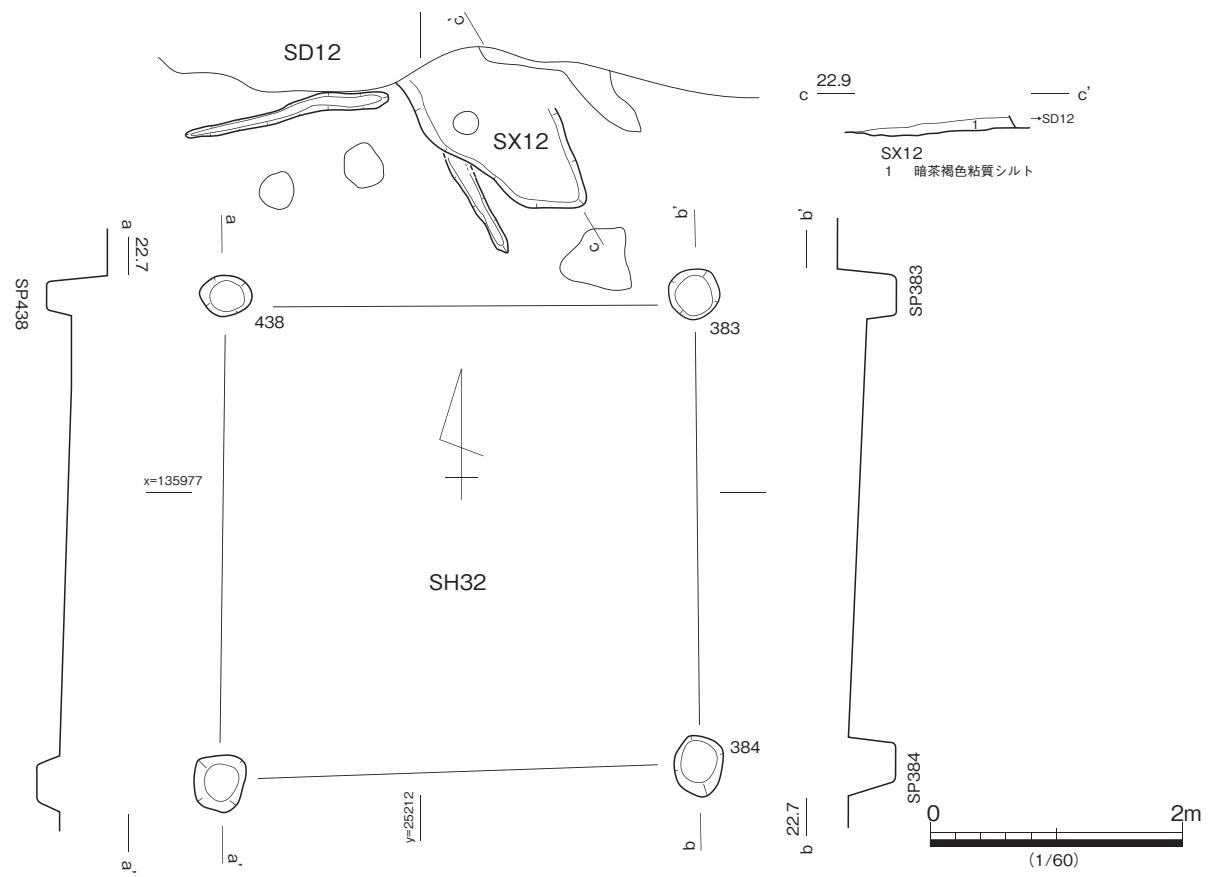


図 77 SH32・33 平・断面・出土遺物

柱穴配置からの復元であり、時期決定等に課題を残すが、370の鉢の形態より本住居は弥生時代終末期古段階を中心とする時期に営まれたと推定される。(森下・信里)

SH33 (図 77)

遺構 A区中央南寄りのA区中央攪乱に大きく削平されながら、4箇所の主柱穴跡及び中央土坑を検出した竪穴住居跡である。中央土坑SK12は埋土中に炭層が認められ、その炭層が隣接する柱穴跡SP376埋土上部にも流入することから、柱穴状の土坑を伴ういわゆる「1〇型中央土坑」と言える。(森下)

371は口縁端部を面取りする中形鉢であり、372は短脚の高杯脚部片である。時期決定に必要な遺物が必ずしも十分とは言えないが、371の形態から本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したと捉えられる。(信里)

SH35 (図 78 ~ 83)

遺構 C区西側で検出した直径7.7mの円形竪穴住居跡である。ほぼ全形を検出したが、一部がすでに報告済みのY区に外れる。主柱穴跡は多角形状に複数回る。埋土中に炭化物を多く含む土坑が掘り方中央付近に3基存在する。このことから、2回の建て替えを行った住居跡と判断できる。埋土の深さは約0.15mで、検出段階ですでにブロック土を多く含む床面直近の埋土層が観察できた。したがって、掘り方は大きく削平されているものと推定できる。当遺跡の竪穴住居跡に一般的なベッド状遺構は検出できなかったが、検出段階ですでにベッド部の貼床層まで削平が及んでいたことから、検出ができなかったものと考えられる。掘り方北側には、不定形に張り出す形状の遺構が付属する。これらは、埋土を半分程掘り下げた段階で検出しており、床面との境の段は浅い。詳細は後述するが、建て替えられた古い時期の住居に伴う可能性が高い。

主柱穴はA～Cの3組を検出した。このうち、A組は6ないし7基の柱穴跡で構成する。掘り方最外周線から各柱穴跡までの距離は1.1～1.6mでほぼ揃っており、その中心位置に土坑K2がある。また、その直近床面で焼土面を検出した。

主柱穴B組は6基の柱穴跡で構成する。住居平面のやや南西に片寄った位置で検出した。中心位置では土坑は検出できなかった。SP1076は土坑K1及びその関連土坑と重複しており、K1等の埋没後に掘開された柱穴跡である。

主柱穴C組は5基の柱穴跡で構成する。その中心位置で土坑K1を検出した。K1は長径0.8mの長楕円～隅丸長形状の土坑である。その埋土下部で遺存状態が良好な土器が出土した。その北側の別遺構として調査した礫を埋土中に含む土坑は、調査時の写真等の記録から見て、K1に連続する同一遺構と判断した。土坑埋土の一部を別遺構として調査したものだが、同一遺構と見てC組に伴う中央土坑と位置付ける。B組主柱穴のSP1076との重複がある。

以上の建て替えを伴う3組の主柱穴跡・中央土坑については、住居跡外周線との位置関係や、掘り方北側の不定形貼り出し部を埋土半分程掘り下げた段階で検出したことを考慮すると、A組が3組の中で最も新しい時期、すなわち最終埋没期の遺構であると考えられる。さらに、住居跡床面では、3組の柱穴跡や土坑をほぼ同一面で検出していることから見て、A組主柱穴列の外側にベッド状遺構を備えており、検出した床面はA組の廃絶時期の床面と考えられる。B・C組の先後関係はB組が新しいことから、

3組の変遷はC→B→Aの順と見るのが妥当である。A組のベッド下部で検出した2箇所の貼出し部は、調査時に東側が先行するという判断を行っており、支柱穴跡の位置関係から見ても、その判断は相違ないものとする。その他、床面で検出した長楕円形土坑K3は、C群の支柱穴跡と僅かながら重複しており、C群より新しい遺構と考えられる。

床面や土坑等からは多くの遺物が出土した。床面で出土した土器は385の甕が遺存状態も良好で当該住居跡の下限を示す土器と評価できる。また、銅鏃3点、ガラス小玉2点の、貴重品が出土した。いずれも床面直上で出土しており、住居跡廃絶時に存在した遺物である可能性が高い。これらは特に一箇所にまとまる様子はなく、出土位置は1～2.7mの間隔が認められる。この他、鉄器1点が床面柱穴状土坑内より出土している。

焼土はA群中央土坑のK2直近の他、その約2m東側でまとまって出土した。遺物として取上げた焼土は、小塊15点(合計83.31g)である。いずれも不定形で面をもつものはない。一部、色調の異なる2種類の粘土を使用したように観察できるものがあるが、焼け具合の差か、元の粘土の差か判然としない。(森下)

土器 378・393はK1より出土した土器である。378の長頸壺は、ミガキ締められた肩部に水平方向の1条沈線による記号文を描く。形態から、弥生後期前半新段階のものと見られる。393は内外面をミガキ締める鉢で、明確な平底を留める。378の長頸壺と同様に、弥生後期前半新段階の所産と考えられる。383・387・395はK3から出土した土器群である。383はやや肉厚の口縁部が外面に退化した凹線文を2条施す。弥生後期前半中段階の所産である。387は小形甕または鉢と見られる土器で円盤状の平底をもつ。395は高杯口縁部で、弥生後期前半新段階の特徴をもつ。

374は弥生中期前半でも末葉の広口壺の口縁部片であり、混入品と見做せる。375の広口壺は、口縁部形態に弥生後期後半の特徴をもつ。376は弥生中期後半の無頸壺の口縁部であり、蓋受用の穿孔が現存で1孔確認でき、混入品である可能性が高い。377は長頸壺の頸部片である。379の甕は、形態から弥生後期前半古段階に比定される。380は広口壺の底部から胴部片であり、帰属時期は終末期に下る可能性がある。381は肩部に櫛描直線文と下向きの扇形文を描く壺であり、文様及びその構成から搬入・模倣土器と見られるが、土佐地域と想定できる。382は算盤玉状の胴部が復元される壺であり、外面に断面四角形の突帯とヘラ描きの鋸歯文が確認できる。胎土的には、他の土器群と違和感はないが、備中等の吉備地域の影響が想定できる。384の甕は短く屈曲する口縁部を上方のみ拡張する甕であり、弥生後期前半中段階の特徴をもつ。385は口縁部が緩く屈曲する甕であり、形態から弥生後期後半古段階に比定される。

386は弥生中期後半の甕口縁部片で、402の鉄器片に伴う。出土遺構であるSP1355は本竪穴住居跡に伴うものではない可能性が高い。388の甕底部片は、弥生中期後半に特徴的な脚台をもつ。389は甕底部片。390・391は弥生後期後半期の鉢底部と考えられる。392は口縁端部を面取りする鉢口縁である。394は口縁端部の拡張がやや緩やかで、上端面の凹線文の退化しており、弥生後期前半新段階の特徴をもつ。397は低脚の高杯脚部である。398は弥生中期末の高杯脚端部で混入品の可能性が高い。396の高杯は、杯部中位外面の反転部に2条の沈線をもつもので、弥生後期前半新段階の特徴をもつ。

金属器 402の鉄器片は、断面が裏すき状を呈することからヤリガンナの可能性が高い。(信里)

銅鏃が3点ある。いずれも連鑄式製作技法である。399は長さ2.25cmの小型品で、茎部幅は0.53cm

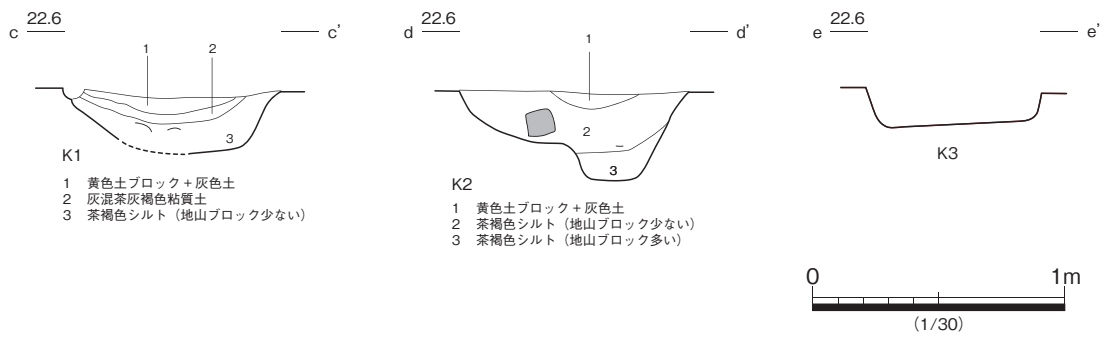
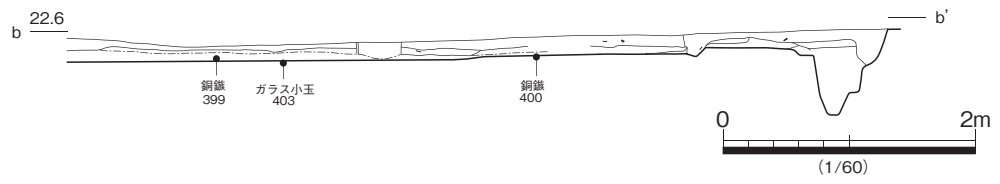
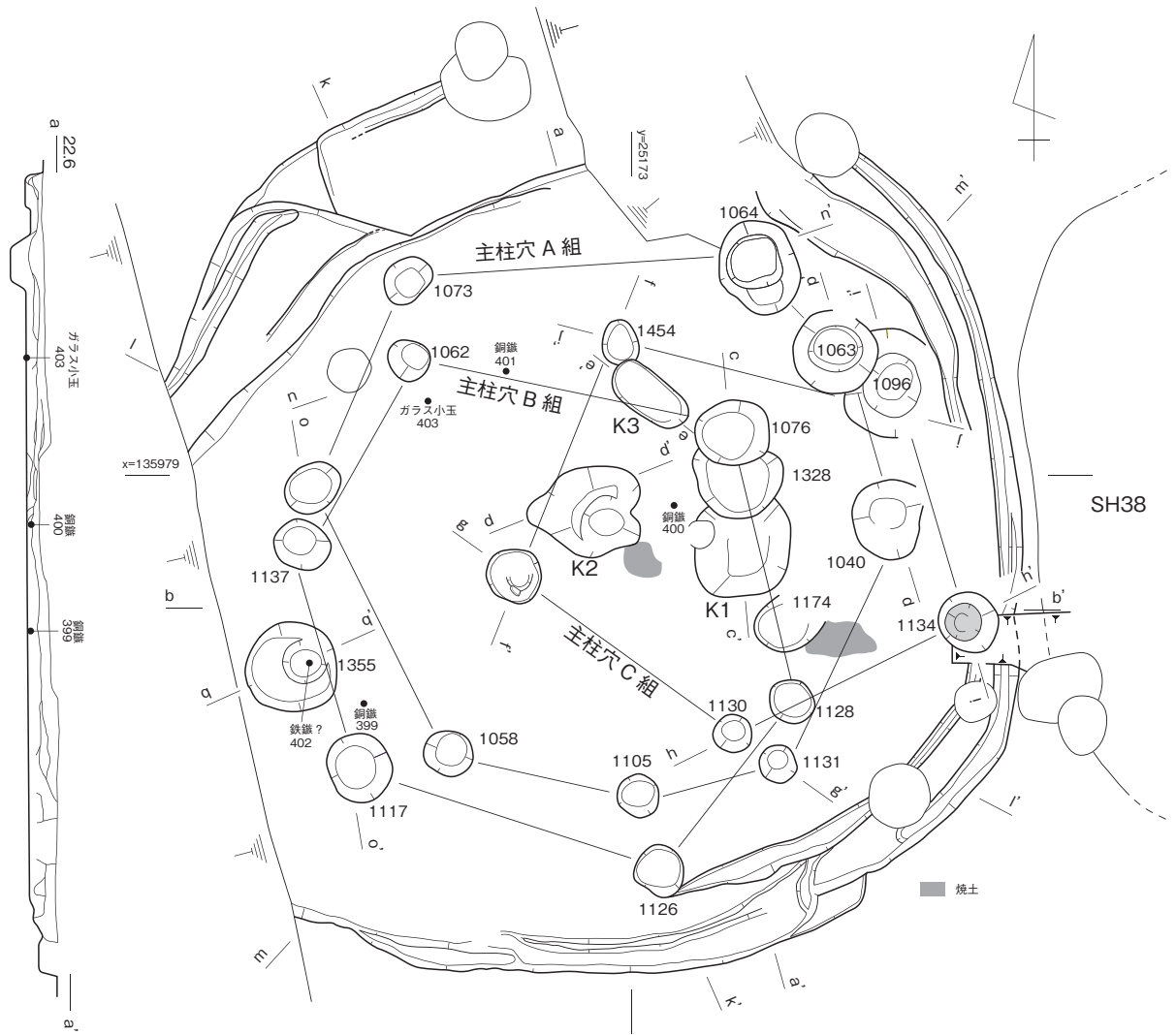


図 78 SH35 平・断面

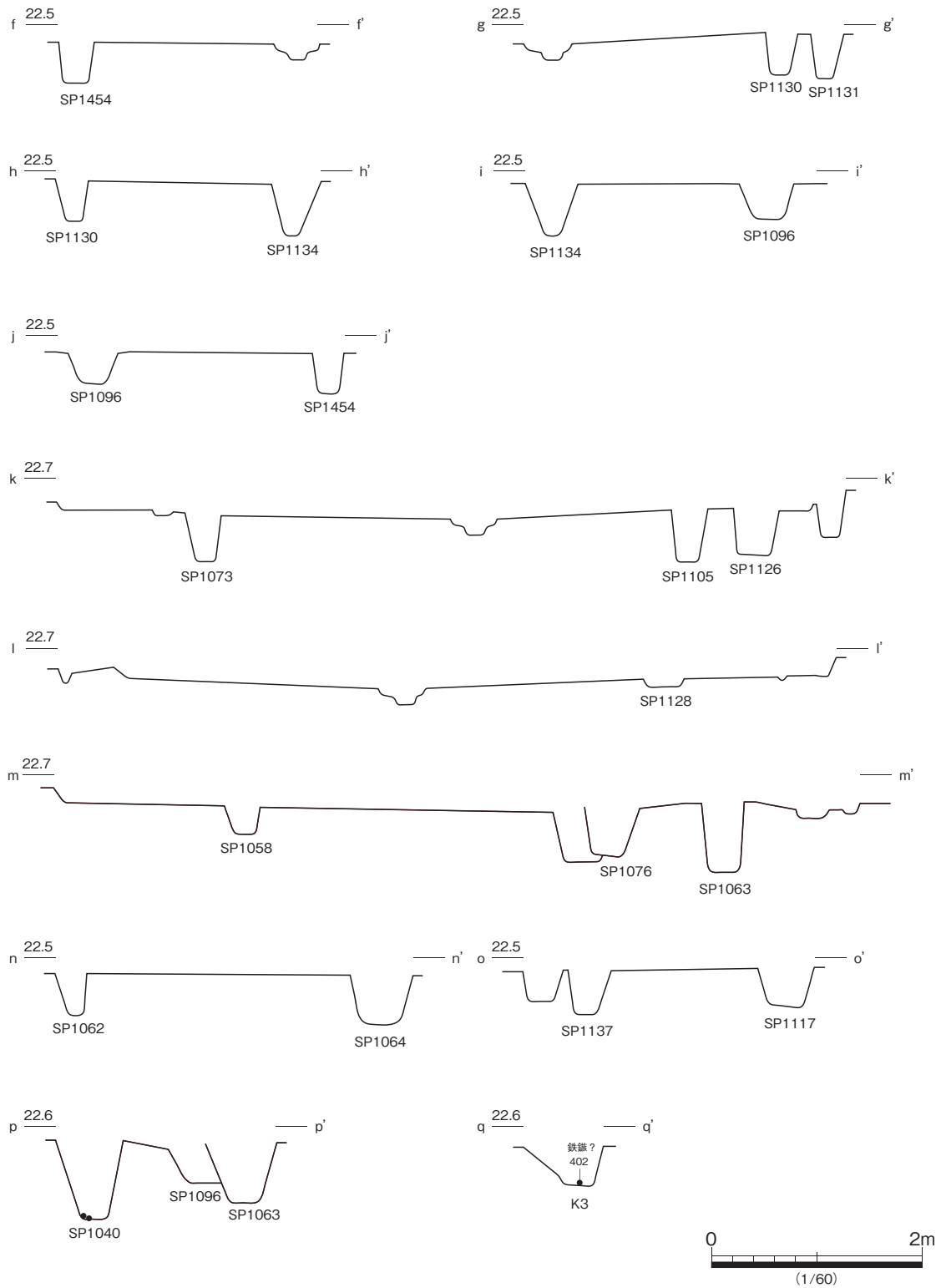


図 79 SH35 断面

と他の銅鏃と比べて遜色ないが、刃部は長さ 0.85cm、幅 0.85cm と極端に短小である。刃部から茎部にかけて研ぎが施されるため鏃は通るが、形状を整えるまでの研ぎ出しには至っておらず、茎部の側縁には鋳造時のバリ痕を残す。また関部も僅かな研ぎしか施さず、鋳面の逆棘ラインを残す。400は長さ 3.4cm で、先端と基部が若干折損するが、概ね全形を留める銅鏃である。基部には直接の接合箇所は見られな

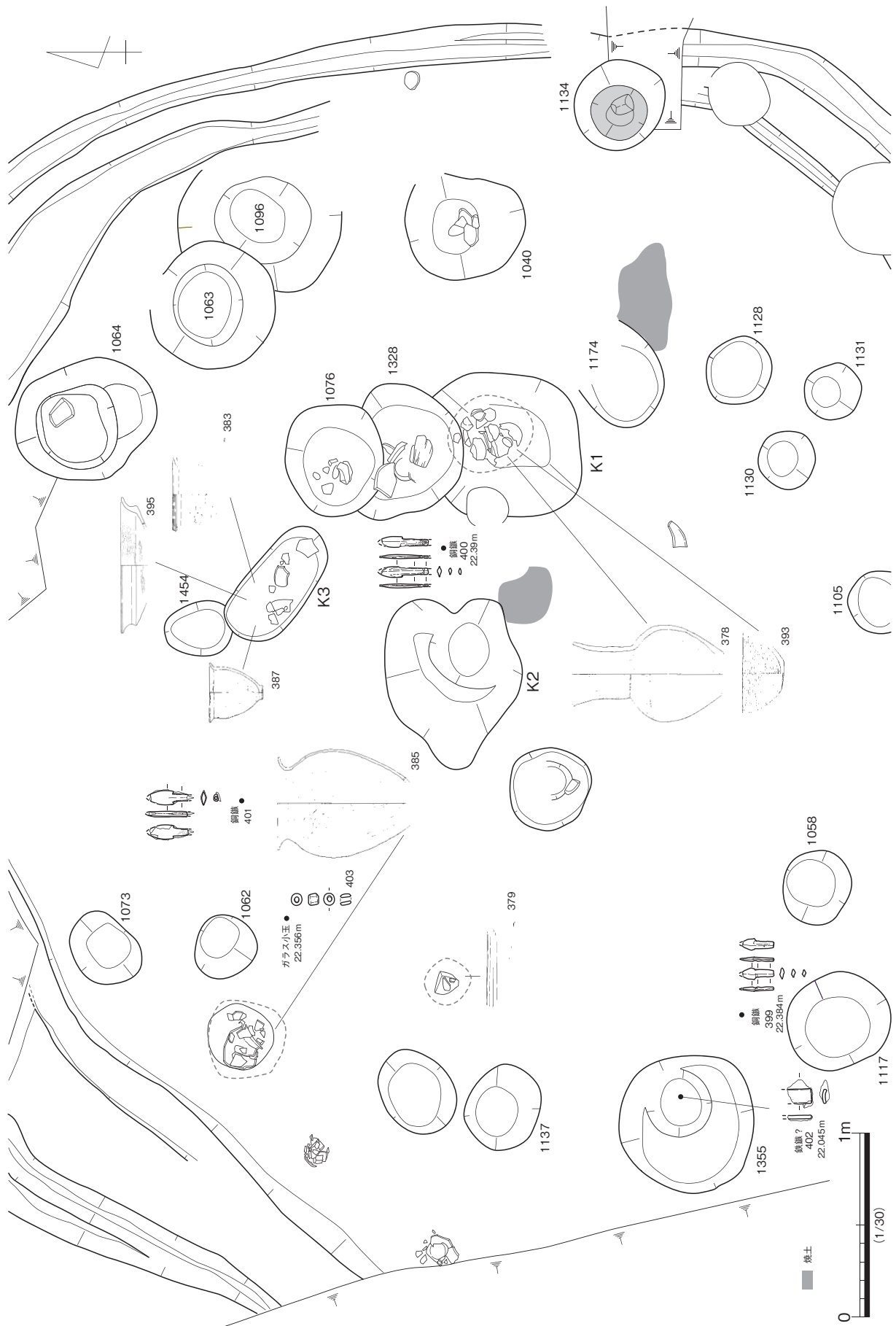


図 80 SH35 遺物出土状況

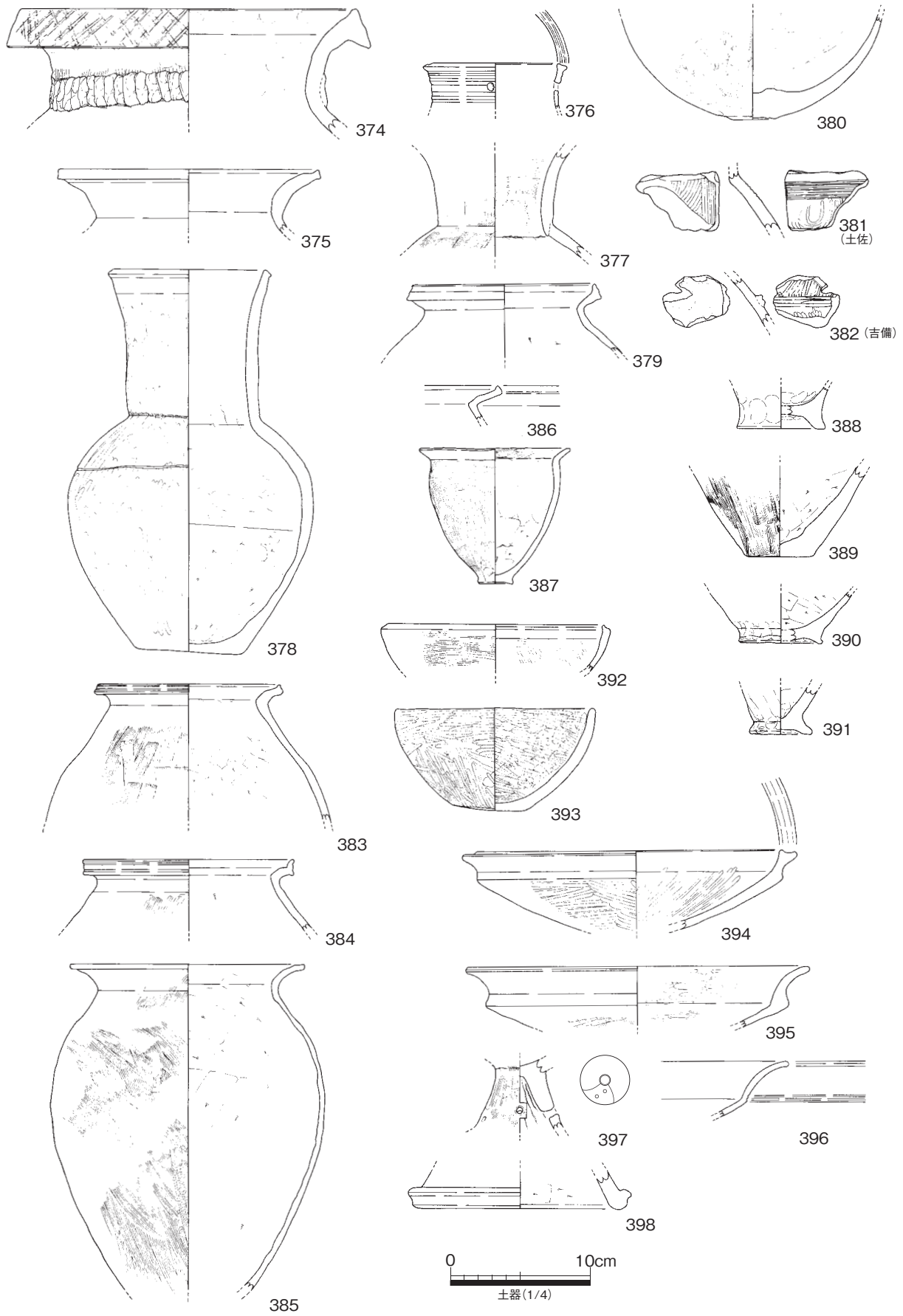


图 81 SH35 出土遺物 (1)

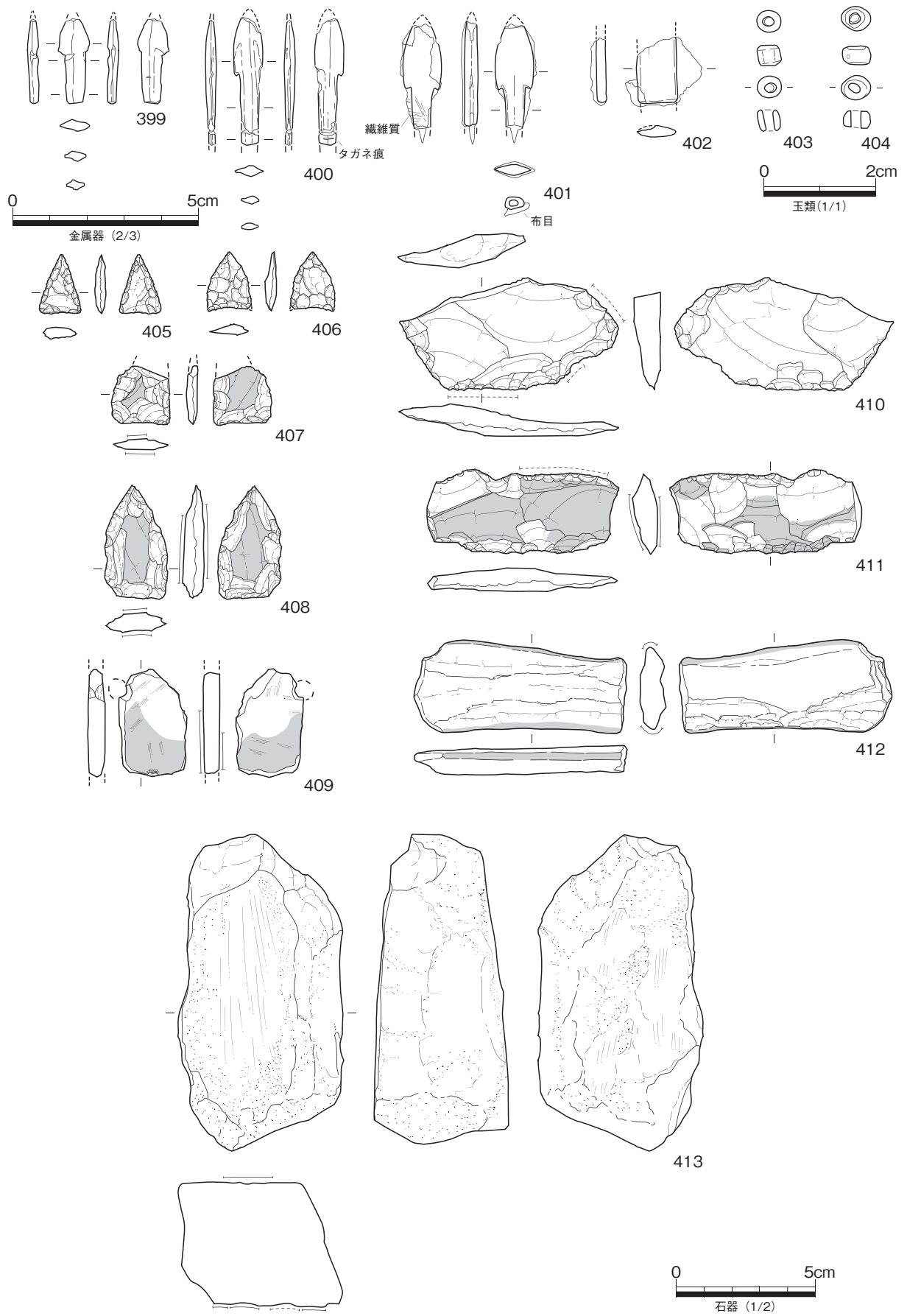
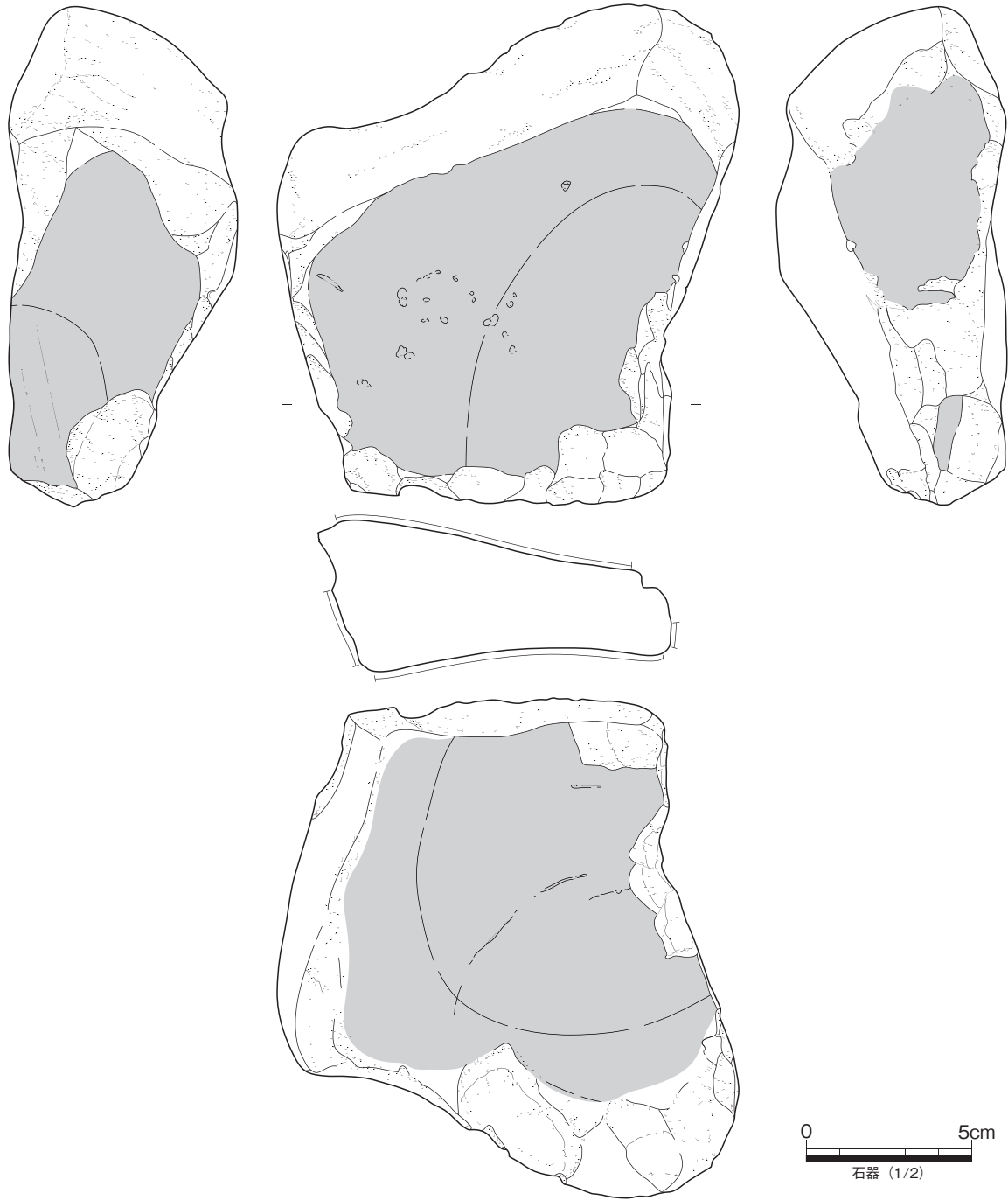


图 82 SH35 出土遺物 (2)



414

図 83 SH35 出土遺物 (3)

いが、同一個体と判断できる小片が付属する。刃部は長さ 1.7cm で短い部類である。関は僅かな研ぎ出しで作り出し、茎は側面に微細ながら平坦面が見られることから、バリ取りの研ぎを施したものと推定される。茎から刃部まで研ぎ出しを行うが、刃部の中程に鑄面の逆棘ラインが残り、関部との位置がずれていることや、基部の小片に連鑄切断時の鑿痕の先端部が残ること等から見て、全般的に仕上げの研ぎ出しは十分なものではなかったものと判断できる。401 は長さ 3.3cm で先端と基部が若干折損するが、

概ね全形を留める銅鏃である。基部には銅芯下端が残ることから、茎部の長さは4.5～6.0cmと想定できる。刃部は側縁ラインから復元すると、長さ3.45cmとなる。刃部の厚みは3.0cmとしっかりとした厚みを備え、表裏面とも丁寧な研ぎ仕上げが施される。鑄面の凹凸は研ぎ消されており、鑄造段階で適切な厚みを確保できたものと推定できる。刃部は下半部に最大幅をもち、関部に向かってやや窄まり、関は1mm程の僅かな逆棘を研ぎ出す。茎の側縁はバリ取りを丁寧に施し、1mm弱の面をもつ。刃部表面は銹に覆われるが、欠損部断面で端正な菱形の断面形が観察できる。したがって、表裏面とも刃部から茎部まで連続した端正な研ぎにより、鑄を作出しているものと考えられる。茎の一部に布目もしくは繊維質の有機物が銹着した痕跡が残る。矢柄装着の痕跡かどうかは不明である。

石器 打製石鏃4点、磨製石庖丁1点、打製石庖丁1点、スクレイパー1点、切断具1点、砥石2点が出土した。石鏃はいずれもサヌカイト製で、405・406は長さ2.5cm以下の小型品、407・408は素材面に打製石庖丁に特有な摩滅を留めた中・大型石鏃である。後者はいずれも左右の均整を欠き、完成品と見ることはできない。

409は安山岩製の磨製石庖丁片である。厚さ0.6cmで、表裏面は研磨により素材の剥離面の凹凸はなく、使用痕と推定できる光沢をもつ摩滅が観察できる。一部に両面穿孔の紐穴が残る。孔径0.6cmである。411はサヌカイト製打製石庖丁である。左右側縁は欠損し、抉りの有無は明らかでない。背部は敲打による潰れが見られ、刃部及び表裏面に使用による摩滅がある。摩滅は図の左面が顕著で、右面は左面と比べ剥離面の形成も新しいことから、刃部再生を繰り返したものと推定する。410は器体の一部に抉り加工を施すスクレイパーである。下端部及び側縁部は敲打による潰しを施し、直線的な外形線を形成する。412は結晶片岩（赤簾片岩）製の切断具である。石庖丁サイズの剥片を素材とし、表裏面には稜線が若干丸みを帯びる程度の研磨が施される。上下縁に光沢を帯びる程顕著な摩滅がある。当初石庖丁の可能性を考えたが、上下縁は刃としての機能が想定できない程の丸みを形成していることから、砥石等の石器製作における擦切技法に伴う切断具と判断した。413は板状の流紋岩素材を分割し、表裏自然面に対して若干の研磨を施した砥石である。砥面は形成途上で平滑面を形成するには至っていない。大きさから見て、手持砥石と考える。414は主柱穴C群に伴う中央土坑K1で出土した砂岩製の置砥石である。表裏面に大きく窪んだ砥面、側縁にも砥面を形成する。砥面は使い込まれ、光沢を帯びる面もある。(森下)

3基の炉跡が示すように、出土遺物の時間幅も複数に分かれる。最も古相を示す炉跡はK2・K3であり弥生後期前半新段階に比定される。最終のK2に伴う土器が提示できないが、床面出土土器の多くは最終段階に廃棄された一群であるので、弥生後期後半古段階と推定できる。

以上のように、本住居は弥生後期前半新段階から後期後半古段階の二時期にわたって使用及び拡張された住居と捉えておく。(森下・信里)

SH36 (図 84～86)

遺構 C区西側で検出した竪穴住居跡である。平面形は概ね隅丸方形を呈するが、東・南辺は緩やかなカーブを描く。壁溝、ベッド状遺構を備え、ベッド部上下段境にも壁溝がある。ベッド下段部四隅に主柱穴跡4基、中央やや東寄りに浅い皿状断面の中央土坑K1がある。K1埋土中には、薄く炭化物層を検出した。検出面からベッド部上段までの深さは0.2m、下段部までの深さは0.35mである。隣接する

SH35 と比べ、深い掘り方をもつ。床面出土の土器はないが、419・429・431 は埋土下層から出土した土器、420 は支柱穴跡 SP969 内、436 の砥石は SP1050 内から出土した。

当該住居跡検出時の上面精査で不明青銅器片 432 が出土した。また、埋土中より、焼土小塊が 5 点 24.84g が出土した。いずれも小片である。(森下)

土器 415 の直口壺は、薄手で胎土中に角閃石を多く含むことから、高松平野の香東川下流域産の可能性が高い。416 は口縁部を上方のみに拡張する甕で、弥生後期後半古段階に位置付けられる。417 は口縁部が短く屈曲する甕口縁部。418 は小形の平底をもつ甕であり、底部形態に後期後半古段階の特徴を留める。419 は口縁部が直線的に外反する甕であり、後期後半古段階に比定される。420 は短い口縁部をもつ小形甕であり、後期後半新段階のものと比較して、平底の底部を良好に留める。421 はくの字状口縁をもつ鉢。422 の鉢の外面にはベンガラと見られる赤色顔料が確認できる。423 は口縁端部を斜めに面取りする鉢口縁。424 は小形鉢の底部片である。425 は球形の胴部をもつ壺で小さな平底をもつ。426 は台付鉢の脚部片である。

429～431 は高杯口縁部で、後期前半期のものと比べ外反がきつくなっており、後期後半新段階に比定される。

金属器 青銅器 (432) は直径約 1.5～2mm の細い紐状製品の複数破片で、それぞれは接合しないが緩やかにカーブを描く形状に復元できる。銅環の可能性もあるが、銹も著しいことから明確ではない。(信里)

石器 打製石鏃 1 点、砥石 2 点、叩石 1 点が出土した。433 はサヌカイト製打製石鏃である。表裏の素材面は打製石庖丁に通有の摩滅を残す。基部の折損は新しい面ではない。厚みと幅からみて、長さ 5cm サイズの大型石鏃と推定する。

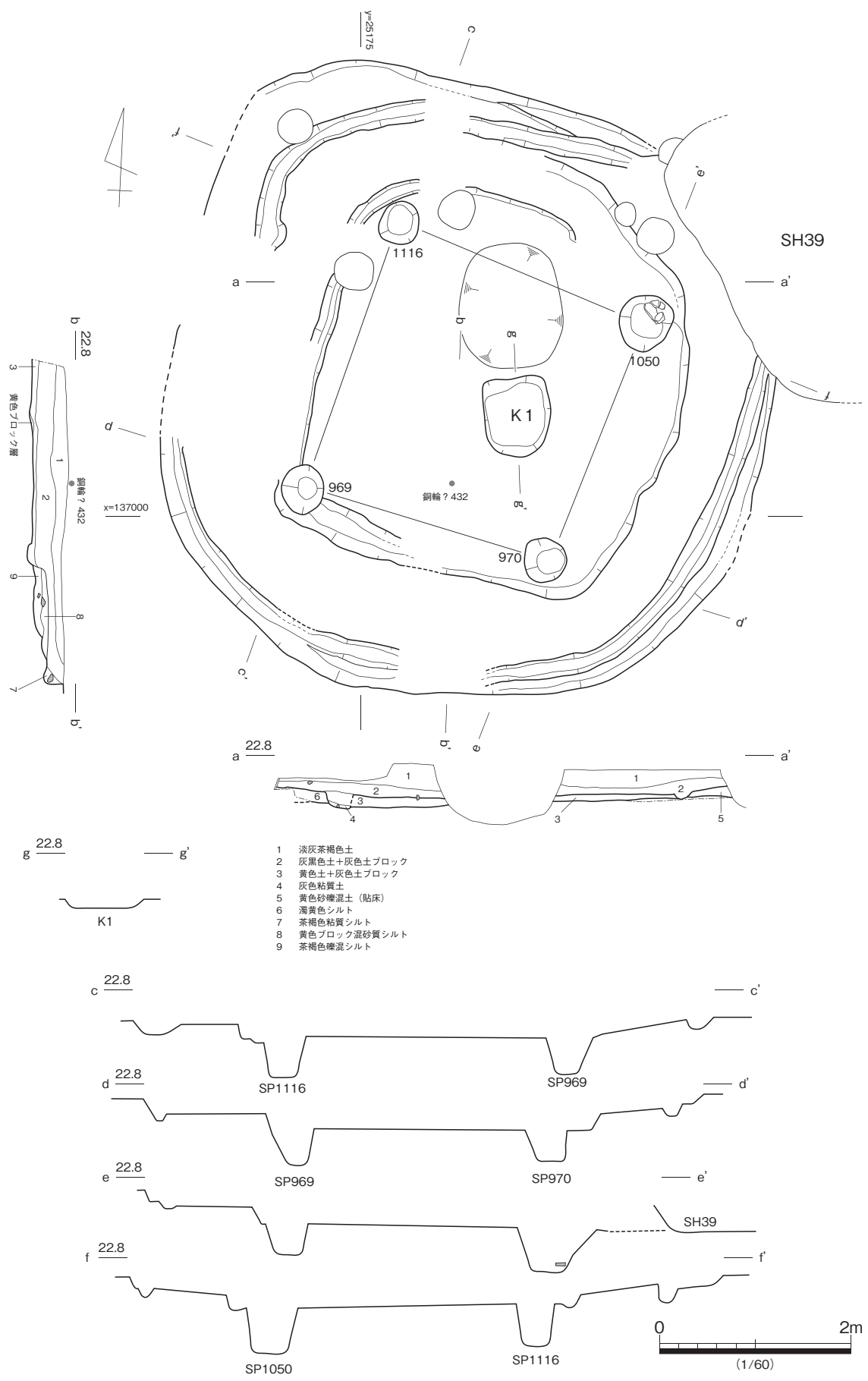
434 は花崗岩中の石英質脈岩を素材とする砥石である。大きさから見て手持砥石と考えられる。436 は安山岩製砥石である。表面は平滑な砥面を残し、裏面は剥離面上に僅かな擦痕を残す。大型の置砥石を分割し、分割後も一部使用したのと考ええる。435 は粗粒の砂岩を素材とする叩石である。ほぼ球形を呈し、一部に強い敲打痕を認める。(森下)

出土遺物の特徴から、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したと捉えられる。(森下・信里)

SH37 (図 87・88)

遺構 C 区西側で検出した円形もしくは多角形の竪穴住居跡である。西側を SH36 に、北側を SH39 に壊され、南側の一部を攪乱により滅失する。支柱穴跡を 5 基検出した。いずれも柱を抜いた後に、礫を投入する共通性がある。床面中央やや東よりで中央土坑 K1 を検出した。K1 埋土中には灰色系の灰混じり層を検出している。床面の深さは検出面から 0.3m である。埋土が薄く、ベッド状遺構は明瞭ではないが、支柱穴跡列の外側は貼床と認識できる基盤土ブロック混在層が存在した。

床面直上の遺物はなかったが、東南側の貼床上の床面より生粘土塊が出土した。土壤が付着した状態でコンテナ 2 箱分程の量を取り上げている。調査時には黄灰色で砂粒を含み、粘度の高い状態で板状に張り付いていた。(森下)



- 1 淡灰茶褐色土
- 2 灰黒色土+灰色土ブロック
- 3 黄色土+灰色土ブロック
- 4 灰色粘質土
- 5 黄色砂礫混土 (貼床)
- 6 淡黄色シルト
- 7 茶褐色粘質シルト
- 8 黄色ブロック混砂質シルト
- 9 茶褐色礫混シルト

図 84 SH36 平・断面

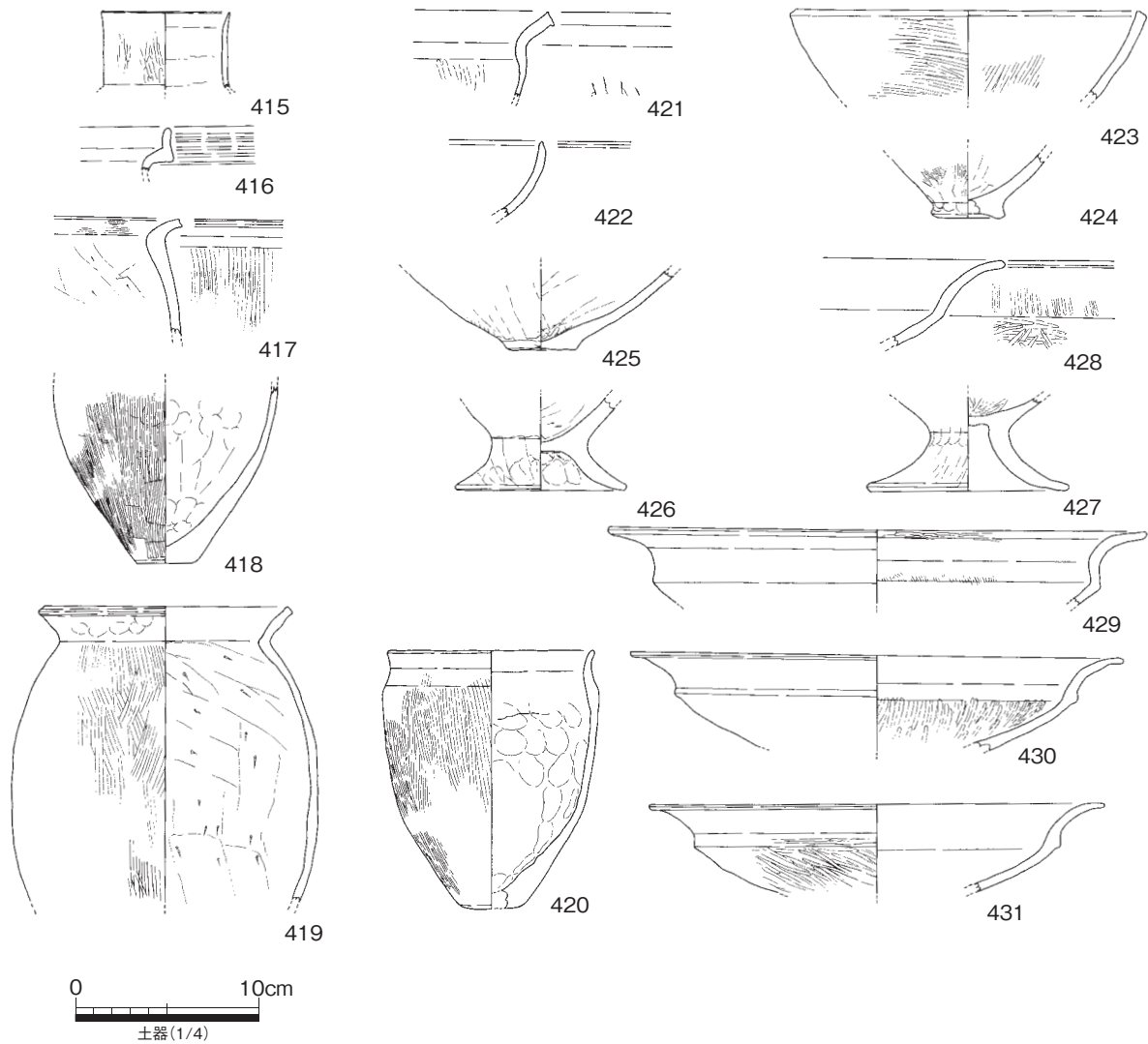


図 85 SH36 出土遺物 (1)

土器 437 は直口壺の口縁部片。438 は広口壺の口縁部片であり、口縁部の外反の度合いから弥生後期前半新段階に位置付けられる。439 は白色の精製された胎土をもつ台付鉢で、脚部との接合部付近で剥離している。440 は弥生中期後半古相の台付鉢の口縁部片であり、混入品と見做せる。441・442 の高杯は弥生後期前半新段階の特徴をもち、同一個体の可能性が高い。443 は弥生中期末葉の甕底部片であり、混入品である。(信里)

出土遺物は少量だが、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH38 (図 89 ~ 91)

遺構 C区西側で検出した竪穴住居跡である。西側でSH35と極めて接近し、あたかもSH35の掘り方を意識するかのように、その部分のみ緩やかに内側へカーブする。北側はSH40に掘り込まれ、東側は攪乱で滅失する。壁溝を参考に、遺存する範囲で推定し、図示したように多角形に復元できる。支柱穴跡は6基と推定され、うち4基を検出した。支柱穴列跡を境に段があり、列より外側に貼床によるベッド状遺構を構築する。上下段境にも壁溝があり、段部の土留板を回らせていたものと考えられる。床面中央

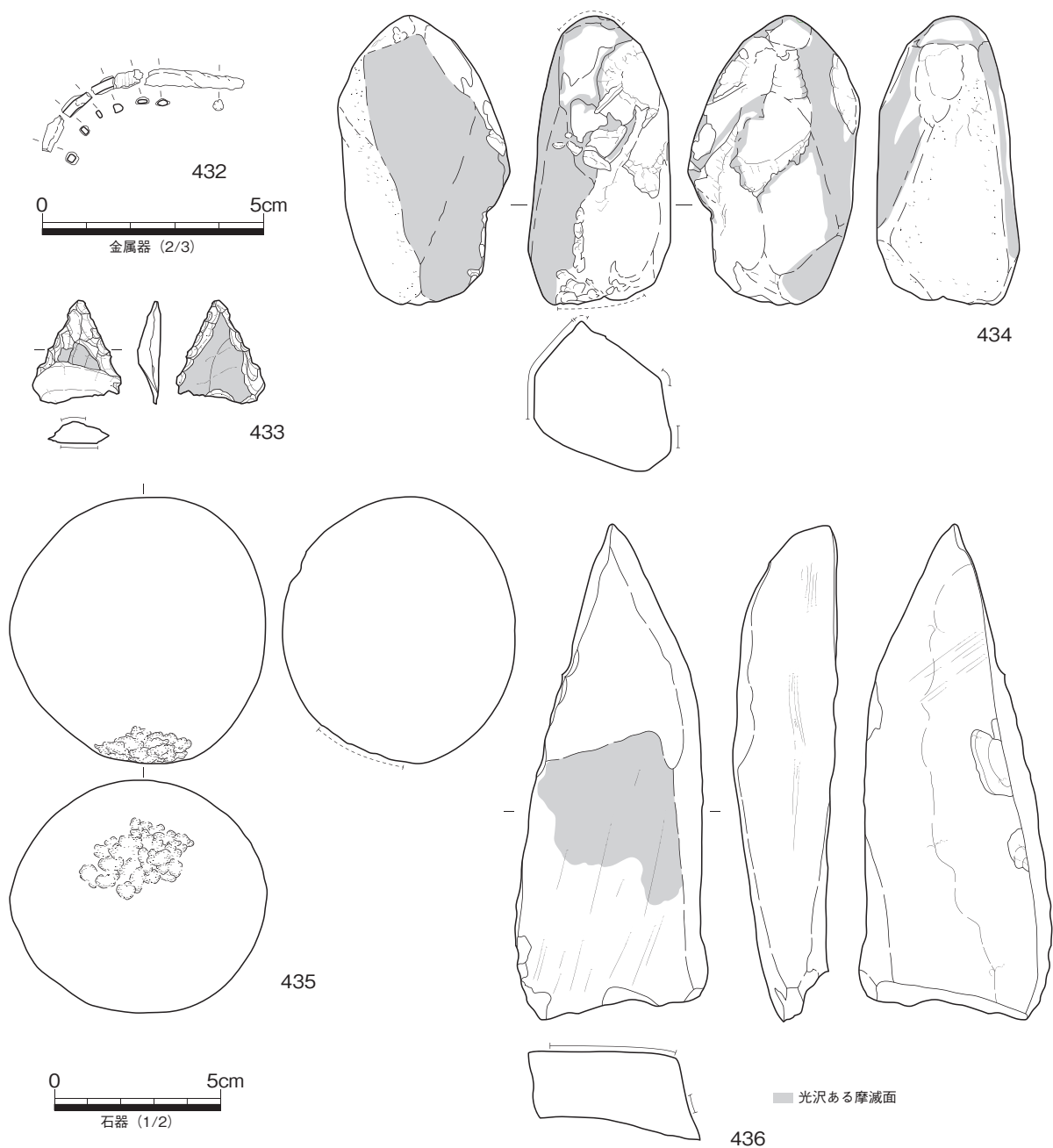


図 86 SH36 出土遺物 (2)

やや東寄りで土坑 2 基を検出した。K1 は炭化物層が多く混じり、g ライン断面の 2・3 層それぞれの下位に炭層が介在する。K2 は炭化物粒が埋土中に含まれていたが、明確な炭層は形成しない。両土坑は連続する断面図を作成していないので、同時に存在したかどうか不明である。

床面遺物は 474 の鉄製刀子が出土した。また、中央土坑 K1 より 454 の長胴系の壺が、K2 より 470 の高杯口縁部片が出土した。その他、支柱穴跡 SP1039 より、複合口縁外面に凹線文を施す壺 453 が出土した。(森下)

土器 444 は弥生前期初頭の壺口縁。446 は弥生前期初頭の壺胴部片であり、ミガキ状の浅い沈線を用

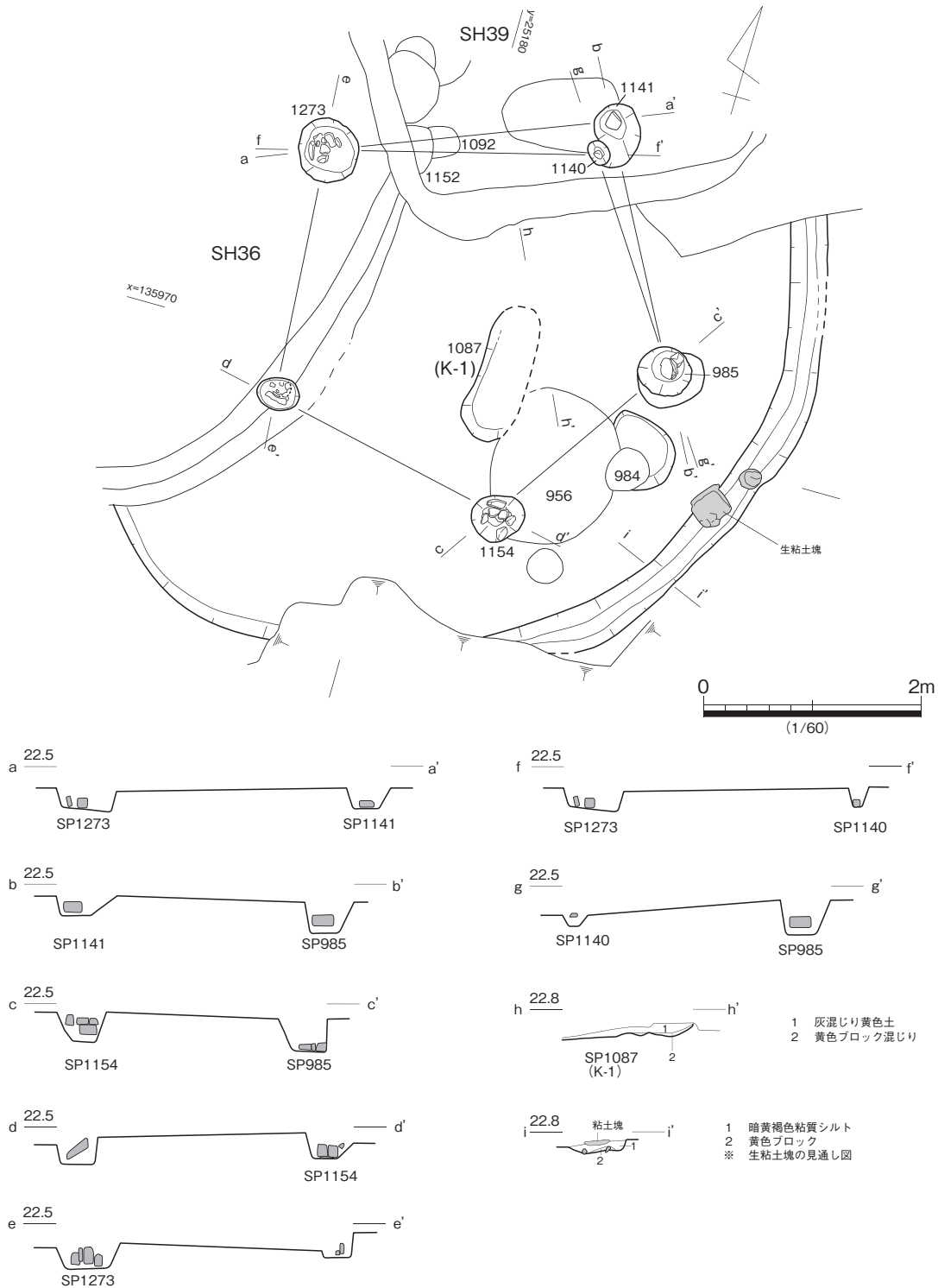


図 87 SH37 平・断面

いて重弧文を描く。448 は壺底部片であり、形態から弥生前期初頭に位置付けられる。461 はくの字状口縁をもつ甕であり、口頸部境の 2 条沈線を境にして口縁部が屈曲し、弥生時代前期初頭に比定される。本住居跡は SX37 とした弥生前期初頭の土坑と重複することもあり、同時期の遺物の混入が目立つ。

445 は壺肩部に荒い原体を用い横位の直線文を描くもので、SH35 出土の 381 と同一個体と見られる搬入土器である。胎土中に雲母片をやや多く含むが、文様構成から土佐地域の影響が想定できる。449

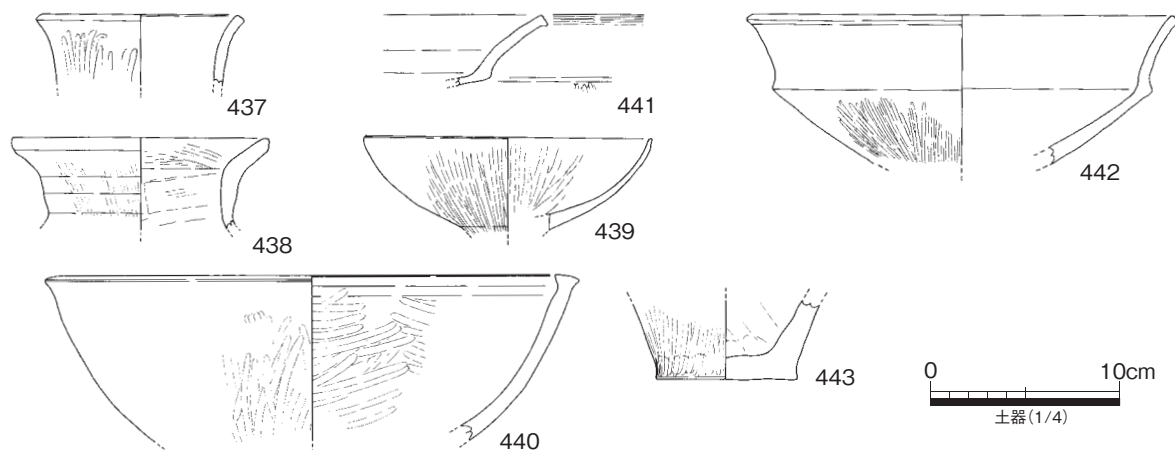


図 88 SH37 出土遺物

は弥生中期後半の壺底部片で混入品である。450 は口縁部に段を作り出す広口壺である。成形手法から見て粘土貼付による段とは断定できないが、口縁部形態は土佐地域の壺に類似している。胎土は石英粒を多く含み赤褐色を呈する旧練兵場遺跡によく見るものである。451 はやや内傾する頸部から口縁端部が短く屈曲する広口壺であり、弥生後期前半新段階に特徴的なものである。453 は口縁部を上方に拡張する甕であり、後期後半古段階の特徴をもつ。454 の広口壺は、後期前半古段階から前半中段階のものと比較して、頸部が消失しており、弥生後期前半新段階の特徴をもつ。455 は中形甕の口縁部であり、形態から後期前半中段階に比定される。456 は弥生中期後半の壺底部であり、混入品と見られる。457 の甕口縁は形態的に見て、453 に先行する弥生後期前半新段階の特徴をもつ。458 は弥生中期前半新段階の甕口縁であり、混入品である。459 の甕は口縁端部を面取りし、形態的に後期後半古段階に比定される。462 は口縁部を上方のみ拡張する甕で弥生後期前半新段階の所産である。463 は口縁部が直立気味に立ち上がる甕であり、ヨコナデを用いず口縁部内外面にハケ調整を残す。464 は甕底部であり、弥生後期後半古段階の特徴をもつ。465 は口縁端部を面取りする鉢、466 は小形鉢の完形品である。467 は台付鉢の脚部片である。

468 の高杯口縁部は、形態や胎土中に角閃石を多く含むことから見て、高松平野の香東川下流域産と見られ、大久保編年の下川津Ⅰ式・①段階に比定される。472・473 も香東川下流域産の高杯脚と考えられ、同一個体の可能性がある。469・470 は弥生後期前半新段階の口縁部である。

金属器 474 は鉄製ヤリガンナである。刃部の断面は三角形で鎬をもつ。刃部の平面形が左右非対称であり、使用による研ぎ減りが見られ、基部面は斜交する。(信里)

石器 打製石鏃 2 点、打製石庖丁 1 点、焼石 1 点、砥石 1 点が出土した。石鏃はいずれもサヌカイト製で、475 は片面、476 は両面に打製石庖丁通有の摩滅痕を認める。476 は長さ 5cm を超える大形の完形品で、先端の平面形は丸みを帯びるが、上方からの剥離によって形成された形状である。477 はサヌカイト製打製石庖丁の折損品である。側縁に抉りを施す。478 は斑晶が目立つ安山岩の垂角礫で、中央が黄色、その外縁が赤色に変色する焼石である。断面台形で狭辺が平坦で、広辺側が凹面となる。最も凹む部分に変色する。479 は大粒の石英斑晶を含み全体的に淡灰色を呈する深成岩を素材とする。断面台

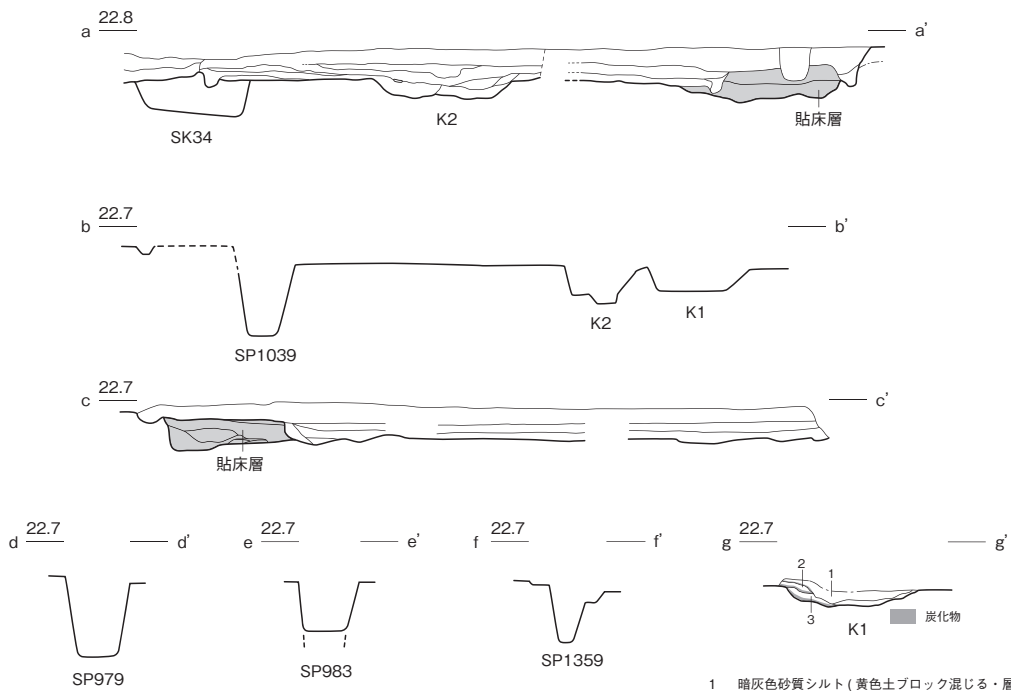
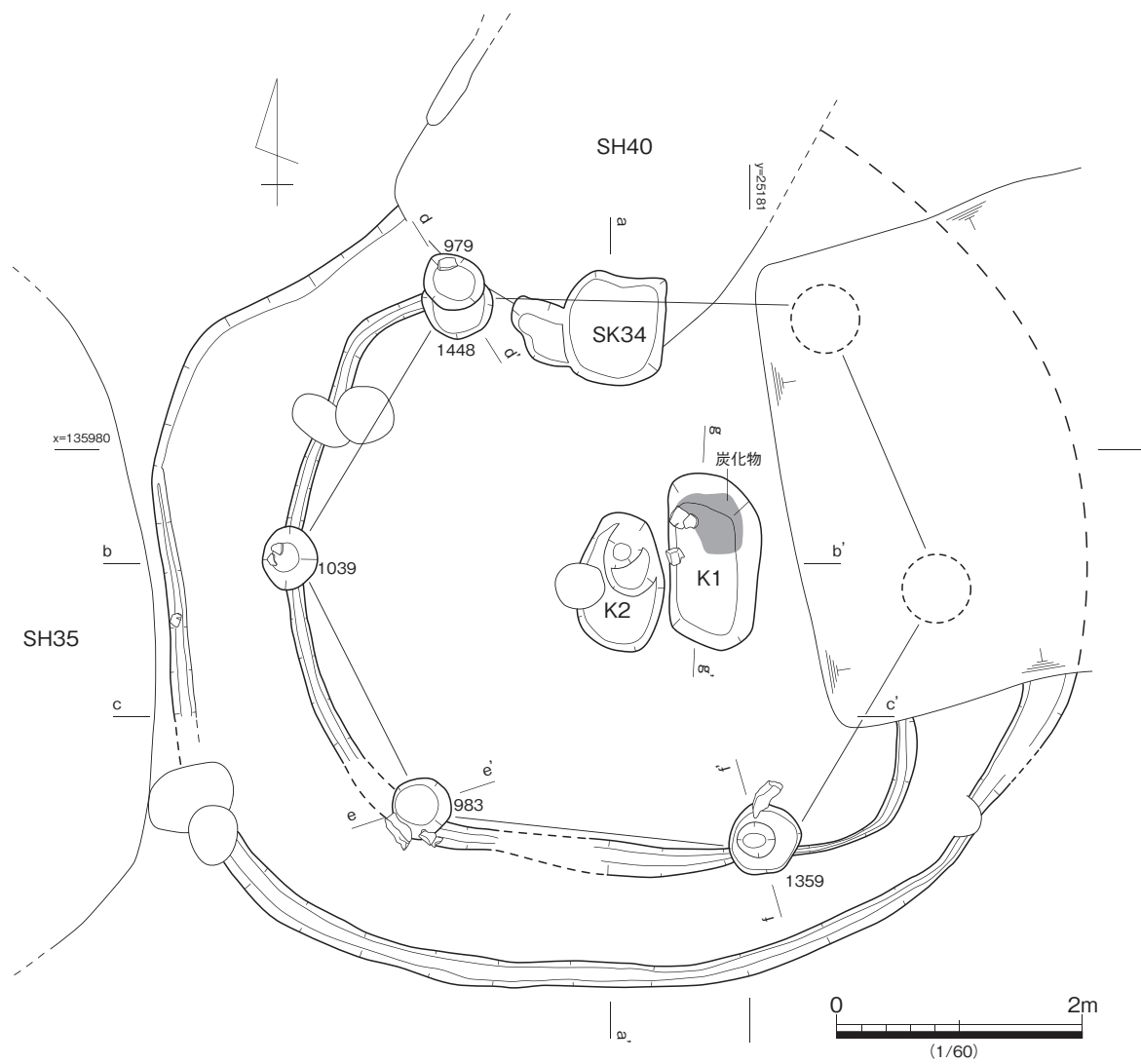


図 89 SH38 平・断面

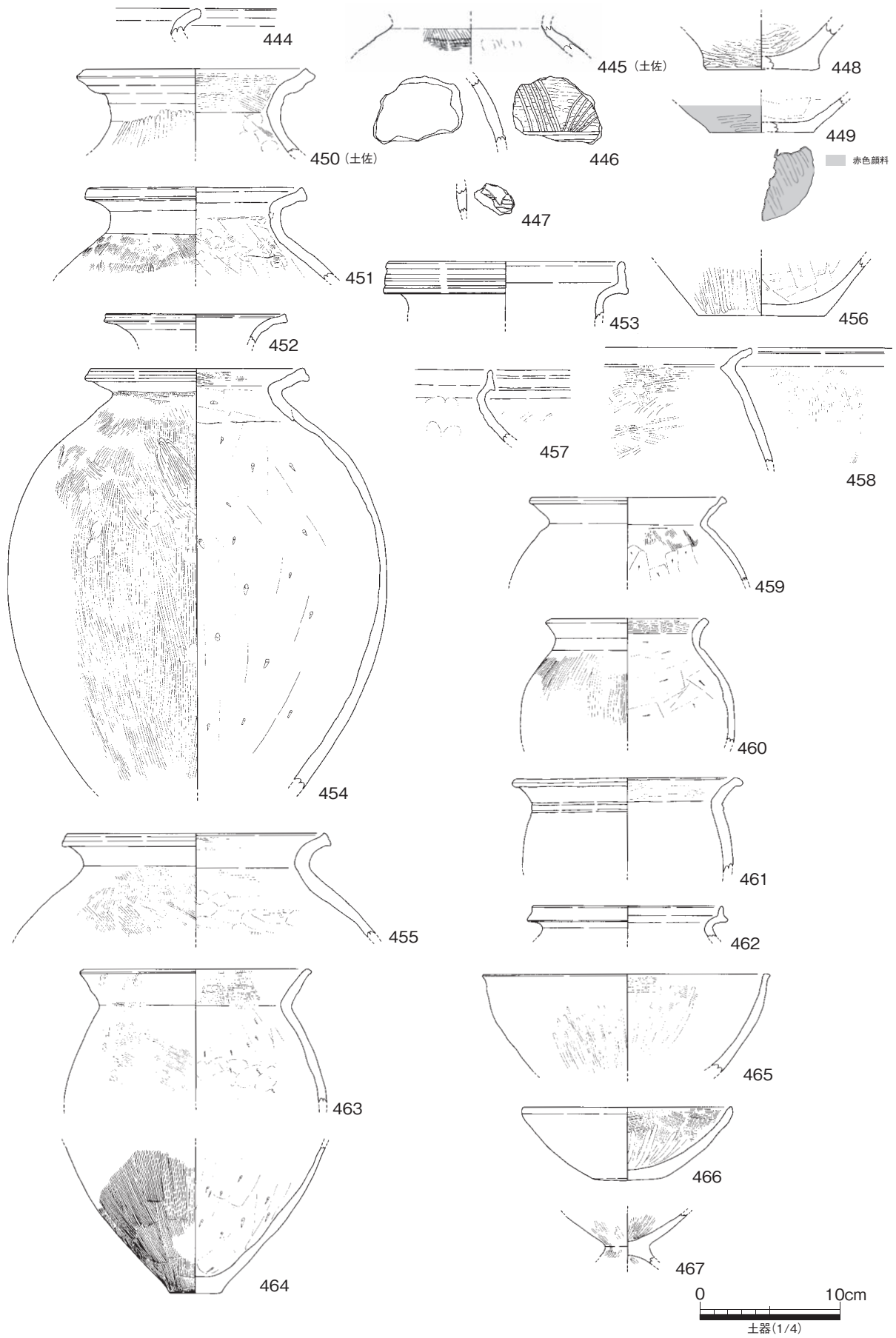


図 90 SH38 出土遺物 (1)

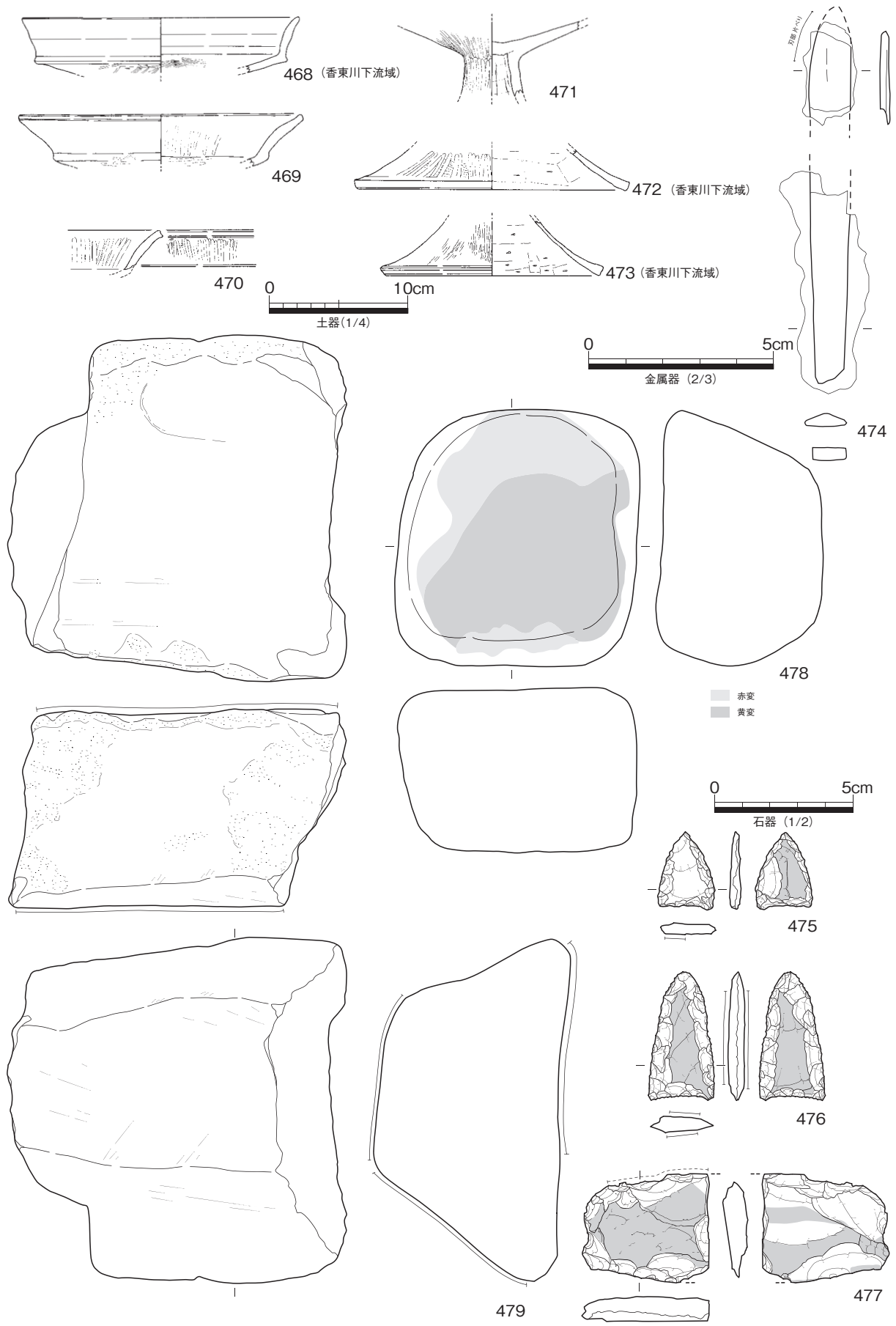


图 91 SH38 出土遺物 (2)

形で、上下縁及び側縁に平滑な砥面をもつ。狭辺の砥面は僅かな凸面、広辺の砥面は緩やかな凹面である。
(森下)

出土土器は、弥生後期前半新段階から後期後半古段階のものが見られる。時期決定に有効な土器群は、
炉跡 K1 から出土した広口壺 454 であり、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。
(森下・信里)

SH39 (図 92・93)

遺構 C区西側で検出した小型方形の竪穴住居跡である。規模は長さ 3.7m、幅 3.3m、深さ 0.35m を測る。
SH36・SH37 と重複しており、その中で最も新しい竪穴住居跡である。主柱穴跡は 2 基で、柱穴跡から
東西外側に貼床によるベッド状遺構が備わる。床面南側寄りには、断面が浅い皿状の中央土坑 K1 があ
る。埋土中に炭化物は目立たない。床面中央付近では掘り方をもたない炭化物層の広がりを確認した。
a ライン断面 3 層には大量の焼土が含まれていた。一部を遺物として取上げたが、その重量だけでも合
計約 20kg ある。

焼土は大きいものは厚さ 10cm 以上の塊状で、一部平坦面をもつものがある。その他にも、大小の焼
土塊が含まれる。これらは表面に金属物質が付着するようなものはなく、後述する掘立柱建物跡の柱抜
き取りや、土坑 SX23 等で出土する壁土状の焼土と形態的に等しい。竪穴住居跡であることを考慮する
と、屋根部材もしくは壁部材と推定する。

床面出土遺物としては被熱して黒色化した大型砥石 (490) が 1 点出土した。(森下)

土器 480 は吉備系の壺胴部片であり、断面四角形の突帯を施し、胎土中に角閃石を含む。鬼川市Ⅱ～
Ⅲ式の所産と見られる。481 の甕は、直立気味の口縁部が緩やかに外反する。球形化が進むものの胴部
最大径は上位にあることから、弥生終末期古段階に比定される。482・484 の甕口縁部片は胎土中に雲
母片を多く含み、形態から弥生終末期古段階で捉えることができる。485 の鉢は、外面に絞り目を明瞭
に留める。486～488 の小形鉢はハケ調整が多用され、胎土中に雲母片を多く含む。487 は平底を痕跡
的に留めている。

金属器 489 の鉄器片は器種の特定できない。(信里)

石器 砥石 2 点が出土した。490 は流紋岩を素材とする大型の置き砥石である。断面多角形で、うち 2
面に平滑で緩やかな凹みをもつ砥面、1 面に緩やかな凸面となる砥面を留める。図下端の砥面は、素材
分割の際の粗い剥離面の一部に平滑さに欠ける砥面が残る。491 は柱状片刃石斧に類似する流紋岩製砥
石である。一部に自然面が残り、それ以外の全面に緩やかな膨らみをもつ砥面がある。特に側面は光沢
を帯びる程平滑である。手持ち砥石と推定する。(森下)

出土遺物の特徴から本住居は弥生終末期古段階に廃絶したと推定される。(森下・信里)

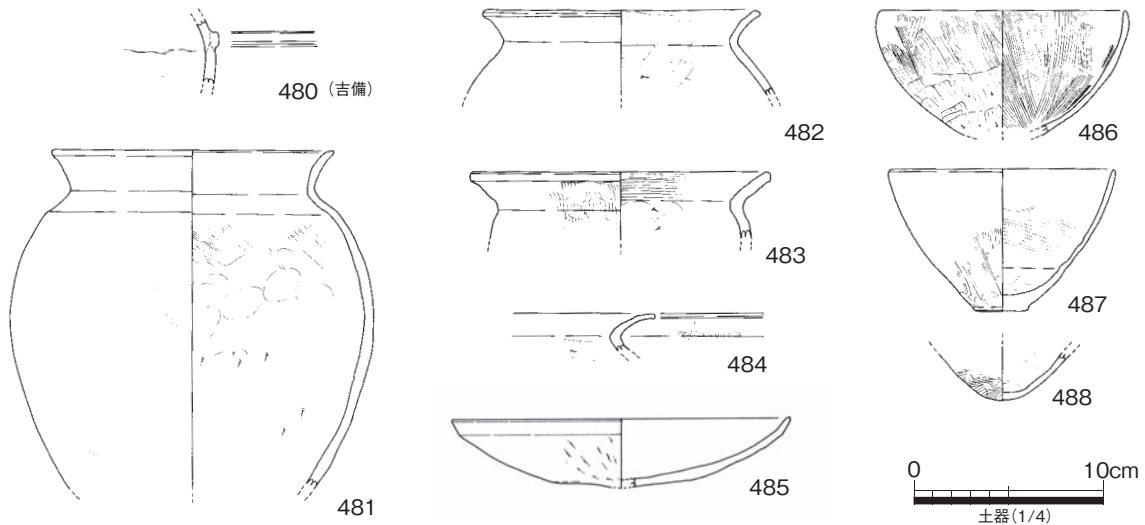
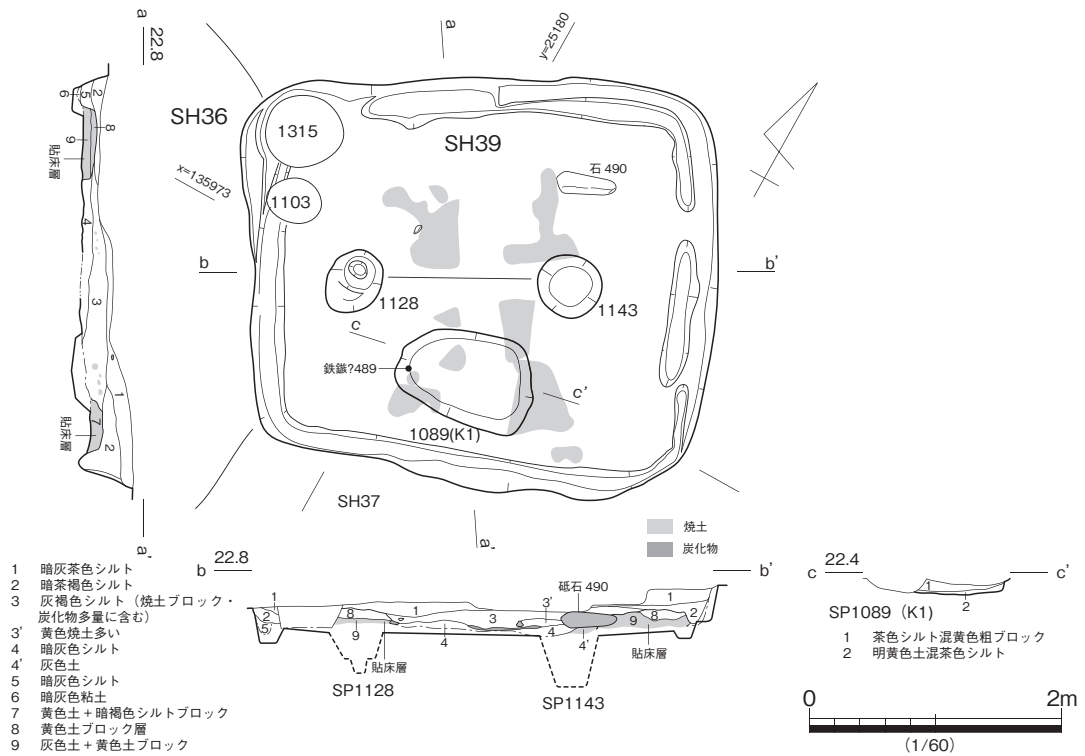


図 92 SH39 平・断面・出土遺物 (1)

SH40 (図 94・95)

遺構 C区西側で検出した竪穴住居跡である。平面形は方形で、長辺4.1m、短辺2.8mと細長い形状を呈す。また、南側でSH38と重複し後出する。主柱穴跡は2基だが、柱穴跡とするには浅いことから、本来無柱の竪穴住居跡と考えられる。図示した遺物のうち、土器はすべて床面付近でまとまって出土した。土器 492は広口壺の胴部片であり、僅かに平底を留める。494・495は同一個体の可能性が高い甕であり、胎土中に雲母片を多く含む。形態から弥生終末期古段階に比定される。496の小形鉢、497の口縁

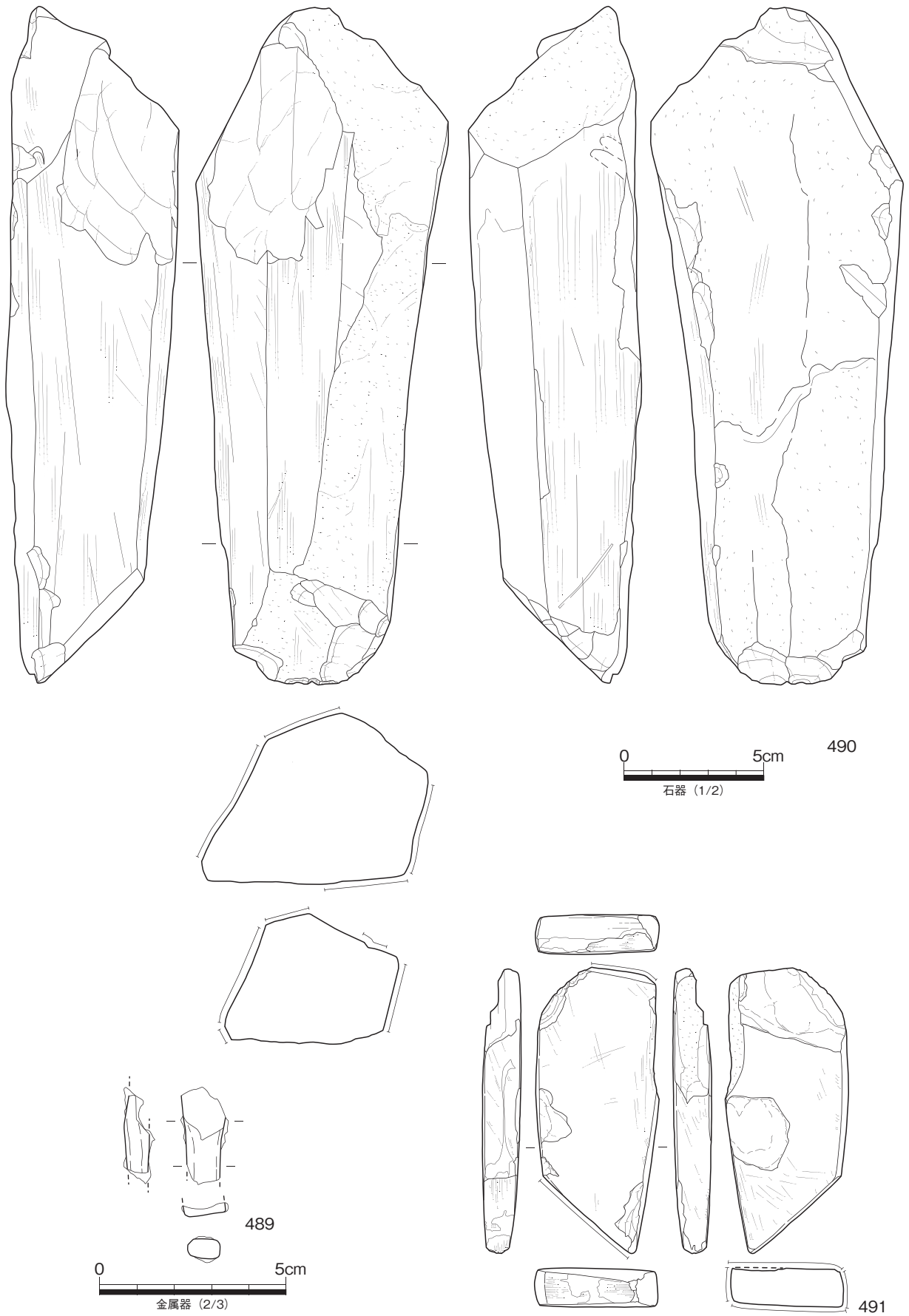


图 93 SH39 出土遺物 (2)

部が短く屈曲する中形鉢は胎土中に雲母片を多く含み、形態的な特徴から弥生終末期新段階に位置付けられる。498の中形鉢はボール状の器形をもち、口縁端部を面取りするもので、形態から弥生後期後半期のもと見られ、胎土中に雲母片を多く含む。

499の高杯は脚部内面にケズリ調整を留め、胎土中に雲母片を多く含む。(信里)

石器 砥石1点、焼石1点が出土した。500は安山岩の棒状原石の側面に擦痕を留める砥面を僅かに留めるもので、明瞭な砥石ではない。501は砂岩の扁平自然石が被熱し全面赤色化したものである。表裏で赤色化の度合いが若干異なる。(森下)

出土遺物の帰属時期に時間幅が見られるが、時期的に最も新相を示す497の年代観から、本住居の廃絶時期を弥生終末期新段階と推定される。(森下・信里)

SH41 (図 96・97)

遺構 C区中央付近で検出した竪穴住居跡である。平面は端正な方形を呈すが、4基からなる主柱穴跡は北西に片寄り、住居内東側及び南側に貼床によるベッド状遺構を備える。中央土坑は検出できなかった。主柱穴はいずれも浅く、十分な遺構精査を行っていたかどうか、疑問が残る遺構である。ただし、他の住居跡との重複はほとんどなく、出土遺物は当該住居跡に伴うものと判断して問題ない。

出土遺物の多くは埋土上層で出土したが、505・508の土器は埋土下層、506・515・517は主柱穴跡より出土した土器である。銅鏃が2点出土しており、519は西側壁溝の上部より出土、520は東南隅の掘り方外だが、近接する位置で出土したものである。520は当該住居跡と重複する新しい時代の不定型土坑より出土しているが、埋土から見て当該住居跡埋土を巻き込んで埋めたことが明らかで、当該住居跡の検出面より上位に元来包含されていたものと判断した。(森下)

土器 502は頸部径から壺として図示しているが、口縁部形態の特徴は後期後半古段階の甕に類似する。503は口縁部がやや肉厚な広口壺であり、粘土貼付けによる段とは確定できないが、その形態に土佐地域からの影響を想定しておく。504は明確な平底を留める壺底部であり、後期前半期と比較して厚みが薄く胴部の球形化が進む。505は完形の脚台付直口壺で、脚台の形態から弥生後期後半古段階に比定される。506は無頸壺である。507は器壁が厚い頸部をもつ甕。508の甕は、凹線文出現期中期中葉のもので混入品と見られる。509は口縁部が短く寸胴タイプの小形鉢である。510は甕底部片である。厚みのある小さな平底に弥生後期後半古段階の特徴を示す。511は弥生中期後半の甕底部片であり、混入品である。512は小形鉢あるいは甕と見られる。

513は小形鉢は、形態から甕底部を利用したものと見られる。514の小形鉢外面には、ヘラ描きによる記号文が見られる。515の小形鉢は突状の底部に螺旋状のタタキ目を留める。517の器台は、口縁部上端面に櫛描文原体による列点、口縁部外面にヘラ描き鋸歯文を描く。胎土は赤褐色に発色し、石英・長石粒を多く含む旧練兵場遺跡に通有のものであるが、吉備地域からの影響を想定しておきたい。

518は緑釉陶器皿の小片であり、古代期の混入品である。(信里)

金属器 銅鏃が2点ある。519は先端と基部を折損し、関部を介して刃部2.0cm、茎部2.0cmが遺存す

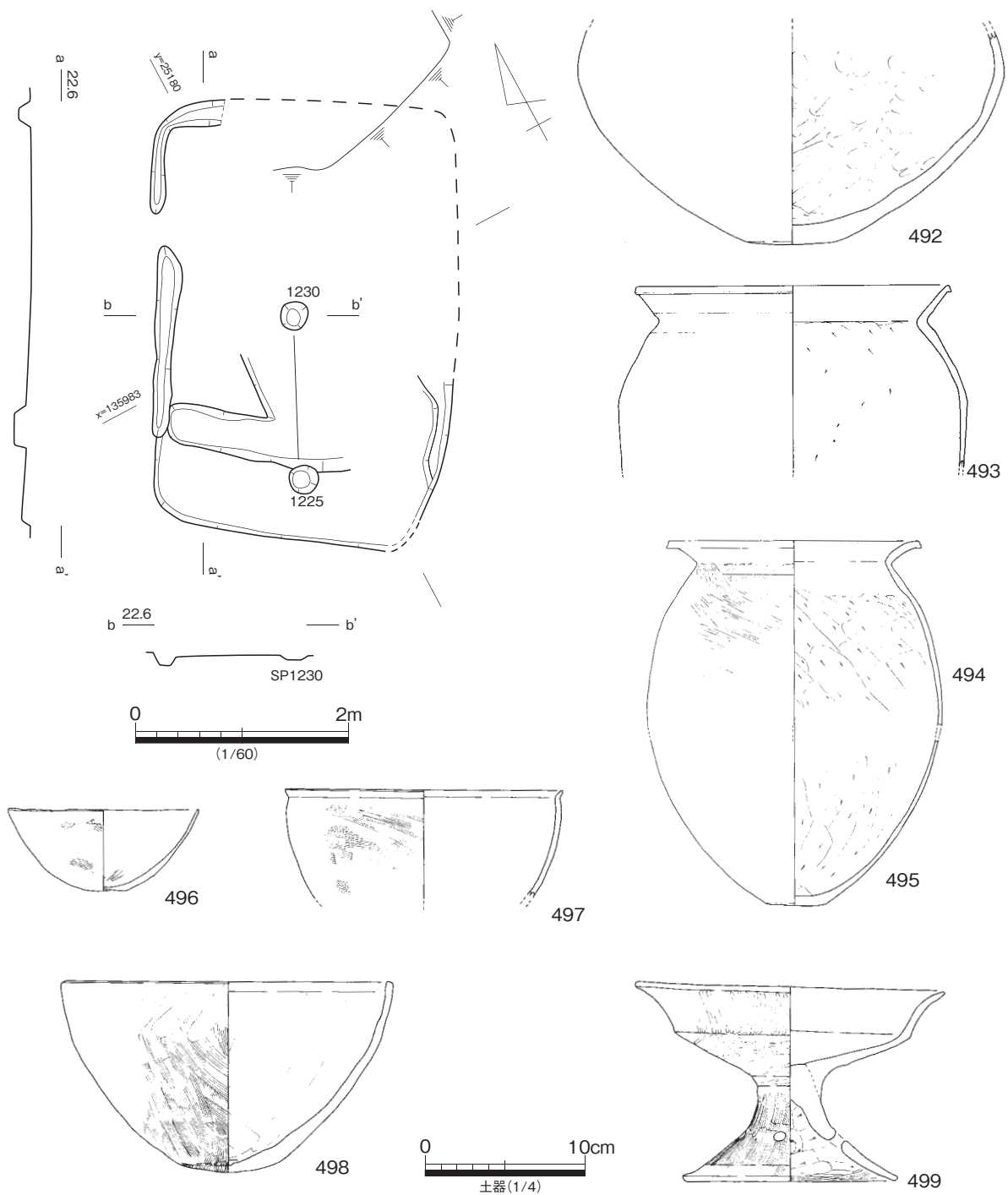


図94 SH40平・断面・出土遺物(1)

る。関部には明瞭な逆棘が残るが、片面で鑄面の逆棘ラインと逆棘端部が一致せず、一部にバリを残す。表裏の鑄面合わせが上下にずれたことを示す。刃部は薄く、鑄を形成せず、連鑄心棒の痕跡をとどめる。茎部も断面形状は扁平で、側縁に僅かなバリを残す。湯回りが悪く、全体的に薄い製品となったものと推定する。

520は先端を僅かに欠損するが、ほぼ全形を留めた銅鏃である。長さ4.05cm、刃部長2.1cm、刃部厚さ0.45cm、茎部長1.95cm、茎部厚さ0.38cmを測る。関部に逆棘はなく、僅かに残る鑄面の逆棘ライ

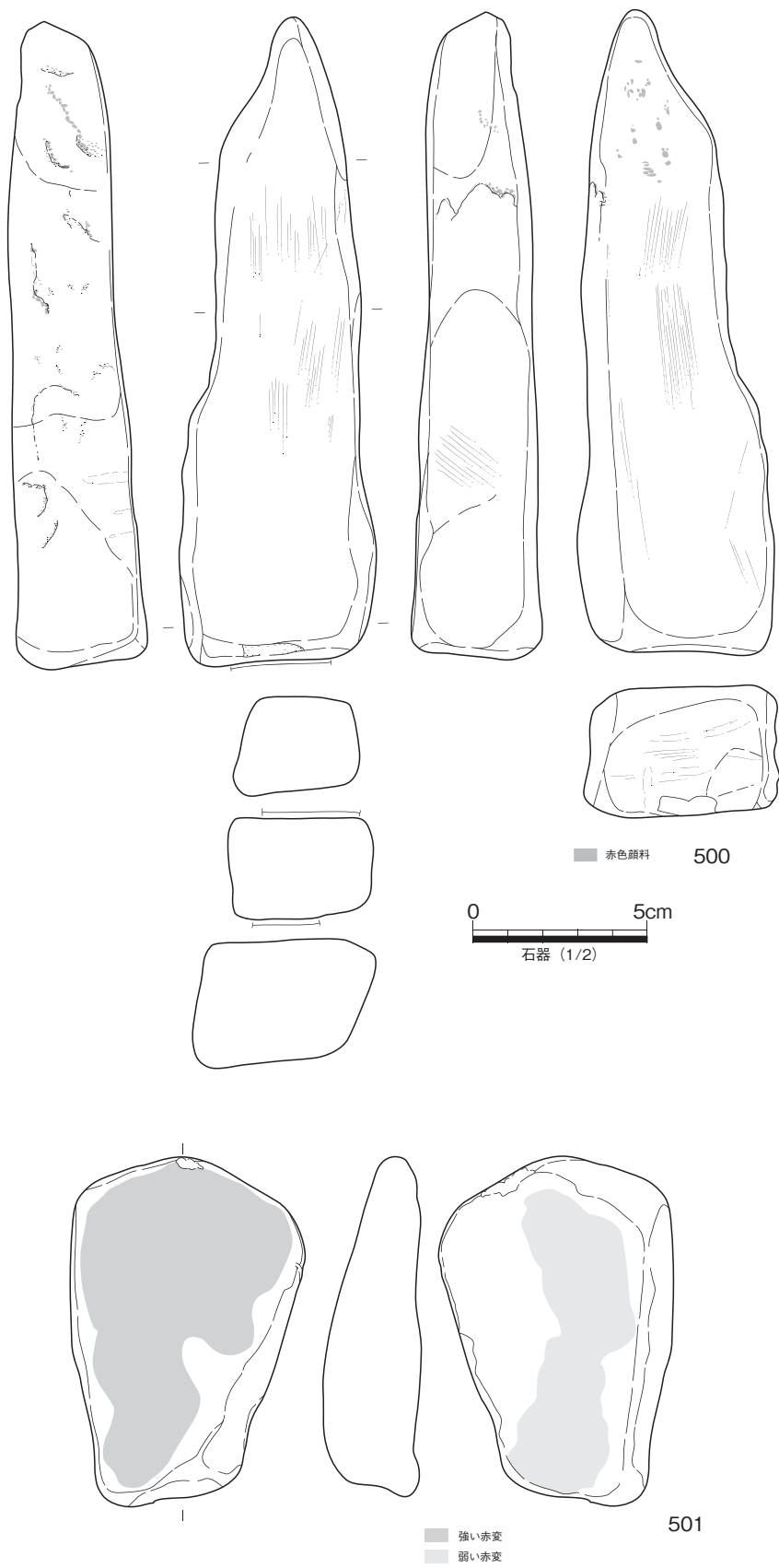


図 95 SH40 出土遺物 (2)

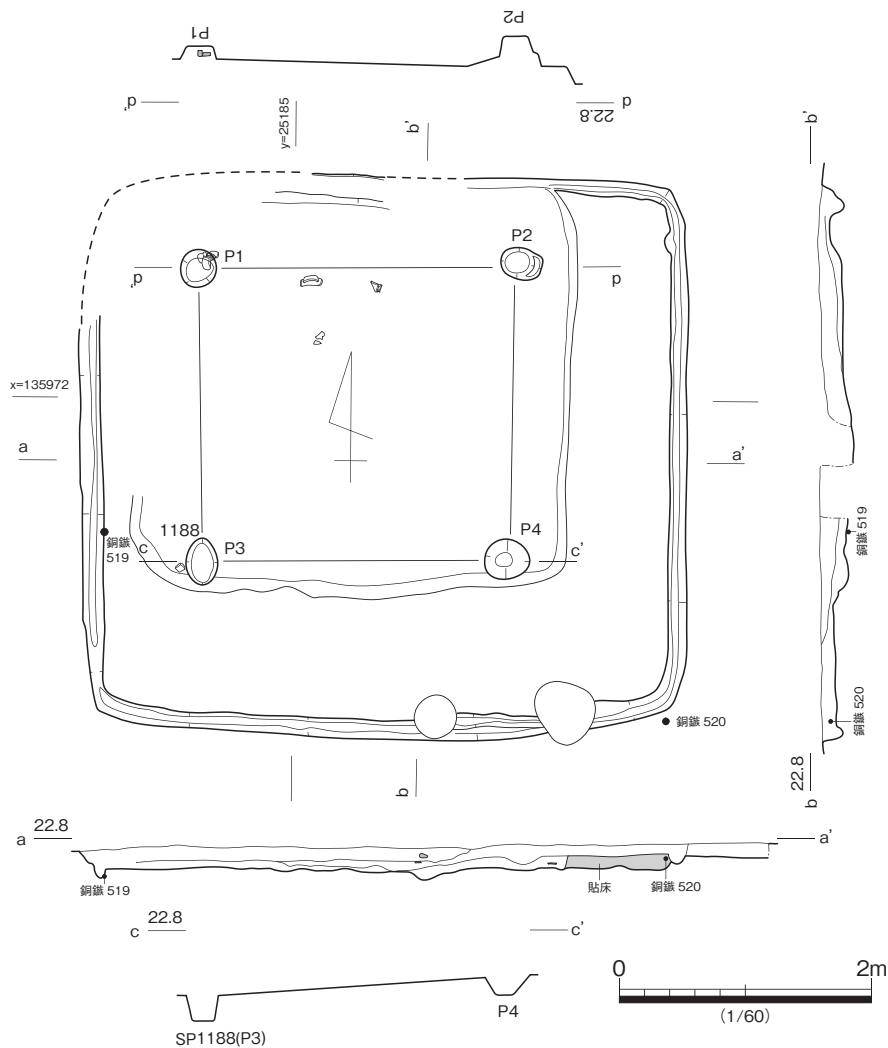


図 96 SH41 平・断面

ンは先端側斜め方向に研ぎ落とされ、刃部は柳葉形となる。刃部表面の研ぎは左右両側から丁寧に施され、中央に鑄を形成するが、僅かに連鈕鑄型の心棒の痕跡を留めており、そのために鋭い鑄を形成するには至っていない。基部は断面を円形に研ぎ上げ、バリは残さない。他の銅鏃と比べると、仕上げの研ぎが丁寧に行われた部類と言える。鑄面上での湯回りが良好で、厚みのある素材が得られたことを示す。なお、図左面の刃部左下付近に僅かなノッチが入る。ノッチの意味合いは不明である。

玉類 碧玉製の碎片 521 が 1 点出土した。色調は深緑色で、断面三角形を呈す。一面に僅かなカーブをもつ研磨面を残し、他の二面は剥離面である。上下端には微細剥離痕が残る。意図的なものか、埋没過程で生じたものかは不明である。研磨面を管玉の一部と仮定すると、大型の管玉となる。

石器 石鏃 3 点、焼石 2 点が出土した。石鏃はサヌカイト製でいずれも小型品である。522・523 は刃部中程に最大幅があり、基部が窄まる形態の平基式鏃である。この形態は中期に通有の形態であることから、中期遺物の混入と考える。焼石 525 は流紋岩小片で、図示した範囲が強く黒変する。526 は全体的に赤色化した砂岩礫で、図示した範囲が黒変する。(森下)

出土遺物の特徴から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したと推定される。(森下・信里)

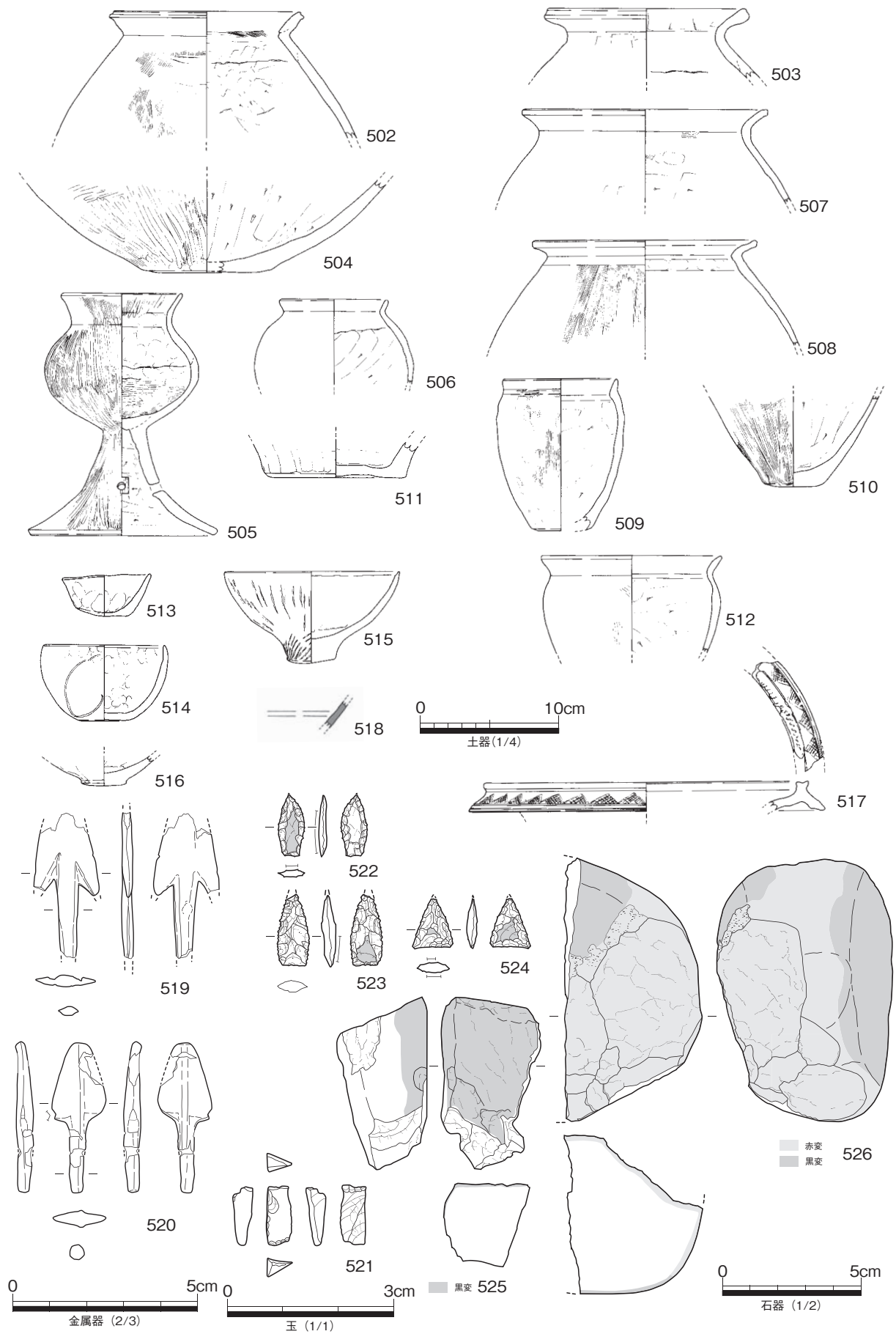


图 97 SH41 出土遺物

SH42 (図 98 ~ 101)

遺構 C区東側で検出した焼失住居跡である。重複関係からSH44に後出する。長辺5.8m、短辺5.6mの方形と復元したが、東側は明瞭なプランを検出できた訳ではない。主柱穴跡は2基である。壁際及びベッド状遺構と推定される主柱穴跡のやや外側に壁溝が回る。これら主柱穴跡と壁溝の位置関係から、全体の平面プランを復元した。

埋土を除去すると、放射状に遺存する炭化した垂木材や大量の焼土が出土した。さらにそれらを除去すると、床面で遺存状態が良好な土器が出土した。土器は特定の場所に集中する訳でなく、床面の壁際を中心に距離を隔てて散漫に分布する。南西隅では台石等に使用したと見られる大型礫が被熱により破碎して出土した。このことからこの住居跡は、焼失後に内部の片付けを行わないまま埋め戻されたものと考えられる。

当住居跡では銅鏃が1点出土している。出土位置は床面ではなく、焼土や炭化材の出土層と埋め戻し土層との層界付近で出土したものである。また主柱穴跡SP1162からサヌカイト製の磨滅ある剥片2234が出土している。焼土は焼失面において多数出土したが、それを除去した後の埋土中で35点程の中小焼土塊333gが出土した。屋根材土の崩落が多いが、明らかに土質の異なる焼土も含む。(森下)

土器 527は大形器台の口縁部片であり、口縁部外面及び上端面を中心にベンガラと見られる赤色顔料が見られる。胎土中には雲母片を多く含むもので、備中地域のそれと比較して、鋸歯文のみの文様構成や鋸歯文下の擬凹線文が浅いこと等から、旧練兵場遺跡もしくは周辺の遺跡で製作されたものと見られる。528は複合口縁壺の口縁であり、広口壺と共通する単口縁に粘土貼付を行い、複合口縁とする。胎土中には雲母片をやや多く含む。529は広口壺か複合口縁壺と見られ、頸部以下がほぼ残存する。胎土中には雲母片がやや多く含まれる。528の口縁との比較では、胎土中の雲母量に若干の相違があるが、同一個体の可能性もある。530の小形丸底壺は、形態や角閃石を多く含む胎土から見て、高松平野の香東川下流域産と見られ、大久保編年の下川津V式・⑤段階に比定される。531の広口壺は口縁部が中位で屈曲するもので、古墳時代初頭直前の様相を呈する。

533は甕口縁部片で、胎土中に雲母片を多く含む。534は張った胴部にタタキ目を明瞭に留め、口縁部が短く屈曲する。533・534ともに弥生時代終末期中～新段階に比定される。535の甕は矮小な平底をもち、底部に焼成前の穿孔を行う。536は口縁端部を若干拡張する鉢で、弥生終末期以降に出現するタイプである。537の口縁部が短く屈曲する鉢は、胴部が球形化しており、古墳時代初頭の形態に近い。538～546は小形尖底タイプの小形鉢である。やや深手の538・540・545等器形に差異が見られるが、薄手でハケ目調整の多用等共通する属性が多く、弥生終末期新段階から登場するものである。540・542・545の胎土中には雲母片が多く含む。547は土製支脚である。548は大形鉢の口縁部。

金属器 550の鉄鏃は身部の断面が片丸形となる長頸鏃であり、茎部の大半は欠損する。時期的に見て、本縦住居に帰属する可能性は低く、古墳時代以降の混入品である。(信里)

549は長さ4.55cmの大型の銅鏃で、刃部はほぼ完存し、茎部は関の付け根付近で強く折り曲がり、それ以下は折損する。刃部長4.1cm、厚みは0.4cm、茎は厚さ0.456cm、幅0.4cmを測る。器体中央には連鑄心棒が明瞭に残り、刃部は鱗状に付く。刃部と心棒は個別に研ぎ分けており、心棒と刃部の境は

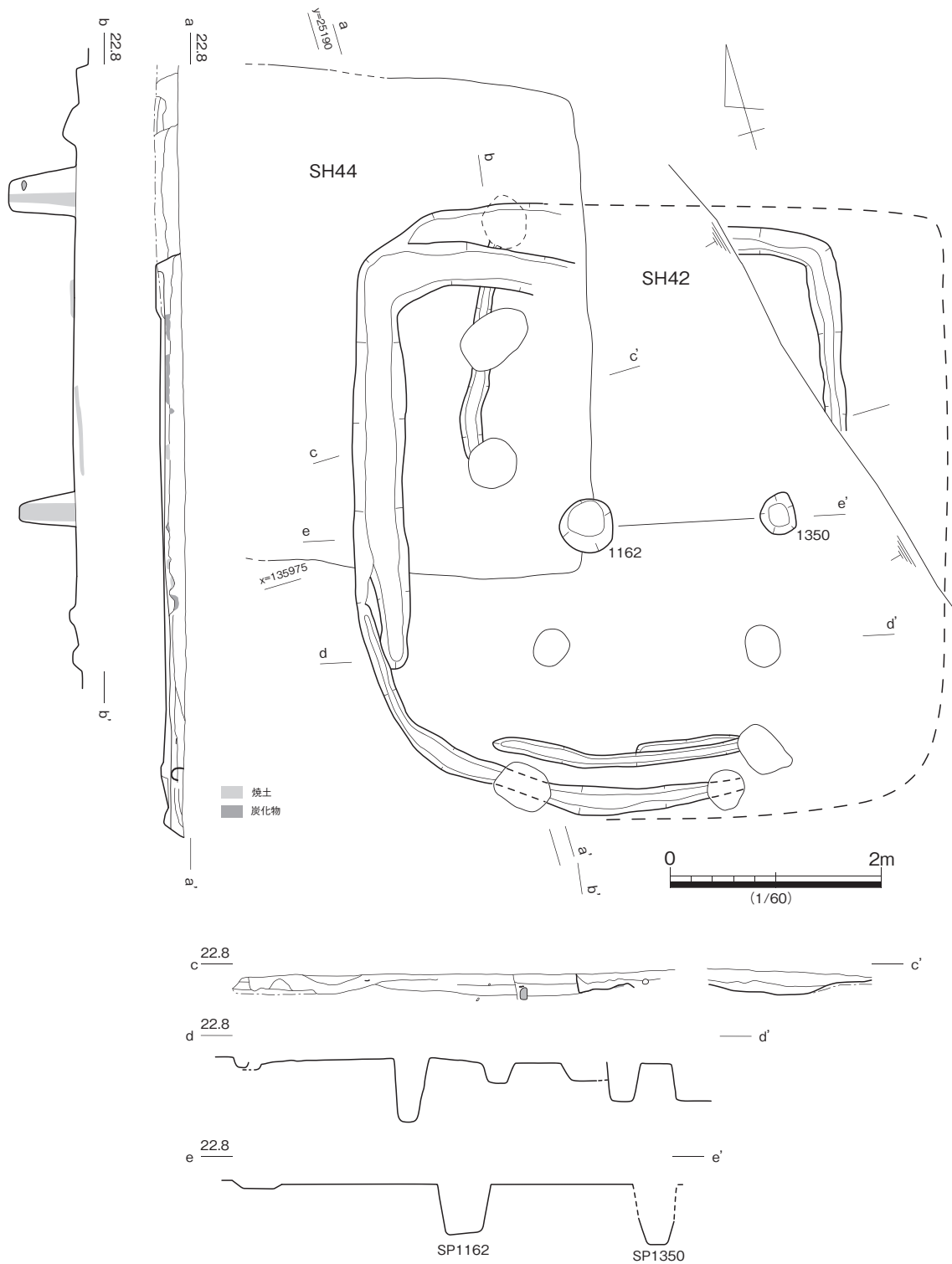


図 98 SH42 平・断面

明瞭な段を形成する。関部には深い逆棘があり、逆棘部の断面形は端正な菱形に仕上げる。茎部も丁寧な研ぎを行うことで、器体側縁にバリは認められない。このように仕上げが完成されている点と、茎部が折れ曲がる点から、着柄状態を介して廃棄されたものと見ることができる。

石器 焼石が2点出土した。551は床面出土の破碎礫で、接合により被熱し破碎した経緯が明瞭である。552も551の近辺で出土下被熱破碎礫である。いずれも、住居の焼失に伴う被熱と考えられる。その他、

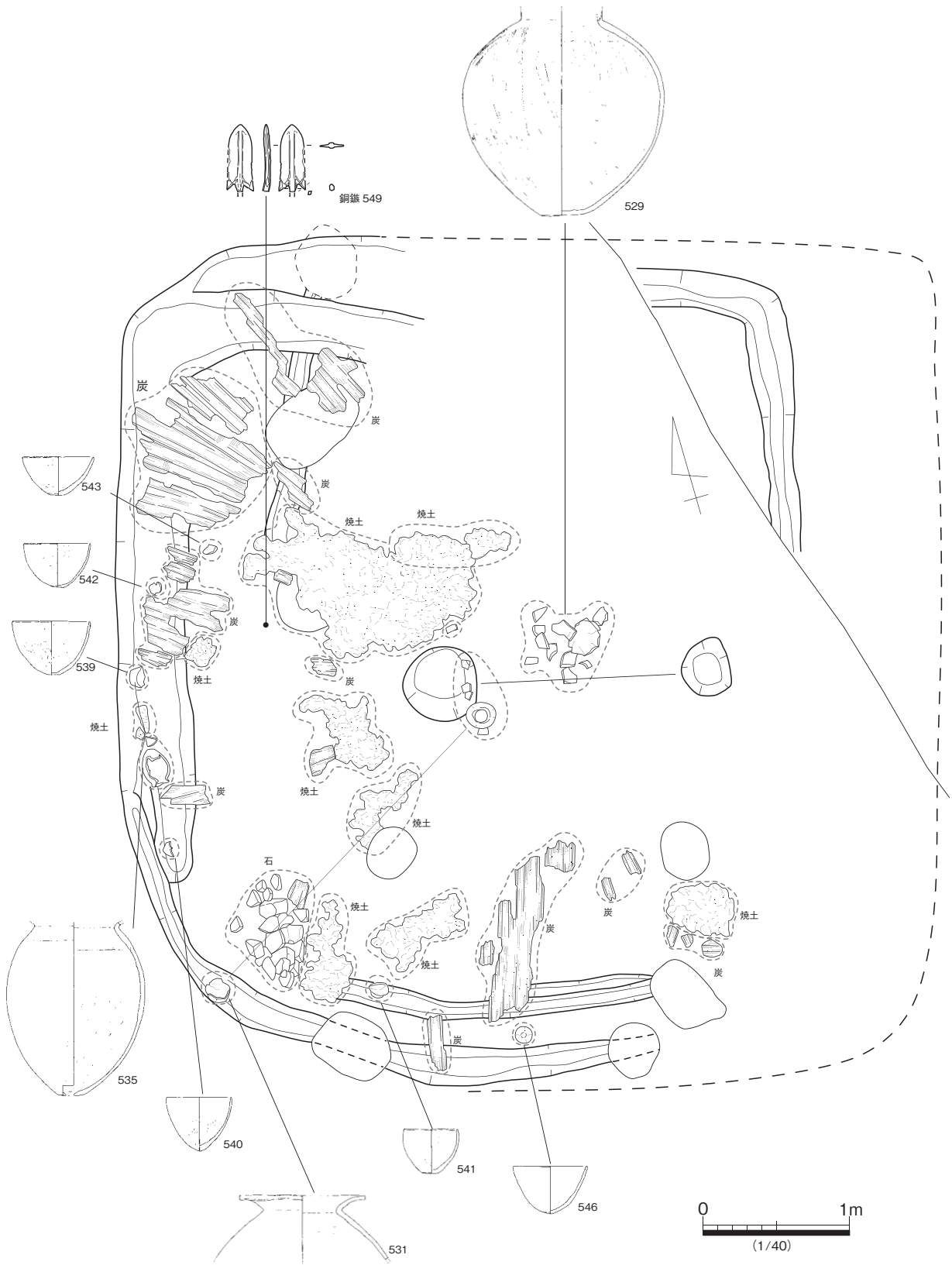


图 99 SH42 遺物出土状况

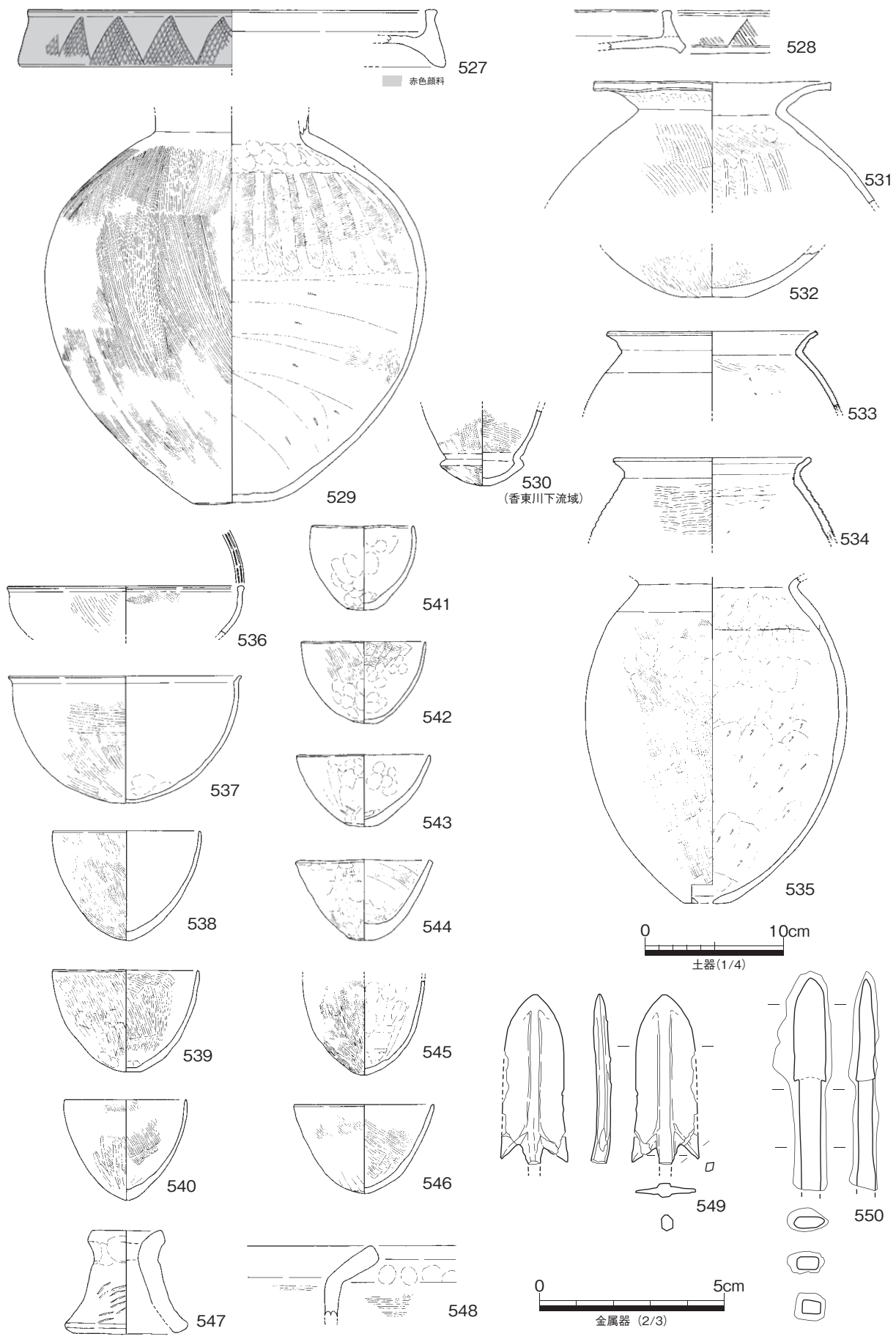
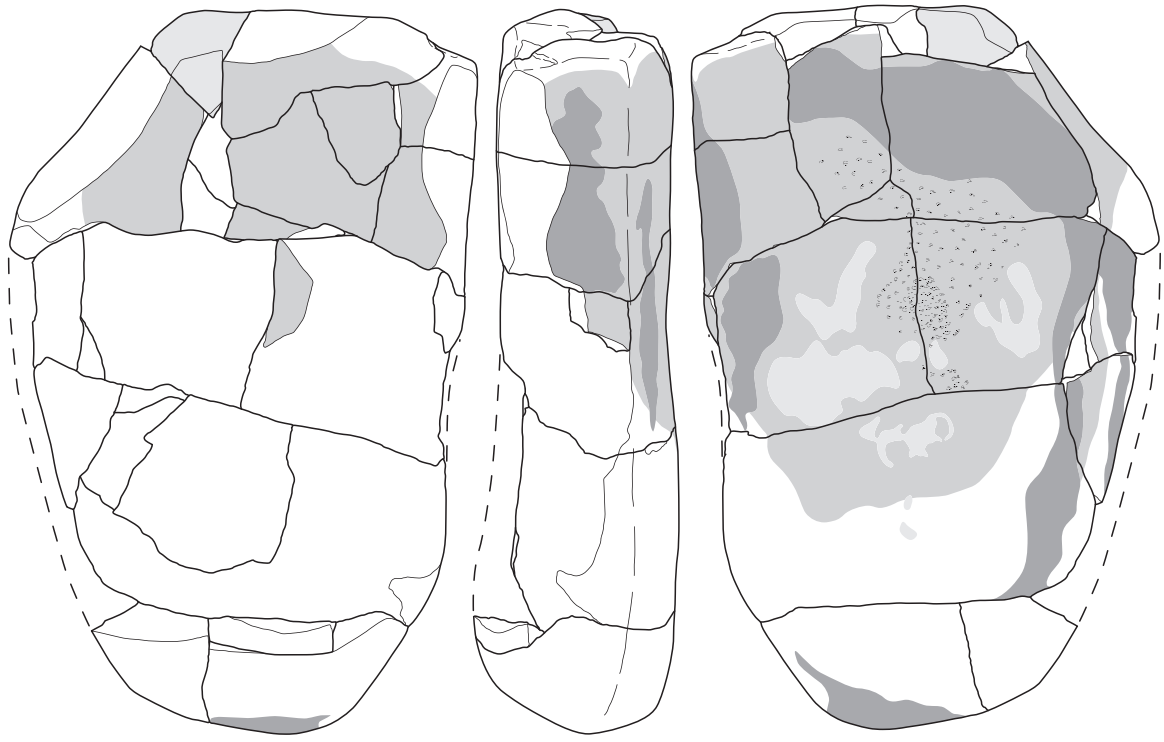
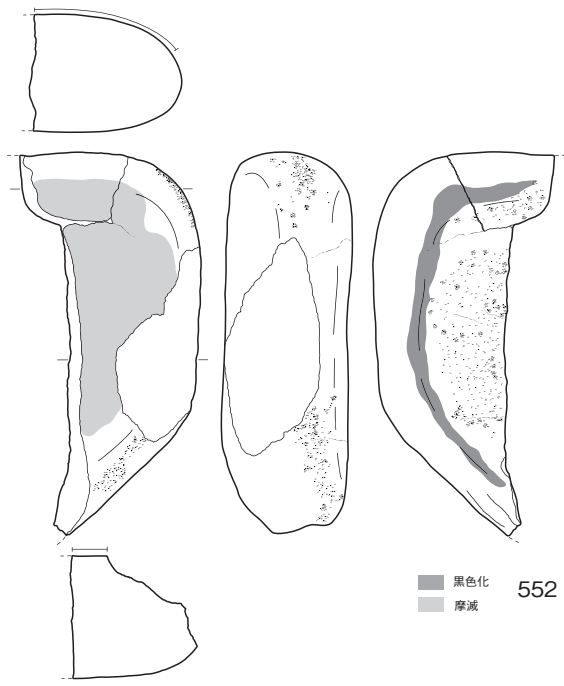


图 100 SH42 出土遺物 (1)



赤色化 551
 黒色化
 摩滅



黒色化 552
 摩滅

0

 10cm
 石器 (1/4)

图 101 SH42 出土遺物 (2)

第7節に掲載したが、サヌカイト製の磨滅ある剥片 2234 が出土している。(森下)

出土遺物の時間的な様相は、弥生終末期新段階のもので占められる。また、消失住居であることも併せて考えると、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと判断できる。(森下・信里)

SH43 (図 102)

遺構 C区東側で検出した柱穴跡列及び円形に回る溝跡の組み合わせである。竪穴住居跡としての掘り込みをもつかどうか定かではないが、周溝に囲まれ、7基の支柱穴で屋根を支える住居跡である。中央やや北寄りに、埋土中に炭粒や焼土粒を多く含む深さ 0.24m の中央土坑 (SP1278) がある。支柱穴跡列の外側 2.2m の北東及び西側に、幅 0.56 ~ 1.08m、深さ 0.1 ~ 0.2m の周溝 (SD55・56) が回る。周溝は底場のレベルが揃わず、SD55 は北に向かって深くなる。SD55 にはその内側肩部付近に支柱穴跡列とほぼ同心の柱穴跡列が回る。

調査当初は重複する SH41・42・44 に掘り込まれ、黄褐色系の埋土が存在することを確認していたが、精査過程で床面まで下がり、明瞭な平面プランは検出できなかった。図に示す遺物は当初確認していた黄褐色系埋土より出土した遺物である。また、周溝 SD55・56 及びその出土遺物は後の溝跡の項で詳説する。(森下)

出土土器 553 は短頸広口壺の口縁部で、形態から弥生中期末に位置付けられる。554 の丸みをもった壺底部片は、外面の荒いハケ調整をミガキで消去するもので、弥生中期末葉に帰属するものである。555 は甕口縁部であり、きついヨコナデ調整や口縁部形態から弥生中期後半新段階に比定される。558 は高杯脚部片で、脚部内面及び脚端部外面の凹線文は退化しており、沈線状となっている。弥生中期末葉に位置付けられる。556 は炉跡と考えられる SP1278 から出土した甕底部片である。形態から弥生中期後半新段階新相に位置付けられる。(信里)

石器 サヌカイト製の磨滅ある剥片 1 点、楔状石核 1 点が出土した。559 は背面に打製石庖丁に通有の磨滅痕を残す小剥片である。560 は小型の楔形石核である。(森下)

出土土器や、後述する住居周溝と考えられる SD55・56 の土器の特徴から、本住居は弥生中期後半新段階新相に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH44 (図 103・104)

遺構 C区東側で焼失住居跡 SH42 の下層で検出した方形の竪穴住居跡である。長辺 4.65m、短辺 4.4m で若干歪な台形を呈す。支柱穴跡は 4 基で、その東側及び南側にベッド状遺構が備わる。ベッド段境には壁溝状の溝跡があり、土留板の存在を示す。床面北側には幅 0.2m の段があり、段下、壁面下部それぞれに壁溝が回る。住居跡西側には、調査時に SH47 として調査を行った遺構が付属する。弧状を描く外形を検出したが、明確なラインではなかった。破線で復元したように、矩形であれば、当該住居跡の貼出しと評価できるが、外形ラインの探索が不十分なまま終わっており、詳細は不明である。

住居床面の中央南寄りに炭化物の広がりとし長方形の浅い中央土坑 K1 を検出した。また、床面の 3 箇

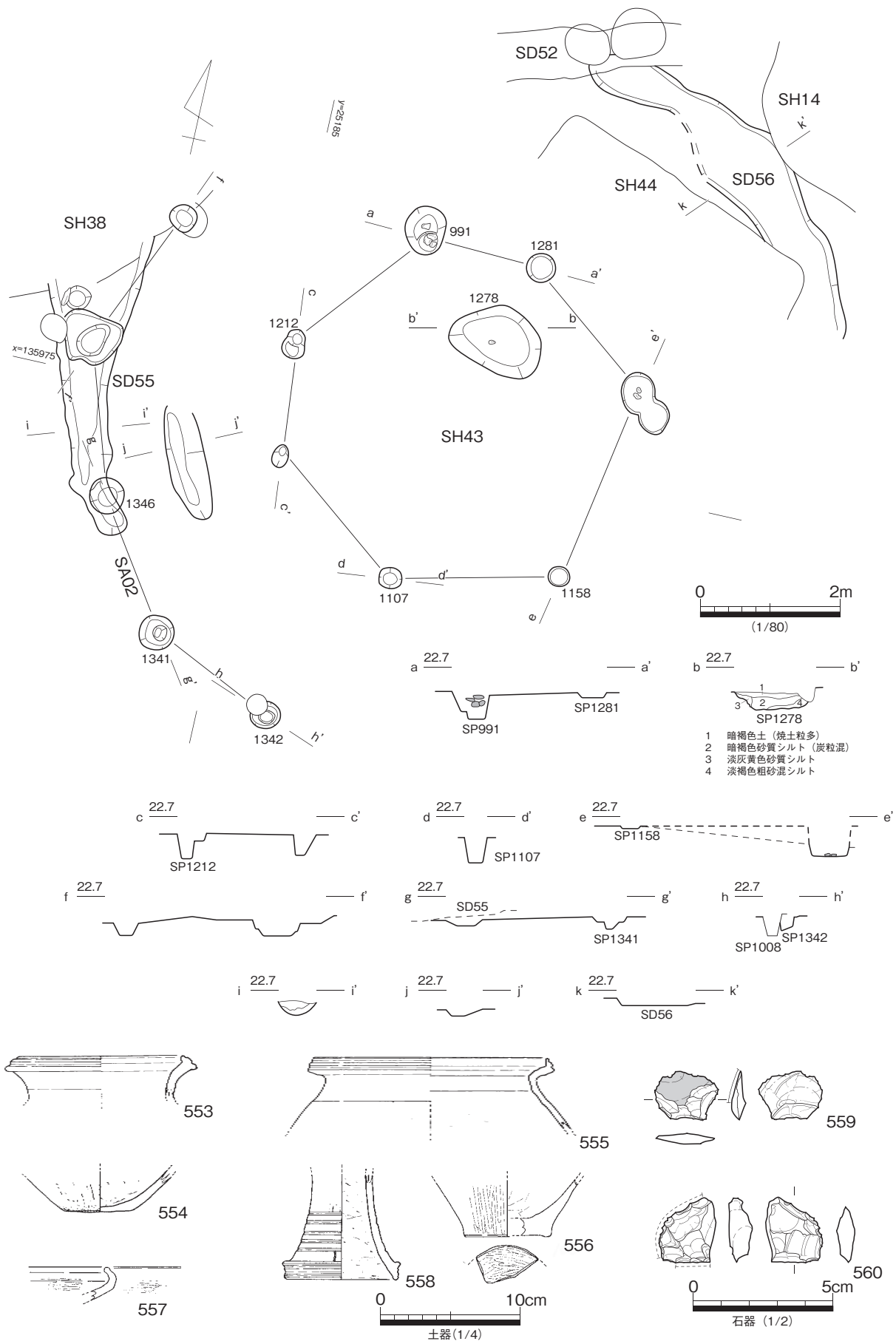


図 102 SH43 平・断面・出土遺物

所で遺存状態が良好な土器を検出した。これらは床面に貼り付く状態で出土するが、当住居跡より出土した銅鏃2点は、いずれも床面から浮いて出土している。このうち銅鏃(583)は住居跡北壁沿いで壁溝上部の埋土層より出土した。銅鏃(584)は出土位置は中央土坑直近だが、出土レベルは床面から0.15m程浮いた位置である。銅鏃はいずれも当該住居跡廃絶時かもしくは廃絶後に投棄されたものと見られる。

その他、土器(561)は貼出しの可能性のある旧SH47部分で出土したものである。aライン断面で表示したように、埋土最上部で出土している。なお、調査時の写真を観察すると、SH44埋土aライン1層と、561が出土した旧SH47の最上層は極めて類似した土であり、旧SH47を当該住居跡の貼り出し部と想定すると、当該住居跡最終埋没の同一層ということになる。土器(561)は後述するが土器編年上終末期新段階に位置付けられることから、当該住居の主たる時期と考える後期後半新段階より古い土器とは考え難い。したがって、先述の2つの土層は、元来同一層であり、旧SH47が当該住居跡貼り出しであった可能性が高いと言える。

その他、埋土中より、焼土が3点(50.90g)出土した。厚さ1.3cmの板状の焼土で、片面が平坦面となるものを含む。(森下)

土器 561は半完形に復元される広口壺。SH47との境付近で出土した破片とSH47埋没土から出土した破片が出土しており、本来的にはSH47に帰属する可能性が高い。形態から弥生終末期新段階に位置付けられる。562の広口壺は口縁端部が僅かに拡張され、外面に擬凹線文が施される。弥生後期前半期の混入品と考えられる。563は広口壺の口縁に突帯を継ぎ足すことにより複合口縁壺となるもので、同系譜の最末期である古墳初頭に位置付けられる。564は複合口縁壺の口縁部片であり、擬口縁の部分で口縁上半部が剥離する。また、胎土中に雲母片を多く含む。565は僅かに平底を留める壺底部片である。

566は薄手の器壁をもつ半完形の甕であり、胴部・底部形態に弥生後期後半新段階の特徴が見られる。また、胎土中に雲母片を多く含む。567は厚手の口縁部をもつ中形甕である。568・569の甕口縁は、全体的に薄手であり、566と同様に胎土中に雲母片を多く含む。570は直口気味の口縁部をもつ小形甕である。胎土中に雲母片を多く含む。571は甕底部片で、弥生後期後半古段階の特徴を残す。572は端部を跳ね上げる口縁部をもつ中形鉢であり、胎土中に雲母片を多く含む。573はボール状の中形鉢で、胎土中に雲母片を多く含む。574～576は口縁部が内傾する中形鉢である。577～579の小形鉢は平底が痕跡的になっており、578の胎土中には雲母片がやや多く含まれる。581は高杯口縁で、口縁端部内面にヨコナデに伴う窪みを残し、弥生後期後半新段階に特徴的なものである。580は台付鉢の脚台片で、低脚化していることから弥生後期後半新段階に比定される。582は高杯脚部片であり、脚部中位に四方からの円形透かしが確認できる。(信里)

金属器 583は遺存長2.5cm、厚さ0.4cmの銅鏃である。先端、刃部片面、茎部を欠損する。表面は銹化層が覆うが、連铸心棒が先端から茎部にかけて明瞭に残り、刃部はSH42出土の大型銅鏃と同様に鱗状に心棒に取り付く。関は逆棘ではなく、上に開く関研ぎを施す。研ぎは比較的丁寧で、バリは目立たない。584は微細な6片から復元した銅鏃である。先端片、茎片、刃部縁の小片がある。茎の両側縁には、微小な研ぎによるノッチを認める。

石器 打製石鏃5点、楔状石核1点、打製石庖丁1点出土した。石鏃はいずれもサヌカイト製の平基式石鏃である。585は長さ2.0cmの小型品で、両側縁にやや深目のノッチが入る。586は下端がやや内

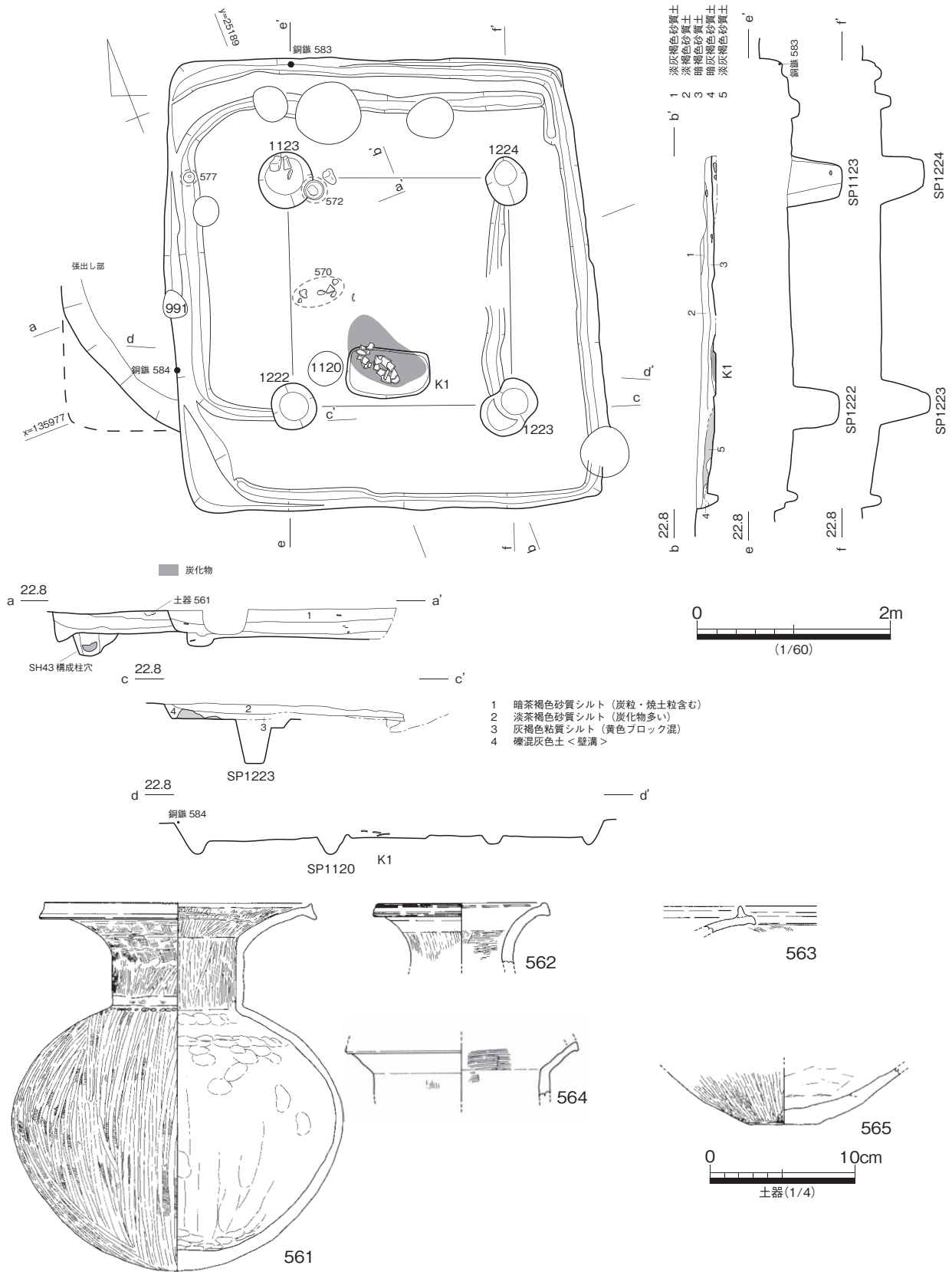


図 103 SH44 平・断面・出土遺物 (1)

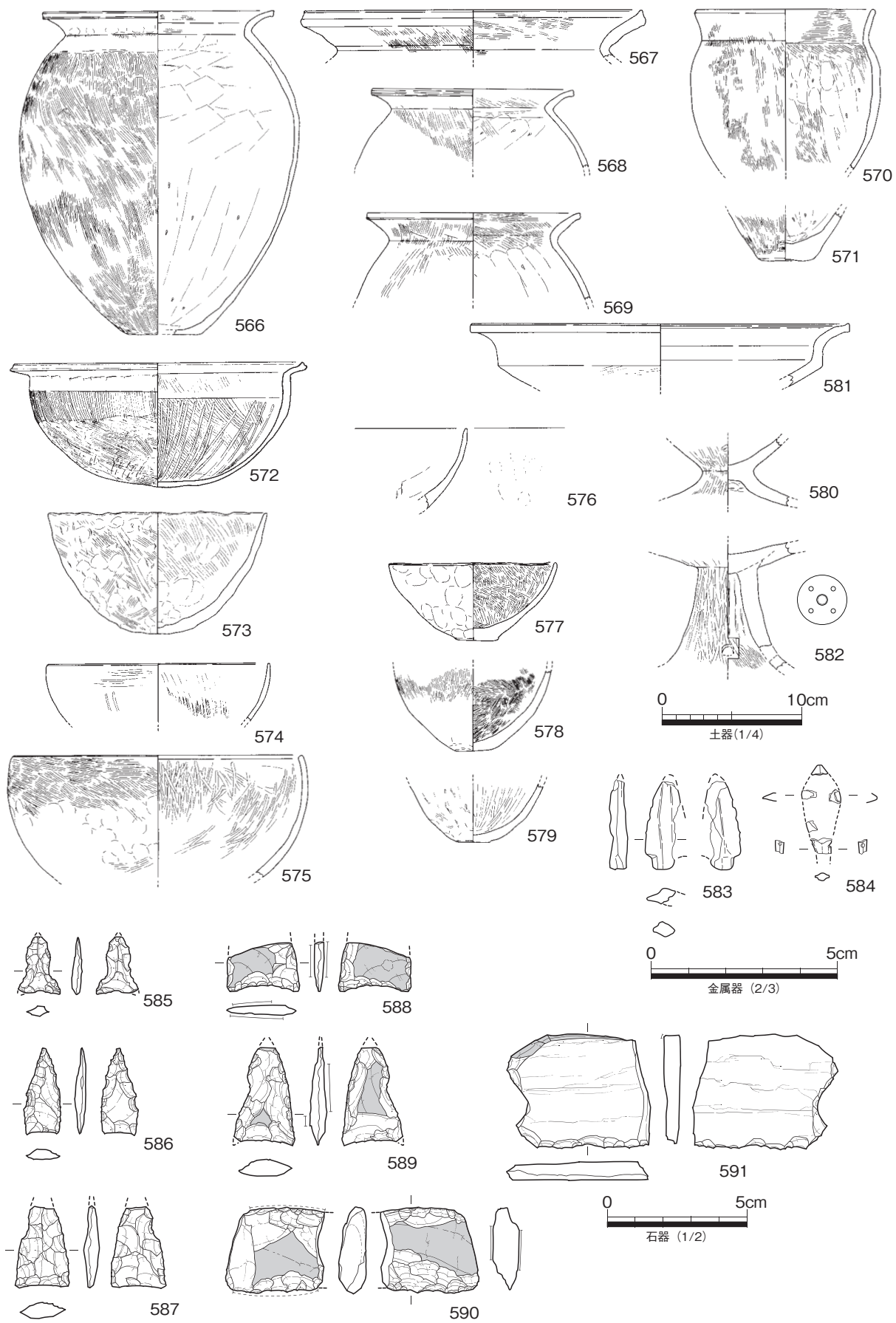


图 104 SH44 出土遺物 (2)

彎する平面形を呈し、中期に通有の形態を備える。587・589は側縁下端部が下開きの形態、588は側縁下端部が直線的で、長さ5cmサイズの大形品である。588・589は素材面に打製石庖丁に通有の摩滅痕を認める。いずれも埋土中出土で、当該住居跡に伴うかどうか不明である。590は表裏素材面に打製石庖丁に通有の摩滅痕を残す楔状石核である。591は結晶片岩製の打製石庖丁である。側縁に抉りを備え、刃は主に片側からの調整加工により付ける。背部は切断面で、強いマメツが見られる。(森下)

出土遺物の全体的な様相から、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと推定される。

(森下・信里)

SH46 (図 105)

遺構 C区東側で検出した竪穴住居跡である。SH41・42・44に掘り込まれ、平面プランを検出できたのは、南東部のみである。壁溝を備え、主柱穴跡は6基と想定されるが、SP1147・1148・1156・1299の4基しか検出できなかった。中央部に中央土坑と推定される柱穴跡状の土坑 SP1113がある。中央土坑は基盤土ブロックを多く含む土で埋没しており、炭化物粒は目立たなかった。また、SP1147から東に向かって、弧状の溝跡を検出した。これに基づき、円形の平面プランを図上で復元した。出土遺物は平面プランを検出した南東部付近で出土したものが多。(森下)

土器 592は広口壺の口縁部片で、口縁端部外面に浅い2条の凹線文が確認できる。形態や凹線文の特徴から、弥生中期後半新段階に帰属するものと見られる。593は広口壺の口縁部片であり、口縁端部外面の凹線文は消失しており、弥生後期前半古段階まで時期的に下る。594は甕口縁部片。口縁端部外面の凹線文は擬凹線となっており、形態も併せて捉えると弥生後期前半古段階に位置付けられると考えられる。595は椀形高杯または台付鉢の口縁部で、弥生後期前半新段階に下る可能性が高い。596は凸状の鉢底部である。弥生後期前半古段階から同新段階の幅の中で捉えられる。597は高杯杯部片である。胎土中に雲母片をやや多く含み、形態から弥生後期前半新段階の範疇で捉えられる。598は高杯脚部片である。599は器台の口縁部片であり、口縁端部外面の凹線文は消失しており、弥生後期前半新段階の所産と見られる。(信里)

石器 打製石鏃2点、微細剥離痕のある剥片2点が出土した。601の石鏃は床面直上、それ以外は主柱穴跡 SP1148で出土した。いずれもサヌカイト製である。

石鏃はいずれも平基式で、600は長さ2.75cmの小型品、601は長さ4.0cm以上の大形品である。601は左右形態が非対称で、素材面に打製石庖丁通有の摩滅が残ることから、石庖丁から転用途上の石鏃製作未製品と言える。602・603はいずれも自然面を有する剥片の刃部に微細剥離痕をもち、背部に敲打による潰しを施す剥片である。603は僅かな摩滅痕もあるが、あまり顕著でない。(森下)

出土遺物は少量に留まるが、時期の判明する個体の帰属時期は弥生後期前半新段階までに収まる。これらの出土遺物の帰属時期を援用し、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。

(森下・信里)

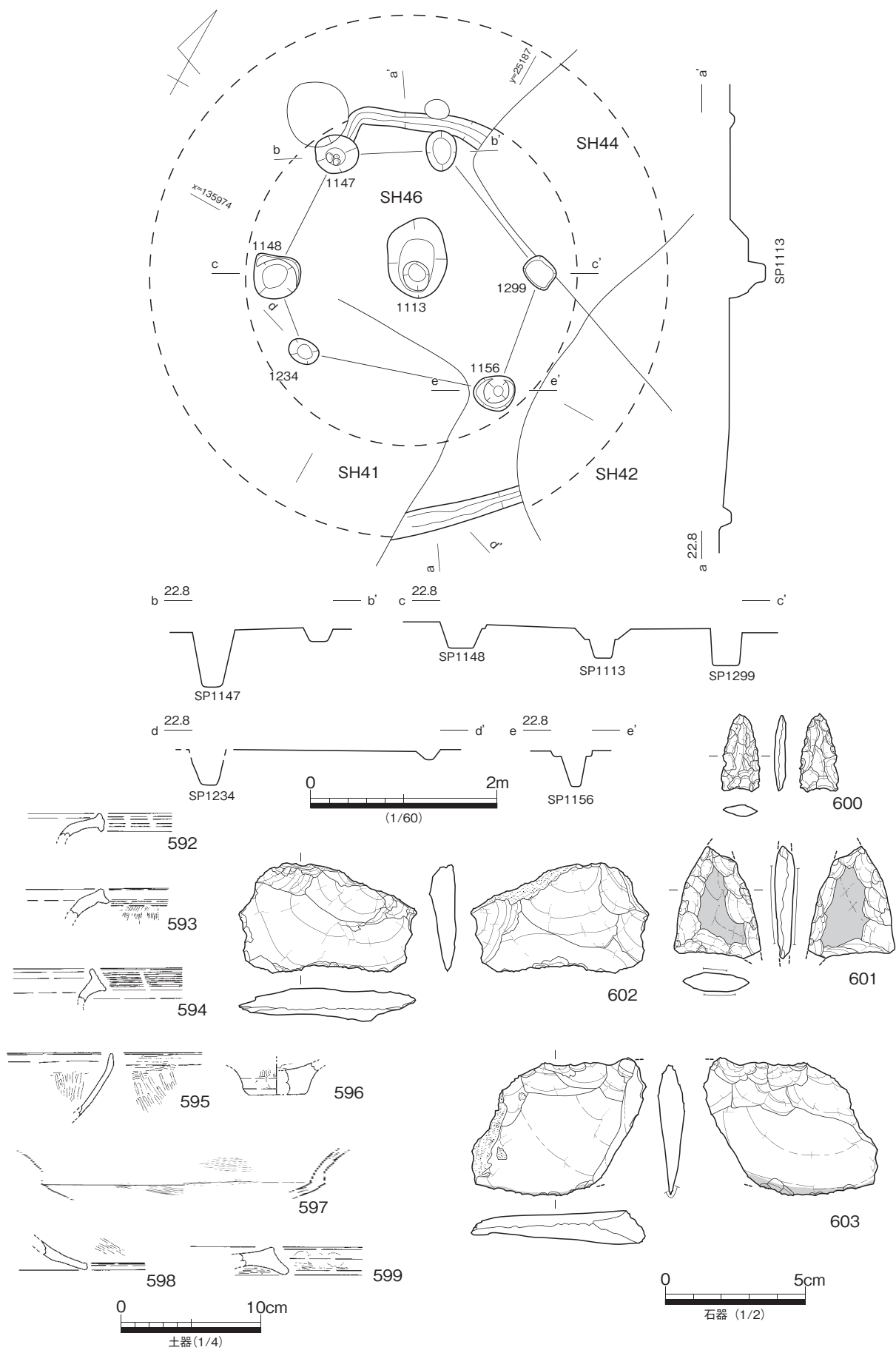


图 105 SH46 平·断面·出土遺物

SH48 (図 106)

遺構 C区北東部で検出した竪穴住居跡である。SH50・51と重複しそれらに先行する。直径5.2mの平面形で、6基の支柱穴跡からなるものと推定する。支柱穴跡はそのうち4基を検出した。また、支柱穴跡に沿って幅0.35mの溝跡が回る。支柱穴跡沿いの溝はbライン3・4層が示すとおり、ベッド状遺構の貼床下部に位置する溝跡と推定する。

中央やや北寄りに長楕円形の土坑K1を検出した。K1は炭化物や焼土は多くなかったが、位置関係から見て、当該住居跡の中央土坑と考える。

床面では大型石鏃1点、ガラス小玉1点、土器等が出土している。大型石鏃は床面に貼り付いて出土しており、当該住居跡に伴うものと見てよい。鉄鏃の可能性のある不定形鉄片は埋土上層出土品である。

(森下)

土器 604は短頸広口壺で、口縁部が短く屈曲する形態をもち、弥生後期前半中段階に比定される。605の広口壺は、口縁端部が外面に浅い3条の凹線文、頸部には4～5条の沈線状の凹線文を描き、頸胴部境に1条の三角形突帯を付与する。旧練兵場遺跡を含めて、県内の出土資料には確認できない型式であり、搬入・模倣土器の可能性もある。凹線文の状態から、弥生後期前半中段階を前後する時期の所産と見られる。607は器台の口縁部である。606は高杯脚端部。弥生後期前半古段階のものと比較して、端部の上方への拡張と凹線文が緩やかになっており、弥生後期前半中段階に帰属するものと見られる。金属器 608は不定形鉄片であり、一部に裁断に伴う捲れと考えられる箇所が見受けられる。(信里)

玉類 ガラス小玉1点が出土した。直径0.45cmの中型品で、孔径は長軸2.5cm、短軸1.8cmと楕円形を呈す。側面形は偏台形を呈し、図の上部小口面が大きく斜向する。ガラス内には多数の気泡があり、縦方向に気泡が伸びることから、引伸ばし技法で製作されたものと考えられる。

石器 打製石鏃2点が出土した。いずれもサヌカイト製である。611は支柱穴跡沿いの溝跡から出土した石鏃で、当該住居跡構築以前に所属するのが間違いないものである。無茎凸基式で、薄く短小である。610は床面出土の石鏃で、当該住居跡に確実に伴う。片面に自然面を留めた剥片を素材として、基部端が垂直に終わる形態を作り出す。(森下)

出土遺物の帰属時期は弥生後期前半中段階にまとまっており、本住居の廃絶時期は同時期に推定される。(森下・信里)

SH49 (図 107)

遺構 C区北東で検出した竪穴住居跡である。重複するすべての住居跡に先行する。支柱穴跡は4基と想定されるが、南西部の支柱穴跡はSP1300・1560のいずれか判別できない。また、南東部のSP1513は写真観察から底面まで調査が及んでいないことが判明したので、他の支柱穴跡と同様の深さがあったものとする。住居跡外形線は南西部しか検出していないが、内彎するカーブを描いており、円形もしくは楕円形の平面プランが想定される。明確に当該住居跡に伴い図化可能な遺物はなかった。(森下)

SH51 (図 108～110)

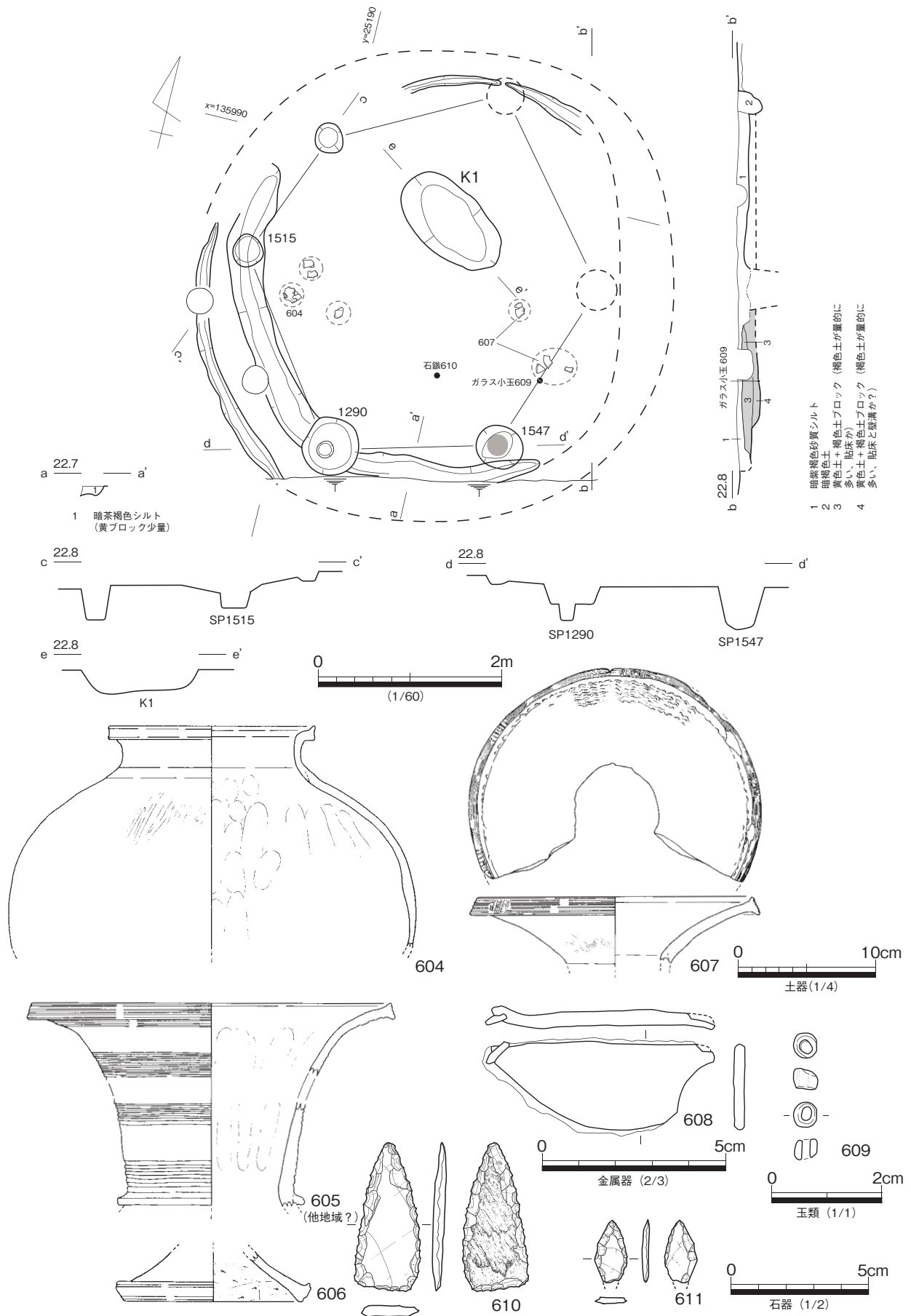


図 106 SH48 平・断面・出土遺物

遺構 C区北東で検出した竪穴住居跡で、SH48・49と重複してそれに後出する。平面形は隅丸方形を呈すが、複数の壁溝や貼り出し等があり、数回の床面改修を行っている可能性が高い。支柱穴跡は4基で、SP1394・1389・1921・1476が相当する。これらは、柱抜き取りに伴い礫や土器を廃棄する点で共通するが、複数の壁溝が存在することに対して、支柱穴の掘り直しは認められない。中央にはSP1583、K1があるが、SP1583は炉跡ではなく、上層から掘り込まれる遺構に伴う柱穴跡と考えられる。なお、住居南西の貼り出しは、住居に伴う張り出し部ではなく、ベッド状遺構が一部途切れる状態を示している可能性があると考えられる。(森下)

鍛冶炉 K1は住居中央部東寄りで検出した炉跡である。現状の規模は、長さ約0.6m深さ約0.2mを測り、全体形状や中央炉跡のSP1583との層位的な連続関係は、調査トレンチによって消失し把握できないが、円形炉と考えられる。炉跡の周囲には、置土による住居床面からの高さ約0.1m程の土手状の高まりが回る。炉跡及び周囲土手状の高まりの下位は、住居構築に伴い基盤層であるIV層が島状に高く掘り残されていることから、住居構築当初から炉の位置が設定されていたと考えられる。また、住居貼床土と土手状の高まりは層位的に連続しており、貼床敷設と同時に炉の構築が行われた可能性が高い。

炉跡内の堆積物は、層厚3cm程の炭化物の薄層を介する下層と、焼土及び焼土塊と炭化物が多く見られる上層に分けられる。下層はよく締まった褐灰色粘土と上記の炭化物薄層の互層となっており、炭化物の薄層を介させる以外には層位的な不整合はなく、連続して敷設されている。炭化物の薄層は防湿を目的として敷設されたと推定される。

上層は全域に広がる厚さ2～4cm程の炭化物層を基底面とし、中位に焼土塊及び焼土粒、上位に小規模な地山塊を含む褐灰色粘土に細分される。上位層は、周囲の住居埋没土と差異が見られないため、

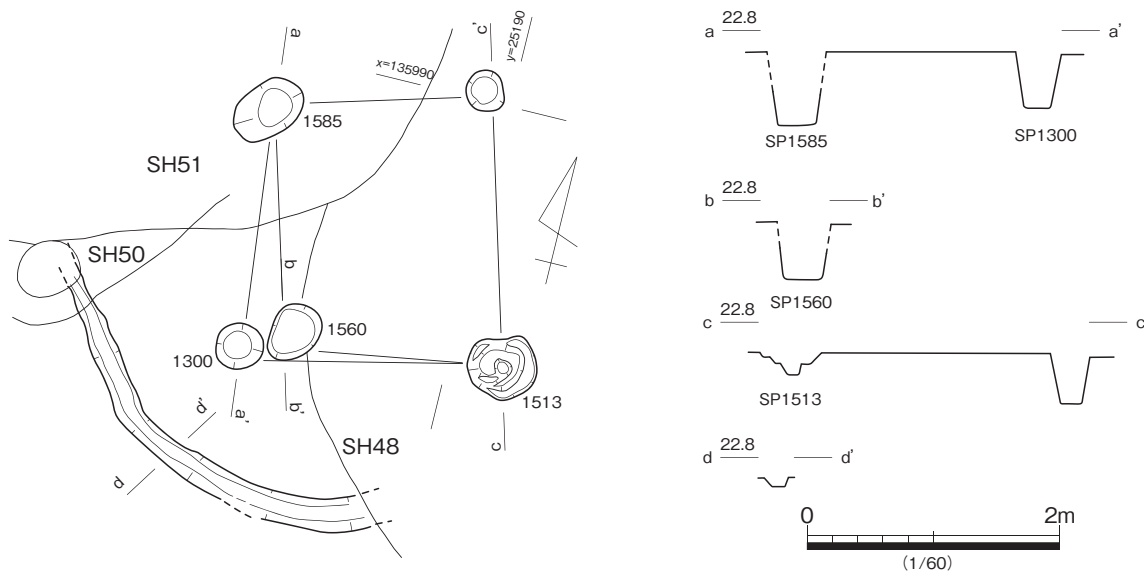


図 107 SH48 平・断面

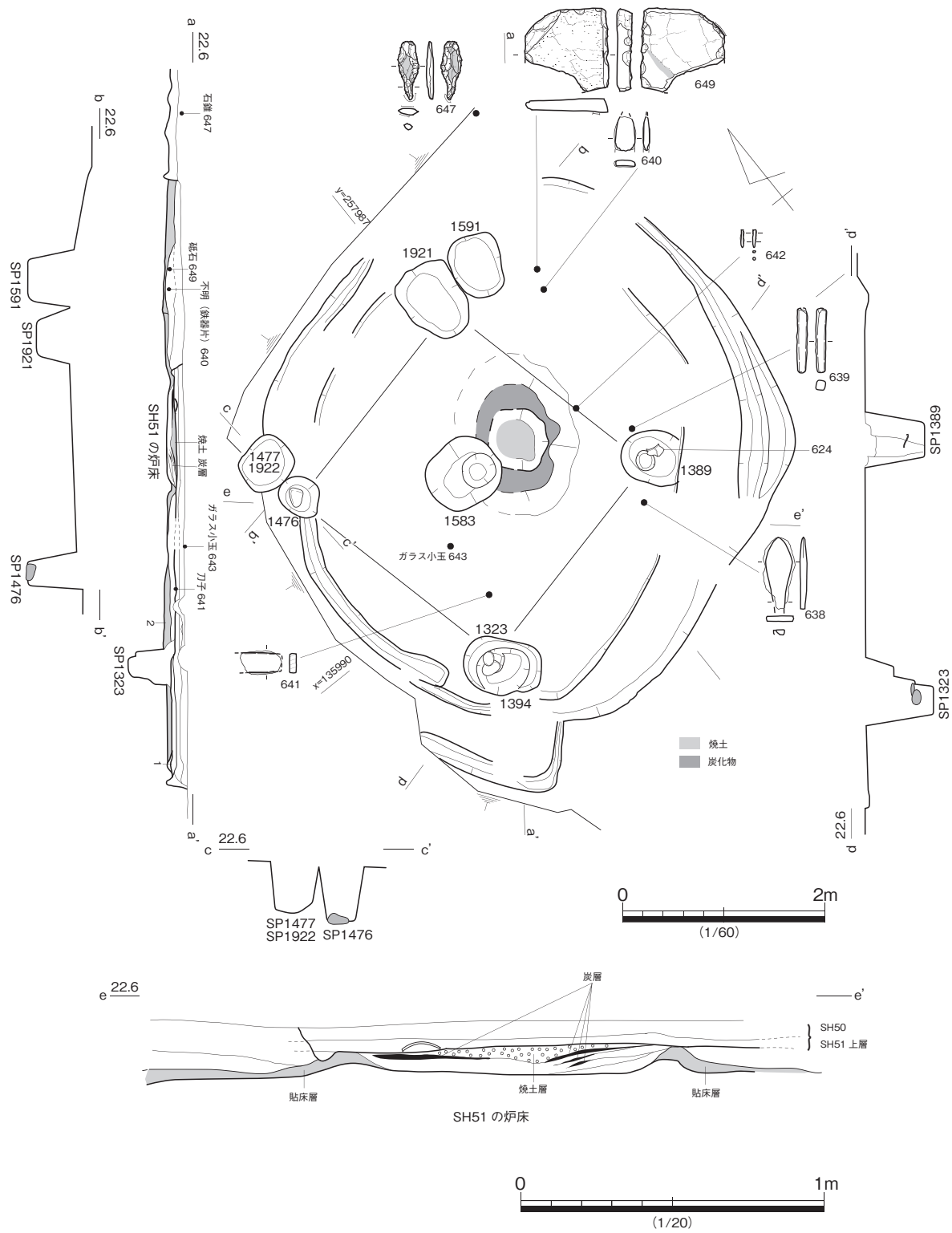


図 108 SH51 平・断面

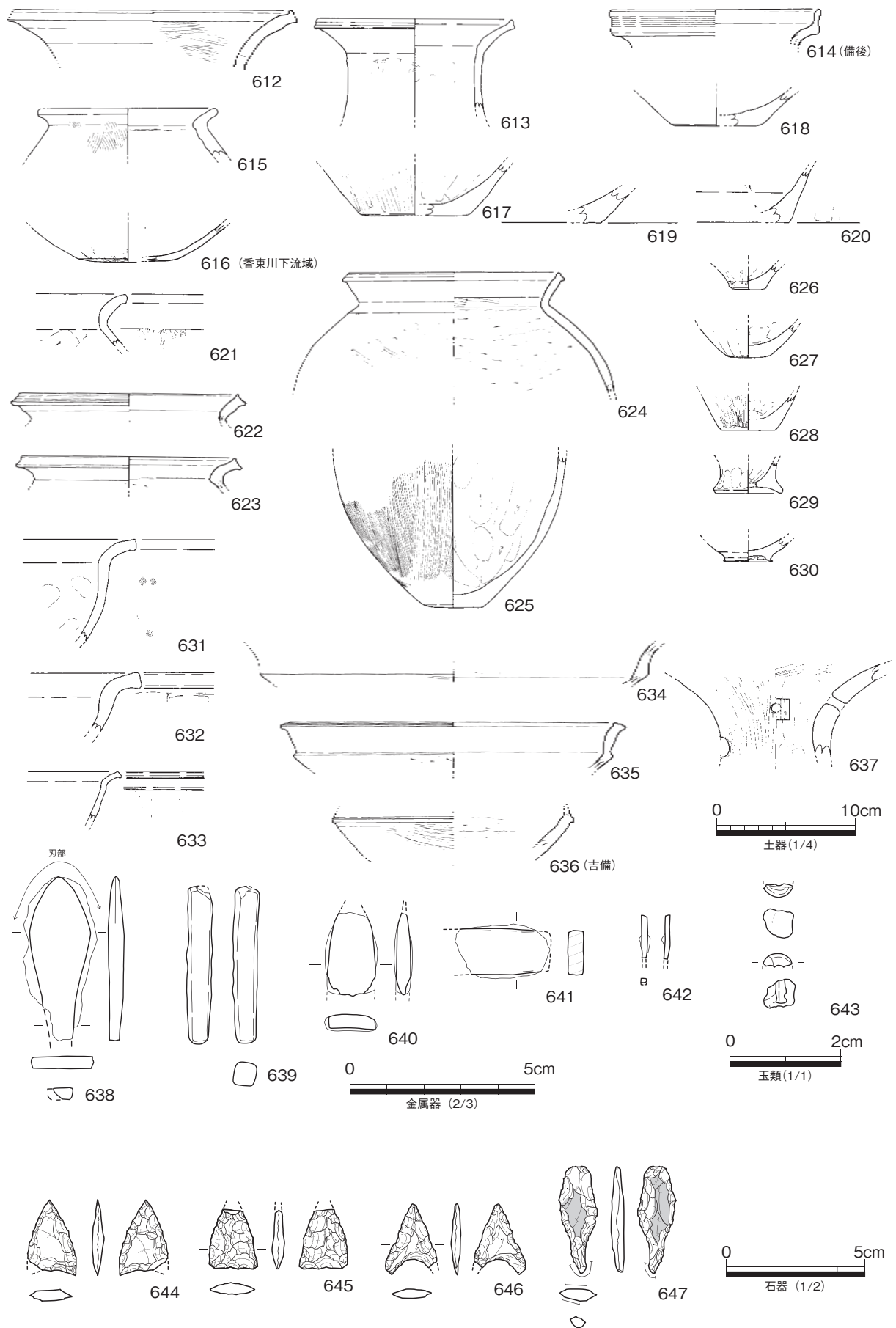


图 109 SH51 出土遺物 (1)

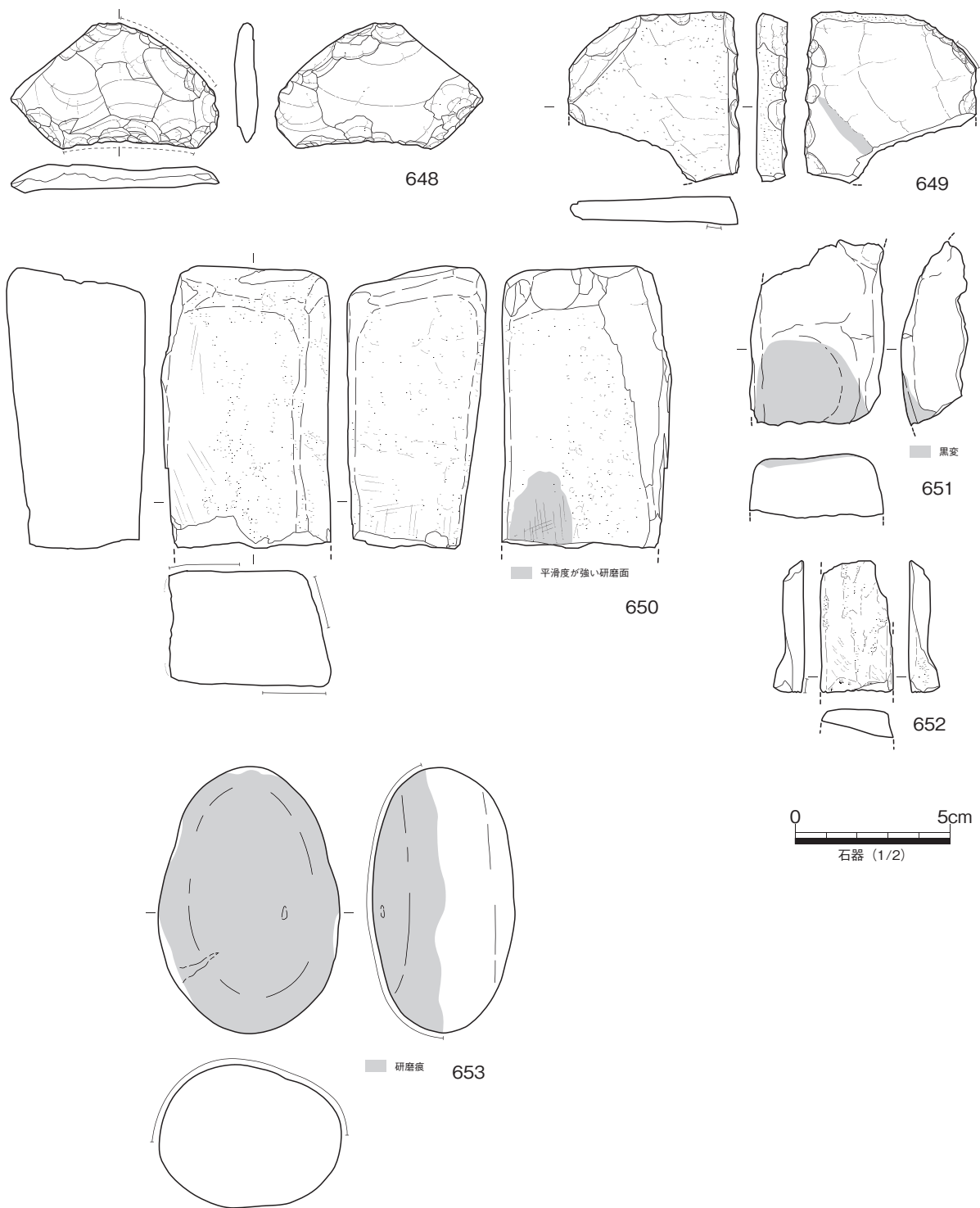


図 110 SH51 出土遺物 (2)

住居廃絶に伴う埋め戻し土と考えられる。

上層中位の焼土塊及び焼土粒は、炉跡中央には分布せず周囲の土手際に多く認められる。塊・粒状を呈することから見て、被熱・硬化箇所を示すものではなく、現状の土手状の高まりの上部に更に壁等の構築物が存在していて、操業に伴いそれらが崩落したことを示唆するものと推定できる。また、調査範囲での硬化面の分布の確認はできなかった。

炉跡の東側を中心として、針状鉄片 642 や棒状鉄片 639 が出土している。このような鍛冶関係を示す鉄片や極めて入念な築炉を行った状況から見て、鍛冶炉と推定される。

出土遺物は床面から鉄器片 5 点、サヌカイト製の石器 2 点が出土した。また、ガラス小玉は埋土上層の K2 に伴う層位で出土した。

土器 612 は広口壺の口縁部でトレンチからの出土である。613 は長頸の広口壺である。614 の甕は上方に拡張する口縁部であり、備後からの搬入品の可能性が高い。616 は薄い器壁をもち、内面に顕著な指押さえが確認できる壺底部片であり、胎土中に角閃石を多く含む。高松平野の香東川下流域産と見られる。617 ～ 620 は、形態から見て弥生中期後半～後期初頭の壺底部と見られ、混入品の可能性が高い。

622・623 の甕は、短く折り返す口縁部をもち、後期前半中段階の特徴をもつことから、先行する時期の住居からの混入品と見られる。624 は主柱穴跡の SP1389 の柱抜き取り時に投棄された甕で、上向きに外反する口縁端部の形態は後期後半古段階に特徴的なものである。615 の甕口縁、625 の甕底部、631 の鉢口縁は、住居中央の SP1583 から出土しており、本住居に伴わない遺物と考えられる。635 の高杯、637 の器台は張床層から出土しており、形態的にも古相を示すことから先行する住居等の遺構からの混入品と考えられる。636 は扁平な体部をもつ壺であり、形態から備後を始めとした吉備からの影響が想定できる。

金属器 638 の鉄鏃は刃部の施される範囲から見て圭頭鏃と見られる。639 は棒状鉄片で、断面形は整った方形ではなく歪みが確認できる。640 は不定形鉄片である。刃部等の機能部位が作り出された痕跡は見られない。641 は鉄器片である。刀子やヤリガンナの柄とも考えられるが、推定できる材料はない。642 は針状を呈する鉄片である。(信里)

玉類 大型のスカイブルーを呈すガラス小玉である。直径 5.0mm、孔径 1.8mm で上下端は中央が窪むように面形成を行う。縦方向に気泡が伸びることから、引伸ばし技法で製作されたものと推定される。

石器 644 ～ 646 はサヌカイト製の小型石鏃である。平基、凹基式で風化はあまり進行していないが、いずれも埋土中より出土したもので当該住居に伴うかどうかは明確でない。647 はサヌカイト製の石錐である。素材面に打製石庖丁に通有の摩滅痕が認められ、石庖丁転用品と考える。作用部下端はやや湾曲するが、使用痕が認められることから、完成品と評価できる。ただ出土位置が当該住居跡の掘り方外で出土しているので、住居跡に伴うかどうか定かではない。648 はサヌカイト製楔状石核である。周縁に敲打を施す。649 は流紋岩製砥石である。薄く分割した剥片の一部に弱い研磨痕を認める。650 は安山岩製砥石である。方柱状礫の四辺に弱い研磨痕及び敲打痕を留める。図の網掛け部はやや強い研磨により平滑性が強い部分である。651 は砂岩礫の焼石である。一部分が赤黒く変色する。高温被熱の痕跡と考えられる。652 は柱状片刃石斧の体部片である。結晶片岩（緑泥片岩）を素材とする。折損面の再加工は施さない。653 は半深成岩製の磨石である。全体に摩滅があるが、網掛け部は特に強い。表面が赤色化し、当初水銀朱生成用の磨石と考えたが、蛍光 X 線分析の結果水銀成分が見られなかったことから、被熱による赤色化の可能性が高いといえる。(森下)

出土土器に時間幅が看取されるが、主柱穴跡 SP1389 の抜き取りに伴い投棄された 624 の甕から判断して、後期後半古段階に廃絶したものと推定される。(信里・森下)

SH52 (図 111)

遺構 D区南東で検出した竪穴住居跡である。一辺 3.8～3.9m で方形を呈し、支柱穴跡は存在しない。SH51 に隣接し、一部重複するが、先後関係は明確でない。埋土中に焼土を多く含む。

中央に東西方向の攪乱が入り、北側と南側に分断される。654 の土器と 656 の鉄器は南側、655 の紡錘車は北側で出土した。(森下)

土器 654 は小形鉢の底部片で、丸底化の著しい底部をもつことから、弥生時代終末期古段階の所産と見られる。655 の紡錘車は、穿孔は両側から穿たれ、厚み及び内面のケズリ調整から見て、甕胴部片の転用品である可能性が高い。

金属器 656 は板状の鉄片であり、厚さ 3mm 程度とかなり薄く、刃部等の機能部位は施されていない。

(信里)

出土遺物の特徴から、本住居は弥生終末期古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH54 (図 112)

遺構 SH54 は弥生中期末～後期初頭の溝跡 SD86 に近接して営まれた竪穴住居跡である。南北 1.7m 以上、東西 0.9m 以上、深さ 0.2m と小型で、壁溝と思われる溝跡を確認したが、支柱穴跡はない。壁溝状の溝跡は、東側長辺から南側短辺方向に角度を替えるが、細く一部が南に張り出す状況が見られた。住居跡の壁溝ではあまり認められない形状である。

周辺のすべての柱穴跡等に掘り込まれており、出土土器が示すように中期後葉中相頃の遺構と考える。隣接する SD86 は当該遺構に近接する部分の底場が不定形に湾曲しており、当該住居跡の存在と関係しているかも知れない。(森下)

土器 657 は形態や内面にケズリ調整が見られないことから見て、台付鉢の脚部片と考えられる。658 は甕口縁部であり、口縁部形態から弥生中期後半新段階に比定される。659 は壺底部であり、弥生中期後半新段階に帰属するものである。660 は台付鉢の口縁部片である。661 は口縁部が内側に屈曲する高杯であり、657 と同一個体の可能性が高く、他の土器群と同様に弥生中期後半新段階に比定される。(信里)

出土遺物の帰属時期から、本住居は弥生中期後半新段階新相に廃絶したものと推定される。

(森下・信里)

SH55 (図 113・114)

遺構 D区西側で検出した住居跡である。直径 7.95～8.5m の円形に回る溝跡の内側の 8 基の支柱穴跡が回り、その内側に一段掘り窪められた壁溝を伴う円形の遺構がある。さらにその中央部分に中央土坑がある。これらの遺構は中央の円形遺構を中心として同心に分布することから、同一遺構と見て差し支えないが、後期以後の竪穴住居跡とは構造を大きく違える。

詳細を観察すると、最も外側の溝跡は幅 0.65m、深さ 0.3m と住居跡の壁溝としては大き過ぎる。また、溝跡の側縁の立ち上がりは 50～60° の傾斜を有しており、当遺跡では少ないものの、住居周溝の傾斜

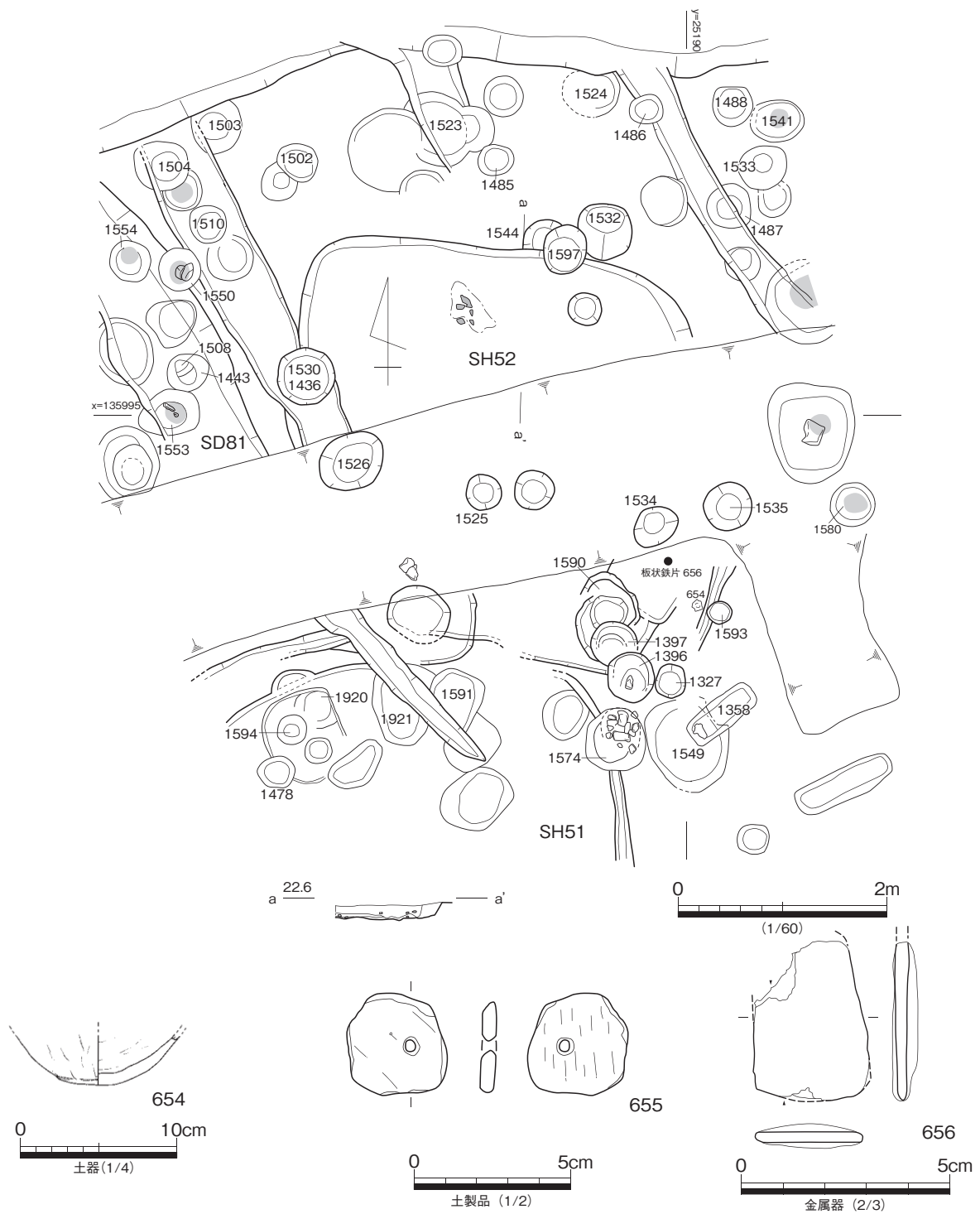


図 111 SH52 平・断面・出土遺物

がもう少し緩やかであることとは異なる。一方で、円形小型の遺構の外周に多角形状に柱穴跡が回るパターンは、今回報告する SH28 や、研修棟調査区の SH09 に共通する点である。研修棟調査区では柱穴跡列外側に周溝が回っていたが、当該住居跡については、周溝とも壁溝とも評価し難い溝跡である。今回報告する SH31 や SH04 等、壁溝からベッド状遺構下部にかけて、貼床を除去して検出できる溝状の遺構が存在するが、そのような住居構築に関わる溝跡の可能性も考えられる。しかし、溝跡断面には中央が窪むレンズ状堆積が存在しており、一定期間開放状態にあった可能性が高いことから、住居外部の施設である可能性が高い。そうすると、主柱穴との間に壁の存在を指摘することも可能であり、平地式

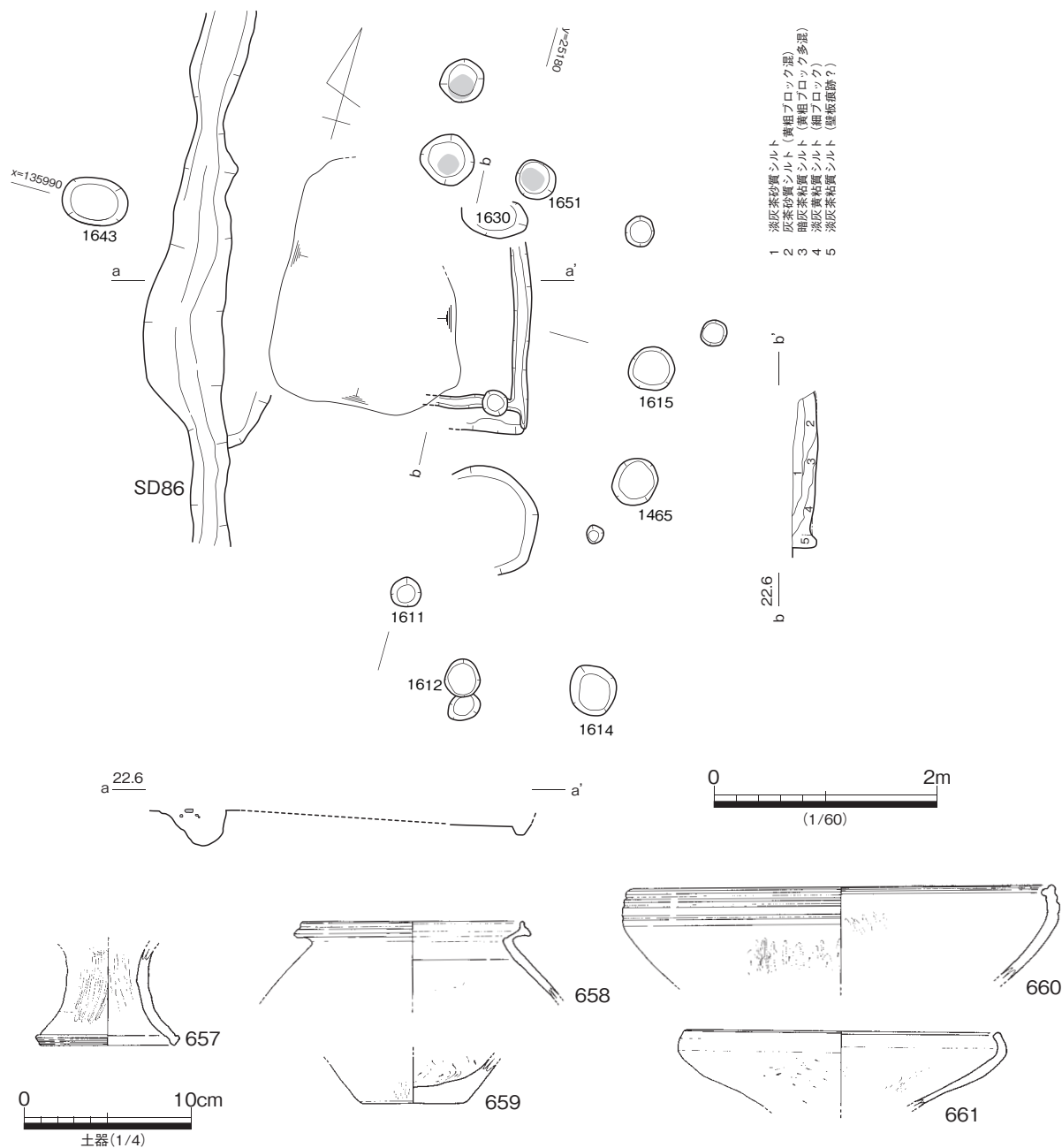


図 112 SH54 平・断面・出土遺物

構造の住居跡となる。しかし、河川 SR02 の埋没直後の低地部に構築された住居とは言え、上部は大きく削平を被っているのは間違いないことから、現段階の検討材料だけでは上部構造を復元するまでには至らない。

なお、支柱穴跡と円形掘り方との間ではガラス小玉や土器片が出土した。ガラス小玉は記録したレベルから見て最終的に検出した床面から 0.2cm 程浮いて出土している。また、住居跡南東部では、外周の溝跡から円形掘り方までの間に、基盤層ブロックが多く混じる土が床面を覆っており、調査当初は SX42 として別遺構と見ていた。遺構の評価は不明だが、その旧 SX42 は円形掘り方の外側に展開する貼床によるベッド状遺構と推定される。

円形掘り方内部では、検出段階で炭化物粒を広く検出した。特に中央土坑南側では炭化物塊がま

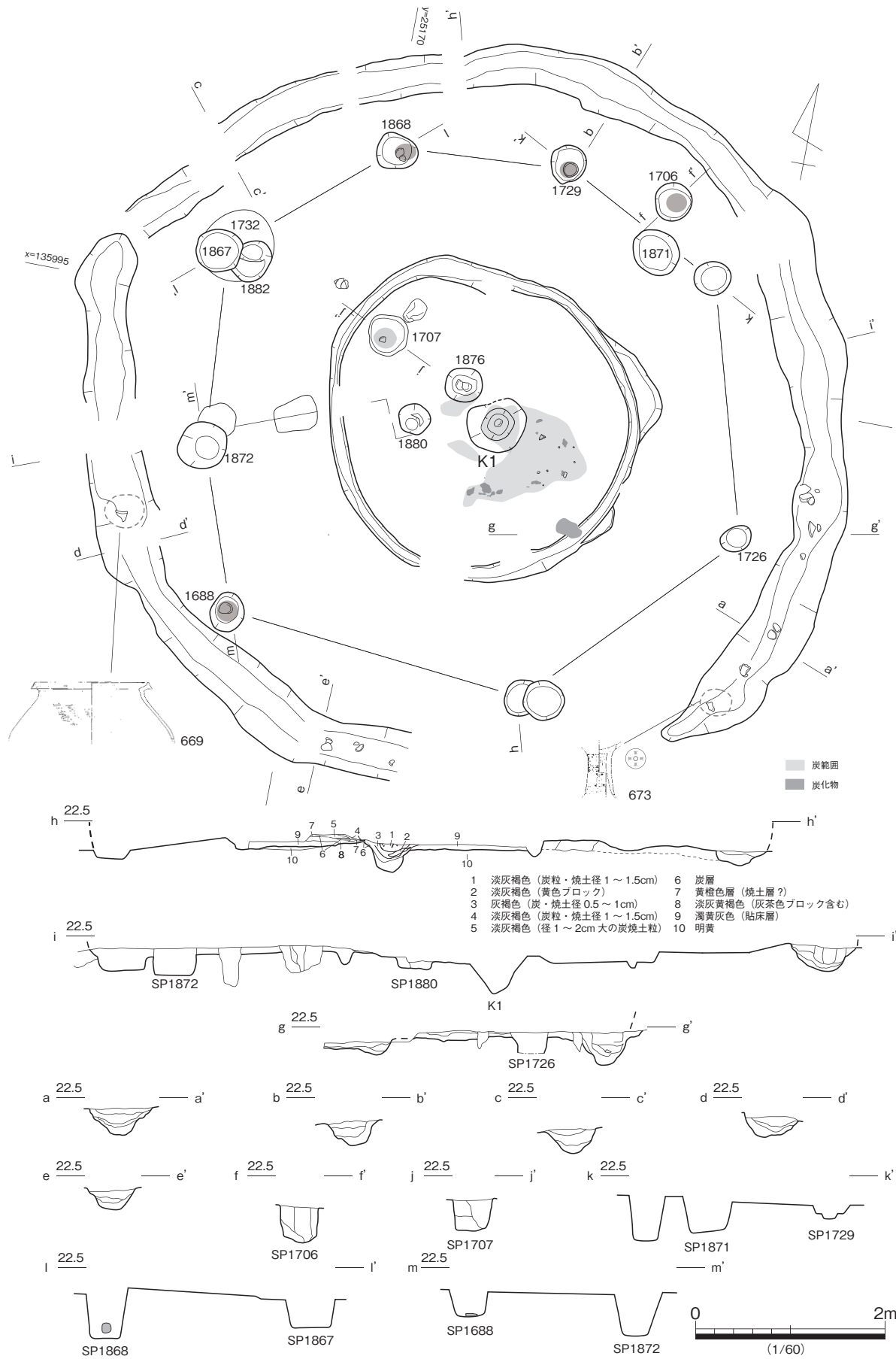


図 113 SH55 平・断面

とまる。外周の溝跡からは 665・666・669・673 の土器が出土した。(森下)

土器 662 の甕口縁は、頸部外面に押捺突帯を施す。口縁部形態から弥生中期後半古段階に比定され、混入品と見られる。663 は長頸壺の頸部片であり、外面の凹線文帯の上部に蓋受用の 2 孔一対の穿孔が見られる。形態から弥生後期前半古段階に位置付けられる。664 は直口壺の口縁部であり、上端面に 1 条の凹線文、頸部に押捺突帯を 1 条施す。凹線文出現期の弥生中期後半古段階に比定される。665 は無頸壺の胴部片で脚台をもつ形式と考えられる。666 は外面に木葉文を描く壺で、弥生前期初頭の混入品であろう。667 の甕口縁は、口縁部にきついヨコナデに伴う 3 条の凹線文が見られ、形態から弥生中期後半中段階に比定される。668 は細いタタキ目が口縁部下まで及ぶ。形態から弥生後期初頭～後期前半古段階の時間幅で捉えられる。669 は中形甕の口縁部片であり、外面の肩部に左上がりの細いタタキ目が見られる。形態から弥生中期末に比定される。670 の中形甕は、口縁部が厚く短い等、弥生後期初頭の属性を備える。671 は口縁部が内傾する高杯口縁部であり、口縁端部が尖り気味で終わる等、弥生後

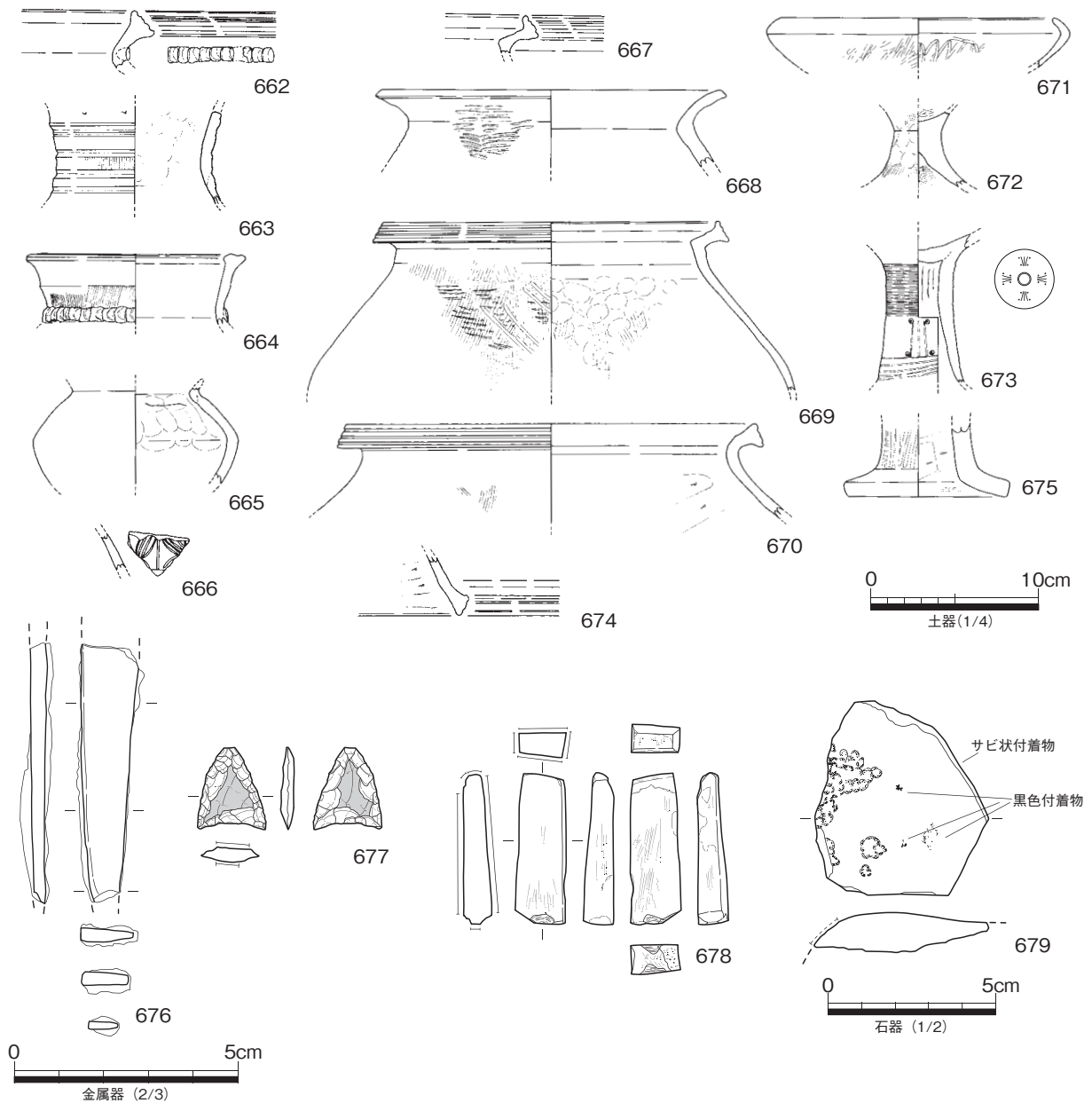


図 114 SH55 出土遺物

期初頭に比定できる。672は低脚の高杯で、時期的に弥生後期後半以降に下る可能性がある。673の高杯脚部であり、沈線状となる横位の多条凹線文帯の間を、縦位の3条のヘラ描き沈線と2個一對の竹管文を充填する。凹線文の特徴から、弥生中期末に位置付けられる。674は高杯脚端部片であり、端部形態から弥生後期初頭に比定される。675は土製支脚または小形器台の脚部片であり、弥生後期前半新段階以降のものと見られる。

金属器 676の鉄器片は側縁部に刃部が観察できる箇所があり、刀子と判断した。(信里)

石器 677は小型の平基式石鏃である。表裏両面に打製石庖丁に通有の摩滅を認める。678は長さ4.5cm、厚さ0.9cm、幅1.5cmの流紋岩砥石である。全面に摩滅痕がある手持ち砥石である。679は砂岩叩石の破片である。側面に敲打痕が目立ち、上面に微細な黒色の付着物を認める。(森下)

出土土器の様相は、弥生中期後半古段階から弥生後期前半新段階の時間幅を示す。この中で時期決定に用いることができるのは、住居周溝から出土した665の無頸壺、669の甕、673の高杯であり、これらはいずれも弥生中期後半新段階に比定されることから、本住居の埋没時期を弥生時代中期後半新段階と捉える。(森下・信里)

SH56 (図 115)

遺構 F区中央西寄りで検出した竪穴住居跡である。南北3.75m、東西3.5m、深さ0.2mを測る。周縁に壁溝が回り、支柱穴跡は2基、中央やや東よりに中央土坑K1がある。K1は長さ0.8m、幅0.55m、深さ0.2mの隅丸方形を呈し、埋土中に2つの炭化物層を検出した。支柱穴跡2基は掘り方の規模が大きく直径0.7m程あり、直径約0.2mの柱痕が残る。壁溝は東西では壁面に接して設けるが、南北は0.2m程のテラスを隔てて設ける。bライン断面では、南のテラス部埋土を掘り込んで壁溝の立ち上がりが見られることから、南側外形ラインは住居構築前に一度掘削した後、壁溝を伴う本来の住居壁面を設置する際に裏込めとして埋めた可能性が考えられる。北側の断面記録はないが、同様と考えられる。

埋土中出土の土器は少なかったが、埋土下層の床面直上で684の鉄片が、住居西壁沿いの上層で685の銅鏃が出土した。

土器 680は壺頸部片であり、頸胴部境に刻目をもつ断面三角形突帯を1条付与する。681は弥生中期中葉の甕口縁であり、混入品である。682は高松平野の香東川下流域産の甕であり、口縁部形態から大久保編年の下川津I式・①段階に比定される。683は半完形品の鉢であり、矮小な平底を留める。深手の形態から弥生後期後半新段階に比定される。

金属器 684はやや厚みのある三日月状の鉄片である。定形器種でないことから、鍛冶関連の遺物である可能性も考えられる。(信里)

銅鏃 685は小型の連鑄式銅鏃である。先端、基部、関の一部を欠損する。遺存部長は2.45cmで、厚さは0.35cm、茎部の幅は0.45cmである。中心に連鑄の心棒痕跡が残り、図の左側縁は短い鱗状の刃部が付属する。図示した左刃縁は刃部から関部まで連続する研ぎが施され、明瞭な関は形成しない。図の右側縁は関部が欠損しており、関形状は不明だが、破損部の厚みから見て、左のような無関形状ではな

く、研ぎによる関を形成した可能性が高い。刃部の研ぎは丁寧に施されるが、刃部の厚みがなく、鏝を形成する程の研ぎは行われていない。 casting時の湯回りが悪く、全体的に薄く鑄上がったものと推定する。
(森下)

出土土器には時間幅が認められるが、残存率が高く、床面から出土した683の鉢の形態から、本住居は、弥生後期後半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH57 (図 116)

遺構 F区中央やや東寄りで検出した住居跡である。平面プランは明確に把握することができなかったが、中央土坑と考えられるK1の周辺で検出した柱穴跡が、5基組み合って主柱穴を構成するものと考え

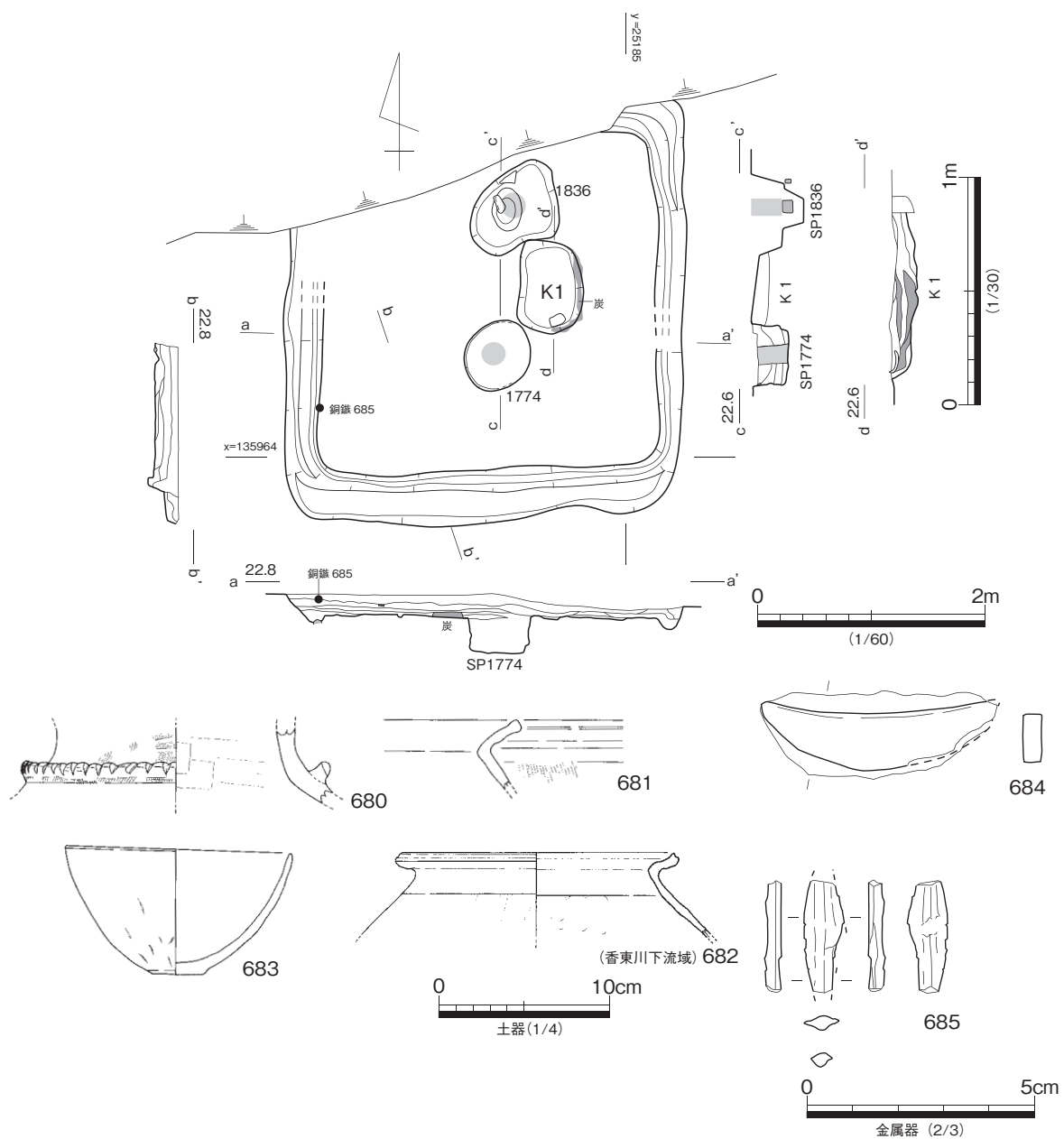


図 115 SH56 平・断面・出土遺物

える。K1は長さ1.1m、幅0.45mの長楕円形土坑である。暗褐色系の埋土中に拳大の礫を多数含む。炭化物は目立たない。K1近辺では、住居床面相当位置で土器689・691が出土した。また、主柱穴跡P1上面で693が出土している。これらの土器が当該住居の廃絶時期を示す。(森下)

土器 686は中形甕の頸部から肩部片であり、やや内傾する頸部を留めることから、弥生後期前半古段階に比定される。687は口縁部が直立気味に開く短頸広口壺であり、弥生中期後半新段階に帰属するものである。688は口縁端部を上方に拡張する甕であり、弥生後期前半新段階に位置付けられる。689は球形の胴部をもつ中形甕の肩部片であり、内面のケズリ調整が頸部付近まで及ぶ。690の甕は、強いヨコナデと跳ね上げ状口縁をもつことから、弥生中期後半古段階の所産と見られる。691の鉢口縁は、尖り気味の口縁端部や内外面の入念なミガキ調整から、台付鉢の可能性が高い。692は弥生中期後半の高杯の小片である。693は高杯脚部片であり、内面に絞目が明瞭に残る。(信里)

石器 695はサヌカイト製打製石庖丁である。横長剥片の打面部を除去し、敲打による背部加工を施し、刃部を表両面から加工して直線的に仕上げる。使用痕は明瞭ではない。(森下)

時期決定に良好と判断できる土器片は693の高杯脚であり、本住居の廃絶時期は弥生後期後半古段階と推定される。(森下・信里)

SH59 (図 117・118)

遺構 F区東側で検出した遺構である。P1～3がほぼ直角に組み、攪乱内に1基を想定すると、南北2.8m、東西2.6mの方形の柱組みが復元できる。その内側で土器片を多量に含む柱穴状の落ち込みSP1929・1930を検出した。これらは上部の埋土を共有し、土器片とともに炭化物粒も含むことから、竪穴住居跡中央土坑に相当するものと考えられる。その土坑の最上部では696の壺が出土し、埋土中層付近まで壺の破片が混在する。さらにその下位については697の甕の破片が多く出土した。

図に示したように、当該主柱穴跡に囲まれた南北2.1m、東西2.5mの範囲では、深さ約0.2mの段状の不定形落ち込みを検出している。しかし、この位置は東から西に向かって流下する弥生前期の旧河道SR01の上層褐色粘質シルト層の堆積範囲北端に相当し、遺構精査を十分に行っていない範囲である。また、出土遺物も後期後半の遺物(697～700)と古墳時代初頭と推定される壺形土器(696)がまとまった位置で出土する等、解釈が難しいデータが多い。

現段階では、主柱穴跡4基からなる竪穴住居跡とその中央土坑があり、その埋没途上の窪みに古墳時代の遺物が混入したものと解釈するのが妥当と考えられる。古墳時代の遺物混入は、その際に中央土坑上部を僅かながら掘り窪めたことにより、土坑埋土中程まで両時代の遺物が混在したと見るのが妥当である。(森下)

出土土器 696は完形の広口壺であり、直線的に大きく開く口縁部内面と肩部外面にヘラ描きによる撥形の線刻が認められる。胎土は雲母片を多く含むもので、球形化した胴部や大きく開く口縁部形態から、古墳初頭に位置付けられる。697は完形に復元される高松平野の香東川下流域産の甕である。形態から大久保編年の下川津Ⅳ式・③段階に比定される。698は尖底気味の底部をもつ小形鉢で、弥生終末期中

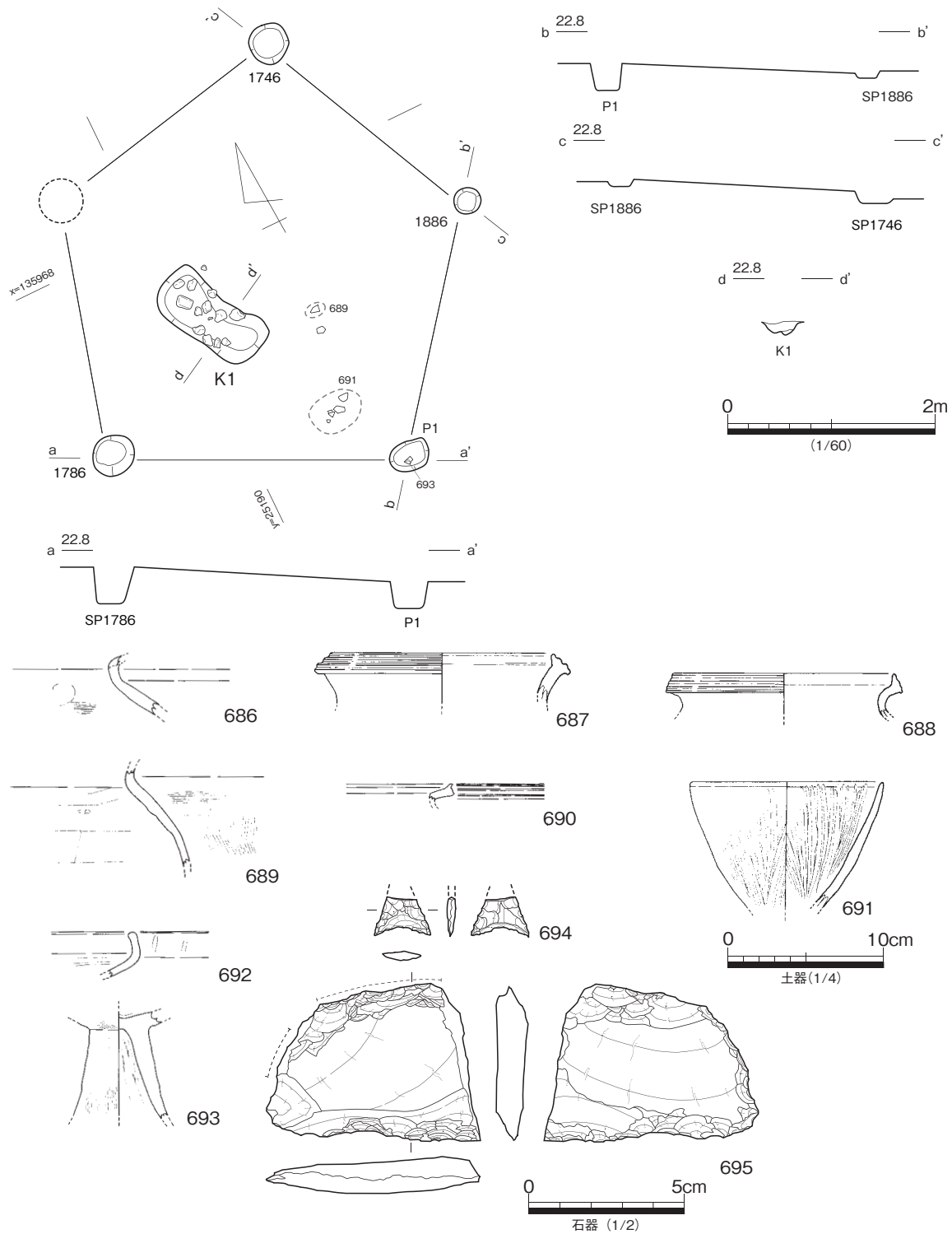


図 116 SH57 平・断面・出土遺物

段階に比定される。699 は口縁端部を面取りする小形鉢。700 は胴部外面に削り調整が多用されることから見て大型鉢の底部片と考えられる。(信里)

石器 床面で砂岩焼石が出土している。表面全体が薄く赤色化し、礫の角付近が黒色化する。被熱による破断を被ったものと推定できる。(森下)

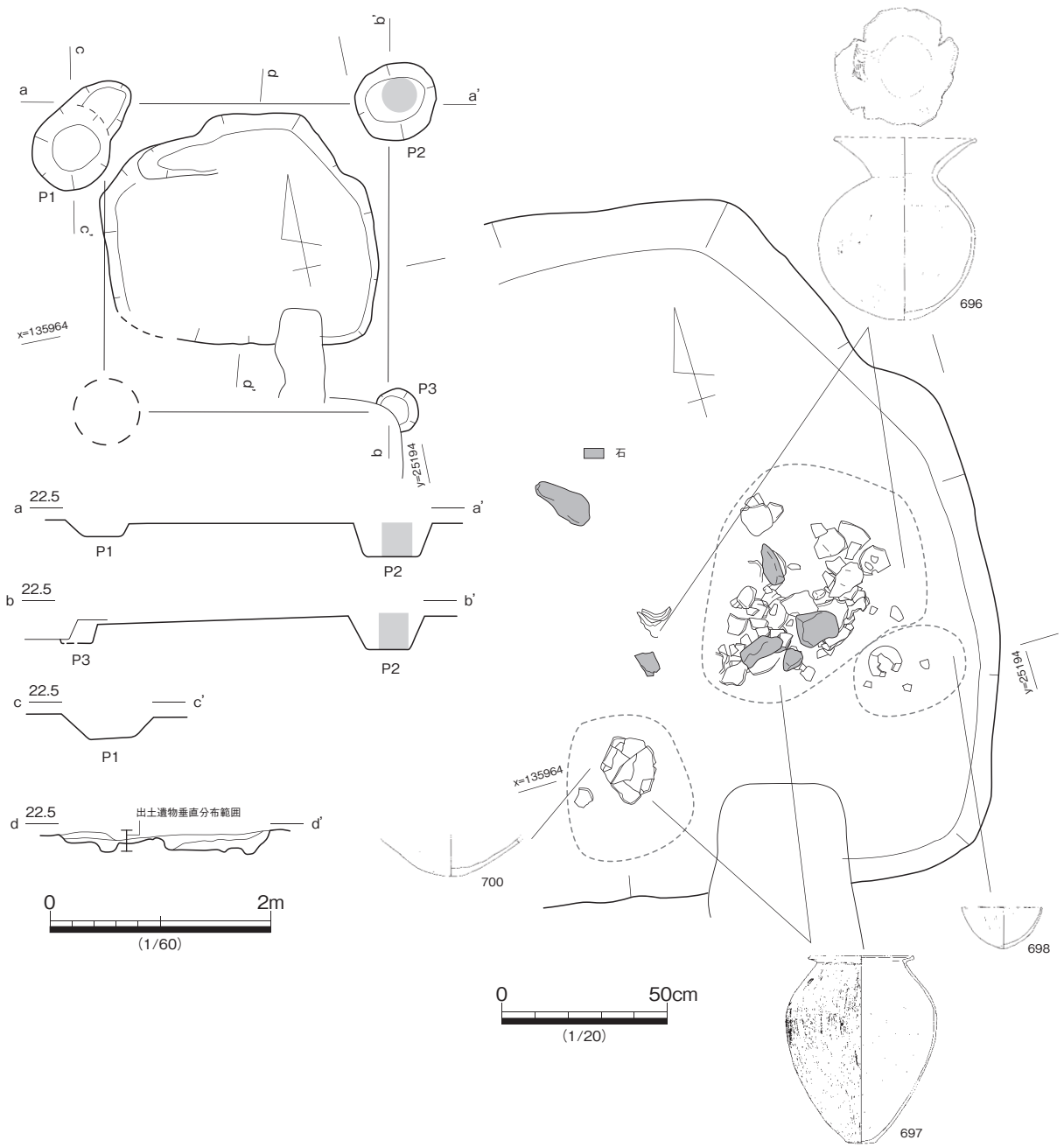


図 117 SH59 平・断面・遺物出土状況

上記のとおり、出土土器には時間幅が認められる。主柱穴内側で固まって出土した土器の内、時期的に最も新しい 696 の年代から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH63 (図 119)

遺構 A 区西側中央付近で検出した住居跡である。6 角形に復元できる柱穴跡と中央土坑 SK11 で構成する。掘り方は検出していないが、SH15 との重複や攪乱等により滅失した可能性がある。SK11 は長軸 1.1m、短軸 0.85m の楕円形を呈し、断面形は逆台形、深さは 0.4m を測る。埋土は基盤土ブロックを

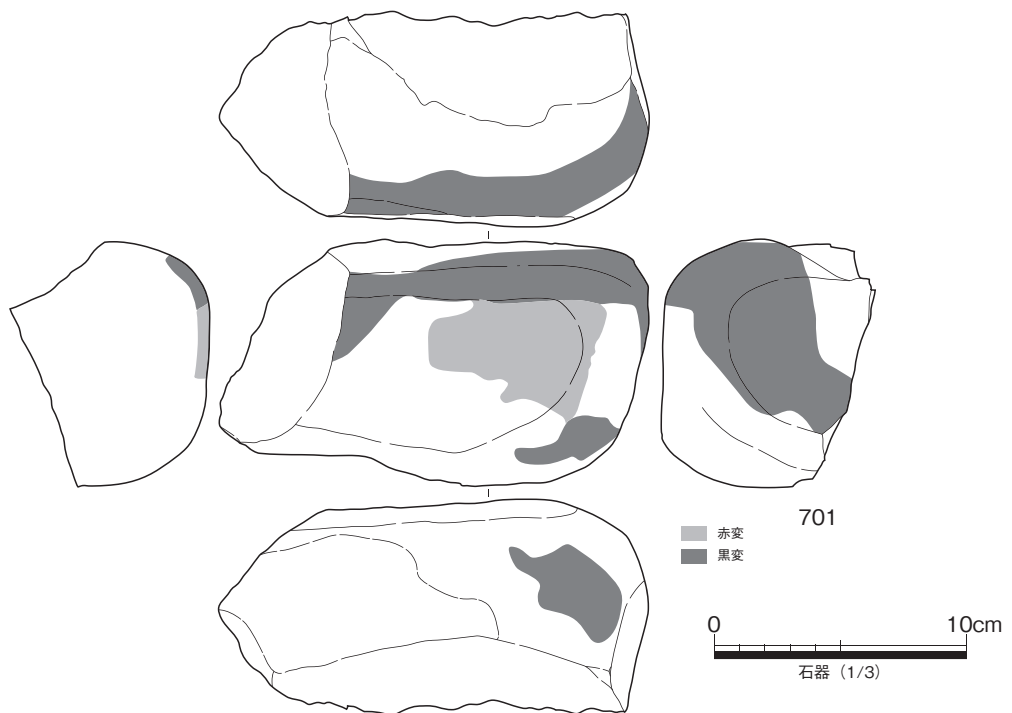
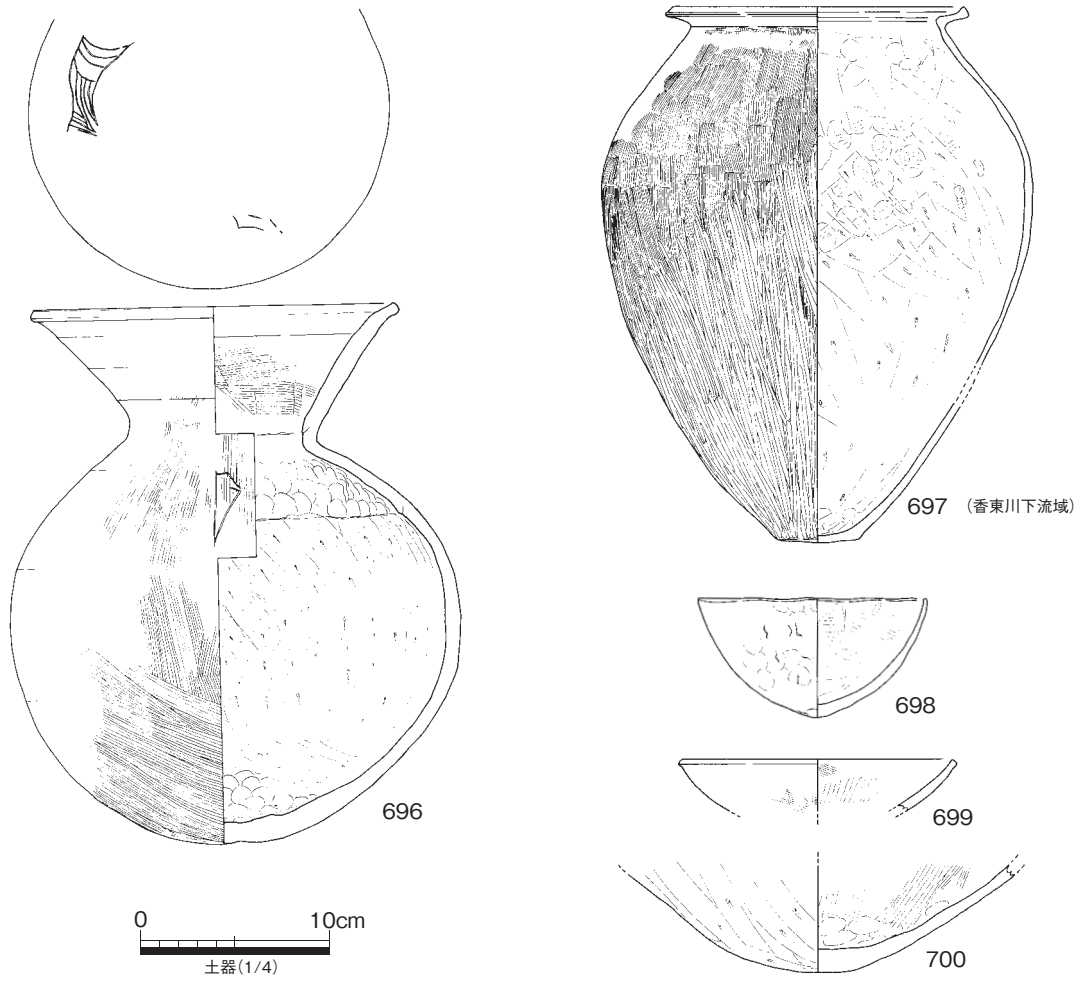


图 118 SH59 出土遺物

多く含む褐色土で、702～706の土器が出土した。また、支柱穴跡 SP413 から707の砥石が出土している。(森下)

土器 702は破片下端部の擬口縁の状況から、大形の装飾高杯の口縁部と見られる。現状で赤色顔料の付着は見られない。703は広口壺の胴部から底部にかけての部位である。704は甕胴部から底部片で、底部形態に弥生後期初頭の属性を良好に留めている。705は高杯脚部片で、杯部との接合に円盤充填を用いていない。706は完形の器台であり、口縁部内外面に波状文と外面に3個一対の円形浮文、脚部中に多条の凹線文帯をもつもので、弥生後期前半中段階の典型例と言える。(信里)

石器 707は黄白色に風化した板状の流紋岩を素材とする砥石である。上面に平滑な砥面、側面はやや粗い砥面を備え、下面は石材を板状に分割した際の素材面を未調整のまま残す。(森下)

中央炉であるSK11から一括して出土した土器から、本住居は弥生後期前半中段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH64 (図 120)

遺構 A区中央やや東寄りで検出した住居跡である。SP251・272・P1がほぼ直角に組み、攪乱内に1基を想定すると、南北2.8m、東西2.7mの方形の柱組みが復元できる。その内側で土器片を含む土坑SX10を検出した。

SX10は長軸1.7m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土上部は基盤土ブロックを含む埋戻土で、その下位に検出面から0.6m掘り下げると出現する砂礫層の細粒を含む層が介在する。さらに最下位には黒色の炭化物が混じる粘土層が薄く堆積する。この堆積の特徴は竪穴住居跡中央土坑に類似することから、SX10は当該住居跡の中央土坑と位置付ける。また、この場所は古代の条里型地割に伴う溝SD01と重複する位置で、住居掘り方はすでに滅失しているものと考えられる。出土土器が示す後期後半～終末期の住居跡はほぼ例外なく竪穴式であることから、当該住居跡も竪穴住居跡であった可能性が高い。708～710の土器は全てSX10から出土している。(森下)

土器 708の甕は赤色粒を多く含む胎土をもち、口縁部が直立気味に外反するもので、弥生終末期新段階の特徴をもつ。709の中形鉢は痕跡的に平底を残し、708と甕と同様に弥生終末期新段階に位置付けられる。710は尖底小形鉢であり、ハケ調整が多用され胎土中に雲母片が多く含まれる。(信里)

出土土器の特徴から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH65 (図 121)

遺構 A区中央やや東寄りで検出した住居跡である。図示したように5基の柱穴跡を検出し、2基の柱穴跡を攪乱内に復元すると、土坑SK20を中心とする六角形の支柱穴列が復元できる。ただし、支柱穴跡とした柱穴跡のうち、SP606やSP610は埋土下部まで調査が及んでいないか、または他に未確認の柱穴跡が存在する可能性もあり、平面プランは不確実である。

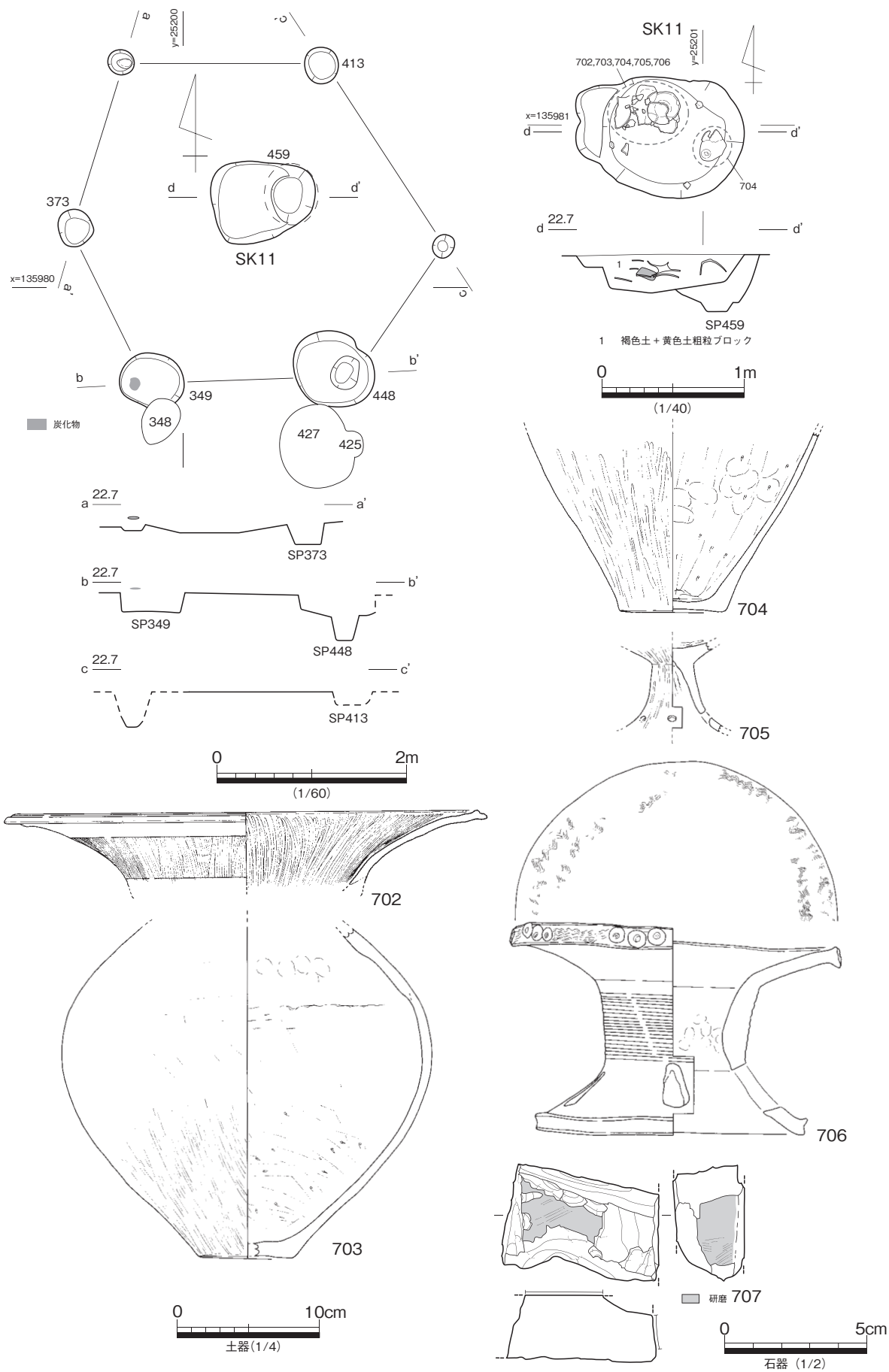


図 119 SH63 平・断面・遺物出土状況・出土遺物

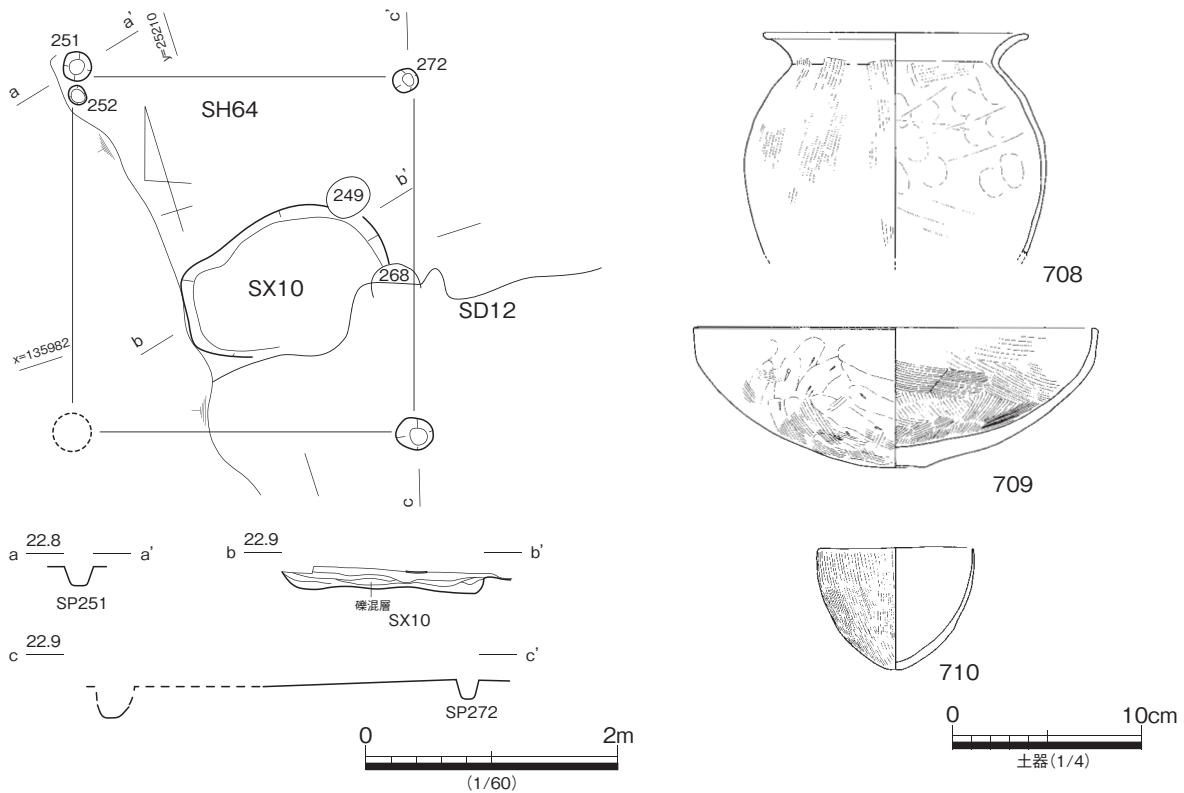


図 120 SH64 平・断面・出土遺物

SK20 は長軸 1.15m、短軸 0.7m の楕円形を呈し、断面形は緩やかな U 字形、深さは 0.3m を測る。埋土は基盤土ブロックを多く含む褐色土で、711～719 の土器が出土した。(森下)

土器 711 の細頸壺は、薄い器壁の扁球形の胴部に緩やかに外反する口縁部をもつ。712 は壺底部片であり、弥生後期初頭の形態を留めるが、外面調整が粗雑化する等後期前半古段階の属性をもつ。713 は弥生中期後半の甕口縁部で、混入品と見られる。714 は甕底部片で、底面と立ち上がりの変化点を強調し、上げ底状に仕上げることから、弥生後期前半古段階から後期前半中段階に比定される。715 は壺底部片である。削り調整による薄い底部や、外底面を磨く特徴は、香東川下流域産土器に類似するが、胎土中は異なっている。

716 は半完形の鉢であり、口縁端部の拡張は行っていないが、底部や胴部の形態から弥生後期前半古段階に位置付けられる。717 の大形鉢は、口縁部外面の凹線文を消失し、丸みをもって短く屈曲する口縁部をもつことから、弥生後期前半新段階に比定される。718・719 は土製支脚の脚部片であり、ナデ調整等調整が粗雑である。(信里)

一括資料である SK20 出土土器の様相から、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH66 (図 122)

遺構 A 区中央やや北寄りで検出した住居跡である。周辺は A 区中央攪乱で大規模に削平を被り、柱穴跡掘り方下部のみを検出している。図示した 4 基の柱穴跡が組み合う柱組みが復元できる。720～723

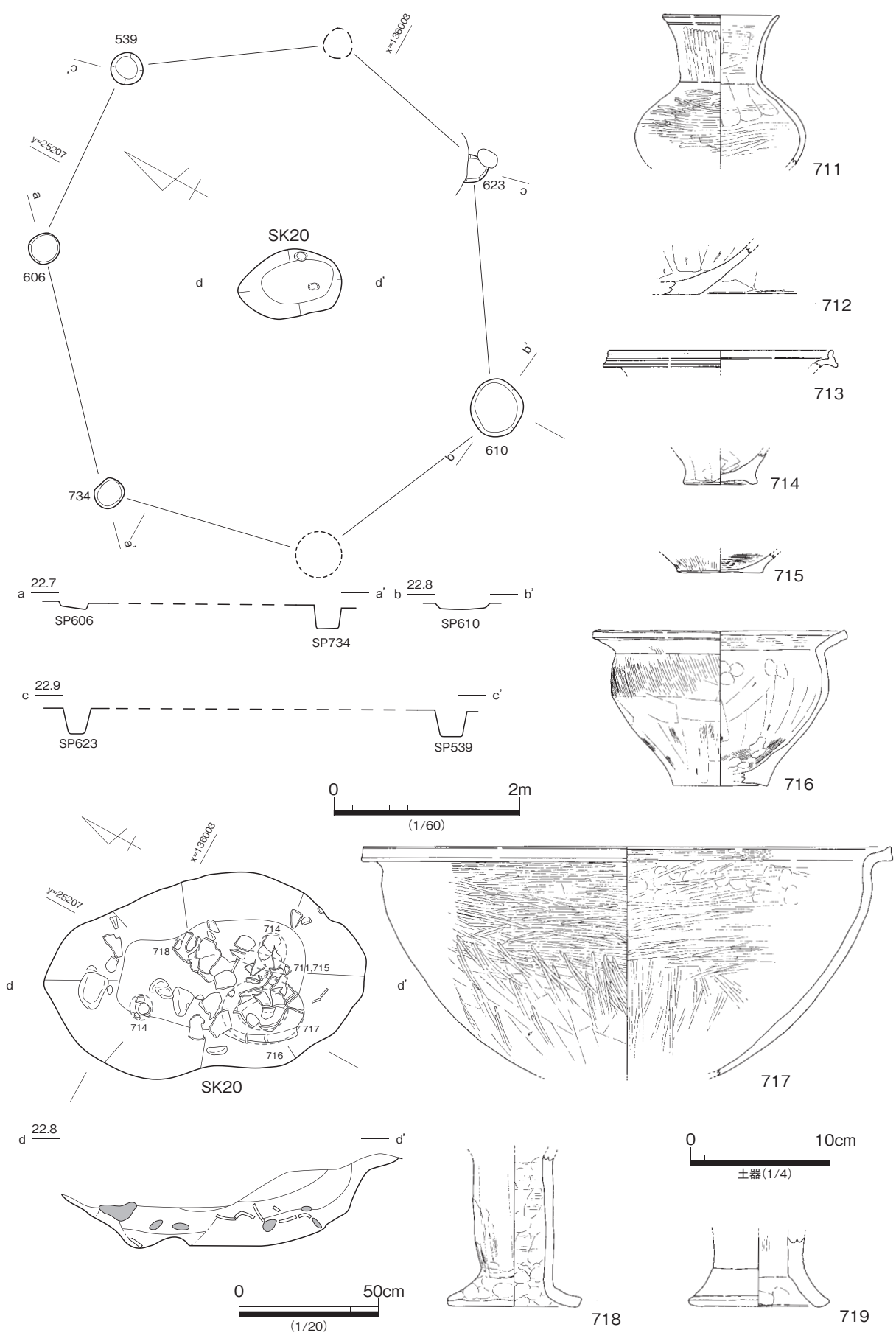


图 121 SH65 平·断面·遺物出土狀況·出土遺物

はいずれも SP217 より出土した土器である。

中央土坑や掘り方も削平されており、支柱穴だけの復元だが、時期的に見て竪穴住居跡である可能性が高い。(森下)

土器 720～723 は全て支柱穴跡である SP217 から出土している。720 は広口壺であり、口縁端部を拡張し、二条の凹線文を施す。形態から弥生後期後半新段階に比定されるが、口縁部形態に古相を留める資料である。721 は口縁部を上方のみ拡張する甕で、弥生後期前半新段階に位置付けられる。722 の甕口縁は、内面のケズリ調整が頸部まで及ぶ。723 は甕底部片であり、弥生後期後半新段階の特徴をもつ。

(信里)

出土遺物の様相から、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと推定する。(森下・信里)

SH67 (図 123)

遺構 D区中央北寄りで検出した住居跡である。図示した5箇所(7基)の柱穴跡が組み、五角形の支柱穴が組み合う。柱穴跡は直径0.45～0.6mで直径約0.2mの柱痕が残る。SP1663・1645と、SP1604・1629は柱の建て替えを行っている可能性があるが、aライン断面を見る限り、柱抜取穴を別柱穴跡と誤認した可能性も残る。埋土は裏込めに黄色系の淡い基盤土ブロック層が使われており、埋土中に弥生時代中期の細い線刻文様をもつ高杯脚部の小片が出土していることから、中期後半後葉～末の住居跡と考える。

なお、この住居跡の位置は中期の河川跡 SR02 の南肩部に近接する。SR02 の中期最終埋没が概ね同

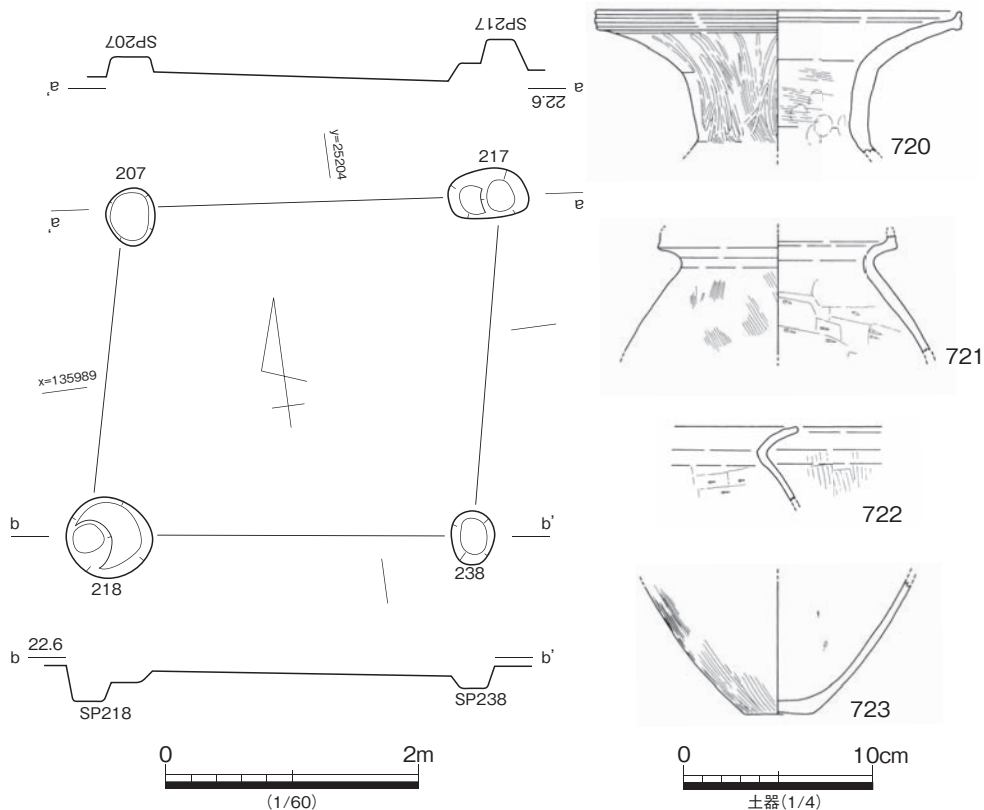


図 122 SH66 平・断面・出土遺物

時期であることから、2.0m 西に位置する SH55 と同様に中期後半後葉～末と考える。また、中期末の溝跡 SD106 と重複しており、溝跡調査後に支柱穴跡 SP1664 を検出したことから、中期末を当該住居跡の下限と見ることができる。さらに掘立柱建物跡 SB17 と重複し、その柱穴に後出する。SB17 は出土土器からみて、中期後半後葉に所属する建物跡である。

石器 サヌカイト製打製石鏃が1点出土した。基部が折損し、器体の左右が不均等な形状を呈すことから、製作途上の未製品と考える。(森下)

SH68 (図 124)

遺構 D区中央北寄り、SH67 と重複して検出した住居跡である。図示した7基の柱穴跡が組み、7角形の支柱穴が組み合う。柱穴跡は直径0.3～0.75mを測る。埋土は裏込めに黄色系の淡い基盤土ブロック層が使われる。図化可能な出土遺物はないが、遺構の重複関係や柱穴跡の配列からみて SH67 同様に、中期後半から末頃の住居跡と考える。(森下)

SH69 (図 125)

遺構 D区北側東寄り、SH67 と重複して検出した住居跡である。図示した5基の柱穴跡が組み、5角形の支柱穴が組み合う。柱穴跡は直径0.3～0.75mを測る。埋土は裏込めに黄色系の淡い基盤土ブロック層が使われる。図化可能な出土遺物はないが、柱穴の配列と住居跡の位置関係からみて SH67・68 同様に、中期後半頃の住居跡と考える。掘立柱建物跡 SB16 と重複し、それに後出する。SB16 は中期後半中相頃に位置付けられることから、当該住居跡は中期後半新相～末頃と推定する。(森下)

SH70 (図 126)

遺構 D区北側東寄り、SH69 や掘立柱建物跡 SB16 と重複する。図示した5基の柱穴跡に加えて、1基の柱穴跡を復元し、6角形の支柱穴が組み合う支柱穴の配置を考える。柱

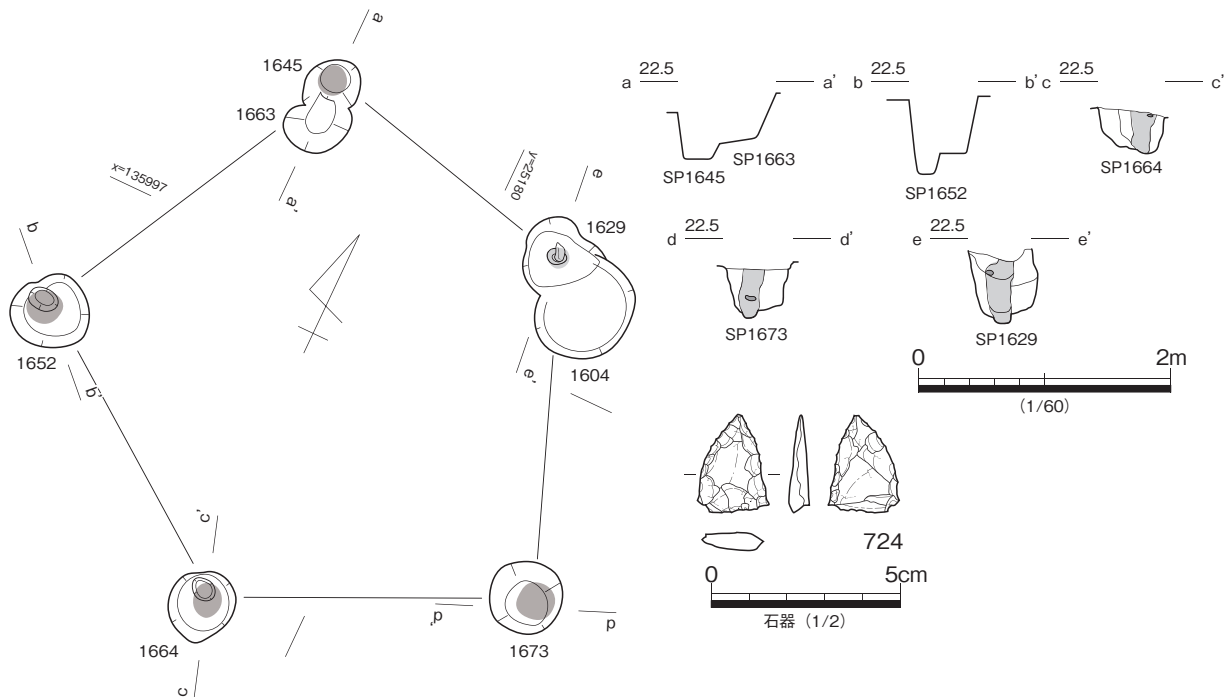


図 123 SH67 平・断面・出土遺物

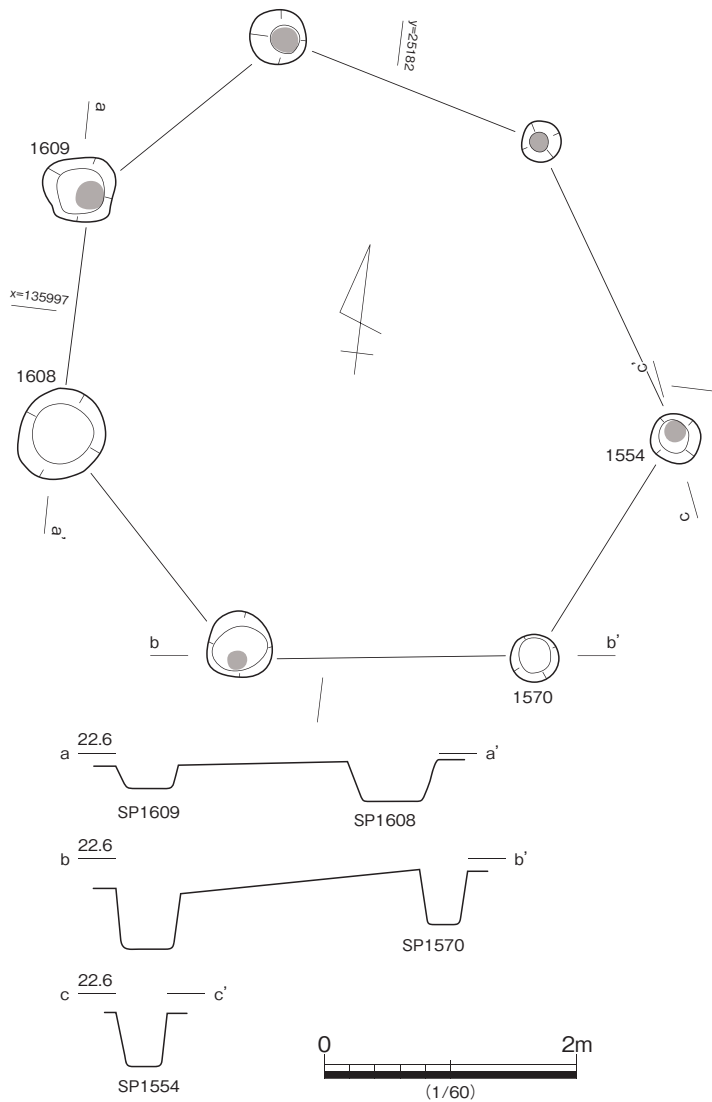


図 124 SH68 平・断面

穴跡は直径0.5～0.8mを測る。埋土は裏込めに黄色系の淡い基盤土ブロック層が使われる。図化可能な土器はないが、柱穴跡の配列と住居跡の位置関係から見てSH67～69同様に、中期後半頃の住居跡と考える。掘立柱建物跡SB16と重複し、それに後出する。SB16は中期後半中相頃に位置付けられることから、当該住居跡は中期後半新相～末頃と推定する。

石器 725は横長剥片の両側縁にノッチを入れ、背部を敲打調整するサヌカイト製打製石庖丁である。表裏面に摩滅痕を留める。特に刃部付近は顕著な摩滅痕が残る。726はサヌカイト製の楔状石核である。図の下縁部中央にノッチ状の加工を施す。(森下)

SH71 (図 127)

遺構 D区西側南寄りで検出した住居跡である。図示した4基の柱穴に加えて、2基の柱穴跡を復元し、6角形の支柱穴跡が組み合う支柱穴の配置を考える。柱穴跡は直径0.25～0.4mを測る。

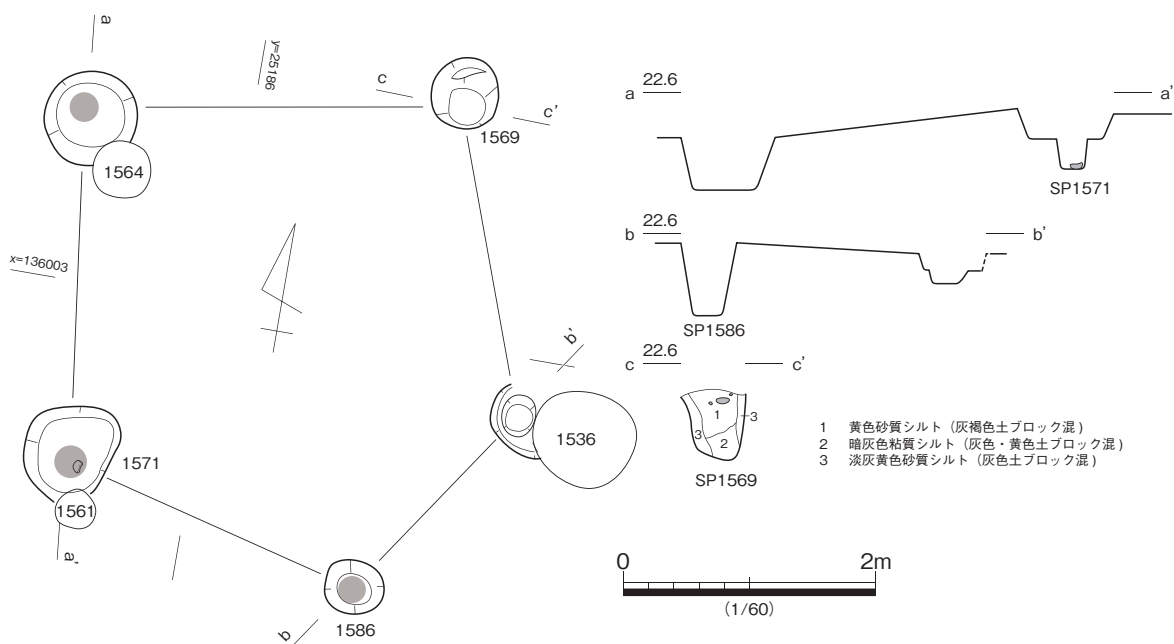


図 125 SH69 平・断面

中央やや南寄りに土坑 SK39 を検出した。SK39 は長軸 0.75m、短軸 0.55m の楕円形土坑で、断面形は逆台形を呈し、深さは 0.2m を測る。

SK39 は底場付近に厚さ 7cm 程の置き土を施した後、炭層（3層下部）を配し、黄白色ブロックを含む灰黒色シルトを介在した上に、大粒の炭化物塊を含む厚めの炭層を配す。その上部は焼土の小粒ブロックを多数含む土で埋没する。また、掘り方南端に幅 9cm でやや淡い色調の灰黒色砂質土が縦方向に介在する。

SK39 検出面で 728・729 の土器が出土し、3層以下の埋没層より 727 の土器、730 の分銅型土製品、731 の針状鉄製品が出土した。

土坑堆積の状況は SH51 の鍛冶遺構に類似する点が多く、鉄片も出土していることから、鍛冶作業を行っていた可能性が考えられる。埋土を水洗選別し、微細な磁着鉄片を調べたが、明らかな鉄片はこれ以外に出土していない。(森下)

土器 727 は弥生中期後半中段階の広口壺の口縁部である。728 は弥生後期初頭の大形甕の口縁部である。727・728 は混入品と見られる。729 は大形鉢の口縁部であり、形態から弥生後期前半新段階の所産と考えられる。730 は分銅型土製品である。表面に櫛描文と櫛描文原体による列点文により、顔表現を行い、上端面からの刺突を行う。施文や法量から見て、弥生中期後半中段階の 727 の広口壺に伴うものと考えられる。

金属器 731 は針状の鉄片であり、下端部が短く屈曲する。機能面の推定は困難であるが、弥生時代の鍛冶遺構から出土する小鉄片に類例がある。(信里)

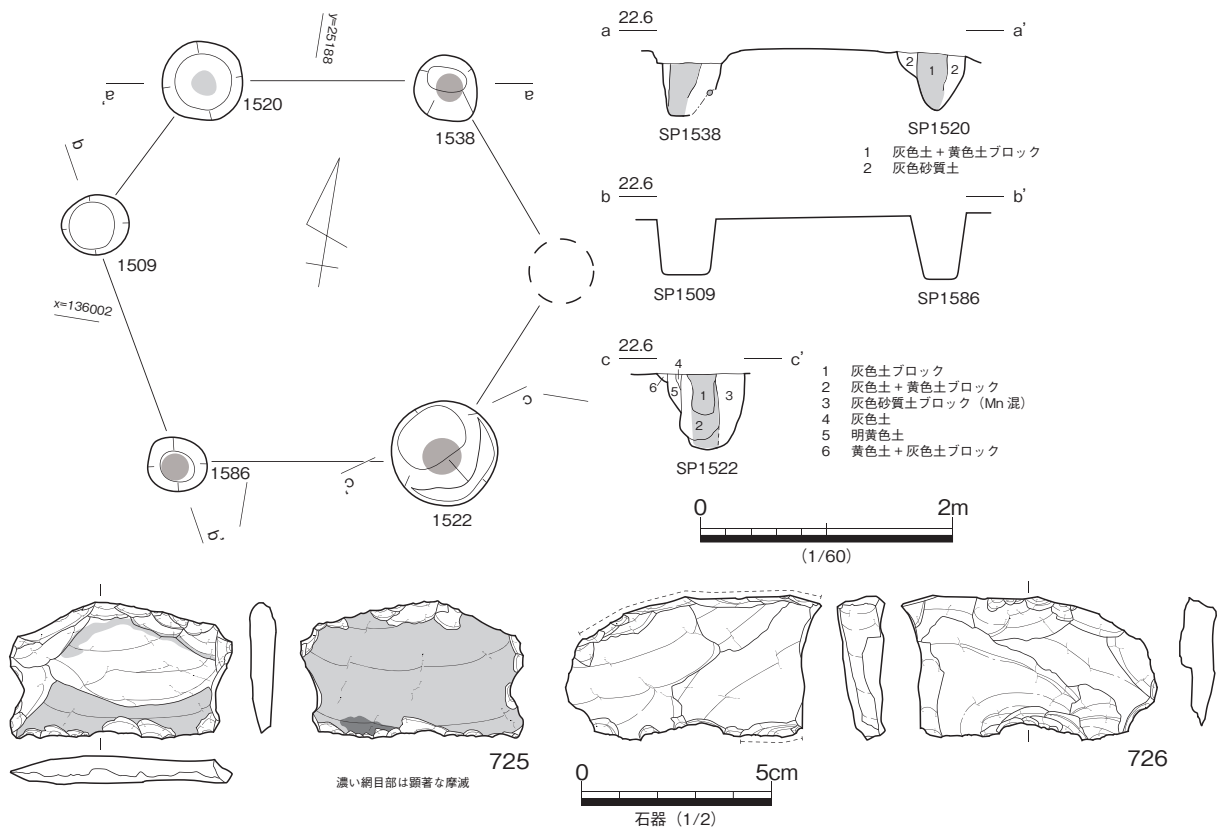


図 126 SH70 平・断面・出土遺物

出土土器にかなり時間幅が見られるが、729の大形鉢の年代から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH72 (図 128)

遺構 F区で検出した住居跡である。図示した4基の柱穴跡が直角に組み、主柱穴跡が方形に組み合わせる。柱穴跡は直径0.35～0.7mを測り、直径0.25mの柱痕を認める。住居跡南の細い溝跡SD121は主柱穴跡SP1781とSP1819を連結する。ベッド状遺構下段部の土留板設置溝と推定し、当該住居跡が竪穴住居跡であったことを示す。

SP1819の柱裏込め土より、732の銅鏃が出土した。その他に時期を示す土器は出土しなかった。

金属器 732は連鑄式銅鏃の茎部破片である。連鑄式に伴う油道の痕跡と見られる隆起が明瞭に残り、

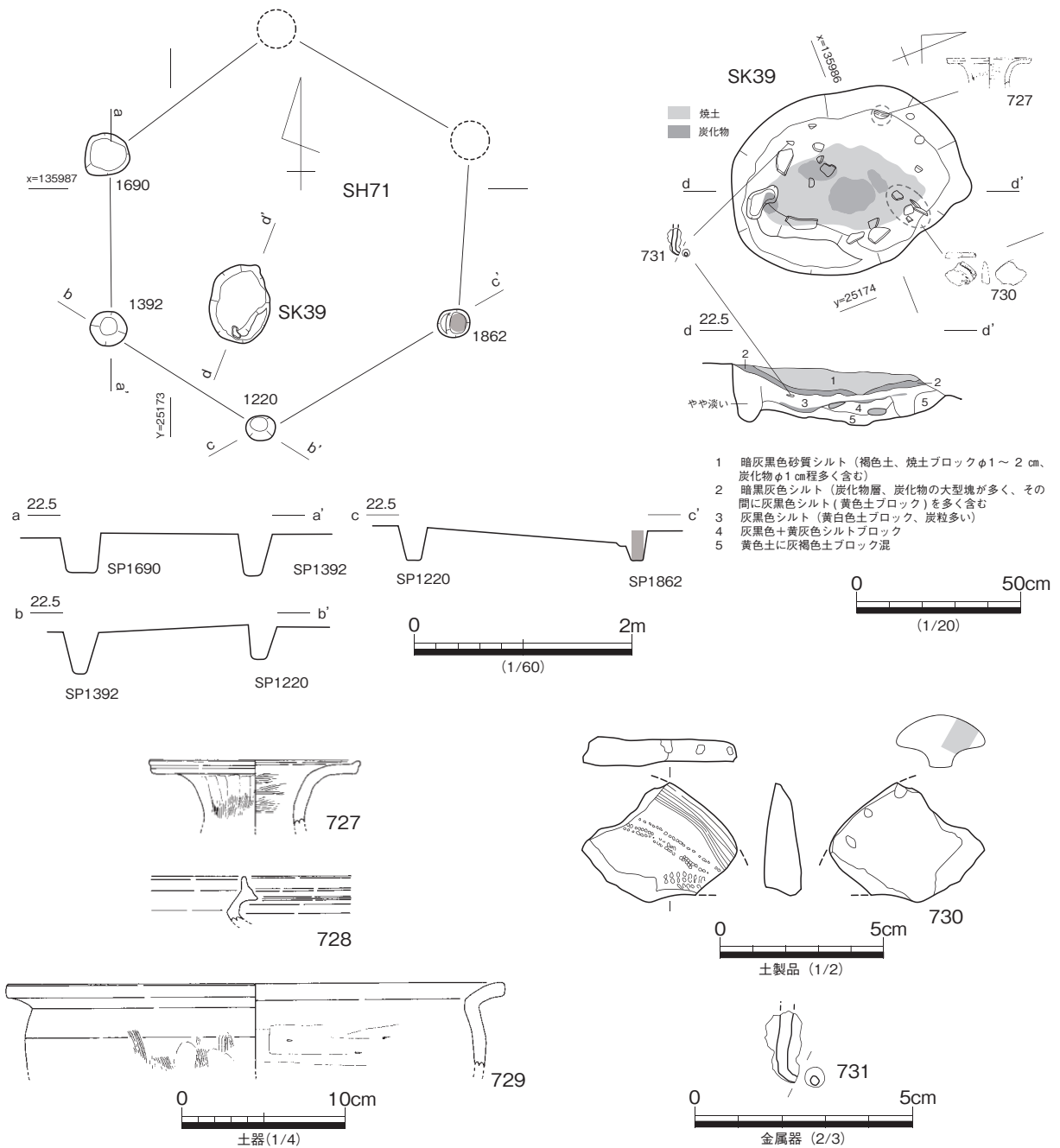


図 127 SH71 平・断面・遺物出土状況・出土遺物

左右側面にバリ状の貼り出しが残る。その一部に微細なノッチが入る。関部に向かって上端はやや開き気味となるが、関部は遺存しないので、関部形態は不明である。(森下)

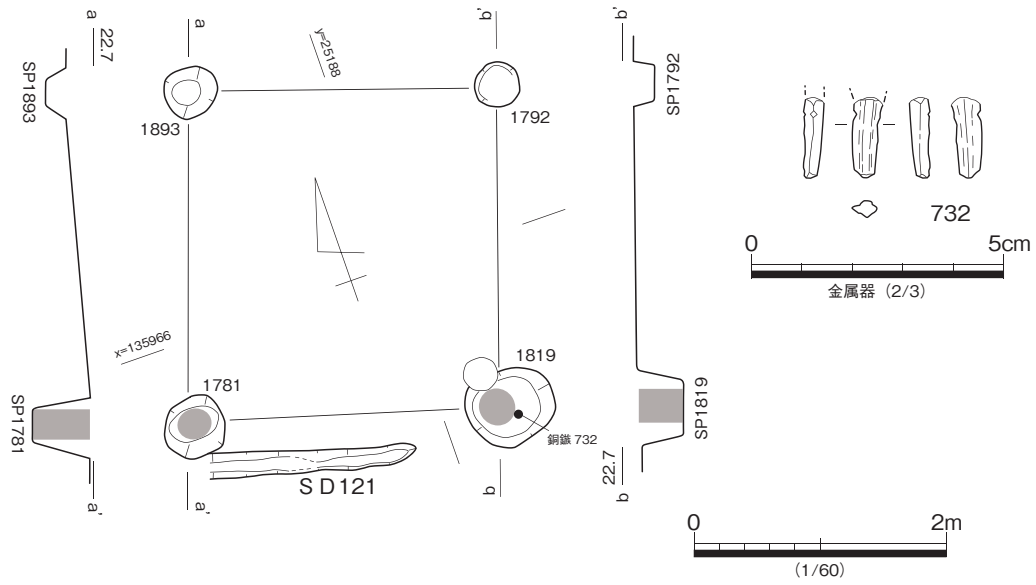


図 128 SH72 平・断面・出土遺物

遺構名	梁間	桁行	梁間長	桁行長	床面積	柱穴形状	時期	備考
SB03	1	3	2.9	5.1	14.8	隅丸方形	中期後半古段階	埋土に焼土多く含む
SB04	1	3	3	7.2	21.6	隅丸方形	中期後半中段階	埋土に焼土多く含む
SB05	-	-	-	-	-	隅丸方形?	中期後半新段階(古相)	
SB06	1	3	2.6	5.9	15.4	円形	中期後半古段階	埋土に焼土多く含む
SB07	1	2	2.8	3.2	9	隅丸方形	中期後半中段階	
SB08	1	3	2.5	6.3	15.8	隅丸方形	中期後半新段階(新相)	
SB09	1	3	2.9	6.7	19.5	隅丸方形	中期後半新段階(古相)	
SB10	1	7	2.5	12.1	30.3	隅丸方形	中期後半古段階	管玉出土・埋土に焼土多く含む
SB11	1	2	2.8	4.2	11.8	隅丸方形	中期後半中段階	
SB12	1	3	3	8.4	25.2	隅丸方形・楕円形	中期後半古段階	
SB13	1	3	2.8	5.5	15.4	隅丸方形	中期後半古段階	
SB14	1	3	3.4	7.2	24.5	隅丸方形	中期後半古段階	
SB15	1	2	2.8	4.9	13.8	隅丸方形・楕円形	中期後半中段階	
SB16	1	3	2.7	7.6	20.6	隅丸方形・円形	中期後半新段階(新相)	
SB17	1	2	2.5	3.7	9.3	隅丸方形	中期後半古段階	
SB18	1	2	2.5	4.2	10.5	円形	中期後半古段階	
SB19	1	2	2.7	4.5	12.2	円形	後期前半中段階	東側に延伸する可能性が高い
SB20	1	2	2.9	4.4	12.8	円形・楕円形	後期前半古段階	
SB21	1	1	3.5	4.9	17.2	隅丸方形	中期後半新段階(古相)	
SB22	1	2	2.3	4.85	11.2	隅丸方形・円形	中期後半中段階	
SB23	1	2	2.4	1.9	4.6	楕円形	後期前半新段階	南東側に延伸する可能性が高い
SB24	1	1	3.55	2.7	9.6	隅丸方形	中期後半新段階(古相)	
SB25	1	2	3	5.6	16.8	隅丸方形	中期後半中段階	
SB26	1	2	3.1	5.2	16.2	隅丸方形	中期後半中段階	
SB27	1	3	2.55	6.1	15.6	円形	後期前半新段階	
SB28	1	3	2.8	4.2	11.8	隅丸方形	中期後半新段階(古相)	

表 12 掘立柱建物跡一覧

SB03 (図 129)

遺構 A区東北で検出した弥生時代の掘立柱建物跡である。平成8年度調査区のIV区SK04と繋り、梁間1間、桁行3間の構造をもつ。竪穴住居跡SH02・04と重複しており、当該遺構が最も古い。

492.78gの焼土が出土している。8点程の平坦面を留めた焼土塊で、厚みは約3.9cm、淡黄橙色を呈し、やや焼け具合が弱い。焼土塊部分を抽出した重量は488.70gを量る。平坦面の反対側は、焼け具合がさらに弱い灰白色系焼土を認める。その面は凹凸があるが、付着土壌との境が明瞭であり、被熱後ブロック状に分裂した後に、柱穴に投棄されたものと推定する。付着土壌を含めて取り上げていたが、観察の結果、土壌を取り外して重量等の計量を行っている。(森下)

土器 733の甕は、口縁端部が強いヨコナデによって跳ね上げ状となり、外面に1条の凹線文をもつことから、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に位置付けられる。734・735は甕底部片である。いずれも細身で底部の厚みが薄いもので、弥生中期後半古段階の特徴をもつ。(信里)

出土遺物の様相より、本建物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定しておく。(森下・信里)

SB04 (図 130～132)

遺構 A区西中央で検出した弥生時代の掘立柱建物跡である。梁間1間、桁行3間の構造をもつ。竪穴住居跡SH17・貯蔵穴跡SK14と重複し、当該遺構が最も古い。柱穴掘り方は隅丸方形を基調とし、や

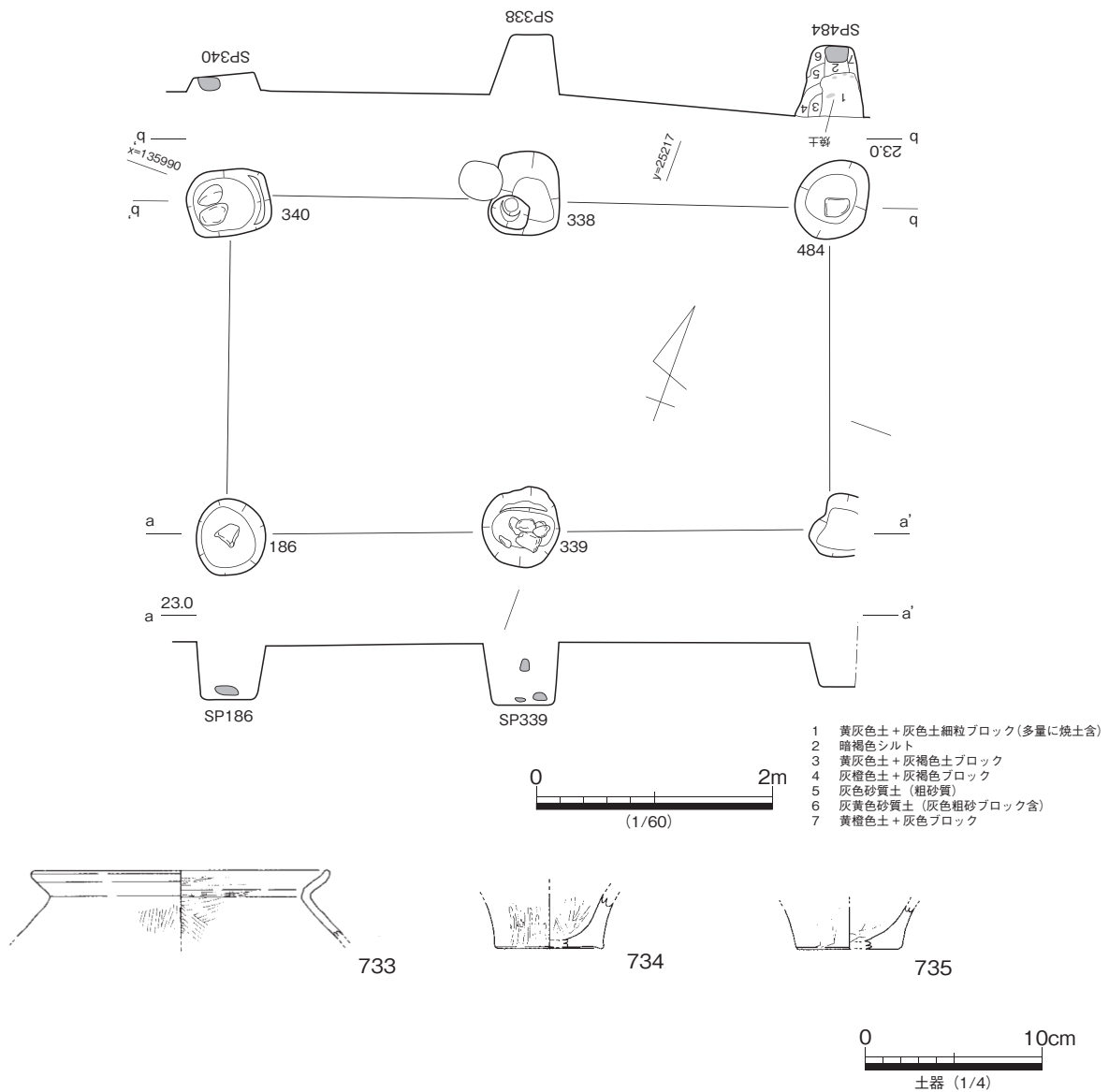


図 129 SB03 平・断面・出土遺物

や桁方向に長い平面形を呈す。深さは0.2～0.85mで、どの柱穴跡にも約直径0.3mの柱痕を確認した。柱痕上部は柱抜き取りの際の掘り方を残すものがある。また、柱痕内から焼土塊や土器片が多く出土した。このうち、焼土塊にはレンガ状に面をもつものが認められる。同様の焼土塊は、約0.5m北に隣接する不整形土坑SX23からも多数出土した。このことから、SX23とSB04は互いに関連する遺構である可能性が高い。

柱穴跡断面を詳細に観察すると、掘り方の埋土は基盤層の黄灰色シルトに、褐色あるいは灰色土の細かなブロックを含むやや粘質の土層で、基盤層と極めて類似する。一方、柱痕は茶褐色系粘質シルトで、一見して基盤層と異なる埋土である。その柱痕の外縁に幅5～9cmの範囲に灰色系粘質土(褐色土の細かなブロック混じる)が取り巻く。これは、調査時に柱材の外縁が早期に腐食し、上部から流入土が堆積したものと推定した。しかし、柱痕部との層境が明瞭で、柱材の腐食とする程漸次な変化ではない。古代の建物跡に散見する柱材の根元に粘土を巻きつけ、腐食防止や安定強化を図ったものと考えられることもできる。

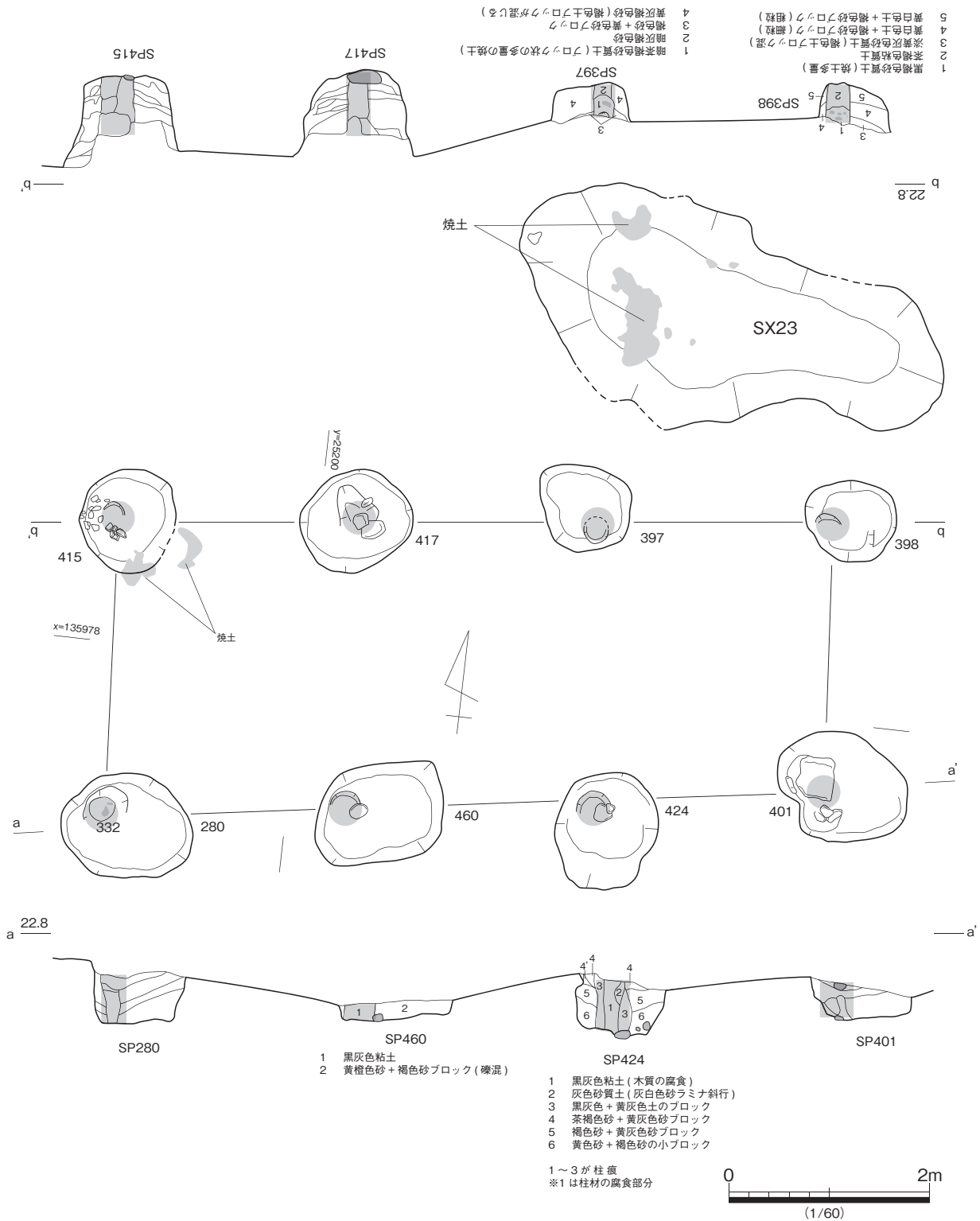


図 130 SB04 平・断面

SP332では、断面図に示したように、土器や焼土が柱痕のかなり下位まで落ち込んでいた。比較的大きな土器片やブロック状の焼土が含まれる。

焼土はこの柱穴跡から合計 2584.42g が出土した。平坦面を留めた焼土塊が多く、淡黄橙色を呈し、やや焼け具合が弱い。平坦面の反対側は、色調が暗灰色及び暗褐色に漸次変化し、焼け具合がさらに弱く、

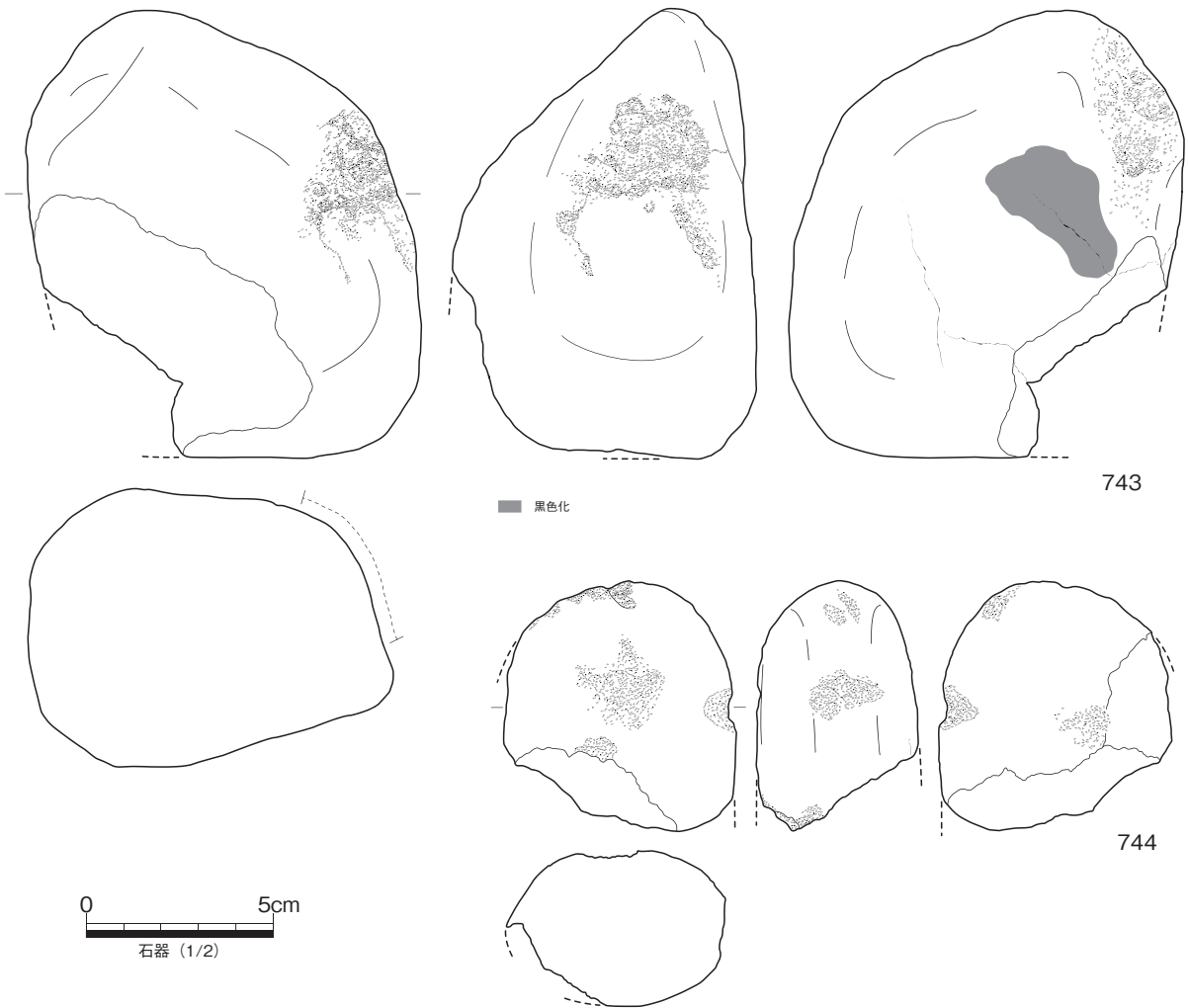
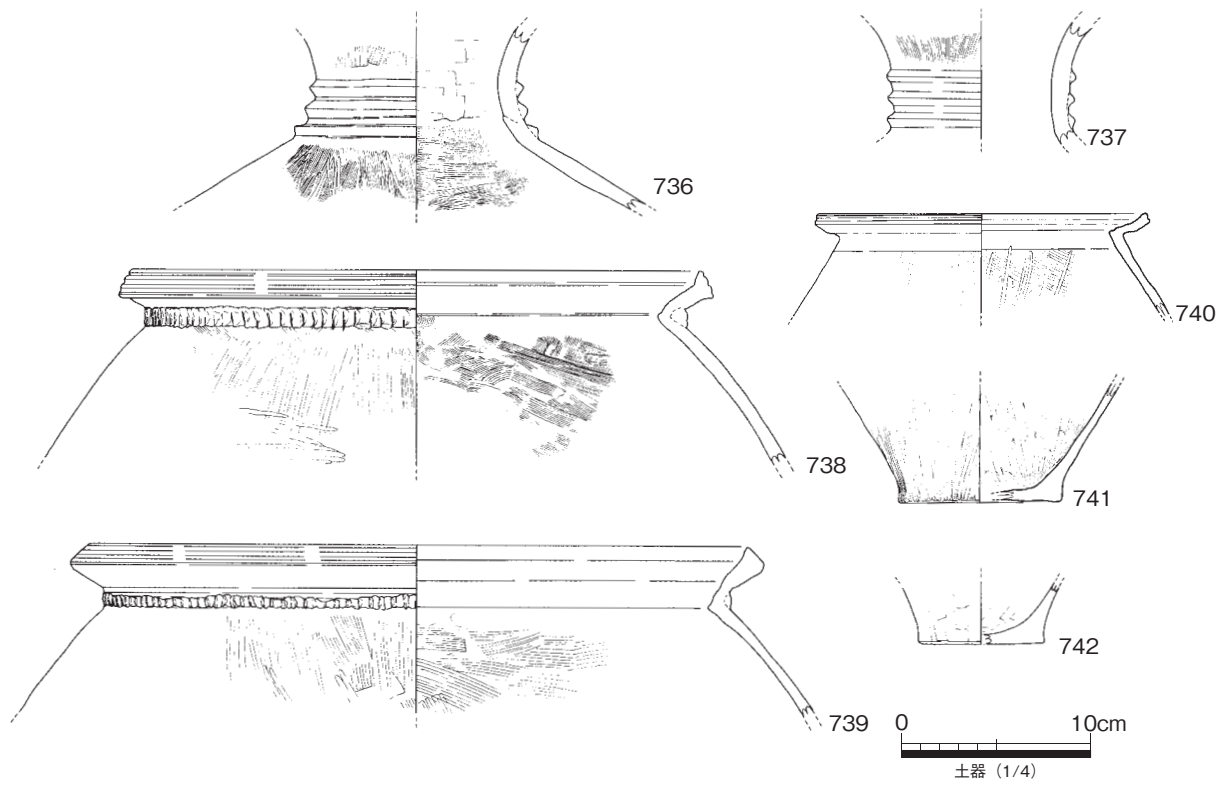


图 131 SB04 出土遺物 (1)

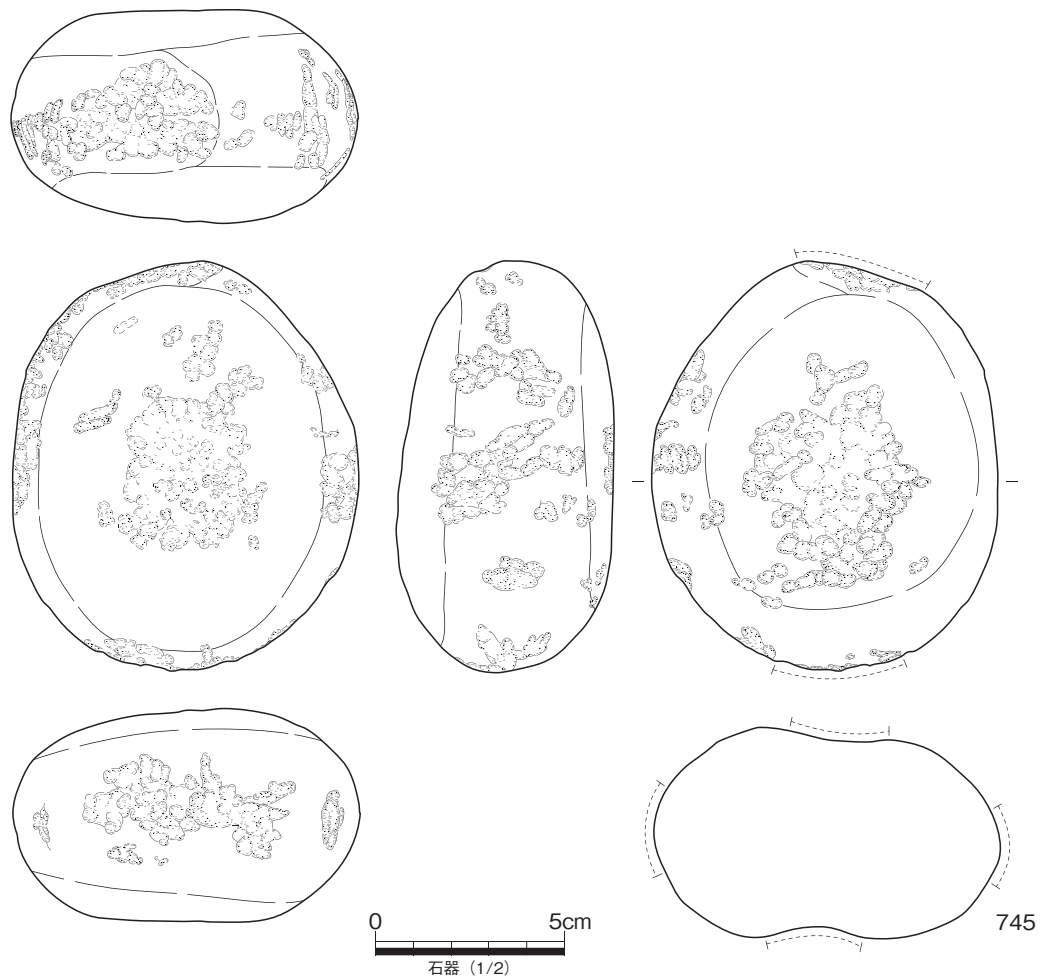


図 132 SBO4 出土遺物 (2)

さらに漸次被熱していない土壤に変化する状況が認められる。淡黄橙色を呈す部分の厚みは1～3cmで、暗褐色を呈しつつ一応被熱している部分までの厚みは3～7cmである。

焼土塊の一部（焼土183）中には3cm角程の土器片が含まれる。口縁部が如意状を呈し、口縁端部に細かな単位で刻目を施す弥生前期前半の甕である。なお、金属物質は含まれていない。出土遺物736・741はSP397、737・738・745はSP415、740・739・743・744はSP332、742はSP424から出土した。また、738の甕はSP415とSP417から出土した破片が接合した。（森下）

土器 736・737は広口壺の頸部片であり、頸部外面に三角形突帯を貼り付ける。738・739の大形甕は、頸部に押捺突帯を施すもので、739が若干古相を示すが、弥生中期後半中段階に位置付けられる。740は甕口縁部であり、上方に短く拡張する口縁端部外面に1条の凹線文を施す。弥生中期後半古段階に比定される。741・742は甕底部片である。741は内面のケズリ調整後にミガキ調整を施すもので、弥生中期後半古段階から中段階の幅で捉えられる。（信里）

石器 砂岩製叩石3点が出土している。いずれも側縁を中心として敲打痕を認める。744の敲打痕は線状に強く窪む敲打痕で、サヌカイト製石器の両極打撃に用いられる工具である。また、743は器面の一

部が被熱により黒色化する。(森下)

出土遺物に若干の時間幅が見られるが、出土土器の多くは柱材抜き取りに伴い投棄されたものであることから、本建物を弥生中期後半中段階に廃絶したものと推定しておく。(森下・信里)

SB05 (図 133)

遺構 A区南東隅で検出した掘立柱建物跡である。中期の柱穴跡に特有の基盤土類似の黄色系シルト層で埋められた柱穴跡が並んで検出されたため、掘立柱建物跡として復元した。柱間は1.5mで、SP464は平面方形を呈す。SP465は楕円形として調査したが、元来方形であった可能性が高い。それぞれの柱穴跡より土器小片が出土した。出土土器の746はSP465、747はSP464から出土している。(森下)

土器 746は甕口縁部片で、曲線を描いて外反する形態をもち、口縁端部を上方に拡張する。747は内側に屈曲する口縁部をもつ高杯小片である。口縁端部は面取りされており、弥生中期後半新段階の特徴を有する。(信里)

出土遺物は少量ながら、746・747の特徴から、本建物は弥生中期後半新段階古相に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB06 (図 134)

遺構 A区中央北側で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間、桁行3間の構造をもつ。A区中央攪乱土除去後に検出しており、遺構の上部は大幅な削平を被る。それでも最大深さ0.5mの柱穴跡を確認しているの、かなり深い柱穴跡を備えた掘立柱建物跡である。柱穴跡埋土は黄色土と暗灰色土が細かくブロック状に混じる土で、SP195断面のように柱痕相当部でも褐色は強くならない。柱穴跡平面形はSP196のように若干不定形となる長方形が基調で、SP802やP1やSP802は柱抜きを行うことで、上部の平面形状が乱れる。

出土遺物は少なく、SPを冠した遺構番号が付く柱穴跡から土器片が出土しており、Pを冠する遺構番号の柱穴跡は全く土器片が出土しなかった。

その他、柱穴跡から合計102.79gの4点の焼土塊が出土した。いずれも淡黄橙色を

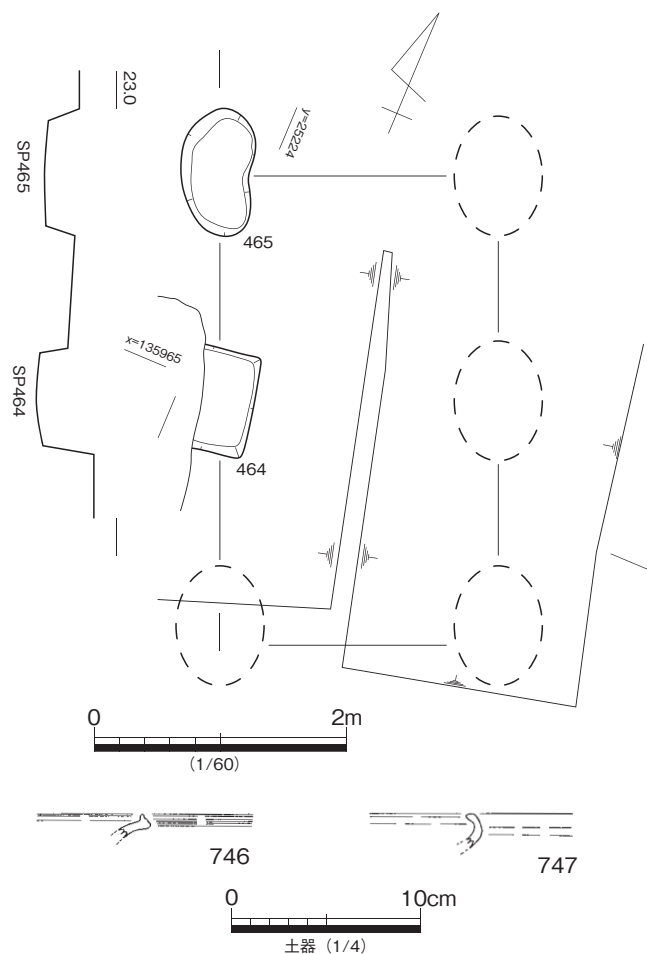


図 133 SB05 平・断面・出土遺物

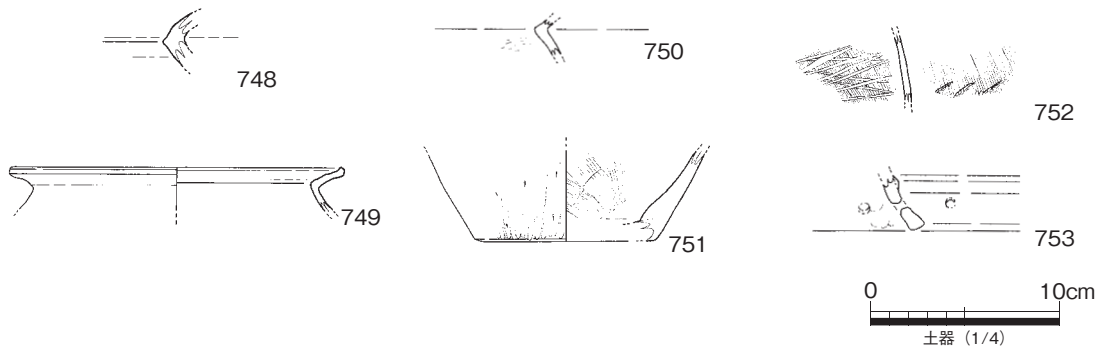
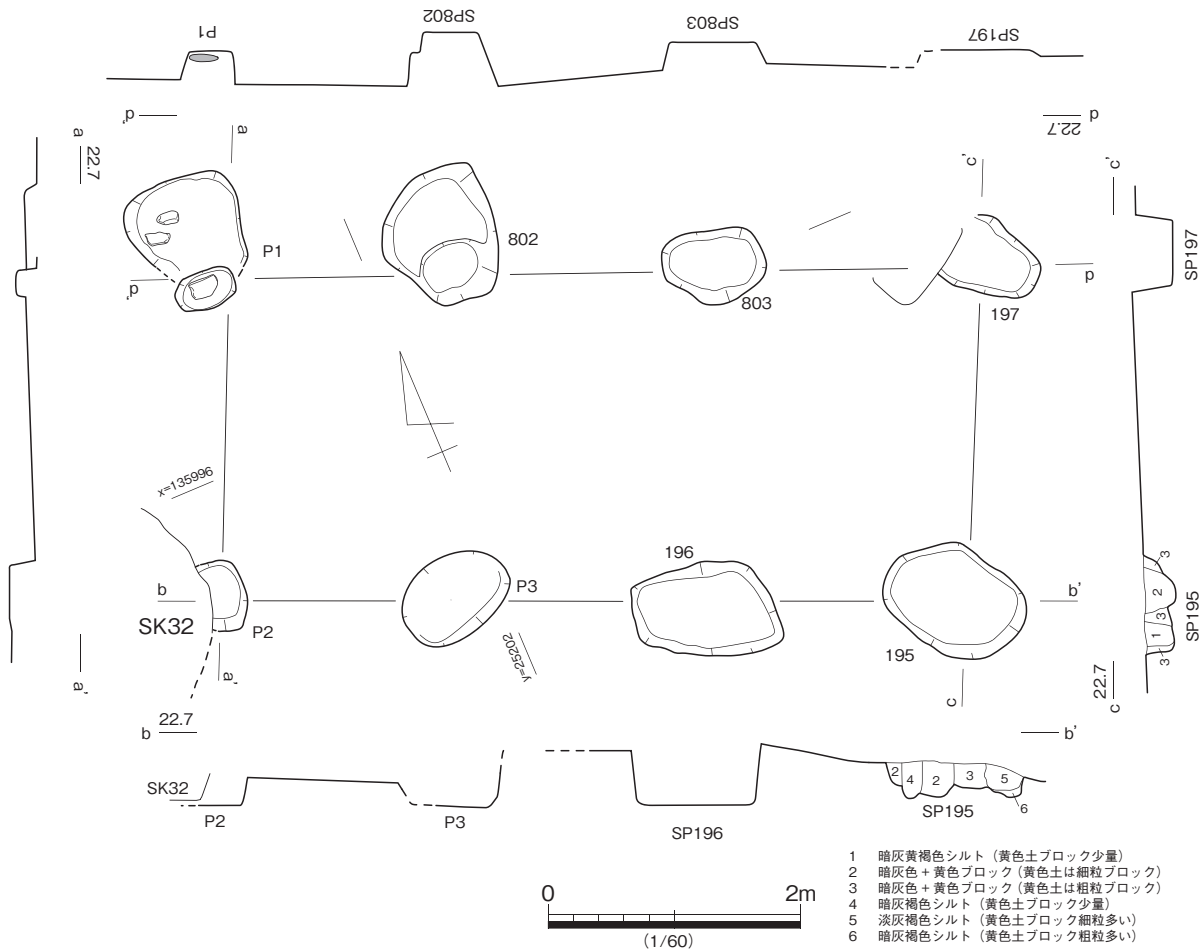


図 134 SB06 平・断面・出土遺物

呈し、焼き具合が強い。やや湾曲する板状の焼土で、最も大きいもので7cm × 4.5cm、厚さ2cmを測る。内外面とも面をもち、内側の面は木材等の有機物に押し付けられたような痕跡を認める。内外面とも焼き具合の差は認められない。竪穴住居跡出土の焼土と比べ、焼き締まり、比重が重い印象をもつ。出土土器は、748がSP195、749・751・752はSP802、750・753がSP196から出土している。(森下)

土器 748は大形甕の頸部片である。内面にミガキ調整が確認できる。749は中形甕の口縁部である。750は中形甕の頸部片である。751は壺底部片である。752は中形甕の胴部片であり、外面にハケ状工

具による列点文、内面は削り調整をミガキ締める。753はジョッキ形鉢の脚台片と見られ、蓋受用の穿孔が見られる。(信里)

出土土器の様相から、本建物は凹線文出現直前の弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定される。

(森下・信里)

SB07 (図 135・136)

遺構 B区南東で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間、桁行2間の構造をもつ。複数の掘立柱建物跡等が重複する一角で、SB08・09・10・22、SH28と重複する。柱穴跡の重複はSP627がSH28の掘り方及び柱穴跡に掘り込まれ、SP579はSB10の柱穴跡を、SP541はSB09の柱穴跡を掘り込む。したがって、当該掘立柱建物跡はSB09・10より新しく、SH28より古い。

柱穴跡の規模は検出面では不整形円形を呈すが、SP556・541・579のように掘り方下部では長方形となる。柱穴跡の最大規模は直径1.3m、深さは0.9m、柱痕は約0.4mを測る。柱間距離は梁間で2.8m、桁行で3.2mを測る。

各柱穴より土器小片が多数出土した。詳細な出土遺構については、挿図中に記入した。(森下)

土器 754は広口壺の口縁部片で、外面に3条の凹線文と内面に2個一対の円形浮文を施す。755は厚手の口縁端部をもつ広口壺で、内面にヘラ描きによる斜格子文を描く。756は広口壺口縁部片で、外面に2条の凹線文、内面に櫛描による斜格子文を描く。757は垂下気味の口縁部をもつ広口壺の小片で、口縁部内外面に櫛描による斜格子文を描く。758は強いヨコナデ調整と外面に3条の凹線文をもつ広口壺の口縁部片である。759は大形甕の口縁部であり、外面に2条の凹線文をもつ。760は頸部に押捺突帯を施す大形壺の頸部片である。761は頸部に押捺突帯を施す中形壺の頸部から肩部の小片である。762は口縁部外面にハケ状工具による列点文、頸部に押捺突帯を施す中形甕の小片であり、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に比定される。763・764は受口状の口縁部をもつ直口壺で、口縁部下に1条の凹線文と貼り付け突帯を施すもので、凹線文出現期の所産と見られる。765は直口壺の口縁部で、端部に刻目を施す。766は無頸壺の口縁部であり、外面の貼り付け突帯上面に刻目を施す。767は壺胴部片である。外面の櫛描直線文間に現存で1帯の波状文帯を施す。768～772は壺底部片である。774は頸部に押捺突帯を施す甕であり、口縁部形態に凹線文出現期の特徴を留める。775～779は中・小形甕の口縁部である。775は跳ね上げ状の口縁部形態に凹線文出現期の属性をもつ。780は口縁部外面にハケ状工具による刻目、頸部に押捺突帯を施す。782・783は弥生前期の底部片であり、混入品と見られる。784は壺底部片である。785は脚台様の甕底部であり、弥生中期後半中段階の特徴をもつ。786・787は台付鉢の口縁部片である。788は台付鉢の脚部片である。789は高杯脚部片で、外面に化粧土かベンガラ等の赤色顔料が認められる。(信里)

出土遺物は、弥生中期前半新段階から中期後半中段階までの時間幅をもつ。古相を示す遺物は裏込土に流入したものと解釈し、本建物は弥生中期後半中段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

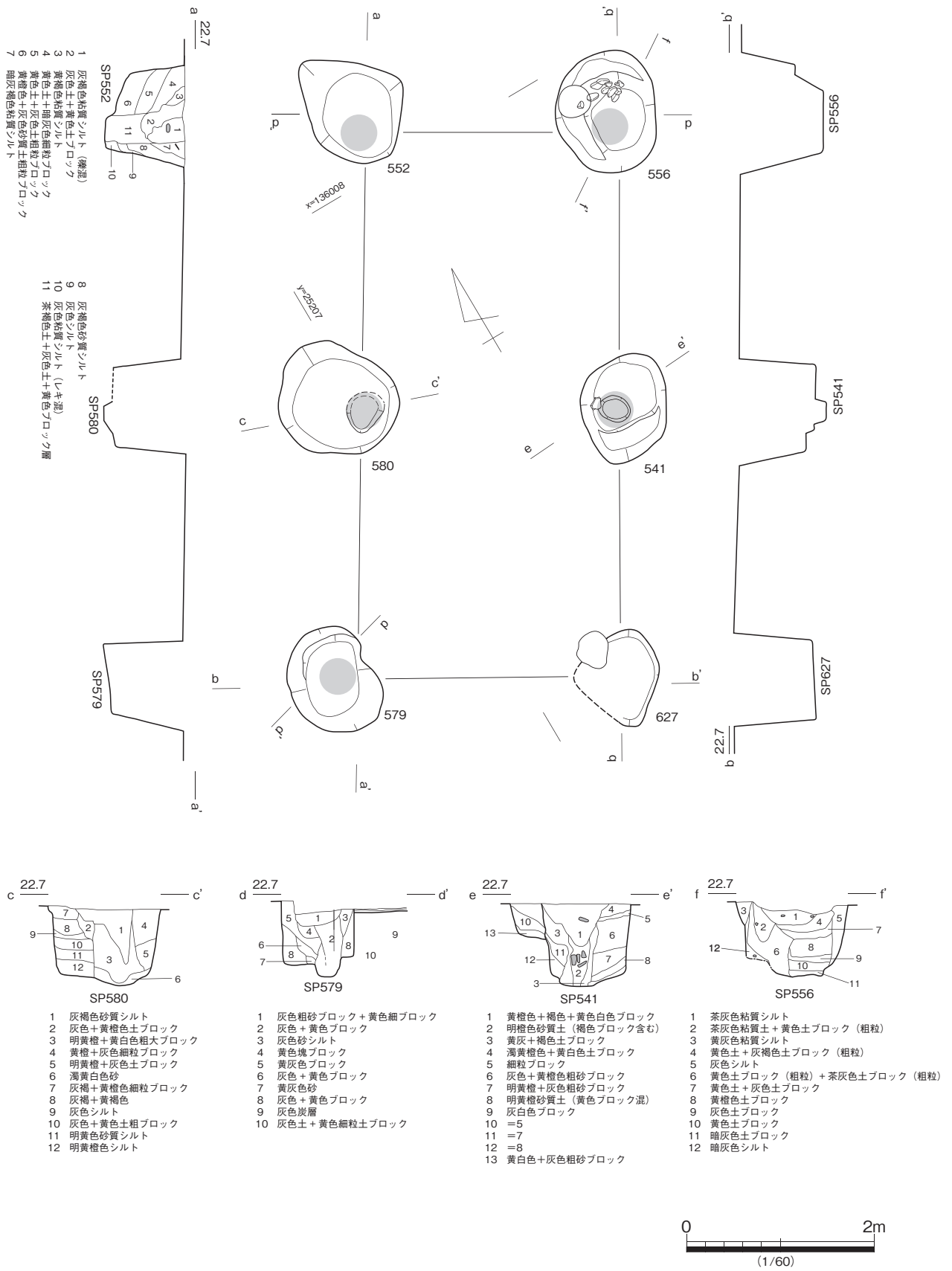


図 135 SB07 平・断面

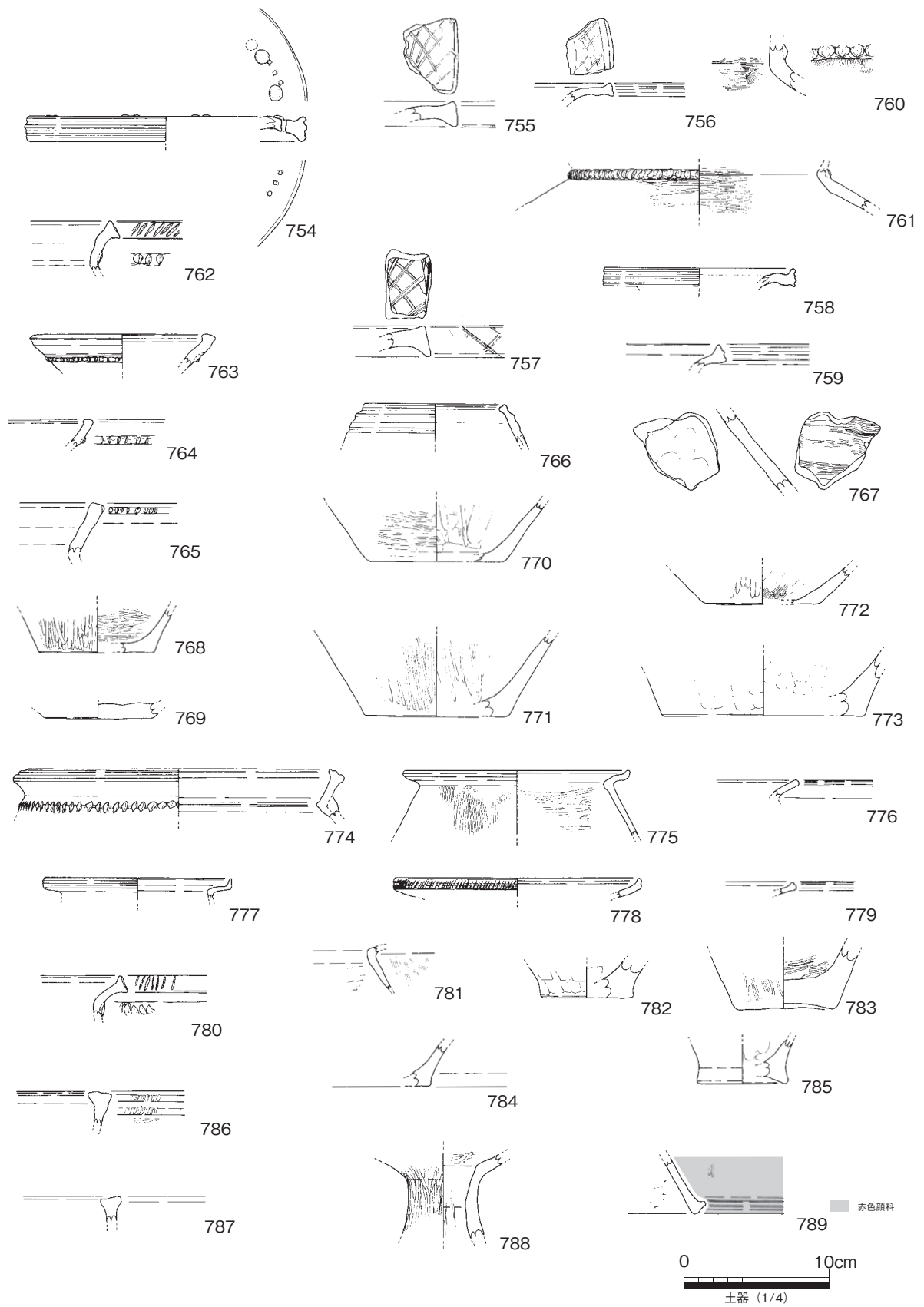


图 136 SB07 出土遺物

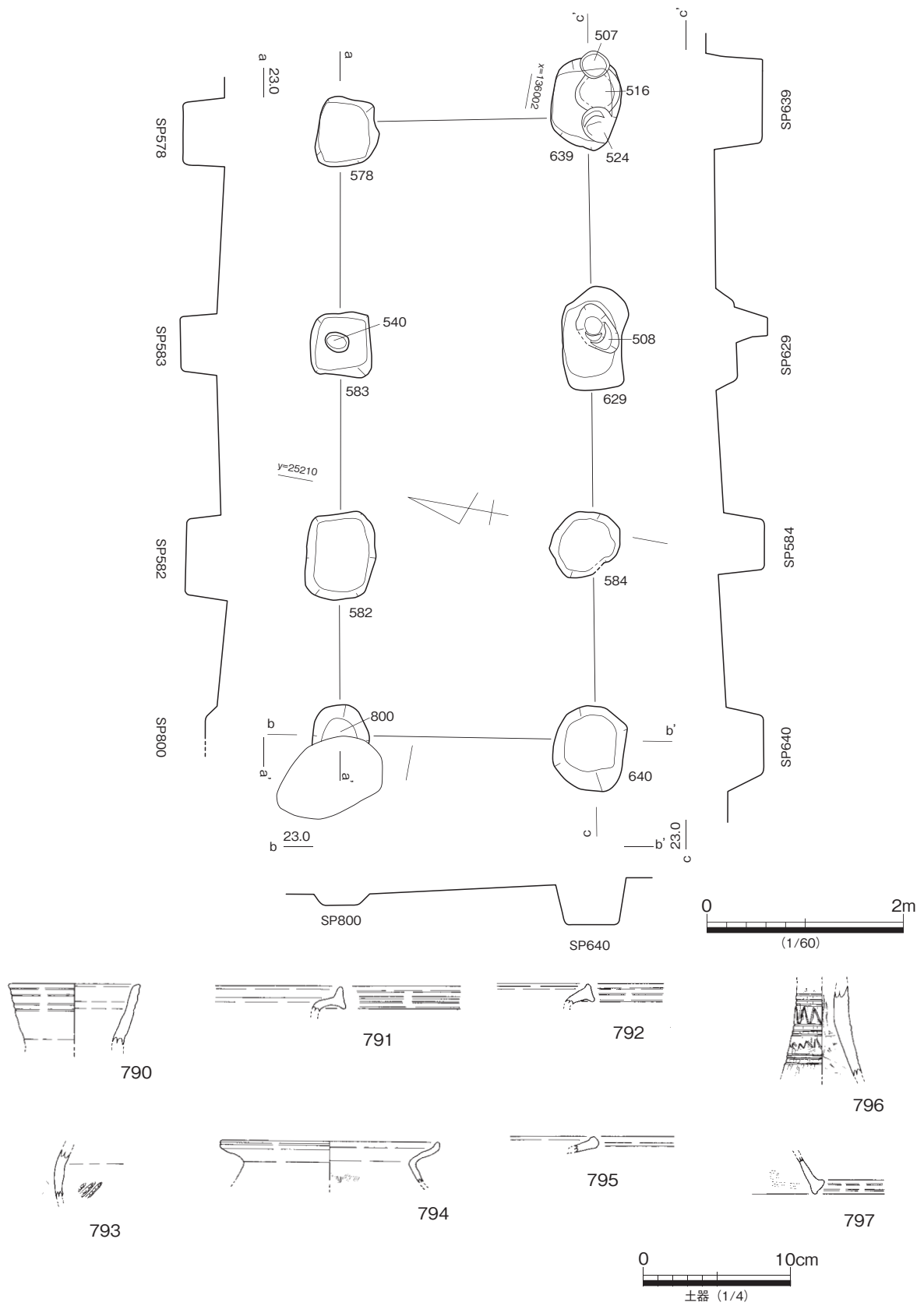


图 137 SB08 平·断面·出土遺物

SB08 (図 137)

遺構 B区南東で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間、桁行3間の構造をもつ。複数の掘立柱建物跡等が重複する一角で、SB07・09、SH28と重複する。柱穴跡の重複関係は、SP640がSH28の掘り方及び柱穴跡に掘り込まれることから、SH28より古い。

柱穴跡の形状は方形を基調とする。柱穴の最大規模は長辺0.9m、短辺0.7m、深さは0.9mを測る。柱間距離は梁間で2.5m、桁行で2.2mを測る。

各柱穴跡から土器小片が多数出土しており、790～793・795・797はSP584、794・796はSP639から出土している。(森下)

土器 790は長頸壺の口縁部片である。791は大形甕の口縁部片で、外反する口縁部形態に弥生中期後半新段階の特徴を留める。792の甕口縁部の凹線文は浅い痕跡的なものとなっており、弥生中期末葉まで時期的に下る可能性がある。793は外面にハケ状工具による列点文を施す壺頸部片である。794・795は跳ね上げ状の口縁端部をもつ凹線文出現期の甕口縁である。796は横位のヘラ描き沈線文間に山形文を重点する高杯脚部片であり、内面に絞目を切る削りが確認できる。797の高杯脚端部は、外面の凹線文が簡略化しているが、弥生後期初頭のものと比較して、脚端部の拡張が穏やかであることから、弥生中期末に位置付けられる。(信里)

出土遺物は弥生中期後半から中期末までの時間幅を示すが、最も新しい様相を示す792や797の年代観から、本建物は弥生中期後半新段階新相に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB09 (図 138)

遺構 B区南東で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間、桁行3間の構造をもつ。複数の掘立柱建物跡等が重複する一角で、SB07・08、SH28と重複する。柱穴跡の重複関係はSP805がSB07の柱穴跡に掘り込まれ、SP799がSB10の柱穴跡を掘り込む。また、SP626・536はSH28に掘り込まれる。したがって、当該掘立柱建物跡はSB10より新しく、SB07・SH28より古い。

柱穴跡の形状は隅丸方形を基調とする。柱穴跡の最大規模は長辺0.95m、短辺0.75m、深さは0.65mを測る。柱痕が残るSP564断面で観察すると、柱は直径0.2mである。柱間距離は梁間で3.0m、桁行で2.4mを測る。

各柱穴跡から土器小片が多数出土しており、798・802はSP536、799はSP799、800はSP626、801はSP564から出土している。(森下)

土器 798は短頸広口壺の口縁部で、頸部に押捺突帯を施す。799は甕口縁部であり、口縁端部外面にハケ状原体による列点文を施し、凹線文は見られない。800は壺胴部片であり、外面に貝殻腹縁による列点文を施す。801の無頸壺は外面の口縁部直下に1条の凹線文が見られる。802は小形の台付鉢脚部片である。一見、製塩土器の脚台に類似するが、円盤充填技法を採用していないことから、台付鉢と判断した。(信里)

出土遺物は少量ながら、凹線文出現期前後の弥生中期前半新段階から中期後半古段階の時間幅で捉え

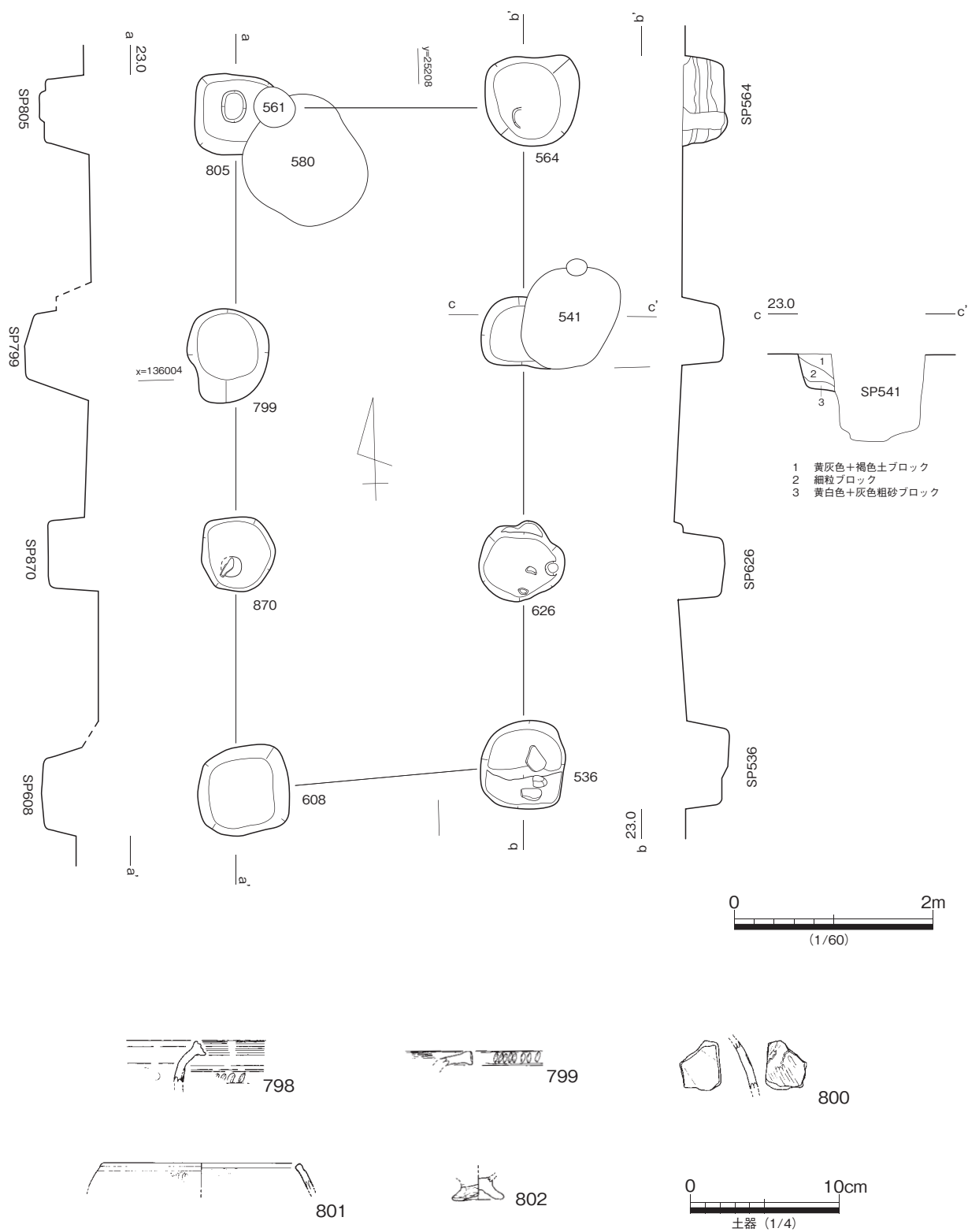


図 138 SB09 平・断面・出土遺物

られる。しかし、SP805等の一部の柱穴跡が弥生中期後半古段階のSB07に掘り込まれることから、重複関係等を考慮して、本建物を弥生中期後半新段階古相に廃絶したものと推定する。(森下・信里)

SB10 (図 139・140)

遺構 A区中央部で検出した梁間1間×桁行7間の大型掘立柱建物跡である。面積は54.43㎡を測る。東側はA区中央攪乱に、西側は古代の溝跡SD36に掘り込まれ、上部は大きく削平を被る。他の遺構との重複関係は、SP806がSB07・09に掘り込まれ、SP767・785がSB25に掘り込まれる。したがって、周辺の中期掘立柱建物跡の中では最も古いと言える。

柱穴跡の形状は不整形のもの、隅丸方形のものがある。規模は長径(長辺)1.0～1.6mである。柱痕の記録を取れたものは数少ないが、SP826では直径0.3mの柱痕が認められた。また、SP821・776では柱穴跡底面に拳大の礫が認められた。これらは柱抜取後に投入されたものではなく、裏込め部に位置することから、建物構築時の柱押さえか、柱位置決めに用いられた礫と言える。また、SP766・760では柱抜取穴が認められた。それ以外の柱穴跡も、写真記録では柱痕上部が上部に開く形態を呈することから、柱を抜き取っているものと推定する。

出土遺物は土器片が多数出土している。詳細な出土位置は把握できないものが多いが、813はSP826(柱抜取後)の柱痕出土、816の管玉はSP820(柱抜取後)の柱痕出土である。その他、818はSP826(柱抜取後)の柱痕から出土した焼土である。また、図示していないが15基の柱穴跡のうち、SP760で特に多くの焼土が出土した。平坦面を留めた焼土塊が多く、淡赤橙色を呈し、やや焼け具合が弱い。平坦面の反対側は、色調が暗灰色及び暗褐色に漸次変化し、焼け具合がさらに弱く、さらに漸次被熱していない土壤に変化する状況が認められる。淡赤橙色を呈す部分の厚みは1～4cmで、暗褐色を呈しつつ一応被熱している部分を含めた厚みは3～10cmである。平坦面は丁寧にナデ仕上げされる。一方、小粒の焼土には棒状有機物の押捺痕跡が認められる。一部の平坦面には幅1mmの細い筋状の押捺痕もしくは沈線文が残る。(森下)

土器 803の広口壺は口縁部外面の凹線文間に細い刻目を施し、内面に櫛描原体による斜格子文を描くもので、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に位置付けられる。804の受口状の直口壺口縁は、外面突帯が退化し稜線状となっている。805は直口壺の口縁部で、端部に細い刻目を施す。806は壺底部片で、外面に横位の分割ミガキを留める。807の壺胴部片の外面には、ハケ原体による小列点が見られる。808・809は細身の甕底部片であり、弥生中期後半古段階の特徴をもつ。810は台付鉢の小片で、現存で外面に3条の凹線文が見られる。811～813は台付鉢の口縁部片であり、812の上端面には2条の凹線文が見られる。814は上端部の厚み等の形態から見て、蓋の可能性が高い。815は台付鉢の貼り付け突帯が接合部で剥落したものと考えられる。(信里)

玉類 816は長さ1.25cm、直径0.3cm、上端孔径0.15cm、下端孔径0.15cmの碧玉製管玉である。長／径比は4：1で細長タイプである。下端面には製作時の剥離痕の痕跡と考えられる窪みを留める。穿孔は上下から施すタイプである。色調は暗緑色で、重量は0.18gを測る。

石器 817はSP760の柱抜取穴より出土したサヌカイト製石核である。厚さ1cm程の大型のスクレイパーを分割して、片面の剥離面界の稜線を加撃し、幅5cm、長さ1cm程の剥片を得ている。ただ、得

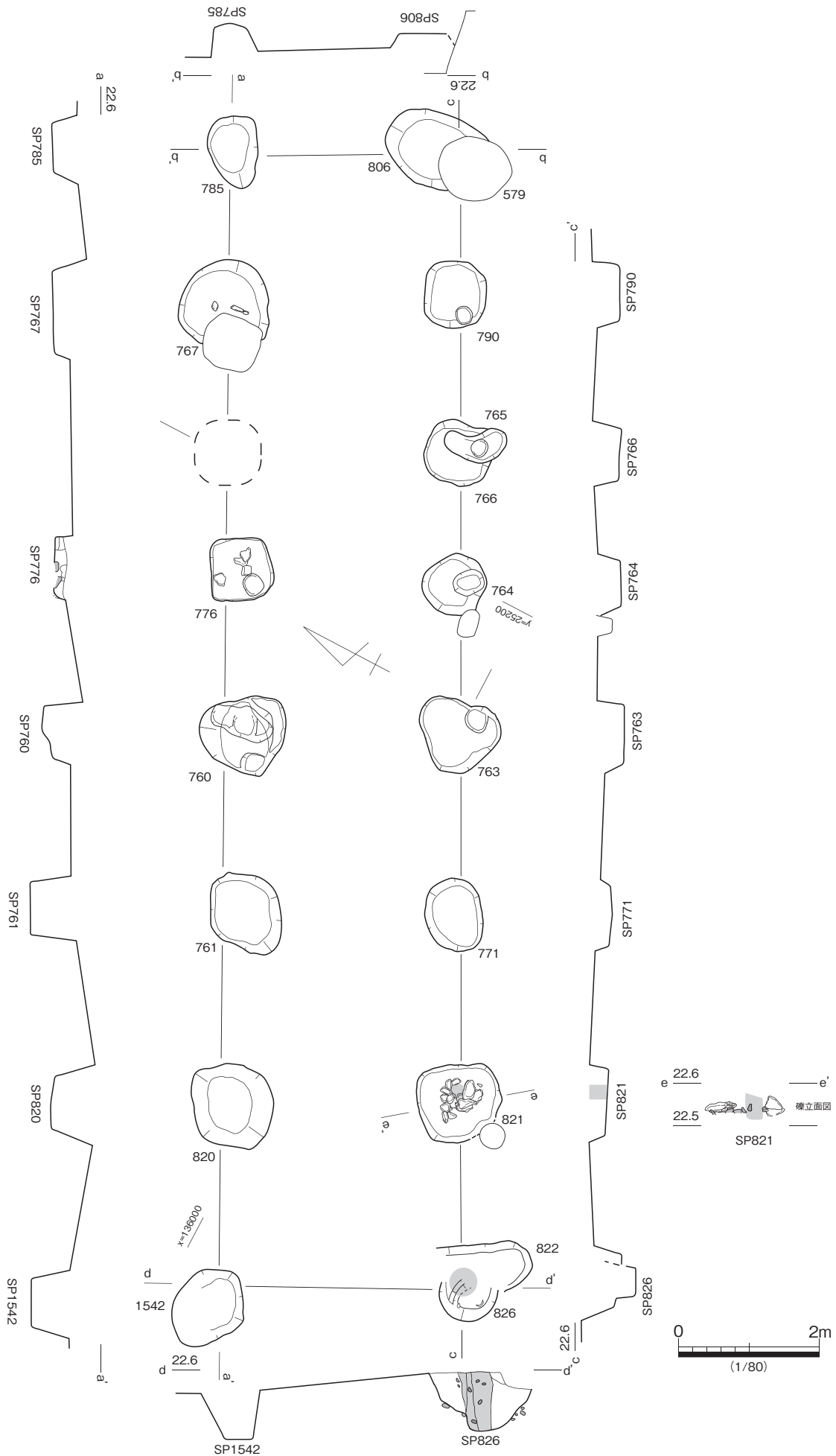


图 139 SB10 平·断面

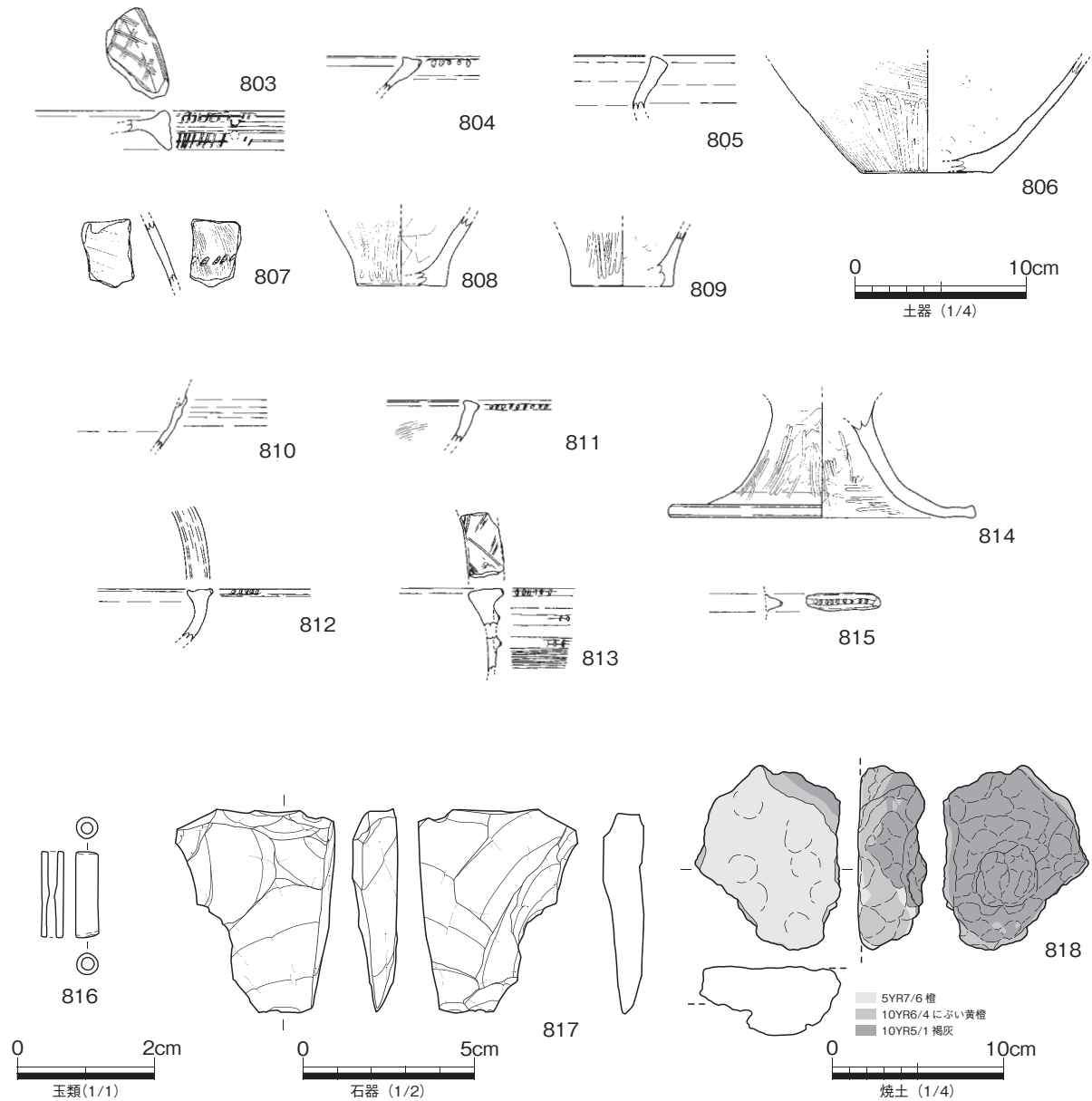


図 140 SB10 出土遺物

られた剥片はネガ面を観察する限り、多数の同時割れを生じているものと推定される。敲打技法によらない剥片剥離は稀である。

焼土 818はSP826出土の平坦面をもつ焼土である。平坦面側（外側）は橙色、内側ほど褐色味を帯びる。内側にも指押さえの痕跡が認められる面がある。外側の平坦面と比べて凹凸が顕著だが、焼成（被熱）前の粘土ブロック形状を知る手がかりとなる。（森下）

出土遺物は凹線文出現前後の弥生中期前半新段階から中期後半古段階までの時間幅をもつ。また、多くの柱穴跡が柱材の抜き取りを受けており、その際に土器片が混入している状況を考慮すると、本建物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定される。（森下・信里）

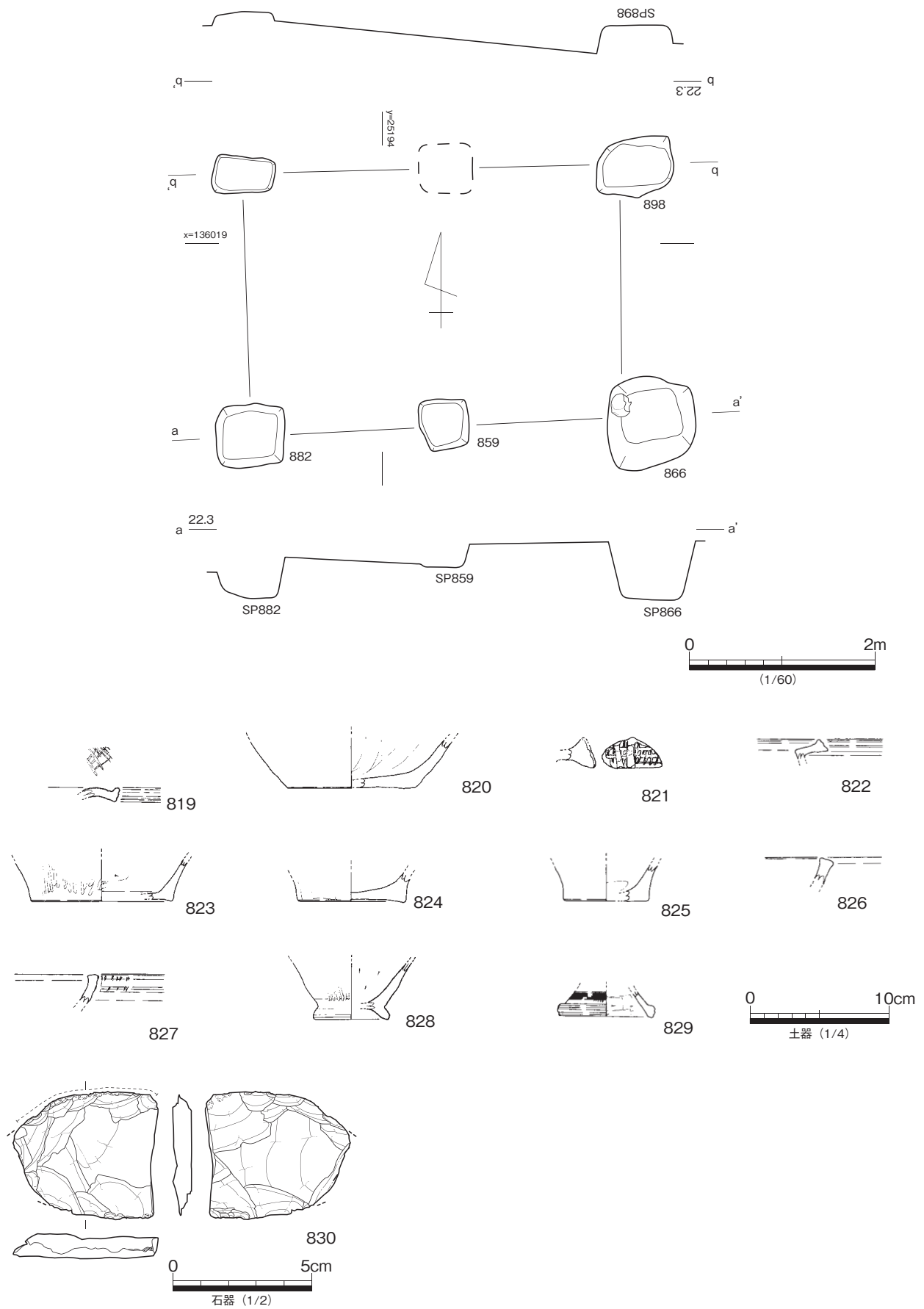


图 141 SB11 平·断面·出土遺物

SB11 (図 141)

遺構 B区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。中期の河川跡 SR02 が東から西方向に大きく蛇行する一角に近接する。梁間1間、桁行2間の構造で、主軸は北から東へ87度を測る。面積は12.04㎡を測る。柱穴跡は方形を基調とし、規模は一辺0.4～1.0mを測る。深さは最も遺存状態の良いSP866で0.6mを測る。北側桁行の中間柱は削平のため検出できなかった。遺存する柱穴跡の柱間距離は梁間で2.8m、桁行で2.2mを測る。

埋土は基盤土の黄色シルトに極めて類似する黄白色系シルトに淡い褐色系土が混じり、直径0.15～0.2mの柱痕が認められた。SP866では柱抜き取り後に礫を投入している。各柱穴跡より土器小片が出土しており、819・820・825・828はSP866、821はSP859、822・827・830はSP898、824・826・829はSP882から出土している。(森下)

土器 819は広口壺の口縁部である。口縁部外面2条の凹線文、内面に櫛描原体による斜格子文を描く。820は壺の底部片である。821の広口壺の口縁部は、外面に上面に刻目をもつ、現存で3条の凹線文と2個一対の棒状浮文を施す。822の甕口縁部は、形態から弥生中期後半中段階に比定される。823～825は甕底部片である。826・827は台付鉢の口縁部である。828は外面調整が粗雑なものの、形態から甕底部と考えられる。829は高杯脚端部片、外面に櫛描直線文と小列点を加える。(信里)

石器 830はサヌカイト製の楔状石核である。上縁に敲打を施し、下縁には剥片剥離した鋭いエッジが残る。(森下)

出土遺物はいずれも小片ながら凹線文盛行期に収まるものであり、ここでは本建物が弥生中期後半中段階に廃絶したものと推定する。(森下・信里)

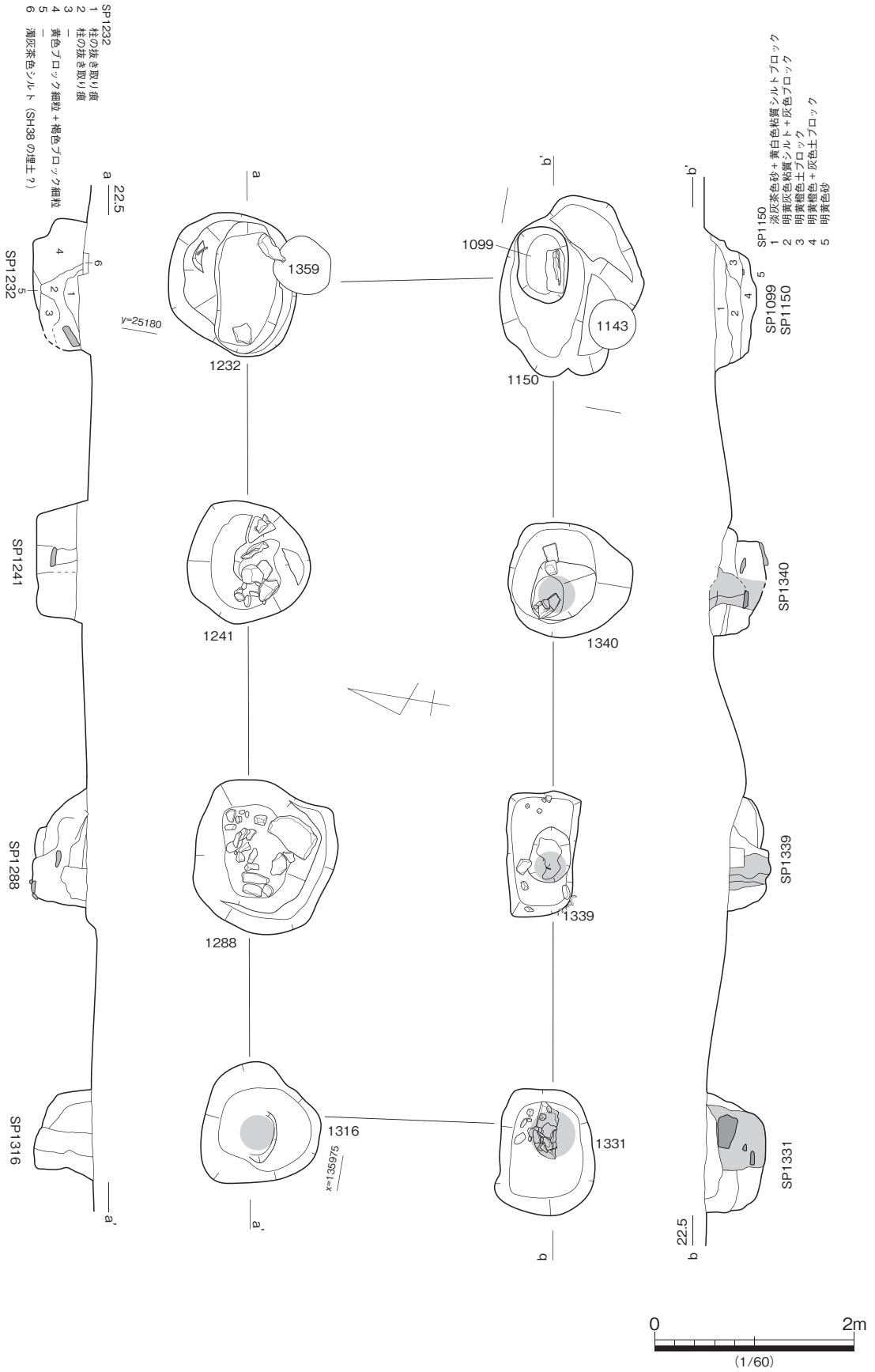
SB12 (図 142・143)

遺構 C区西側で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(3.0m)、桁行3間(8.4m)の構造をもつ。桁行の柱間距離は約2.86mと他の掘立柱建物跡と比べやや長目である。主軸方位は北から東へ80度測る。

後期の竪穴住居跡が密集する一角にあり、SH35を始めとして近接するすべての竪穴住居跡に掘り込まれる。柱穴跡の平面形態は不整形、方形が混在する。柱穴跡の規模はSP1150が長辺1.85m、短辺1.4mと最大で、深さはどの柱穴跡も概ね0.6m以上ある。柱穴規模では今回報告する建物中最大である。

埋土は基盤土に極めて類似する土で、基盤土が礫層となるSP1331では礫を大量に含む黄灰色土が柱裏込めとなり、柱抜き取り後の柱痕に40cm大の礫を投入していた。その他の柱穴跡は黄色シルト層が基盤土となり、柱裏込め土は黄色～黄橙色シルトに淡い褐色土の細粒ブロックが混じる土である。なお、この裏込め土は基盤土が部分的に自然変質する部分との峻別が難しく、柱穴プランの検出は困難を極めたことを記しておく。

SP1150では柱抜取穴下部の柱痕相当箇所底場に貼り付いた状態で長さ約35cmの木片が出土した。軟弱に劣化しており、取上げることができなかったが、木目は水平方向であり、柱材とは考えられないので、柱根太材の可能性が高い。



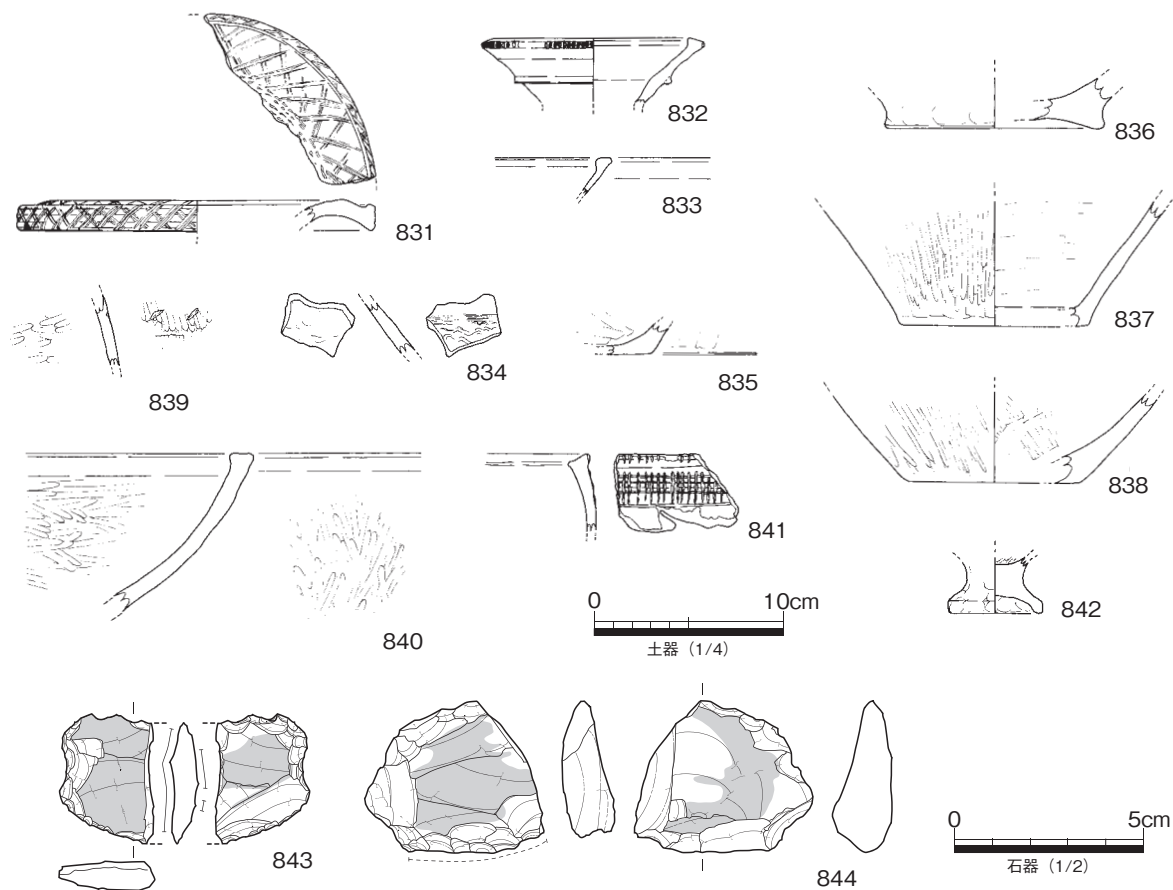


図 143 SB12 出土遺物

SP1241・1288・1340 では柱抜取後に大小の礫を投入していた。

柱痕の記録を正確に取れたものは少ないが、SP1339・1331 では直径 0.3～0.35m あったものと見られる。なお、SP1150・1232 では、長楕円形の規模が大きな柱抜取穴を検出した。

焼土が SP1150・1241・1232 で多く出土した。中でも SP1150 には大量の焼土が投棄されていた。平坦面を留めた焼土塊が多く、淡赤橙色を呈し、やや焼け具合が弱い。平坦面の反対側は、色調が暗灰色及び暗褐色に漸次変化し、焼け具合がさらに弱く、さらに漸次被熱していない土壤に変化する状況が認められる。淡赤橙色を呈す部分の厚みは 1～4cm で、暗褐色を呈しつつ一応被熱している部分を含めた厚みは 3～10cm である。全柱穴跡から出土した焼土の総重量は 1360.92g で、そのうち SP1150 出土焼土の重量は 358.97+946.85g で、最も多い。

柱穴規模が大きいにもかかわらず、柱穴跡から出土した土器は小片である。831・833・834・836～842 は SP1150、832 は SP1047、835 は SP1288、843 は SP1316、844 は SP1170 から出土している。また、SP1150 に土器が集中しているので、柱材の抜き取りの埋め戻しに伴い廃棄されたと考えられる。(森下)

土器 831 は広口壺は、口縁部外面及び内面を櫛描による斜格子文、内面に櫛描原体による列点文で飾るもので、弥生中期前半新段階に比定される。832 は口縁部がやや受け口状となる直口壺であり、口縁部形態や外面の無刻目突帯の形状から、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に位置付けられる。834 は外面に櫛描文帯をもつ壺胴部片である。836 は弥生前期の壺底部片であり、混入品と見られる。837・

838は壺底部片で、837は底部が輪台状となる。839は甕の胴部片で、外面にハケ原体による列点を加える。840・841は台付鉢又は鉢口縁部であり、841は外面の凹線文帯上面に細い刻目を施す。842は台付鉢の脚台片である。(信里)

石器 サヌカイト製打製石庖丁1点、同製楔状石核1点が出土した。843は側縁に抉りを持ち、表裏面に使用による摩滅を留めるものである。844は上下縁を敲打するが、表裏素材面は打製石庖丁に通常の摩滅が見られる。(森下)

出土遺物には若干の時間幅が見られるが、SP1150の柱材抜き取りに伴う土器群の中で最も新相を示す土器群の年代から、本建物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB13 (図 144)

遺構 C区中央やや東寄りで検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.7m)、桁行3間(5.5m)の構造をもつ。桁行の柱間距離は約1.8mと他の掘立柱建物跡と比べやや短か目である。主軸方位は北から東へ70度を測る。

後期から終末期の竪穴住居跡が密集する一角にあり、SH42を始めとして近接するすべての竪穴住居跡に掘り込まれる。柱穴跡の平面形態は不整形と方形が混在するが、SP1149・1274等底場は隅丸方形を呈す。柱穴跡の規模は長辺0.8～1.1m、短辺0.6～1m、深さ0.5～0.7mである。柱痕は断面で明確に検出したSP1343では直径0.25mを測る。その他の柱穴跡は柱抜取の際に多少広がっているものと推定する。

埋土は基盤層が砂礫となるSP1357では礫混じり土が裏込めとなり、それ以外は黄色系砂質シルトの褐色ブロックが混じる土であった。柱痕部はいずれも褐色系を呈す。

柱穴跡内からは大小の礫が出土した。そのうち、SP1274・1343・1027については、柱痕下部底面に貼り付いて最大70cm大の扁平礫が出土した。これらは建物構築前に柱の根石として計画的に埋め込んだ可能性が考えられる。

出土遺物は図示した土器小片と、土器片転用の紡錘車未製品が出土した。

土器 845は広口壺の口縁部片で、口縁端部外面に凹線文と櫛描による斜格子文、内面に櫛描による斜格子文及び列点文が見られる。846は口縁部が受け口状になる直口壺であり、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に位置付けられる。847・848は台付鉢の口縁部であり、847は外面の凹線文の上面に細い列点を加える。849は台付鉢の口縁部である。850は高杯の脚部片であり、杯部との境に2条突帯を施す。
(信里)

紡錘車 外面に刷毛目が残るやや厚めの土器片の周縁を加工し、直径約3.5cmの円形を素材を成形した後、土器内面側からの穿孔を器壁中程まで進めた土器片転用の紡錘車未製品である。(森下)

出土土器から本建物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB14 (図 145)

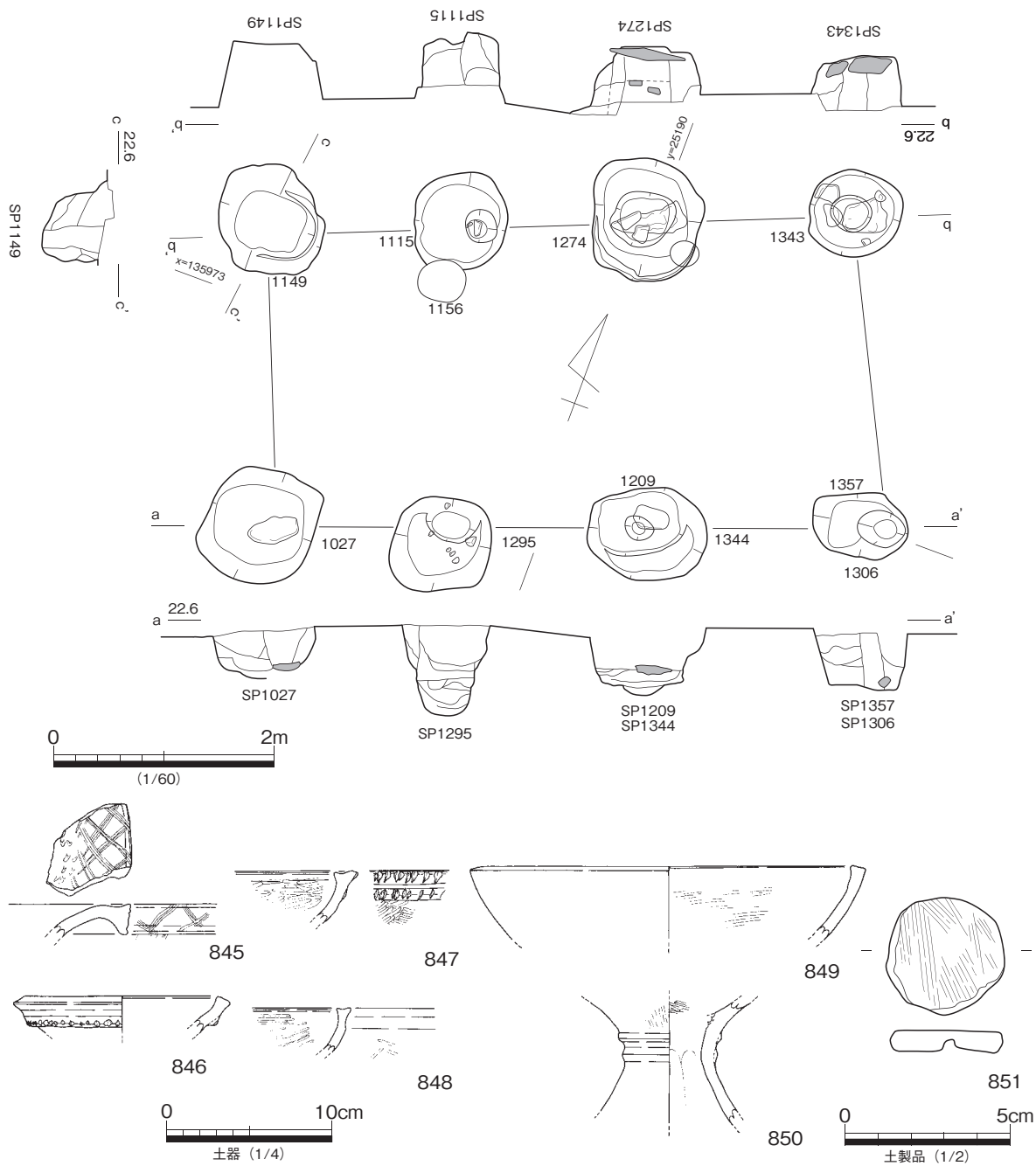


図 144 SB13 平・断面・出土遺物

遺構 C区中央南端からF区にかけて検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(3.45m)、桁行3間(7.3m)の構造をもつ。桁行の柱間距離は約2.5mと他の掘立柱建物跡と比べやや長い。主軸方位は北より西へ61度を測る。C区SH36に掘り込まれる。

SP1272はSP1167・1168と重複する柱穴跡として調査を進めたが、調査時の写真等からSP1167・1168はSP1272の柱抜取穴の一部と推定した。また、F区のSP1769・1783・1852は個別の柱穴跡として調査を進めたが、元来一基の柱穴跡であった可能性が高く、調査深度も底場まで調査が及んでいなかったものとする。埋土は、個々の柱穴跡の基盤土によって異なり、SH36と重複する箇所については砂礫、その他は概ね濁黄色シルトである。SP1272とSP1144では裏込め下部に板状の礫が埋め込まれていた。

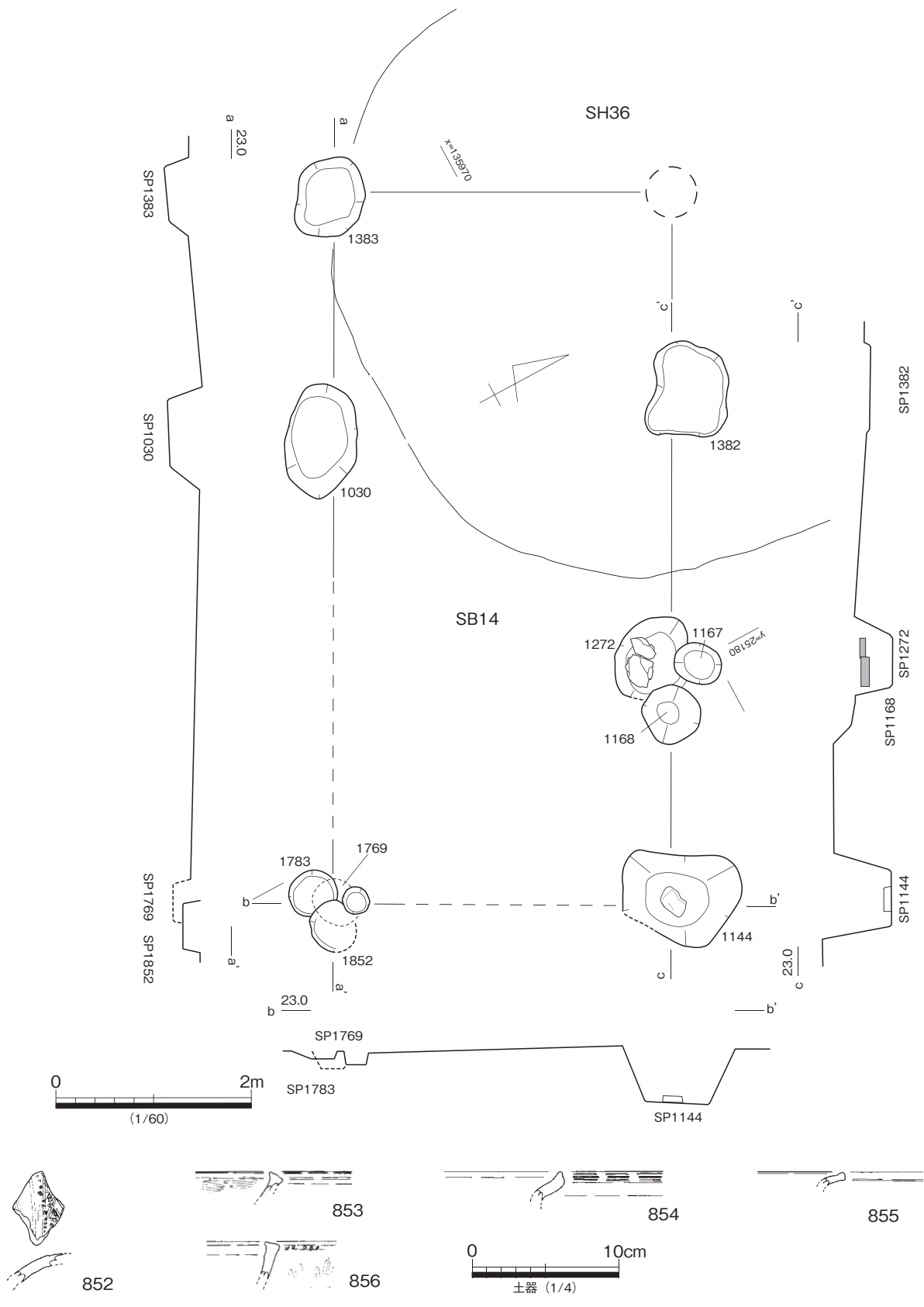


图 145 SB14 平·断面·出土遺物

SP1144 は柱の根石、SP1272 は柱の固定用の礎と推定する。

なお、SP1382 は SH36 床面下部で検出した柱穴跡で、埋土が薄く、この建物の柱穴跡埋土か住居跡の貼床下部の凹凸か区分するのが困難であった。SP1030 との位置関係から見て、当該建物跡に所属する柱穴跡が別に存在するか、あるいはすでに SH36 により削平を受けたか、いずれかと考えられる。

図示した土器片は北東隅柱である SP1144 から全て出土した。(森下)

土器 852 は広口壺の口縁部片で、内面に櫛描による斜格子文と列点文が見られる。853 は台付鉢の口縁部である。854 は凹線文出現期に位置付けられる大形甕の口縁部で、口縁部外面に 1 条の凹線文が見られる。855 は広口壺の口縁部である。856 は台付鉢の口縁部である。(信里)

出土遺物は、弥生中期前半新段階のものも見られるが、854 の甕の口縁形態から、本建物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB15 (図 146)

遺構 C 区東側で検出した掘立柱建物跡である。梁間 1 間 (2.8m)、桁行 2 間 (5.0m) の構造をもつ。主軸方位は北より東へ 76 度を測る。柱穴跡 SP998 は、他の柱穴跡と異なり、灰褐色系埋土で調査中に柱痕を見出すことができなかった。埋土中に瓦器碗や銅鏃を含む等、新しい時期の埋土を含む。このことから、掘立柱建物跡の柱穴跡を掘り込んで中世の土坑が存在し、その調査の過程で、下位の柱穴跡の埋土も同時に調査を進めたものと推定する。したがって、図示した SP998 の形状は当該掘立柱建物跡の柱穴跡の形状をそのまま示したものではない。

その他の柱穴跡の埋土は SP1261 がやや砂混じりの暗褐色土で、北側柱の 3 基は黄色系シルト層である。SP1559 は竪穴住居跡 SH48・49 に掘り込まれる。

出土遺物の内、857・861・862・865・869 は SP1559、858～860・864・870 は SP1289、863 は SP1261、866～868・871 は SP998 から出土している。(森下)

土器 857 は口縁部が受け口状となる壺であり、外面に 3 条の凹線文帯をもつ。858 は広口壺の口縁部である。859～861 は跳ね上げ状の口縁をもつ甕であり、弥生中期前半新段階から中期後半古段階に位置付けられる。862 は口縁部に強いヨコナデと外面に 2 条の凹線文をもつ甕であり、凹線文盛行期の弥生中期後半中段階に位置付けられる。863・864 は台付鉢の口縁部である。865 は手づくね状の脚台をもつ鉢の底部である。866 は瓦器碗の口縁部片であり、上記のとおり混入品である。(信里)

金属器 867 は SP998 で中世瓦器碗とともに出土した連鑄式銅鏃である。刃部中央のみの破片で、先端も関も折損する。表面は錆化が進行し、鎬は不明瞭である。

石器 サヌカイト製楔状石核 4 点が出土した。いずれも上下縁に潰れ、側縁に裁断面がある。868・870 は素材面が打製石庖丁に通有の摩滅痕があり、石庖丁転用品と推定する。(森下)

出土遺物の様相は一部の混入品を除外すれば、弥生中期前半新段階から中期後半中段階に収まる。後者の中で時間的に新相を示す 857 や 858 の壺、862 の甕の特徴から、本建物は弥生中期後半中段階に廃

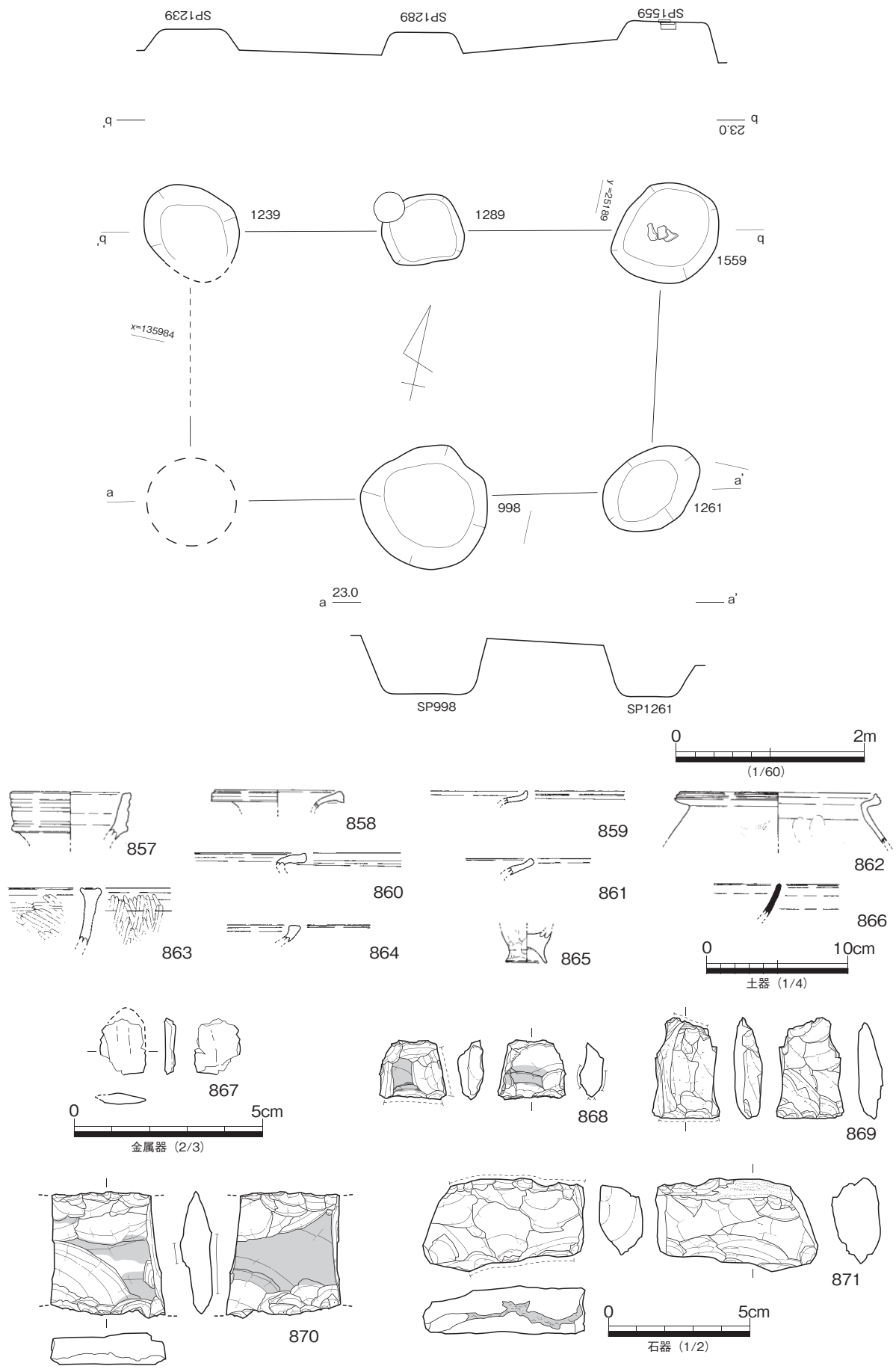


图 146 SB15 平·断面·出土遺物

絶したものと推定される。(森下・信里)

SB16 (図 147)

遺構 D区東端とB区西端で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.65m)、桁行3間(7.8m)の構造をもつ。主軸方位は北より東に約67度を測る。北東隅柱は落込み状遺構として調査を進めたが、D区調査成果と照合した際に、B区調査時の精査が不十分であったことが判明した。柱穴跡埋土は基盤土の黄色シルト層に極めて類似する土で、B区調査時には調査員による遺構認識が不十分であったことに起因する。SP819も深さが他と比べて浅く、底場認定も十分ではない可能性がある。

柱穴跡の平面は円形・楕円形で、最大のSP1875は長径1.3m、短径1.05mを測る。深さは0.6~0.7mで、西が深く東が浅い傾向も見られる。柱痕はSP1557等を参考にすると、直径約0.2mと推定する。礫の投入が各柱穴跡で見られ、多くは柱抜取穴に投入されたものだが、SP1528は柱設置段階の固定用の置き石であった可能性がある。

SP1557では柱痕内から約2.5kgの焼土が出土した。平坦面を留めた焼土塊が多く、淡赤橙色を呈し、やや焼け具合が弱い。平坦面の反対側は、色調が暗灰色及び暗褐色に漸次変化し、焼け具合がさらに弱く、さらに漸次被熱していない土壌に変化する状況が認められる。淡赤橙色を呈す部分の厚みは1~4cmで、暗褐色を呈しつつ一応被熱している部分を含めた厚みは3~10cmである。その他の柱穴跡も、

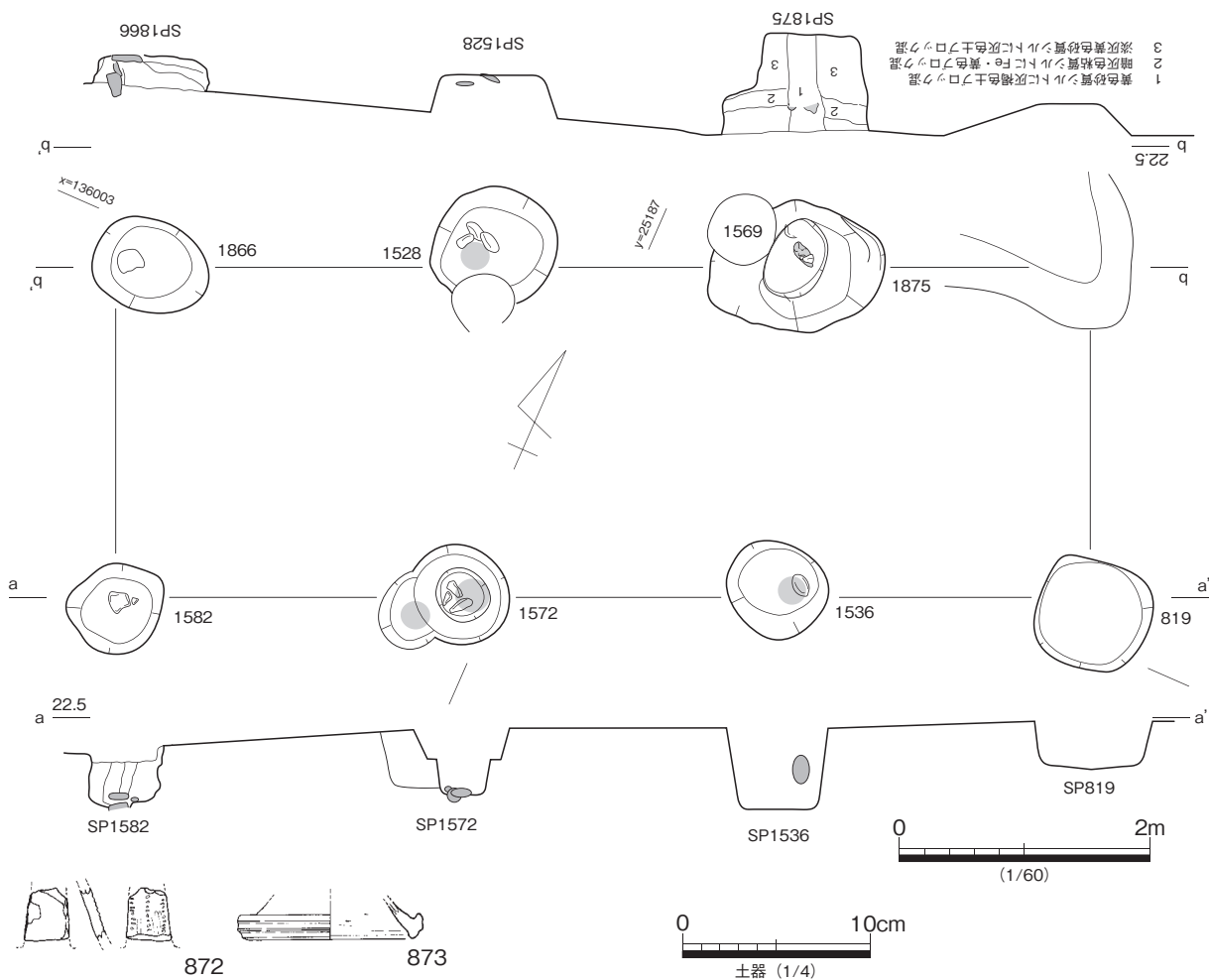


図 147 SB16 平・断面・出土遺物

柱痕や抜取穴から焼土が出土している。

出土遺物は土器片が少量出土したのみであり、872はSP1536、873はSP1557に帰属する。(森下)

土器 872は台付鉢の脚台の小片であり、外面の方形透かしの間に半裁竹管による小列点を加える。873は高杯脚端部片で、外側へ踏ん張る形態をもち、脚端部を上方に拡張する。(信里)

873の高杯脚の形態から、本建物は弥生中期後半新段階新相に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB17 (図 148)

遺構 D区中央で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.5m)、桁行2間(3.85m)の構造をもつ。主軸方位は北から東に約68度を測る。SP1604・1705は堅穴住居跡SH67の主柱穴に掘り込まれており、当該建物跡はSH67より古いことがわかる。桁行の柱間距離は約1.8mと他の掘立柱建物跡と比べ短か目である。

柱穴跡は平面円形・隅丸方形で、最大のSP1705は長辺1.0m、短辺0.95mを測る。深さは0.5～0.6mで、西が深く東が浅い傾向がある。柱痕はSP1705等を参考にすると、直径約0.2mと推定する。SP1627は柱抜取後に礫を投入する。

出土遺物は874・879～881はSP1645、875～877はSP1646、878はSP1662から出土している。(森下)

土器 874は口縁部がやや内傾する直口壺の口縁部で、口縁端部外面に2条の凹線文と無刻目の突帯を1条付与する。凹線文出現期の弥生中期後半古段階の所産と見られる。875は壺底部片である。小形の底部や胴部が大きく開くこと等から見て、弥生後期初頭以後の細頸壺等の小形壺の底部の可能性が高い。876は壺底部片である。877は筒状を呈する甕の底部片であり、凹線文盛行期の弥生中期後半中段階に位置付けられる。878は甕底部であり、端部を外側へ摘み出すもので、877の底部片と同時期の所産と見られる。879・880は口縁部が内傾する高杯であり、880は口縁端部を内側に拡張する。881は脚部外面に多条の凹線文帯をもつ高杯であり、凹線文が沈線に近い状態であることから、弥生中期末に位置付けられる。(信里)

出土遺物に時間幅が認められることや、一部に弥生後期初頭以後に時期的に下るものが認められるが、切り合い関係を優先し、古相を示す874の年代観から本建物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定する。(森下・信里)

SB18 (図 149)

遺構 C区北西からD区南西にかけて検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.5m)、桁行2間(4.3m)の構造をもつ。主軸方位は北から西に55.5度を測る。SP1877は土器棺墓ST03に掘り込まれており、当該建物跡はST03より古いことがわかる。また、遺構の重複関係はないが、位置的には堅穴住居跡SH71と重複する。出土遺物から見ると当該建物跡はSH71にも先行するものと推定する。

柱穴跡は平面円形で、概ね直径0.5～0.6m、深さ0.3mを測る。SP1610・1231は、柱抜取後に礫を投入する。埋土は基盤土類似の黄色系シルト層で、柱抜取穴は褐色土ブロックが多く混じる。

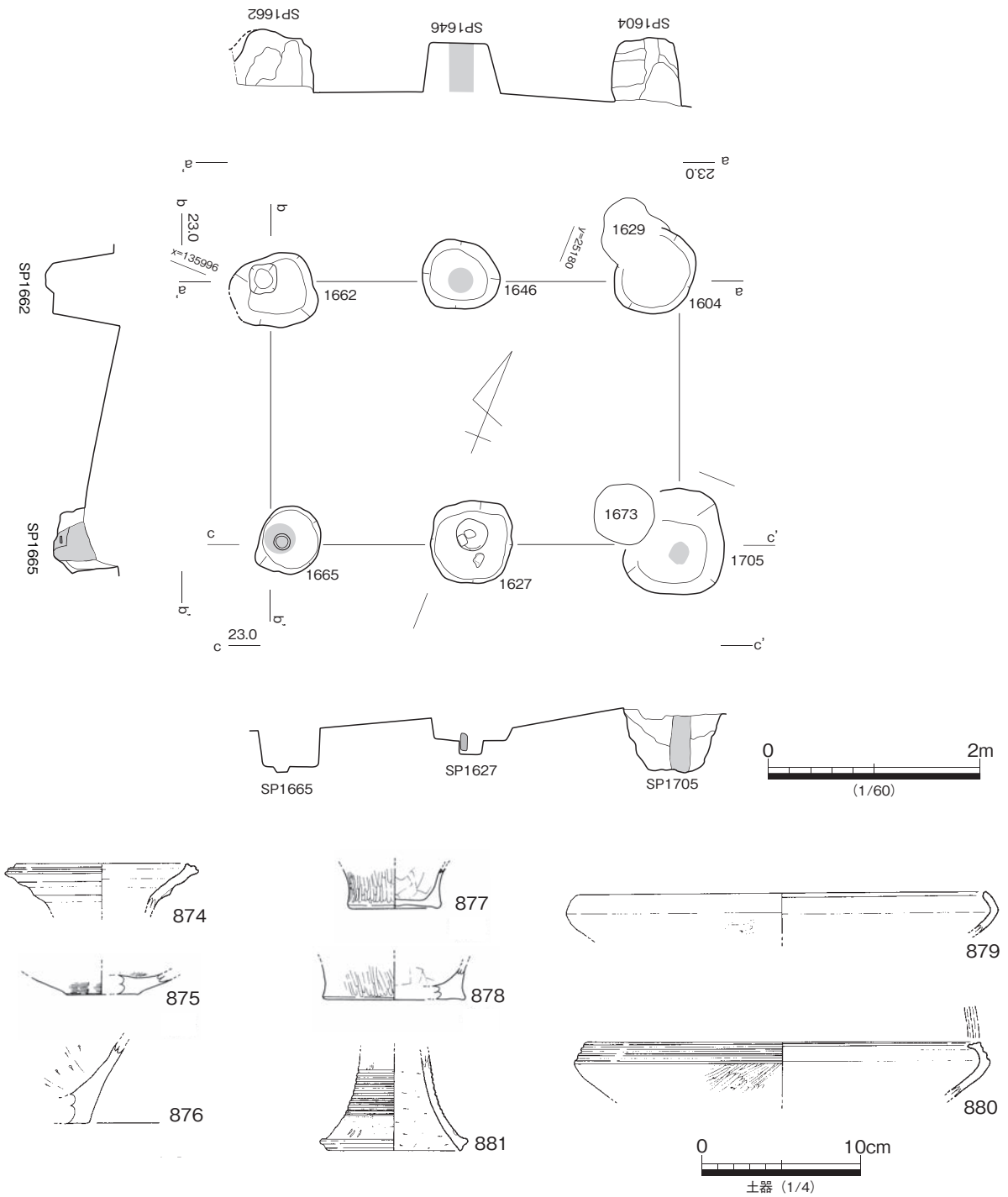


図 148 SB17 平・断面・出土遺物

出土遺物は少なく、SP1877 で出土した土器片のみ図化した。(森下)

土器 882 は中形甕の肩部の小片である。やや厚手であることや肩が張る形態が想定できることから、弥生中期後半古段階の所産と考えられる。(信里)

図化可能な出土遺物は 882 の甕 1 点のみであるが、柱穴跡の規模・形態等遺構の属性も考慮し、本建

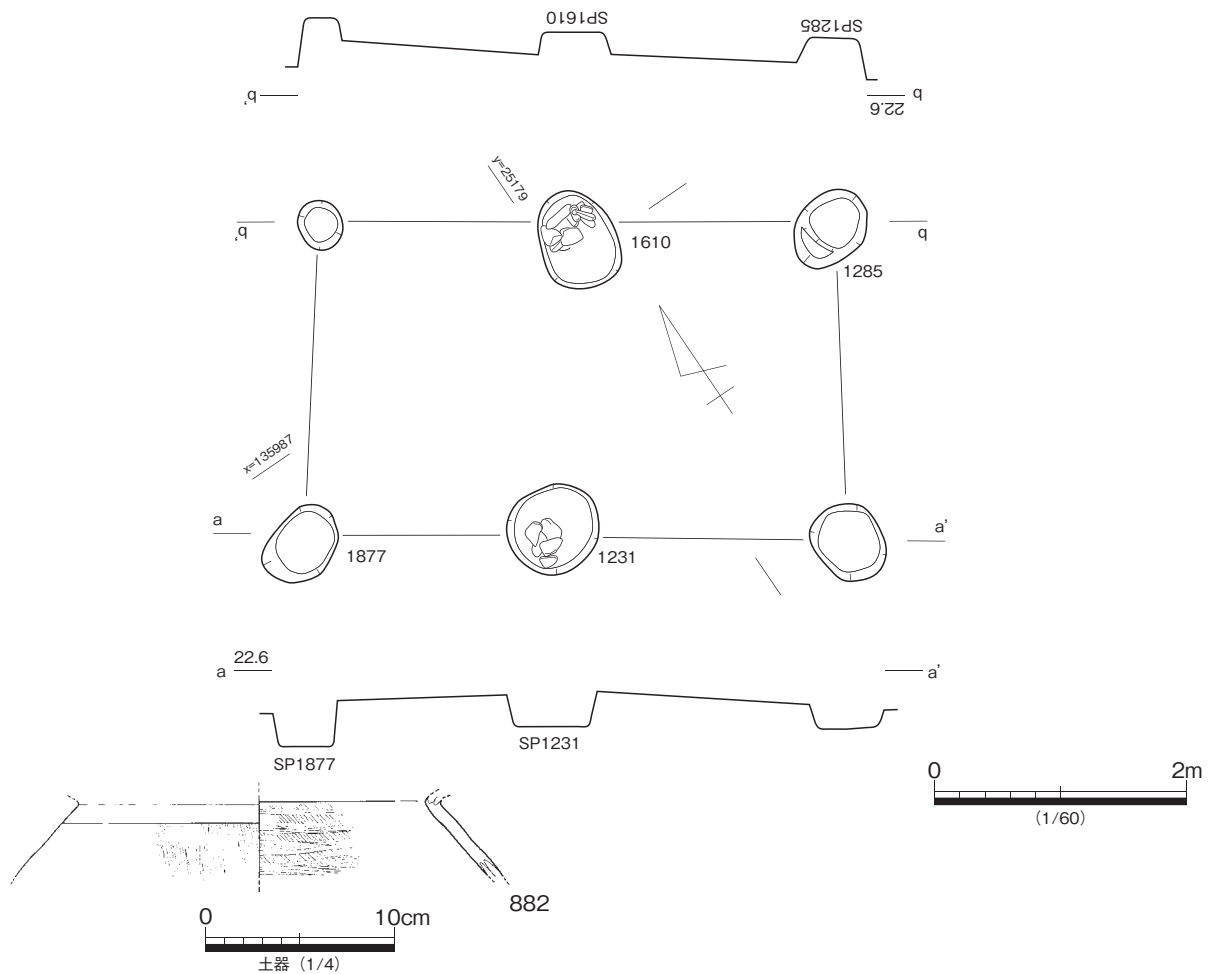


図 149 SB18 平・断面・出土遺物

物は弥生中期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB19 (図 150)

遺構 B区北東で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.7m)、桁行2間(4.4m)の構造をもつ。主軸方位は北から東へ78度を測る。北東の隅柱は未検出である。

柱穴跡は平面円形で、概ね直径0.6～0.8m、深さ0.4～0.6mを測る。埋土は褐色系シルトで、柱抜取穴は基盤土の黄色土ブロックが多く混じる。

当該建物跡は、出土遺物から見てSR02下層溝掘削時期とほぼ重なり、今回報告する調査区でSR02下層溝より北側で検出した2棟の建物跡の一つである。(森下)

土器 883は器台の口縁部で外面に2条の凹線文が確認できる。884の甕は口縁端部を上下に拡張し、外面の凹線文は浅く形骸化している。885は甕は口縁部形態や胴部最大径の位置等から見て、弥生後期前半中段階に位置付けられる。886は広口壺の口縁部である。内面にヨコナデに伴う強い稜線が見られ、口縁端部外面の凹線文も浅いものとなっている。弥生後期前半中段階に位置付けられる。887は厚い器壁や形態から見て、弥生後期前半期の器台脚端部と見られる。(信里)

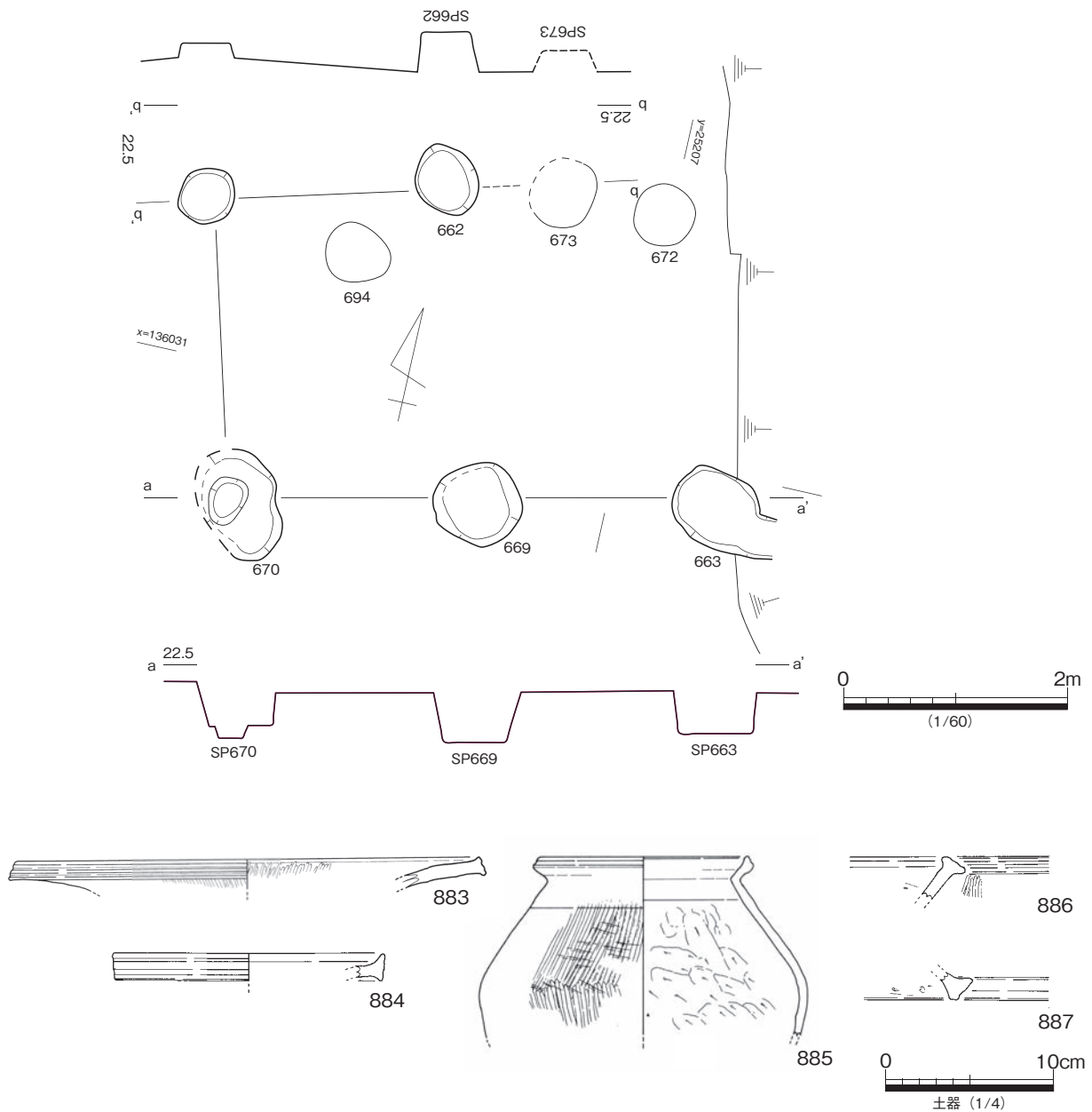


図 150 SB19 平・断面・出土遺物

885 の甕の形態等から、本建物は弥生後期前半中段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB20 (図 151)

遺構 B区中央の西端から平成8・9年度調査地にかけて検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.9m)、桁行2間(4.4m)の構造をもつ。主軸方位は北から西へ約63.5度を測る。北東の隅柱は調査区外のため未検出である。SH27と完全に重複し、SH27の下層床面を検出した段階で平面プランを確認したことから、SH27より古い時期に所属するものと言える。

柱穴跡は長方形・不整円形で、最大長辺1.1m、短辺0.6m、直径0.9mの柱穴跡等が組み合う。深さは0.6mを測る。埋土は基盤土の黄色系シルトに褐色土ブロックが混じる土で、柱抜取穴は褐色土ブロックが多く混じる。出土遺物は少量で、SP967出土の多孔装飾の器台のみ図化した。(森下)

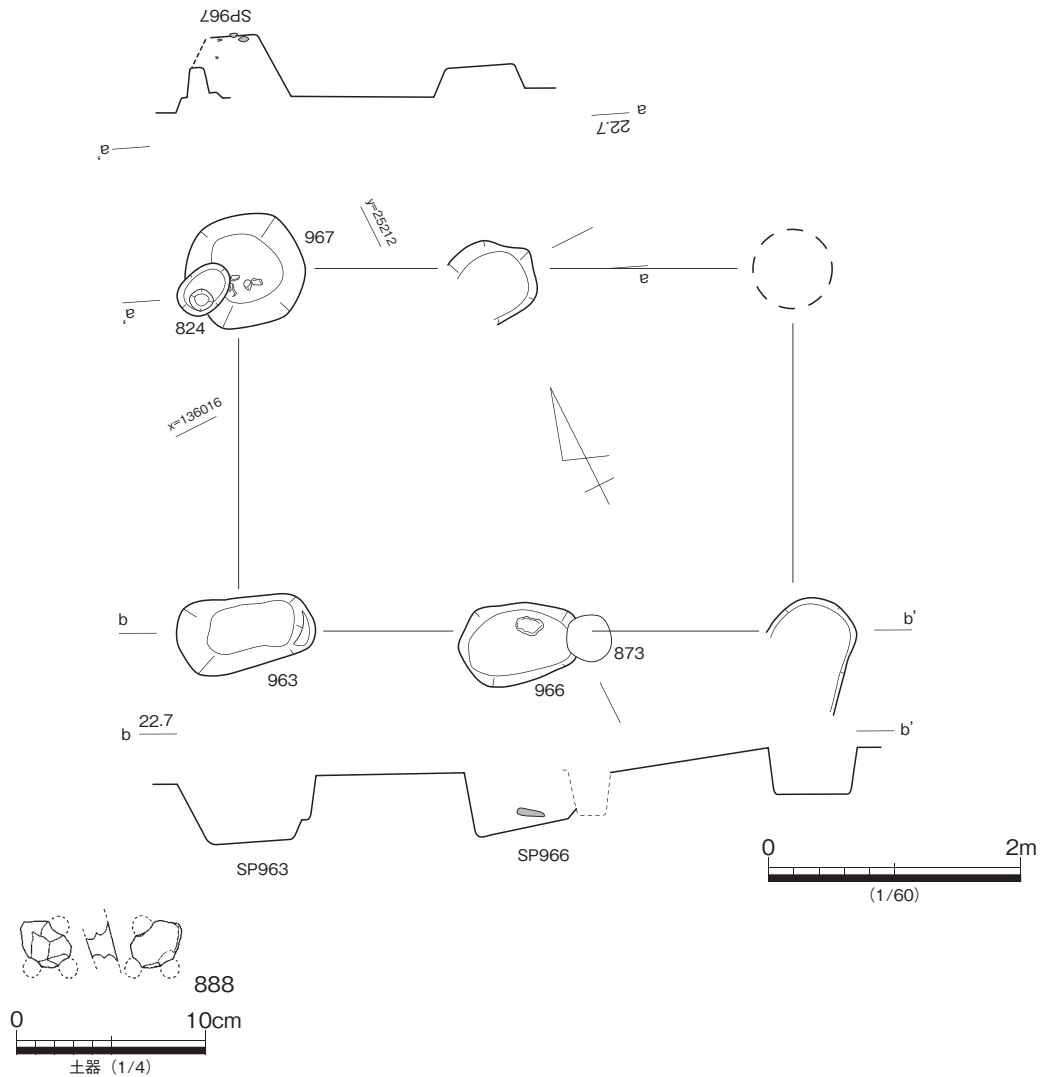


図 151 SB20 平・断面・出土遺物

土器 888 は器台の脚部片であり、現存で3個の透かし孔が見られる。(信里)

図化可能な出土遺物は、888の1点ながら、本地域において器台がレギュラーパーセントを占めるのは弥生後期前半古段階から同新段階にかけてであることや、後期前半中段階に構築されるSH27に掘り込まれる点等を考慮し、本建物の廃絶時期を弥生後期前半古段階と推定する。(森下・信里)

SB21 (図 152)

遺構 F区中央やや東よりで検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(3.5m)、桁行1間(4.9m)の構造で、南東隅の1基は攪乱により滅失する。SP1823は隅丸方形を呈し、長辺1.25m、短辺1.1m、深さ0.6mの大型柱穴跡である。SP1932は縦穴住居跡SH59の下部で検出した柱穴跡で、SP1823とほぼ同じ規模である。SP1846は若干小型だが、写真記録を見ると、平面プランの精査と底場までの掘削が十分に行われていない可能性が高く、図化した遺構形状は元来の形状を示すものではない。

柱痕はSP1823を参考にすると直径約1.2mである。柱痕部の埋土は主として暗褐色土、裏込め土は

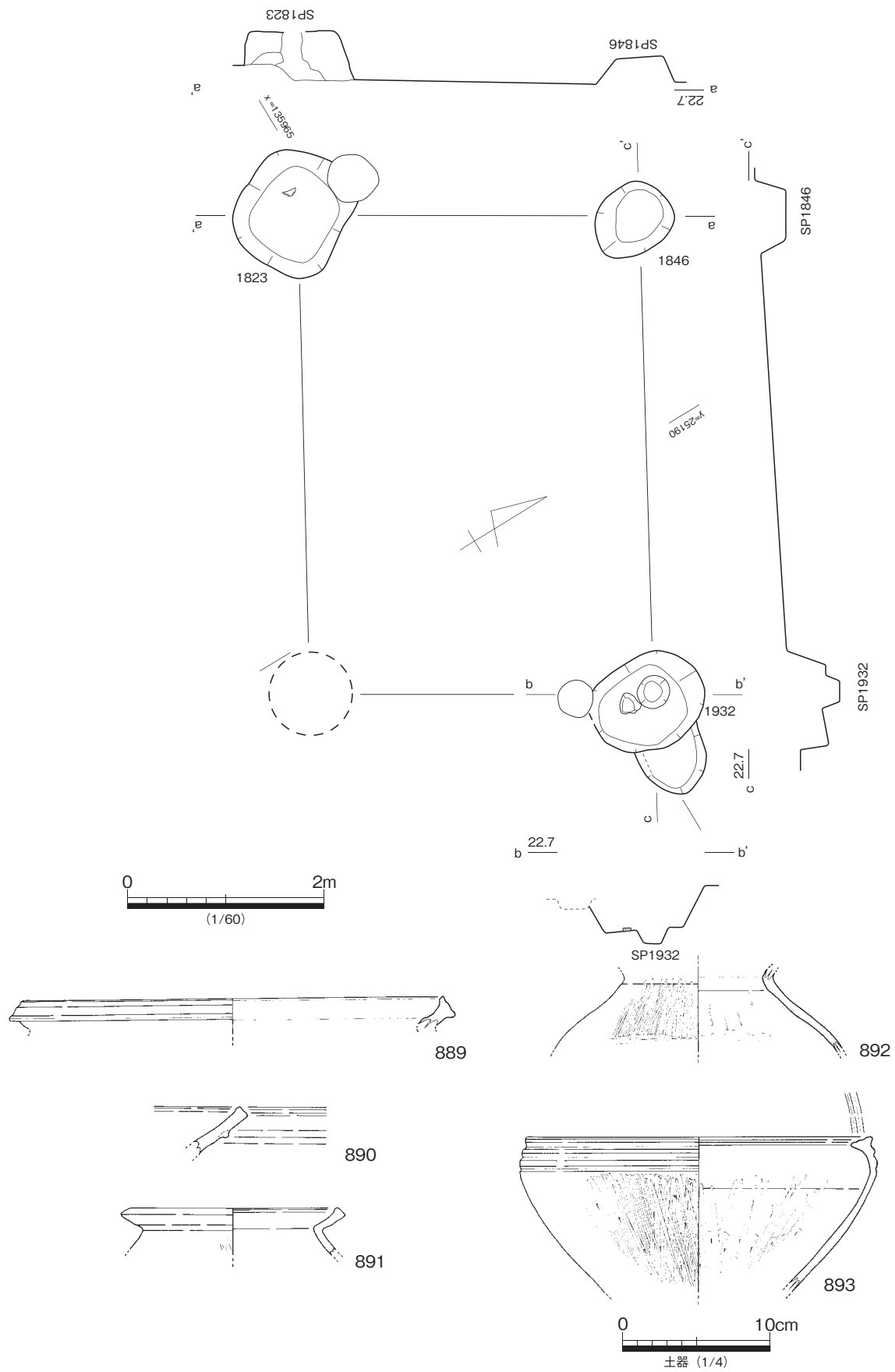


图 152 SB21 平·断面·出土遺物

基盤層類似の黄色系シルト層で、褐色土ブロックを多く含む。なお、SP1846は調査写真を見ると、柱抜取穴のみを掘削したものと言える。出土遺物は889～892がSP1846出土、893がSP1823出土である。
(森下)

土器 889は大形甕の口縁部である。外面に施される2条の凹線文は浅い。890は受け口状の口縁部をもつ直口壺の口縁部であり、口縁部上端面に1条の凹線文、外面に無刻目の1条突帯を付与する。891は跳ね上げ状の口縁部をもつ甕であり、外面に1条の凹線文が見られる。892は甕頸胴部片であり、肩の張った器形をもち外面にタタキ目が確認できる。893は台付鉢であり、内面のミガキ下にはケズリ調整が確認できる。(信里)

出土遺物は、凹線文出現期の弥生中期後半古段階と中期後半新段階に分けられるが、892の甕や893の台付鉢の年代から、本建物は弥生中期後半新段階古相に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB22 (図 153)

遺構 B区中央東よりで検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(2.3m)、桁行2間(4.85m)の構造をもつ。主軸方位は北から西へ65度を測る。位置的には竪穴住居跡SH27や掘立柱建物跡SB07と重複する。

柱穴跡は長方形・円形で、最大一辺0.7m、直径0.8mの柱穴等が組み合う。深さは0.4～0.6mを測る。埋土は基盤土の黄色系シルトに褐色土ブロックが混じる土で、柱抜取穴は褐色土である。

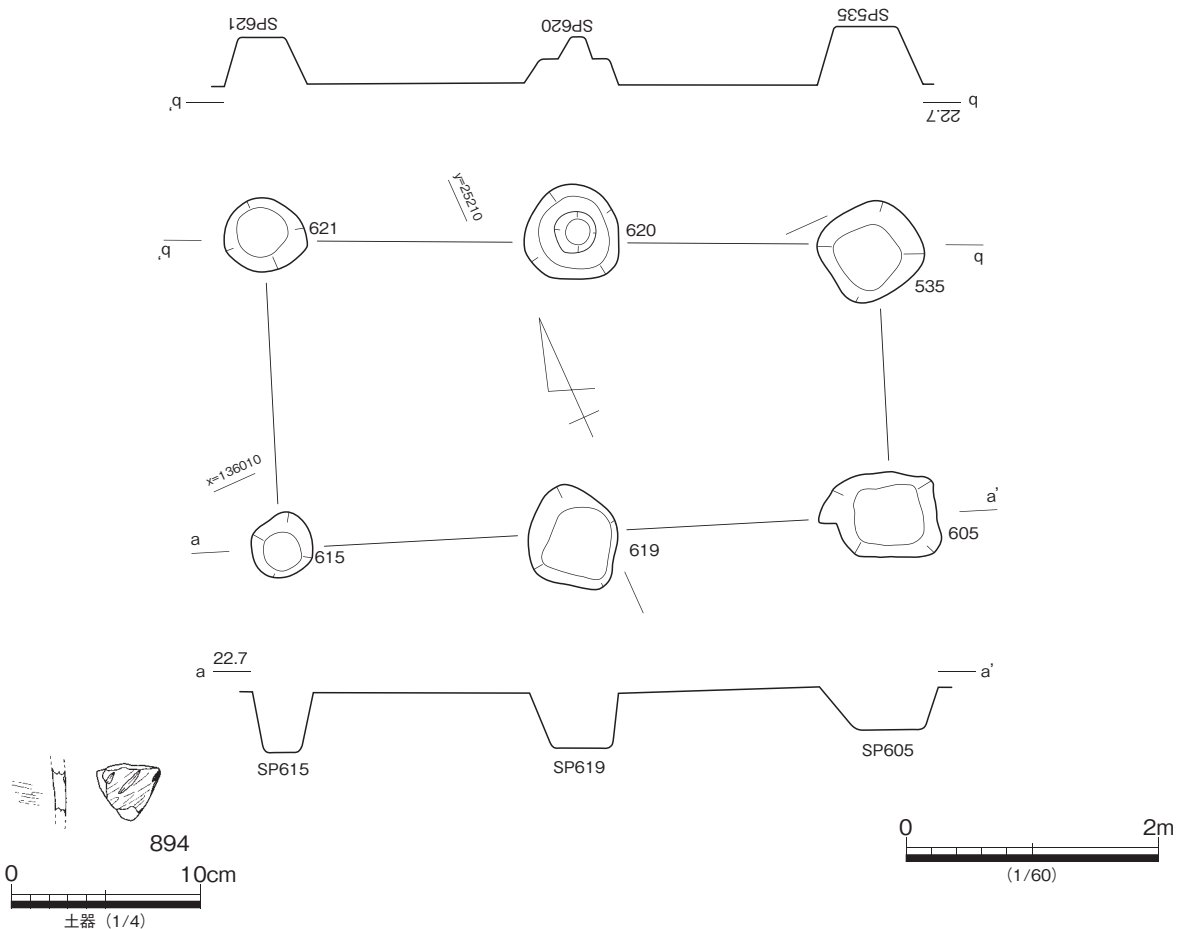


図 153 SB22 平・断面・出土遺物

出土遺物は少量で、SP535 出土の小片のみ図化した。(森下)

土器 894 は内面のケズリ調整が消去されていることから、壺の胴部片の可能性が高い。外面には、ハケ原体による列点文が見られる。(信里)

出土土器が少量に留まるため時期決定に課題を残すが、894 の土器片の帰属時期から、本建物は弥生中期後半に属するものと推定できる。また、周辺の遺構との位置や併存状況から、本建物は中期後半中段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB23 (図 154)

遺構 B区北東部、SR02 下層溝より北側で検出した掘立柱建物跡である。直角に組み合う 3 基の柱穴跡で、調査区外に推定される柱穴跡と合わせて建物跡を復元した。梁間 1 間 (1.9m)、桁行 2 間以上と推定する。埋土は褐色土系シルト層を基調として基盤土の黄色土ブロックを多く含む土で、柱痕部が褐色土となる。SP672・667 は廃絶に当たって、柱抜き取り後に礫を投入する。

当該建物跡は SB19 と重複するが、柱穴跡の重複関係は確認できなかった。895・900・903 が SP667、896・897～899・902・905 が SP672、901・904 が SP674 から出土している。(森下)

土器 895 は器台の口縁部であり、口縁端部外面にやや浅い 3 条の凹線文を施し、形態から弥生後期前半古段階に帰属するものである。896 は受け口状の口縁部をもつ直口壺で、口縁端部外面に 1 条の凹線文が見られる。形態から、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に比定される。897 は細頸壺の胴部片であり、胴部最大径付近に断面方形の突帯を付与する。形態から吉備地域からの搬入・模倣土器と見られ、弥生後期前半古段階から後期前半中段階に比定される。898 は甕口縁部であり、肉厚な口縁部が短く外反するもので、弥生後期前半新段階に比定される。899 の甕口縁端部外面には、凹線文が確認できない。900、901 は台付鉢の口縁部である。902 は椀形高杯の口縁部であり、外面に横位の分割ミガキが確認できる。903 は外面を多条の凹線文帯で飾る弥生中期末の台付鉢の口縁部である。904 は口縁部が内傾する高杯で、弥生後期初頭の所産と見られる。905 は高杯脚端部である。端部の拡張があまり行われていないことから、弥生中期後半新段階に比定される。(信里)

出土土器の中で最も新相を示す 898・899 等の年代観から、本建物は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SB24 (図 155)

遺構 B区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。A区中央攪乱により、埋土の上部を削平されており、特に SP815・891 は底場付近のみが遺存する状況であった。

梁間 1 間 (3.55m)、桁行 1 間 (2.7m) の構造で、SP752 は古代以後の柱穴跡と重複し、壊されている。SP815 は隅丸方形を呈し、長辺 1.35m、短辺 1.05m を測る大型柱穴跡である。SP739 はやや小振りで、一辺 0.8m の方形柱穴跡である。柱穴規模の大小はあるが、方形を基調とする建物跡は 1×1 間に多い形態である。

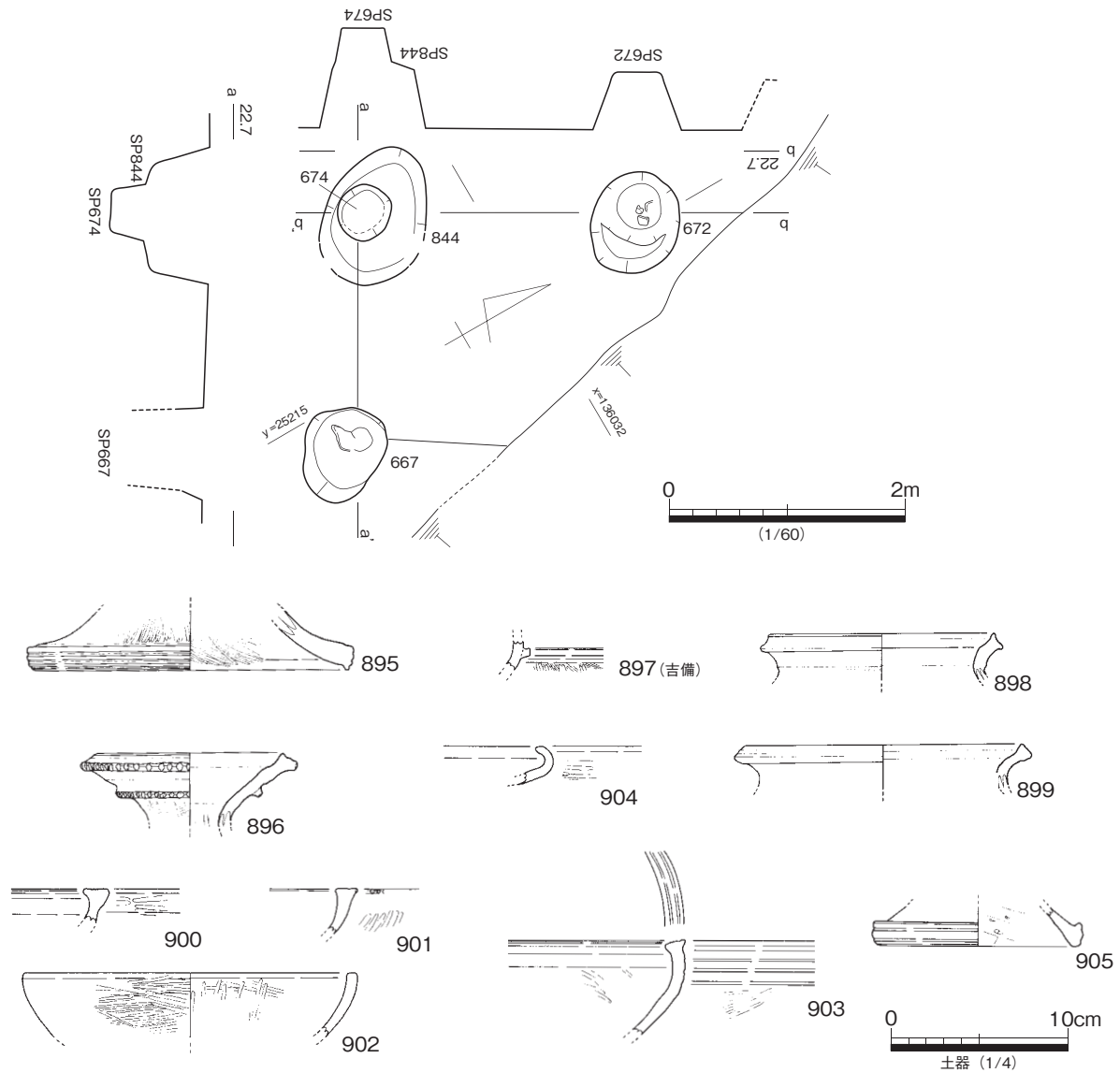


図 154 SB23 平・断面・出土遺物

柱痕は SP739 を参考にすると直径約 0.25m である。柱痕部の埋土は主として暗褐色土、裏込め土は基盤層類似の黄色系シルト層で、褐色土ブロックは少ない。また、焼土塊は出土していない。土器片は 906・910 が SP815、907～909 が SP752 から出土している。(森下)

土器 906 は広口壺の口縁部である。直立気味に口縁部が短く外反し、口縁端部の 2 条の凹線文もやや浅いものであることから見て、弥生中期後半新段階に位置付けられる。907 は頸部に押捺突帯を施す中形甕の口縁部である。押捺突帯と口縁部の形態から見て、弥生中期後半中段階に比定される。908 は甕口縁部片である。909 は筒状の甕底部片であり、形態から弥生中期後半中段階に位置付けられる。910 は台付鉢の口縁部、摩滅する外面に 2～3 条の凹線文が見られる。(信里)

出土土器の中で新相を示す 906 の広口壺の年代観から、本建物は弥生中期後半新段階古相に廃絶した

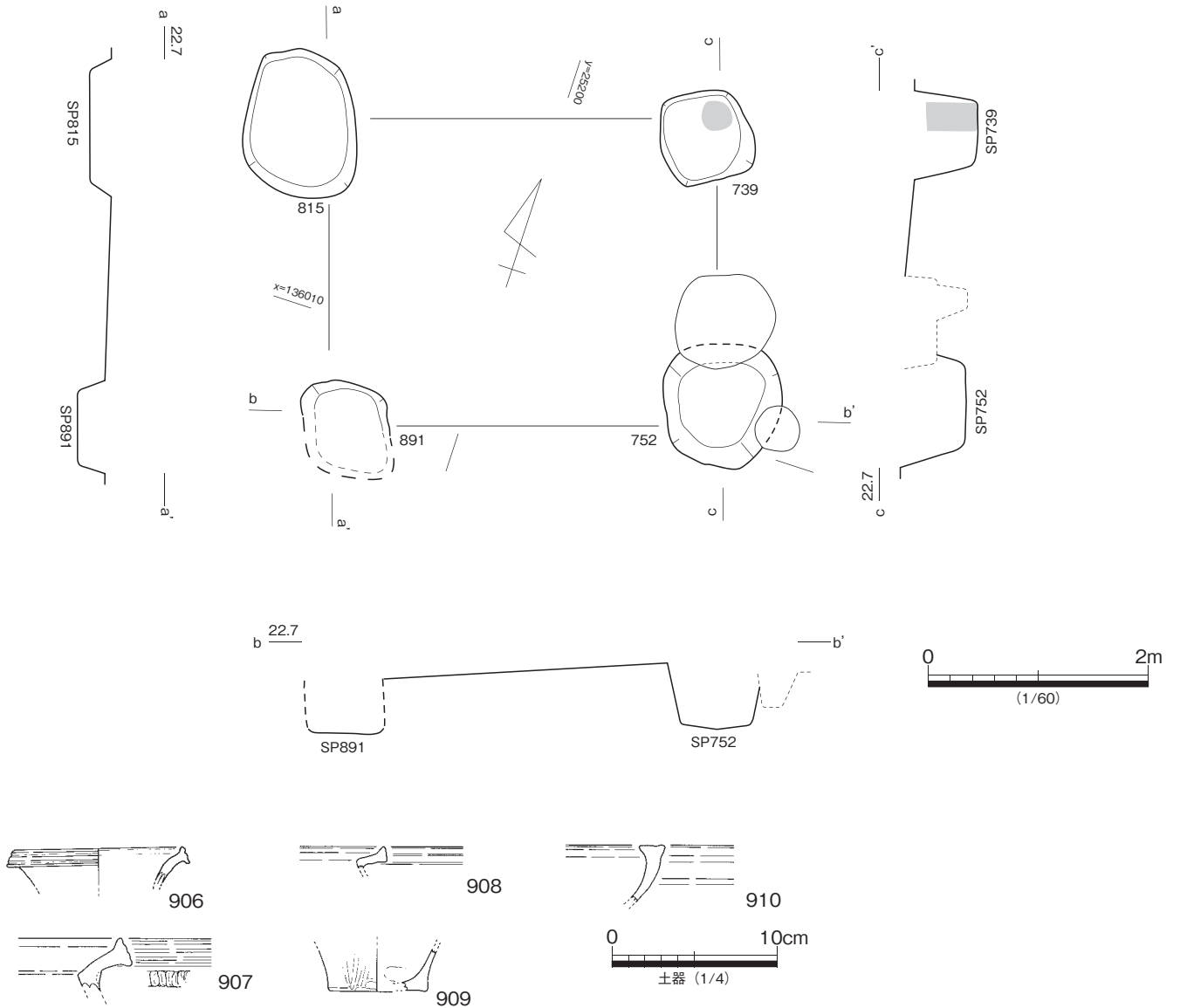


図 155 SB24 平・断面・出土遺物

ものと推定される。(森下・信里)

SB25 (図 156)

遺構 B区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間(3.0m)、桁行2間(5.6m)の構造をもつ。主軸方位は北から東へ77度を測る。掘立柱建物跡SB10と重複し、SP767の新段階の柱穴跡が当該建物跡に帰属する。A区中央攪乱に上部を削平されており、いずれの柱穴跡も底場付近のみ遺存する。

柱穴跡は長方形・円形で、最大一辺0.7m、直径0.8mの柱穴等が組み合う。深さは検出面から0.3～0.5mを測る。埋土は基盤土の黄色系シルトに褐色土ブロックが少量混じる土で、柱痕柱抜取穴は褐色土である。

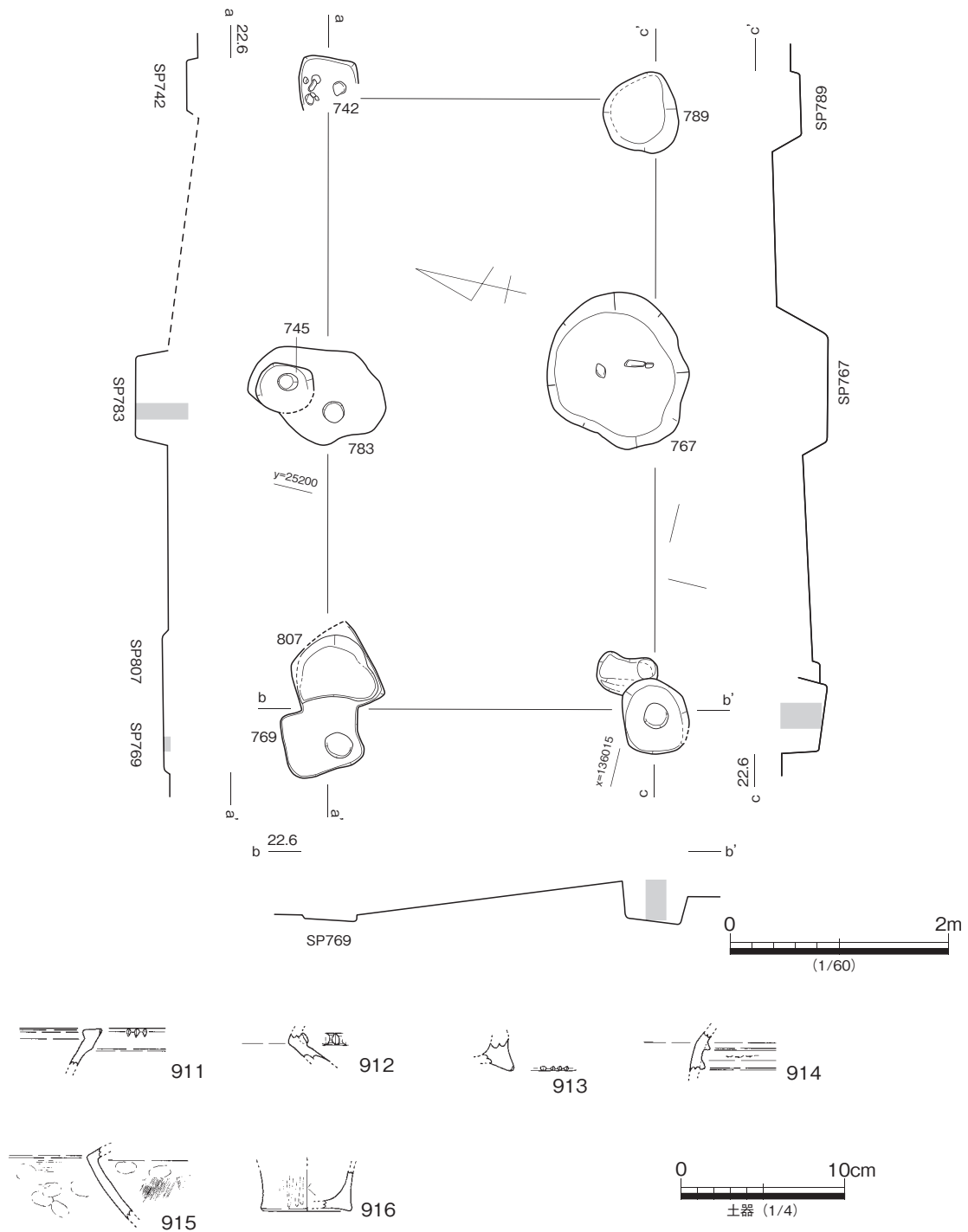


図 156 SB25 平・断面・出土遺物

出土遺物は少量で、SP767 出土の遺物は新古の柱穴跡の遺物を区分できなかったことから、SB10 に元来所属する可能性があるものを含めてここに提示した。911・913・914・916 が SP767、912 が SP769、915 が SP745 より出土した土器片である。(森下)

土器 911 は口縁部が受け口状となる壺で、口縁端部に刻目を施す。912 は頸部に押捺突帯を施す甕であり、内面に口縁部の反転に伴う明瞭な稜線を留める。913 は大形甕の口縁部片で、外面に凹線文は見られず、下端部に刻目をもつ。914 の壺頸部片は、外面に断面三角形の突帯を 2 条付与する。915 は甕の頸部から肩部の破片で、内面に口縁部の反転に伴う明瞭な稜線を留める。916 は筒状を呈する甕底部片であり、弥生中期後半中段階に特徴的なものである。(信里)

出土遺物は弥生中期前半新段階から中期後半中段階までの時間幅をもち、上記のとおり、多くの柱穴跡で重複関係による前後関係が確認されていることが影響していると思われる。本遺構と重複関係がある SB10 は弥生中期後半古段階に比定されるため、ここでは出土土器の最も新相を示す時期を採用し、本建物の廃絶を弥生中期後半中段階に比定しておく。(森下・信里)

SB26 (図 157)

遺構 F 区西端から Y 区にかけて検出した掘立柱建物跡である。梁間 1 間 (3.1m)、桁行 2 間 (5.2m) の構造をもつ。主軸方位は北から東へ 55.5 度を測る。北東の隅柱は攪乱により滅失する。また、本建物は既に「旧練兵場遺跡 I」で、SBy04 として報告されている。

柱穴跡は隅丸方形で、一辺 0.8 ～ 1.0m を測る。深さは検出面から 0.7m を最大とする。埋土は基盤土に類似する黄色系シルトに褐色土ブロックが少量混じる土で、柱痕及び柱抜取穴は褐色土である。柱痕から直径約 0.2m の柱が推定できる。

出土遺物は少量で、SP1832 より出土した遺物を第 308 図に掲載した。また、Y 区では当該建物跡の北西隅柱と南西隅柱の間に土坑 Sky01 を検出している。土坑 Sky01 は、長方形で深さ 0.44m の貯蔵穴と推定される遺構で、遺構主軸が当該建物跡に合致し、両柱間における位置関係も丁度中間に収まる。このことから、当該建物跡に関連する遺構である可能性が高い。(森下)

土器 2267 は広口壺の口縁部であり、形態から弥生中期後半中段階に比定される。また、「旧練兵場遺跡 I」で報告された遺物 (8002 ～ 8004) は、弥生中期後半古段階に位置付けられる。(信里)

ここでは、2267 の広口壺の年代観から、本建物は弥生中期後半中段階に廃絶したものと推定する。

(森下・信里)

SB27 (図 158)

遺構 D 区西北で検出した掘立柱建物跡である。一部で、竪穴住居跡 SH55 の埋土を基盤として柱穴を設けており、SH55 廃絶後に構築された建物跡と言える。

梁間 1 間 (2.55m)、桁行 3 間 (6.1m) の構造をもつ。主軸方位は北から東へ 65 度を測る。柱穴跡の形状はすべて円形で、褐色系埋土を有し、直径 0.4 ～ 0.5m、深さは 0.3 ～ 0.5m を測る。柱痕は直径 0.15 ～ 0.18m で他の掘立柱建物跡と比較して小型である。建物廃絶時、SP1670・1688 は柱抜き取り後の窪みに礫を投入する。このような小型円形柱穴で構成する掘立柱建物跡は今回の調査区では少ないが、SR02 を挟んで本調査区に近接する 12 次調査では同様の建物跡が複数棟検出されている。

出土遺物の内、917 は SP1707、918 ～ 920 は SP1700、921 は SP1670、922 は SP1709、923 は SP1691

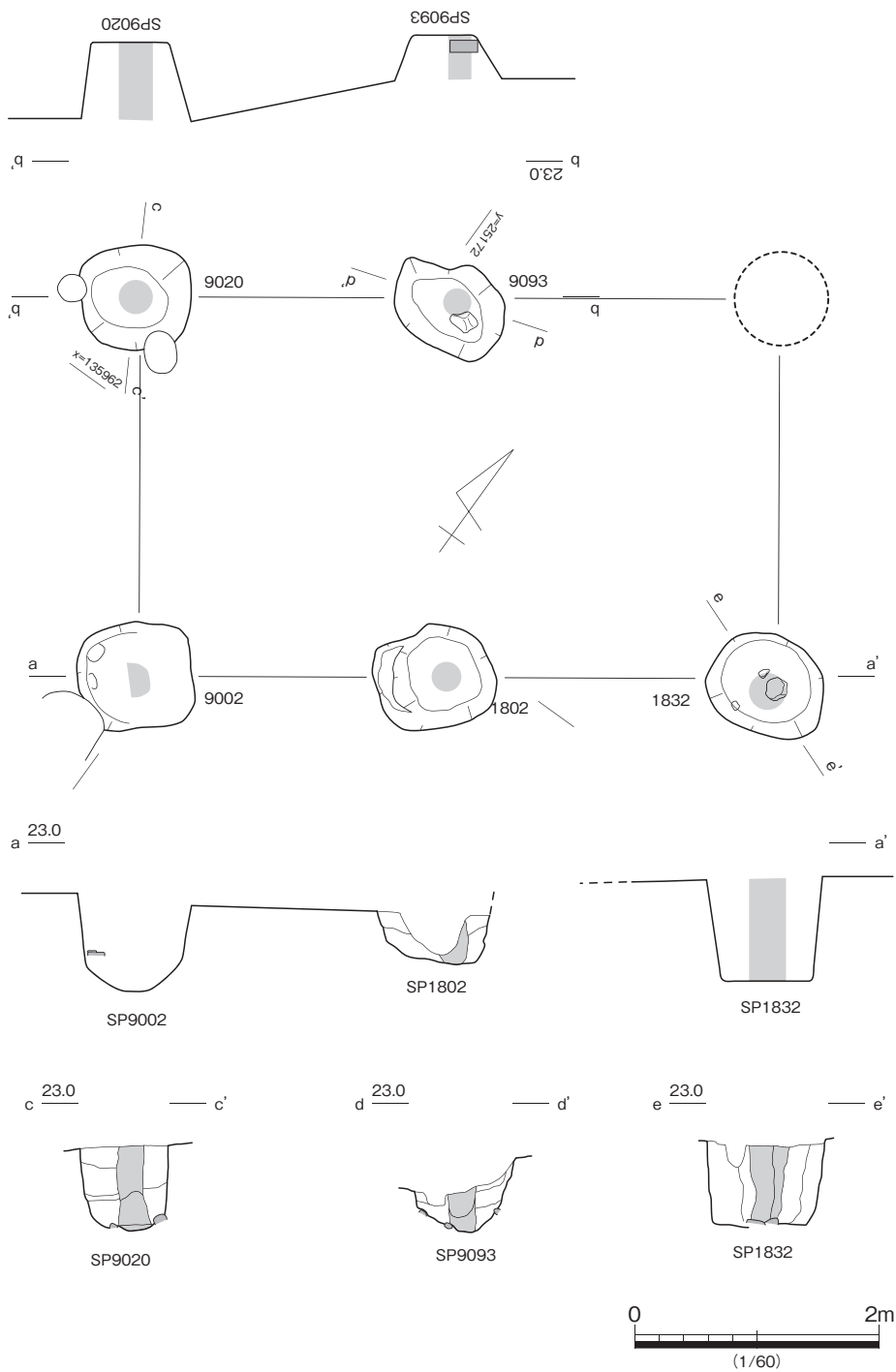


図 157 SB26 平・断面・出土遺物

から出土した。(森下)

土器 917 の壺胴部片は、胴部最大径付近に 1 条の突帯を施し、その上面に縦位の棒状浮文を付与する。また、突帯の上位には、ヘラ描きによる鋸歯文が見られ、胎土中に雲母片をやや多く含む。形態や

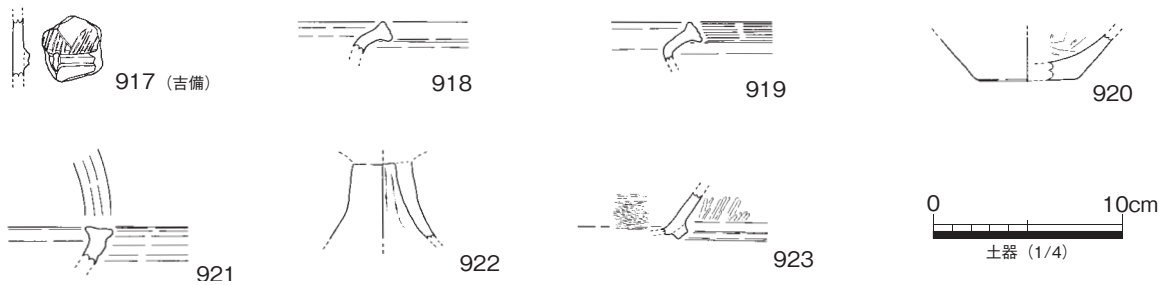
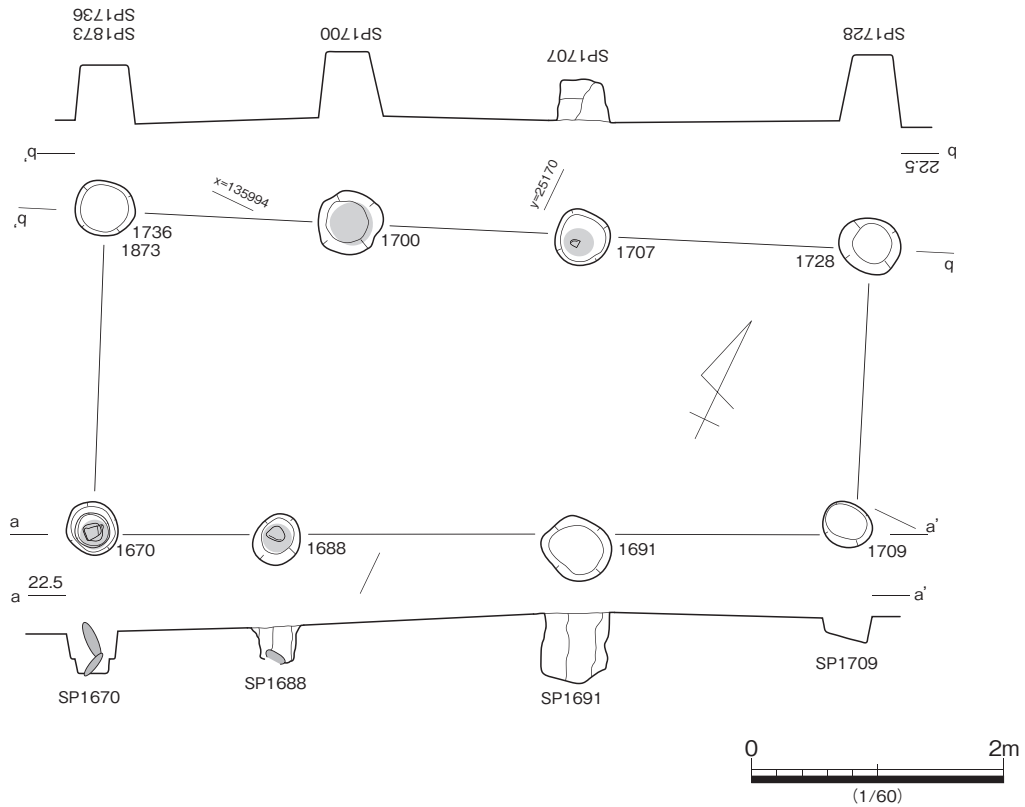


図 158 SB27 平・断面・出土遺物

文様から、吉備地域に多く見られる細頸壺等の胴部片と考えられる。918・919は甕口縁部、919は口縁部外面に退化した3条の凹線文を施す。920は甕底部片で、形態から弥生後期前半新段階に比定される。921は台付鉢の口縁部であり、口縁部外面及び上端面に凹線文が確認でき、弥生中期後半の混入品と考えられる。922は高杯脚部片であり、見込みに形骸化した円盤充填が見られる。923は装飾高杯の杯部片で、外面の器形反転部に断面方形の1条突帯を付与する。現状で赤色顔料の付着は確認できない。(信里)

出土土器から、本建物は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

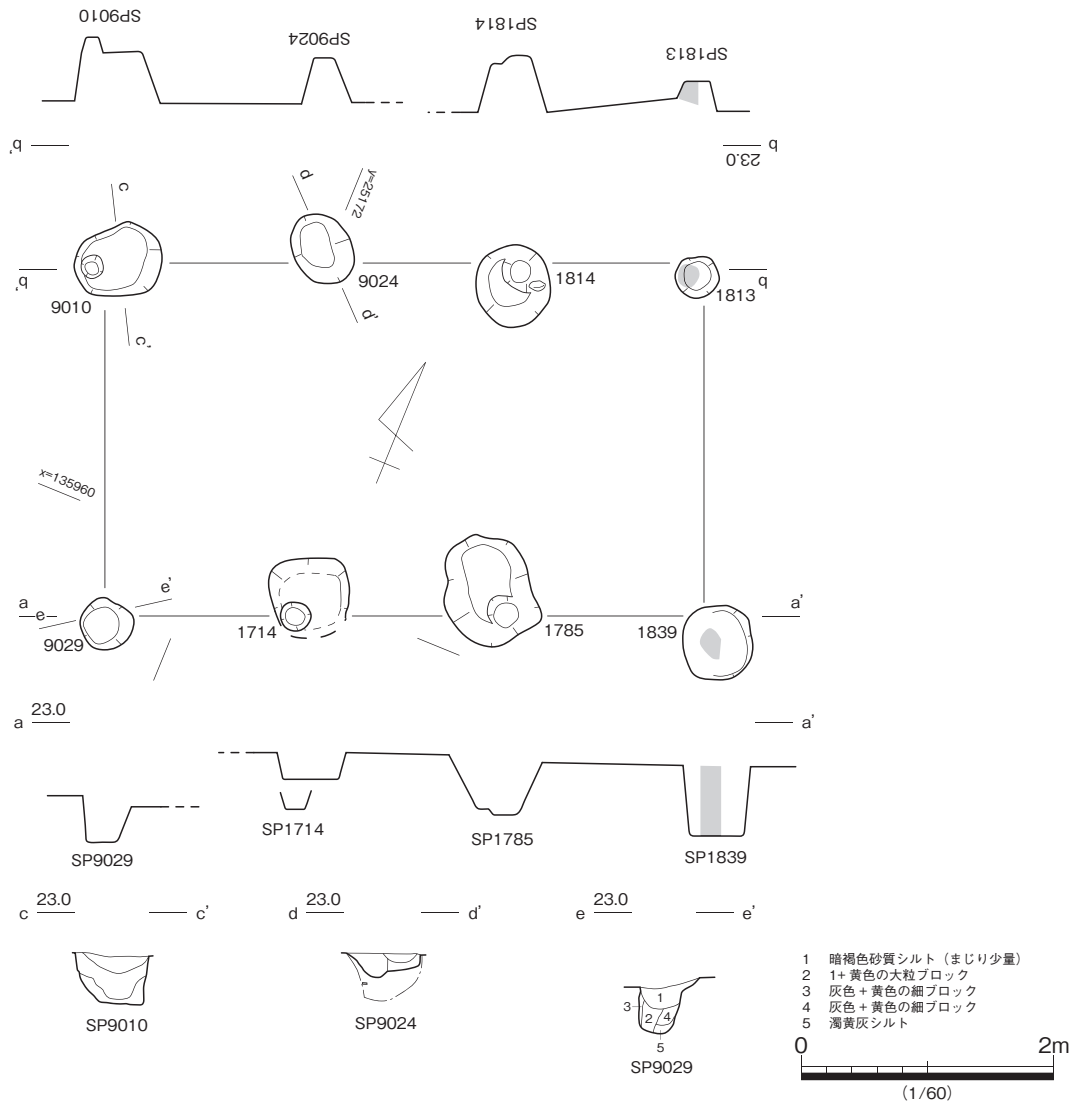


図 159 SB28 平・断面・出土遺物

SB28 (図 159)

遺構 F区南西部で検出した掘立柱建物跡であり、23次調査Y区の柱穴跡と組み合わせることで、梁間1間(2.8m)×桁行3間(4.7m)の柱構造を復元できる。また、「旧練兵場遺跡I」の報告書ではY区SBY03として報告されている掘立柱建物跡に相当するものであり、SB26と重複関係にある。建物の主軸方向は概ね東西棟であり、床面積は13.2㎡と推定される。東側の隅柱となるSP1813・1839のみ柱通りが悪く、若干南方向へずれるため、これらの2基の柱穴跡を除いた梁間1間×桁行2間での復元の可能性もある。柱穴跡の平面形は隅丸方形と円形、楕円形が見られ、楕円形のものについては、柱材の抜き取りが想定できる。(森下)

図化可能な土器片は見られないが、弥生中期後半中段階の廃絶が想定されるSB26と重複関係にあることや、建物を構成する柱穴跡に方形と円形が混在する様相から、本建物の帰属時期を弥生中期後半新段階と推定する。(信里)

SK04 (図 160)

遺構 A区で検出した長楕円形の土坑である。長軸1.2m以上、幅0.63mを測る。断面形はU字形を呈し、深さは検出面から0.32mである。埋土中には炭化物は含まれず、黄色基盤層ブロックが多数混在していた。また、検出範囲やや北寄りに弥生時代中期の柱穴跡SP62を検出した。SP62との先後関係は明かではないが、当該土坑完掘後にSP62のプランを検出している。SP62は直径0.4mの柱穴跡で、掘削時の写真を見る限り、柱穴跡内柱痕部のみを検出した可能性が高い。このことから、SP62の柱抜き取り痕がSK04で、本来のSP62の柱穴掘り形については、SP62下部に別に存在している可能性が高い。つまり、SK04・SP62は掘立柱建物を構成する大型柱穴の一部と見るのが妥当であろう。周辺柱穴跡との関係から建物跡の復元を試みたが、A区調査範囲内では復元することはできなかった。

出土遺物は、SK04とSP62から出土したものを併せて提示している。926～930はSP62掘り形から出土した土器であり、924・925・931はSK04から出土したものである。当該遺構が掘立柱建物を構成する柱穴跡であれば、柱抜き取り時に流入した遺物とすることができる。なお、実測できる石器は出土していないが、サヌカイト剥片が数片程出土している。(森下)

土器 924の甕口縁部外面には、5条の擬凹線文が施される。925は受け口状の口縁部をもつ細頸壺であり、凹線文出現期の弥生中期後半古段階に比定される。926は厚みから見て、細頸壺の胴部片と見られる。927は壺底部片で、弥生中期後半期の所産と見られる。928の甕口縁は、内面に強いヨコナデ調整に伴う稜線が見られる。形態から弥生中期後半中段階に位置付けられる。929は口縁部が緩やかに外反する壺口縁と見られ、口縁端部内面を拡張する。形態から弥生中期後半古段階の所産と見られる。930は口縁部が内傾する高杯で、外面に焼成破裂痕が見られる。形態から弥生中期末に比定される。931は台付鉢の口縁部で、内側に拡張する口縁部外面及び上端面に凹線文が施される。弥生中期後半新段階の所産と見られる。(信里)

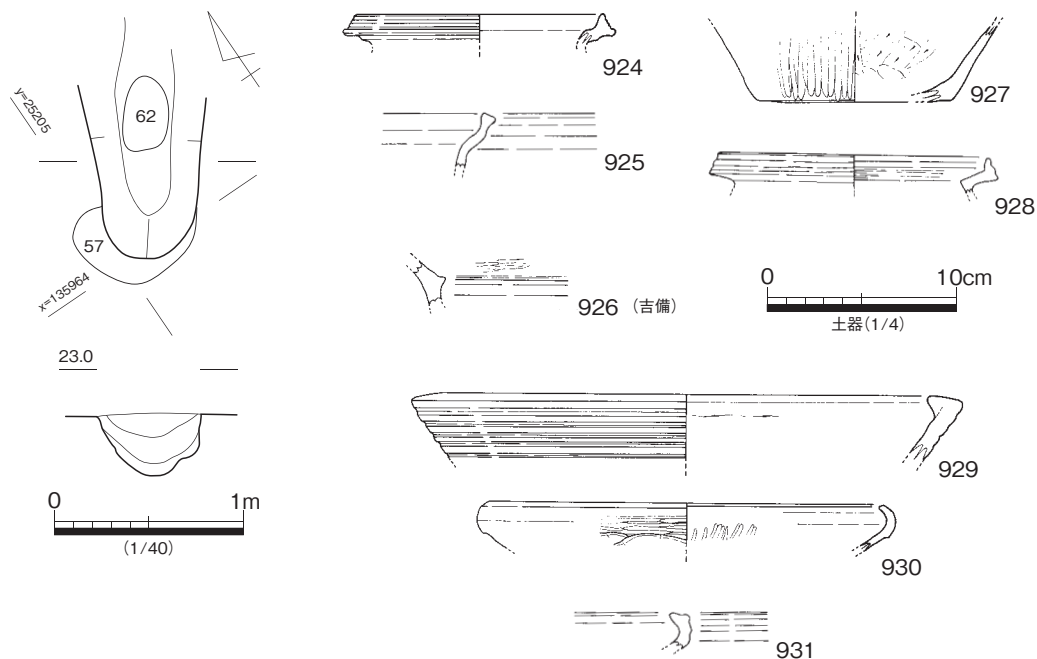


図 160 SK04 平・断面・出土遺物

出土土器に時間幅が見られるが、926の器台脚端部の年代観から、本遺構は弥生後期初頭に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SK06 (図 161)

遺構 A区西側で検出した円形土坑である。直径1.34m、深さ0.4mを測る。断面は方形で底面が平坦であることが特徴である。SK13・14・16等と同様の形態で、このタイプの土坑がA区に集中し、他の調査区にはほとんどない。

当該遺構の検出面は、A区中央攪乱の底面にあり、他の遺構面と比較して約0.1m低いレベルにあるので、本来の深さは0.5m以上であったのが確実である。埋土は上下2層に区分した。上層(1層)は暗褐色土で黄色基盤土ブロックの細粒が混じる。下層(2層)は主に黄色土と褐色土がほぼ均等に混じるブロック層である。下層は意図的に埋めた土層とみて良い。下層の層厚は約0.2mである。上層は廃

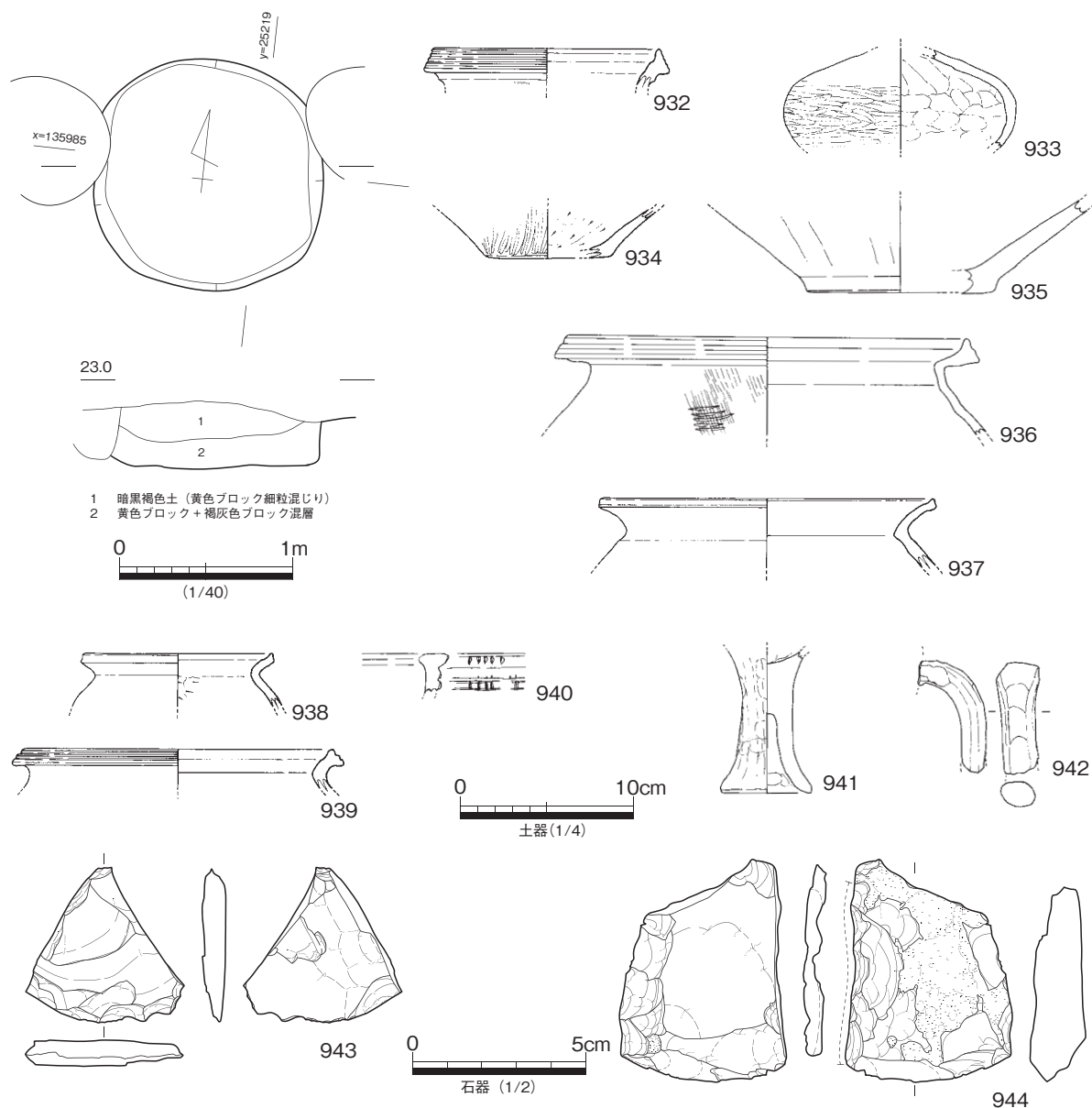


図 161 SK06 平・断面・出土遺物

棄後の窪みに自然堆積した土層である可能性が高い。出土遺物は主に上層から出土した。(森下)

土器 932は短頸広口壺の口縁部であり、口縁端部外面の浅い3条の凹線文が施される。933は細頸壺の胴部片である。934・935は壺底部片である。934は弥生中期末に比定されるが、935は弥生後期初頭以降に下る可能性が高い。936は大形甕であり、外面の肩部に細いタタキ目が見られる。口縁端部外面の凹線文が退化していることや口縁部形態から弥生中期末に位置付けられる。937は弥生中期後半古段階の甕であり、口縁端部外面に1条の凹線文が確認できる。938の甕口縁部は、形態から弥生後期前半新段階まで下る。939の甕は、短く屈曲する口縁端部外面に、2条の凹線文を施すもので、弥生後期前半古段階に位置付けられる。940は台付鉢の口縁部。941は成形・調整の粗雑さから見て、支脚と判断した。942は、弥生中期後半期のジョッキ形土器の把手の可能性が高い。(信里)

石器 サヌカイト剥片石器が2点出土した。943は片面に粗い調整加工を施したスクレイパー片である。944は片面に自然面を残す厚みのある剥片の一辺に顕著な敲打痕を留め、対辺に粗い調整加工を残す楔状石核である。図下端には上下方向から加圧された裁断面を認める。(森下)

出土土器から、本遺構は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SK08 (図 162 ~ 164)

遺構 A区南側中央部で検出した井戸状土坑である。SH10の南西1.0mの位置で、浅い土器溜り遺構SX02と重複して検出した。当初SX02の一部として調査に着手したが、調査過程で当該土坑の掘り形を検出し、先後関係を検討した結果、SX02埋没後に当該土坑が掘削されたものと判断した。当該遺構上層の出土遺物はSX02として取り上げたが、出土状況実測図から復元可能な土器については当該遺構所属に変更した。

遺構の平面形は隅丸方形気味の円形で、直径0.95mを測る。断面は円筒形で底面に向かって径が窄まる。底面は緩やかな凹面で底縁は角を形成しない。掘り形は基盤層の黄色シルト層から掘削されているが、検出面から0.83mの深さで灰色砂礫層に達する。その砂礫層を約0.1m掘り下げた面が底面である。埋土は上部(1・2層)が褐色土と黄色土が混じり、土器片がレンズ状に堆積する土層で、下部(3層)は灰色砂と黄色土ブロック混在層で土器片は少ない。埋土最下部は図上で示していないが、灰色砂が多い軟弱な土層であった。上部堆積層の中程(取り上げ時に「中層」とした。)には図示したように中央が窪むように遺存状況が良好な土器群が堆積する。これらは廃絶後の埋没途上に一度に投棄された土器群と言える。一方、検出面付近でSX02と同時に検出した土器群はその後の窪みに混在した土器群である。出土遺物は土器が多く、石器は被熱流紋岩片984が1点出土したのみである。(森下)

土器 945は完形の広口壺で、胴部外面の下半部を中心に左上がりの平行タタキが見られる。946は口縁部が緩やかに外反する広口壺であり、接点は見られないが図示したような安定した平底をもつものと見られる。947は口縁部が短く外反する広口壺であり、弥生後期前半古段階のものと比較して口縁部の屈曲が緩くなり、端部の拡張も明確ではない。口縁部が大きく開く広口壺948は、時期的に弥生後期後半新段階に下る可能性が高い。949は短く屈曲する口縁部外面を肥厚するもので、土佐地域からの影

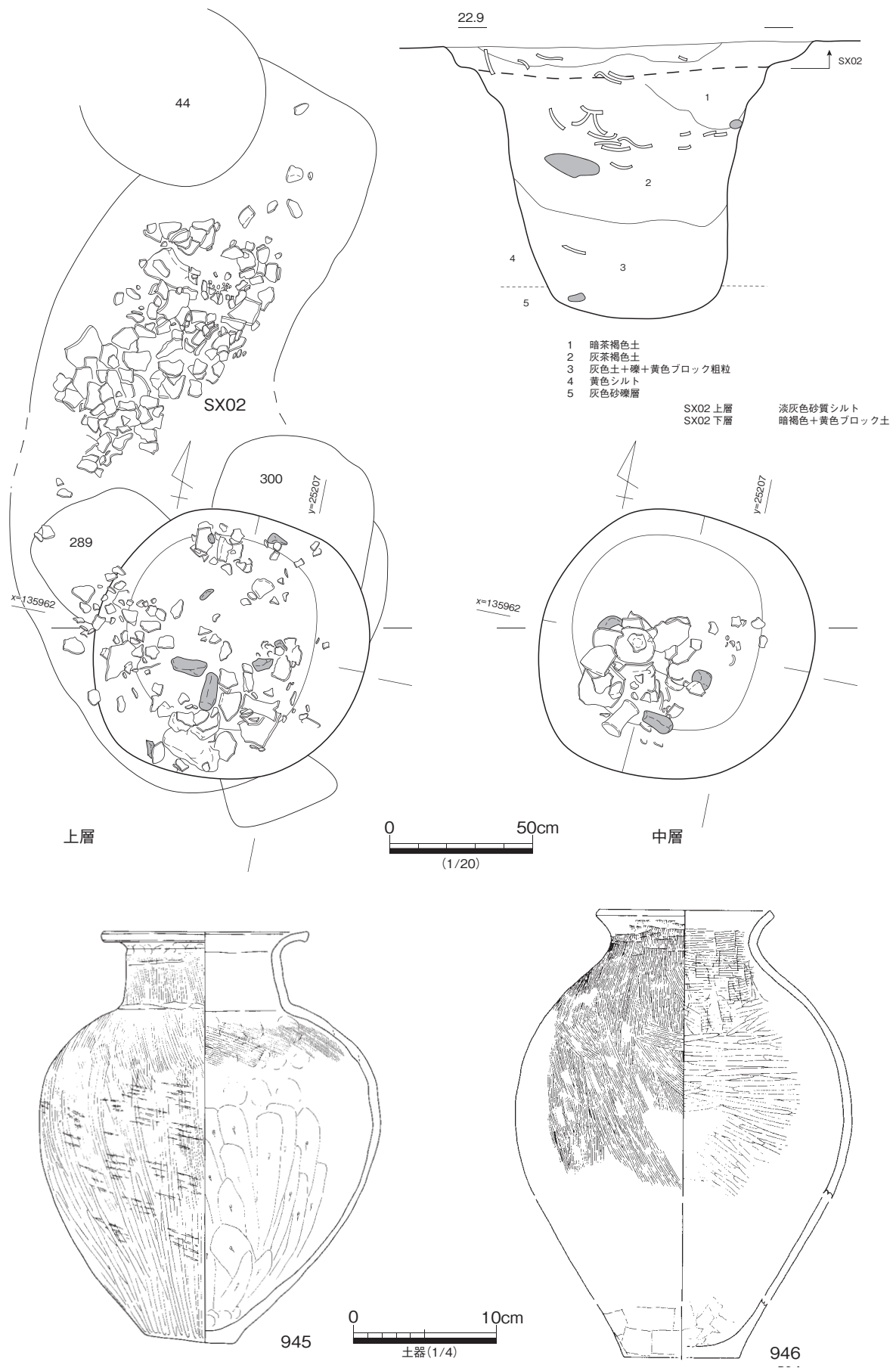


図 162 SK08 平・断面・出土遺物 (1)

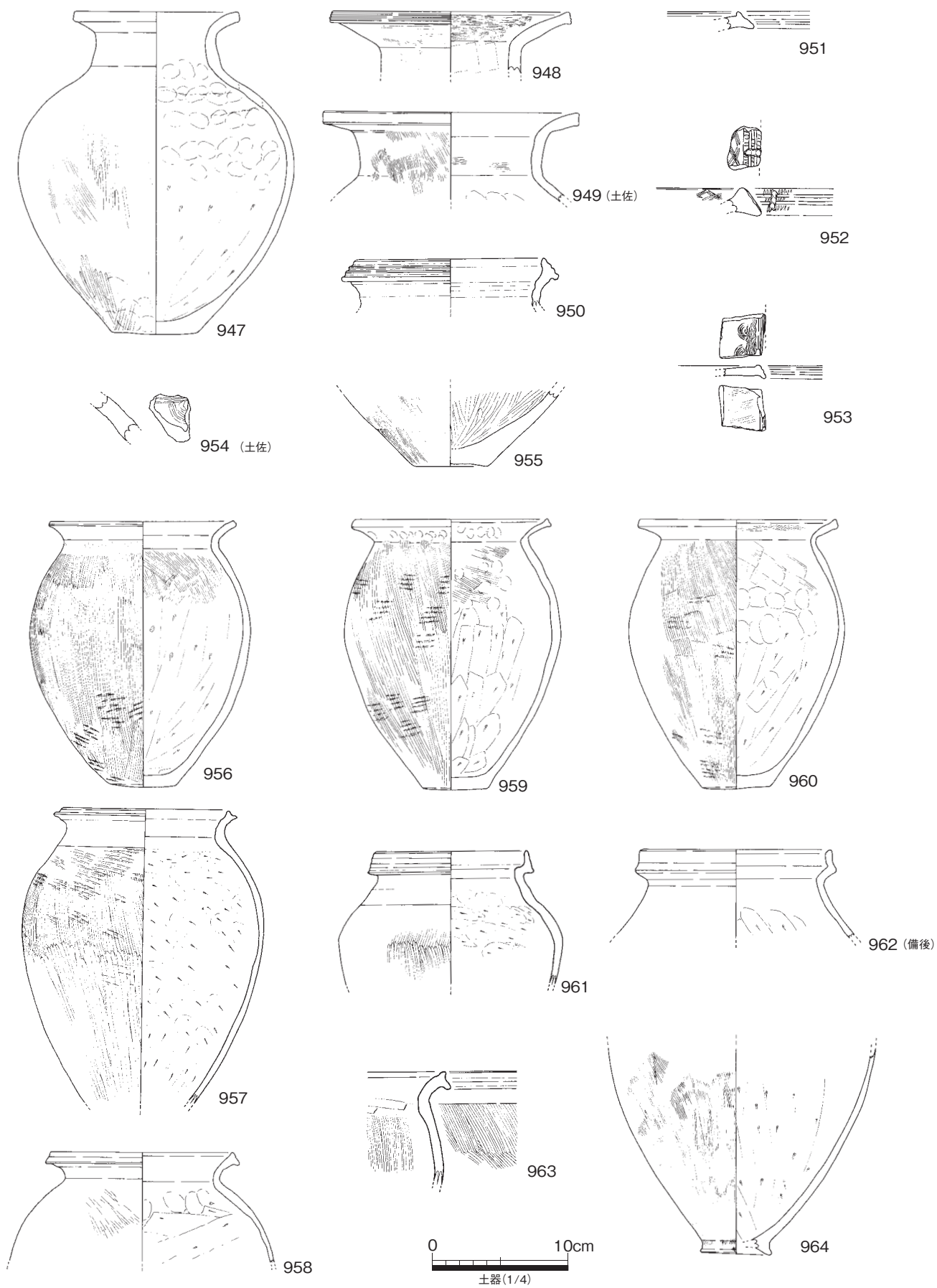


図 163 SK08 出土遺物 (2)

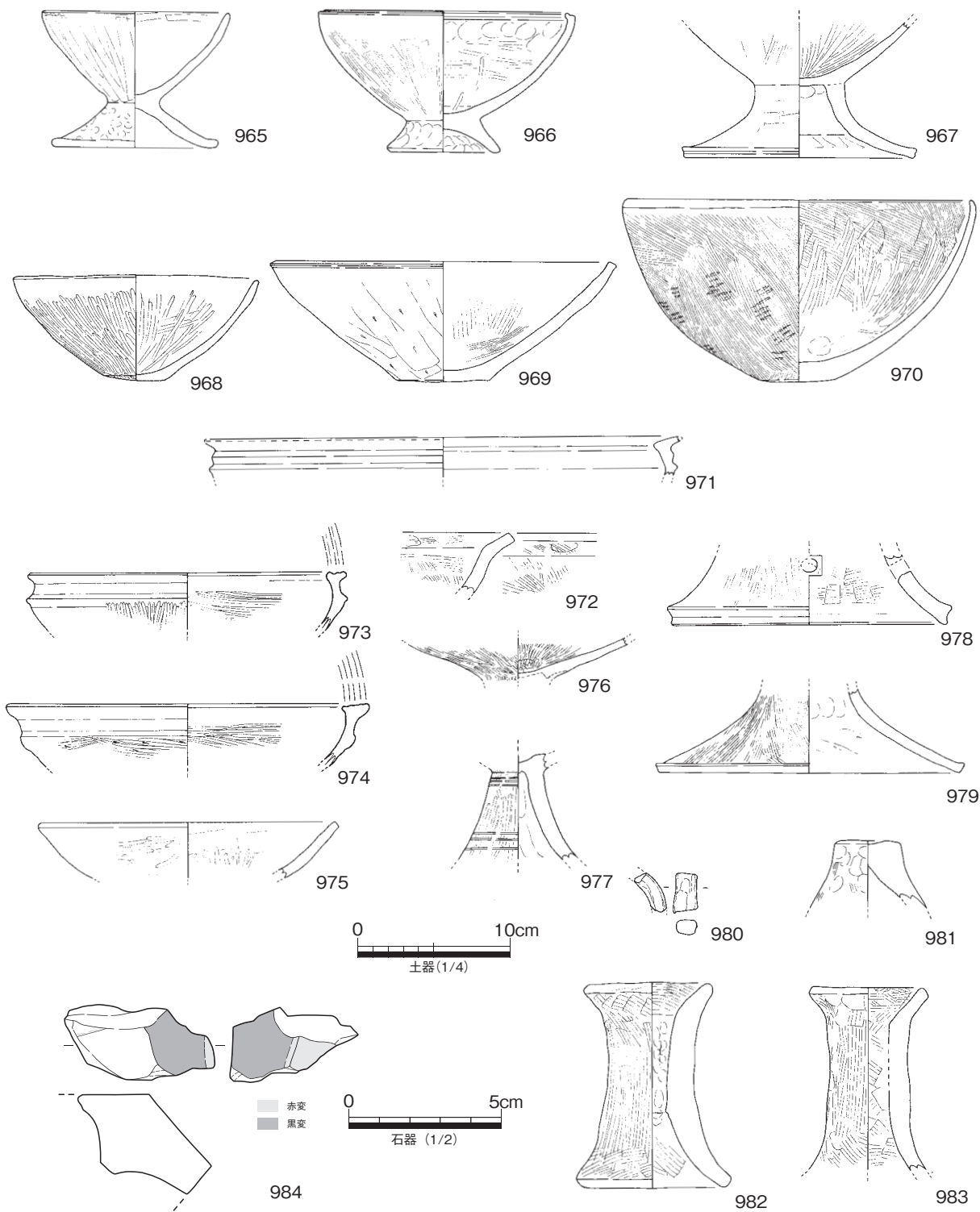


図 164 SK08 出土遺物 (3)

響を想定できる模倣土器である。950 は弥生中期後半新段階の短頸広口壺であり、混入品と見做せる。951 は器台の口縁部であり、形態や退化した凹線文の状態から、弥生後期初頭から前半古段階の幅で捉えられる。952 の広口壺は、凹線文上面の刻目や内面の斜格子文の特徴から、弥生中期後半古段階の所産と見られ混入品である。953 は口縁部内面に櫛描による波状文と扇形文が見られることから、器台の

口縁部の可能性が高い。954 は外面に横位の櫛描直線文と下向きの扇形文を描く壺胴部片であり、文様構成から土佐地域からの搬入・模倣土器と考える。955 は上げ底状の壺底部片である。

957 は半完形の甕であり、短く屈曲する口縁端部外面に擬凹線文、肩部外面に左上がりの細かいタタキ目が見られる。外面のミガキ仕上げを行う最後の段階の所産であり、弥生後期前半新段階の指標となる甕である。958 の甕は、拡張する口縁端部を留めるが、胴部の張りがきつくなり、口縁部の屈曲点が下降する等弥生後期前半新段階に特徴的な属性を留める。961 は口縁端部を上方のみ拡張する甕であり、口縁形態が備後地域の影響のもとに旧練兵場遺跡周辺で組成する特徴的なものである。964 は上げ底状の底部輪台をもつ甕であり、旧練兵場遺跡内で他に類例を見ない。965 は完形の小形台付鉢で、脚台部が高く出現期の様相を留める。966 は完形の台付鉢で、965 と比較して鉢部が大きく脚台部が矮小であるが、口縁部を面取りしており、弥生後期前半新段階の特徴を留めるものである。967 は大形の台付鉢であり、鉢部との接合に形骸化した円盤充填を用いる。968 は完形の鉢であり、大きく開く形態は969 の中形鉢と共通している。970 の大形鉢は、外面のハケ調整の下位に右上がりのタタキ目が見られる。

971 は弥生中期後半中段階の台付鉢の口縁部であり、混入品である。972 は荒いハケ調整を行う大形鉢の口縁部である。973 の高杯口縁部は、弥生後期初頭と見られ混入品の可能性が高い。974 の高杯は口縁端部を両側に拡張するが、上端面の凹線文は緩く退化したものとなっている。975 は大形鉢の口縁部である。976 の高杯杯部は、脚部との接合に円盤充填技法を用いる。977 の高杯は、胎土中に雲母片を多く含み、外面に2帯の櫛描直線文を施す。978 は器台脚端部であり、端部に強いヨコナデを施し、凹線文状に窪みをもたせる。979 は大きく開く脚部をもつ器台である。980 は法量から水差型土器の把手の可能性があり、混入品と見られる。

981～983 は土製支脚である。(信里)

出土遺物に若干の混入品が見られるが、全体的に弥生後期前半新段階に位置付けられる一括資料と捉えることができるため、本遺構の廃絶時期を同時期に推定する。(森下・信里)

SK13・SK14 (図165)

遺構 A区北西部で検出した重複する土坑2基である。いずれもSH16・17の貼床層を除去した後に検出しており、両竅穴住居跡に先行する。SK13はほぼ円形、SK14は不整形の平面形を呈する。断面形はいずれも側壁が垂直に近い筒状形で、底面は平坦で底縁に角がある。埋土はいずれも黄色基盤層ブロックを多く含み、断面図では分層したが、層界は不明瞭である。一度に埋め戻した可能性が高いものと考ええる。SK13では出土遺物は皆無で、SK14では2点の土器片が出土した。

また、同様の土坑は先に記述したSK06や後述するSK15・16・32があり、埋土や断面形が共通する。また、中期後半のSK40とも平面形を除けば共通する。当遺跡では必ずしも多くないが、前期から細々と継続する貯蔵穴の一形態と見るのが妥当であろう。ただし、先述したように、A区のみで検出しており遺跡全体から見ると偏在する傾向がある点にも注視する必要がある。(森下)

土器 985 は口縁部内面に櫛描原体による波状文が描かれることから、器台の口縁部の可能性が高い。形態から弥生後期前半新段階に比定される。986 は甕の口縁部片で、形態から弥生後期後半古段階を中心とした時期に位置付けられる。(信里)

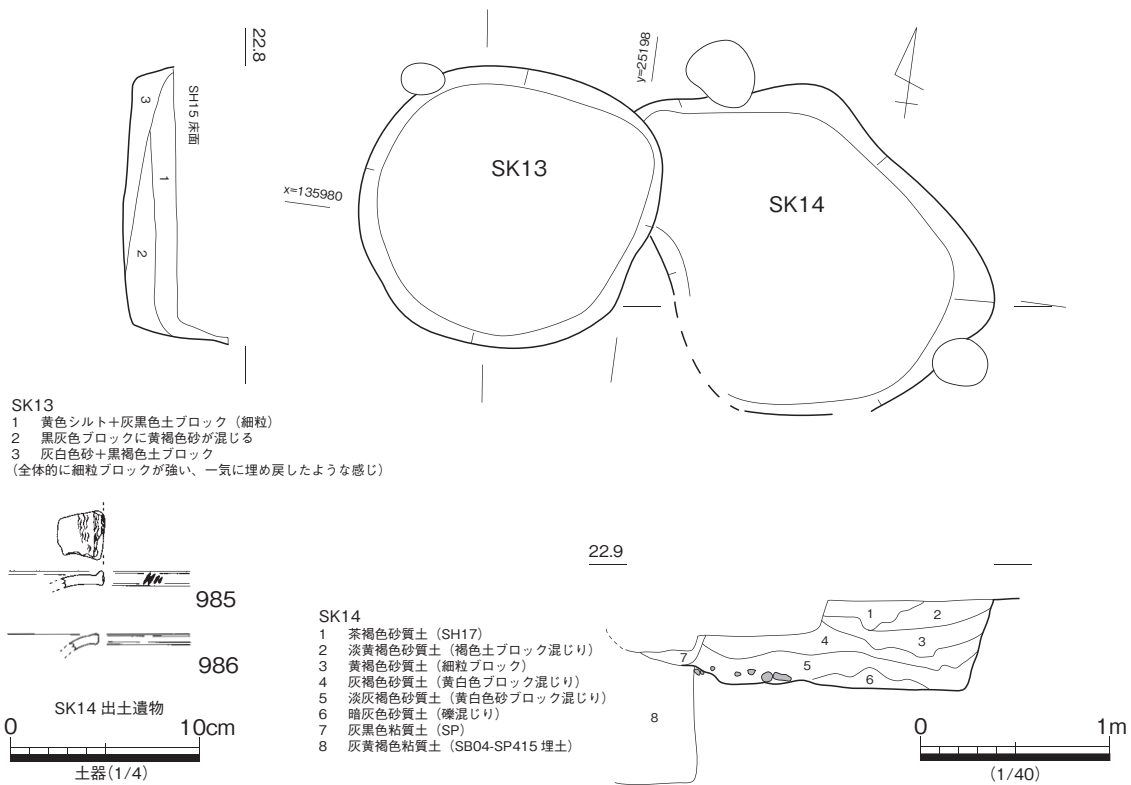


図 165 SK13・14 平・断面・出土遺物

本遺構の上位に構築される SH15・17 は弥生終末期新段階と後期後半古段階の廃絶時期が想定できるため、これらの土坑は出土土器が示す後期前半新段階から後半古段階時間幅内で相前後して構築・廃絶したものとする。(森下・信里)

SK15・SK16 (図 166)

遺構 A区北西部で近接して検出した土坑 2 基である。平面形はいずれも円形で、掘り形の重複はない。いずれも A区中央攪乱を除去した後に検出した遺構である。深さは 0.1m 程しかないが、いずれも底縁部に角がある。SK16 は底面が平坦で、SK15 は底面の一部に窪みがある。埋土は黄色基盤層ブロックが多量に含まれており、一度に埋めた形跡と評価できる。SK16 埋土中にはブロック状の焼土が含まれるが、これは後述する不定形落ち込み遺構 SX23 の埋土を掘り込んで掘削されており、SX23 に多く含まれる焼土を一部巻き込んで混在したものと考えられる。

出土遺物はいずれも土坑からも皆無であった。(森下)

SK27・SK28 (図 166)

遺構 A区南中央部で検出した重複する土坑である。これらは A区中央攪乱に北側を大きく挟られ、断面観察による部分が大きいので、遺構評価は難しいが、SK28 は側壁が垂直に立ち上がり、底縁に角がある。また僅かに遺存する底面は平坦である。したがって、SK28 は先述の貯蔵穴遺構と同様の遺構である可能性が高い。一方、SK27 は南側掘り形が緩やかな階段状となり平面形も長楕円～長形状である。これらは掘立柱建物跡の柱穴跡の可能性を指摘した SK04 の検出状況に近い。

出土遺物は 987～989 が SK28 出土、990 が SK27 出土である。(森下)

土器 987 は長胴を呈する広口壺で、外面の肩部に列点による記号文の表現が見られる。形態から弥生後期後半古段階に比定される。988 は小形鉢であり、口縁端部上面に面取りに伴う凹線状の窪みを残し、胎土中に赤色斑粒を多く含む。989 は高杯脚部片。長脚を留めていることや、杯部との接合に円盤充填技法を用いない点から見て、弥生後期前半新段階から後期後半古段階の時間幅で捉えられる。

990 は弥生後期初頭の高杯脚部片であり、明瞭に拡張される脚端部と外面の縦・横位の櫛描直線文に吉備地域からの影響を指摘できる。(信里)

出土遺物に時間幅が見られるが、両遺構ともに弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定される。

(森下・信里)

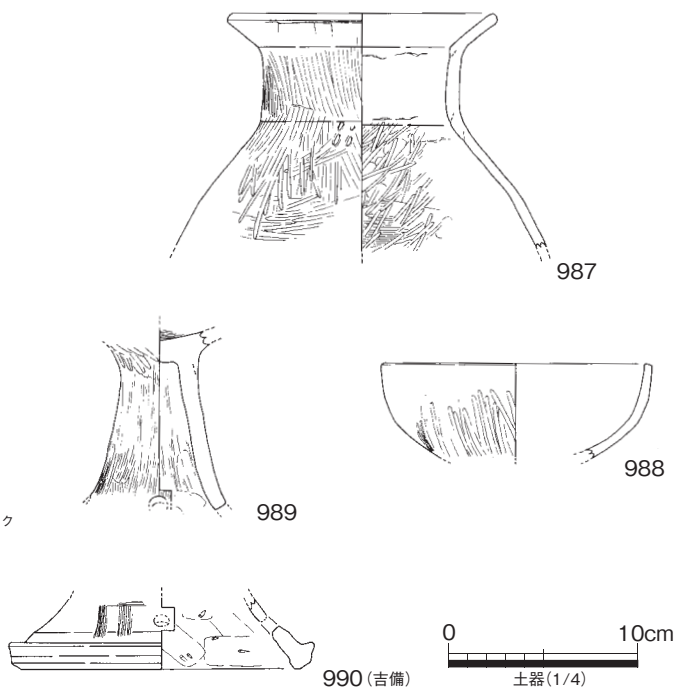
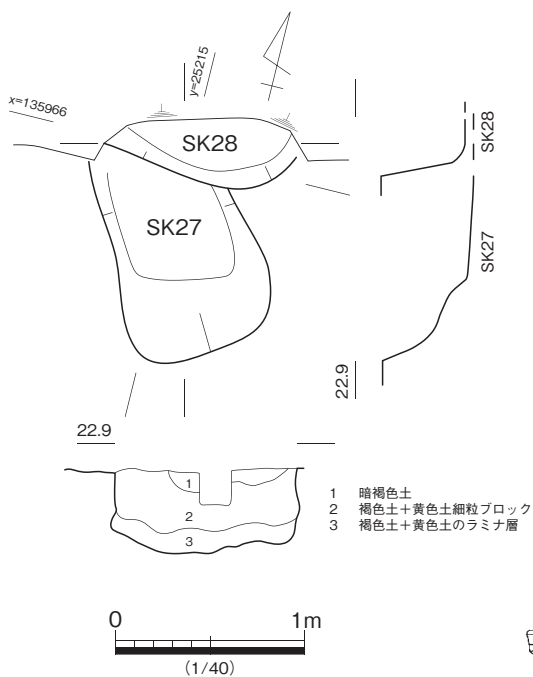
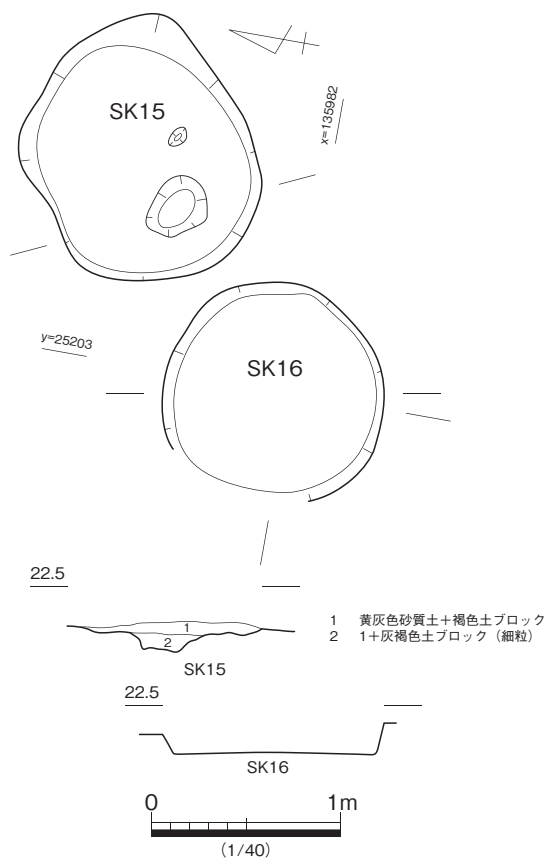


図 166 SK15・16・27・28 平・断面・出土遺物

SK32 (図 167)

遺構 A区北端中央部～B区南中央部にかけて検出した土坑である。直径1.16m、深さ0.2m、A区中央攪乱を除去した後に検出したので、上部は相当削平を被っている。底面は平坦で底縁には角がある。土層断面図は作成していないが、埋土は黄色基盤層ブロックが大量に含まれる埋土である。他の貯蔵穴遺構と同様の堆積層である。出土遺物は皆無であった。(森下)

SK34 (図 167)

遺構 B区で検出した方形土坑である。深さは0.24mで底面は平坦だが、西側に階段状掘り形が付属

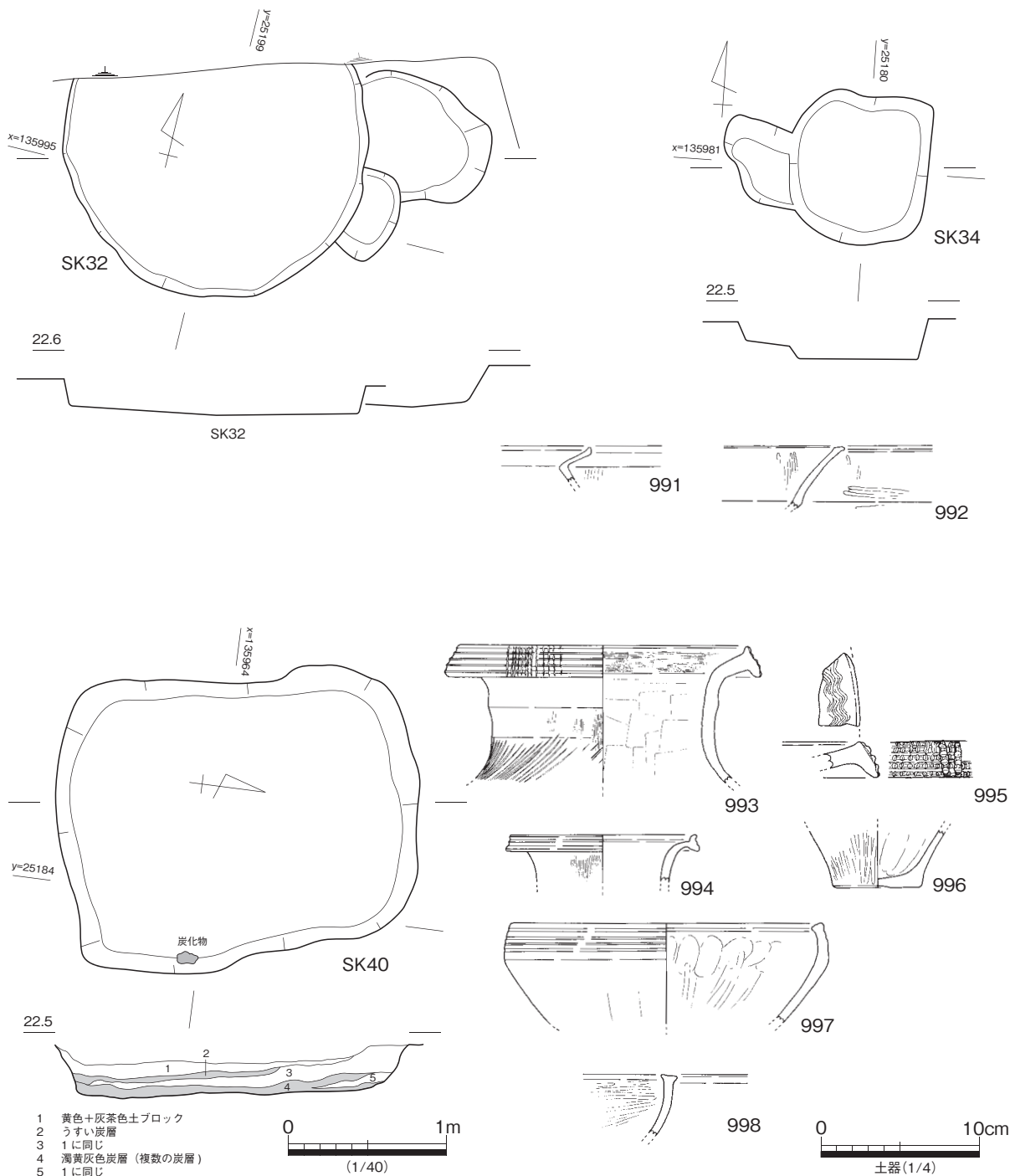


図 167 SK32・34・40 平・断面・出土遺物

する。埋土は基盤層ブロックをあまり含まない褐色系堆積層であった。また、他の貯蔵穴遺構と比べ、付属部がある点でやや異なる。(森下)

土器 991 は跳ね上げ状の口縁部をもつ弥生中期後半古段階の甕であり、混入品の可能性が高い。992 の高杯口縁部は、面取りされる口縁端部や外反する形態から見て弥生後期前半古段階に比定される。(信里)

出土土器から、本土坑は弥生後期前半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SK40 (図 167)

遺構 F区で検出した方形土坑である。東西 1.84m、南北 2.3m を測る。深さは検出面から 0.32m で、弥生後期後半新段階の竪穴住居跡である SH56 を調査した後その下位で検出した。断面形は逆台形で、底面は平坦。底縁の角はやや丸みを帯びる。埋土中には 2～3 層の炭化物層を挟み、黄色基盤層ブロックを多量に含む土が堆積する。掘り方南中央部に塊状の炭化物を検出した。埋土状況から、一度ではなく、複数回にわたって埋め戻された状況が想定できる。

また、同様の遺構は F 区西の Y 区で検出している。同じく中期後半に所属する。先述した後期前半新相から後半古相に位置付けた貯蔵穴遺構と比較して平面形等が異なるが、規模・容積は類似することから、中期段階の貯蔵穴遺構と評価することができる。(森下)

土器 993 は広口壺の口縁部である。口縁端部外面の凹線文帯を縦位の数条の沈線で区画するもので、弥生中期後半新段階に比定される。994 は広口壺の口縁部である。995 は大形の広口壺の口縁部片であり、外面の凹線文の上面に刻目と棒状浮文を施し、内面は櫛描による波状文で加飾する。弥生中期後半古段階に位置付けられる。996 は甕の底部片で、形態から弥生中期後半新段階に属するものと考えられる。997 は台付鉢の口縁部で、外面に 4 条の凹線文で加飾するもので、弥生中期後半新段階に比定できる。998 は台付鉢の口縁部であり、弥生中期後半中段階に位置付けられる。(信里)

埋没状況からの推定でも明らかなように、出土土器にも一定の時間幅が看取される。以上の点を考慮し、本土坑は弥生中期後半古段階に形成され、中期後半新段階にほぼ埋め戻され、廃絶したものと推定する。(森下・信里)

SP1909・SP1916 (図 168)

遺構 SP1909 は E 区で検出した楕円形土坑である。河川跡 SR02 の蛇行部内側に所在し、当初柱穴跡として調査を行ったが、整理作業を進める過程で土坑として再評価した。長径 1.12m、短径 0.94m、検出面からの深さは 0.15m を測る。

基盤層が橙色砂質土であるため、橙色砂質土に淡褐色土ブロックが少量混じる土が埋土となる。ほぼ単層で、一度に埋められたものと推定する。

SR02 が河川跡として機能している段階では、建物跡等の遺構が存在しないと推定されるエリアである。蛇行部内側で検出した遺構は SR02 の埋没がかなり進行した後に設けられたものと推定する。

近接する SP1916 は柱穴跡の可能性のある土坑である。長径 0.78m、短径 0.65m、深さ 0.32m を測る。

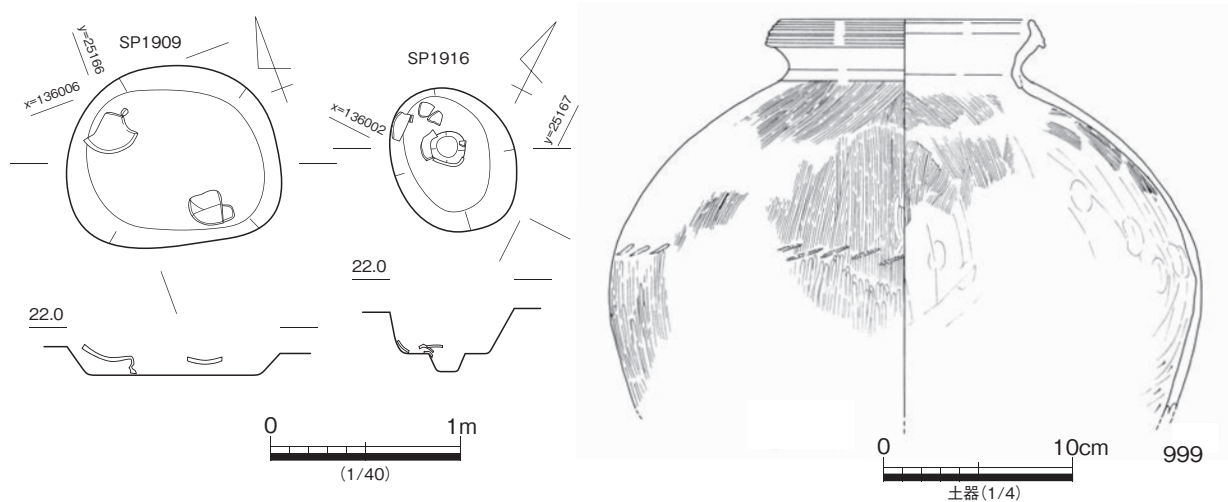


図 168 SP1909・1916 平・断面・出土遺物

底場中央に直径0.18mの窪みがあり、柱痕下部の窪みと推定する。埋土は橙色土に褐色土がブロック状に混じる土で、明確な柱痕は認められなかったことから、柱を抜取るために、掘り方を再掘削したものと考える。図化していないが、底場付近で出土した土器はその際の混入と考えられる。(森下)

土器 999はSP1909から出土した短頸広口壺である。口縁部や胴部形態から、弥生中期後半新段階に位置付けられる。(信里)

出土土器の特徴から、SP1909は弥生中期後半新段階に埋没したものと推定しておく。(森下・信里)

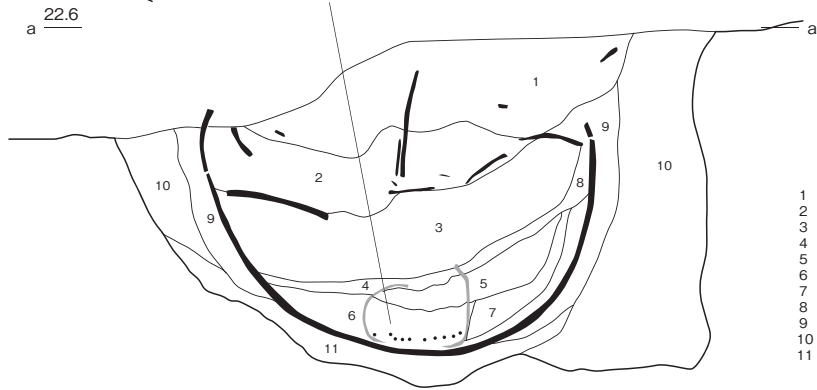
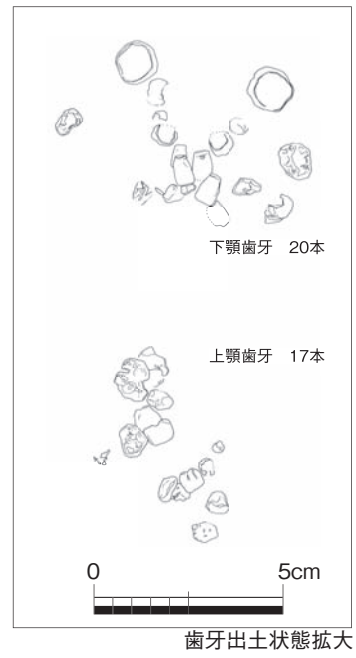
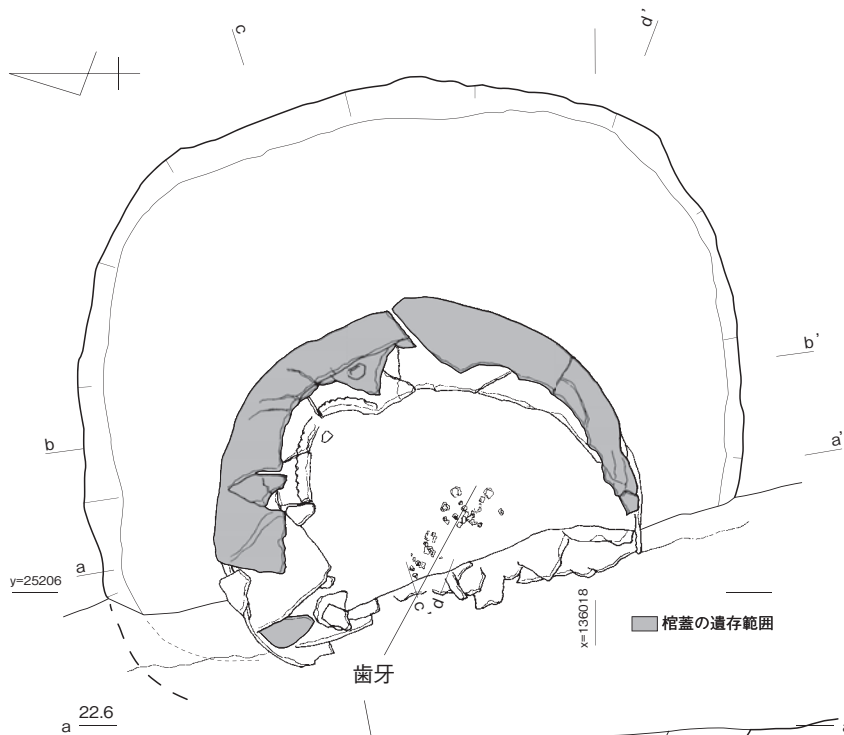
ST01 (図 169 ~ 172)

遺構 B区中央やや北寄りで見出した土器棺墓である。竪穴住居跡SH27とSH29に隣接し、両竪穴住居跡の間に位置する。遺構の重複はないが、後世の深い攪乱により、遺構西半分が大きく滅失する。棺は大型壺2個体で構成される。棺本体に大型壺の頸部から上を打ち欠いた土器(1000)を、蓋材に大型壺の胴部(1003)を使用する。

墓坑 墓坑は平面が隅丸方形で南北0.8m、東西0.7m以上、検出面からの深さは0.45mを測る。棺材より一回り大きく掘削する。底場は平坦で、側面は部分的な凹凸を残しながら比較的急角度で立ち上がる。墓坑主軸は北から約98°西に振る。

墓坑内の土層は、aライン、cライン、dラインの3方向で断面を記録した。aラインは攪乱壁面に露出する面で、棺内を含む全体の断面形状を示す。cライン、dラインは、主に棺裏込めの状態を記録した断面である。aラインでは棺外の北側下部で灰色土ブロックが混じる黄褐色砂質土(11層)を検出した。c・dラインにおいても墓坑の下層は棺の最大径部より下に及ぶブロック混じり土(両ライン第3層)がある。これらの土は墓坑掘削後の棺設置に当たり、棺を安定させるために充填した置き土の可能性が高い。その上部を覆う第2層は中粒のブロックを含む灰黄色系土層である。第3層との層界は明確だが、上部の第1層との層界は凹凸が著しい。また第2層上面は概ね蓋材の下端部のラインに一致する。第1層は蓋材を覆う土である。褐色土と黄色土の粗粒ブロックで構成する。

棺内埋土下層 棺本体はaライン断面で示したように、正位より約41°北に傾斜して置き、土の上に安



- 1 暗灰褐色砂質土 (須恵器片混じる)
- 2 黄色土・褐色土ブロック混灰褐色砂質土
- 3 暗灰色粘質土 (灰黒色土の0.5~1.0cm層厚のバンド混じる)
- 4 黒色粘土 (灰白色砂粒が少々混じる)
- 5 淡灰黒色粘質土 (灰白色砂粒が多く混じる)
- 6 暗灰色粘土 (粘性強い)
- 7 暗黄褐色粘土 (粘性強い・橙色土砂粒含む)
- 8 灰褐色粘土 (濃褐色土ブロック混)
- 9 淡灰色粘土 (灰白色ブロック混)
- 10 褐色粘質土 (黄色土黒灰色土粗ブロック混)
- 11 黄褐色砂質土 (灰色ブロック混)

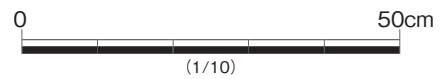
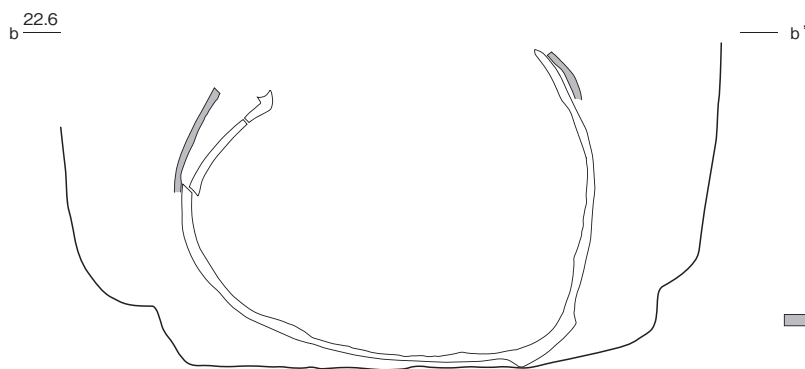


図 169 ST01 平・断面

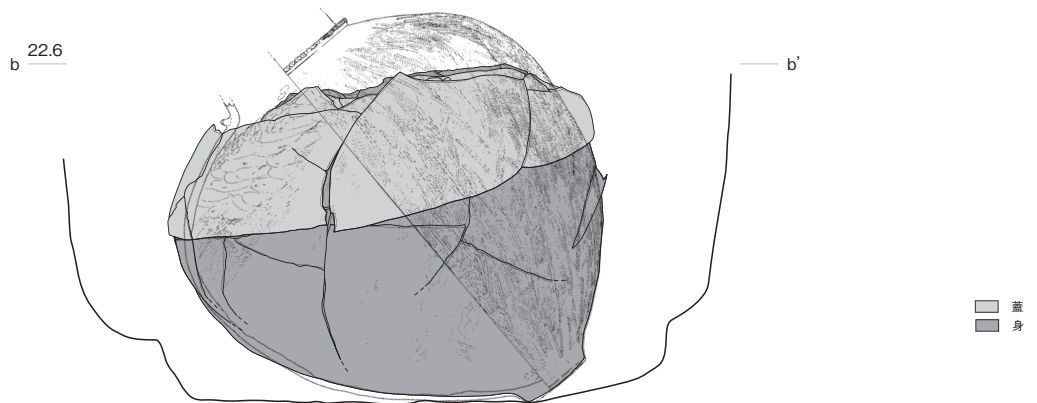
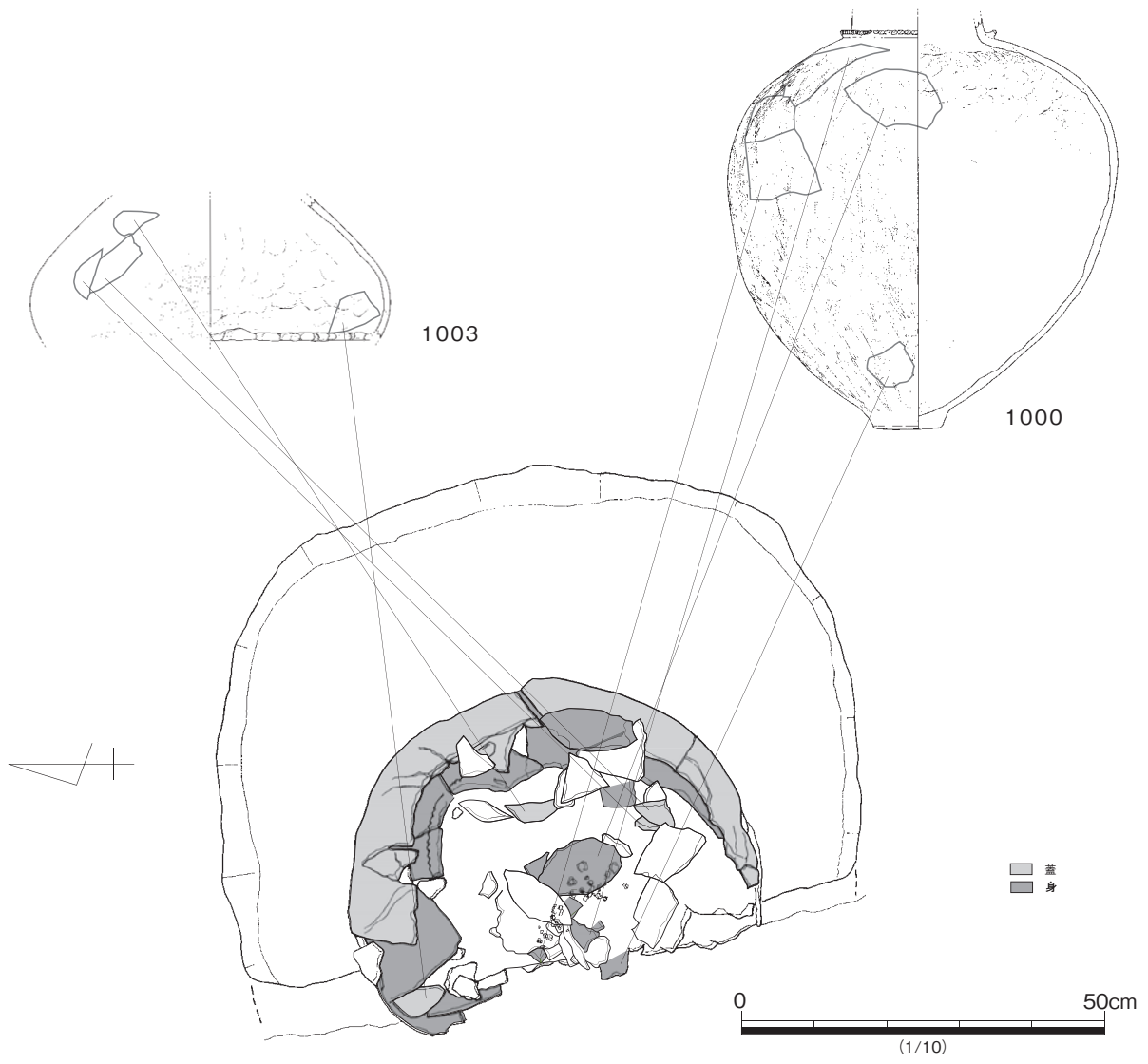


图 170 ST1 平·断面

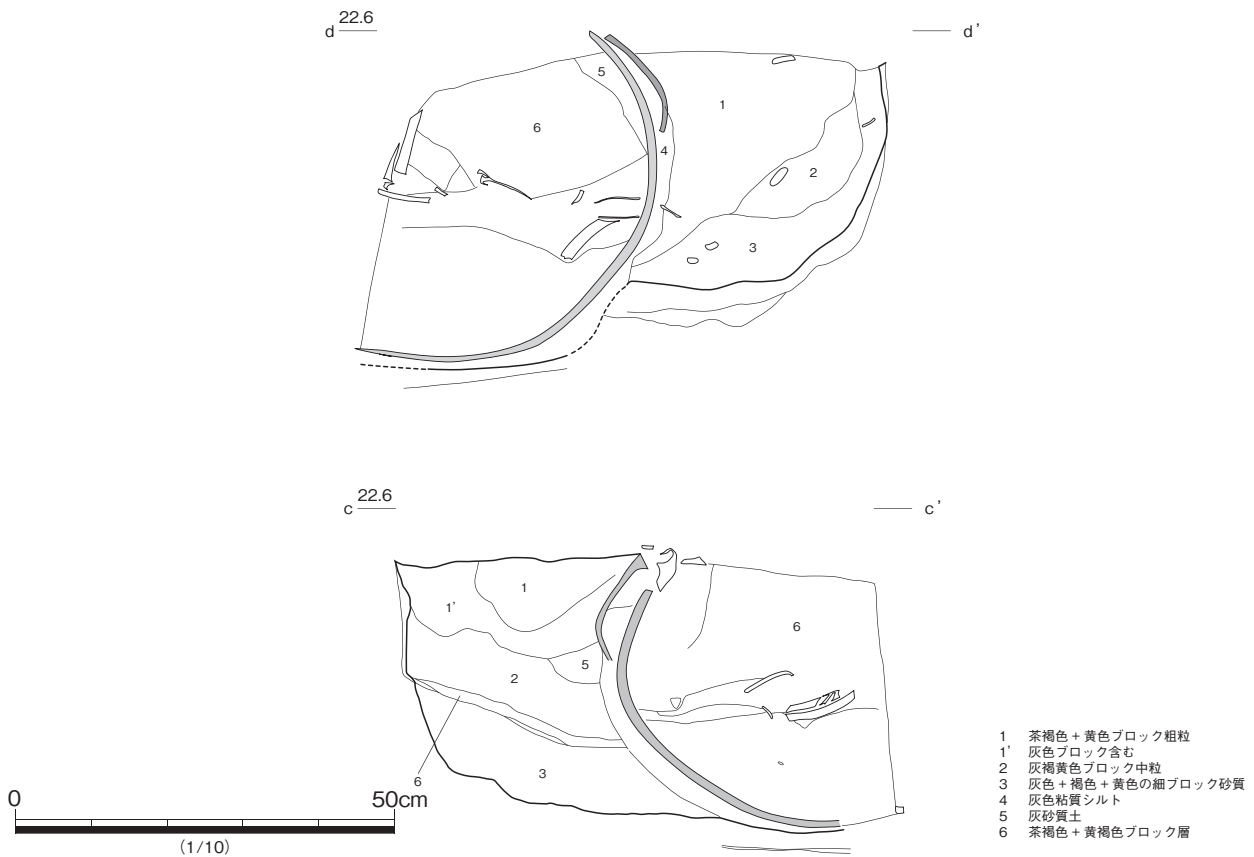


図 171 ST01 平・断面

置しており、棺内には埋没過程を示す土層が上部まで堆積する。断面検出段階で第 6 層でヒトの歯牙が存在することが分っていたため、第 4 層上面から下については棺本体とともに塊で取り上げ、室内で棺本体と分離した後に底面から慎重に土を取り除く方法で調査を行った。以下棺内埋土の下層の詳細を記す。

最下層は粘性の強い暗灰色粘土（第 6 層）である。ブロック混じりが少なく比較的純粋な粘土で厚さは約 6.0cm を測る。棺底から 1～2cm 程浮いたレベルでヒトの歯牙が出土した。歯牙以外の骨格は調査中に検出することはできなかった。埋葬後長期間にわたり棺内空間が維持された場合、腐朽した骨肉類が棺内下部に溜まる状況が当然ながら想定される。この第 6 層はそのような腐朽物が土壌化した土層である可能性が高い。そのすぐ南には、第 6 層にあたかも塞がれたように第 7 層が堆積する。暗黄褐色粘土で橙色砂粒を含む土である。橙色砂粒は土器胎土に類似しており、現在の棺内面は器面剥落痕が顕著であることから、棺内部の空間が維持された期間に土器内面の器面の剥落を伴いながら内面に流入した土で、第 6 層の腐朽物がまだ固形の段階にあったために、それに塞がれたような層位関係を有したものと推定できる。一方で、第 5 層は第 6 層上面を覆うと判断した堆積層である。淡い色調の灰黒色系粘土層で灰白色砂粒の細かなラミナ堆積が観察できる。ところが、調査後の写真を詳細に観察すると、第 5 層も第 7 層が途切れる部分で灰白色ラミナが途切れる様相を捉えることができ、棺内中央部に近い第 5 層左側では白色土の細粒ブロックが目立つ。さらに詳細に点検すると、第 6 層は中央部と北側で質感が異なり、歯牙に近い中央部では粘性が特に強く断面精査において土が捲れる程で、黒味が多い。一方、北側では灰青色で砂粒状の粒子が目立つ。このように第 6 層中央部は南北両側とは異なる土層で埋没しており、写真から層界をたどると、不整形ながら直径約 12～13cm の特殊土壤のまとまりを捉えるこ

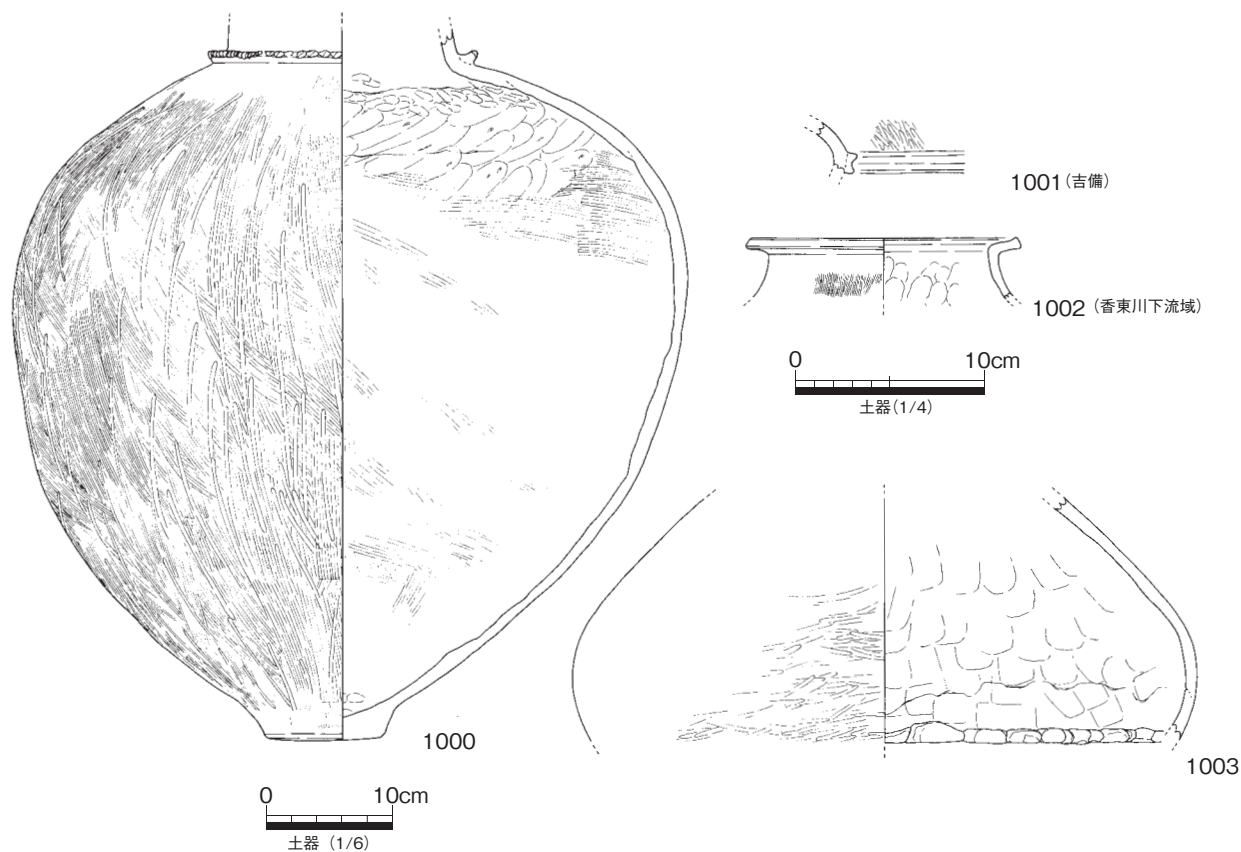


図 172 ST01 出土遺物

とができる。歯牙以外の骨格の一部であった可能性が指摘できる。

棺内埋土中層 特殊土壌の上部は黒色粘土層（第4層）が厚さ1～1.5cmで棺内全体を覆う。ただ特殊土壌部分では上下の層界に乱れがある。灰白色土の細かいブロックが少量含まれるが、比較的純粋な粘土層である。その上部は暗灰色粘質土層（第3層）で、灰色土や褐色土からなる細かな単位の交互ラミナ堆積層である。棺内に空間が維持されている期間の堆積層と考える。

棺内埋土上層 aライン第3層上面では、大型の土器片が層界に沿って出土した。これらの土器片は棺本体の胴部上半の破片と蓋材の破片である。土器片より上部が黄色土ブロックを含む灰褐色砂質シルト層（aライン第2層）で、堅穴住居跡等その他の遺構埋土と類似する土である。さらに上部の第1層は須恵器片が僅かに混じる暗灰褐色砂質土で、黄色土ブロックの混じりは少ない。c・dラインではaラインの第1・2層に対応する第6層が内彎する棺本体内部を充填して堆積する。これは、棺内空間の崩落によってaライン第3層上面の大型土器片がaライン第2層とともに一気に内側に転落し、古墳時代以後の地表面に窪みを生じ須恵器が流入したと考えることができる。

棺形状と埋葬手順 棺本体に使用した大型壺は、底部から頸部の刻目突帯付近上端部までの高さが約55cm、胴部最大径は53.5cmである。頸部からは破片が存在しないことから、元来頸部以上を打ち欠いた土器を使用している。攪乱により胴部の1/3程を欠損するが、取り上げ後の接合作業により、棺材として使用した際の棺形状は、胴部上半を中心に直径約40cm程を打ち欠いて開口部を設け、開口部を上にして約40°傾斜させ墓坑内の置土上に安置する。蓋材は、上部から開口部を覆うように被せている。棺配置後は、粗粒の基盤層ブロックを含む土で一度に墓坑を埋め戻す。埋め戻し後の封土の有無は不明である。

被葬者 ST01 棺材内埋土最下層の特殊土壌下部で検出したヒトの歯牙が残存した。慎重に検出作業を行った結果、歯牙の平面分布が2箇所に分かれ、両分布範囲に前歯から臼歯までが揃うこと等から、両ブロックはヒト1体の上顎・下顎のまとまりと考えられた。各ブロックの歯牙数は、下顎が20本、上顎が17本、出土位置不明の歯牙2本で合計37本の歯牙が確認できた。この数は成人の歯牙数28本と比較して9本多い。乳歯から永久歯への生え変わりの状態であったことが推定できる。

鑑定結果を第2分冊に掲載した。概ね3～4歳という年齢が推定できる。(森下)

土器 1000 は棺身と考えられる大形壺である。凸状を呈する明確な平底に肩の張った胴部をもち、頸胴部境に刻目をもつ断面三角形の突帯を1条付与する。胴部外面は密なハケ調整の後、縦位のミガキを行う。直接的に観察はできないが、胴部外面に複数の平坦面が見られることから、タタキによる成形が十分に想定できる。内面は剥落が激しいものの、ケズリ調整を消去する横位のハケ調整が部分的に確認できる。胎土は茶褐色の発色で、雲母片をやや多く含む。1003 は棺蓋と考えられる大形鉢である。埋置された状態の逆位で図示しているが、図下端部は擬口縁となることから、胴部最大径よりやや上位の接合部で打ち欠いたものと見られる。

1001 は細頸壺の胴部片であり、外面に断面方形の1条突帯を付与する。胎土は灰色系の発色を示し、雲母、角閃石をやや多く含むことから、備中地域からの搬入品の可能性も考えられる。正確な出土位置・層位は不明である。1002 は高松平野の香東川下流域産の甕口縁部である。口縁部形態から、大久保編年の下川津Ⅰ式・①段階に比定される。正確な出土位置は不明である。(信里)

棺身となる1000の大型壺の形態から、本土器棺墓は、弥生後期後半新段階に形成されたものと推定される。(森下・信里)

ST02 (図 173)

遺構 B区中央やや北寄り、ST01の1.5m北西で検出した土器棺墓である。竪穴住居跡SH27とSH29に隣接し、両竪穴住居跡の中間に位置する。遺構の重複はない。棺は大型壺1個体、大型鉢1個体で構成する。棺本体に大型壺の胴部上半の片側を打ち欠いた土器(1004)を、蓋材に大型鉢(1005)を使用する。

墓坑 墓坑は直径38mの円形で、検出面からの深さは21mを測る。棺本体の傾斜に沿い、西側に斜め下に深く掘り込む。底場付近では棺本体と墓坑がほぼ密着し、部分的な空隙に暗灰色系粘質シルト(断面図第2層)が流入する。また、第3層は暗灰色土と黄色土がブロック状に混じる土層で、墓坑を埋める際に上部から押し込まれた土と考える。

棺内埋土及び棺材形状 棺内は黄色土ブロックを含む暗灰色系粘土層が棺内下部まで連続して堆積する。層中には図示のように大小の土器片が含まれる。これらは多くが棺蓋(1005)の破片である。したがって、当該遺構形成後、比較的早い段階で上部から棺蓋が崩落し、棺内上部まで埋没したものと考える。なお、棺本体の大型壺(1004)は、上面検出時に口縁部は遺存していなかったが、掘削を進めると口縁部から頸部の屈曲までの破片が棺外側に、胴部上端が棺内部にそれぞれ崩落していた。ただ口縁部の残存は、棺本体の東側の一部のみで、西側は胴部最大径付近までしか残存しない。これらのことから、棺本体埋置時の棺開口部の形状は直径30cm程の円形を呈したものと推定する。(森下)

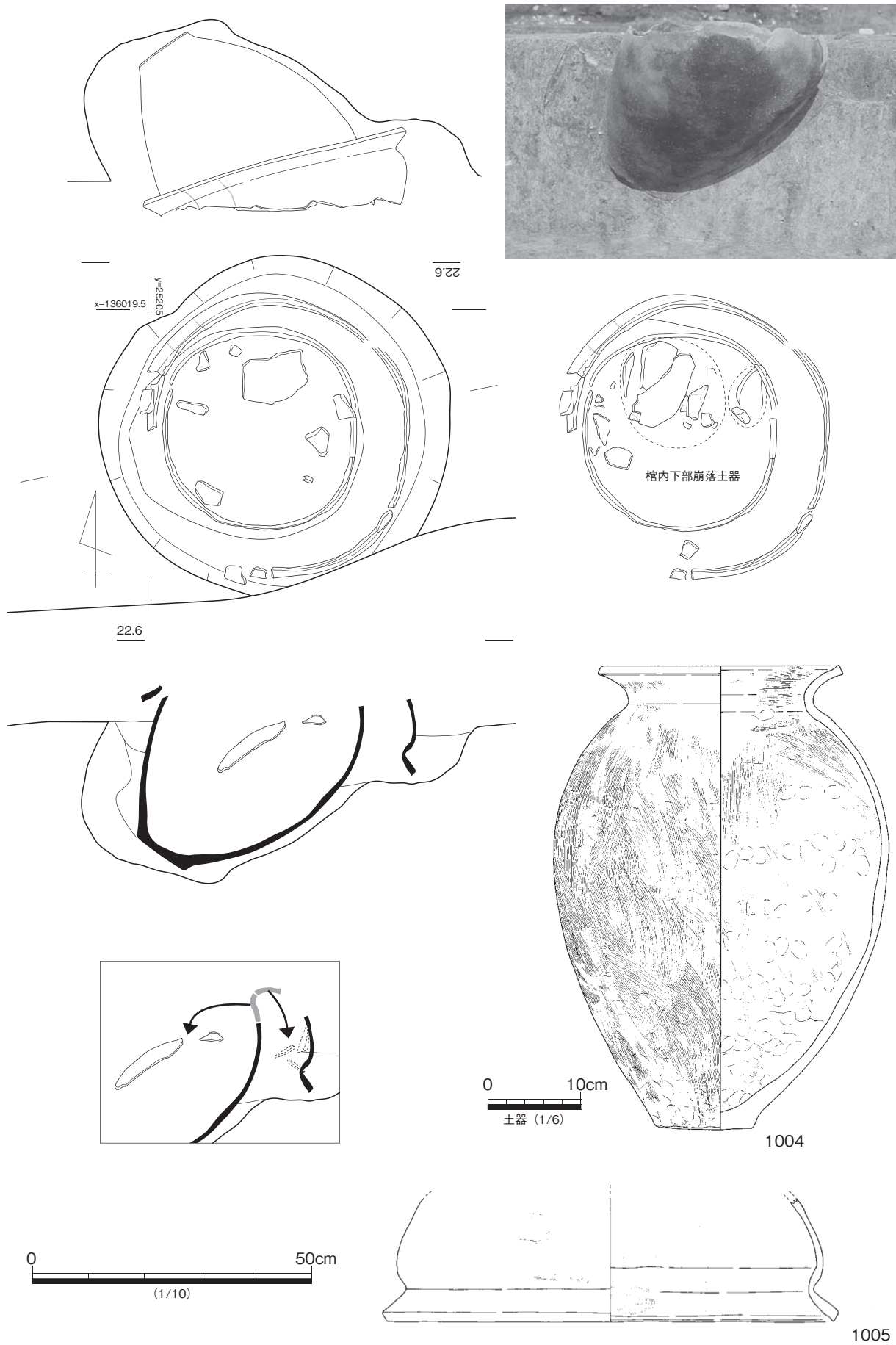


图 173 ST02 平·断面·出土遺物

土器 棺身と推定される 1004 の大型壺は、安定した平底と長胴を呈する胴部をもち、肉厚な口縁部が短く外反する。口縁部の一部が残存するためほぼ全形が窺い知れる。内外面ともにハケ調整を基調とするが、外面に複数の平坦面が観察され、成形にタタキ技法が用いられた可能性が高い。また、胎土は雲母片が多く含まれ、茶褐色を呈する。1005 は棺蓋と考えられる大形鉢である。肩部の張った胴部から直線的に反転する口縁部をもつ。棺身となる 1004 の大形壺とは胎土が明確に異なり、赤褐色を呈し、石英粒や赤色斑粒を多く含む胎土をもつ。現状で底部片は確認できないが、口縁部が 3/4 程残存することから本来は完形を保った状態で埋置されたと見られる。(信里)

棺身や棺蓋の形態から弥生後期前半新段階に形成された土器棺墓と推定される。(森下・信里)

ST03 (図 174・175)

遺構 D区北側で検出した土器棺墓である。SK39 を中央土坑として復元される後期中葉の竪穴住居跡 SH71 や中期の掘立柱建物跡 SB18 を掘り込んで単独で存在する。棺材は棺本体の大型壺 1 個体、棺蓋の大型壺 2 破片で構成する。上部はD区攪乱により削平を被り、棺本体の元来の開口部形状は留めていない。

墓坑 平面形は長方形を呈し、主軸は北から西へ約 84 度を向く。東側の短辺は直線的だが、西側短辺は棺本体に沿って丸みを帯びる。墓坑底は東が高く西が低い。棺の下位の墓坑底は棺に密着し、側面は西側の棺の底部相当付近で垂直に立ち上がる。東側の棺外部分の底場は棺最下部から連続する傾斜面を維持し、東端で急角度に立ち上がる。

墓坑埋土は土器下部に暗褐色粘土(第 2 層)が溜まり、上半は茶褐色土と黄色土のブロック混在層の単層である。埋葬後に一度に埋めたものと考えられる。

棺内埋土 棺内の最下層には、粘性が強い黒色粘土層が堆積する。この層中には、劣化し土壌化した人骨と考えられる土塊や、歯牙片が少量含まれる。その上部には土器片を含む灰褐色シルト層が堆積しており、層中には灰色砂のラミナが部分的に見られる。土器片とともに 10～20cm 大の自然石が 3 個出土した。最も大きい石の重量は 3.0kg、その他の石 6 個の合計は 1.6kg を計る。これらは層位的に土器片の直上に位置する。その層の上部は、暗灰色粘土層(第 5 層)や褐色土ブロックを含む暗灰褐色土(第 7 層)等が粗い単位で交互に堆積する。これらは棺の崩落により生じた窪みが暫く放置され、自然堆積と土砂投棄が細かい単位で繰り返されたことを示す。土器片直上に位置する塊石は、埋葬時に棺蓋より上に置かれた標石であった可能性がある。

棺形状 棺本体は大型壺(1007)の頸部突帯より上と、片側の胴部上半を打ち欠き、正位から約 71°傾けて墓坑内に埋置する。開口部を示す材料は攪乱により削平を被るため遺存しない。蓋材は大型壺胴部下半片(1008)と中型壺胴部片(1006)を組み合わせて閉じていたものと考えられる。

被葬者 人骨片と考えられる土塊は調査中に検出したが、取り上げや記録に耐え得る素材ではなかった。唯一、歯牙片 1 点を回収することに成功し、鑑定を依頼したところ、7～8 歳の小児の歯牙と判明した。標準的な体型であれば、直径 50cm 高さ 35cm 程の当該土器棺容量には収まらない可能性が高い。埋葬時の遺体の状態を検討する上で貴重な資料である。(森下)

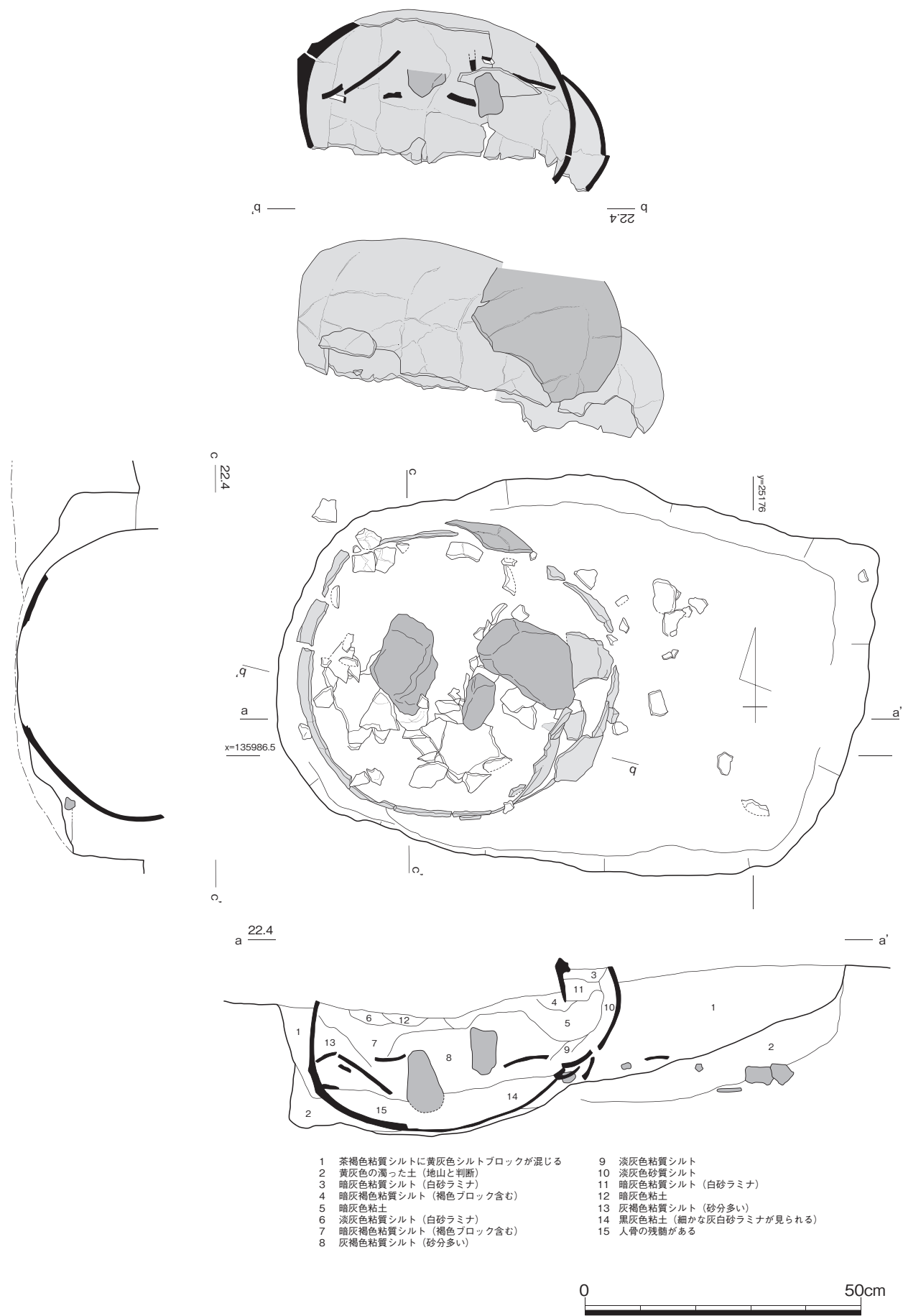
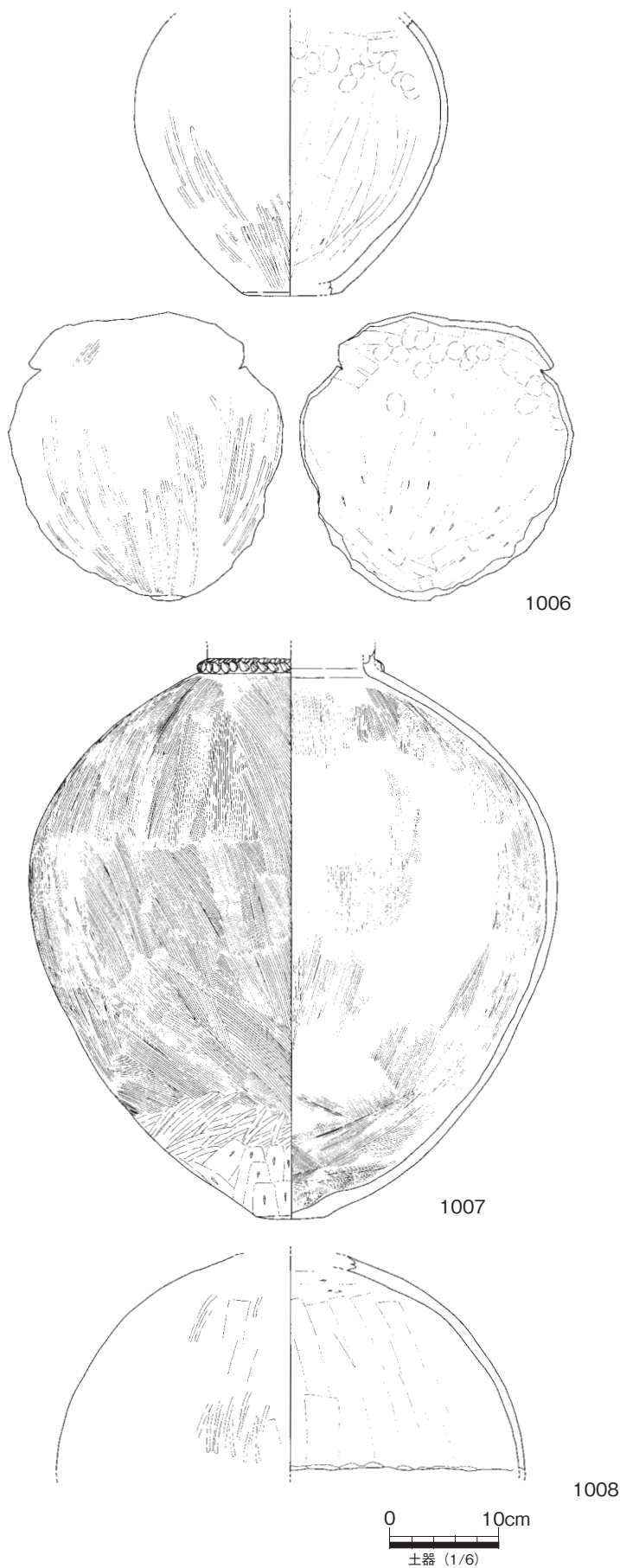


図 174 ST03 平・断面



土器 1006 は棺蓋と考えられる中形壺である。底部から肩部付近にかけて約 1/3 の残存を見る破片であり、周囲は打ち欠かされている。内面にはケズリ調整が顕著に見られ、胎土は赤褐色を呈し石英、長石粒を多く含むものである。1007 は棺身となる大型壺であり、ケズリ調整によって矮小化された平底に胴部の中位が張る器形をもつ。頸胴部境には断面三角形の刻目突帯を 1 条付与する。胎土は赤褐色を呈し、石英、長石粒をやや多く含むもので、棺蓋と明瞭な差異は見られない。1008 は棺蓋と考えられる大形鉢の胴部片である。(信里)

棺身 1007 の形態から、本土器棺墓は、弥生後期終末期古段階に形成されたと推定される。(森下・信里)

図 175 ST03 出土遺物

SD04 (図 176)

A区南端で検出した浅い溝状遺構である。竪穴住居跡 SH06 埋没後の窪みと、その南北に接続する窪みである。長さ 2.36m、幅 1.7m、深さ 0.18m を検出した。上層に灰茶色系土層、下層に淡灰白色粗砂が堆積する。埋土中に須恵器や土師器は含まれなかったことから、古墳時代初頭以前の遺構としたが、堆積状態から古代以後の可能性も考えられる。(森下)

土器 1009 は支脚の口縁部であり、外面に刻目を施す。1010 は胎土中に角閃石を多く含む高松平野の香東川下流域産土器である。形態から、細頸壺の胴部片となる可能性が高い。1011 の口縁部の内外面にハケ調整を多く残し、ヨコナデ調整を用いない甕であり、形態から弥生後期後半新段階に位置付けられる。1012 は弥生中期後半新段階の甕口縁である。1013 は細頸壺の胴部片であり、形態から吉備地域からの搬入・模倣土器と見られ、胎土は雲母片を多く含む。1014・1016 の高杯は、胎土中に雲母片をやや多く含み、同一個体の可能性がある。形態から見て、弥生時代終末期新段階に位置付けられる。1017 は甕底部片である。1015 は小形鉢の口縁部と見られる。(信里)

埋没土の状況から古墳時代以降に下る可能性も考えられるが、出土遺物の様相から、本遺構は弥生時代終末期新段階に埋没したものと推定される。(森下・信里)

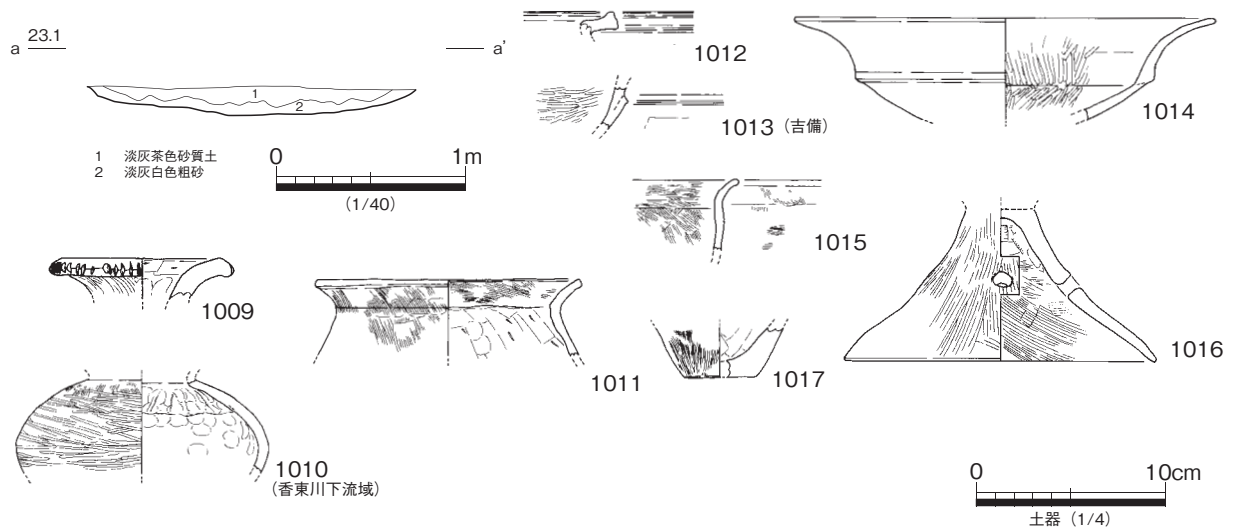


図 176 SD04 断面・出土遺物

SD06 (図 177)

遺構 A区南端で検出した浅い溝状遺構である。竪穴住居跡 SH06 の北側でほぼ主軸を揃えて西に向かって走向する。延長 3m を検出した。断面図によれば、SH06 に先行する浅い溝状遺構と解釈できるが、出土遺物には、SH06 とほぼ同時期の遺物を含むことから、平面図に示したとおり、断面図 5 層がやや深くなる付近に限定した溝と解釈して、SH06 の周溝の一部との見方も可能である。断面図 4 層は弥生前期の河川跡 SR01 上部層 (暗褐色シルト) に類似しており、SR01 の北側肩部と解釈すると、遺構の重複関係が整合する。(森下)

土器 1018 は中形鉢の口縁部で、口縁端部を面取りし、内面にヨコナデに伴う窪みを残す。弥生時代

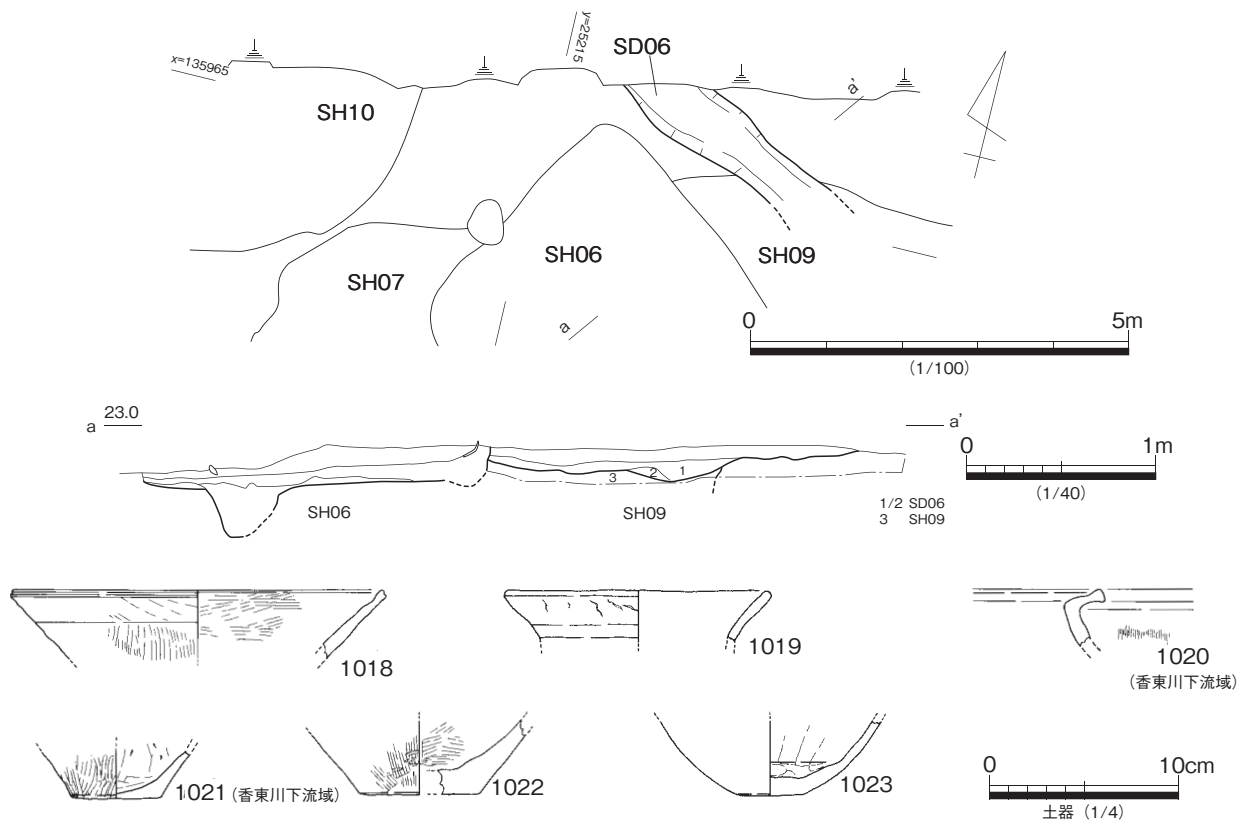


図 177 SD06 平・断面・出土遺物

後期前半新段階に比定される。1019 は口縁部外面に絞り目を残すことから、小形の甕もしくは鉢となる可能性が高い。1020・1021 は胎土中に角閃石を多く含む高松平野の香東川下流域産の甕である。形態から、大久保編年の下川津Ⅰ式・①段階に比定される。1022 は壺底部片である。形態から弥生後期前半期の所産と見られる。1023 は甕底部片で、矮小な平底を留め、形態から弥生終末期新段階に比定される。(信里)

出土遺物の帰属時期に時間幅が見られるが、本遺構下位の SH09 の埋没時期を考慮し、1023 の甕底部片を指標として、本遺構は弥生終末期新段階に埋没したものと推定する。(森下・信里)

SD25 (図 178)

遺構 B区北東で検出した溝状遺構である。断面形はV字形で1回の掘り直しが見られる。上層は幅0.6m、深さ0.25m、下層は幅0.35m以上、深さは0.4mである。掘立柱建物跡SB19・23と重複する。SB19の柱穴跡SP663により古い溝状遺構と解釈して調査を進めたが、出土遺物の比較から、当該溝状遺構が後期前半新相頃で、SB19が後期初頭頃と推定できることから、調査時の重複関係の認定に誤りがあったものとする。

埋土は最終埋没の1層が茶褐色粘質シルト、それ以外は黄色土+灰褐色土ブロック土で埋没しており下層の溝及び上層の下位については、意図的に溝を埋めたものと推定できる。(森下)

土器 1024 は直口壺の口縁である。形態から弥生後期前半新段階から後期後半古段階に位置付けられ

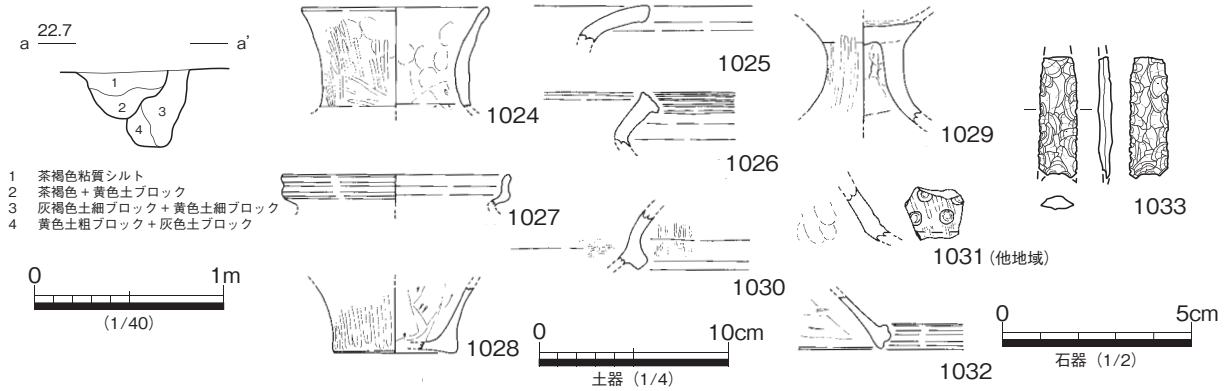


図 178 SD25 断面・出土遺物

る。1025 は大形甕の口縁部である。1026 は短頸広口壺の口縁であり、弥生中期末の所産と見られる。1027 は拡張する口縁部に擬凹線文を施す甕で、弥生後期後半古段階に比定される。1028 は薄い器壁をもつ弥生中期後半中段階の甕底部片である。1029 は接合部に円盤充填を残し、内面ケズリを行わないことから見て、台付鉢の脚部片と考えられる。1030 の装飾高杯は杯部の器形変換点に突帯を施すもので、弥生後期前半古段階の所産と見られる。現状で赤色顔料の付着は確認できない。1031 は器台もしくは高杯の脚部と考えられる小片で、外面に竹管文を施す。胎土的な違和感は見られないが、遺跡内で類例を見ないものである。1032 は高杯の脚端部である。脚端部の形態から、弥生中期後半新段階から末葉に比定される。(信里)

石器 1033 はサヌカイト製打製石鏃である。長さ 3.2cm、厚さ 0.35cm で細長い形態を呈す。基部は僅かな凹基形態を留め、先端は欠損する。(森下)

出土遺物にかなりの時間幅が認められるため、上記のとおり遺構の重複関係の把握にミスがあった可能性が高い。ここでは、最も新相を示す 1024 の直口壺や 1027 の甕の年代観から、本遺構は弥生後期後半古段階に埋没したものと推定する。(森下・信里)

SD26 (図 179)

遺構 B区北東で検出した溝状遺構である。先行する掘立柱建物跡 SB19 の柱穴跡と重複する。幅は 0.3～0.5m、深さは 0.08m と浅く、北に強く傾斜する。灰褐色砂質シルトで埋没し、古代以後の埋土に近いが、出土遺物は図示したように弥生中期末から後期初頭の遺物が多い。検出延長は 3.5m と短いことから、SB19 柱穴の柱抜取穴を溝状遺構と誤認した可能性も残る。(森下)

土器 1034 は胎土中に角閃石を多く含む高松平野の香東川下流域産土器と見られる。形態から細頸壺か小形広口壺の頸部から肩部片と見られ、肩部内面に明瞭な絞り目を留める。1035 は弥生中期後半新段階の甕口縁部。1036 は甕底部片であり、平底の形態から弥生後期後半古段階に比定される。1037 は弥生中期後半の台付鉢口縁である。1038 は高杯脚端部片であり、形態から弥生後期前半古段階に位置付けられる。1039 は支脚の脚部片で、1039 は弥生中期後半新段階の台付鉢の脚部片と見られる。(信里)

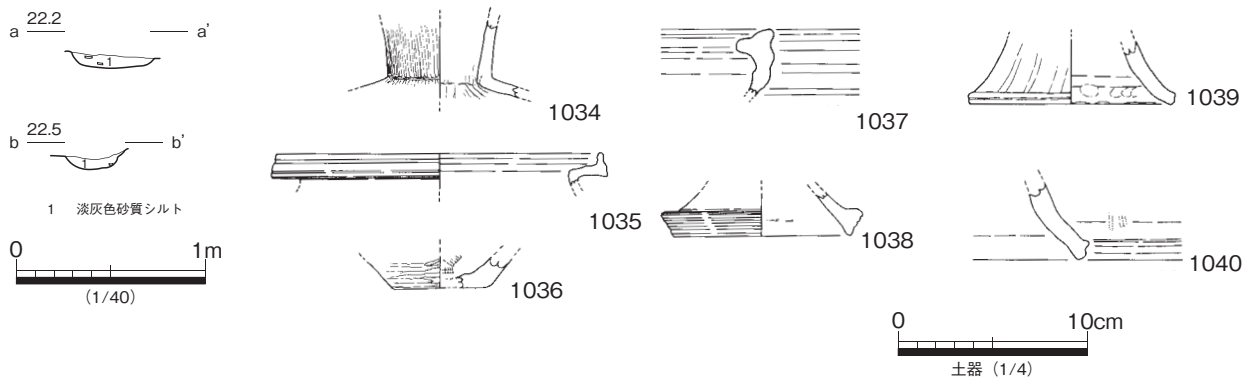


図 179 SD26 断面・出土遺物

古相を示す遺物は周辺遺構からの混入品と解釈し、本遺構は弥生後期後半古段階に埋没したものと推定する。(森下・信里)

SD28・29 (図 180)

B区北東で検出した東西方向に走向する溝状遺構である。溝底の傾斜は西に低い。竪穴住居跡 SH27の外周柱穴列の直近の調査区東端から始まり、2m先まで溝幅が0.4～1.0mに広がった後、緩やかに北にカーブしながら溝幅が狭くなる。延長5m地点で一旦消失する。ここまでの溝状遺構をSD28とした。平面形が弧状を描き、浅く緩やかな断面形から、住居に伴う周溝の可能性はある。

調査区東端より5.5～9mの地点、竪穴住居跡 SH29の直近で東西に直線的に伸びる溝状遺構がある。やはり西に傾斜し、溝幅は0.2～0.7mで一定しない。A区中央攪乱で一旦途切れるが、SH31直近で再び検出され始め、延長5mを確認した。攪乱から西側の溝状遺構は、幅0.3～1.0mでやはり一定せず、緩やかに南にカーブを描いて走向する。東側の溝跡より0.15m程深い。東西の溝状遺構は若干走向方向や深さが食い違うが、ここでは同一の溝状遺構SD29として取り扱った。

SD28からは図示した土器がまとめて出土した。調査区東端から2mの平面形変化点より西で1041～1048の土器が出土した。SD29では、SH29に近い部分で1050、SH31に近い部分で1049・1051が出土した。(森下)

土器 1041は広口壺である。口縁部内面に円形浮文が剥落した痕跡があり、形態から弥生中期後半新段階に位置付けられる。1042は長頸壺である。口縁上端部及び頸部外面に凹線文帯と頸胴部境にハケ原体による列点文を施す。1043は広口壺の口縁部で、口縁部外面の2条の凹線文はやや浅く退化傾向を示す。1044は中形甕の口縁部である。1045の甕口縁部は、上端面の拡張がやや上方に伸びる可能性がある。1046は中形甕の底部片で、輪台を貼り付けることにより脚台状に仕上げる。1047・1048は壺底部片である。

1049は甕底部片である。1050・1051は台付鉢の口縁部であり、1051は凹線文出現期の弥生中期後半古段階に、1050は弥生中期後半新段階に位置付けられる。(信里)

出土遺物の様相から、SD28・29ともに弥生時代中期後半新段階に廃絶したものと推定される。

(森下・信里)

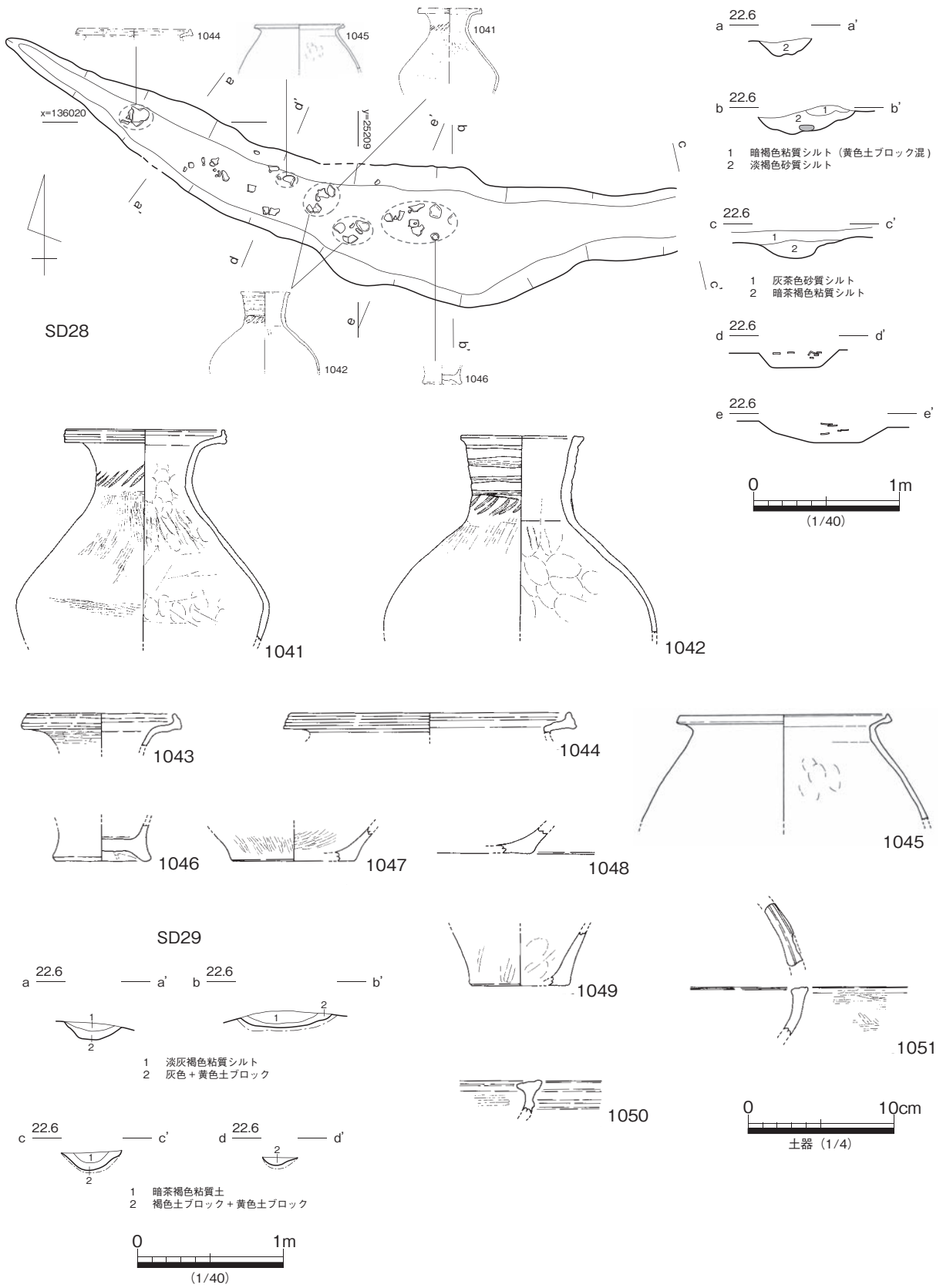


図 180 SD28・29 平・断面・出土遺物

SD55・56 (図 181)

遺構 C区中央部で検出した溝状遺構であり、SH43に伴う周溝と考える。SD55は幅0.5～1.2m、深さは0.2～0.4mを測る。住居跡SH43でも説明したが、住居跡の西側に位置し、外側柱穴列に沿って南から北へ溝底を下げ、溝幅を広げながら竪穴住居跡SH38に掘り込まれて滅失する。検出延長約4mの範囲から多数の遺物が出土した。埋土は淡い灰褐色系砂質シルトで、基盤層ブロックが混じる。図示した遺物のうち、1065を除くものがSD55出土である。

SD56は住居跡SH43の北東部に位置する。SH43に沿って緩やかに西に湾曲する。溝幅0.5～1mで、深さは約0.1～0.2mと浅い。埋土は上下2層に分かれ、下層に基盤層ブロックを多く含み、上層は暗褐色粘質シルトで埋没する。図示した遺物(1065)は上層で出土している。(森下)

土器 1052は広口壺の口縁部で、外面に2条の凹線文が見られる。1053は口縁部内面を肥厚する大形壺の口縁部で、弥生中期後半古段階に比定される。1054・1055は広口壺の口縁部。1056は壺底部片である。1057の甕口縁部は全体が発泡しており、土器焼成に伴う局所的な高温を受けたものと考えられる。形態から、弥生中期末に帰属すると考える。1059は甕底部片で、張りをもった胴部が想定できることから、弥生中期後半新段階に比定される。1060は台付鉢の口縁部である。1061・1062は口縁部が内傾する高杯の口縁部片で、1061は弥生中期後半新段階古相、1062は弥生中期後半新段階新相に位置付けられる。1063は高杯の完形品である。この形態は弥生後期に継続するものであるが、口縁部の外反と端部の拡張を行わず、脚端部の拡張も顕著でない等弥生中期末の形態を良好に留めている。1064は高杯脚端部片である。1065の台付鉢の脚部片は、内面に円盤充填の剥落が確認できる。(信里)

石器 1066は結晶片岩製の剥片の側縁に強い摩滅が見られる石器である。器面は研磨して石庖丁状に仕上げた痕跡があるが、刃部は細かな剥離痕が連なる。摩滅痕は剥離痕のエッジ部分に見られる。長軸方向の細かな線状痕を残しながら、局所的に強い研磨状の摩滅である。部分磨製の石庖丁の可能性もあるが、摩滅痕の形態から擦り切り技法に伴う切断具と考える。(森下)

出土遺物に若干の古相を示すものが含まれるが、多くのものが弥生中期末に位置付けられ、SH43の炉跡としたSP1278出土遺物と同様の年代観を示す。以上の点から、本遺構は弥生中期後半新段階新相に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SD86・106 (図 182～185)

遺構 D区中央で検出した溝状遺構である。南北方向に8m程走向した後、東方向に角度を90度変え、約7m走向して東端がやや北に向きを変える部分で途切れる。南北方向の溝状遺構をSD86、東西方向に向きを変えた部分をSD106としたが、同一の溝状遺構である。溝幅は約0.5mで、屈曲部がやや幅広い。断面はV字形を呈し、部分的に逆台形を呈す。溝底のレベルは僅かに北が低い。埋土は上層と下層に分かれる。主に上層から図示した多くの土器が出土した。上層は暗褐色系粘質シルト層で基盤土ブロックは少なく、炭化物塊を含む。下層は基盤土の黄色土と褐色土のブロック層である。

他の遺構との関係は、東西方向に走向する部分で住居跡SH67・68、掘立柱建物跡SB17と重複する他、南北方向に走向する部分では竪穴住居跡としたSH54と主軸方向が一致する。重複関係については、

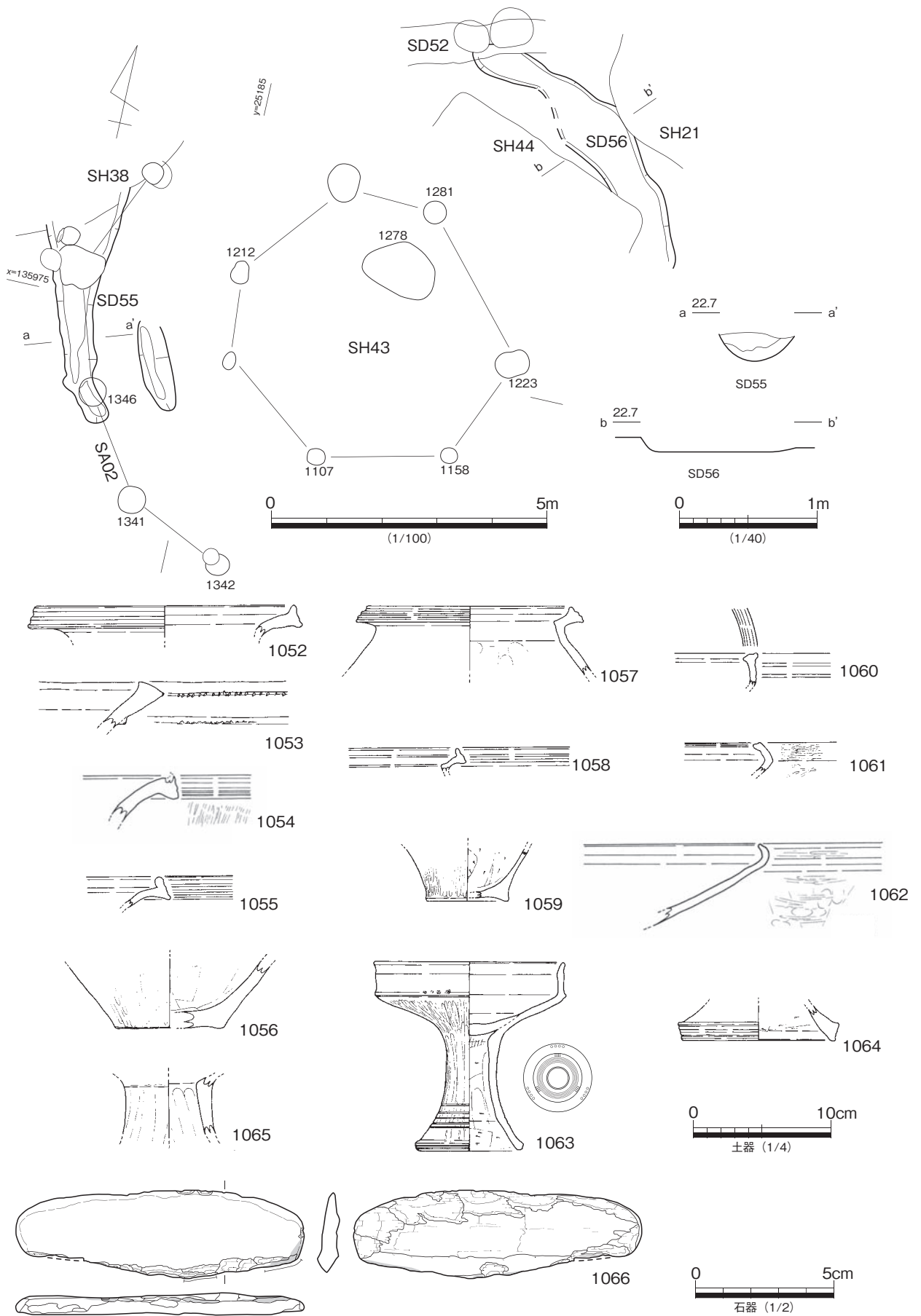


图 181 SD55·56 平·断面·出土遺物

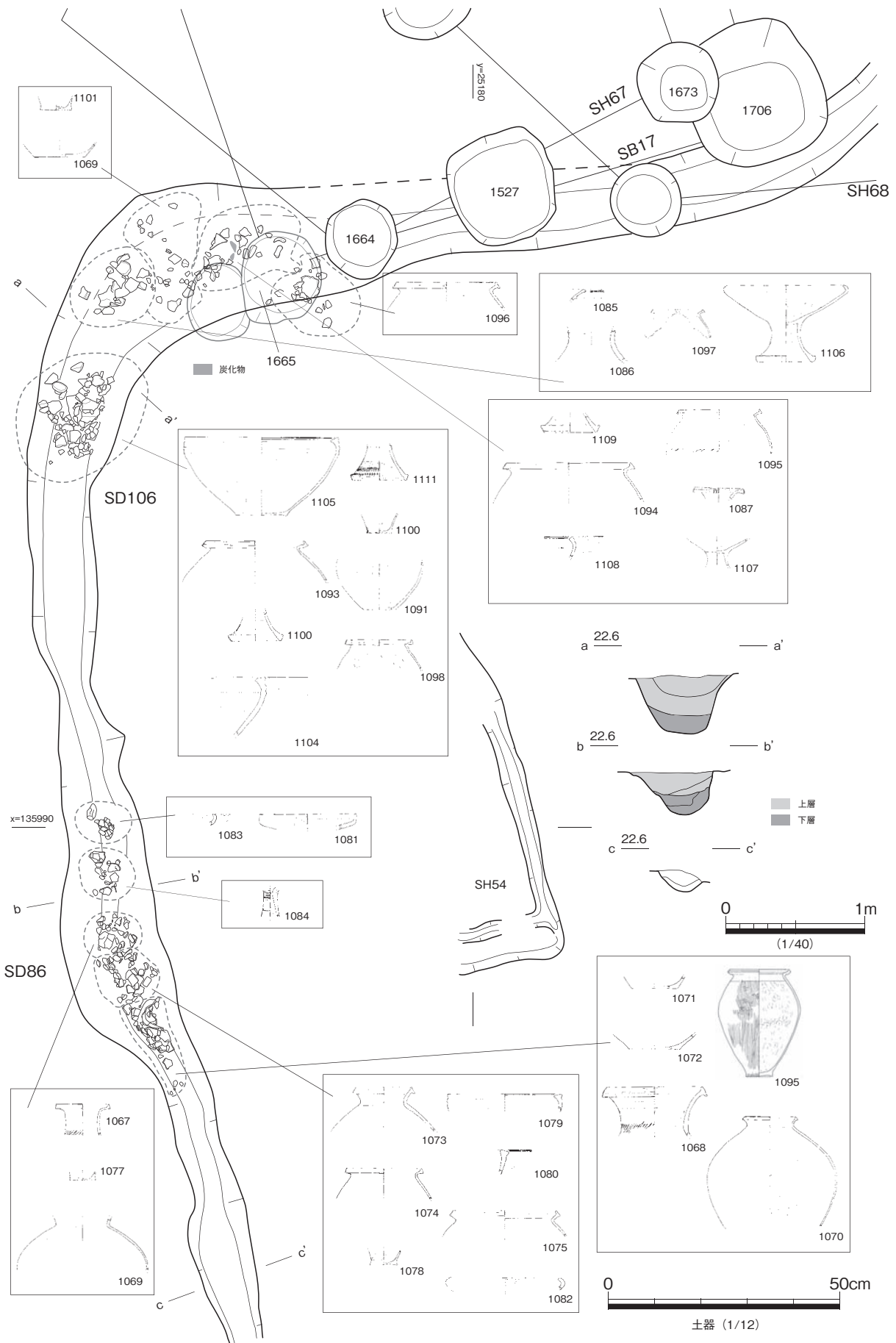


图 182 SD86·106 平·断面

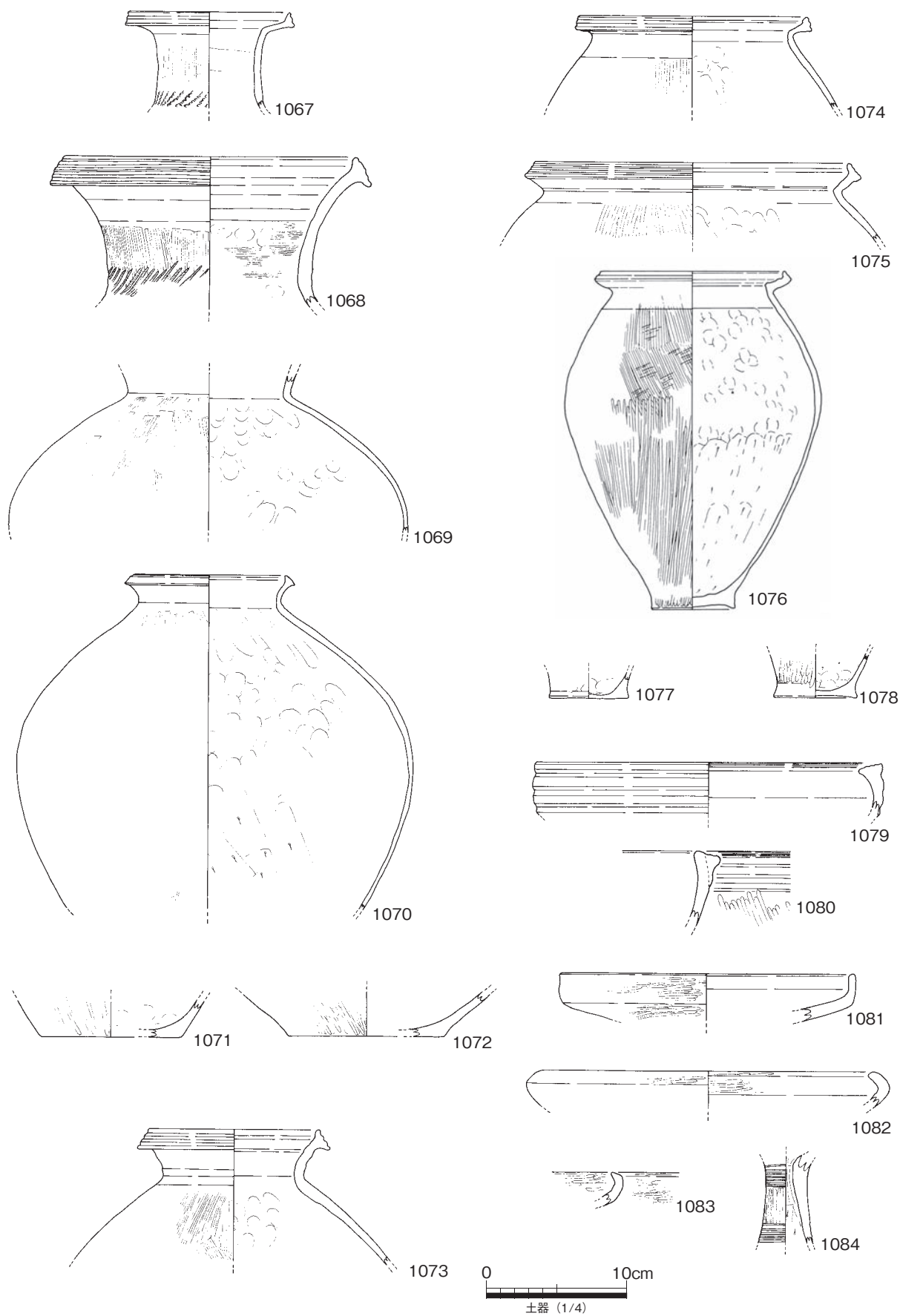


图 183 SD86·106 出土遺物 (1)

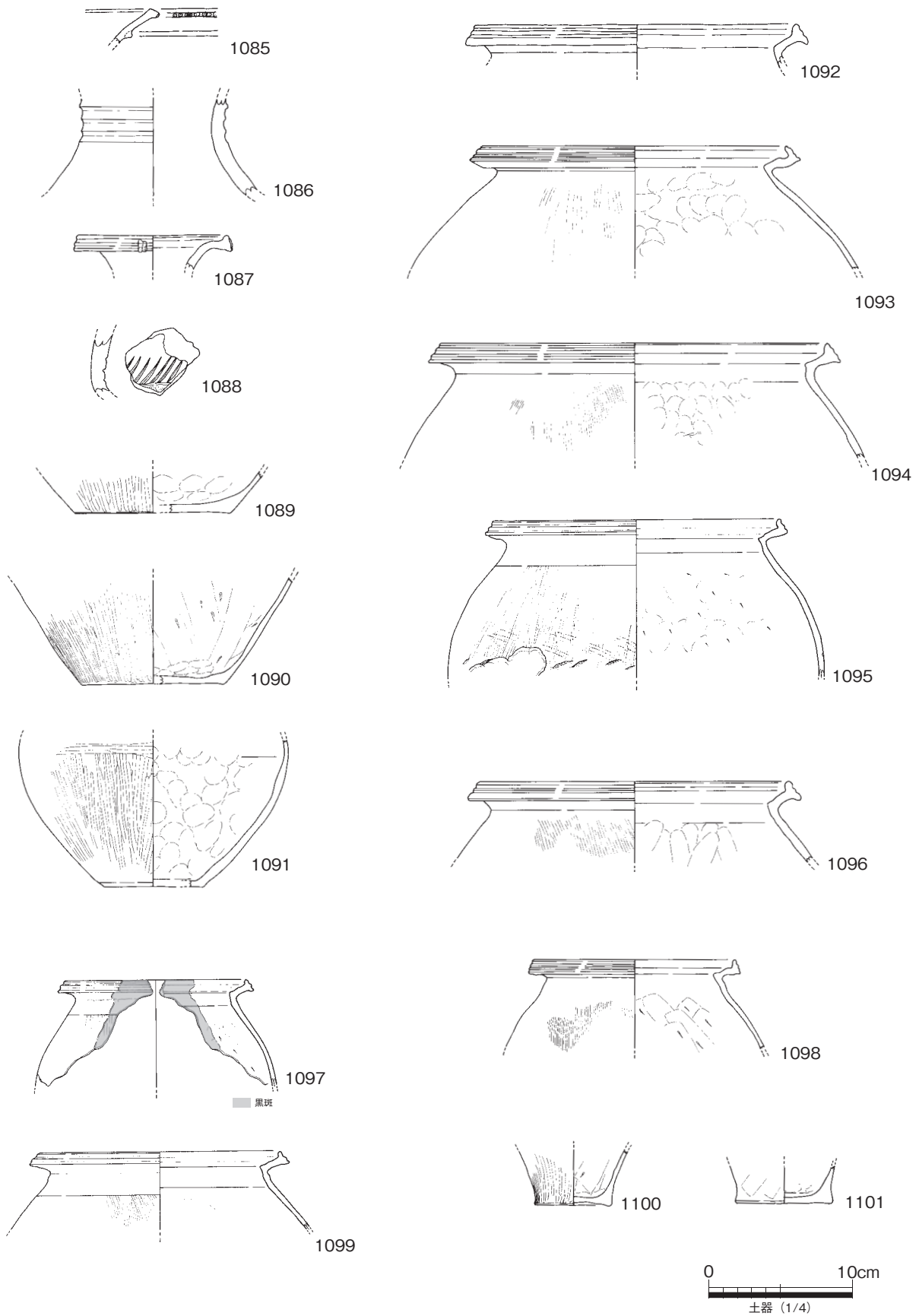


图 184 SD86·106 出土遺物 (2)

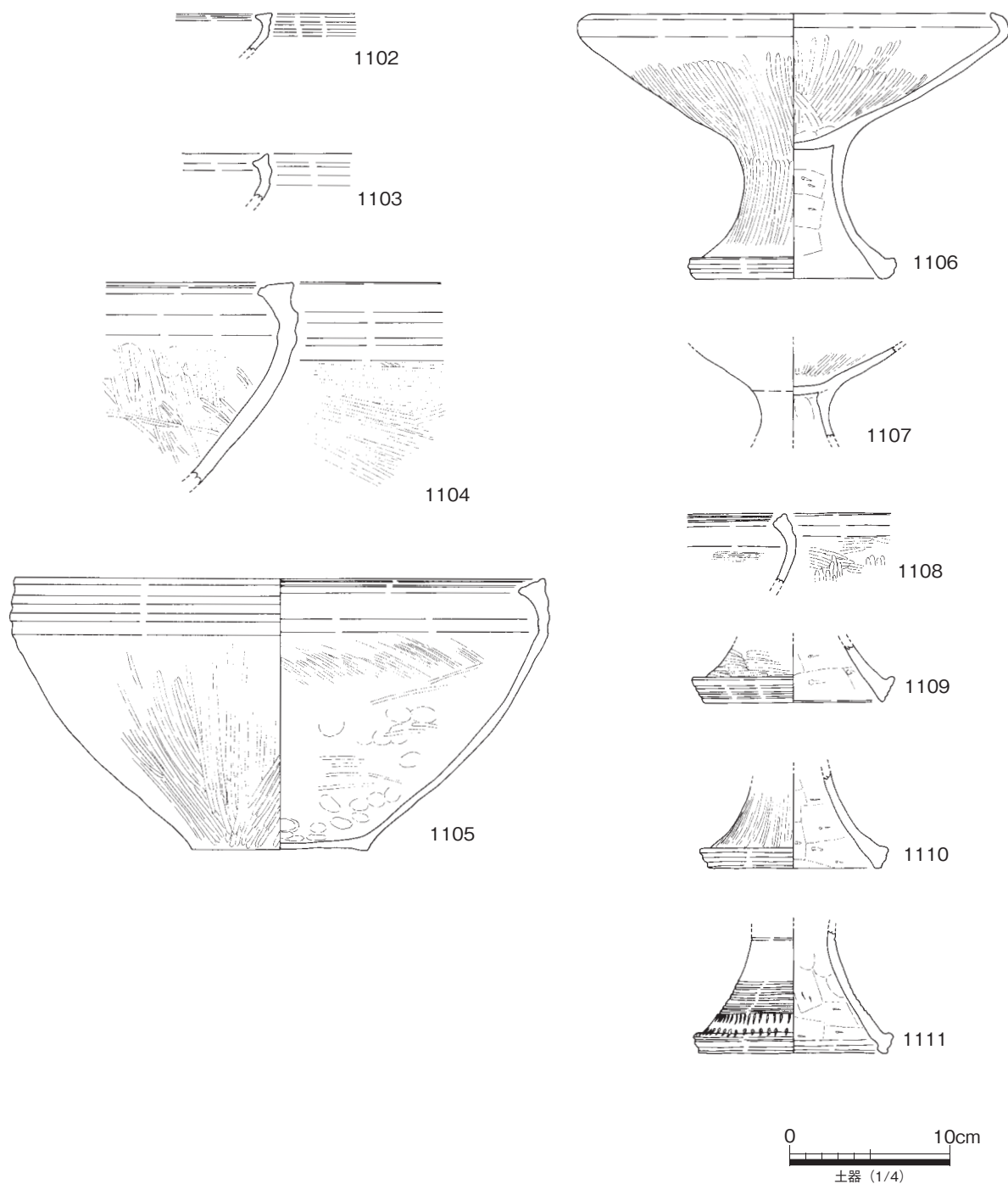


図 185 SD86・106 出土遺物 (3)

図示した遺構以外にも多数の柱穴跡が重複しており、正確な重複関係を把握できたかどうか、不安が残る。したがって、確実な関係性が把握できる遺物分布との関係に依拠して検討すると、図示したように掘立柱建物跡 SB17 を構成する柱穴跡の SP1665 は当該溝跡の上層土器群を取り上げ、溝底を検出した後に見つかった柱穴跡である。したがって、SB17 は当該溝跡に先行して廃絶した建物跡とみて良い。竪穴住居跡 SH67 を構成する支柱跡 SP1664 は当該溝状遺構上層土器群の分布範囲外にあるので、確実な先後関係は不明である。ただし、SH67 では図化した土器はなく、この柱穴跡以外の支柱穴跡でも出土遺物はほとんどない。もし SD86・106 が埋没した後に構築された住居跡であれば、通常より多くの

土器片が柱穴跡に混じる筈である。したがって、SP1665の埋没は当該溝状遺構構築前と考えるのが妥当である。同時にSH68においても同様に位置付けることができる。そうであれば、SB17を構成する柱穴跡SP1706がSH67の支柱穴跡SP1673の一部を掘り込むように調査を行ったことから、掘立柱建物跡SB17と当該溝状遺構との間に重複する竪穴住居跡2基が先後関係をもって存在したということになる。しかし、後述する出土遺物はSB17と当該溝状遺構の土器群は近い時期の所産である。SB17とSH67の柱穴間の重複関係には、すでに述べたように正確性については疑義が残ることから、SP1673とSP1706の先後関係を逆に考えれば、出土遺物と矛盾しない。そうであれば、この付近の遺構の先後関係はSH67・68→SB17→SD86・106となる。SB17が中期末、当該溝状遺構が中期末から後期初頭にかけての時期であり、SH67・68は中期末以前という位置付けが可能となる。(森下)

土器 1067～1084はSD86として取り上げた一群である。1067の広口壺は、口縁部が水平に近い角度で屈曲しており、弥生中期後半新段階に典型的な形態をもつ。1068は大形の広口壺であり、緩やかに開く口縁端部外面に4条の凹線文と頸部外面にハケ原体による列点文を施す。1069は短頸部の広口壺の頸部から肩部の破片であり、破片の上端となる頸部の内外面に焼成破裂痕を留める。1070は短頸広口壺であり、形態から弥生後期初頭に下る可能性が高い。1071・1072は壺底部片である。1073は短頸広口壺であり、1070よりも頸部が絞まる形式であり、後期前半古段階と比較して頸部の直立が明瞭であり、凹線文を施す相違点がある。1074・1075は甕口縁部である。1076は完形の甕であり、口縁部が厚くなり胴部下半に膨らみをもつなど弥生中期末葉の特徴を留める。1077・1078は甕底部片である。1078の底部は、底面と胴部の境を摘み出すという中期末葉よりやや古い形態をもつ。1079・1080は台付鉢の口縁部である。1081の口縁部が直立する高杯は弥生後期前半古段階まで下る資料と見られる。1082・1083は口縁部が内傾する高杯であり、1082は弥生中期後半新段階、1083は弥生中期後半中段階に位置付けられる。1084は高杯脚部片で、外面に多条化した凹線文帯をもつ。

1085～1111はSD106として取り上げた一群である。1085は口縁部が受け口状となる細頸壺の口縁部であり、弥生中期後半古段階に位置付けられる。1086は広口壺の頸部片であるが、頸部に断面三角形の突帯を施す。1087の広口壺は口縁端部外面の凹線文の上面に2個一対の棒状浮文を施す。1088は外面にヘラ描きによる列点文を施す壺頸部片である。1089～1091は壺底部である。1091は胴部が膨らむもので弥生中期後半新段階の特徴をもつ。1092～1094は大形甕の口縁部である。厚手の口縁部が上向きに外反する特徴は、弥生中期後半新段階に特徴的なものである。1095の中形甕胴部外面には、円形の剥離痕が見られるが土器焼成時か使用による二次焼成かの判断が難しい。1097は黒斑が破片の断面を介し内外面に連続して見られる破片であり、土器焼成に伴う残滓である可能性が高い。1099・1098は甕口縁部片である。1100・1101は甕底部片であり、1101は端部を筒状の形態をもつことから、比較的古い属性を留める。1102・1103は台付鉢の口縁部であり、外面の凹線文は浅く不明瞭になっている。1104・1105は大形鉢で、拡張する口縁端部上面や外面に凹線文帯を施す。1106は口縁部が内傾する高杯であり、口縁端部上面の凹線文が消失し端部が尖る等弥生中期後半新段階の属性を備える。1107は1106と同様の形態をもつ高杯の脚部片であり、杯部との接合部に円盤充填が確認できる。1108は台付鉢の口縁部である。1109～1111は高杯脚部片であり、脚端部の拡張の度合いから1109・1110は弥生後期前半古段階に下る可能性が高い。1111は横位の凹線文帯と縦位の列点文で加飾する高杯であり、弥生中期末に位置付けられる。(信里)

出土遺物の様相から、本溝は弥生中期後半新段階に開削され弥生後期前半古段階に埋没したものと推定される。(森下・信里)

SD129 (図 186)

遺構 E区北端で検出した溝状遺構である。河川跡 SR02 が上層の大量の土器投棄により完全に埋没した後に掘削された溝状遺構で、延長 7m を検出した。溝幅約 0.7m、深さは 0.1m と小規模で、黒味の強い褐色系シルトが堆積する。また、本溝跡の延長部分は本調査区北側の 12 次調査や 26 次調査で検出しており、弥生時代中期から終末期の遺構を掘り込んで開削されていることが判明している。(森下)

土器 1112 は弥生中期末の広口壺の口縁部で、破片全体が比熱を受け発泡状態にあり、土器焼成に伴う残滓と考えられる。1113 は大形甕の口縁部である。1114・1115 の中形甕は口縁形態から弥生後期前半古段階に比定される。1116 は弥生後期古段階の大形甕の口縁部片である。

1117 は古墳時代前期の小形甕である。遺構の重複関係から見て、本溝の年代を示す遺物と考えられる。1118 は壺底部片である。1119 の甕底部片は形態から見て、弥生中期前半の所産と見られる。1120 は高杯脚部片である。

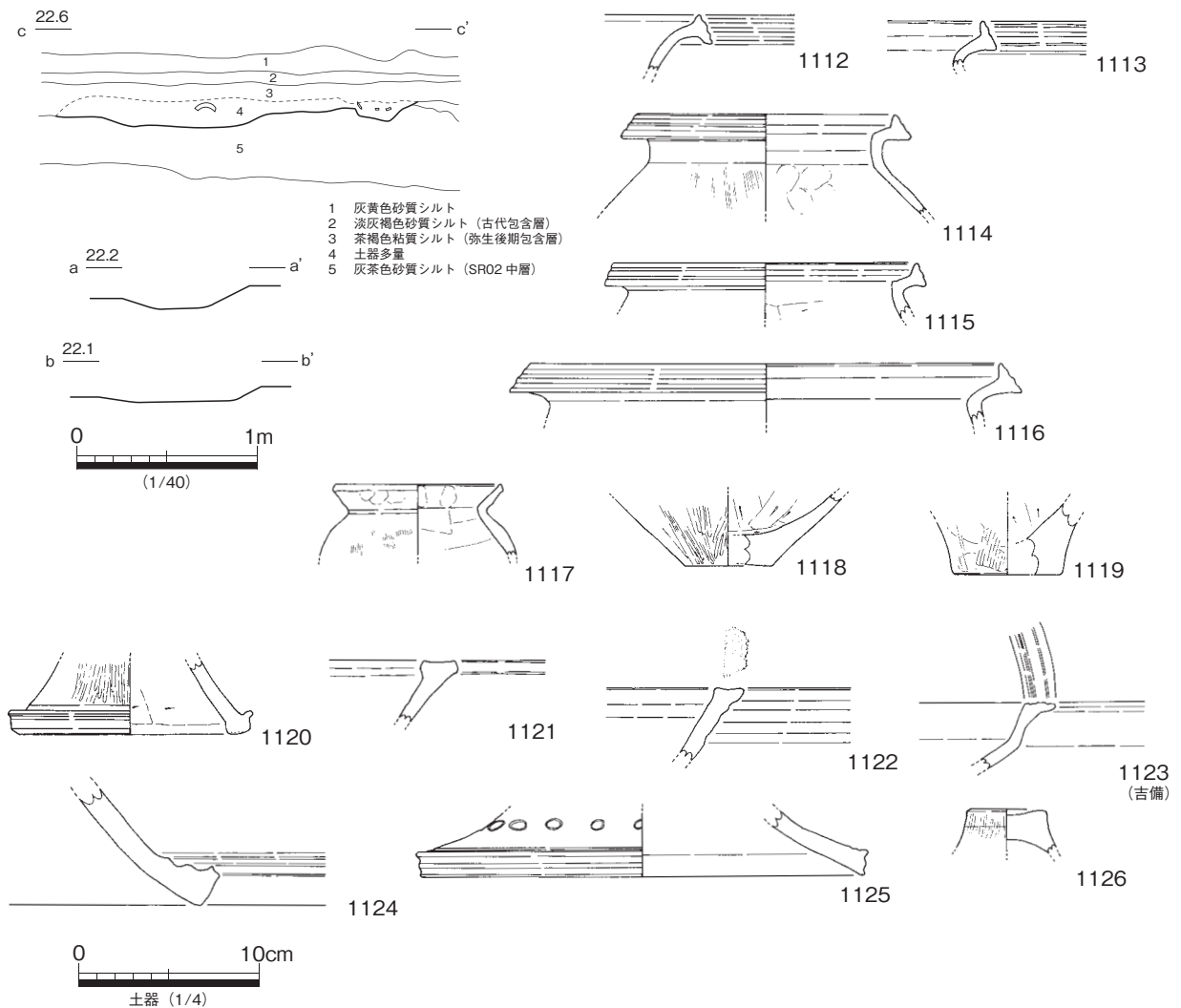


図 186 SD129 断面・出土遺物

1121 は回転台型土器の口縁部と見られる。1122 は器台の口縁部であり、口縁端部外面に波状文、外面に凹線文帯を施す。形態から見て、器台の組成が殆ど見られない弥生中期末に遡る可能性が高い。1123 は高杯の口縁部であり、拡張される口縁端部の形態から弥生後期前半古段階の所産と見られる。1124 は大形器台の脚部片である。凹線文の断面形状や脚端部形態に遺跡内の他の土器群と違和感があり、他地域からの搬入・模倣土器の可能性が高い。1125 の器台は、脚部外面に竹管文を施す。1126 は上面の調整が粗雑であることや厚みがあることから蓋と解釈した。(信里)

12次調査及び26次調査において確認された遺構の重複関係を考慮すると1117の甕の帰属年代が埋没時期を示すと考えられることから、本遺構は古墳時代前期に開削され、埋没したものと捉える。

(森下・信里)

SX02 (図 187)

遺構 A区南側で検出した不定形土器溜まり遺構である。調査時に井戸状土坑SK08との重複関係を誤って認識し、SK08上層の土器集中部と同一遺構として取り扱ったが、図示したようにSK08上層土器群は遺物分布上明確に区分することができることから、当該遺構とSK08を切り離し、当該遺構は緩やかにC字状にカーブする短い溝状遺構と判断した。

規模は、幅0.7m、深さ0.13mを測る。埋土は上層に淡灰色砂質シルト、下層に基盤土ブロックを多く含む褐色系シルト層である。土器片が多く含まれるのは下層で、上層の砂質土はその土器を覆うように堆積する。土器片はaライン断面のように10cm大の礫を含みながら遺構の東側に特に多く、西側は土器片が水平方向に堆積する傾向がある。このことから、主に東側から土器が投棄された可能性が高い。

なお、当該遺構は竪穴住居跡SH10に近く、遺構の東肩ラインとSH10の張出し部外形線との間隔は約1mで、貼出し部の形態と当該遺構東肩がC字状に湾曲する形態が連動するよう見える。両遺構に関係があれば、当該遺構は張出部の外側に想定される周堤の外縁溝の一部であった可能性がある。(森下)

土器 1127・1128 は長頸壺の頸部と肩部片、1129・1131 は甕底部片であり、形態から弥生後期前半期に位置付けられる。1130・1132 は壺底部片で、1130 は弥生後期後半期、1132 は弥生後期初頭に比定される。1133 はほぼ完形の大形甕であり、形態から弥生後期後半新段階に位置付けられる。1134 は明確な頸部をもつ甕であり、口縁部形態から弥生後期前半新段階に比定される。1135・1136 の甕は直線的に外反する口縁端部を面取りするもので、形態から弥生終末期中段階に帰属するものと見られる。1137 の小形鉢は、口縁端部を上方にのみ拡張する。形態的に備後地域のものに類似するが、口縁端部の形態に若干の差異があることから模倣土器の可能性が高い。1139 の高杯口縁部片や1138 の甕は、形態から弥生後期前半新段階のものと見られ、隣接するSK08からの混入品の可能性が高い。1140 は弥生後期初頭の高杯脚端部である。1141 は支脚の口縁部片であり、口縁端部にハケ原体による刻目を施す。(信里)

出土土器に時間幅が見られるものの、その多くは隣接するSK08からの混入遺物である可能性が高い。ここでは時間的に最も新しい様相を示す1133の甕の形態から、本遺構は弥生後期後半新段階に埋没したものと推定する。(森下・信里)

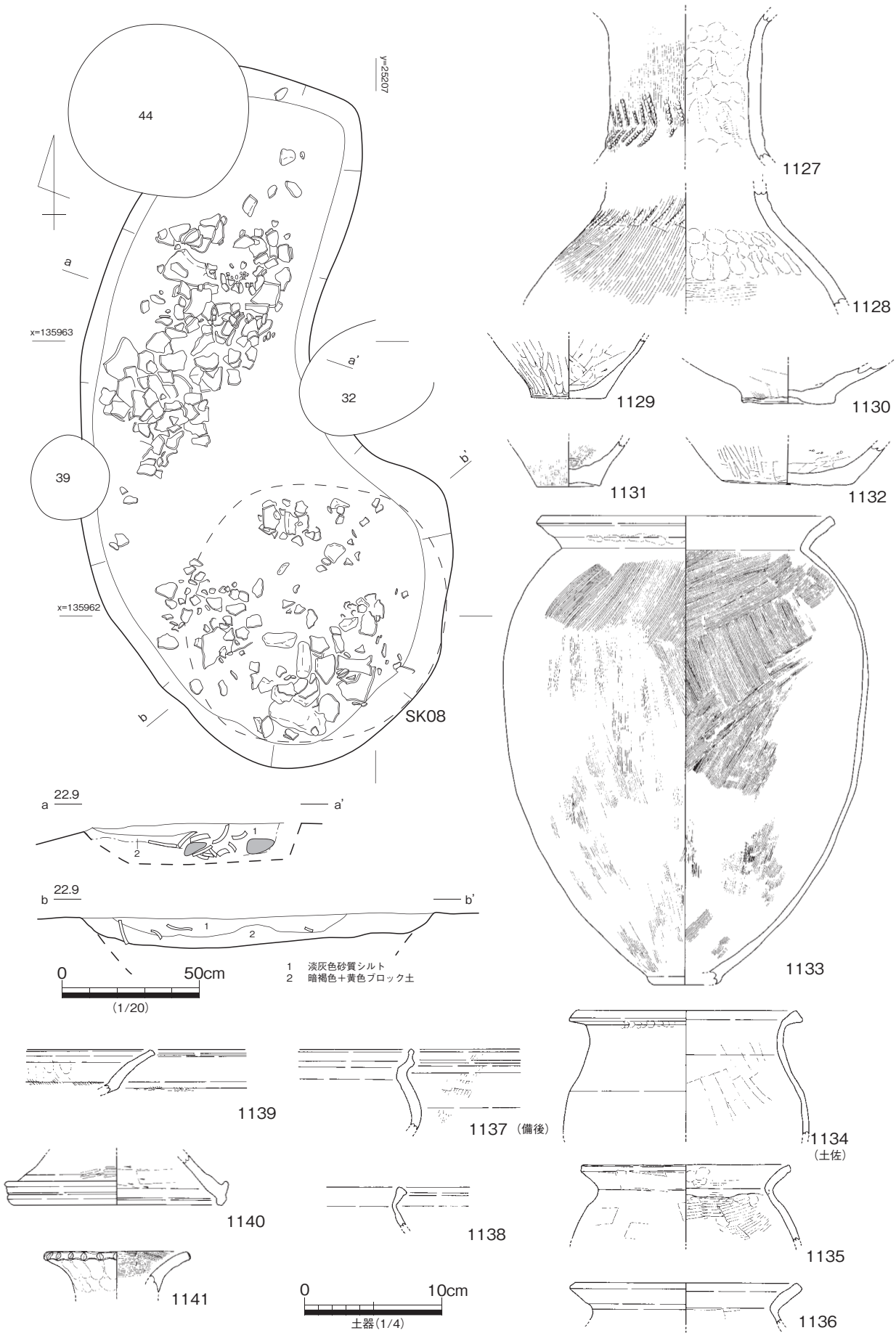


図 187 SX02 平・断面・出土遺物

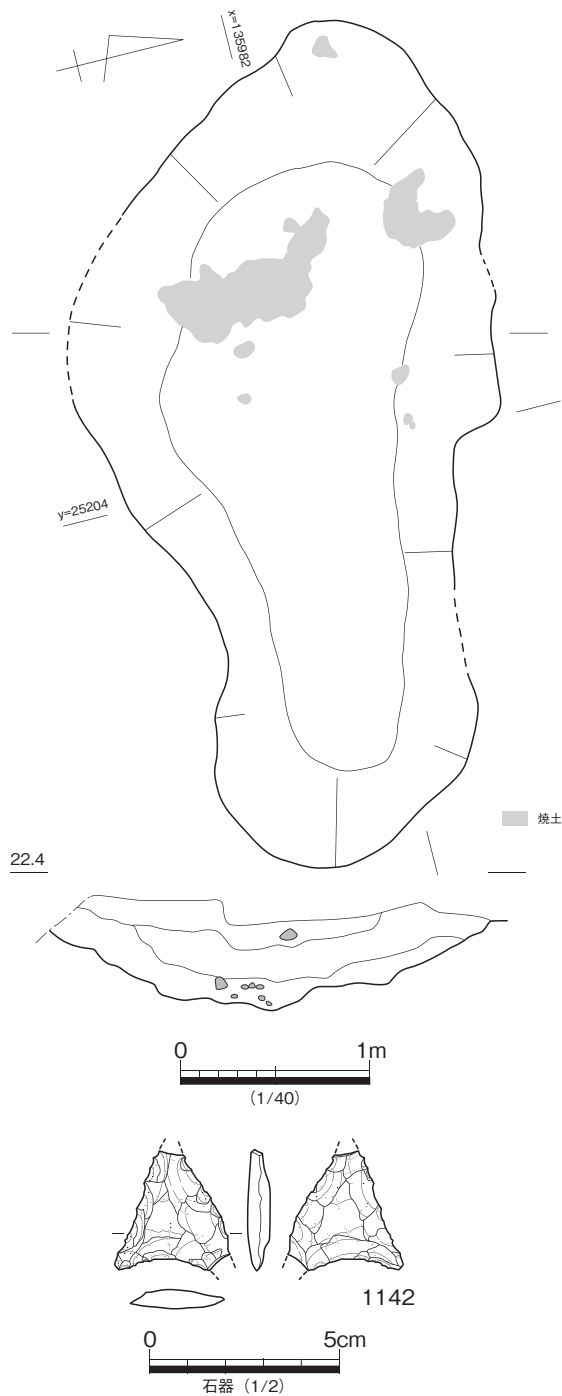


図 188 SX23 平・断面・出土遺物

を超える大型石鏃である。表面の風化は進行せず剥離稜線は鋭い。左右側縁の形態が不均等で未製品と推定する。素材面の摩滅は見られない。(森下)

SX24 (図 189)

遺構 B区中央で検出した矩形の落ち込み遺構である。SH31の北側約1mと近接し、SD29と重複するはずだが、古代の溝跡SD32に掘り込まれ、先後関係は把握できなかった。南北2m、東西1.5mを検出し、北西は中世の条里溝SD17に掘り込まれる。

SX23 (図 188)

遺構 A区中央やや西寄りのA区中央攪乱に上部を削平され、基盤土の黄色砂質シルト層中で検出した不定形遺構である。長さ4.5m、幅2.25m、深さは0.6mを測る。断面形はU字形で、埋土は黄色シルト層が質的に微妙に変化する層界を辿ると概ね3層に区分することができる。遺構の下部は硬い礫層が露出する。

埋土中に多くの焼土が含まれていた。特に上層に多くの焼土が含まれ、一部ブロック状のものを含み、炭化物塊も含む。中層は焼土が含まれず、下層には再び焼土が含まれる。調査時には柱穴跡から焼土が多く出土した掘立柱建物跡SB04に關係する遺構と考え調査を進めたが、上層出土の炭化物を年代測定した結果、縄文後期古相頃の年代が得られたことから、弥生時代基盤層の黄色系シルト層の下位に存在した遺構とも解釈できる。この場合、攪乱により上部を大きく削平されたことにより遺構プランが検出されたと理解できる。今回調査を実施した範囲にも、弥生前期より古い縄文時代の遺構が埋没している可能性を示唆するものである。ただし、年代測定に依存しなければ後述の石鏃の風化度、大きさ、焼土の存在等から、掘立柱建物跡SB04に隣接する弥生中期の遺構と考えることも不可能ではない。

石器 上層よりサヌカイト製石鏃1点が出土した。1142は凹基式打製石鏃で、先端と基部を折損するが、全形を復元すると、長さ4cm

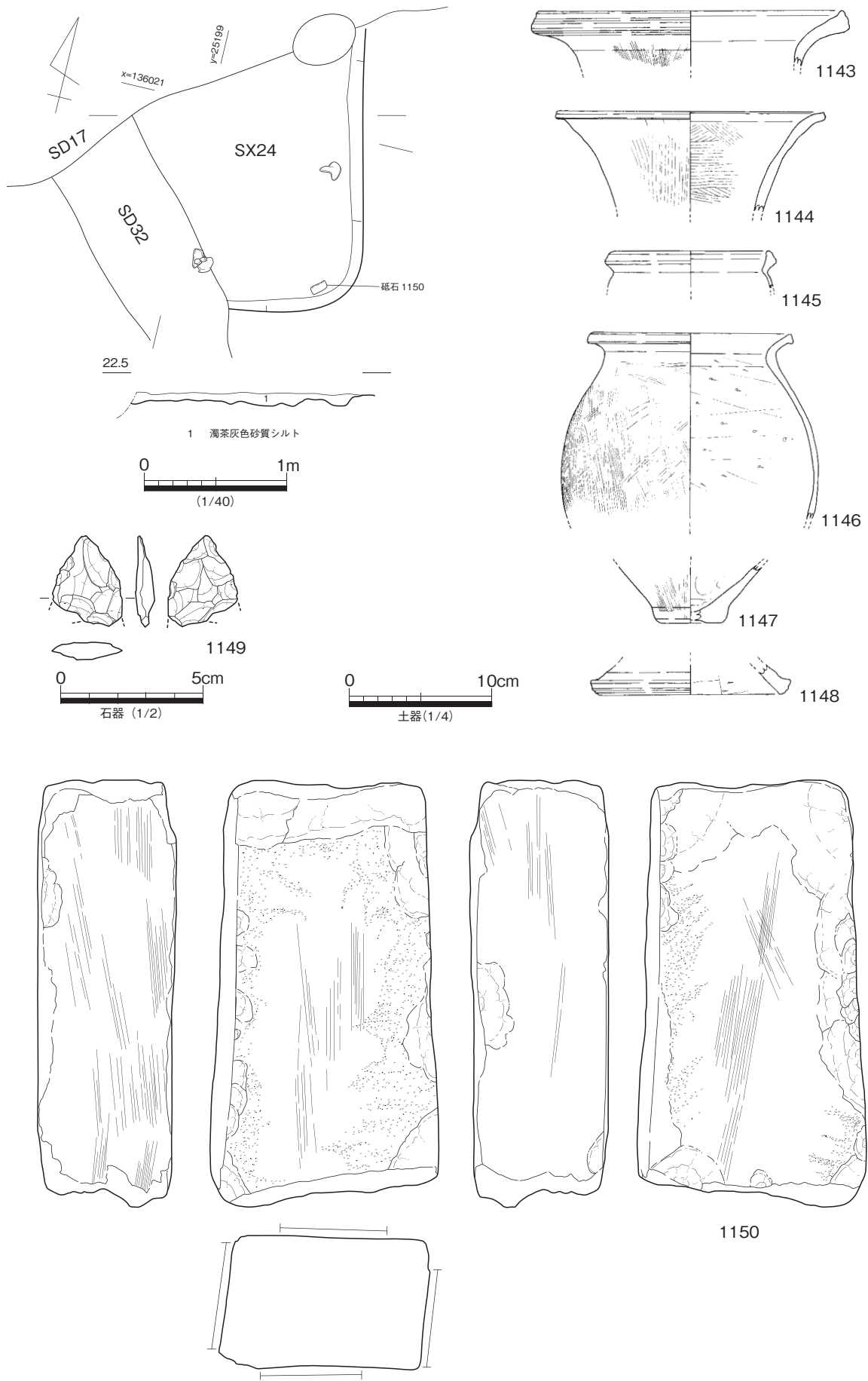


図 189 SX24 平・断面・出土遺物

当初竪穴住居跡と考えたが、土層断面図に示したように遺構底面が凹凸に富み、支柱穴もないことから、落ち込み遺構とした。ただ、近接する SH29 も支柱穴がなく、所属時期も近いことから、住居跡の可能性もある。

埋土は基盤土ブロックを含む茶灰色シルトの単層である。壁際付近が僅かに窪み、壁溝が存在した可能性もあるが、平面的には検出できなかった。底場より 1150 の安山岩製砥石が出土した。(森下)

土器 1143 は広口壺の口縁部。形態から弥生中期末に位置付けられる。1144 は長頸壺の口縁部片であり、弥生後期前半新段階に比定される。1145 は口縁端部を拡張する小形鉢。1146 は短く外反する厚手の口縁部をもつ甕であり、内面には口縁部直下まで及ぶ入念なケズリ調整が見られる。形態から、弥生後期前半新段階に位置付けられる。1147 は突状の鉢底部片である。1148 は弥生後期初頭の高杯脚端部片である。(信里)

石器 1149 はサヌカイト製石鎌である。左右基部端を折損する凹基式の打製品で、全長は約 3.5cm となる。側縁及び先端形状が左右不均等であることから、未製品の可能性が高い。1150 は安山岩製の長方形多面砥石である。板状素材を分割し、分割時に生じる側縁の凹凸を敲打により調整した痕跡が周縁に残る。表裏側面の 4 面とも強い研磨や線状痕が観察できる。大きさと形状の安定性から見て、置き砥石として使用されたものと推定する。(森下)

出土土器に時間幅が見られるが、残存率が高い 1146 の甕の年代から、本遺構は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定する。(森下・信里)

SX30 (図 190)

遺構 C 区西側で検出した不定形落ち込み遺構である。SX02 と同様に C 字状の平面形を呈し、深さ 0.1m と浅い。検出位置は SH35 と SH38 の中間に位置し、SH35 側(西側)に湾曲する。埋土は基盤層に類似する黄灰色シルトで褐色土の細粒ブロックを多く含む。

遺構底場はほぼ平坦で、側縁の立ち上がりは SH35 側がやや急角度、SH38 側は緩やかである。SP1310 に掘り込まれ、掘立柱建物跡 SB12 を構成する柱穴跡を掘り込む。

遺構の性格は検討材料が少ないが、SH35 の外縁線にほぼ平行する点は注目できる。SH35 は床面に 3 時期の支柱穴跡群・土坑群が見られ、最終床面は最も新しい時期の床面であることが判明している。古い時期の支柱穴跡は床面の東に片寄っており、SH35 の最終プランは古い時期の平面プランを壊して構築していることから、当該遺構を SH35 の古期住居の床面に関わる遺構と理解する余地はある。当遺跡に一般的な竪穴住居跡は支柱穴ラインの外側に貼床によるベッド状遺構を有するものであり、SH04・SH31 等の後期前半期の竪穴住居跡では、貼床層の下部に溝状の窪みが巡る特徴がある。当該遺構をその窪みの痕跡と考えることも不可能ではない。(森下)

土器 1151 はジョッキ型土器の口縁部であり、弥生中期後半古段階～中段階に比定される。1152 はやや上げ底を呈する甕底部片であり、形態から弥生中期後半新段階に位置付けられる。(信里)

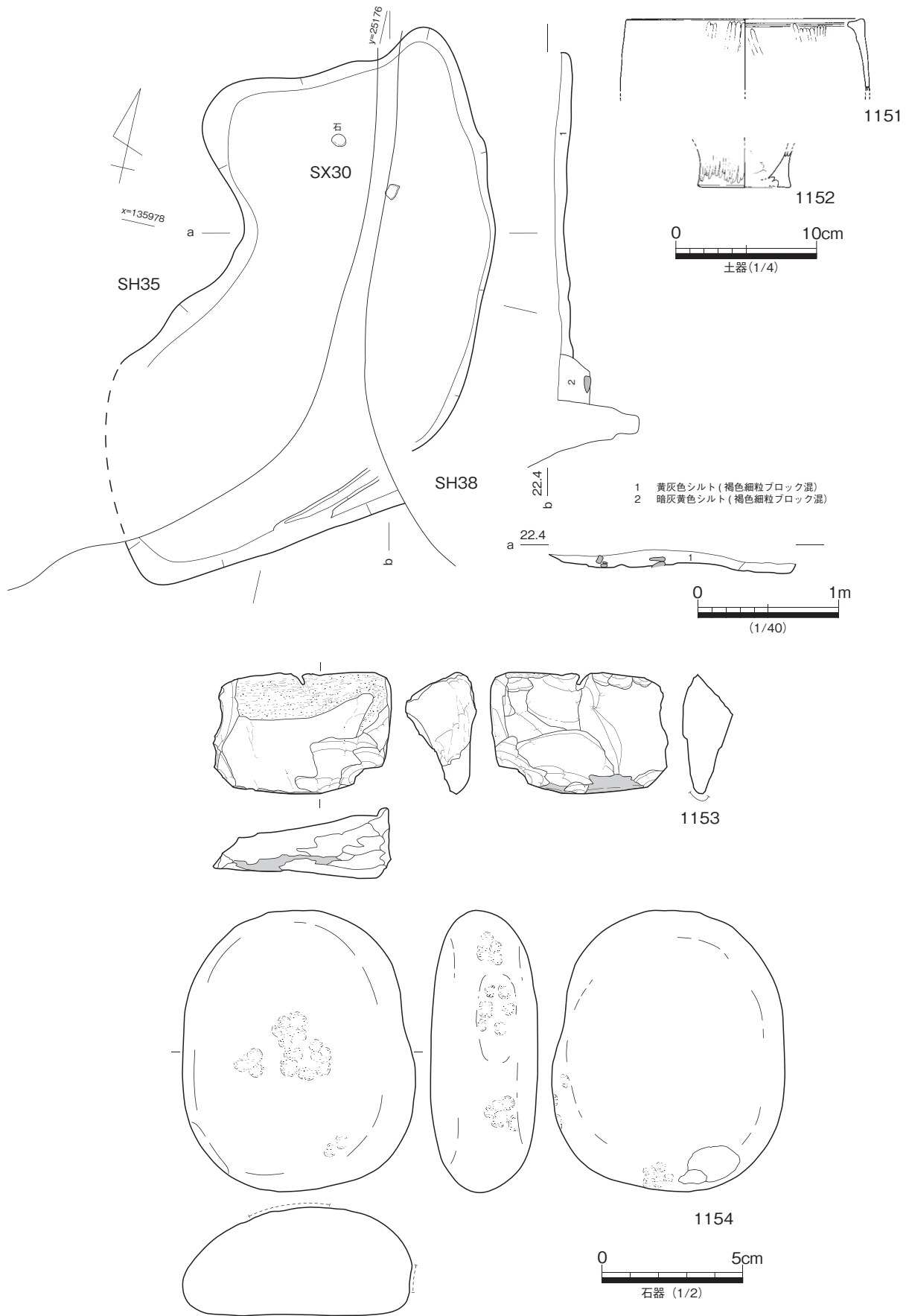


図 190 SX30 平・断面・出土遺物

石器 1153 はサヌカイト製剥片を素材とする擦り切り技法用の切断具である。刃部に長軸方向の強い摩滅が見られる。1154 は砂岩製の叩石である。側面及び腹面にあばた状の敲打痕を認める。明確な線状の敲打痕は見られない。(森下)

埋没土や土器の形態的な特徴は弥生中期後半を示すが、遺構配置に見られる状況から弥生後期前半古段階から新段階に形成されたものと推定される。(森下・信里)

SX35 (図 191)

遺構 C 区の SX30 すぐ北側で検出した溝状の浅い落ち込み遺構である。深さは数センチであるが、SX30 と同様に基盤土類似の黄色シルト層中に褐色土の細粒ブロックが混じる土を埋土とする。SH35 床面下部で検出した。SH35 の支柱穴群の最も新しい A 群支柱穴の SP1064 に掘り込まれ、最も古い支柱穴群 C 群支柱穴 SP1454 と接する位置に当たる。

SX30 と同様、SH35 の古い時期の住居跡に伴う可能性が考えられる。(森下)

土器 1155 は広口壺の口縁部であり、形態から弥生中期末に位置付けられる。1156 はジョッキ型土器の把手であり、弥生中期後半期の所産と見られる。(信里)

出土土器は弥生中期後半から末の様相をもつが、遺構配置に見られる状況から弥生後期前半古段階から新段階に形成されたものと推定する。(森下・信里)

第 5 節 古墳～中世の遺構・遺物

【調査区概観】

当該期の遺構は多数の溝状遺構を中心に、数棟の掘立柱建物跡、土坑、性格不明遺構を確認している。大きな傾向として、溝状遺構は北半部に多数が集中するが、掘立柱建物跡は南半部を中心に分布する状況が見られる。溝状遺構は緩やかな弧を有するものも若干見られるが、直線的な形態を基本としており、掘立柱建物跡と合わせてその方向から複数のグループに大別することができる。このまとまりは、当該地における遺構の変遷を考える上で重要なポイントとなる。

当該期の遺構の下位には、弥生時代前期から古墳時代初頭まで続く集落跡と同時代の自然河川跡が存在している。集落跡は、弥生時代後期を中心とした夥しい数の竪穴住居跡が累々と重なって、足の踏み場もない程の密集度を有している。また、自然河川跡は同時代の廃棄場とされながら埋没していった。

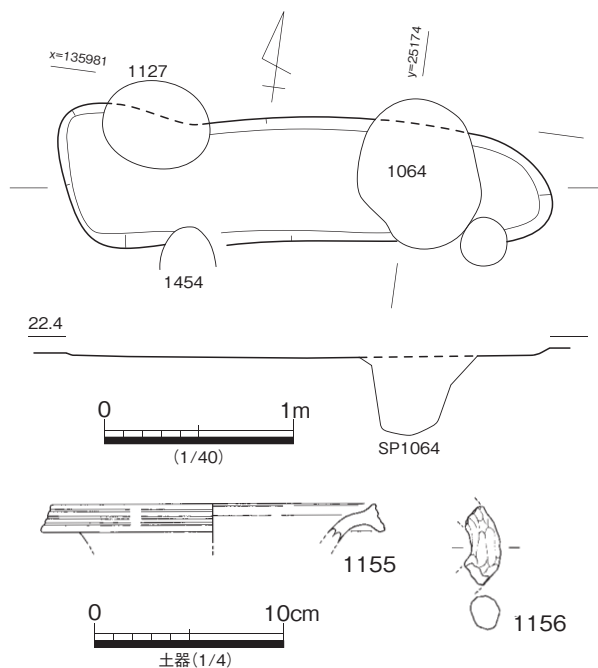


図 191 SX35 平・断面・出土遺物



図 192 古墳後期～中世遺構分布

当該期の遺構のベース層は、これらの多量の遺物を含んだ弥生時代の遺構の埋土であるため、当該期のどの遺構にも弥生時代の遺物が混入する状態が常であり、当該期の遺物よりも前代のものの方が多量な遺構も往々にして存在する。とりわけ自然河川跡の上に位置する溝状遺構ではその傾向が顕著に見られる。それら前代の混入遺物は弥生時代の遺物として看過できない資料も多々含まれているため、一部を図化し、本節に掲載している。(宮崎)

SB01 (図 193)

A区南壁前で検出した梁間2間(3.2m)×桁行4間(7.0m)の規模をもつ南北棟の総柱建物跡に復元した。柱間は梁間方向で1.6m、桁行方向で1.8mを測る。床面積は22.4㎡を測る。建物主軸はN30°Wの方向を有している。後世の攪乱を受けて建物跡の北3分の1の柱穴跡を失っている。柱穴跡は平面円形で、直径60～70cmを測る。直径15～20cmの柱痕が確認できた柱穴跡も見られる。SB35と場所的に重複するが、柱穴跡の重なりは認められず、建物の先後関係については判明しない。

遺物のうち時期を反映する可能性のあるものは須恵器片2点(1158・1159)のみであるが、小片のため詳細な時期の判別は困難であり、古代前半に属するものと思われる。(宮崎)

SB02 (図 194)

A区中央部の東壁付近で検出した梁間2間(4.2m)×桁行3間(5.3m)の規模をもつ東西棟の総柱建物跡で、東辺は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・IV②区)で検出した柱穴跡と組み合う。柱間は梁間方向で2.0～2.2m、桁行方向で1.5～2.0mを測る。床面積は22.26㎡を測る。建物主軸はN80°Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径70～80cmを測る。すべての柱穴跡において直径15～20cmの柱痕を確認している。SP172の土層観察から、柱は抜き取られて埋め戻された状況が判断できる。

遺物は須恵器、土師器細片(1160)が少量と、時期の判別が可能なものはほとんどなく、遺構埋土の特徴から古代と考えられる。(宮崎)

SB30 (図 195)

A区南東隅付近で検出した梁間1間(2.8m)×桁行2間(5.6m)の規模をもつ東西棟の側柱建物跡である。柱間は桁方向で1.8～2.0m、床面積は15.68㎡を測る。建物主軸はN63°Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径40～60cmを測る。SB31と場所的に重複するが、柱穴跡の重なりは認められず、建物の先後関係については判明しない。

遺物はほとんど出土せず、時期の判別は困難である。(宮崎)

SB31 (図 196)

A区南東隅付近、SB30とほぼ同じ場所で検出した。梁間1間(2.2m)×桁行4間(10.6m)の規模で、南側に庇もしくは縁状の張り出しのついた東西棟の側柱建物跡に復元した。主屋の柱穴跡の一部を後世の攪乱で欠損している。柱間は桁方向で2.0～3.6mを測る。庇もしくは縁状の張り出しは1間×3間(1.2m×8.0m)の規模をもつ。張り出し部を含めた総床面積は32.92㎡と推測される。建物主軸はN90°Wの方向を有している。柱穴は平面円～楕円形で、直径20～60cmを測る。直径15～20cmの柱痕が確

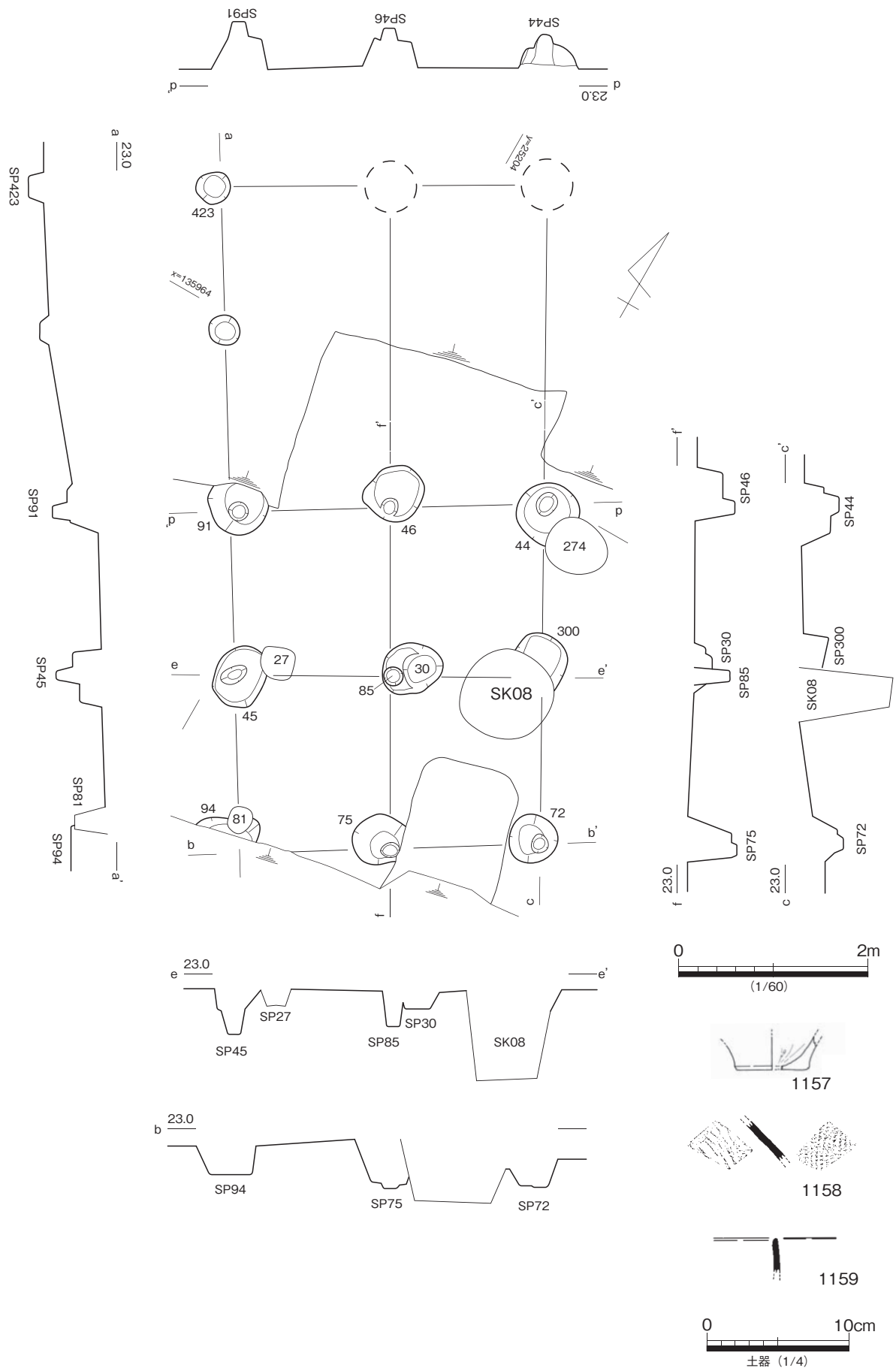


図 193 SB01 平・断面・出土遺物

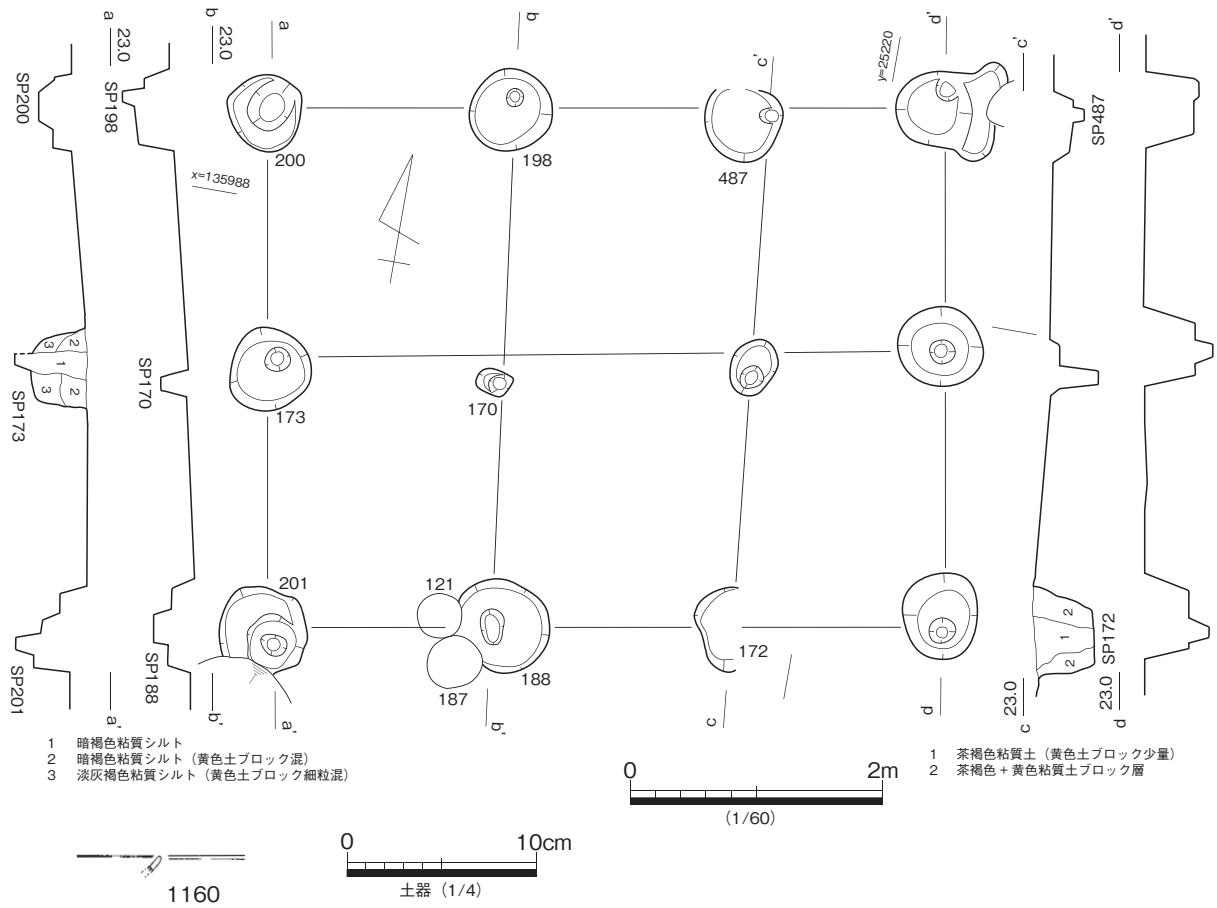


図 194 SB02 平・断面・出土遺物

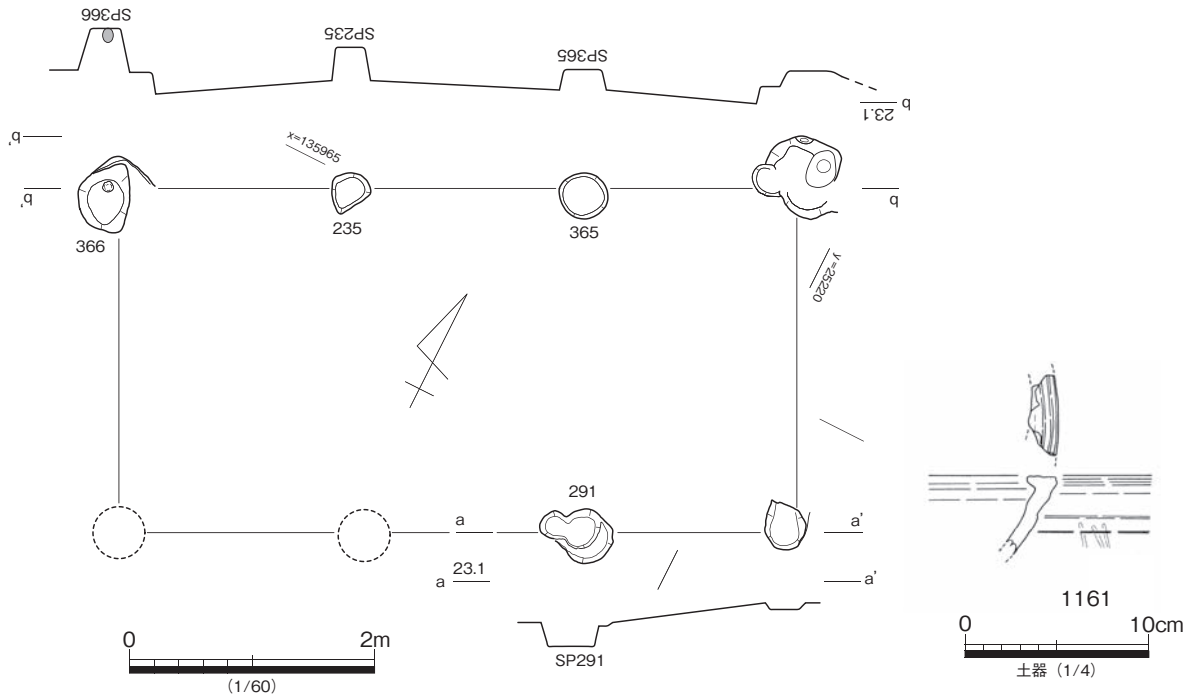


図 195 SB30 平・断面・出土遺物

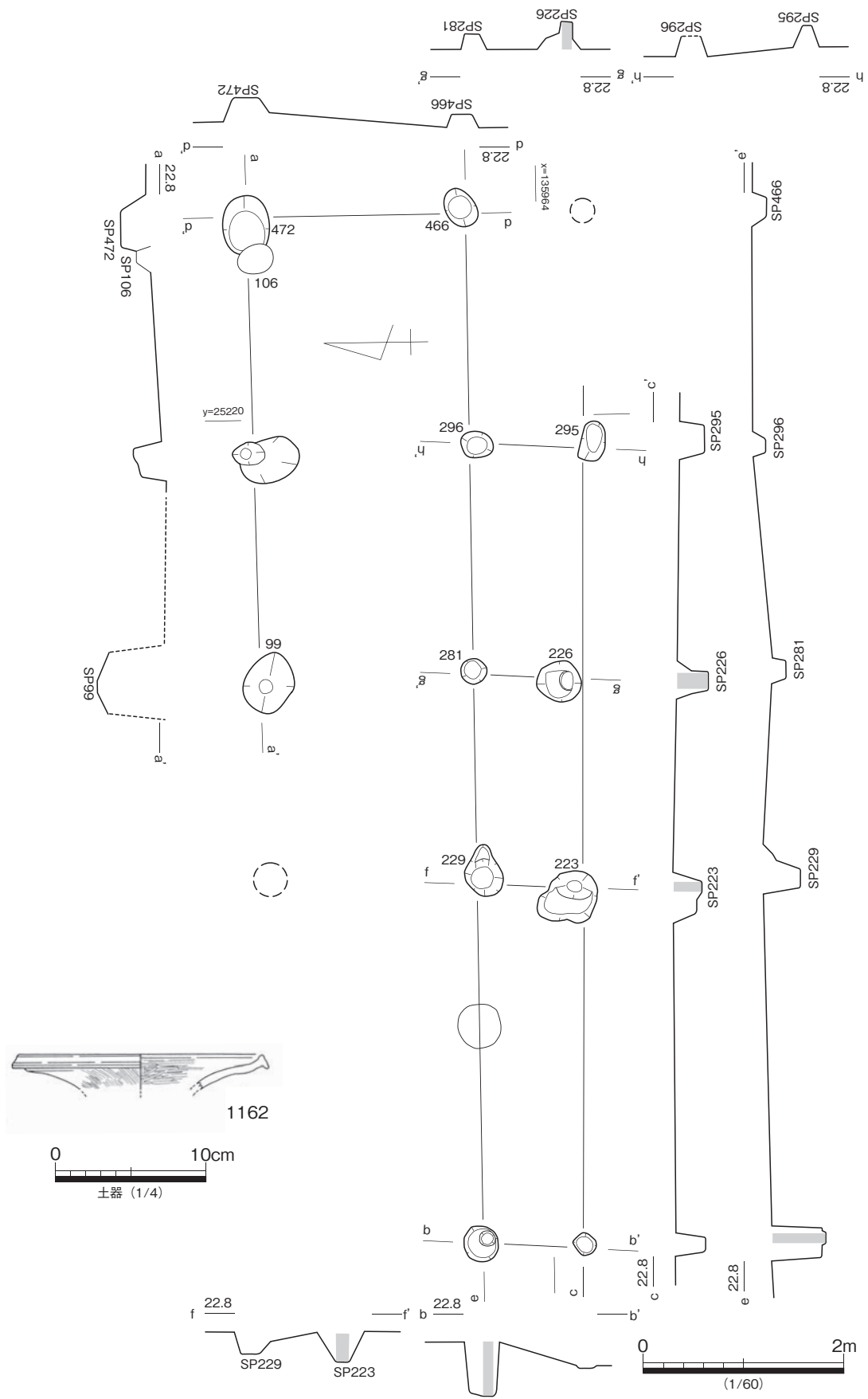


图 196 SB31 平·断面·出土遺物

認できた柱穴跡も見られる。

遺物はほとんど出土せず、時期の判別は困難である。(宮崎)

SB35 (図 197)

A区南壁前、SB01 とほぼ同じ場所で検出した梁間1間(1.9m) × 桁行3間(4.2m)の規模をもつ東西棟の側柱建物跡である。柱間は桁行方向で1.2～1.7m、床面積は7.98㎡を測る。建物主軸はN 65° Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径30～40cmを測る。直径15cmの柱痕が確認できた柱穴跡も見られる。

遺物のうち時期を反映する可能性のあるものは須恵器片1点1163のみで、古代に属するものと思われる。不明遺構SX04よりも新しいことから、7世紀以降であることがわかる。(宮崎)

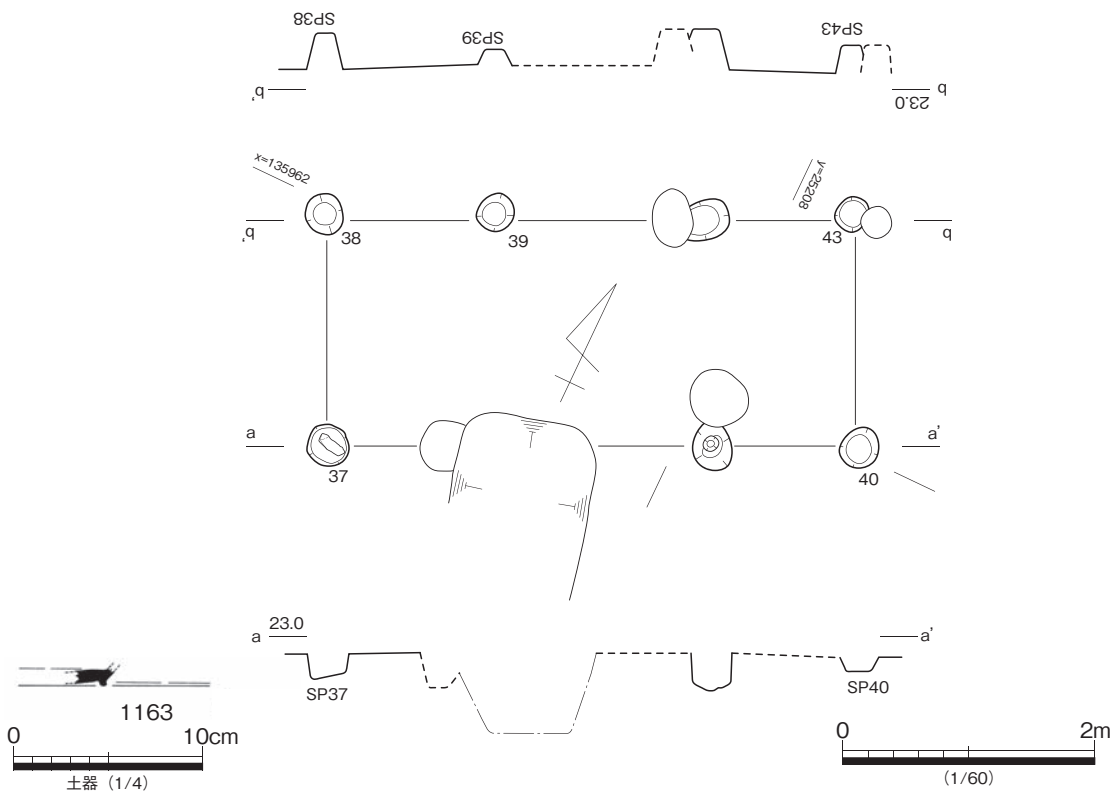


図 197 SB35 平・断面・出土遺物

SB36 (図 198)

D区のほぼ中央部で検出した梁間1間(4.0m) × 桁行3間(6.0m)の規模をもつ東西棟の側柱建物跡である。柱間は桁行方向で1.3～2.8m、床面積は24.0㎡を測る。建物主軸はN 89° Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径40～70cmを測る。建物北辺は桁行が4間にも見えるが、南辺が3間と推定できるので1 × 3間の建物に復元している。

南辺の南側50～60cmの位置に同じ方向を有する2間分の柵列跡を検出している。柱間は3.0m、柱穴跡は平面円形で、直径40cmを測る。直径15cmの柱痕も確認している。

遺物はほとんど出土せず、時期の判別は困難である。(宮崎)

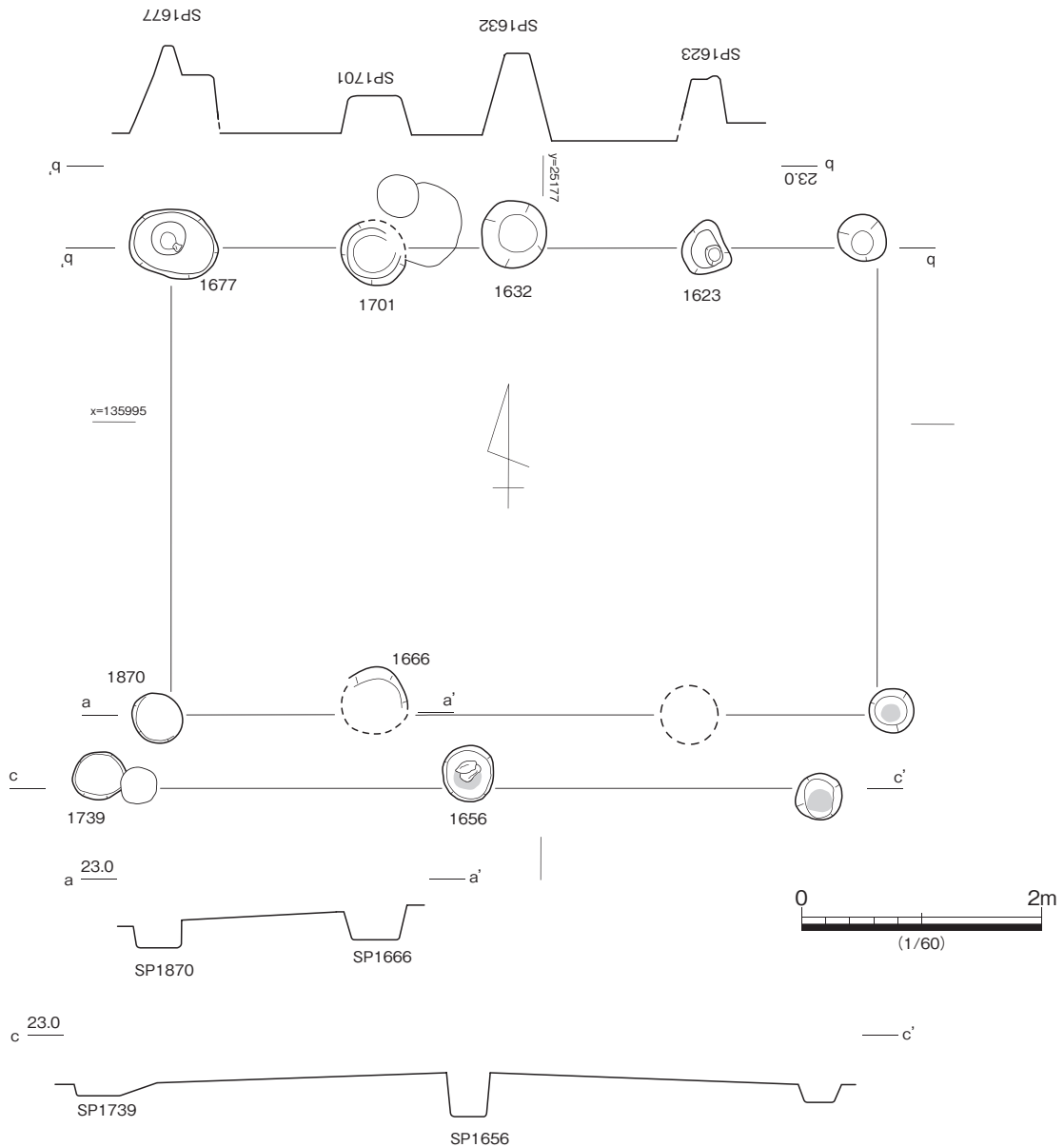


図 198 SB36 平・断面

SB37 (図 199)

D区南西隅の西壁前で検出した。東西辺で柱間が異なり対にならないが、周囲に他に組み合わせる柱穴跡が存在しないため、梁間1間(2.6m)×桁行3間(4.2m)の規模をもつ南北棟の側柱建物跡に復元した。北辺に1×1間(2.6×2.6m)の庇状の張り出しを有している。柱間は桁行方向で東辺1.2～1.6m、西辺1.0～1.8mを測る。張り出し部を含めた総床面積は17.68㎡である。建物主軸はN6°Wの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径40～90cmを測る。

遺物はほとんど出土せず、時期の判別は困難である。(宮崎)

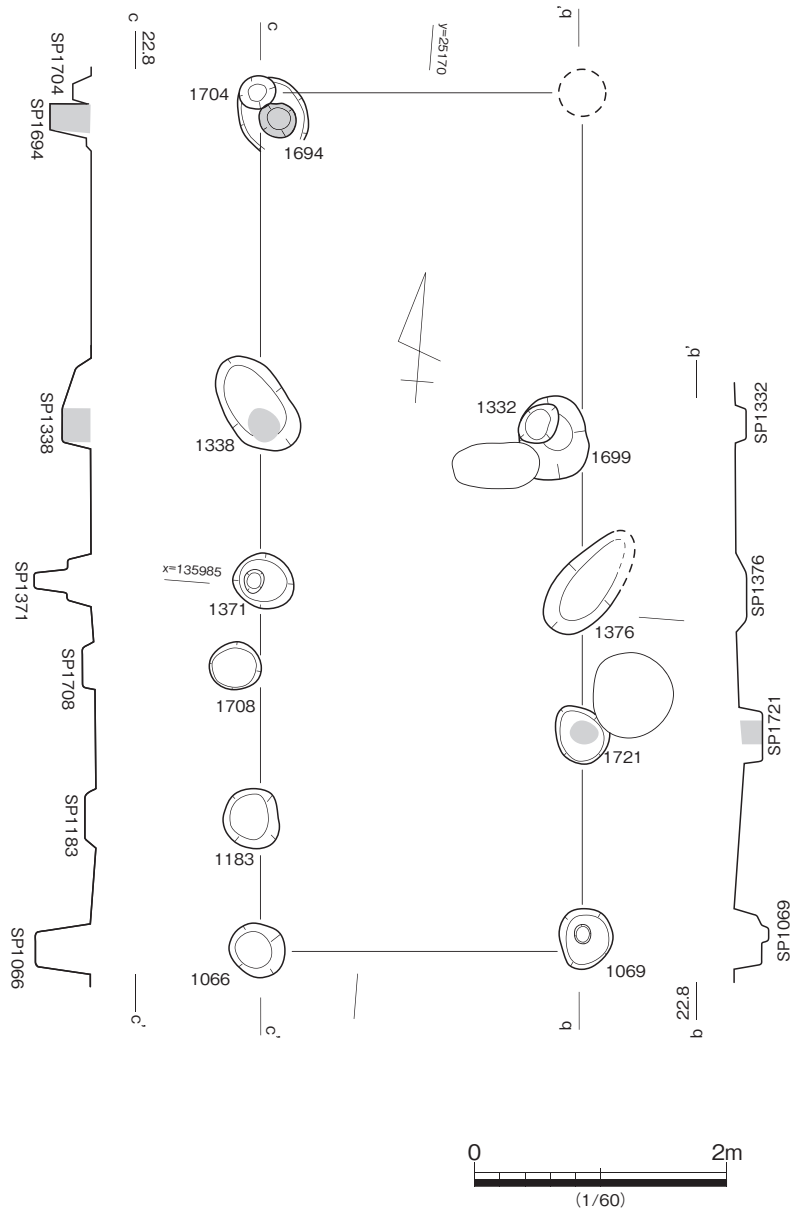


図 199 SB37 平・断面

SB38 (図 200)

D区中央部で検出した梁間1間(3.3m)×桁行3間(7.1m)の規模をもつ南北棟の側柱建物跡である。柱間は桁行方向で2.1～2.6m、床面積は23.43㎡を測る。建物主軸はN4°Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径30～90cmを測る。西辺の柱穴跡3基と南東隅の柱穴跡を欠損する。

遺物はほとんど出土せず、時期の判別は困難である。SP1229の埋没後に掘られた柱穴跡SP1228内から出土した土師器羽釜(1164)から、古代以前の建物と考えられる。石器2点は前代遺物の混入品である。(宮崎)

1165・1166は、サヌカイト製打製石庖丁である。左右両端が折損する。表裏の素材面には磨滅が見られる。1166はサヌカイト製楔状石核である。小型で上下縁に敲打による潰れが残る。(森下)

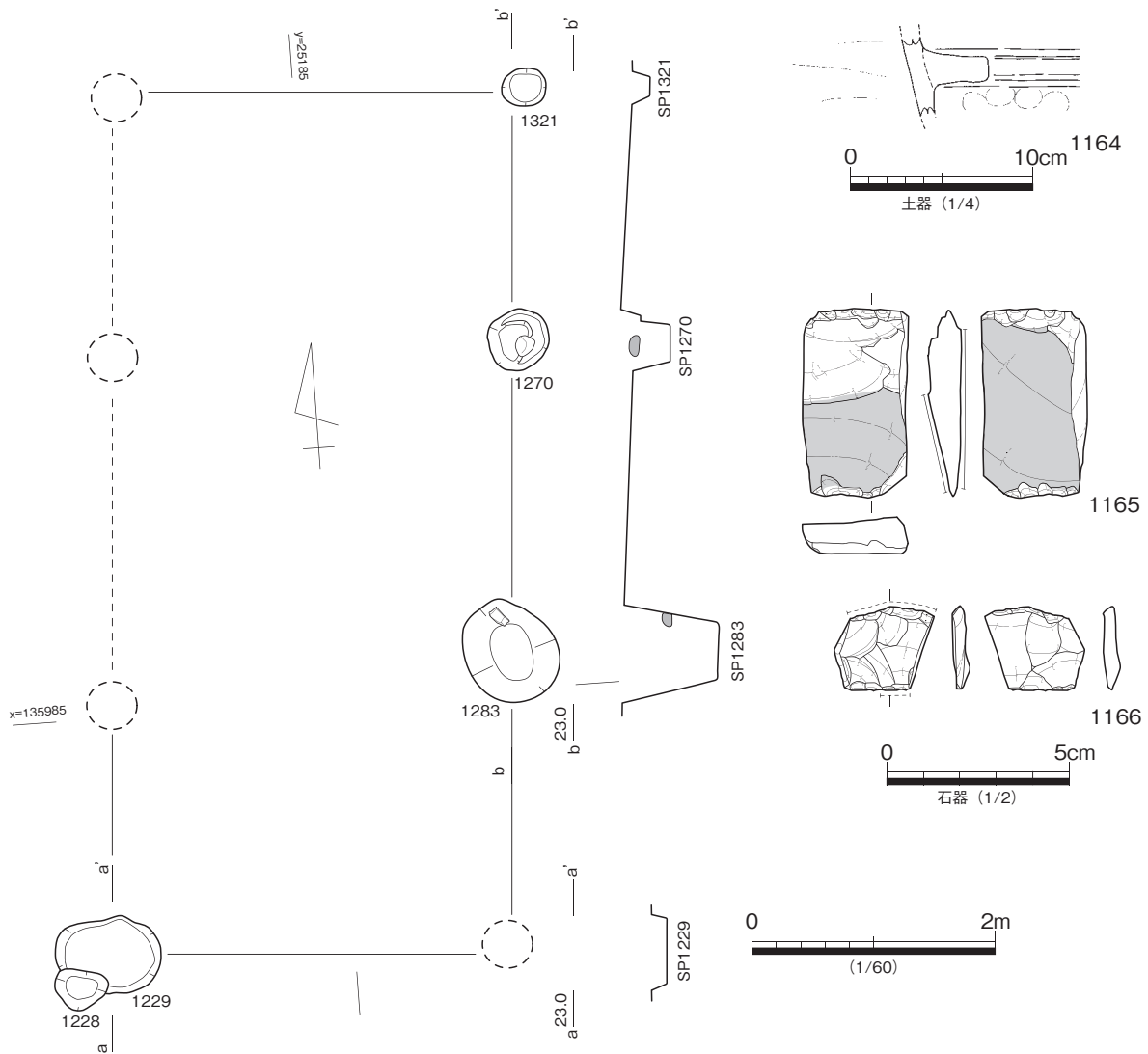


図 200 SB38 平・断面・出土遺物

SB39 (図 201)

F区北西隅付近の西壁沿いで検出した梁間1間(2.9～3.1m)×桁行2間(6.2～6.4m)の規模をもつ東西棟の側柱建物跡で、西辺は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・Y区)で検出した柱穴跡と組み合わせる。柱間は桁行方向で2.7～3.6mを測り、床面積は19.84㎡を測る。建物主軸はN86°Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径30～90cmを測る。いくつか確認できた柱痕の直径は15～20cmである。SP1719には石が入っているが、柱穴底面からは上に位置しており、抜き取り後に入れられた可能性がある。

遺物は少ないが、須恵器甕(1167)や内外面に赤彩を施した土師器皿(1168)から、7～8世紀代に属するものと考えられる。(宮崎)

1169はサヌカイト製楔状石核である。厚み2.3cm程の板状素材を分割した剥片を素材として、上下

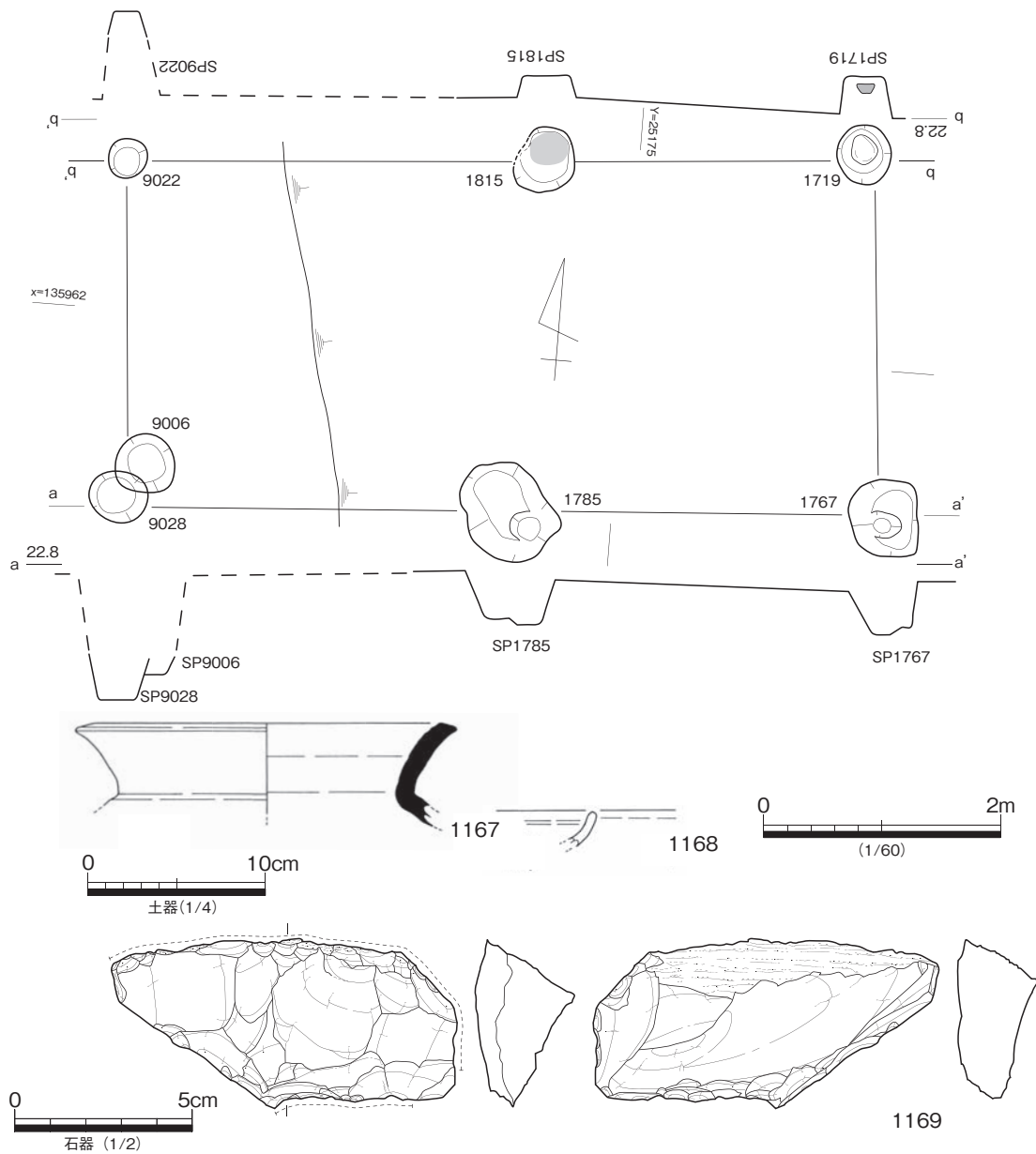


図 201 SB39 平・断面・出土遺物

縁に顕著な敲打を施すもので、敲打を横に進行しながら、図の左面で幅約 3cm の剥片を剥取した痕跡が残る。(森下)

SB40 (図 202)

C 区西壁付近で検出した梁間 1 間 (3.8m) × 桁行 3 間 (6.6m) の規模をもつ東西棟の側柱建物跡で、西辺は以前の調査 (旧練兵場遺跡報告書 I・Y 区) で検出した柱穴跡と組み合う。柱間は桁行方向で 2.3 ~ 3.4m を測り、床面積は 25.0m² を測る。建物主軸は N 61° E の方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径 25 ~ 40cm を測る。

遺物は少なく、須恵器器台 (1170) と円面硯 (1171) が見られるが、詳細な時期の判別は困難であるが、古代に属するものと考えられる。(宮崎)

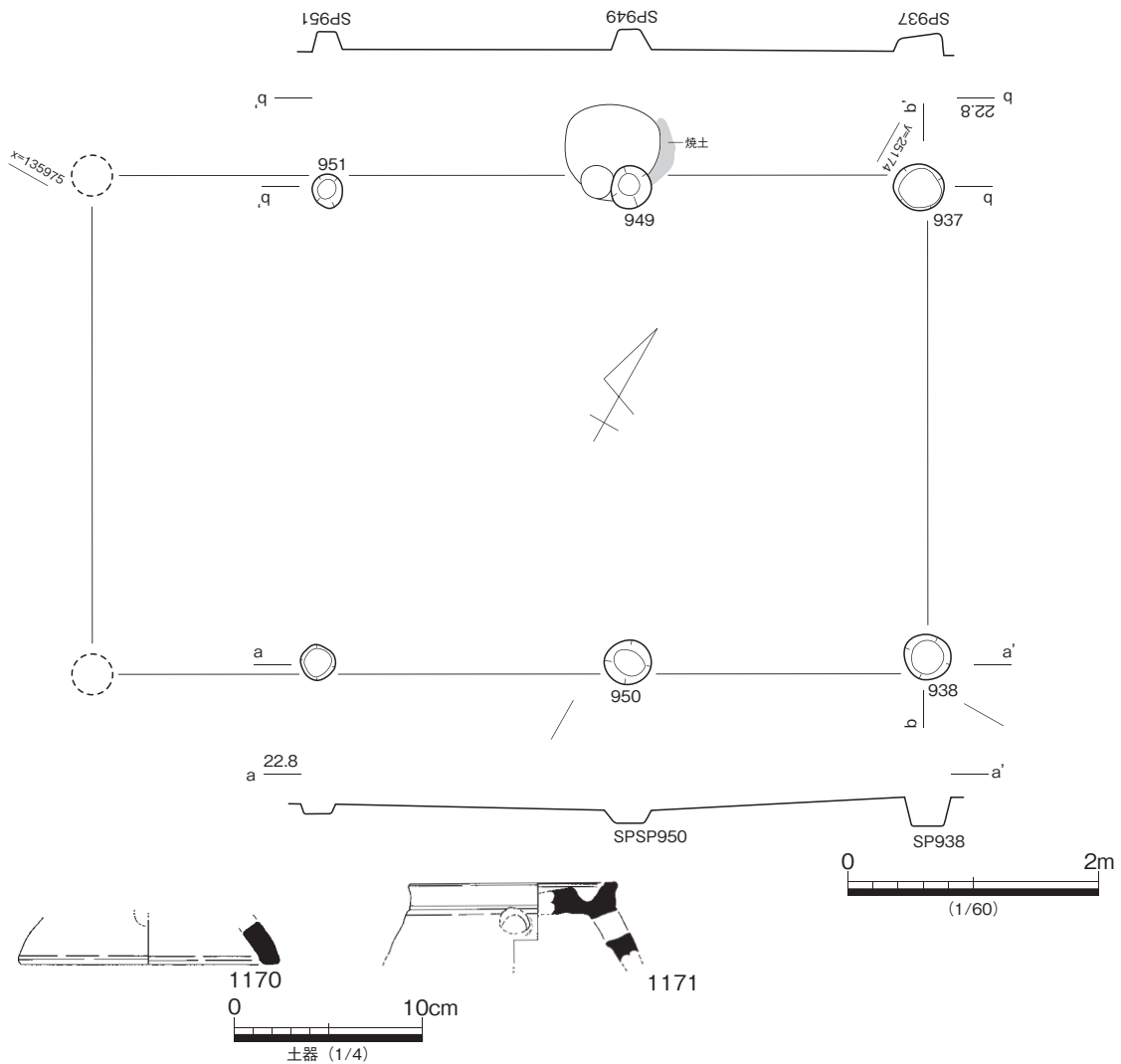


図 202 SB40 平・断面・出土遺物

SB41 (図 203)

C区中央部で検出した梁間3間(4.0m)×桁行3間(4.7m)の規模をもつほぼ正方形の建物跡である。柱間は梁間方向で1.0～1.7m、桁行方向で1.4～1.7mを測る。床面積は18.80㎡を測る。建物主軸はN 64° Eの方向を有している。柱穴は平面円形で、直径40～130cmを測る。確認できた柱痕は直径20cm前後で、石の入った柱穴跡も見られる。正方形に近い平面形や、内部に残る柱穴跡(SP959)の存在等から、本来は総柱建物であった可能性が高い。

遺物はわずかに須恵器蓋(1172)があるに過ぎず、古代に属するものと考えられる。(宮崎)

SB42 (図 204)

C区東寄りで検出した梁間1間(4.2m)×桁行3間(5.2m)の規模をもつ南北棟の側柱建物跡である。柱間は桁行方向で1.2～2.0mを測り、床面積は21.84㎡を測る。建物主軸はN 23° Wの方向を有している。柱穴跡は平面円形～楕円形で、直径50～100cmを測る。

遺物はほとんどなく、わずかに須恵器甕(1173)、杯(1174)があるに過ぎず、古代に属するものと考えられる。(宮崎)

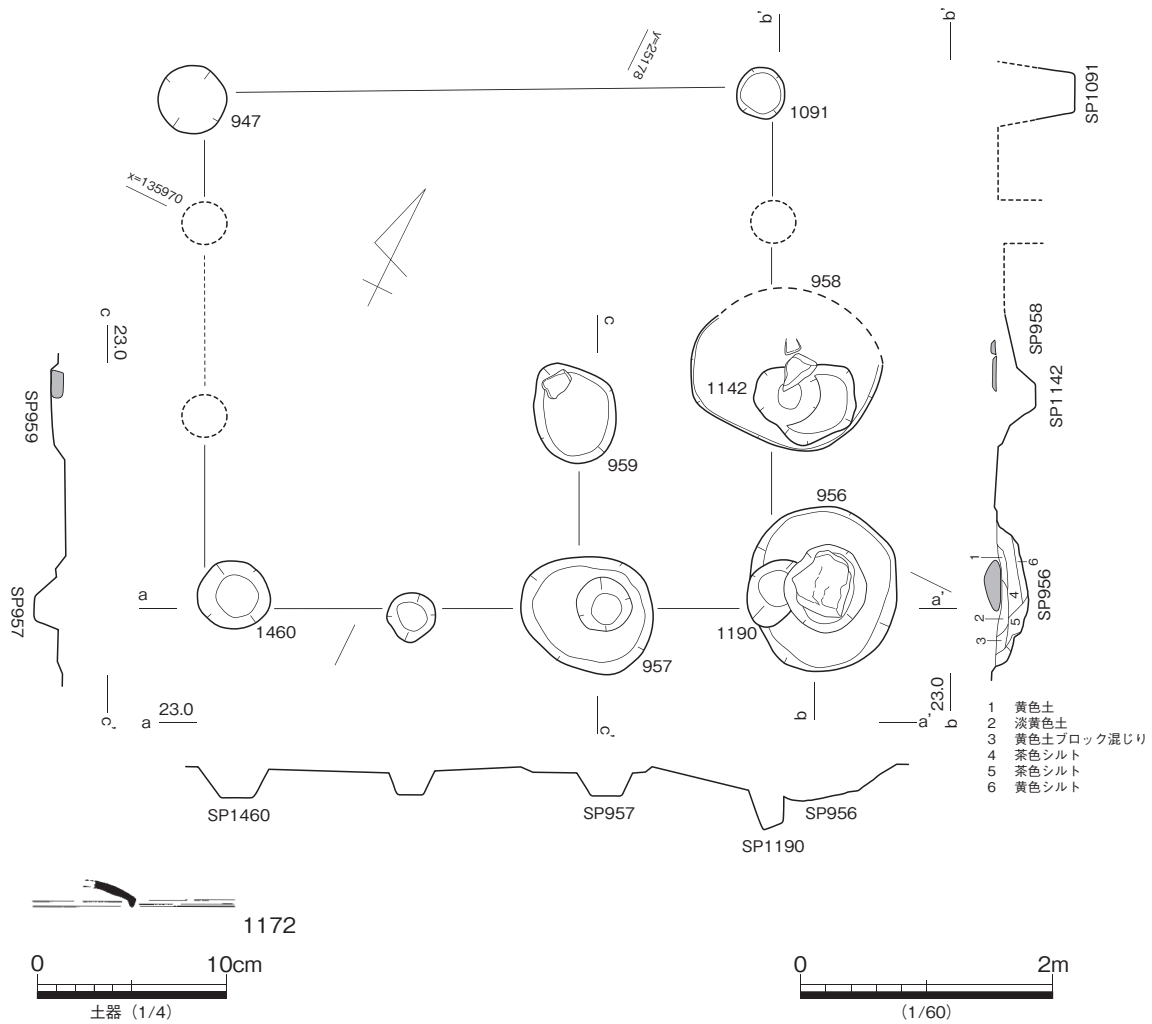


図 203 SB41 平・断面・出土遺物

1175 はサヌカイト製スクレイパー刃部片である。左右は裁断面を有することから、楔状石核に転用された可能性がある。刃縁に磨滅はない。1176 はサヌカイト製楔状石核である。一部に自然面を留めた剥片の上下縁に敲打による潰れを認める。図の右面下半は僅かな磨滅が見られる。(森下)

SB43 (図 205)

A区中央部で検出した梁間1間(3.8m)×桁行1間(2.0m)の規模をもつ南北棟の側柱建物跡で、北側に1×1間(1.0×3.8m)の庇をもつ。庇を含めた総床面積は11.40㎡を測る。建物主軸はN78°Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径40～60cmを測る。庇の柱穴跡は平面円形で、直径20～25cmとやや小振りである。柱穴の深さの状況から、著しい削平を受けていることが窺え、この建物は桁方向が南へ伸びた長方形の南北棟であった可能性がある。

遺物はほとんど出土せず、時期の判別は困難である。図示した須恵器杯(1177)は隣接するSP206から出土した10世紀代の須恵器杯である。両者が関係するものであれば、同時期の可能性がある。(宮崎)

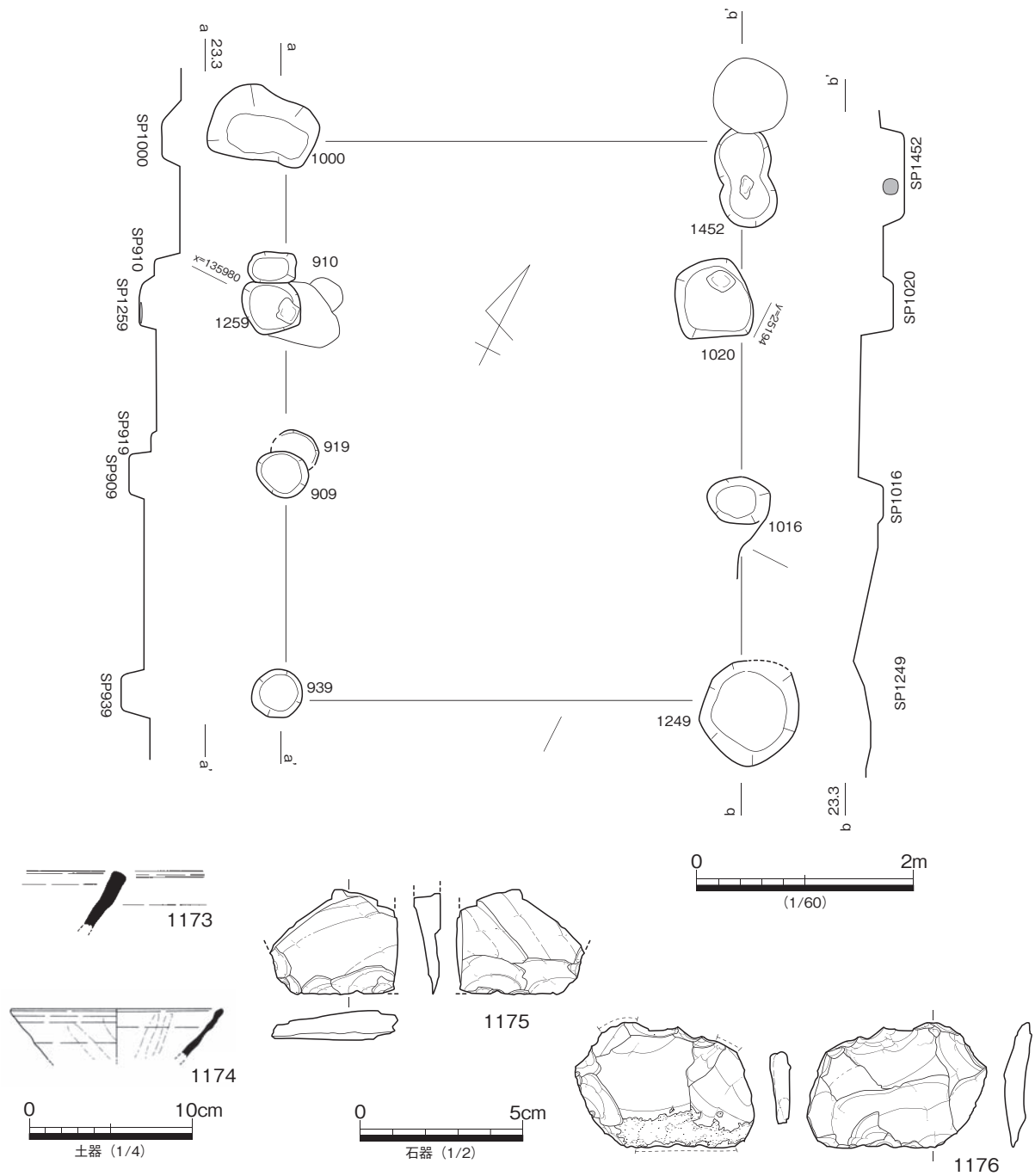


図 204 SB42 平・断面・出土遺物

SB44 (図 206)

F区中央の南壁に掛って検出した建物跡である。東辺は攪乱によって失い、西辺と南辺は調査区外へ続いているため全体は判明しないが、1×3間程度の東西棟の側柱建物跡が想定される。桁行2間(3.7m)のみを確認しており、柱間は1.7～2.0mを測る。その柱穴跡の並びはN54°Eの方向を有している。柱穴跡は平面円形で、直径65～75cmを測る。

遺物はわずかに須恵器椀(1178)が見られるのみで、古代に属するものと考えられる。(宮崎)

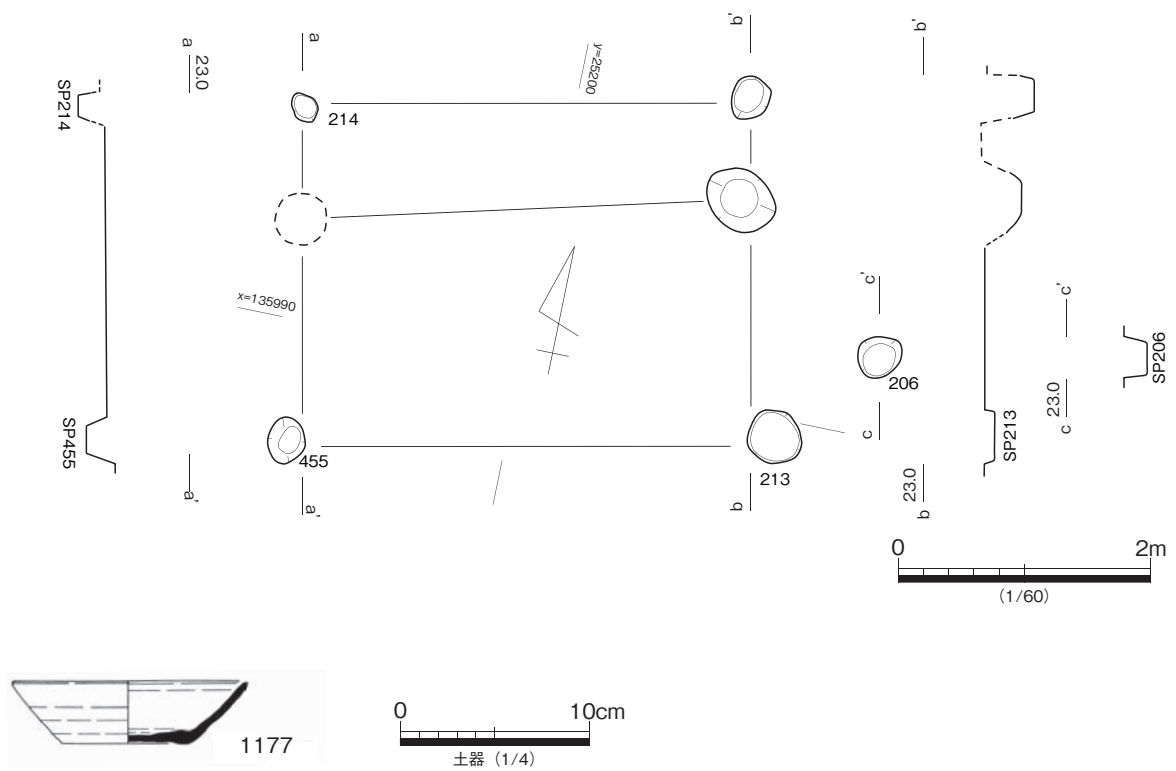


图 205 SB43 平·断面·出土遺物

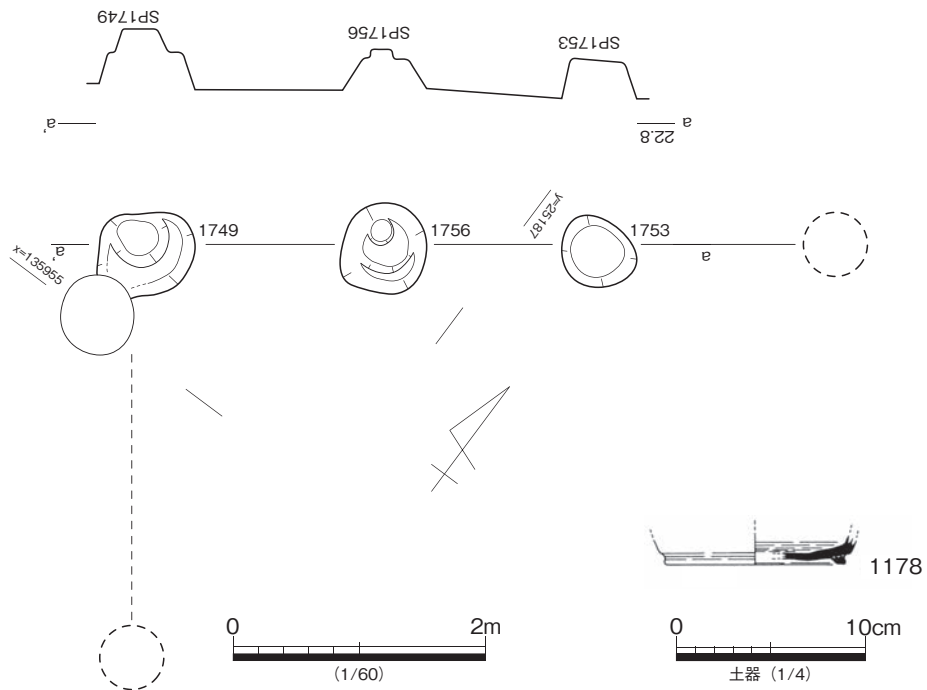


图 206 SB44 平·断面·出土遺物

SK21 (図 207)

B区中央部の南端付近で検出した土坑である。平面形態はやや角張った長楕円形を呈しており、断面形態は浅い皿形である。長径0.8m、短径0.7m、深さ14cmを測る。長軸はN4°Wの方向を有すると見ることもできる。

遺物は須恵器蓋(1179)と土師器椀(1180)が出土しており、7～8世紀に位置付けられる。(宮崎)

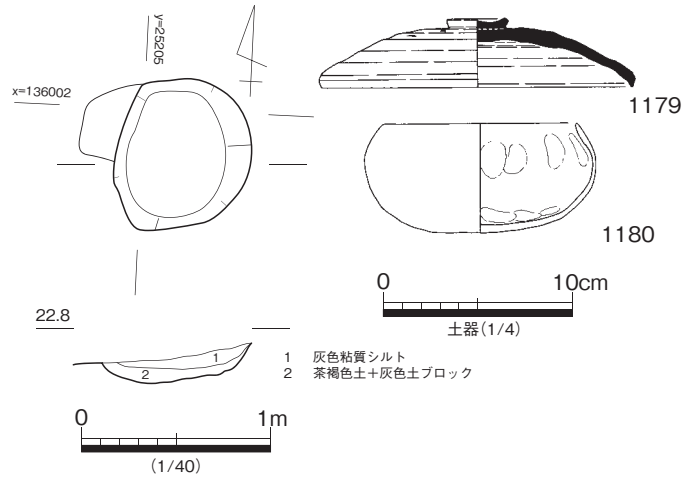


図 207 SK21 平・断面・出土遺物

SK30 (図 208)

B区中央部付近で検出した土坑である。平面形態は一辺が歪な隅丸長方形を呈しており、断面形態は浅い皿形である。長さ1.48m、幅0.84m、深さ90cmを測る。長軸はN31°Wの方向を有する。埋土には遺構のベース層のブロックが含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器椀底部(1181・1182)が出土しており、8世紀代に位置付けられる。(宮崎)

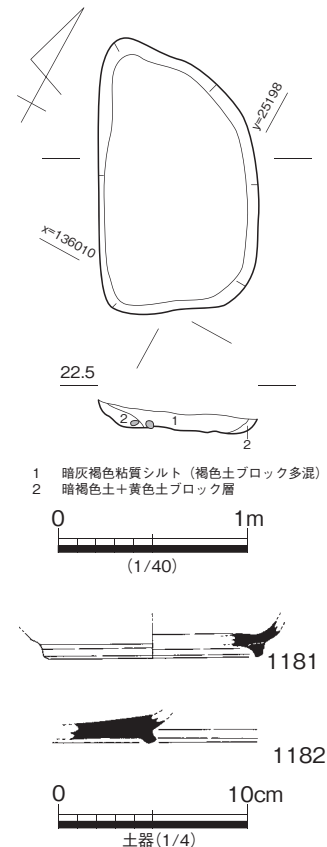


図 208 SK30 平・断面・出土遺物

SD01 (図 209・210)

A区南東隅付近で検出した、N30°Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は逆台形ないしU字形を呈しており、南端は調査区外へ連続する。位置と方向から、SD14が連続する溝状遺構の可能性がある。幅0.6～1.3m、深さ0.3～0.6m、検出長5.5mを測る。埋土は暗褐色系粘質土であるが、ベース層の黄色土ブロックが含まれる下層と含まれない上層に大別することができる。このことから下層は人為的に埋め戻された可能性がある。平面形態が長楕円形の土坑が連続するように見えることや、縦断面は床面にかなりの凹凸があり急な立ち上がりを有する部分も窺えることから、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は、須恵器、土師器、弥生土器、玉、石器が出土した。1183～1191は須恵器蓋で、内面の返りが残るもの1186・1187も見られる。1192～1194は内面に返りを有する須恵器杯身、1195～1199は須恵器杯である。1200～1202は須恵器椀である。1200・1201は低く外方へ開く高台をもつ。1203・1204は須恵器高杯である。1205は須恵器平瓶で、口頸部外面にヘラ記号状のものがある。1206は須恵器短頸壺で、外面

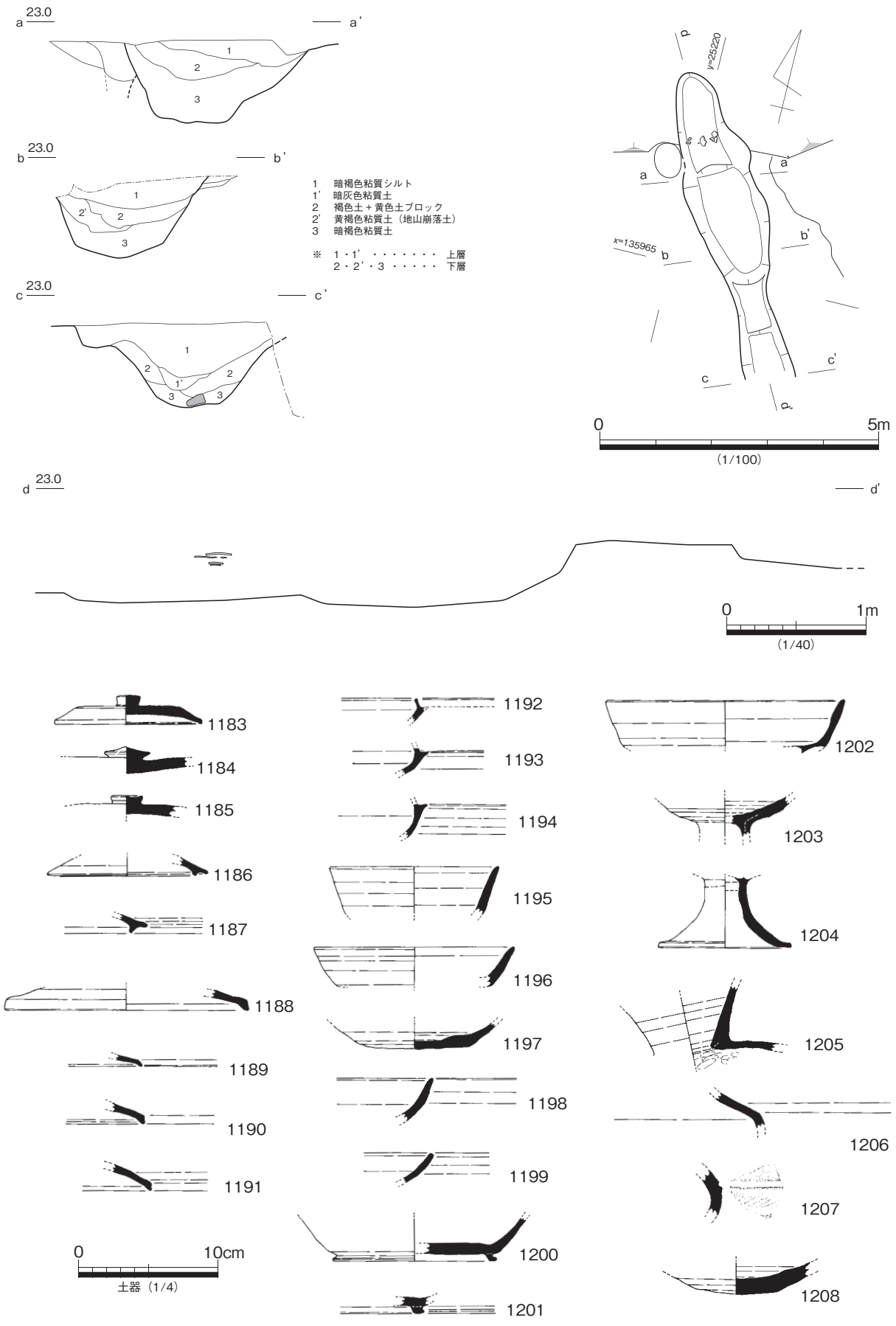


図 209 SD01 平・断面・出土遺物 (1)

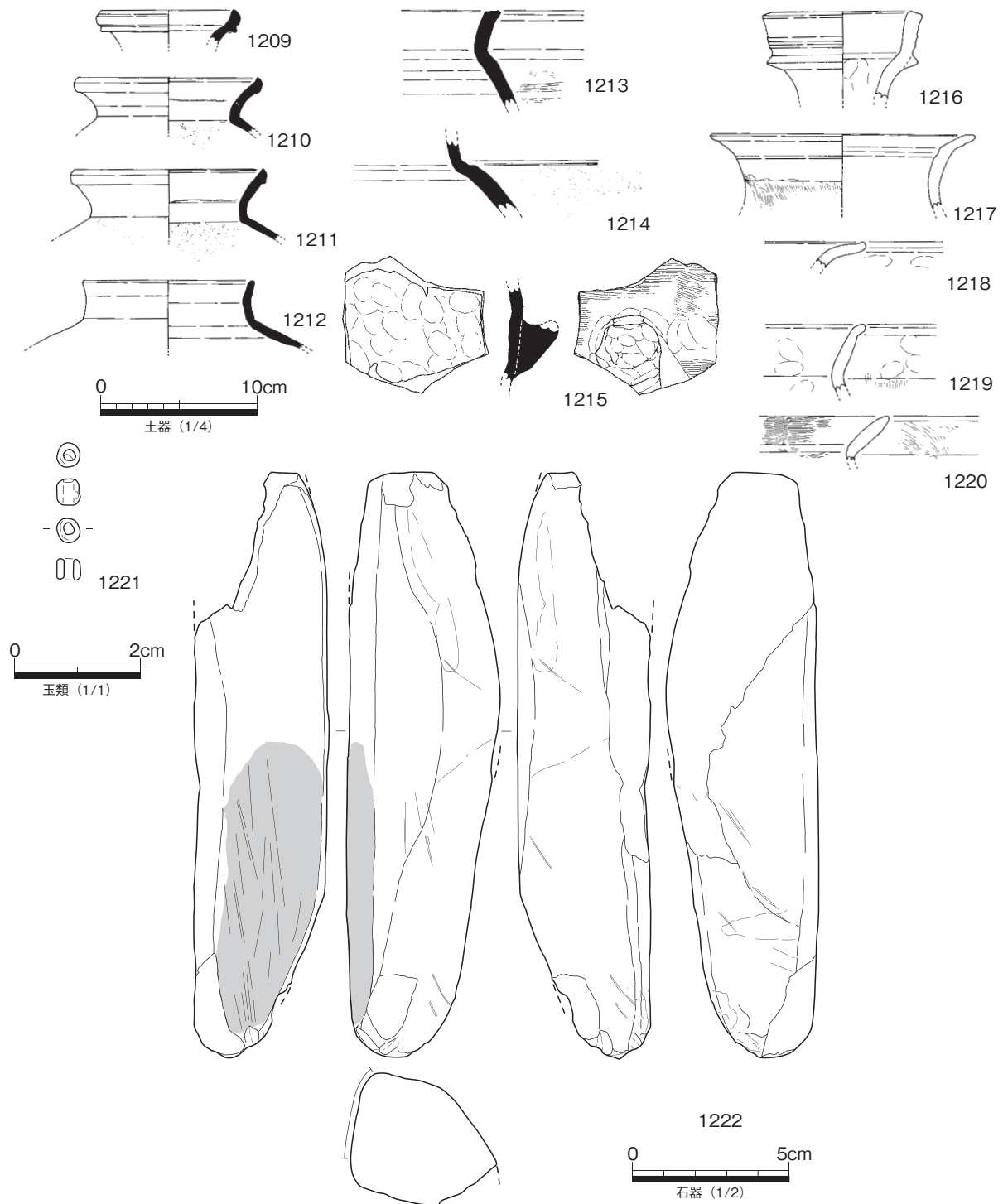


図 210 SD01 出土遺物 (2)

に重ね焼き痕跡が残る。1207 は須恵器壺（はそう）の胴部、1208 は須恵器壺である。1209 ～ 1215 は須恵器甕である。1215 は胴部に耳状の把手を付す。1216 ・ 1217 は混入した弥生土器である。1218 ～ 1220 は土師器甕である。（宮崎）

1222 は安山岩製砥石である。図の上端に僅かな欠損が見られるものの、ほぼ旧状を維持する。長さ

20cm 程の棒状断面三角形石片を素材として、図で示したように、体部下半の網掛部分に平坦で顕著な砥面を備える。また、素材長軸方向に細かな線状痕を認める。体部上半を手で握ると持ち易い形状を備えており、手持ち砥石と考える。(森下)

須恵器の年代観から7世紀後半～8世紀に位置付けられるが、層位は反映していない。7～8世紀代に設置・埋没した溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD02 (図 211)

A区中央付近で検出した、N 35° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。付近にはほぼ同じ方向をもつ溝状遺構が複数存在しており、遺構の重なり具合から、SD03・14より新しいと判断される。幅1.3～1.6m、深さ0.1～0.2m、検出長7.5mを測る。埋土は灰色系砂質土を主としている。部分的に礫や褐色土ブロックを含んでおり、それによって上下2層に大別されるが、時期差を反映するものではないようである。

遺物は須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、弥生土器、石器、獣骨が出土した。1223は内面に返りを有する須恵器蓋、1224・1225は返りを有する須恵器杯身である。1226～1228は須恵器杯、1229は須恵器碗である。1230～1232は須恵器高杯で、1230は杯部外面に沈線1条を施す。1233～1241は須恵器甕である。1242は黒色土器A類碗で、10世紀代のものと思われる。1243・1244は土師器杯である。1245は和泉型の瓦器碗で、12～13世紀代のものと思われる。1246は竈の破片、1247は足釜脚部、1248は土師器の管状土錘である。1249・1250は平瓦で、1250は縄目タタキの痕跡が残る。(宮崎)

1251はサヌカイト製打製石錐である。つまみ部は逆三角形を呈し、作用部はやや扁平な形状で、下端を欠損する。(森下)

遺物の年代観は7世紀後半～13世紀と時期幅をもつが、新しい時期の遺物は混入の可能性が高く、SD02は設置・埋没時期が7世紀後半～8世紀代と捉えられる。(宮崎)

SD03 (図 212)

A区を南東隅から中央にかけて横切るように検出した、N 28° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形が基本で、一部は逆台形を呈している。周辺にはほぼ同じ方向をもつ溝状遺構が複数存在しており、遺構の重なり具合から、SD18より新しいと判断される。幅0.5～1.7m、深さ0.1～0.4m、途中攪乱によって途切れるものの、総検出長37mを測る。埋土は灰色系砂を主としている。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器、瓦が出土した。1252は須恵器杯、1253は須恵器碗である。1254・1255は須恵器高杯の脚部、1256は須恵器壺底部である。1257は土師器杯、1258は土師器播鉢である。1259は弥生土器高杯の脚部で混入したものである。1260は土師器足釜脚部、1261は土師器甕の把手である。1262は丸瓦で、凹面に布目が残る。1263は須恵質焼成の平瓦である。

遺物の年代は7～8世紀、13世紀と幅があるが、新しい時期の遺物は調査時に不明遺構(旧SX01)とした部分に限定されることから、混入の可能性が高く、これらを除いた遺物がSD03に所属するものと見られる。SD02と同様に7～8世紀代に設置・埋没した溝状遺構と考えられる。(宮崎)

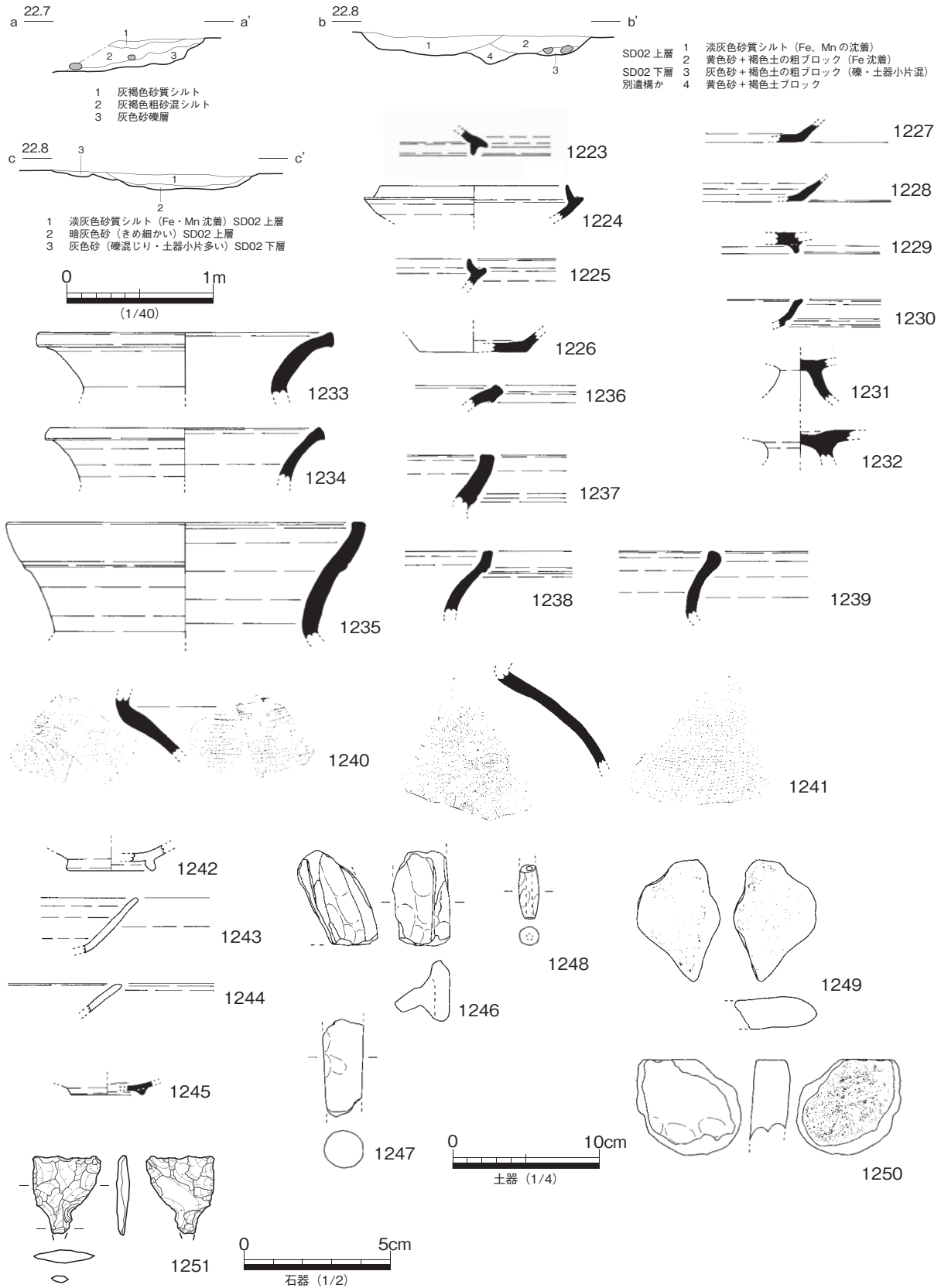


図 211 SD02 断面・出土遺物

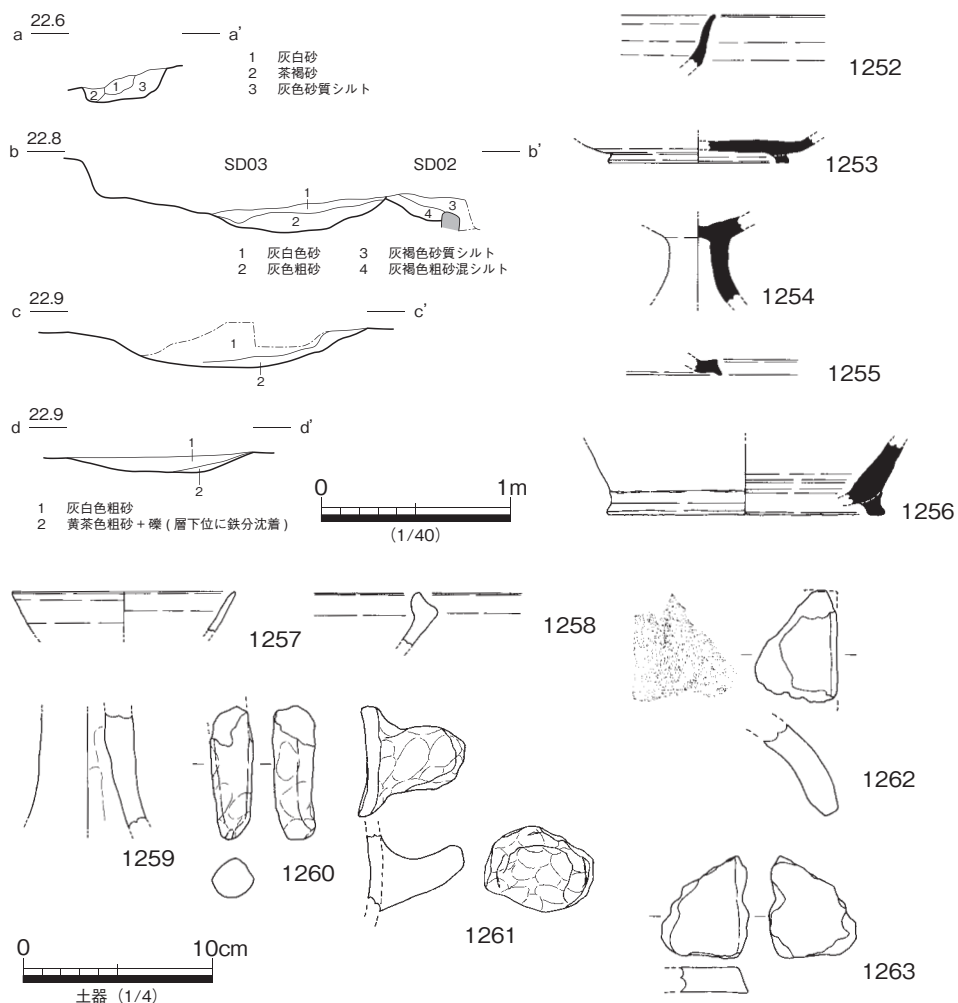


図 212 SD03 断面・出土遺物

SD05 (図 213)

A区中央部を東西方向に横切るように検出した、N 86° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は不整な逆台形を呈している。途中で北方へSD10が分岐しており、位置と方向から、東は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書 I・IV②区)の溝状遺構に、西はSD12・15が連続する溝状遺構の可能性はある。遺構の重なり具合から、SD02より新しく、SD08より古いと判断される。幅0.4～1.1m、深さ0.4m、SD15まで含めた総検出長は約27mを測る。埋土は茶褐色系粘質土で、下層は基盤層の黄色ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。平面形態が長楕円形の土坑を呈する部分があることや、縦断面の床面の凹凸も窺えることから、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土した。1264は須恵器壺の底部、1265・1266は須恵器高杯脚部である。1267は混入した弥生土器支脚である。戴頭円錐形をした中実の支脚で、弥生時代後期のものと考えられる。(宮崎)

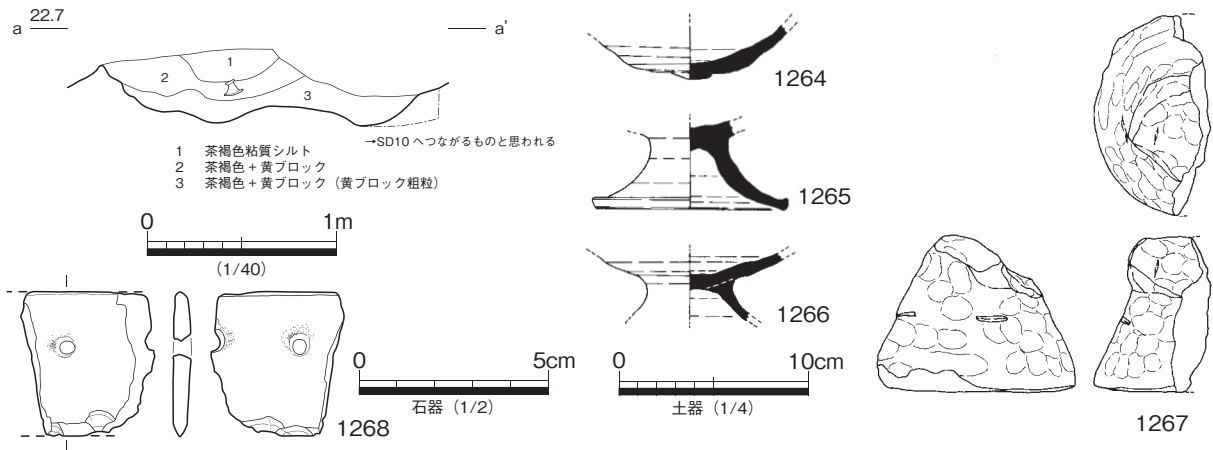


図 213 SD05 断面・出土遺物

1268 は結晶片岩製磨製石庖丁である。紐掛穴 2 個が残り、左右側縁は欠損する。刃部の研ぎは緩く稜線は不明瞭である。穿孔部は敲打を先行し、表裏両面から穿孔する。石材は淡緑色を呈し、灰白色の節理が見られる。(森下)

須恵器の年代観から、7 世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD08 (図 214)

A 区のほぼ中央部で検出した、概ね N 36° W の方向を有する蛇行した溝状遺構である。断面形態は浅い逆三角形を呈している。遺構の重なり具合から、SD12 より新しいと判断される。幅 0.5 ~ 1.0m、深さ 0.1m、検出長は約 6.0m を測る。埋土は灰色系砂を主としている。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土した。1269 は須恵器蓋、1270 は内面に返りを有する須恵器杯身、1272・1273 は須恵器甕である。1274 は土師器羽釜の鏝部で、ほぼ水平に開く。1275 は弥生土器支脚である。先端の平らな角状に湾曲した中実のもので、弥生時代後期に属すると思われる。

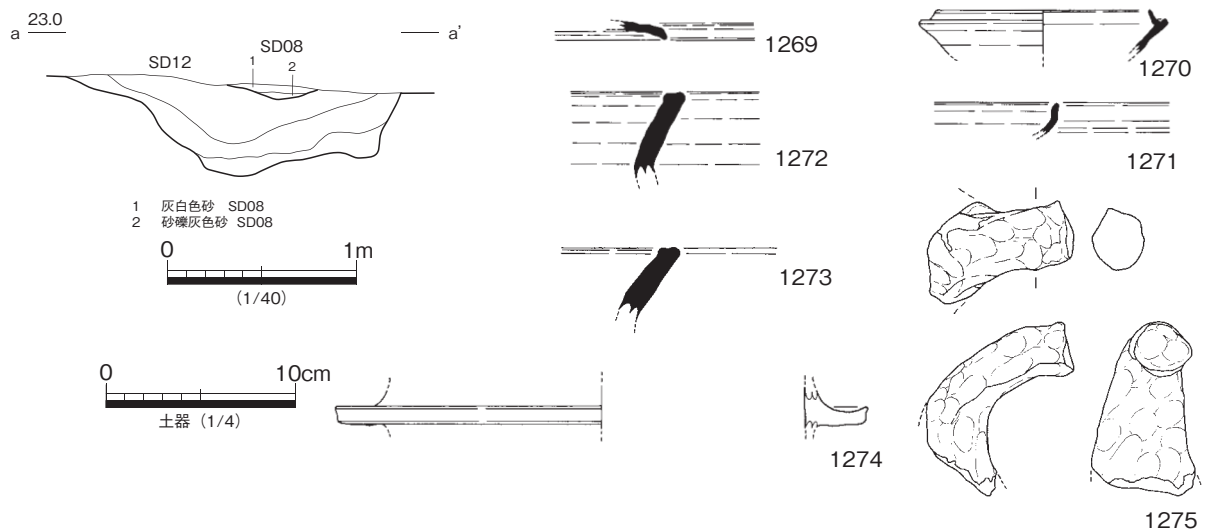


図 214 SD08 断面・出土遺物

土器の年代観は、須恵器が7～8世紀代、土師器が12世紀と時期差が見られる。このため、溝状遺構の設置時期の特定は困難であるが、埋土の特徴や土師器の年代から12世紀代に埋没したものと捉えられる。(宮崎)

SD11 (図 215)

A区中央、北壁付近で検出した溝状遺構である。後世の攪乱をまぬがれた一部分だけが残っていた。断面形態は浅いW字形を呈している。遺構の重なり具合から、掘立柱建物跡SB43より古いと判断される。幅3.4m、深さ0.35m、検出長は約2.0mを測る。埋土は上下2層に大別され、上層は暗灰褐色～暗褐色系シルト、下層は基盤層の黄色ブロックを含んだ褐色土である。下層は人為的に埋め戻された可能性がある。埋土の状況はSD36と類似しており、方向と位置からもSD36に繋がる可能性が高い。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土した。1276・1277は須恵器蓋である。1278～1281は須恵器杯である。1278は直線的な口縁部をもつもので9～10世紀代に位置付けられる。1282・1283は須恵器碗、1284は須恵器皿の底部である。1285～1287は須恵器甕である。1288は土師器小皿で、中世のものと思われるが混入の可能性が高い。1289は土師器碗で8世紀代に位置付けられる。1290・1291は土師器甕である。

これら遺物の年代観から、SD11は設置時期が8世紀代の可能性をもち、9～10世紀代に埋没した溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD12 (図 216)

A区中央部で検出した、N 86° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は不整な逆台形やU字形を呈している。位置と方向から、東はSD05、西はSD15が連続する溝状遺構の可能性が高い。遺構

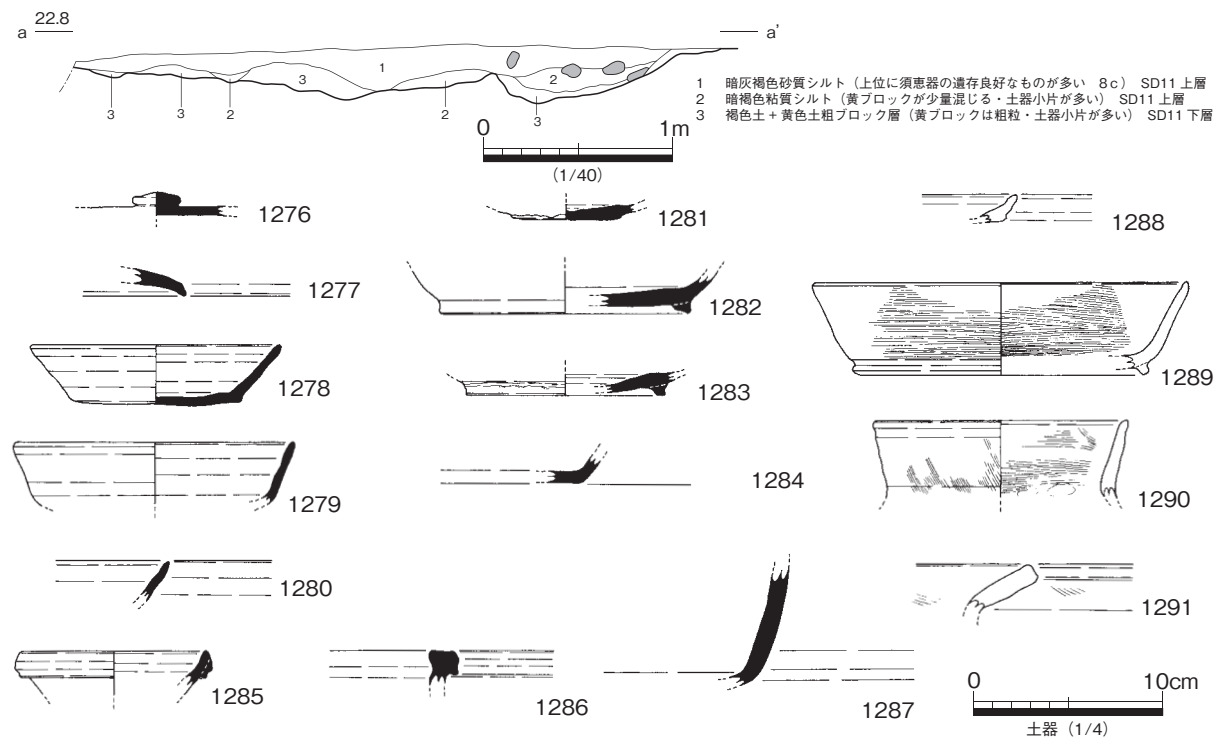


図 215 SD11 断面・出土遺物

の重なり具合から、SD08より古いと判断される。幅1.0～1.8m、深さ0.4～0.5m、SD15まで含めた総検出長は約27mを測る。埋土は茶褐色系粘質土で、下層は基盤層の黄色ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。中央部に長楕円形の土坑を呈する部分があることや、縦断面の床面の凹凸も窺えることから、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土した。1292は須恵器碗の底部、1293は須恵器高杯の脚部である。

須恵器の年代観から、7～8世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD14 (図 217～219)

A区の中央部からB区中央部にかけて検出した、N 28° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形で一部逆台形を呈している。SD14・17が接する部分の断面観察からは、両者に共通する砂質土の堆積状況が窺え、SD14と17が同時期に埋没していったことがわかる。幅0.6～3.8m、深さ0.1～0.35m、検出長は約43.5mを測る。埋土は上下2層に大別され、上層は暗灰褐色系シルト、下層は黄色・褐色ブロックを含んだ暗褐色土である。ブロック土の存在から下層は人為的に埋め戻された可能性があるのに対し、上層はラミナ層が多く含まれており、自然堆積して埋没していったことがわかる。

遺物は須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦器、弥生土器、石器、獣骨が出土した。1294～1298は須恵器蓋である。6世紀中～後半のもの(1294・1296)と8世紀前半のもの(1295)が見られる。1299～1303・1305は須恵器杯である。内面に返りをもつ1299は立ち上がりも高めで6世紀中頃、1305は短い立ち上がりで6世紀末頃、直線的な口縁部の1300は9～10世紀代のものと思われる。1304・1307は須恵器碗の底部、1306は須恵器皿の底部である。1309は須恵器鉢で、口縁～体部がS字形を呈する。1310～1312は須恵器高杯の脚部で、形態から1310・1311は7～8世紀代、1312は6世紀代のものである。1313は須恵器壺の底部で外方に開く高台をもち、8世紀代に位置付けられる。1314～1330は須恵器甕である。1324は頸部外面に「十」字のヘラ記号をもつ。1328は被熱粘土小塊で、須恵器甕胴部破片が2つ融着している。須恵器片は焼け歪んでおり、高温を受けたことがわかる。1330はC字形をした須恵器片で、上方に湾曲することから壺の耳とせず甕の把手と判断した。1331・1332は土師器杯である。1333は土師器甕の把手、1334は土師器竈の鏝部である。1335は瓦器碗の底部で、12～13世紀代に位置付けられる。1336は軟質の胎土をした緑釉陶器杯の底部で、9～10世紀代の年代が考えられる。1337は釣り手上部には浅い溝を有した土師器蛸壺で、イイダコ用である。(宮崎)

1338はサヌカイト製打製石鏃である。先端部片であり、全体形状は不明だが、側縁の角度が広いことから、長さ5cm程度の大型石鏃の可能性が高い。1339は結晶片岩製の打製石庖丁片である。側縁に

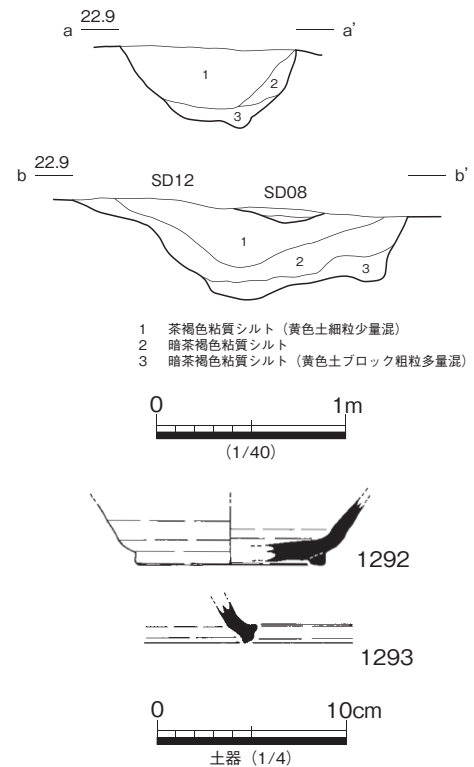


図 216 SD12 断面・出土遺物

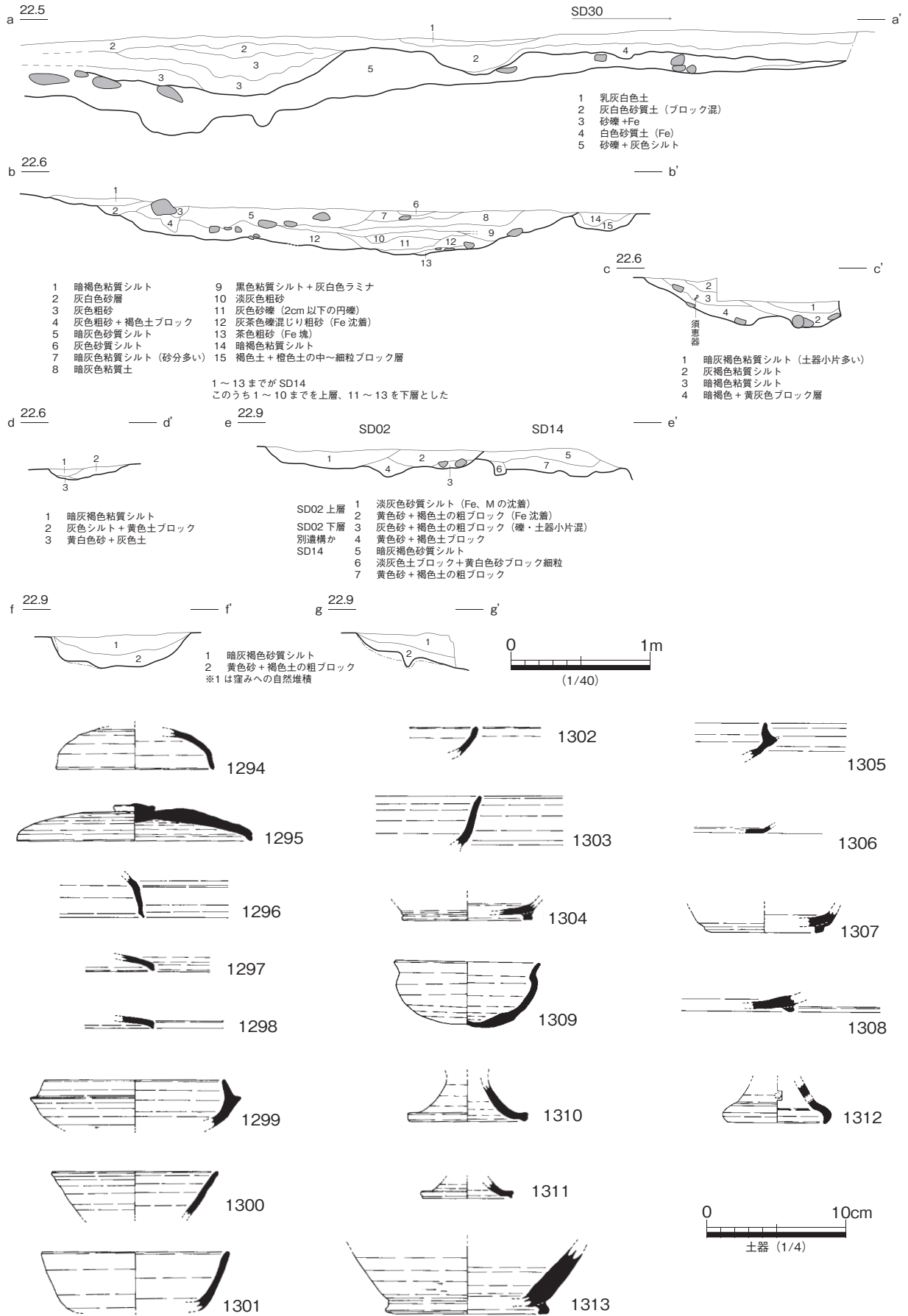


図 217 SD14・30 断面・出土遺物 (1)

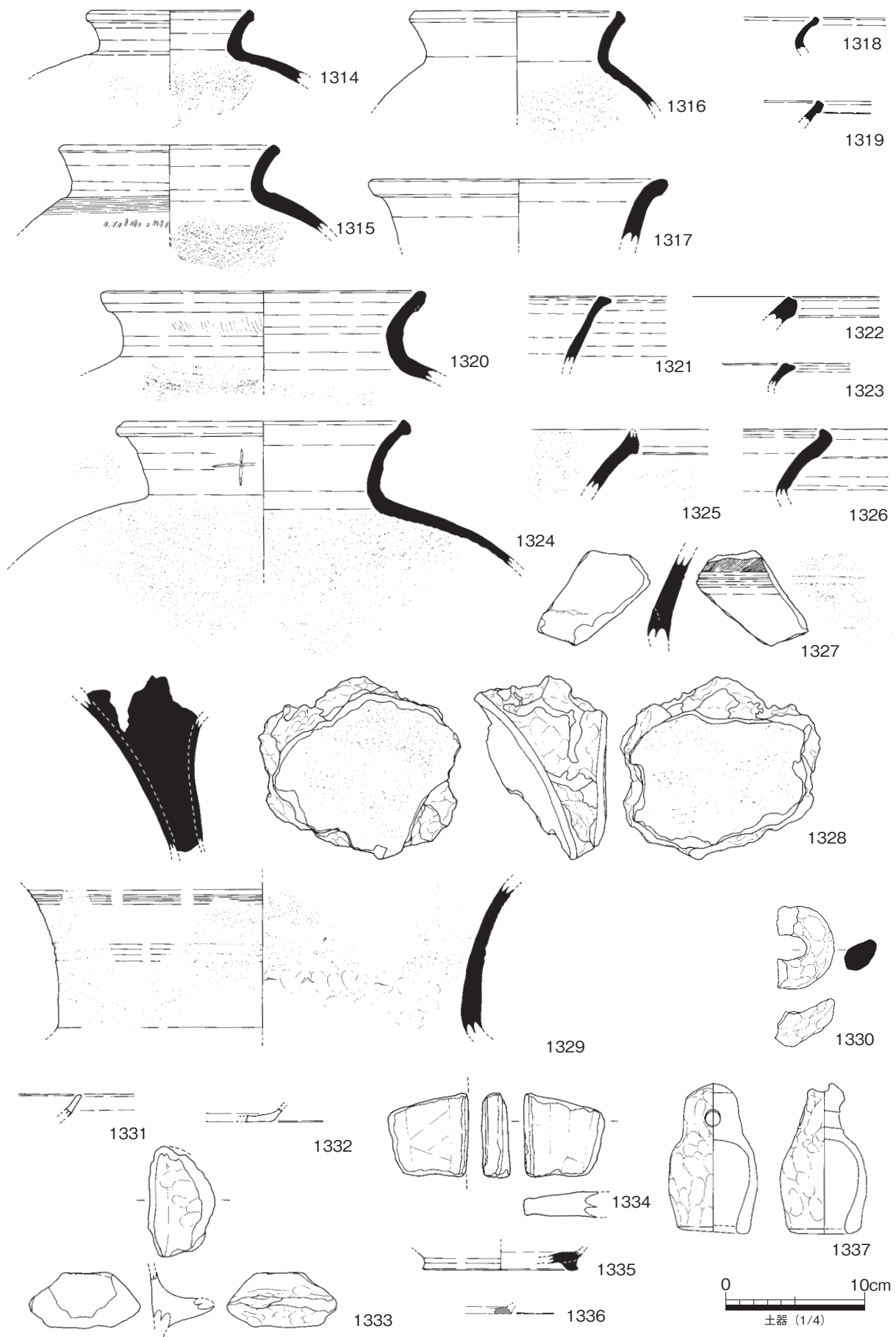


图 218 SD14·30 出土遺物 (2)

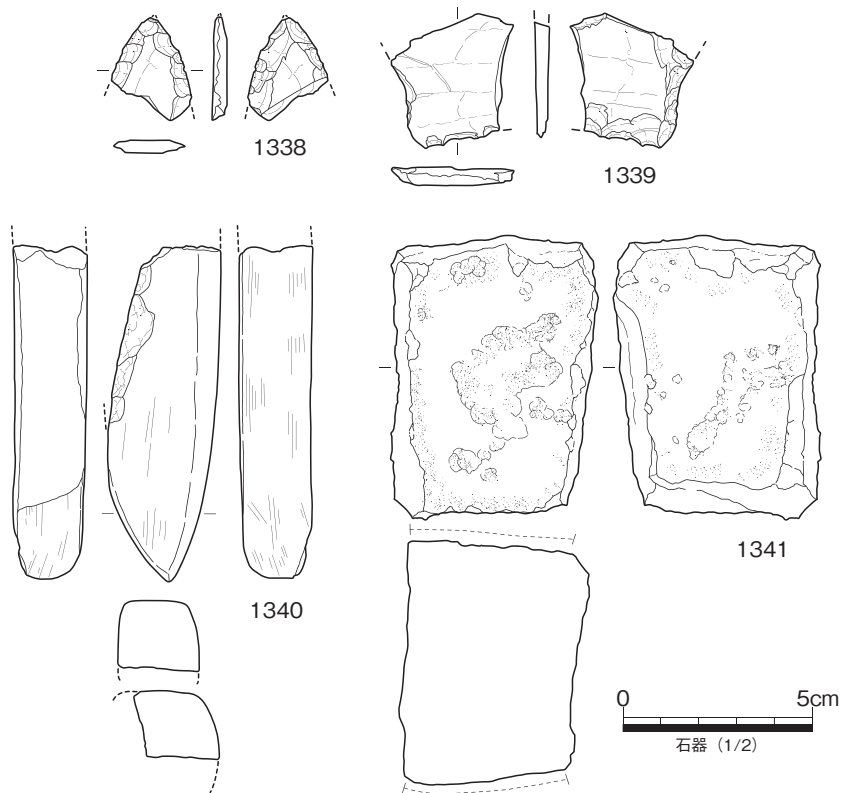


図 219 SD14・30 出土遺物 (3)

抉りを有し、刃部に磨滅が見られる。結晶質が多い石材で、淡緑色を呈し、黒色粒を多く含む。1340は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。刃部付近が残る。側縁の稜線は緩く、器面は全体的に緩やかなカーブを描いた断面形を呈す。石材は暗青色で結晶化した白色節理が目立つ。1341は砂岩製叩き石である。四周が折損し、表裏面に敲打痕が残る。一部折損面も敲打を行った痕跡が見られる。(森下)

これら遺物の年代観から、SD14は7～8世紀代に設置され、12～13世紀代に埋没したと見られる。
(宮崎)

SD15 (図 220)

A区中央部の西壁寄りで検出した、概ねN 83° Eの方向を有するわずかに湾曲する溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈している。位置と方向から、東のSD12・05が連続する溝状遺構の可能性はある。途中で北方へSD16が分岐する。幅0.6～1.0m、深さ0.2m、SD15まで含めた総検出長は約27mを測る。埋土は暗茶褐色～暗黒灰色粘質土である。平面形態が長楕円形の土坑を呈する部分があることや、縦断面の床面の凹凸も窺えることから、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土した。1342は須恵器高杯の杯部で、体部中央に1条の凹線をもつ。

須恵器の年代観から、7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

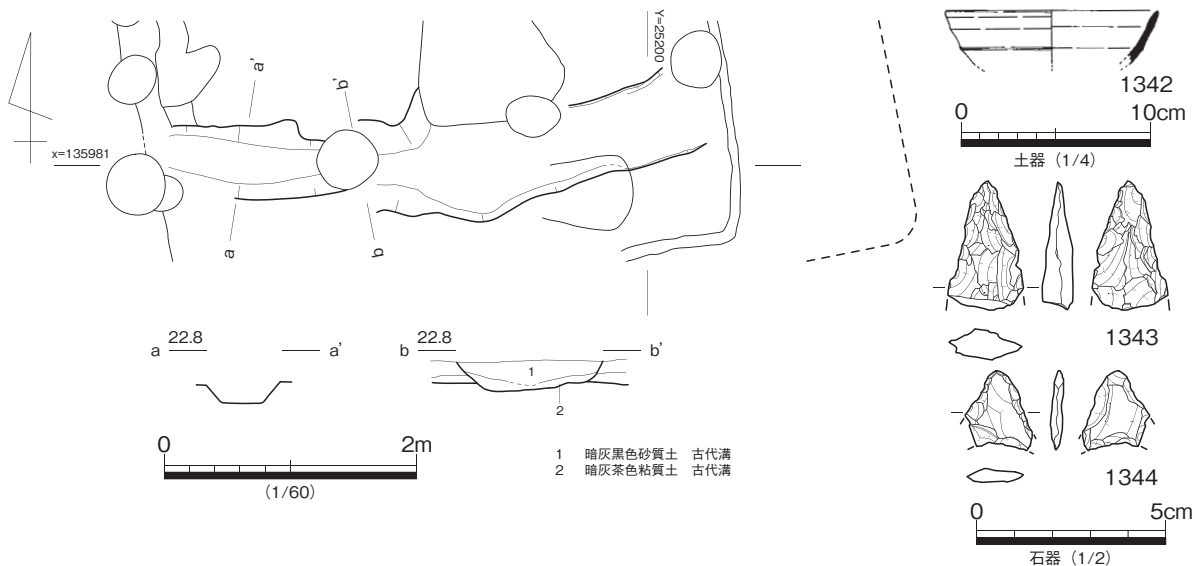


図 220 SD15 平・断面・出土遺物

SD16 (図 221)

A区中央部の西壁寄りで検出した、 $N0^{\circ}W$ の方向を有する溝状遺構である。断面形態は皿形を呈している。SD15 からほぼ直角に北方へ分岐する。幅 $0.8 \sim 1.0m$ 、深さ $0.2 \sim 0.3m$ 、検出長は $2.3m$ を測る。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層は黄色土のブロックが混じっており、人為的に埋め戻された可能性がある。検出部分は短

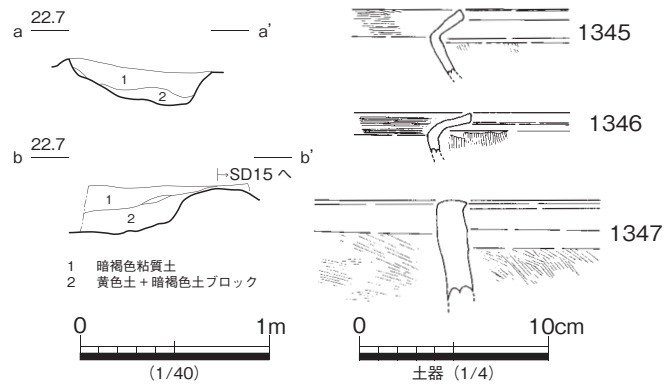


図 221 SD16 断面・出土遺物

いが、長方形の土坑状を呈しており、土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土した。1345・1346 は土師器甕、1347 は甕の口縁部である。土師器の年代観から、7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

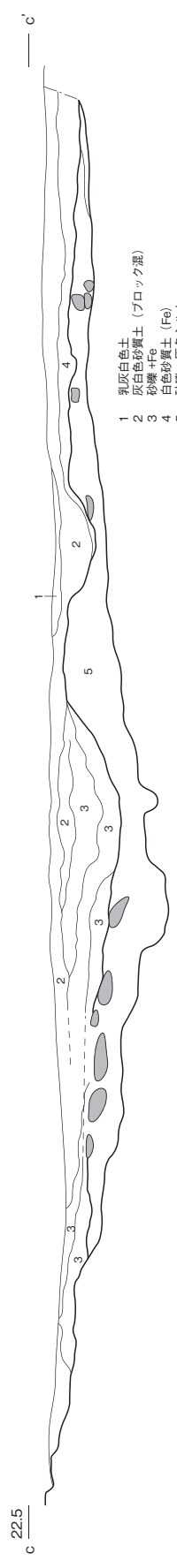
SD17 (図 222 ~ 229)

B区北東隅付近からE区南西隅へ調査区を東西方向に横切るように検出した、 $N59^{\circ}E$ の方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅いU字形を基本としているが、部分的にW字形を呈している。位置と方向から、西は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・X区)の溝状遺構に連続する。遺構の重なり具合から、SD24より新しくSD101より古いと判断される。B区中央付近でSD33が北西方向へ分岐しており、その反対側のSD14は埋土をともしする等、SD14・33は同時期のものと判断される。幅 $1.5 \sim 3.0m$ 、深さ $0.6 \sim 0.8m$ 、検出長は約 $54m$ を測る。埋土は灰色系砂~砂質土を主としており、恒常的に水の流れたことが窺える。断面中位より上にはラミナ層が発達していることから自然堆積したことが分かる。その境目付近に拳~人頭大の礫が広い範囲に分布している。また、下位に見られるブロック土の混じりは部分的であり、溝状遺構肩部の土が崩落した可能性が高い。

201 b $\frac{22.5}{}$ — b'



- 1 灰白色砂質土 (ブロック混) Fe 雲状斑文
- 2 暗褐色砂質土
- 3 砂礫
- 4 灰白色砂質土 (粗砂混)
- 5 Fe 層

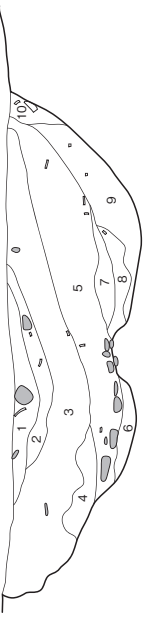


- 1 乳灰白色土
- 2 灰白色砂質土 (ブロック混)
- 3 砂礫 + Fe
- 4 白色砂質土 (Fe)
- 5 砂礫 + 灰色シルト

d $\frac{22.5}{}$ e $\frac{22.5}{}$ — e'

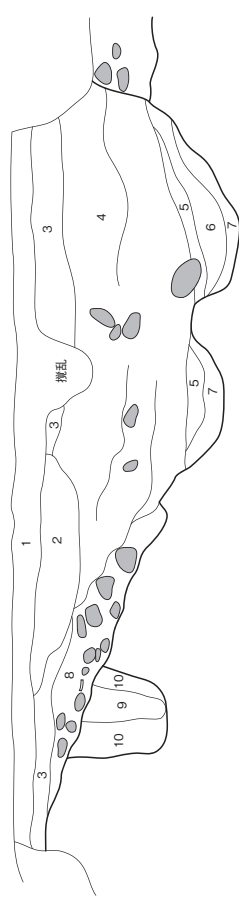


- 1 灰白色砂質土
- 2 灰色シルト
- 3 Fe 層



- 1 淡灰白色細砂 (層の下位に白色砂ラミナ)
- 2 淡灰色砂 (粗砂と白色砂の交互ラミナ)
- 3 灰白色砂質シルト (白色砂と灰色粘質シルトの交互ラミナ)
- 4 淡灰色粘質シルト
- 5 灰白色粘質シルト (こぶし大の塊混)
- 6 暗灰色粗砂
- 7 暗灰色 (Fe 沈着多)
- 8 灰白色粘質シルト (塊混シルトブロック混)
- 9 暗褐色砂質シルト (黄白色ブロック混灰白色砂ラミナ)
- 10 暗褐色砂質土 (塊混)

f $\frac{23.0}{}$ — f'



- 1 明褐色砂質土
- 2 淡灰色砂質土 (Fe 混)
- 3 灰白色砂質土 (Mn 混)
- 4 暗灰色砂質土 (Fe 沈着層入る)
- 5 Fe 層
- 6 灰白色砂質土
- 7 灰色粘質土
- 8 礫層
- 9 黒褐色粘質シルト
- 10 濁黄土

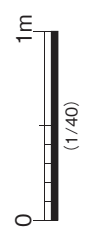


図 222 SD17 断面



図 223 SD17 礫出土状況

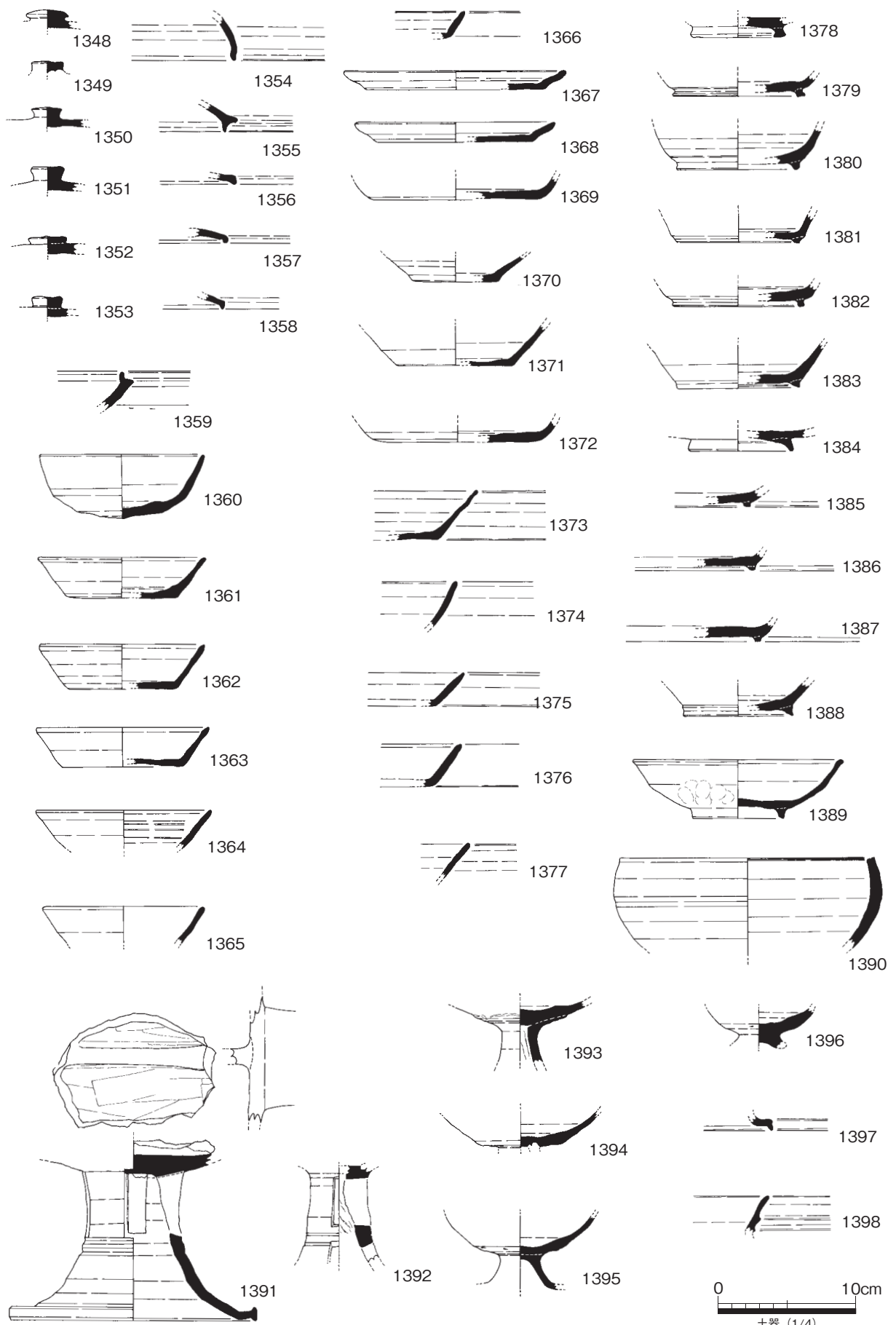


图 224 SD17 出土遺物 (1)

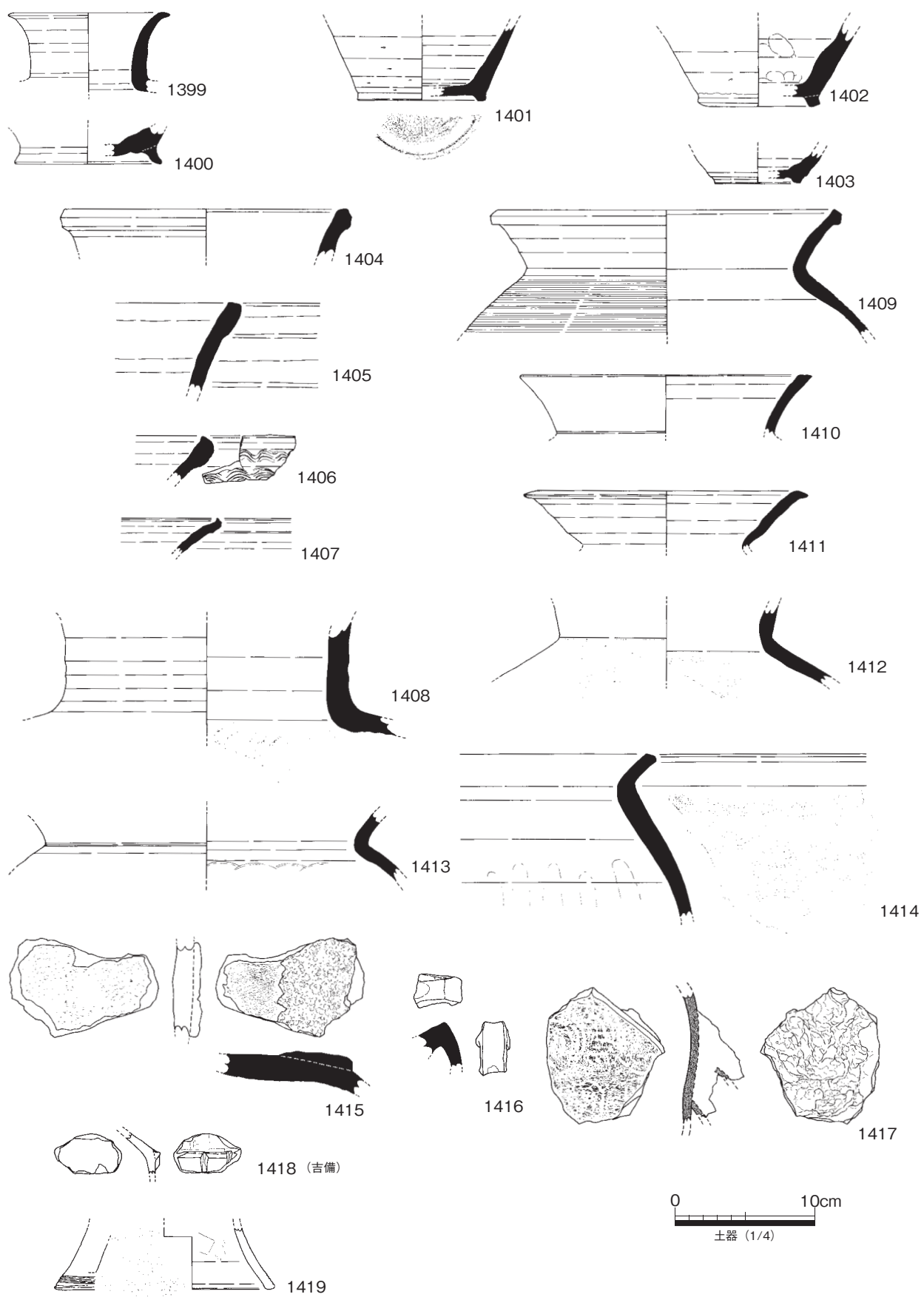


图 225 SD17 出土遺物 (2)

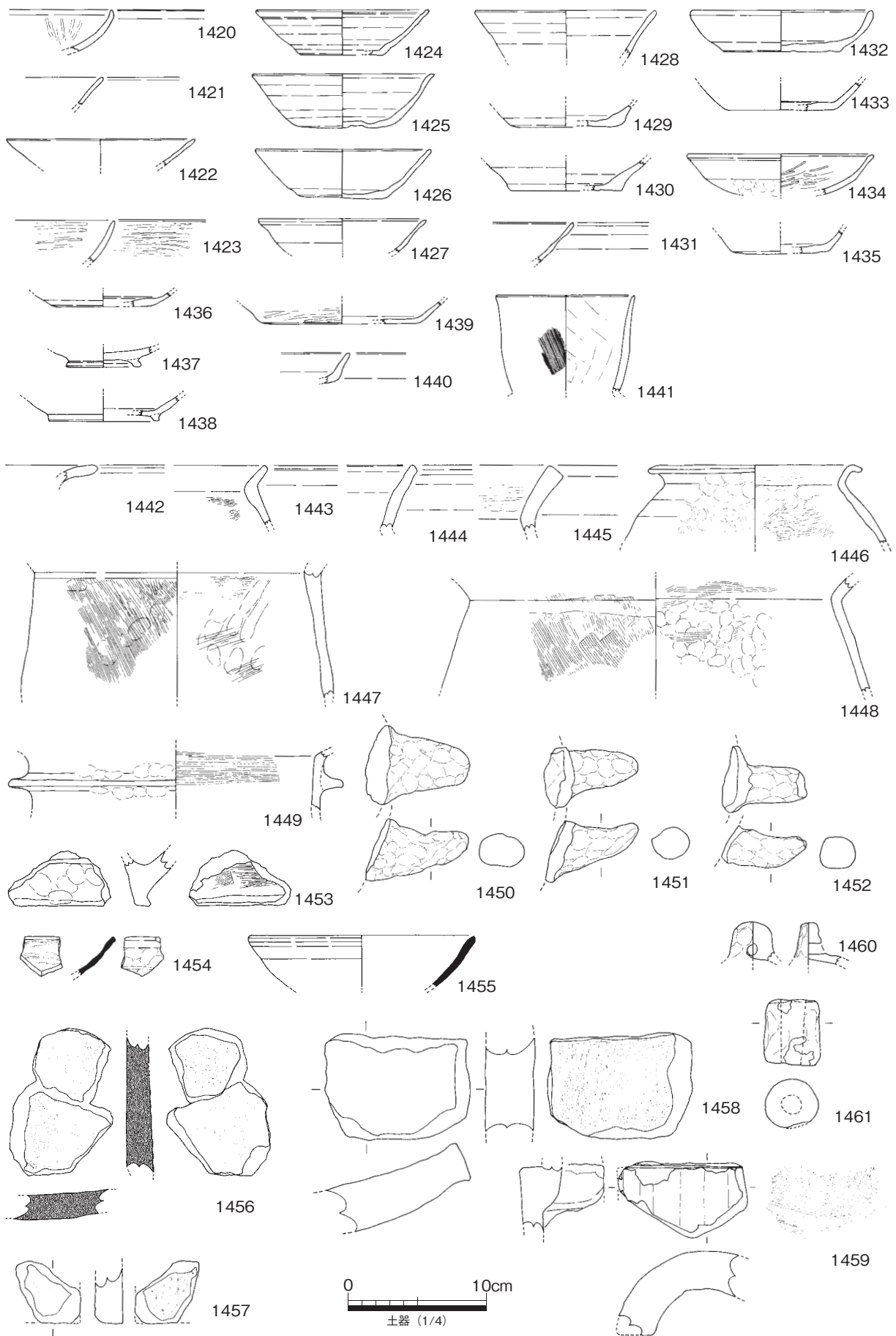


图 226 SD17 出土遺物 (3)

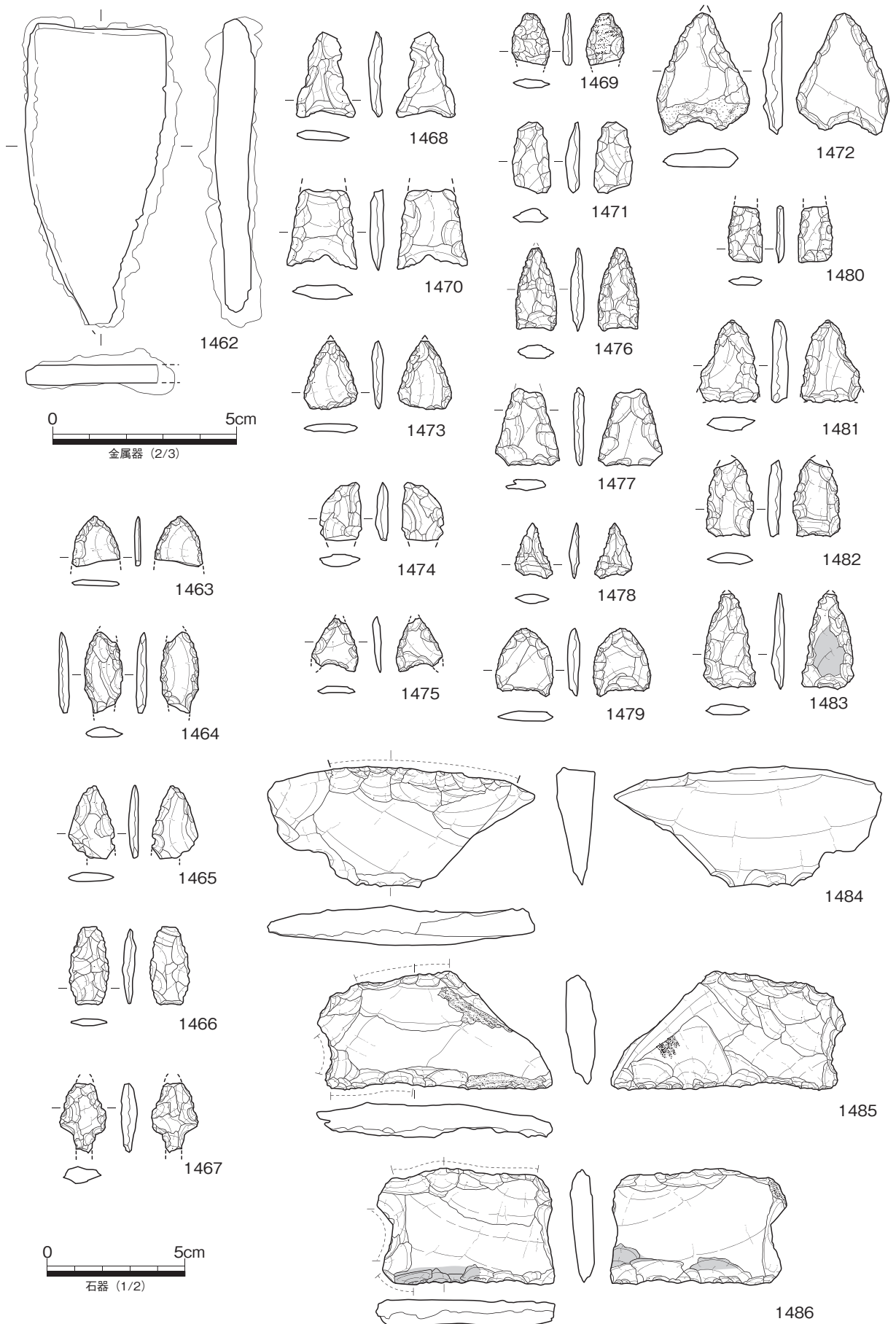


图 227 SD17 出土遺物 (4)

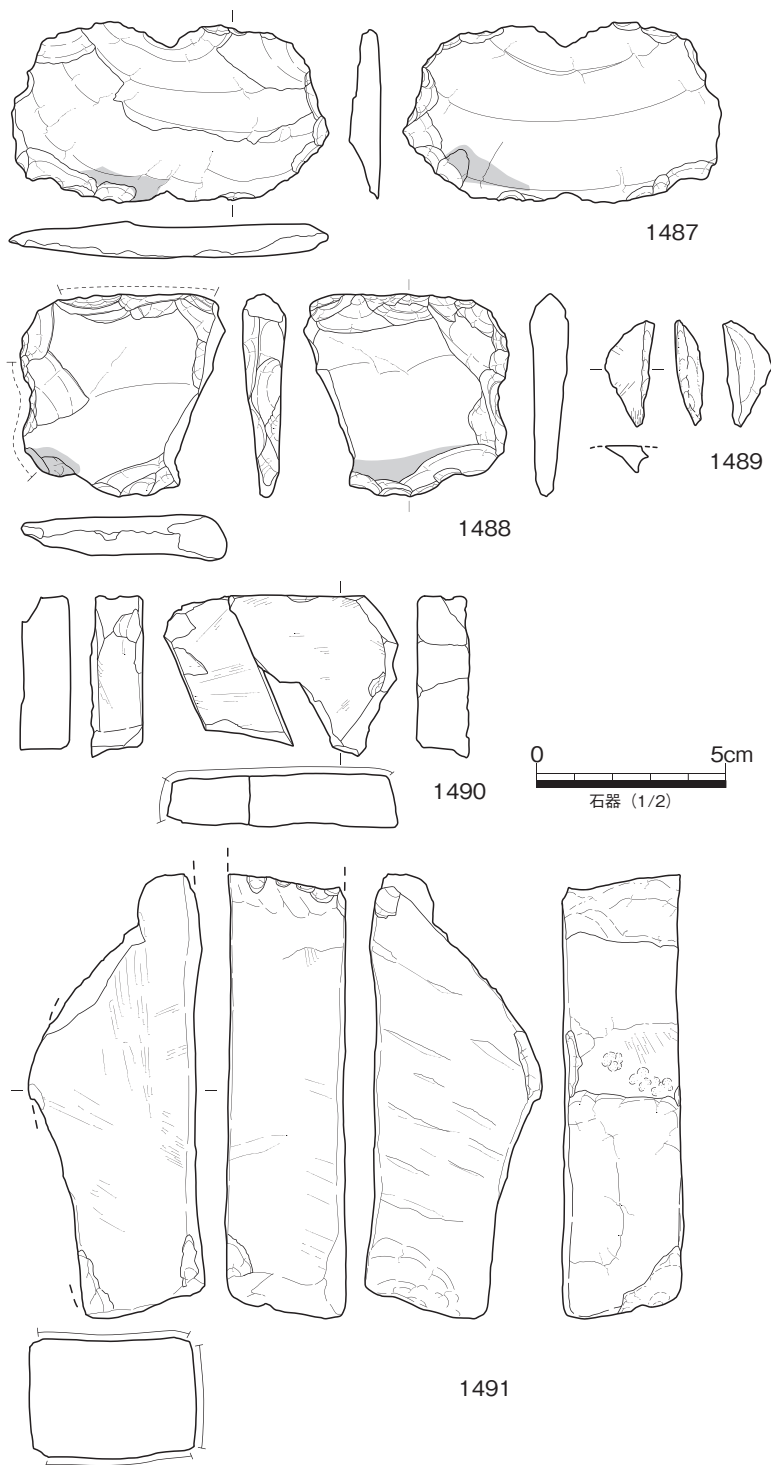


図 228 SD17 出土遺物 (5)

に2条の沈線を回らし、その上方に長方形の透かし孔を3方向に設けている。杯部の内面には粘土板で間仕切りを設けている。1392も脚中位に2条の沈線を回らし、その上下各々に長方形の透かし孔を3方向に設けている。ともに6～7世紀のものと考えられる。1393～1396は短脚のものである。1398は須恵器甕の口縁部と思われる。1399～1403は須恵器壺である。1401は底部外面にヘラ記号の一部が残る。1404～1414は須恵器甕である。1415は須恵器甕胴部の破片で、内面に自然釉、外面に発泡した自然釉が付着している。1417は被熱粘土小塊で、須恵器甕の胴部片と須恵器杯の破片等計3つの破片が

遺物は須恵器、土師器、黒色土器、弥生土器、瓦、石器、金属器、獣骨が出土した。下位に弥生時代後期の土器を多量に含んだ自然河川跡SR02が埋没している場所があり、相当量の前代の遺物が混入している。1348～1358は須恵器蓋である。1354は内面に返りをもたないもので6世紀末～7世紀前半、1355は内面に返りをもつもので7世紀前半、1356～1358は端部を短く折るもので7～8世紀に位置付けられる。1359～1365・1370～1377は須恵器杯である。1359は内面に短い立ち上がりをもつ7世紀前半に、1360は内面に返りをもたず丸みを帯びた底部のもので、7世紀後半に位置付けられる。1362・1363・1373は直線的な口縁部をしており、9～10世紀に位置付けられる。1366～1369は須恵器皿である。1378～1389は須恵器椀である。1378は内面に墨痕があり、硯に転用した可能性がある。1389は西村産の椀で、12世紀代に位置付けられる。1390は深手の須恵器鉢である。1391～1397は須恵器高杯である。1391は脚中位

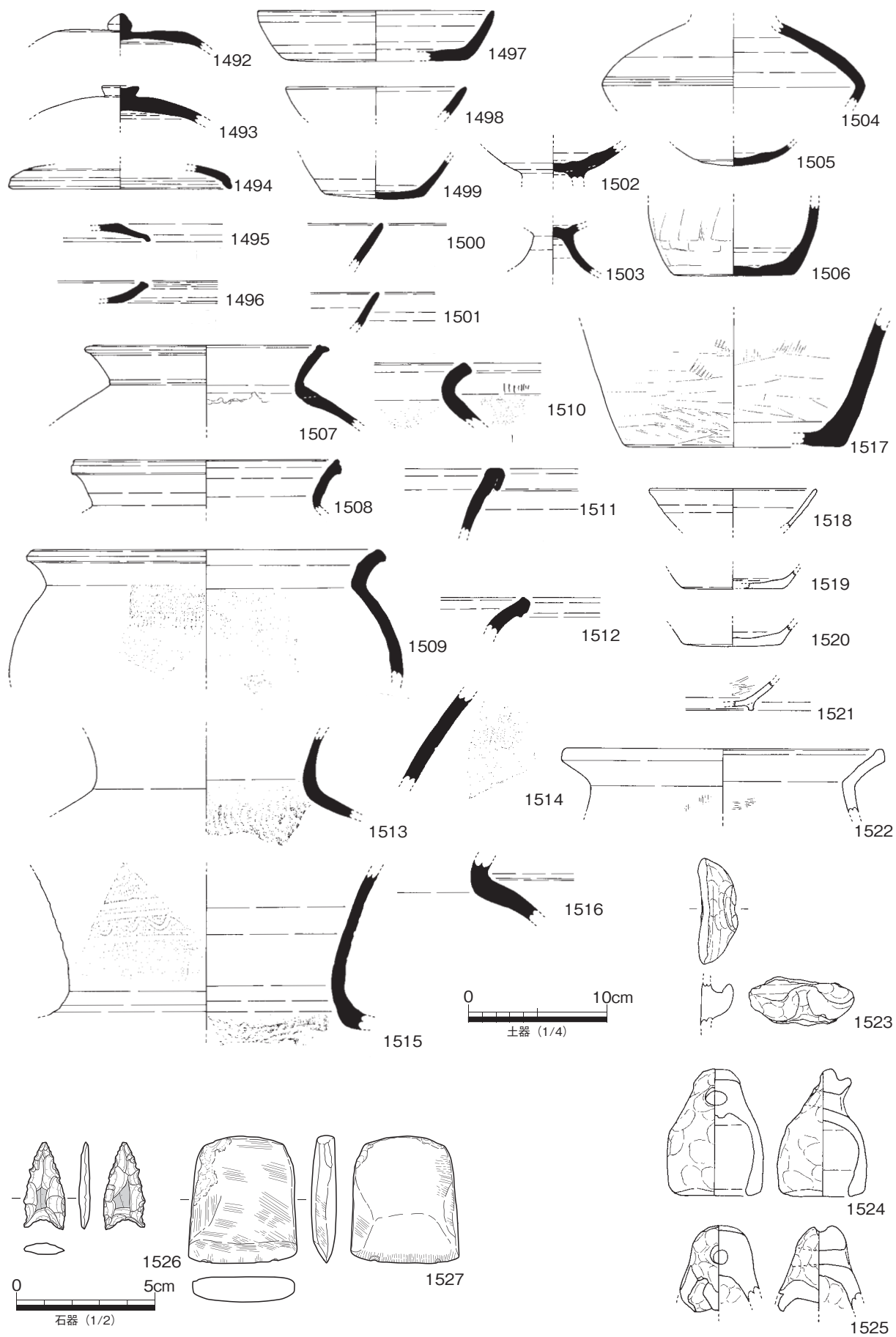


图 229 SD17-97 出土遺物 (6)

融着している。1418は弥生土器壺の胴部破片で、貼り付け凸帯で加飾している。弥生時代終末期の吉備系搬入土器と見られる。1419はヘラ描き区画文と斜格子文、沈線4条を施した弥生土器脚台である。弥生時代中期と見られる。1420～1422・1424～1435は土師器杯である。口縁部の湾曲度合い等から、7世紀代のもの(1420)、9～10世紀代のもの(1424、1428)、12世紀代のもの(1426、1432、1434)、13世紀代のもの(1425)がある。1423・1436は黒色土器である。1423は内黒の椀で10世紀代、1436は両黒の杯で11～12世紀代のものと考えられる。1437・1438・1455は土師器椀である。11～12世紀代に位置付けられる。1439・1440は土師器皿である。1441は土師器の椀と考えられる。1442～1448は土師器甕である。1444は口縁部外面に煤が付着しており、実際に使用されたことがわかる。1449は土師器羽釜で9世紀代のものである。1450～1452は土師器の把手、1453は竈の破片である。1454は瓦器椀である。和泉型で12世紀代に位置付けられる。1456～1459は瓦である。1456は凸面に格子叩き、凹面に布圧痕の残る平瓦である。1457は須恵質焼成の平瓦で、凸面に縄目叩きが残る。1458も凸面に縄目叩きの残る平瓦である。1459は土師質焼成の有段の丸瓦で、凹面に布圧痕が残る。1460はイイダコ用の土師器蛸壺の釣り手である。1461は重量感をもつ有孔土錘である。

1492～1527は調査時にSD97とした溝状遺構から出土した遺物である。SD97はSD17と連続する同一の溝状遺構であることが判明したため、ここに掲載するため、ここに掲載する。1492～1495は須恵器蓋で、7～8世紀のものである。1496は須恵器皿。1497～1501は須恵器杯である。1497は7～8世紀代、1499は内面に火轆が見られ10世紀代のものと思われる。1502・1503は須恵器高杯である。1504～1506・1517は須恵器壺である。1504は強く張った肩部下に凹線2条を巡らせた長頸壺で、8世紀代のものと考えられる。1507～1516は須恵器甕である。長い口頸部外面に櫛描き波状文と沈線を回らせた1514、1515は7世紀代に位置付けられる。1518～1520は土師器杯である。直線的な口頸部をもつ1518は9～10世紀代と思われる。1521は土師器椀、1522は土師器甕である。1523は土師器の把手で、端部を上方へ折り返しさらに左右から摘んでいる。1524・1525はイイダコ用の土師器蛸壺で、どちらも釣り手上面に浅い溝を回らす。(宮崎)

1463～1483は打製石鏃である。1481は安山岩製、その他はサヌカイト製である。凹基式・平基式が主体で、1464・1467が凸基式である。長さは3.5cm以下のものが多いが、1470・1472は長さ5cm程に復元可能である。1476は基部がやや窄まる弥生中期の形態を有す。1484～1488はサヌカイト製打製石庖丁である。1484は折損した剥片を使用して背部敲打を施し、刃部を僅かに加工するものである。1485・1486・1488は側縁に抉りを備え、刃部に使用痕が見られる。1487は抉りはもたないが、表裏面に使用痕を残すものである。1489は結晶片岩製の磨製石斧片である。斧の種類は判別できない。1490・1491は流紋岩製の砥石である。1490は表面及び側面に平滑な砥面、1491は遺存部3面にやや凹凸のある砥面を残す。以上の石器はB区で出土した。

1526は凹基式のサヌカイト製打製石鏃である。表裏の素材面に磨滅を認める。下端部の逆刺の一端が矮小であることから、未成品と推定する。1527は完形の扁平片刃石斧である。蛇紋岩製である。平面、断面ともに稜線が緩く、各面とも緩やかな丸みを留める。(森下)

遺物の年代は6世紀～13世紀と幅があるが、7～8世紀代に溝が設置され、埋没と掘り直しを繰り返しながら使われ、最終的に13世紀代に埋没したと捉えられる。(宮崎)

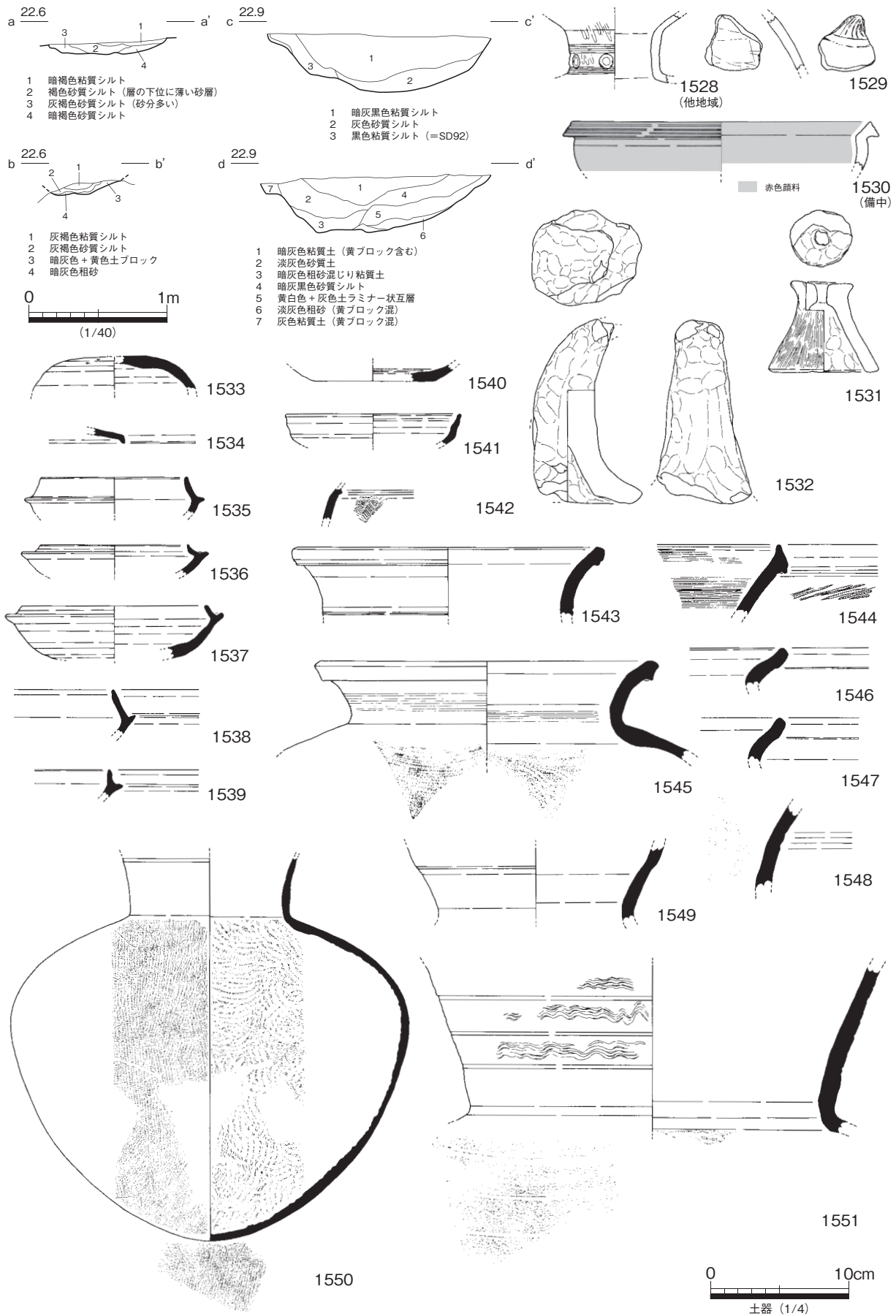


図 230 SD18 断面・出土遺物 (1)

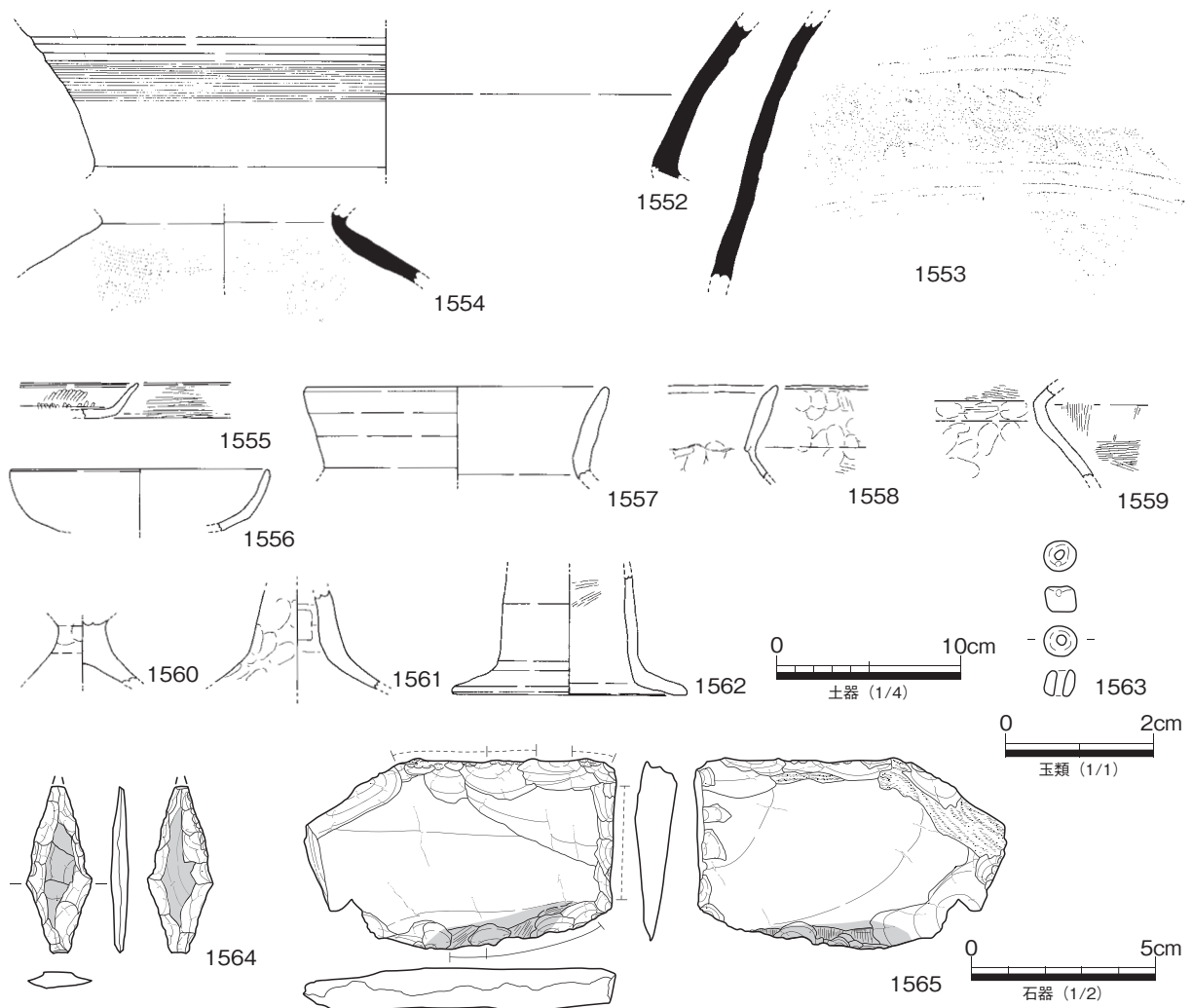


図 231 SD18 出土遺物 (2)

SD18 (図 230・231)

B区南端付近を東西方向に横切るように検出した、N 90° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅いU字形を呈している。途中の一部を攪乱によって失っているが、位置と方向から、東は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書 I・IV①区)の溝状遺構に、西はE区のSD83が連続する溝状遺構の可能性はある。遺構の重なり具合からSD03より古くSD92より新しいと判断される。D区東壁付近ではSD80が分岐している可能性がある。幅0.9～1.8m、深さ0.1～0.4m、SD83まで含めた総検出長は約53mを測る。埋土は暗褐色～灰褐色系粘質土で、東端付近では底面近くに基盤層の黄色ブロックを含んでいる状況も確認できる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、玉類、石器が出土した。1528～1532は混入した弥生土器である。1530は鉢で内面に赤彩の痕跡が残る。1531は中空の台形をした支脚で、上部に穿孔がある。1532は角形をした支脚で、底面を少し窪めているがほとんど中実に近い。先端は二又になっているようで、伊予地方からの搬入品と思われる。1533・1544は須恵器蓋である。1533は6世紀代のものである。1535～1539は杯身である。立ち上がりの長短や傾きから、6世紀前半(1538)、6世紀中頃(1535)、7世紀

前半（1536・1539）のものが見られる。1540は須恵器鉢、1541は須恵器高杯である。1542は須恵器甕の口縁部で、突線1条と波状文を施す。1543～1554は須恵器甕である。1544は口縁端部を上下に拡張し、外面にはハケ原体による刺突文を施している。1551や1553は口頸部外面に沈線と櫛描き波状文を数段施しており、これらは7世紀代に位置付けることができる。1555は土師器皿で、7世紀代のものの可能性が考えられる。1556は土師器杯、1557～1559は土師器甕である。1560～1562は土師器高杯の脚部で、途中で折れて外方へ開く形態をしている。7世紀代に位置付けられると考えられる。（宮崎）

1563は完形のガラス小玉である。直径4.0mm、高さ3.5mm、孔径1.0mmを測る。色調はスカイブルーを呈し、器面に気泡が少量見られる。

1564はサヌカイト製凸基式打製石鏃である。長さ4.5cmを測り、関が短く左右に突出する形態を備える。表裏の素材面に打製石庖丁に特有の磨滅痕を留める。1565はサヌカイト製打製石庖丁である。基部に自然面を留め、周縁を敲打により整形した後、刃部の一部に研磨を施すものである。研磨は刃部全体からするとほんの一部だが、縦方向の線状痕を伴い片刃に仕上げる等、磨製石庖丁に通有の技術を適用する。一方で、剥離面の凹面に打製石庖丁特有の磨滅痕も見られる。このような状況から、石庖丁製作に当って、当初は磨製品を目指したものの、途上で断念し、僅かに刃部に調整加工を施したものを使用に供したものと推定できる遺物である。（森下）

土器の年代観から、7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。（宮崎）

SD19（図232）

B区南東隅付近で検出した、N 88° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。位置と方向から、東は以前の調査（旧練兵場遺跡報告書I・IV①区）の溝状遺構に繋がり、西はE区のSD80が連続する可能性がある。遺構の重なり具合からSD20より古いと判断される。幅0.6～1.0m、深さ0.2m、検出長は約11mを測る。埋土は灰色系砂質土で、下位に基盤層の黄色ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器・土師器・弥生土器が出土した。1566は混入した弥生土器支脚である。台形で中央に穿孔が施されている。1567～1569は須恵器蓋である。1569は端部を折り曲げるもので8世紀代に入る可能性がある。1570は須恵器杯、1571・1572は須恵器椀、1573～1575は須恵器壺である。1575は長頸壺の肩部で、丸みをもっていることから7世紀代に位置付けられよう。1576は須恵器高杯脚部、1577は須恵器平瓶である。1578～1582は須恵器甕で、1578は外面に沈線と櫛描き波状文を施す。7世紀代のものと考えられる。1583・1584は土師器杯で、外面のヘラケズリや内面のヘラミガキから7世紀代に位置付けることが可能である。1585は内黒の黒色土器椀で、外面に赤彩の痕跡が残るようである。10世紀代に位置付けられ、混入したのと考えられる。

土器の年代観から、7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。（宮崎）

SD20（図232）

B区南東隅付近で検出した溝状遺構である。SD19付近に位置し、N 88° Wの方向を有しながらクランクするため、一部はSD19に重なっている。断面形態は逆台形～V字形を呈している。位置と方向から、

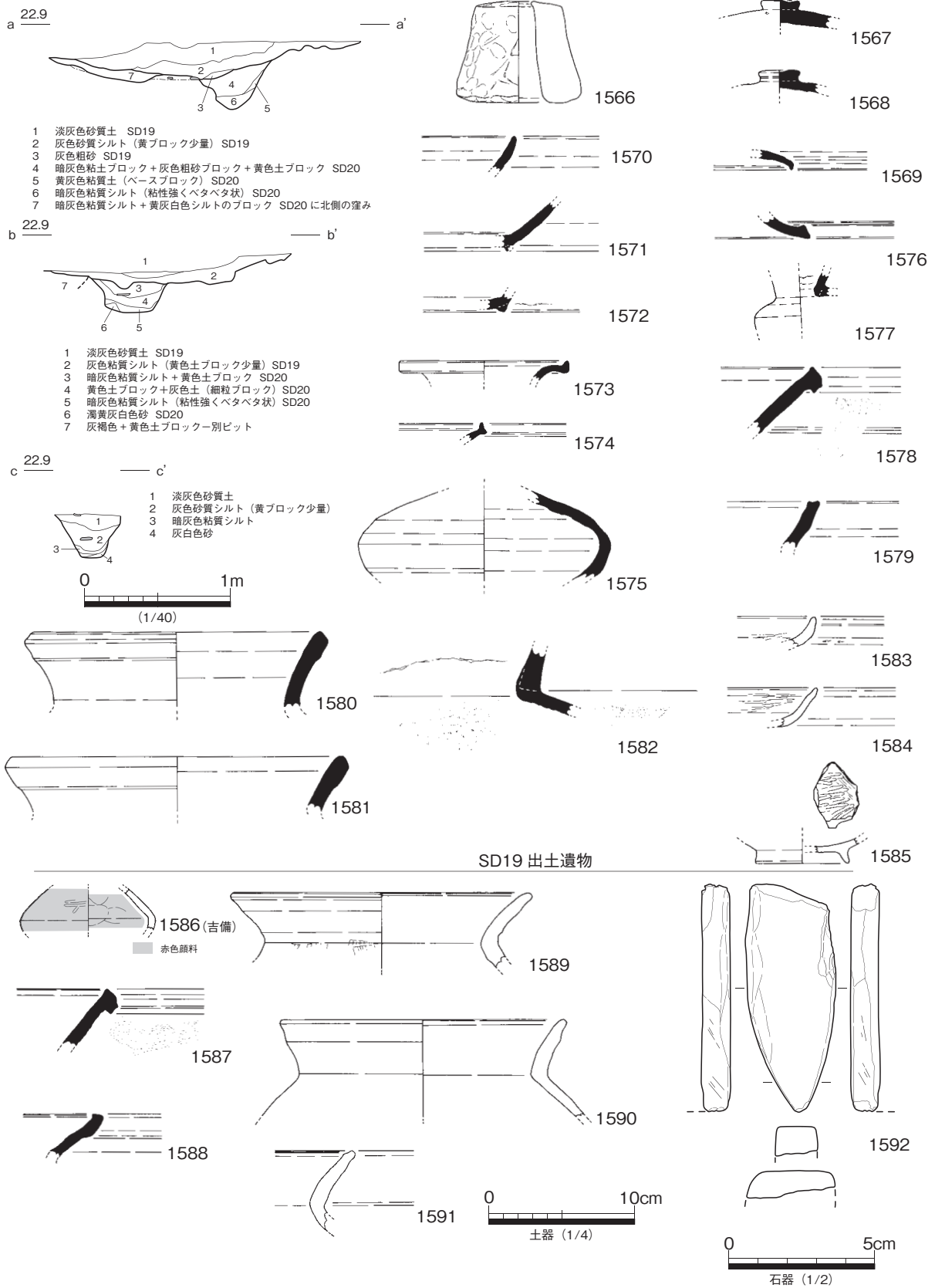


図 232 SD19・20 断面・出土遺物

西方E区のSD80が連続する可能性がある。遺構の重なり具合からSD19より新しいと判断される。幅0.4～0.6m、深さ0.3m、検出長は約12mを測る。埋土は暗灰色系粘質土で、上位に基盤層の黄色ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器・土師器・弥生土器が出土した。1586は混入した弥生土器壺である。外面に赤彩を施している。1587・1588は須恵器甕で1587は外面に櫛描き波状文を施している。1589～1591は土師器甕である。(宮崎)

1592は結晶片岩製柱状片刃石斧片である。側面が剥離した破片で、刃部付近の側面形が確認できる。刃部の研ぎは緩く、刃部稜線はほとんど見分けが付かない。結晶質で節理が目立つ暗紺色系の石質である。(森下)

土器の年代観から、7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られ、埋め戻されてSD19に付け替えられた可能性がある。(宮崎)

SD21 (図 233)

B区南半の東壁付近で検出した、N 86° Wの方向を有する溝状遺構で、東端は後述するSX20に接続している。断面形態は浅い皿形を呈している。位置と方向から、西方のE区にかけて存在するSD44が連続する可能性がある。幅0.4～0.5m、深さ0.1m、検出長は約7.5mを測る。埋土は赤褐色～暗黄褐色系粘質土である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が少量出土した。1593は土師器杯、1594は土師器高杯であるが、摩滅が著しく年代判別は困難である。図示した以外に土師器の高杯か轡羽口と思われる破片が1点あり、SX20で出土している鉄滓と見られる金属小塊との関連が窺える。(宮崎)

1595はサヌカイト製打製石鏃片である。小型で基部側が折損する。(森下)

埋土等から7世紀代の溝状遺構の可能性はある。(宮崎)

SD24 (図 234・235)

B区北東端からE区中央部にかけて横切るように検出した、緩やかに弧を描いている溝状遺構である。断面形態は逆台形を基本とするようであるが、部分的にW字形を呈している。SD126とは同一の溝状遺構であり、遺構の重なり具合からSD27より新しくSD17より古いと判断される。幅0.5～1.6m、深さ0.2～0.5m、総検出長は約40mを測る。埋土は暗茶褐色系粘質土と灰色系砂が主で、流れと澱みを繰り返しながら埋没したと思われる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、金属器、石器が出土した。下位に弥生時代後期の土器を多量に含んだ自然河川跡SR02が埋没している場所があるため、当該期の遺物量をはるかに凌駕する前代の遺物

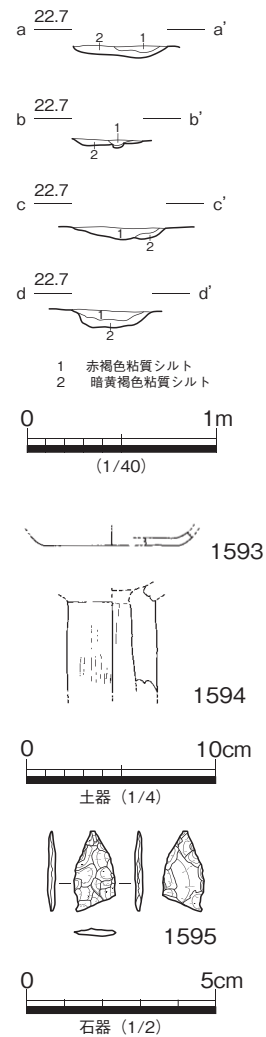


図 233 SD21 断面・出土遺物

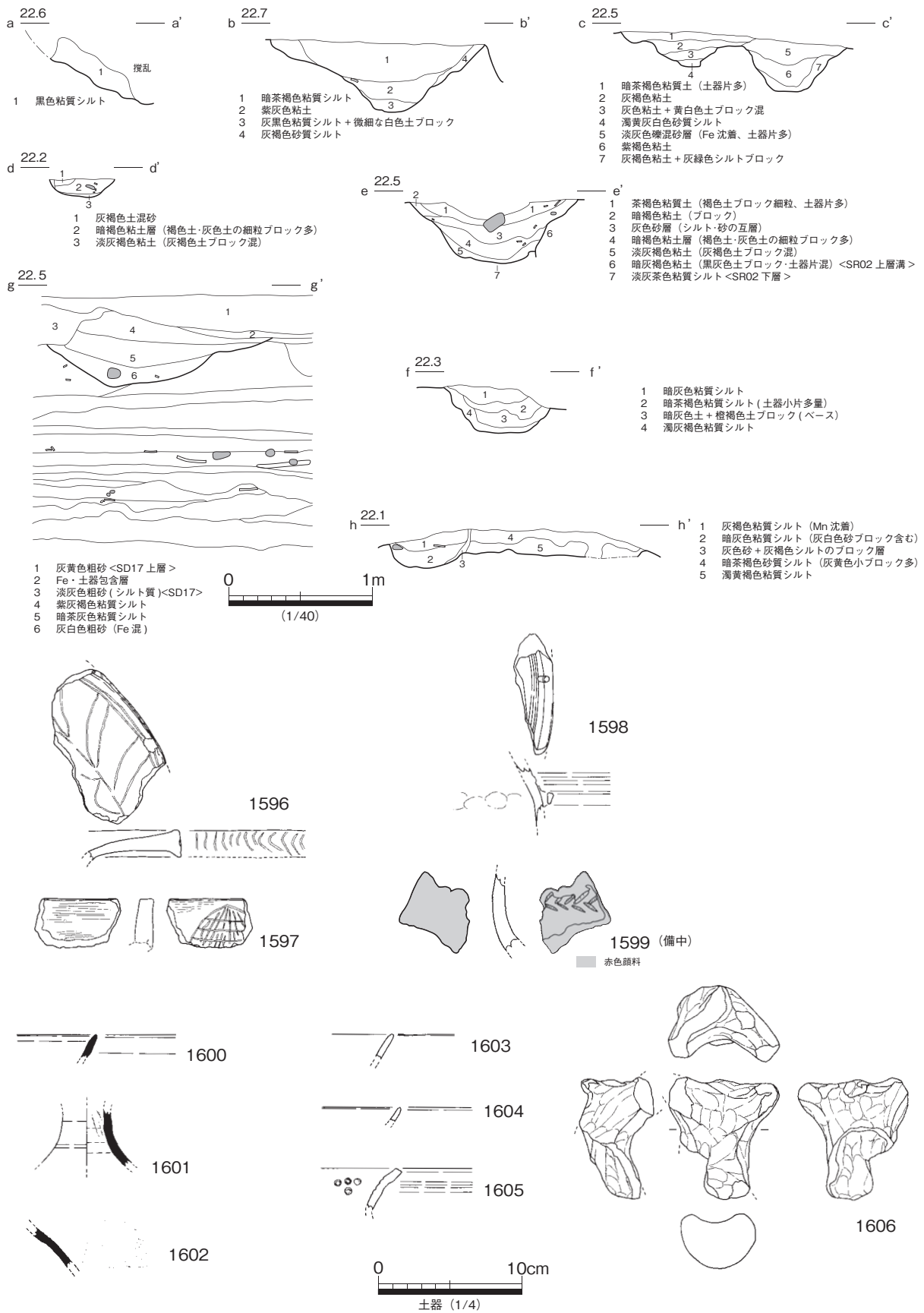


図 234 SD24・126 断面・出土遺物 (1)

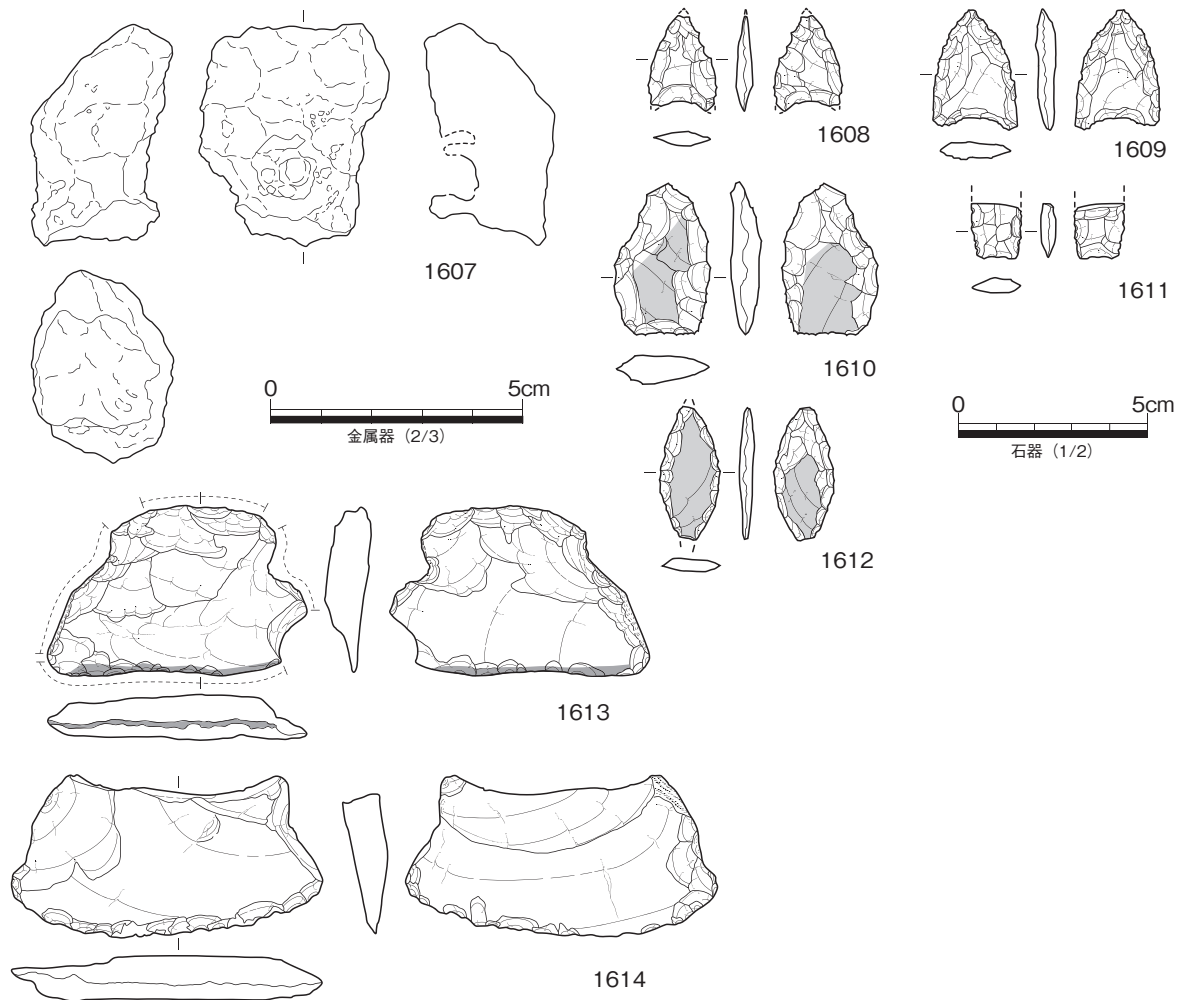


図 235 SD24 出土遺物 (2)

が混入している。1596～1599・1605・1606は混入した弥生土器である。1569は壺で、肥厚した口縁端部に刻目を、内面にヘラ描き文様を施している。弥生時代後期前半に位置付けられる。1597は複合口縁壺で、外面にヘラ描き文様を施している。1598は壺の肩部で貼付凸帯1条を回らし、穿孔を施している。弥生時代前期に位置付けられる。1599は内外面に赤彩を施した壺で、ハケ原体による矢羽状刺突文を施す。搬入品の可能性がある。1605は口縁内面に4個1組の竹管文を施した壺である。搬入品の可能性がある。1606は中空の弥生土器支脚で、先端が指状の二股に分かれ、その反対側に小さな突起が付く。伊予からの搬入品と思われる。1600は須恵器杯、1601は須恵器高杯、1602は須恵器甕、1603・1604は土師器杯である。(宮崎)

1608～1612はサヌカイト製打製石鏃である。1608・1609・1611は平基式、1612は凸基式である。1610は厚手の未成品である。1610・1612は素材面に打製石庖丁特有の磨滅を留める。1613はサヌカイト製打製切断具である。打製石庖丁と同様に左右側縁に抉りを備えるが、抉りより上は身幅が狭く、一見石匙状を呈する。周縁をすべて敲打して刃潰しを施し、下縁部にのみ顕著な磨滅痕を残す。この磨滅痕は基軸方向の線状痕を伴い、下縁部全面に及ぶ磨滅で、打製石庖丁の磨滅とは異なる。砥石等の流紋

岩製品を擦切技法で製作する際の切断具と考えるのが妥当である。1614はサヌカイト製打製石庖丁である。剥片の左右側縁に敲打による抉りを施し、刃部には磨滅痕や再調整痕が残る。(森下)

須恵器の年代観から、7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。
(宮崎)

SD27 (図 236)

B区北東端付近で検出した、N 66° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い逆台形を呈している。遺構の重なり具合からSD24より古いと判断される。幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2m、検出長は2.4mを測る。埋土は上層が暗茶褐色系粘質土で、下層は褐色土と基盤層の黄色ブロックとなっており、下層は人為的に埋め戻された可能性もある。

遺物は弥生土器が少量出土した。1615は弥生土器壺で、拡張した口縁端部に凹線文を回らせたもので、弥生時代後期前半に位置付けられる。1616は弥生土器甕、1617は弥生土器鉢である。

出土遺物は前代のものしか見られないが、それらは下位の遺構からの混入の可能性が高く、埋土の特徴等から7世紀代以前のものと考えられる。(宮崎)

SD31 (図 237)

B区北壁の中央部からE区西壁の中央部を斜めに横切るように検出した、緩やかに弧を描いている溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈している。位置と方向から、西は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・X区)の溝状遺構に繋がるものである。遺構の重なり具合からSD33より古いと判断される。とりわけB・E区境付近からE区部分はSD33がほぼ完全に上位に重なるように開削されている。幅1.5～4.3m、深さ0.4～0.7m、以前の調査分も含めた総検出長は約55mを測る。埋土は褐色系粘質土と灰色系細砂が主で、流れと澱みを繰り返しながら埋没したと思われる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、土製品、玉類、金属器、石器が出土した。SD24と同様に、下位に弥生時代後期の土器を多量に含んだ自然河川跡SR02が埋没している場所があるため、当該期の遺物量を凌駕する程の前代の遺物が混入している。1618～1627は混入した弥生土器である。1618はやや尖り気味をした小形丸底壺で、弥生時代終末期に位置付けられる。1619は頸部に凸帯を回らし、刺突文を施した壺である。1620・1621は甕で、1621は刻目凸帯文を施した凸帯文系甕で、弥生時代前期に位置付けられる。1622～1624は弥生時代後期の鉢で、1623は内外面に赤彩を施す。吉備からの搬入品と考えられる。1625・1628は高杯と判断した。1626は内面に沈線2条と竹管文が、1628は外面に竹管文が残る。いずれも外面に赤彩を施したもので、搬入品と考えられる。1626・1627は支脚である。いずれも中央に穿孔を施している。弥生時代後期に位置付けられる。1629は用途不明の土製品である。小さな面と突起を有する球体で、突起の根元に小さな窪みがある。1631～1636・1639～1645は須恵器

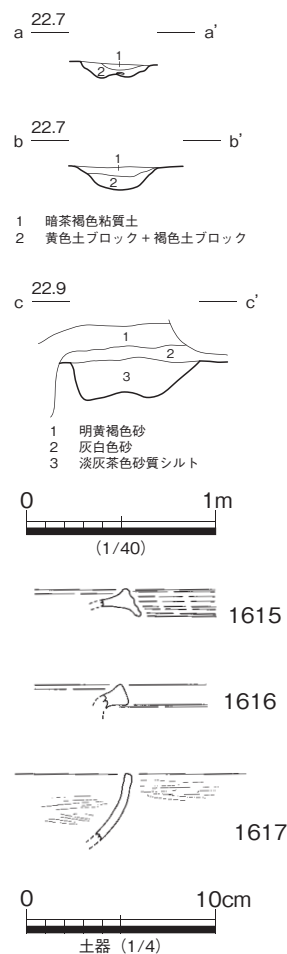


図 236 SD27 断面・出土遺物

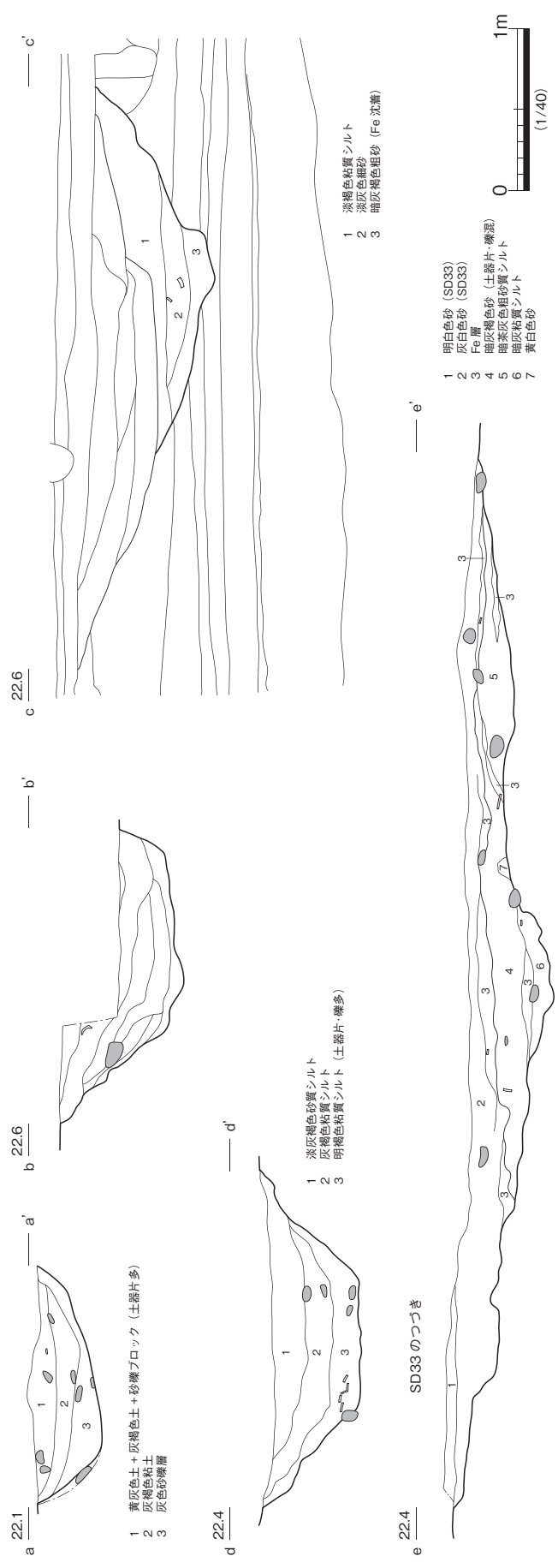


図 237 SD31 断面

杯である。内面の返りの有無で分けられ、返りをもつものは立ち上がりの長短と角度から、6世紀後半(1633・1635)、7世紀前半(1631・1632)、7世紀中頃(1636)のものが見られる。返りをもたないものも、その形態から7世紀代に位置付けられる。1637・1638は須恵器杯蓋である。1646～1651は須恵器高杯である。長脚のもの1648以外は短脚のもので、いずれも7世紀代に位置付けられる。1652は須恵器鉢、1653～1655は須恵器平瓶である。1654は丸みの強い扁球形の胴部で、7世紀代に位置付けられる。1656・1660～1664は須恵器壺である。1656は口縁端部を上方へ短く折り返したもので、9世紀代のものである。1662と1663は玉ねぎ形をした長頸壺の胴部で、同一個体の可能性がある。7世紀代に位置付けられる。1657～1659・1665～1680は須恵器甕である。1674は口縁端部に棒か板の年輪の圧痕が見られる。1681～1683は被熱粘土小塊である。1681は須恵器甕の口縁から胴部にかけて、1682・1683は須恵器甕の胴部破片の外面に付着している。1684～1687は土師器杯である。1684は外面に丁寧なヘラミガキが施されている。1688～1691は土師器甕である。1688・1689は長胴甕と考えられる。1691・1692は把手であり、1693は把手外面に煤が付着している。1696は轆の羽口破片である。強い熱を受けて一部は融解しており、さらに自然釉も付着している。1697はための管状土錘である。1694・1695は口縁端部を内側に折り曲げた瓦質焼成の甕である。(宮崎)

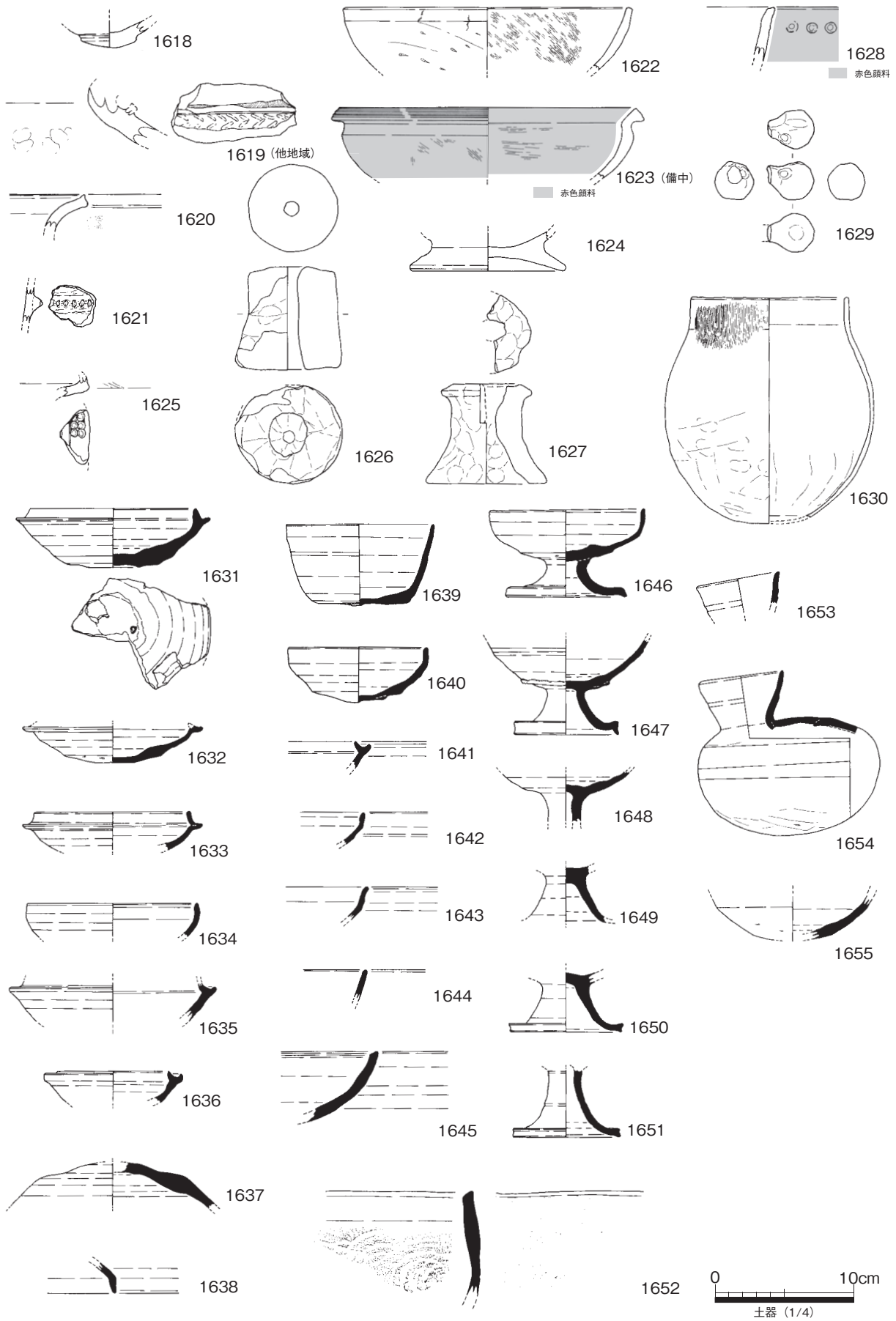


図 238 SD31 出土遺物 (1)

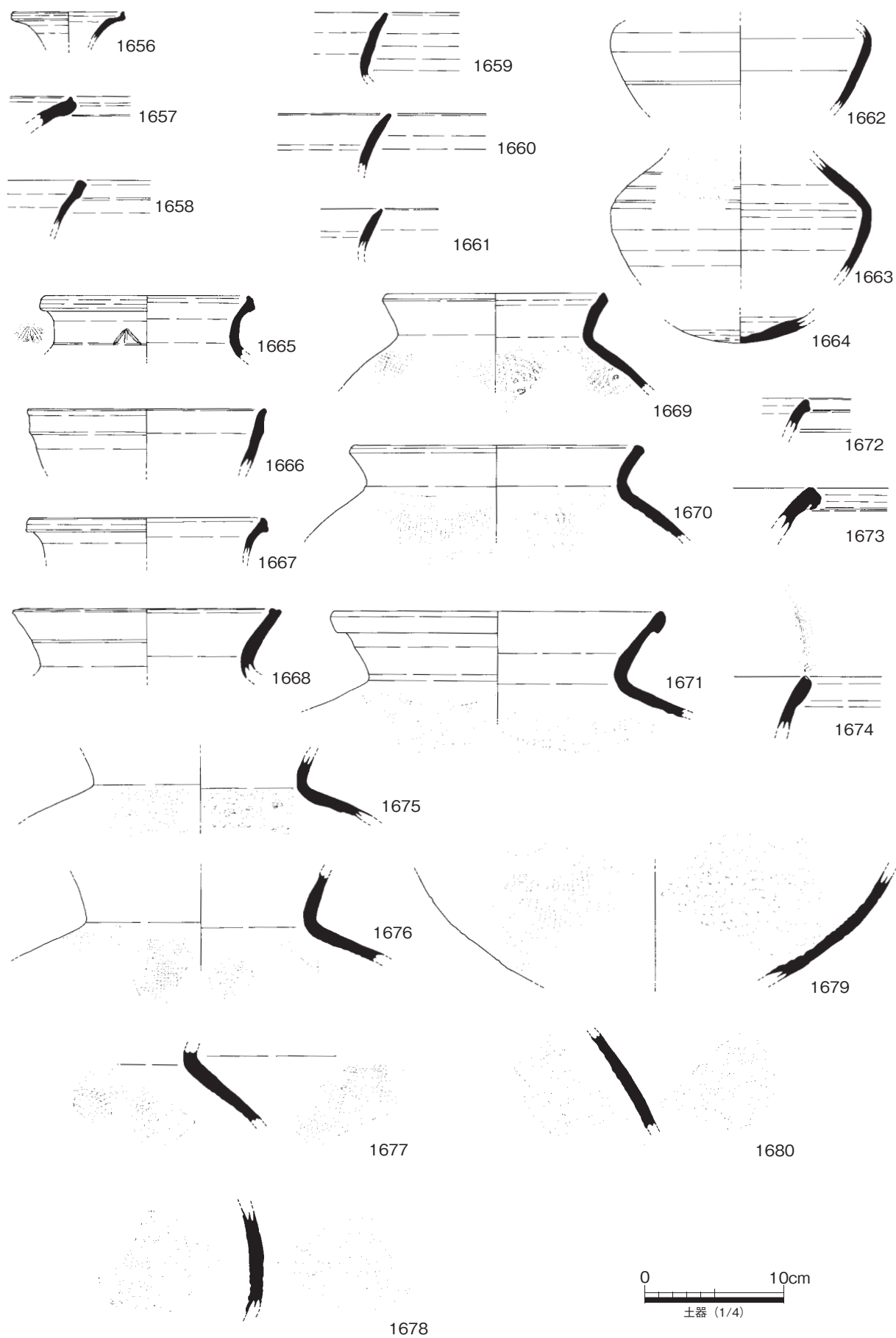


图 239 SD31 出土遺物 (2)

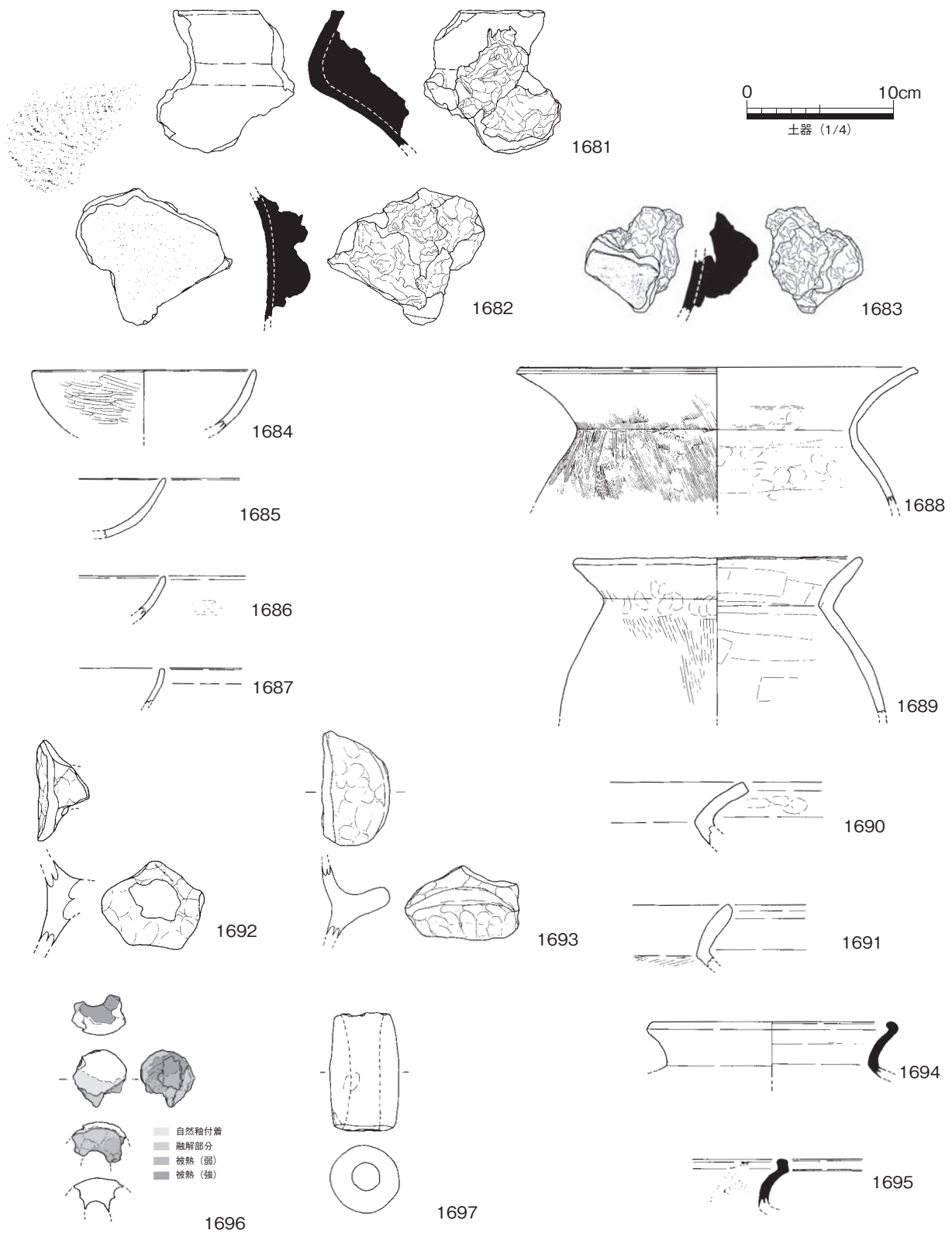


图 240 SD31 出土遺物 (3)

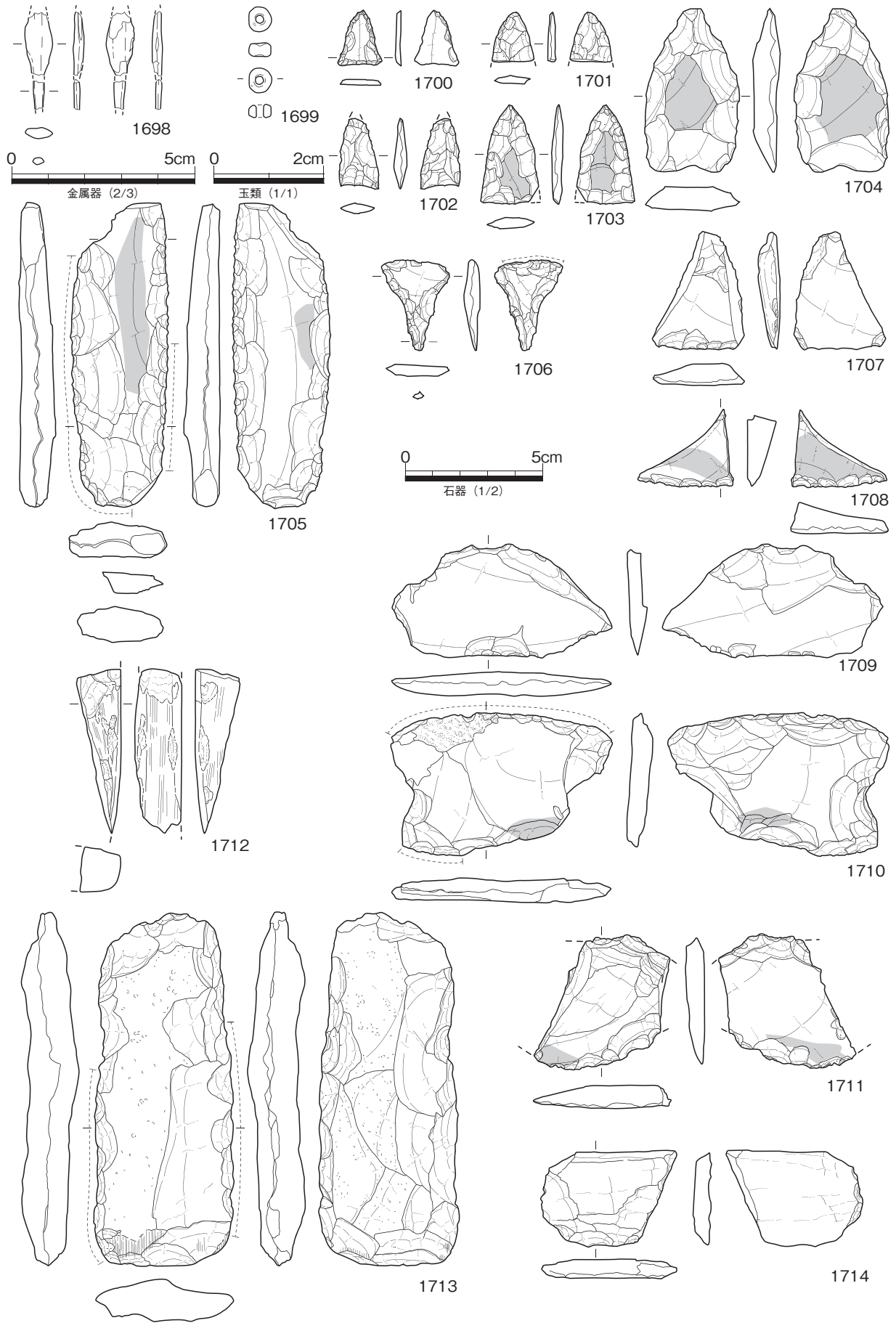


图 241 SD31 出土遺物 (4)

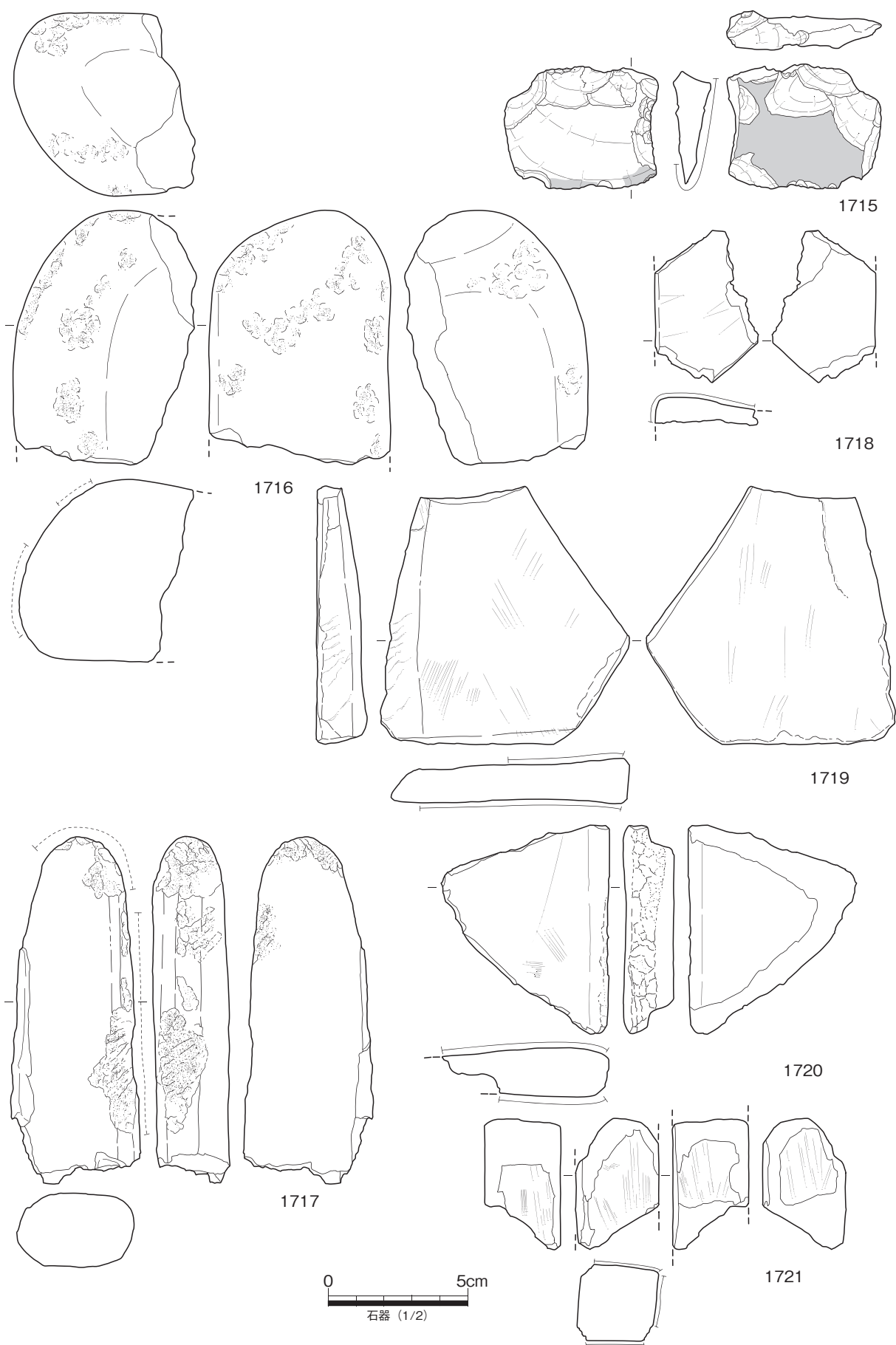


图 242 SD31 出土遺物 (5)

1698 は連鑄式銅鏃である。先端部及び基部が欠損する。遺存部の長さは2.6cmを測る。刃部は中央部がやや膨らむが、全体的に細身の形態で、関は形成しない。刃部中央に鑄が通るが、明確な鑄は一面のみである。

1699 は完形のガラス製小玉である。直径4.0mm、高さ2.5mm、孔径1.0mmで、色調はスカイブルーを呈す。上下端は丸く収め、平坦面は形成しない。

1700～1704 はサヌカイト製打製石鏃である。基部が残る1702・1703はいずれも平基式である。1704 は石鏃未成品で周縁に幅広く粗い調整加工が残る。1703・1704の素材面には打製石庖丁に特有の磨滅痕を認める。

1705 はサヌカイト製打製石剣である。上半部は折損し、下半のみが残る。遺存範囲の周縁はほぼ全周を敲打により整形する。素材面は表裏とも1面で構成しており、板状の石核から連続的に剥離した大型の横長剥片を素材に用いたことが判明する。また、素材面には磨製石庖丁に特有の磨滅を認める。

1706 はサヌカイト製の打製石錐である。つまみ部が三角形となる形態で、作用部の下端は折損するが、側縁に磨滅痕が残る。1707・1709 はサヌカイト製スクレイパーである。いずれも刃部付近が僅かに磨滅するが、打製石庖丁程顕著な磨滅ではない。

1708・1710・1711・1715 はサヌカイト製打製石庖丁である。刃部付近に顕著な磨滅を認める。1712 は結晶片岩製の柱状片刃石斧片である。1713 は安山岩製の打製石斧である。刃部に縦方向の顕著な磨滅及び線状痕が残る。1714 は結晶片岩製の打製石庖丁である。裏面は本来の器面を留めず、全体が剥離したものである。

1716・1717 は叩き石である。1716 は砂岩製で周縁に敲打痕を残す。1717 は結晶片岩製で縄文～弥生前期に特徴的な石棒と同様に結晶化した石英脈が筋状に残る石質である。側縁を中心として強い敲打痕を残す。石棒の転用の可能性も考えられる。

1718～1721 は砥石である。1718・1719 は安山岩製で砥面はやや窪む形態を呈す。1720 は薄いピンク色の角閃安山岩を素材とする。側縁は擦切折取し、表裏の砥面は平滑である。この石材は山口県防府周辺で採取され、西部瀬戸内沿岸地域を中心に石製紡錘車等に多用される。1721 は方柱状の安山岩製砥石である。砥面は上面がやや膨らみ、下面は若干窪む。(森下)

わずかに混じる時代の新しい遺物は、上位のSD33のものが調査時に混入した可能性が高く、それら

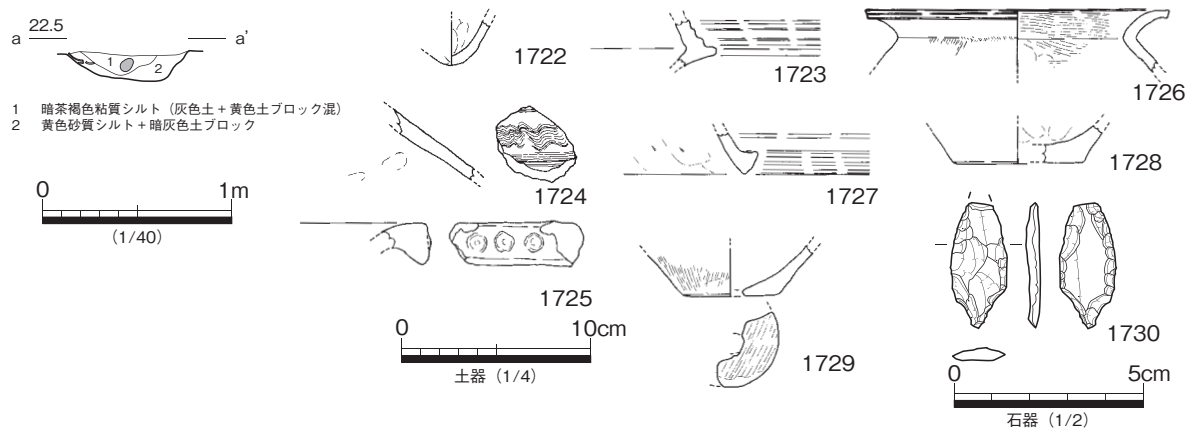


図 243 SD32 断面・出土遺物

を除いた土器の年代観から、SD31は7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD32 (図 243)

B区中央部やや北寄りで検出した、N 40° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合からSD24より新しく、SD17より古いと判断される。幅0.6m、深さ0.1m、検出長は7.6mを測る。埋土は暗茶褐色系粘質土で、基盤層の黄色ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器、弥生土器、石器が出土した。図示した土器はすべて下位の遺構から混入したと思われる弥生土器である。1722はミニチュア土器で尖り底をしている。1723～1725は壺である。1724は壺の肩部で、櫛描き波状文と櫛描き沈線文を施している。弥生時代中期前半に位置付けられる。1725は拡張した口縁端部に円形浮文を貼り付けた壺で、吉備からの搬入品の可能性がある。1726は後期後半

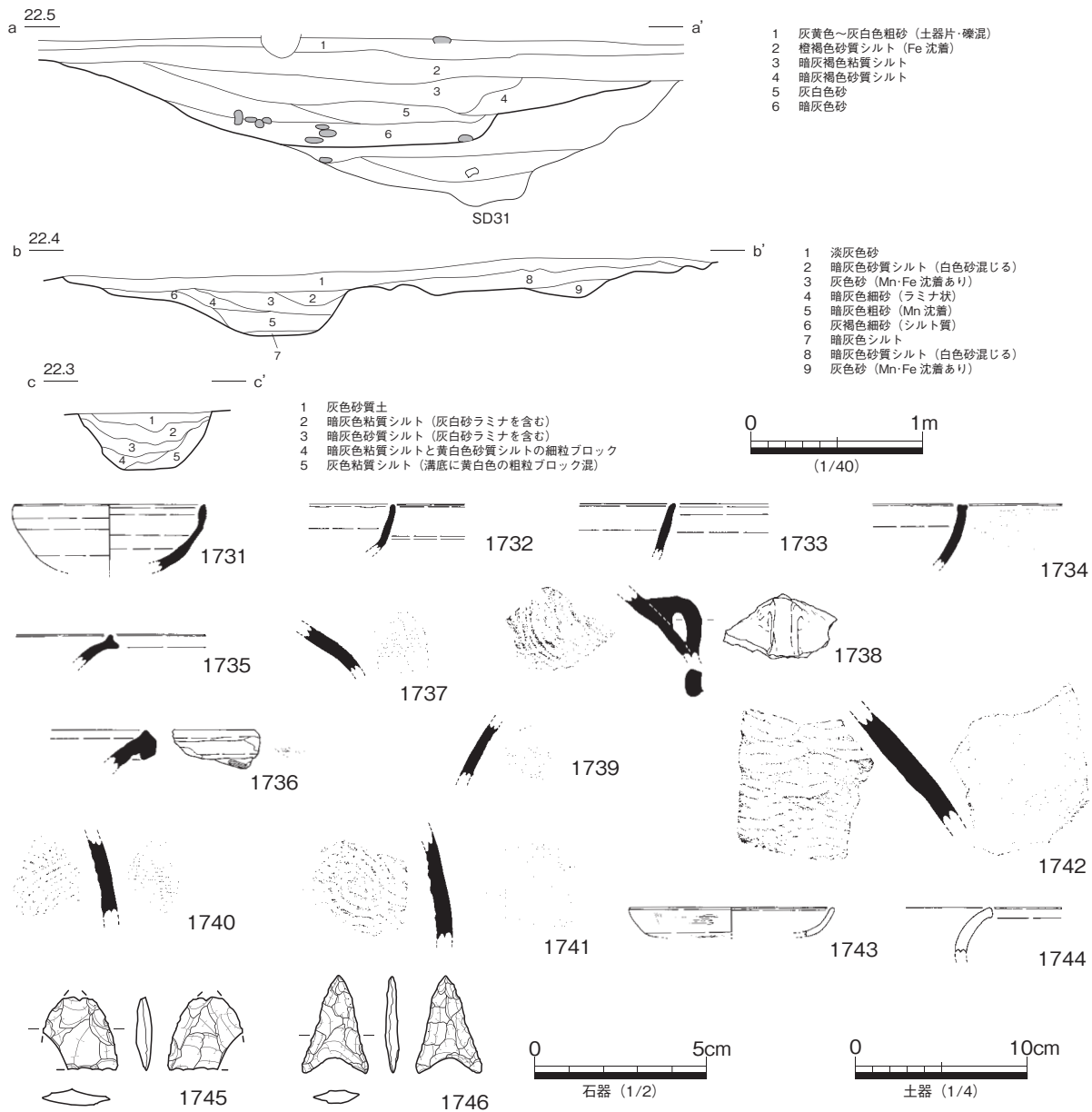


図 244 SD33 断面・出土遺物

に属する甕である。1727は拡張した脚端部に凹線を施した高杯で、中期中葉に位置付けられる。1729は焼成後に穿孔を施した甕底部である。(宮崎)

1730はサヌカイト製の凸基式打製石鏃である。茎部は下が窄まる形態を呈す。(森下)

遺物量は少なく、さらに古代に属すると思われる須恵器片の1点以外は全て弥生土器であった。時期比定は難しいが、方向や埋土等から古代の溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD33 (図 244)

B区北東隅付近からE区西壁の中央部へ斜めに横切るように検出した溝状遺構である。東半部はSD17と一部重なり、途中のB区西壁付近でクランクして、西半部はSD31に重なっている。遺構の重なり具合からSD31・32・128より新しいと判断される。SD17から途中で分岐していることから、SD17とは同時期のものと見られる。幅0.8～3.8m、深さ0.4m、以前の調査分も含めた総検出長は約67mを測る。埋土は灰色系砂質土が主で、ラミナ層も見られることから、流れを有しながら次第に埋没したと考えられる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土した。下位に前代の自然河川跡や溝状遺構が埋没している場所があるため、前代の遺物が混入している。1731～1742は須恵器、1743・1744は土師器である。須恵器杯(1731)や壺(1738)、土師器皿(1743)等は形態から7～8世紀に位置付けられるが、これらは混入品の可能性が高い。(宮崎)

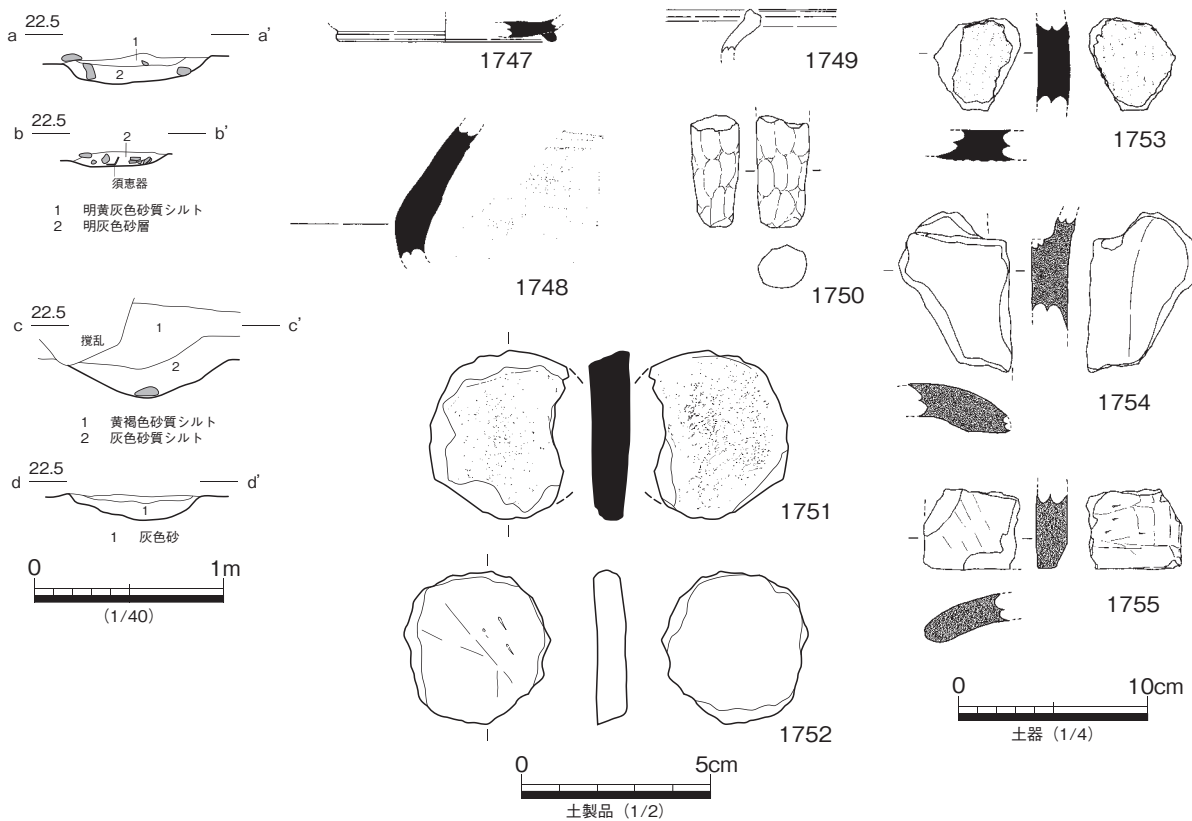


図 245 SD35・94 断面・出土遺物

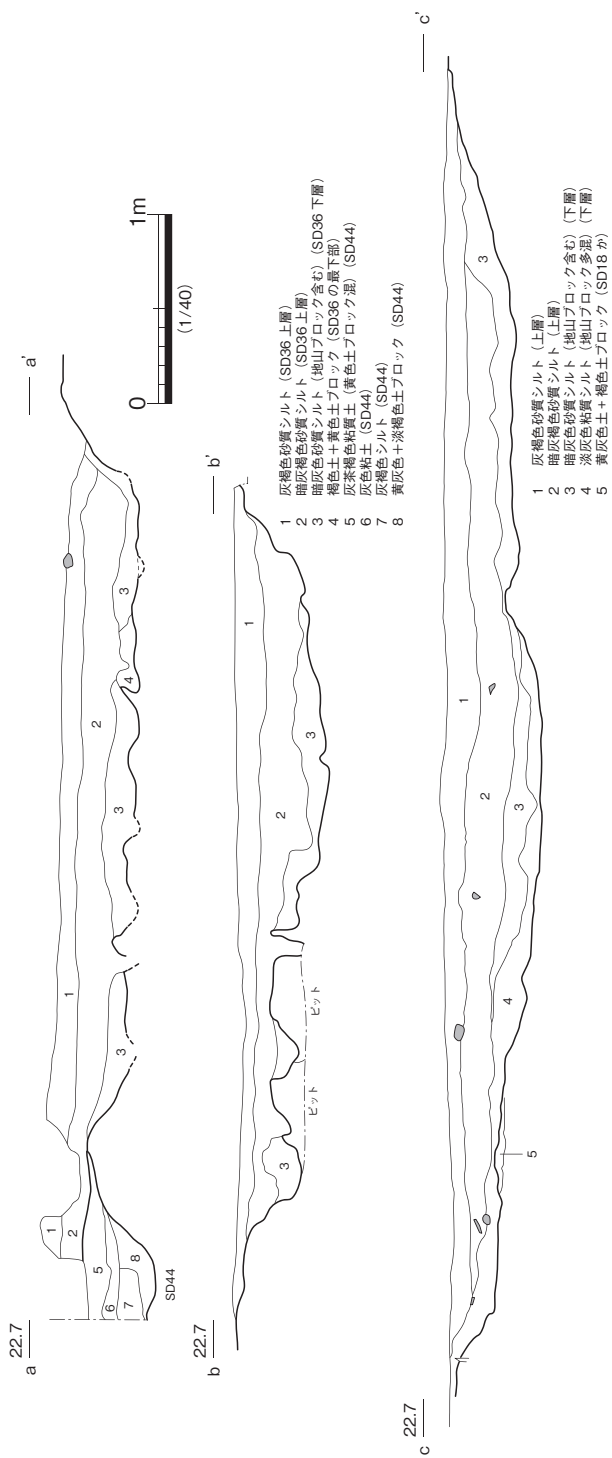


図 246 SD36 断面

1745・1746 はサヌカイト製打製石鎌である。平基式、凹基式がある。1746 の凹基式は磨滅が進行せず、色調も暗灰色であり、縄文期のものではないと考えられる。(森下)

同時期に機能していたと見られる SD17 の年代から、SD33 は 13 世紀代に埋没したと捉えられる。(宮崎)

SD35 (図 245)

B 区の中央部西壁付近から E 区中央部東壁付近にかけて検出した、N 62° E の方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合から、SD36・43 より新しいと判断される。幅 0.5 ~ 0.8m、深さ 0.1 ~ 0.2m、検出長は 9.5m を測る。埋土は灰色系砂が主である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、陶磁器、瓦が出土した。1747・1748 は須恵器、1749・1750 は土師器である。1751 は須恵器転用、1752 は土師器転用の円盤状土製品である。1753 は須恵質焼成の平瓦、1754・1755 は瓦質焼成の丸瓦である。

図示できなかったが、陶磁器の破片も伴っており、SD35 は近世の溝状遺構と判断される。

SD36 (図 246 ~ 248)

B 区の南半部西壁付近で検出した、N 30° W の方向を有する溝状遺構である。断面形態は皿形を呈しており、底面は不整で凸凹が顕著である。遺構の重なり具合から、SD18・44 より新しく SD35 より古いと判断される。幅 3.8 ~ 4.0m、深さ 0.3 ~ 0.5m、検出長は 16.3m を測る。埋土は上下 2 層に大別され、上層は灰褐色系シルト、下層は基盤層の黄色ブロックを含んだ灰色系粘質土が主である。下層は人為的に埋め戻され

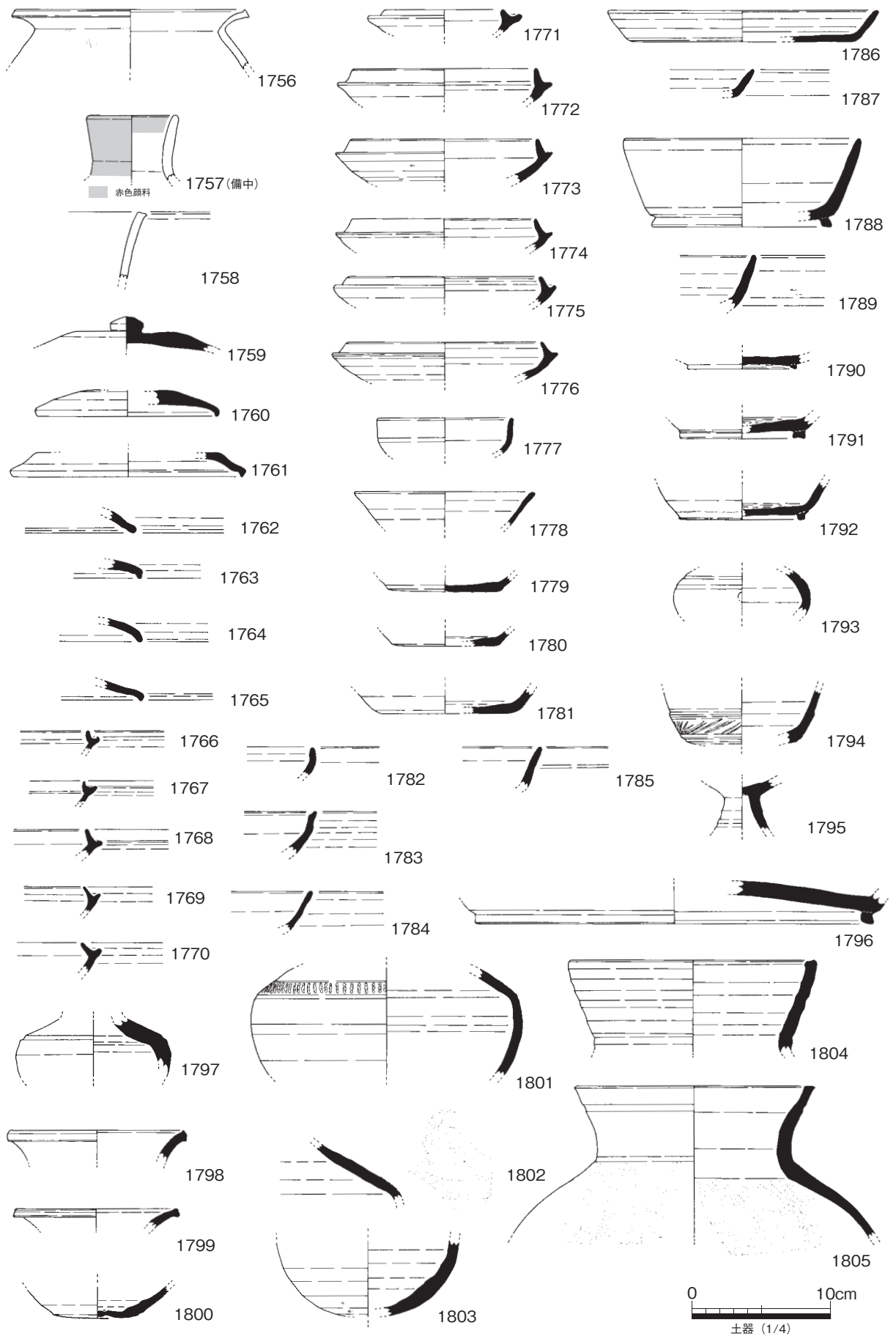


图 247 SD36 出土遺物 (1)

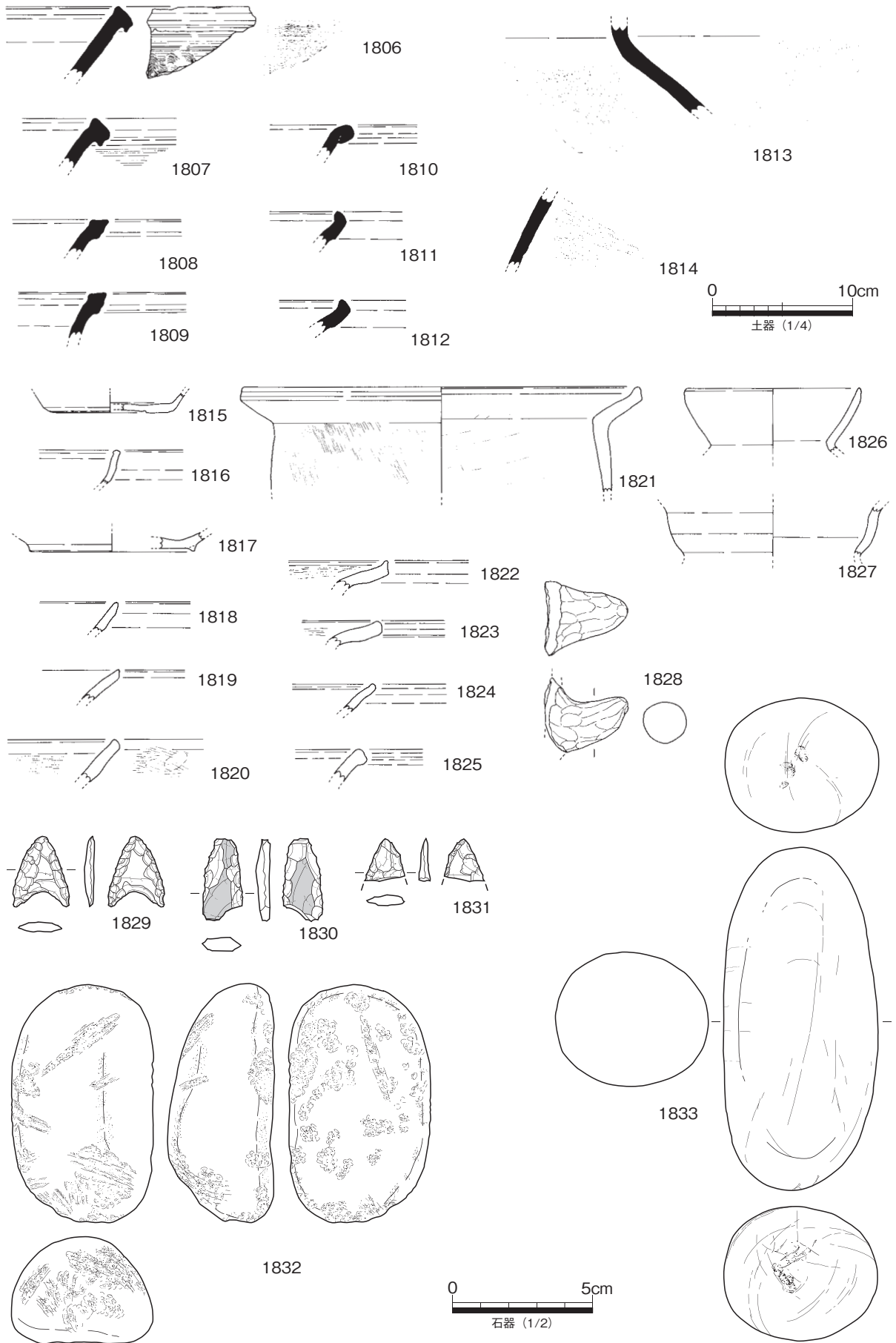


图 248 SD36 出土遺物 (2)

た可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土した。1756～1758は混入した弥生土器である。1757は外面全体と口縁部内面に赤彩を施した壺である。九州からの搬入品の可能性がある。1758は弥生時代中期後半の壺である。1759～1765は須恵器蓋である。形態から8世紀代のもの1760や、8～9世紀代のもの1761がある。1766～1785は須恵器杯である。内面に返りをもつものは6世紀末～7世紀前半のもの1768、1772～1774、7世紀中頃のもの1767・1771がある。内面に返りをもたない杯は7～8世紀のもの1777・1783・1785、10～11世紀代に位置付けられるもの1778～1780がある。1786・1787は須恵器皿で、1786は7世紀代に位置付けられる。1788～1792は須恵器椀である。1788・1791・1792は8世紀代のものと考えられる。1793は須恵器壺、1794・1795は須恵器高杯である。1794は杯部外面に沈線と刺突文を施したもので、7世紀代に位置付けられる。1796は須恵器盤で高台の貼り付け位置から8～9世紀に属するものと見られる。1797～1803は須恵器壺である。張り出した肩部に沈線と刺突文を施した1801や1802は7世紀代に位置付けられる。1804～1814は須恵器甕である。1815・1816は土師器杯、1817は土師器椀である。1817～1825は土師器甕である。1821～1823は形態から10～11世紀代に属するものと考えられる。1826・1827は古墳時代前期に属する土師器甕で、他の遺構から混入したものと考えられる。1828は土師器把手である。(宮崎)

1829～1831はサヌカイト製打製石鎌である。1830の素材面には打製石庖丁に特有の顕著な磨滅が残る。1832は砂岩製の叩き石である。器面に線状の敲打痕が多数残る。1833は花崗岩を石材とする磨石である。全面研磨し、敲打痕はほとんど認められない。顕微鏡等で観察したが、顔料等の付着は認められない。(森下)

このSD36は、設置時期がはっきりしないものの、10～11世紀代に埋没した溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD37 (図 249)

B区の南西隅付近からD北東隅付近にかけて検出した、N 30° Wの方向を有する溝状遺構である。周囲には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。断面形態は浅いU字形を呈している。遺構の重なり具合から、SD18とSD93より新しいと判断される。幅0.4～1.0m、深さ0.05～0.1m、検出長は9.0mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土したが、その量は極少ない。1834・1835の弥生土器高杯2点を図示したが、他の遺構からの混入品で、SD37の時期を示すものではない。

埋土の特徴から、古代から中世に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

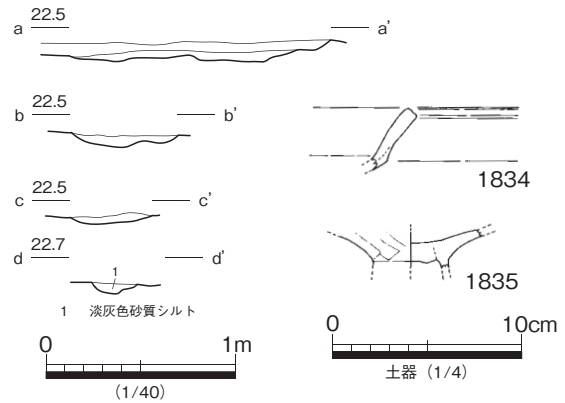


図 249 SD37・75 断面・出土遺物

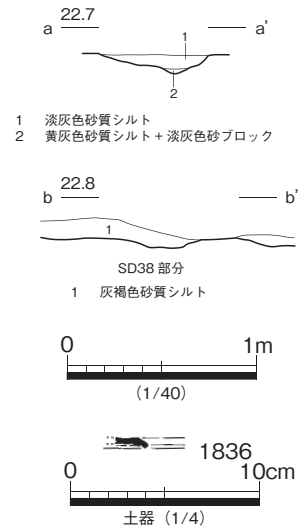


図 250 SD38 断面・出土遺物

SD38 (図 250)

B 区の南西隅付近で検出した、N 30° W の方向を有する溝状遺構である。周囲には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合から、SD18 より新しいと判断される。幅 0.5 ~ 0.8m、深さ 0.1m、検出長は 6.2m を測る。埋土は灰色系砂質シルトである。

遺物は須恵器、土師器が出土したが、その量は少ない。1836 の須恵器蓋 1 点を図示したが、SD37 の時期を示すものかどうかは定かではない。

埋土の特徴から、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

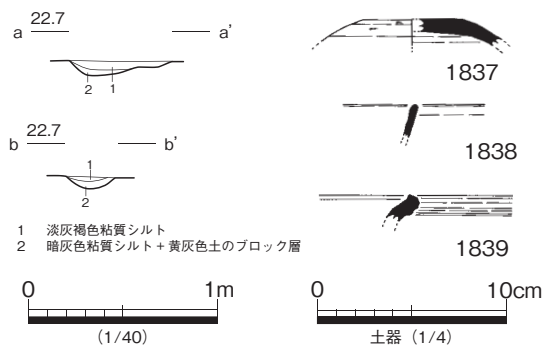


図 251 SD39 断面・出土遺物

SD39 (図 251)

B 区の中央部やや西寄り付近で検出した、N 32° W の方向を有する溝状遺構である。周囲には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。断面形態は浅い U 字形を呈している。遺構の重なり具合から、SD44 より新しいと判断される。幅 0.3 ~ 1.0m、深さ 0.1m、検出長は 8.7m を測る。埋土は灰色系砂質シルトで、下層は基盤層の黄色ブロックを含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土したが、その量は少ない。1837 ~ 1839 の須恵器 3 点を図示したが、SD39 の時期を示すものかどうかは定かではない。

埋土の特徴から、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

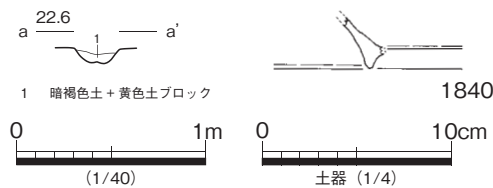


図 252 SD42 断面・出土遺物

SD42 (図 252)

B 区の中央部やや西寄り付近で検出した、N 33° W の方向を有する溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈している。幅 0.3m、深さ 0.1m、検出長は 1.1m を測る。埋土は暗褐色土で黄色ブロックが混じる。

遺物は弥生土器がわずかに出土したのみである。1840 は弥生土器高杯の脚部である。弥生後期前半に位置付けることができるが、混入品と考えられる。

埋土の特徴から、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD43 (図 253)

B 区の中央部やや西寄り付近で検出した、N 4° W の方向を有する溝状遺構である。断面形態は U 字形を呈している。遺構の重なり具合から、SD14 より新しく SD35 より古いと判断される。SD36 とは同時期の可能性がある。幅 0.6m、深さ 0.2 ~ 0.3m、検出長は 3.6m を測る。溝状遺構の東肩には拳大の石を 3 段程並べている。西肩にも数石が残存しており同様に並べていた可能性がある。北端付近では板石を重ねており、暗渠状を呈していたものと見られる。

遺物は須恵器、弥生土器がわずかに出土している。1841・1842 は須恵器蓋である。1843・1844 は須

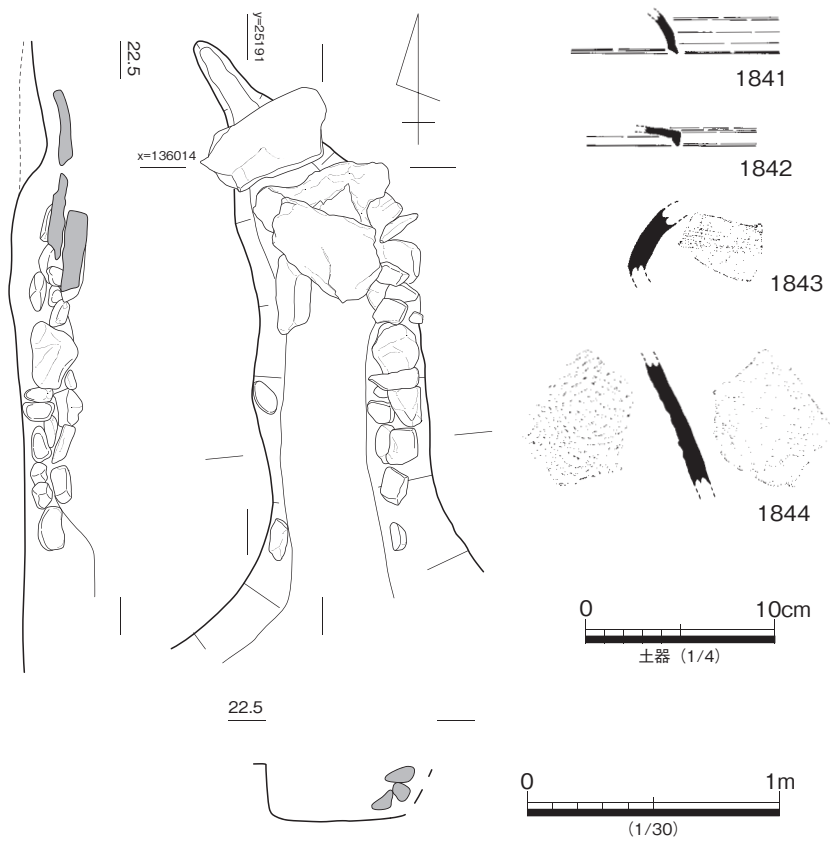


図 253 SD43 平・断・立面・出土遺物

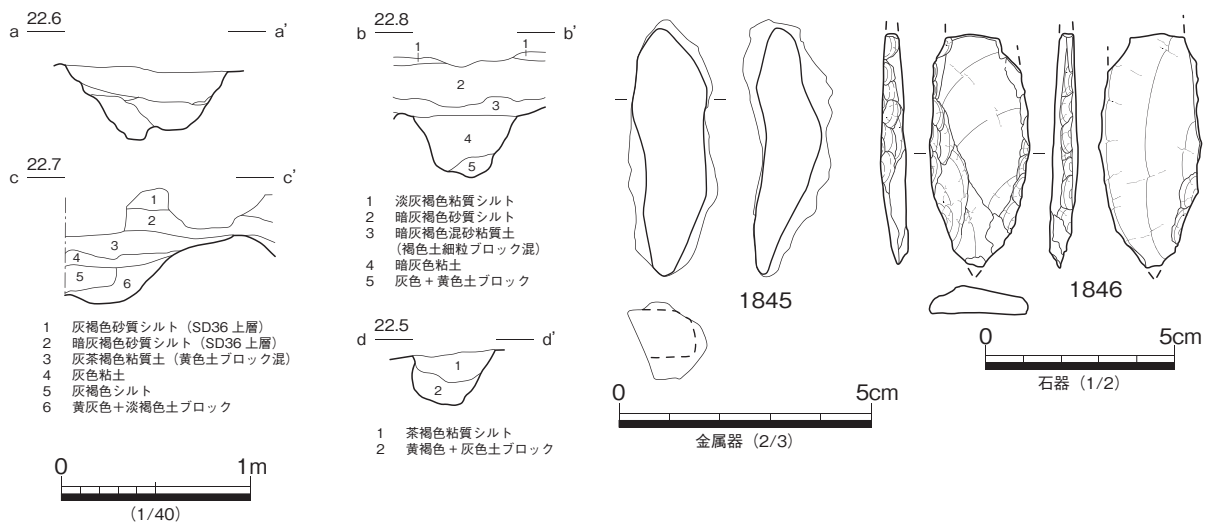


図 254 SD44・98 断面・出土遺物

恵器甕である。7～8世紀に位置付けられる須恵器であるが、下位のSD14からの混入の可能性が高い。SD36との関係から設置時期がはっきりしないものの、10～11世紀代に埋没した溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD44 (図 254)

B区中央部やや西寄りからD区北東隅付近で検出した溝状遺構である。途中で途切れており、西側が

直線的であるのに対して、東側は緩やかな弧を描いているようである。西側でN 87° Eの方向を有する。断面形態は不整なU字形を呈している。位置と方向から、当方のB区に存在するSD21が連続する可能性がある。遺構の重なり具合から、SD36・39より古いと判断される。幅0.3～0.8m、深さ0.3～0.4m、検出長は10.9mを測る。埋土は暗灰色系粘質土が主であるが、ブロックを含む土層も見られる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、金属器、石器が出土した。土器は細片で年代比定は困難である。(宮崎)

1846は表面が灰白色で粉状に風化したサヌカイト製石器である。薄く剥離した不定形剥片の周縁に、急角度の調整加工を施すもので、坂出市川津町の川津一ノ又遺跡や高松市国分寺町の国分寺六ツ目遺跡で出土する縄文期と推定される尖頭器に類似する。(森下)

埋土の特徴から、7世紀代の溝状遺構である可能性が高い。(宮崎)

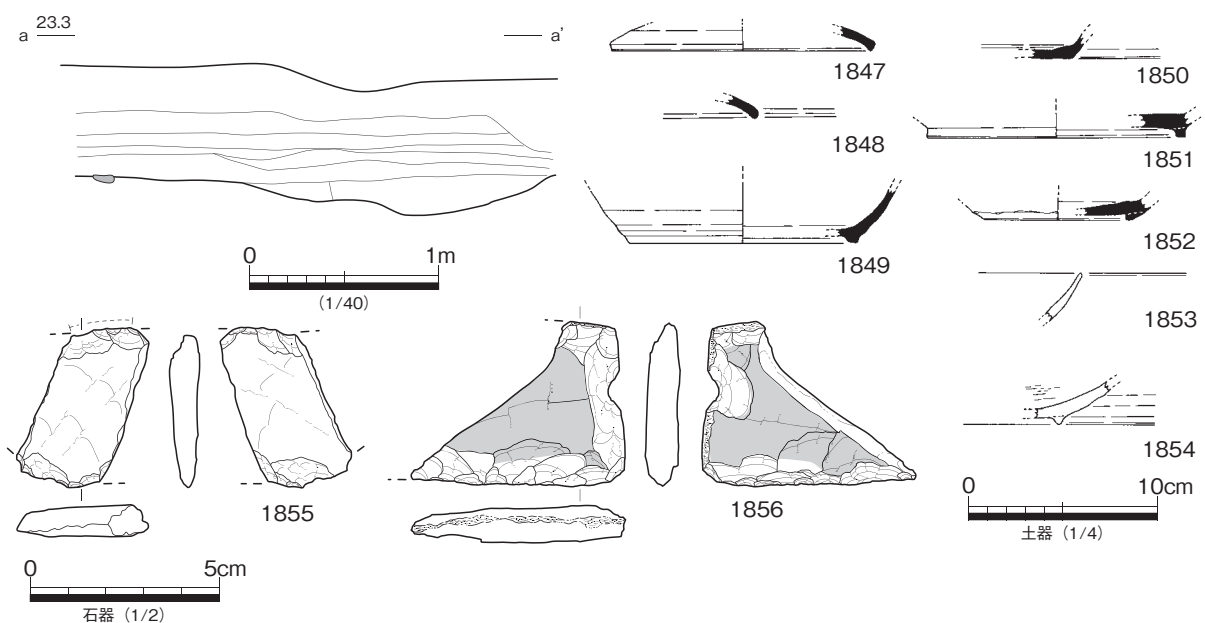


図 255 SD50 断面・出土遺物

SD50 (図 255)

C区の北西隅付近で検出した、N 66° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。位置と方向から、西は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・Y区)の溝状遺構に繋がるものである。幅1.9m、深さ0.2m、以前の調査分も含めた総検出長は19.1mを測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。1847・1848は須恵器蓋である。7～8世紀代のものと思われる。1849・1852は須恵器椀、1850は須恵器杯である。1851は底径が大きいため須恵器皿とした。8世紀代に位置付けられる。1853は土師器杯、1854は土師器椀である。断面三角形の小さな高台を貼り付けており、12世紀代のものと考えられる。(宮崎)

1855は結晶片岩製の打製石庖丁である。両側縁が大きく折損するが、敲打調整された背部と鋭く再調整された刃部が残る。1856はサヌカイト製打製石庖丁である。側縁に自然面を残し、表裏の素材面はそれぞれ1面で構成することから、板状の大型素材から連続的に剥取した横長剥片を素材に用いたこ

とが推定できる。表裏面に顕著な磨滅痕が残る。
(森下)

遺物が少ないため、時期比定は困難であるが、埋土の特徴から近世の可能性はある。(宮崎)

SD52 (図 256)

C区の北東隅付近で検出した、N 75° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅いU字形を呈している。遺構の重なり具合から、SB42より新しいと判断される。幅0.6~0.8m、深さ0.1~0.2m、検出長は7.6mを測る。埋土は上下2層に別れ、上層は淡灰色砂、下層は灰色砂に暗褐色シルトのブロックが混じる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。1857は須恵器蓋、1858・1859は須恵器杯である。1860は土師器鉢としたが、小形丸底壺の退化したものの可能性がある。

1861は土師器甕で、口縁部の形態から9~10世紀代のものと思われる。(宮崎)

1862は基部を丸く仕上げたサヌカイト製の小型石鏃である。先端部は折損する。(森下)

遺物が少ないため、時期比定は困難であるが、埋土の特徴から近世の可能性はある。(宮崎)

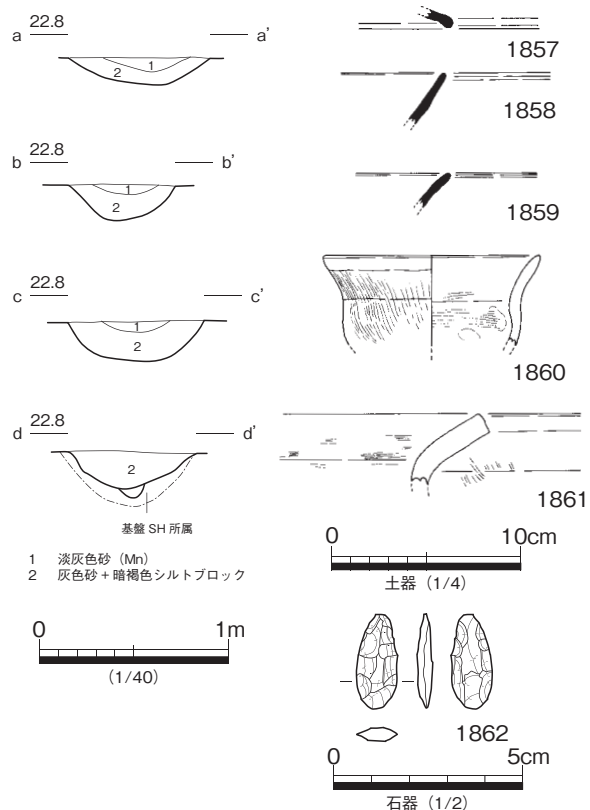


図 256 SD52 断面・出土遺物

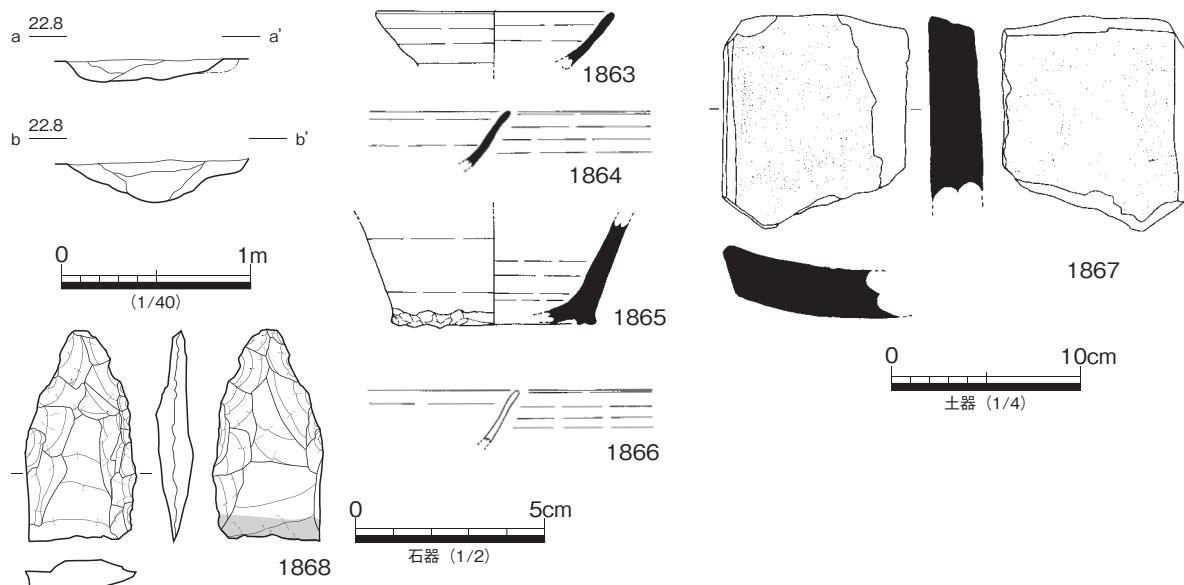


図 257 SD53 断面・出土遺物

SD53 (図 257・258)

C区の中央部付近で検出した、N 32° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形～逆三角形を呈している。攪乱によって両端を削平されているが、位置と方向から、北はSD85・127に繋がる可能性がある。削平によって部分的に消失しているが、北端部分等の平面形態が長楕円形の土坑状を呈する箇所が存在等から、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。幅0.9～1.0m、深さ0.1～0.2m、検出長は9.7mを測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、瓦、石器が出土している。1863・1864は須恵器杯である。口縁部形態から8～9世紀代に位置付けられる。1865は須恵器壺である。高台外面に棒状工具による押圧痕がある。1866は土師器杯で、形態から8世紀代のものと思われる。1867は須恵質焼成の平瓦である。凸面に格子タタキ、凹面に布圧痕と模骨痕が残る。(宮崎)

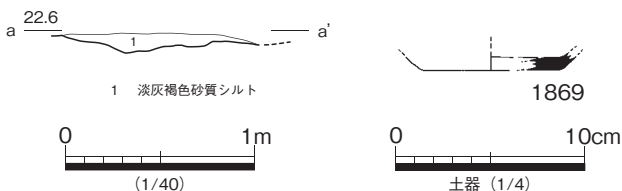


図 258 SD60 断面・出土遺物

1868は長さ5.6cmのサヌカイト製石鏃未製品とした。側面には先端を作出する調整加工が施されるが、基部は素材剥片のエッジを留める。側縁の加工は幅1cm程の剥離面が連続しており、素材に対して粗加工を施した段階と推定する。基部のエッジは片面に顕著な磨滅痕が残る。したがって打製石庖丁の転用品と推定する。ただ、転用される打製石庖丁は刃部の再調整が施されたものが多いのに対して、基部には元のエッジがそのまま残る点で異質である。(森下)

土器の年代観から、8～9世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD60 (図 258)

D区の中央部付近で検出した、N 30° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は底面の不整な

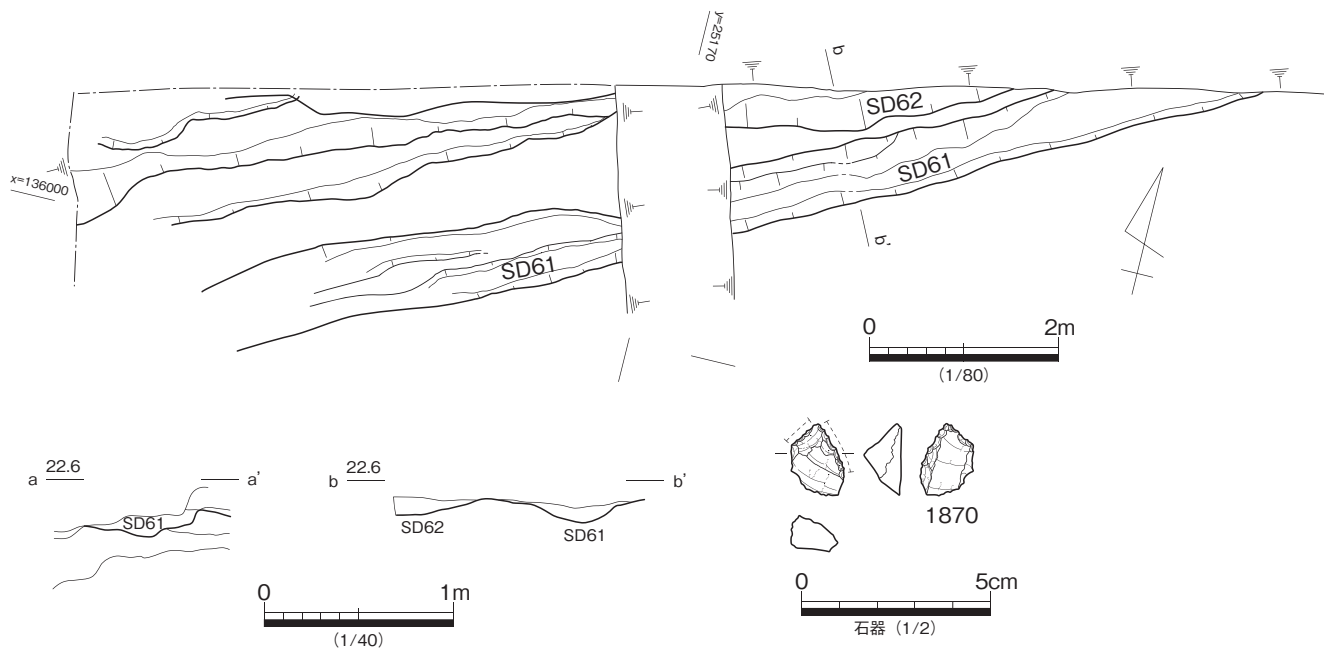


図 259 SD61 平・断面・出土遺物

逆三角形を呈している。位置と方向から、SD77に繋がるものと見られる。遺構の重なり具合から、SD80・83・92より新しいと判断される。幅1.2～2.0m、深さ0.1m、SD77を含めた総検出長は12.3mを測る。埋土は1層で、淡灰褐色砂質シルトである。

遺物は須恵器・土師器・弥生土器が出土している。1869は須恵器杯の底部である。

遺物は少量であり、さらに混入した弥生土器の方が数が多い状況で、年代の比定は困難であるが、SD77の年代観と埋土の特徴等から、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD61 (図 259)

D区の北西隅付近の西壁前で検出した、N 63° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合から、SD71より新しいと判断される。幅0.6～1.6m、深さ0.1m、

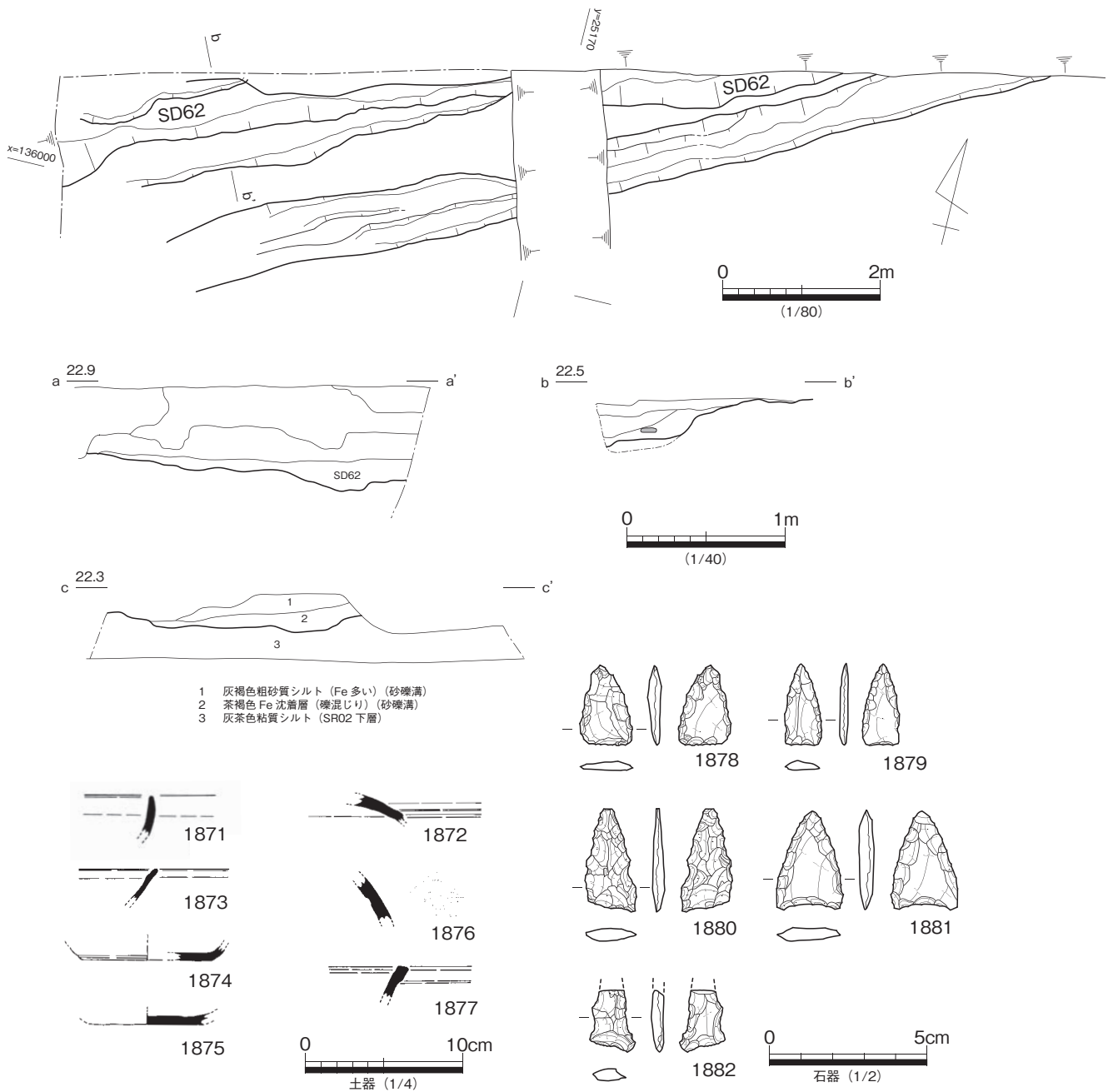


図 260 SD62・102 平・断面・出土遺物

検出長は 11.2m を測る。埋土は 1 層である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、陶磁器、瓦、石器が少量、出土している。図化できない程の破片である。(宮崎)

1870 はエメラルドグリーンの色調を呈するチャート製火打石の小片である。側縁には敲打痕を残す。
(森下)

溝状遺構の検出地点は時代の異なる溝状遺構が交錯している場所であることから、他遺構の遺物の混入があると考えられる。このため時期比定は困難であるが、遺構の重なり具合からは SD62 とともにこの周辺の溝状遺構では最も新しいものと判断でき、中世以降の年代と判断される。(宮崎)

SD62 (図 260)

D 区の北西隅付近から D・E 区の境付近で検出した、N 63° E の方向を有する溝状遺構である。断面形態は皿形を呈している。遺構の重なり具合から、SD71 より新しいと判断される。幅 1.0m 程度、深さ 0.2 ~ 0.3m、検出長は 9.7m を測る。埋土は灰褐色系砂質土で、鉄分の沈着が著しい。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。1871 ~ 1875 は須恵器杯である。1873 は口縁部の形態から 9 ~ 10 世紀代のものと考えられる。1872 は須恵器蓋で、凹線 1 条による段をもつ。1876 はヘラ記号の一部が残るもので、須恵器壺の胴部と判断した。1877 は須恵器甕の口縁端部である。
(宮崎)

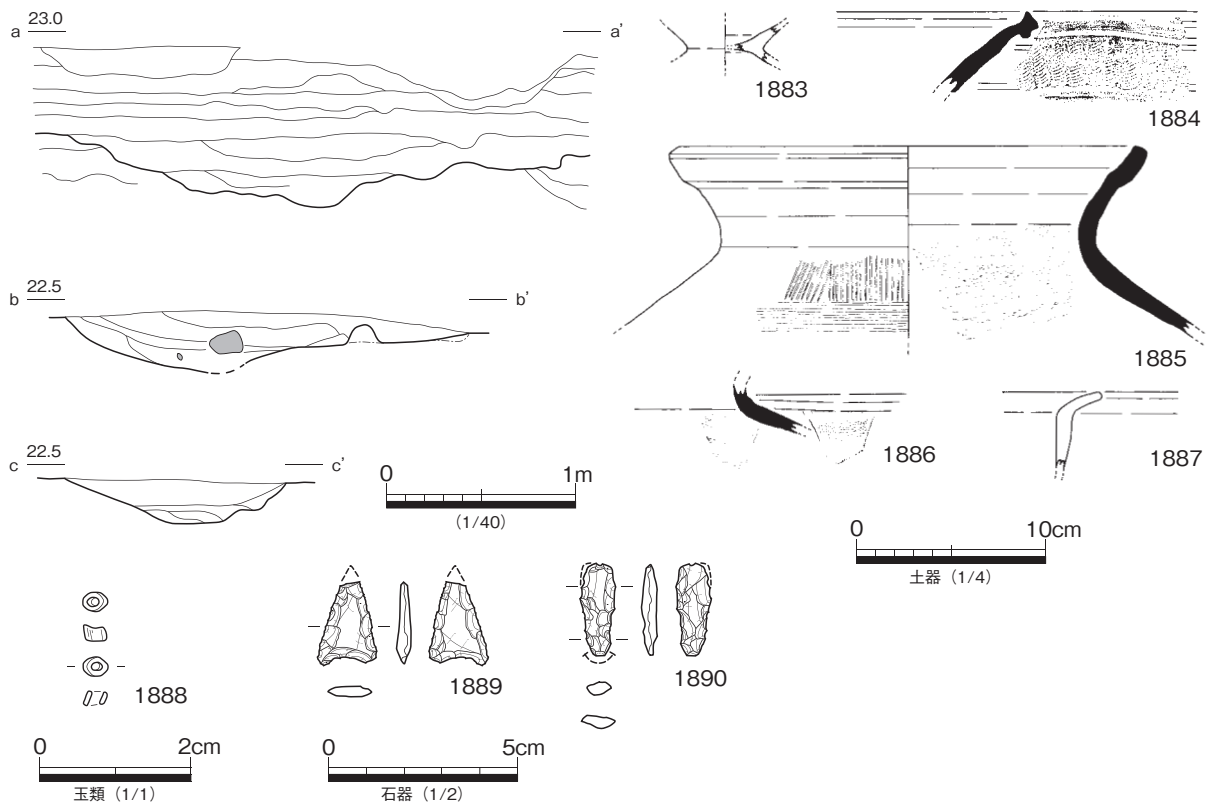


図 261 SD67 断面・出土遺物

1878～1882はサヌカイト製打製石鏃である。いずれも平基式で風化や磨滅は進行していない。1878・1880・1882は左右が不均整の形態で未製品の可能性が高い。(森下)

遺構の重なり具合からはSD61とともにこの周辺の溝状遺構では最も新しいものと判断でき、中世以降の年代と判断しておく。(宮崎)

SD67 (図 261)

D区の中央部の西壁前付近で検出した、N 52° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は逆三角形～逆台形を呈している。位置と方向から、SD83に繋がるものと見られる。幅1.1～2.0m、深さ0.2～0.3m、検出長は3.3mを測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、玉類、石器が出土している。1883は混入した弥生土器の脚台付鉢である。1884～1886は須恵器甕である。1884は口縁部外面に凹線2条と櫛描き波状文を施したもので、7世紀代に位置付けられる。1887は土師器の甕である。(宮崎)

1889・1890はサヌカイト製石器である。1890は細身の石鏃で、下端部側縁に横方向の擦痕を伴う磨滅が残る。(森下)

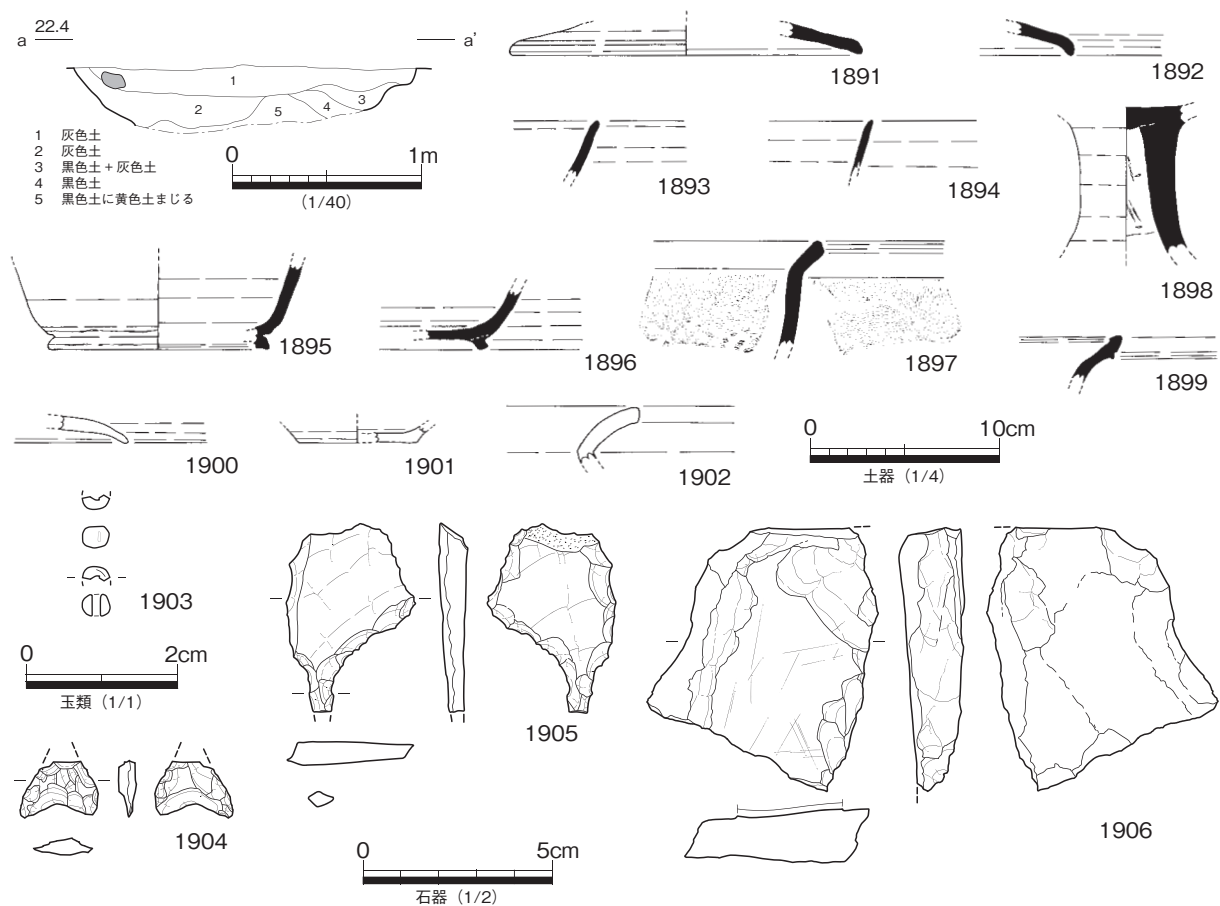


図 262 SD70 断面・出土遺物

年代の判明する遺物が少なく、時期比定は困難であるが、SD83の年代観から7世紀代に機能していた溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD70 (図 262)

D区の北西隅付近で検出した、緩やかに弧を描く溝状遺構である。断面形態は浅いU字形を呈している。遺構の重なり具合から、SD92より新しくSD61より古いと判断される。方向と位置からSD72と同一の溝状遺構と考えられる。幅1.6m、深さ0.3～0.4m、検出長は5.8mを測る。埋土は上下2層に大別され、上層は灰色土、下層は黒色土が堆積している。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、玉類、石器が出土している。1891・1892は須恵器蓋である。口縁端部を軽く曲げるもので、8～9世紀代に位置付けられる。1893・1894は須恵器杯である。直線的な口縁部から9～10世紀代のものと考えられる。1895・1896は須恵器椀で、外方へ踏ん張る高台の形態から、7～8世紀のものと考えられる。1897は須恵器鉢、1898は須恵器高杯の脚部で、やや長脚のものである。1898は須恵器壺で、外面に凸線1条を回らせている。7世紀代に位置付けられる。1900は土師器蓋で、内面に赤彩の痕跡が残る。1901は土師器杯の底部、1902は土師器甕である。(宮崎)

1903はスカイブルーを呈するガラス小玉の半折片である。直径3.5mm、高さ2.5mm、孔径1.5mmを測る。ガラス内部に縦方向に延びる気泡が残ることから、引き伸ばし技法で製作されたものである。上下端は丸く収め、面をもたない。

1904はサヌカイト製打製石鎌である。左右の基部形状が非対称形で、未製品の可能性が高い。1905はサヌカイト製打製石錐である。基部が粗大で未調整であるが、作用部の調整は細かく施す。同様に基部形状が不整形ながら、作用部に磨滅痕が残る石錐も多く、下端部の折損は使用後の折損である可能性もある。1906は流紋岩製砥石片である。上面に緩やかに窪む砥面をもつ。同一方向の線状痕が目立つが、砥面上端付近ではやや深めの刃潰し痕が残る。(森下)

遺物の年代観は7～10世紀代と幅をもつが、7世紀代の遺物はSD92からの混入の可能性が高い。溝状遺構の設置年代が9～10世紀代で埋没年代は同一の溝状遺構であるSD72の年代から11～12世紀代と考えられる。(宮崎)

SD71 (図 263)

D区の北西隅から北壁に沿うように検出した、N70°Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合から、SD70・127より新しくSD61・62より古いと判断される。幅1.3m、深さ0.2m、検出長は10.3mを測る。埋土は灰白色土で、下位には礫を多く含む部分もある。遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。1907は須恵器甕で7～8世紀代のものと考えられる。(宮崎)

1908～1910はサヌカイト製打製石鎌である。1908は上端は欠損、下端は折損する。下端部の形状から凸基式石鎌の未製品の可能性があるが、遺存部が少なく定かでない。1909・1910は全体的に調整加工が粗い段階で中断した未製品である。

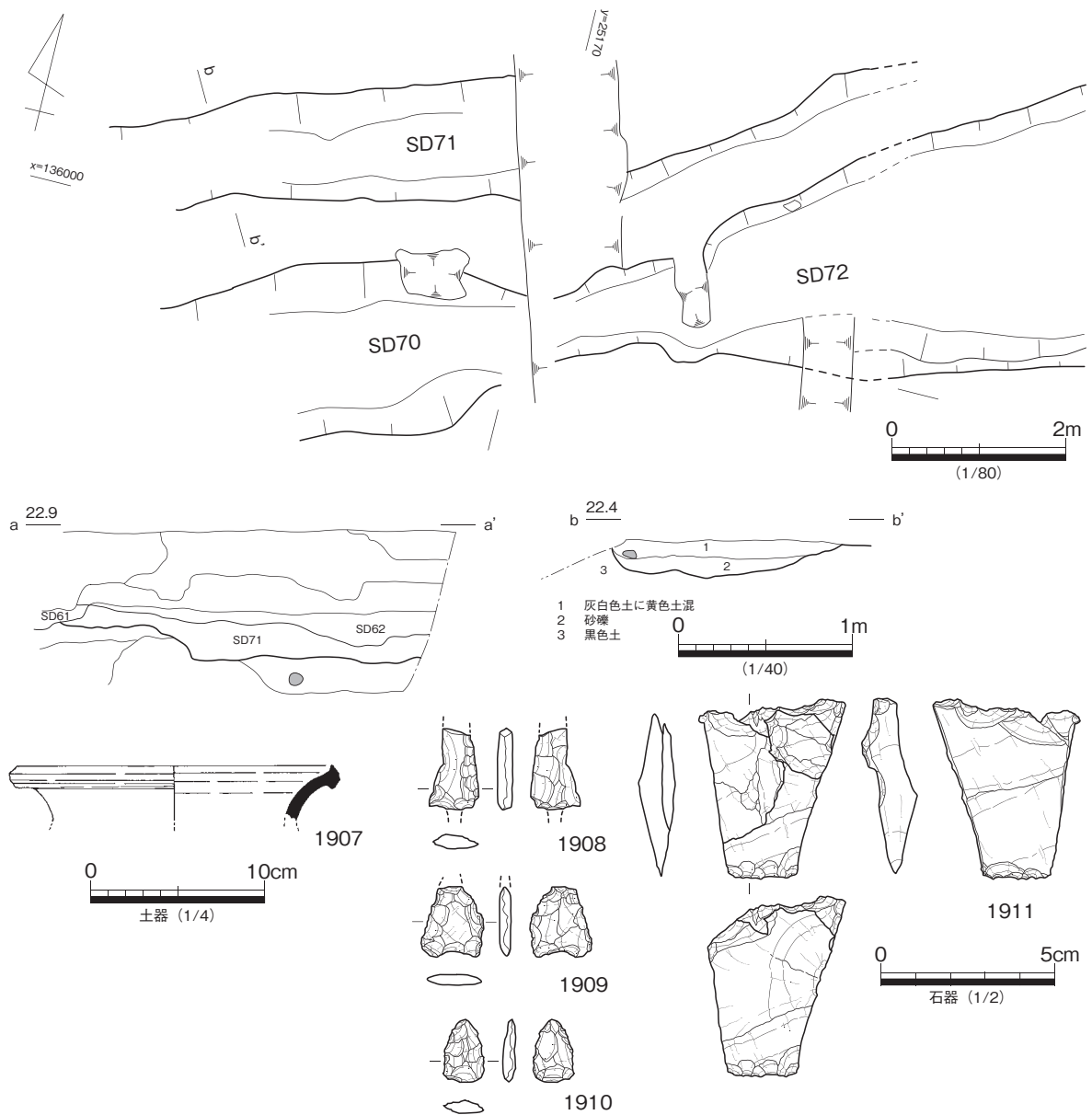


図 263 SD71 平・断面・出土遺物

1911 は打製石庖丁を転用した楔状石核である。調査時の破損部で破片が接合するが、一部で接合面が段状に食い違う箇所があることから、元々潜在的な割れが生じていたものと推定した。刃部には軽度の磨滅が残る。(森下)

遺物は少量であり、混入した弥生土器の方が数が多い状況で、年代の比定は困難である。遺構の重なり具合や埋土の特徴から、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD72 (図 264 ~ 266)

D区の中央部の北壁前付近で検出した、N 62° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は底面の不整な逆台形を呈している。遺構の重なり具合から、SD91 より新しく SD35 より古いと判断される。

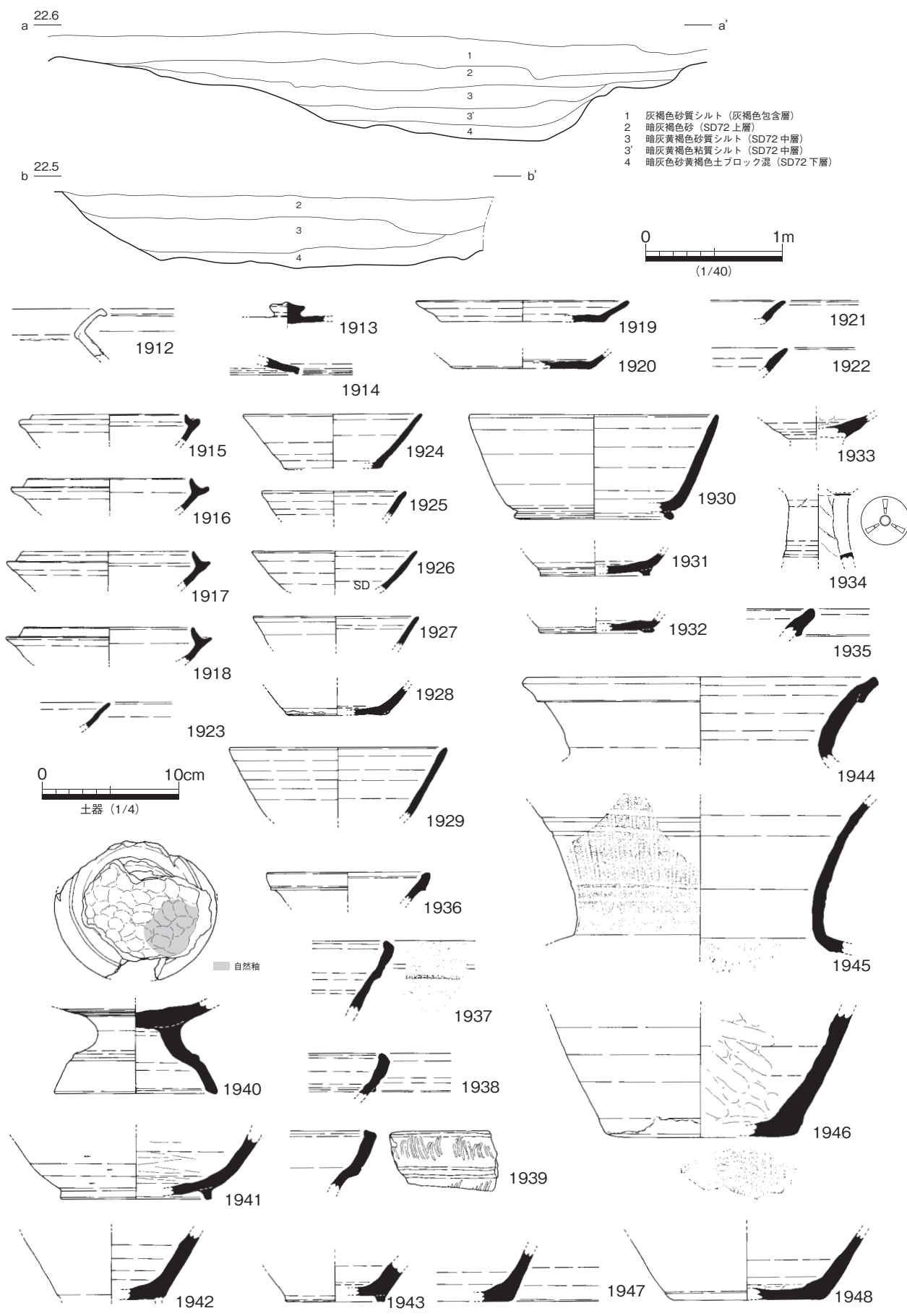


図 264 SD72 断面・出土遺物 (1)

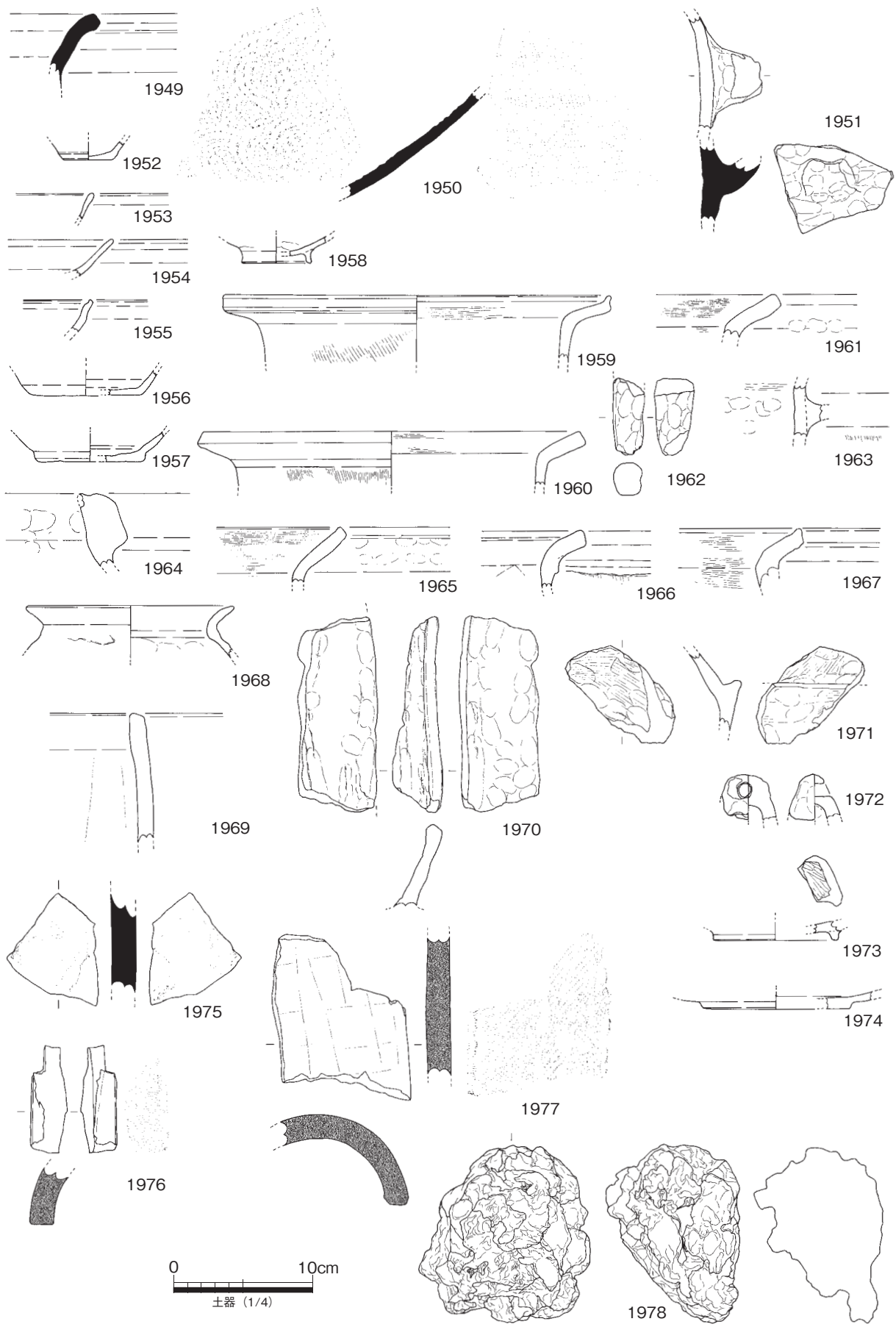


图 265 SD72 出土遺物 (2)

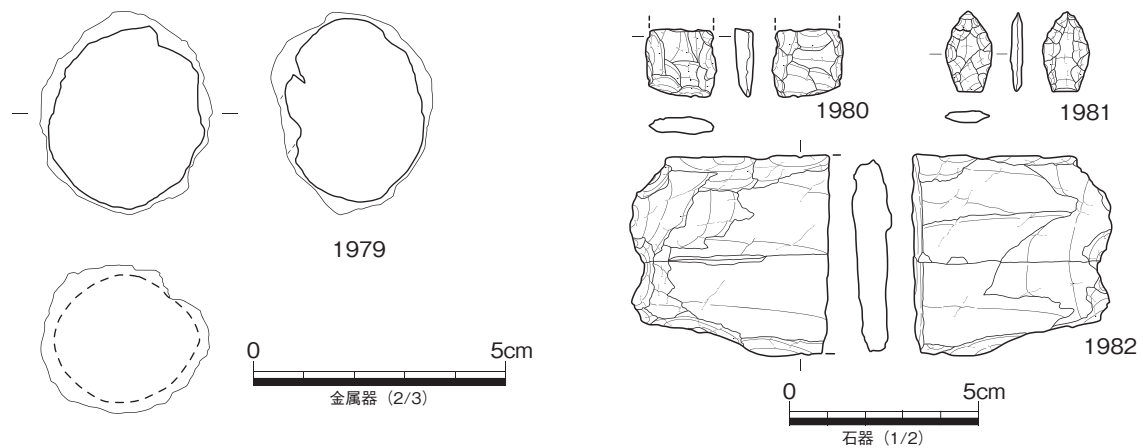


図 266 SD72 出土遺物 (3)

方向と位置から SD70 と同一の溝状遺構と考えられる。幅 1.0 ～ 3.4m、深さ 0.5m、検出長は 11.1m を測る。埋土は 3 層に大別され、上層に暗灰褐色砂、中層に暗灰黄褐色シルト、下層に黄褐色ブロックを含んだ暗灰色砂が堆積している。下層は人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、金属器、石器が出土している。1912 は混入した弥生土器甕である。1913・1914 は須恵器蓋で、8 世紀代に位置付けられる。1915～1918 は内面に返りを有する須恵器杯である。いずれも返りの立ち上がりが短く、7 世紀前半に位置付けられる。1919～1922 は須恵器皿である。1919 はその形態から 9～10 世紀代のものと考えられる。1923～1929 は須恵器杯である。1924 や 1928 は火櫓の痕跡があり、10 世紀代のものと考えられる。1930～1932 は須恵器椀で、1930 は 8 世紀代に位置付けられる。1933・1934 は須恵器高杯で、1934 は長方形の透かし孔を上下 2 段に配する長脚の脚部である。7 世紀代のものと見られる。1935～1939・1944～1951 は須恵器甕である。1937～1939 は内湾する口縁部のもので、1939 は外面に 6 本 1 単位の沈線文を施している。7 世紀代に位置付けられる。1946 は底部外面に刳圧痕 2 個が残る。1951 は把手を付した胴部破片であり、甌の可能性もある。1940～1943 は須恵器壺である。1940 は台付壺の脚台で、7 世紀代に位置付けられる。1952～1957 は土師器杯である。1955 は口縁部内面に沈線 1 条を回らし、内面に赤彩の痕跡が残る。7～8 世紀代に位置付けられる。1957 は円盤状高台のもので、10 世紀代のものと考えられる。1958 は土師器椀で、高台の形状から 9～10 世紀代に位置付けられる。1959～1961・1964

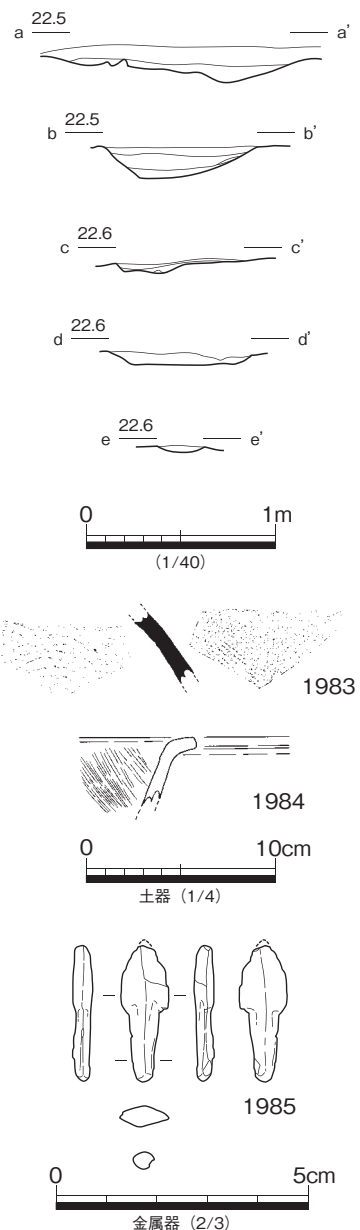


図 267 SD76 断面・出土遺物

～1968は土師器甕である。1959は口縁端部を小さく摘み上げており、10世紀代に位置付けられる。1962は土師器足釜の脚、1963は土師器羽釜で、鏝部下にススが付着している。1969～1971は土師器竈である。1972は土師器蜻壺の釣り手である。1973は内黒の黒色土器椀で、9～10世紀代のものと考えられる。1974は灰釉陶器の杯で、9世紀代に位置付けられる。1975～1977は瓦である。1975は須恵質焼成の平瓦、1976・1977は瓦質焼成の丸瓦である。1978は被熱粘土小塊である。(宮崎)

1980・1981はサヌカイト製打製石鎌である。1980は平基式の未製品、1981は凸基式の小型品で基部は折損する。1982は結晶片岩製打製石庖丁である。使用痕は明瞭ではないが、側縁に抉りを施す。(森下)

遺物の年代は9～10世紀代のものが目立つが、7世紀代のものも見られる。層位は年代を反映しておらず、時期幅をもった遺物が混在している。土師器足釜の存在等から、11～12世紀代に埋没した溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD76 (図 267)

D区の北東隅付近で検出した、N 30° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形～逆台形を呈している。周辺には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。遺構の重なり具合から、SD83・93より新しいと判断される。幅0.3～0.9m、深さ0.1～0.2m、検出長は10.5mを測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、金属器が出土している。1983の須恵器甕と1984の土師器土鍋を図化した。遺物量は少なく年代比定は困難である。(宮崎)

1985は連鑄式銅鎌である。ほぼ完形品で刃部の厚みもあるが、全体的に短小である。仕上げの研ぎは丁寧で、茎部から刃部まで鑄が通り、茎部側縁のバリも研ぎ落とされる。特に茎部下端は側縁に明瞭な面を形成するまで仕上げが進む。関は僅かに研ぎを施すだけの平関である。右関部には、2回に分けて関研ぎを施した痕跡が見られ、鋭い先端部を有する研ぎ具で仕上げを行ったことが分かる。茎下端部は丸みを帯びる。弥生時代後期に所属する遺物である。周辺遺構から混入したもの考える。(森下)

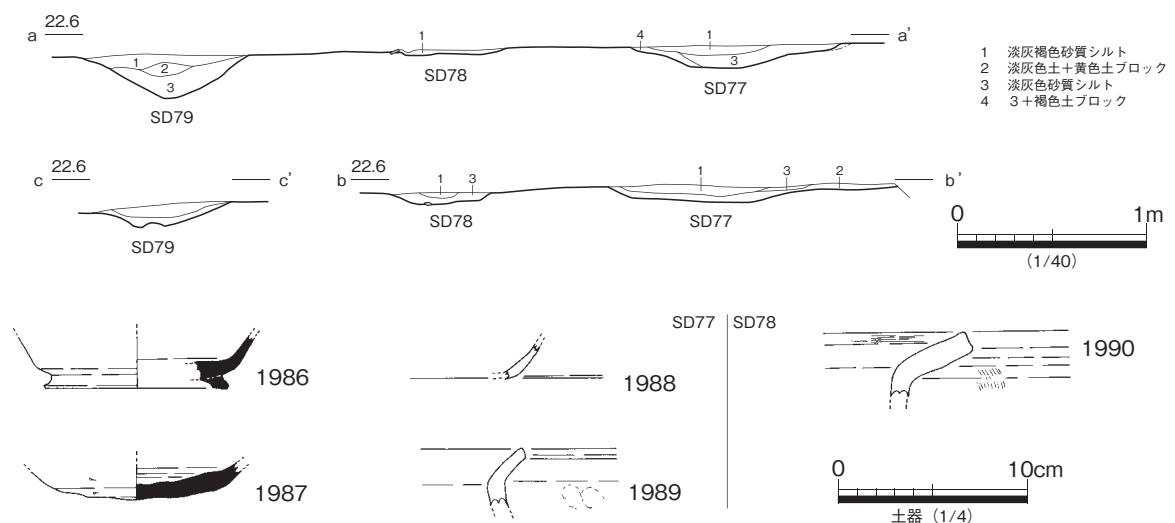


図 268 SD77・78・79 断面・出土遺物

1984の形態から、中世に属する溝状遺構と推定される。(宮崎)

SD77 (図 268)

D区の中央部で検出した、N 30° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。周辺には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。位置と方向から、SD60に繋がるものと見られる。幅0.8～1.8m、深さ0.1m、SD60を含めた総検出長は12.3mを測る。遺構の重なり具合から、SD80・83・92より新しいと判断される。埋土は淡灰色系砂質土を主としている。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。1986は須恵器椀で、7～8世紀代に位置付けられる。1987は須恵器の壺か甕の底部である。1988は土師器杯で、外面に赤彩の痕跡が残る。1989は土師器甕である。

遺物量が少なく、時期比定は困難だが、埋土の特徴等と合わせて、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD78 (図 268)

D区の中央部で検出した、N 30° Wの方向を有する溝状遺構である。周辺には同じ方向を有する溝状遺構が存在している断面形態は浅い皿形を呈している。幅0.5～0.7m、深さ0.1m、検出長は5.3mを測る。遺構の重なり具合から、SD80より新しいと判断される。埋土は淡灰色系砂質土を主としている。遺物は須恵器、土師器、弥生土器がわずかに出土しているが、時期を判断できるものがほとんどなく、時期比定は困難である。埋土の特徴等から、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD79 (図 268)

D区の中央部で検出した、N 31° Wの方向を有する溝状遺構である。周辺には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。断面形態は逆三角形を呈している。幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2m、検出長は

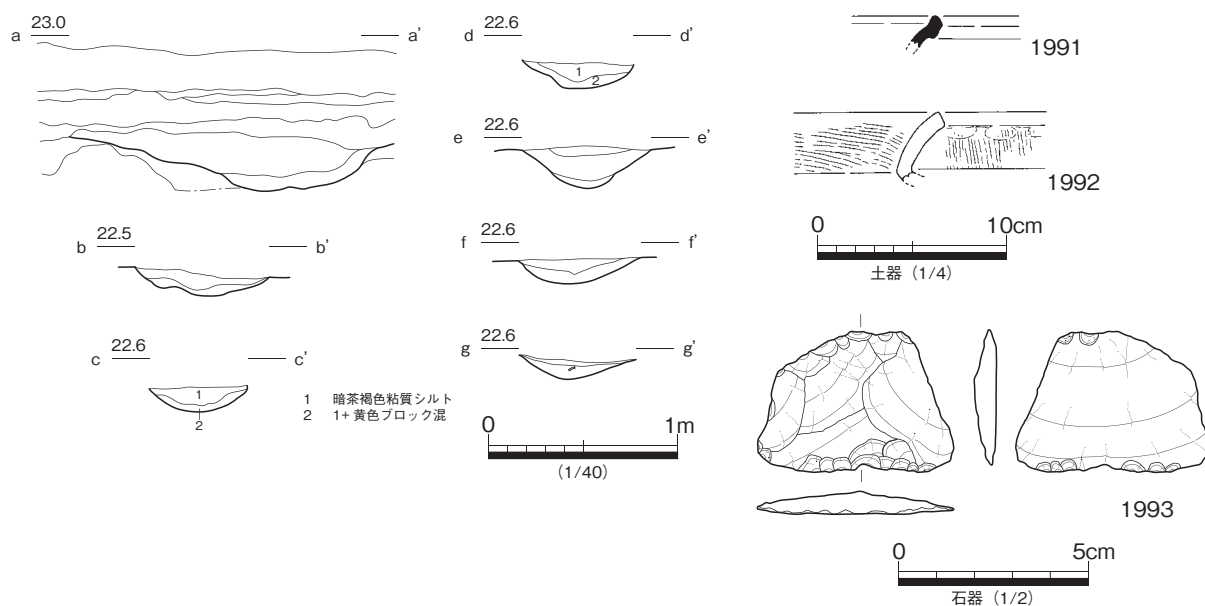


図 269 SD80・68 断面・出土遺物

10.8mを測る。遺構の重なり具合から、SD80より新しいと判断される。埋土は淡灰色系砂質土を主としている。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、黒色土器が出土している。1990は土師器甕で、12世紀代のものと考えられる。時期を判断できるものがほとんどなく、時期比定は困難であるが、土器の年代観や埋土の特徴等から、中世に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD80 (図 269)

D区の中央部を東西に横切るように検出した溝状遺構である。やや蛇行しており、緩やかに弧を描くSD83とはほぼ並行している。位置と方向から、西は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・X区)の溝状遺構に、東はB区のSD19か20のいずれかに繋がるものと見られる。D区東壁付近でSD83から分岐している可能性がある。断面形態は浅いU字形を呈している。幅0.5～1.2m、深さ0.1～0.2m、検出長は23.7mを測る。遺構の重なり具合から、SD77～79・83・84・92より古いと判断される。埋土は2層に分かれ、上層は暗茶褐色粘質シルトで、下層はそこに黄色ブロックが混じる。下層は人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は須恵器・土師器・弥生土器・石器が出土している。1991は須恵器甕、1992は土師器甕である。7世紀代のものと考えられる。(宮崎)

1993はサヌカイト製スクレイパーである。両極打撃により剥離した剥片の下端に主に片側から調整加工を施す。上端はエッジに潰れが残る。素材剥片剥離時の打面調整としての敲打痕跡である。(森下)

出土遺物は少量かつ破片であり、時期比定は困難であるが、図化した遺物の年代と埋土の特徴から7世紀代の溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD83 (図 270・271)

D区の中央部を東西に横切るように検出した溝状遺構である。緩やかに弧を描くものでSD80とはほぼ並行している。位置と方向から、西はSD67以前の調査(旧練兵場遺跡報告書I・X区)の溝状遺構に、東はB区SD18に繋がるものと見られる。D区東壁付近でSD80から分岐している可能性がある。断面形態は浅い皿形を呈している。幅1.3～2.3m、深さ0.3m、検出長は31.2mを測る。遺構の重なり具合から、SD92より新しくSD77・79・80・84より古いと判断される。埋土は3層に大別され、上層は暗茶褐色粘質シルト、中層は淡灰色細砂、下層は灰色砂礫となるが、部分的に上層のみしか堆積していない箇所も見られる。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。1994は混入した弥生土器器台である。1995～2000は須恵器杯身である。1995・1996は内面に返りをもつ杯身で、立ち上がりは短く、6世紀末～7世紀初頭に位置付けられる。2000は内面に当て具痕が残る。2002～2004は須恵器杯蓋である。2001は内面に返りを有するもので、7世紀前半に位置付けられる。2005～2008は須恵器高杯である。2007・2008は長方形の透かし孔を施した長脚のもので、7世紀前半に位置付けられる。2009・2010は須恵器壺、2011～2025は須恵器甕である。2015・2019～2021は長い口頸部で外面に沈線を回らすもので、7世紀前半頃に位置付けられる。2026は土師器甕である。(宮崎)

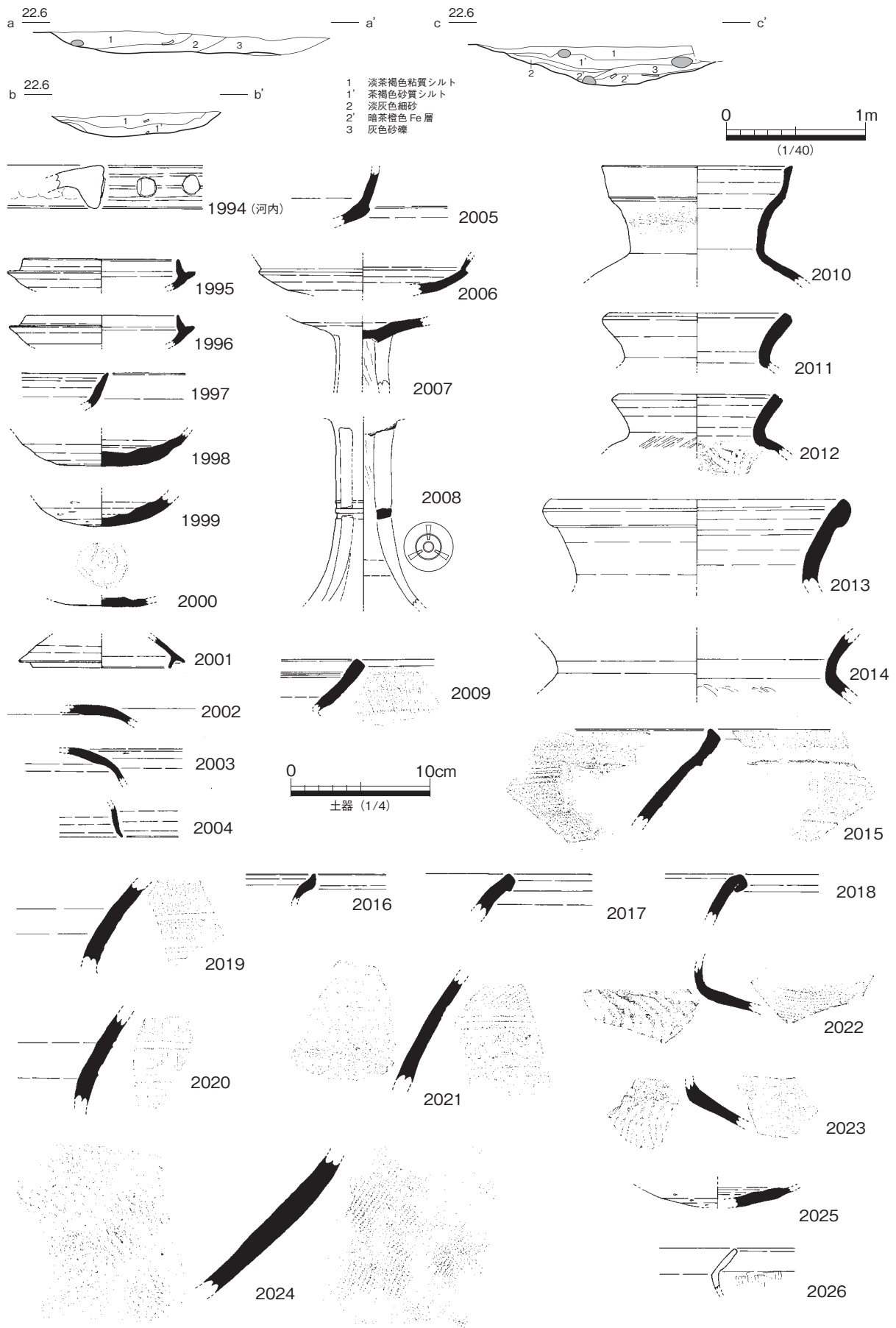


図 270 SD83・74 断面・出土遺物 (1)

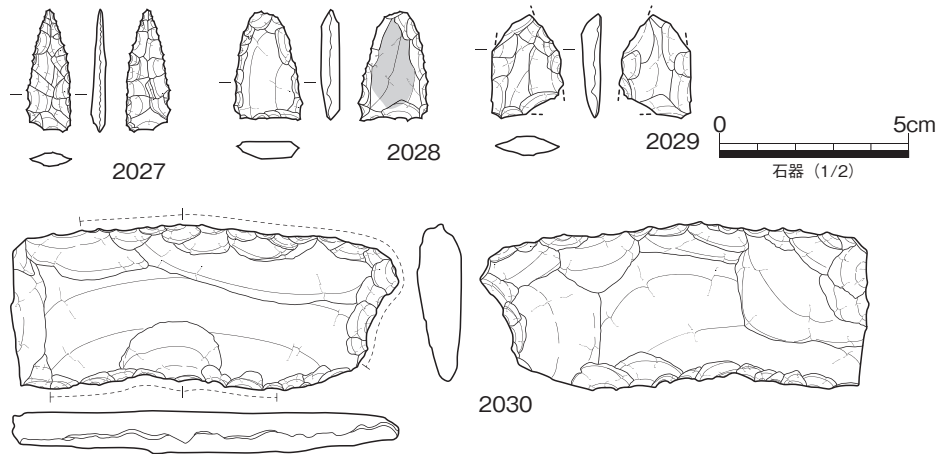


図 271 SD83 出土遺物 (2)

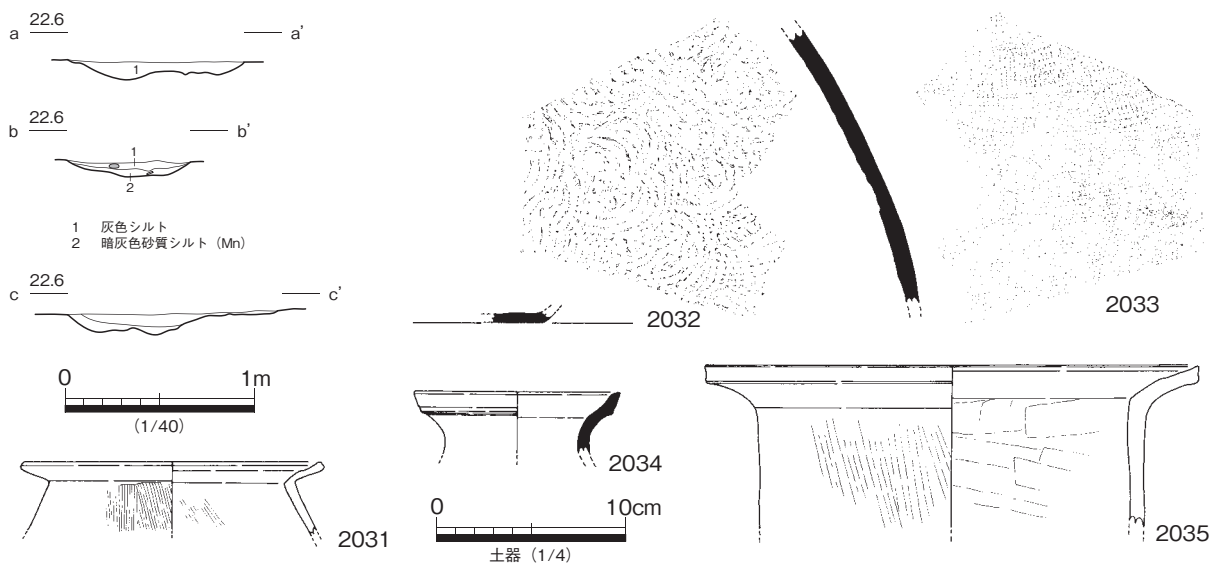


図 272 SD84 断面・出土遺物



図 273 SD85 断面・出土遺物

2027～2029はサヌカイト製打製石鎌である。2027は細身で側縁に鋸歯状の細かな加工を施すものである。素材面が僅かに残り、打製石庖丁に通有の磨滅が見られる。2028は平基式の未製品である。片側の素材面が全体的に磨滅しており、打製石庖丁あるいは打製石斧を転用したものと推定される。2029は基部側が折損、先端側が欠損する。左右が非対称形であり、未製品と判断できる。2030はサヌカイト製打製石庖丁である。上下縁が潰れており、楔状石核へ転用されたものである。刃部付近を中心に磨滅が見られる。(森下)

須恵器の年代観から、7世紀前半に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD84 (図 272)

D区の中央部で検出した、N 28° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。周辺には同じ方向を有する溝状遺構が存在している。幅0.4～1.0m、深さ0.1m、途中攪乱により途切れるが、総検出長は12.7mを測る。遺構の重なり具合から、SD80・83より新しいと判断される。埋土は灰色系シルトを主としている。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2031は混入した弥生土器甕である。2032は須恵器杯、2033は須恵器甕、2034は須恵器甕か壺の口縁部である。2035は土師器甕で、形態から11～12世紀代のものと見られる。

遺物量が少なく、時期比定は困難だが、2035の年代観や埋土の特徴等と合わせて、中世に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD85 (図 273)

D区の中央部やや南寄り付近で検出した、N 34° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態はU字形を呈している。攪乱によって北端を削平されているが、位置と方向から、北はSD127に、南はSD53に繋がる可能性がある。幅0.5m、深さ0.2m、検出長は3.2mを測る。平面形態が長楕円形の土坑状を呈すること等から、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2036は須恵器蓋で、端部を短く下方へ折り曲げている。2037は須恵器杯で端部がわずかに外反気味である。2038は須恵器甕である。これらの土器はその形態から8世紀代のものと考えられる。

遺物量が少なく、時期比定は困難だが、土器の年代観から8世紀代に設置・埋没した溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD92 (図 274)

D区の東壁中央部付近から北西隅に向かって直線的に検出した、N 89° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は逆台形～逆U字形を呈している。遺構の重なり具合から、SD80・83、SX41より古いと判断される。幅0.6～1.0m、深さ0.2～0.3m、検出長は18.2mを測る。埋土は2～3層である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。2039～2041は須恵器杯である。内面に返りを有する2039は、6世紀末～7世紀初頭に位置付けられる。2040は返りをもたない杯で、7世紀代

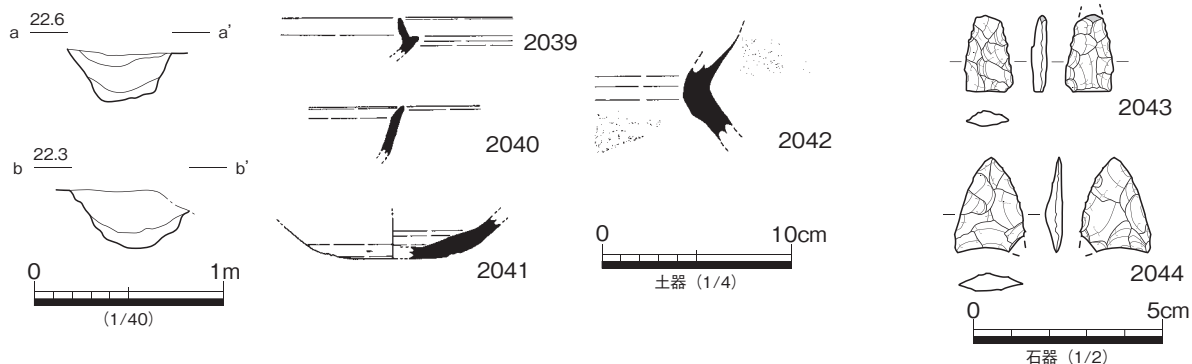


図 274 SD92 断面・出土遺物

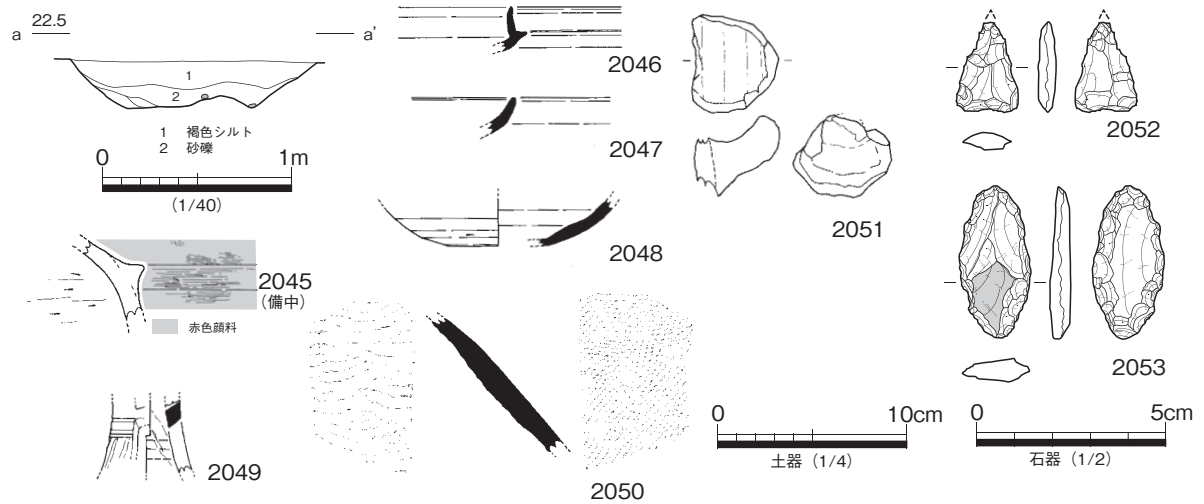


図 275 SD93 断面・出土遺物

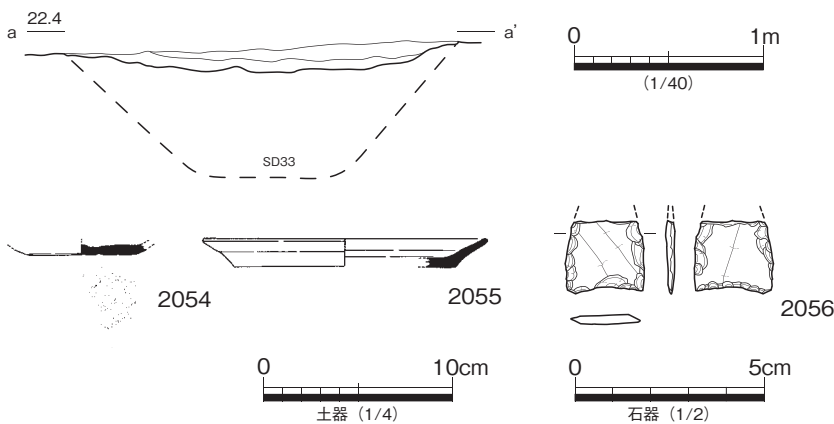
のものと考えられる。(宮崎)

2043・2044 はサヌカイト製打製石鏃である。2043 は白色に風化した縄文期の混在品である。2044 は薄身の平基式鏃である。調整加工は粗雑で、完成品かどうか疑わしい。(森下)

遺物量が少なく時期比定は困難であるが、6世紀末～7世紀代に設置・埋没した溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD93 (図 275)

D区の北東隅付近で検出した、N 89° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態は逆台形を基本としており、一部W字形を呈している。位置と方向や規模等から、SD128 に繋がる可能性もある。遺構の重なり具合から、SD44・72・76 より古いと判断される。幅 0.9～1.5m、深さ 0.2m、検出長は 8.2m を測る。



遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。2045 は混入した弥生土器の装飾高杯である。外面に赤彩の痕跡が残る、吉備系の搬入品と思われる。2046・2047 は須恵器杯である。2046 は内面に返りをもつもので、6世紀後半に位置付けられる。2048 は須恵器壺、2049 は須恵器高杯である。長方形透かし孔を 2

図 276 SD99 断面・出土遺物

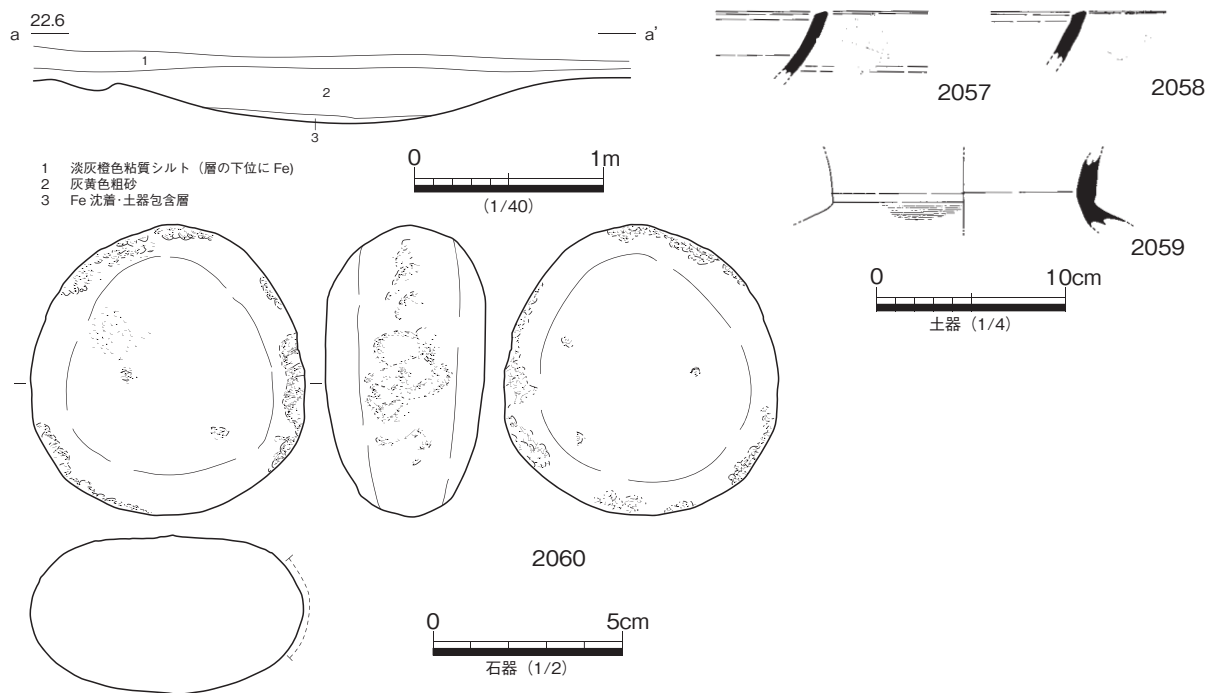


図 277 SD101 断面・出土遺物

方向、2段に配する長脚のものである。2050 は須恵器甕である。2051 は土師器の把手である。(宮崎)

2052・2053 はサヌカイト製打製石鏃である。2052 は平基式。2053 は凸基式の未製品である。2053 は素材面に打製石庖丁特有の顕著な磨滅が残る。(森下)

遺物量が少ないものの、6世紀後半～7世紀に設置・埋没した溝状遺構と思われる。(宮崎)

SD99 (図 276)

E区中央部を東西に弧を描きながら横切るように検出した溝状遺構である。先に報告したSD33の上層部分に当るが、調査区・時期が異なるため、別の遺構番号を付したものである。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器がごく少量、出土している。図化できたものも少なく、2054 は須恵器杯、2055 は須恵器皿である。2055 はその形態から10世紀代のものと考えられる。(宮崎)

2056 は薄身のサヌカイト製打製石鏃である。先端部は折損する。(森下)

遺物量が少なく時期比定は困難であるが、SD33の年代からSD99は13世紀代に埋没したと捉えられる。(宮崎)

SD101 (図 277)

E区東壁中央部付近からB区北半部西壁付近にかけて検出した、N 60° Eの方向を有する溝状遺構である。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合から、SD24・17より新しいと判断される。幅は測定できなかったが、深さ0.3m、検出長は8.8mを測る。埋土は灰黄色粗砂が主で、底面にわずか

に鉄分の沈着層が見られる。SD17の埋没後の凹みを埋めた砂の堆積がSD101に当る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。2057～2059は須恵器甕である。2057・2058は口縁部外面に櫛描き波状文を施しており、7世紀代に位置付けられる。(宮崎)

2060は砂岩製叩石である。線状敲打痕が腹部ではなく、側縁部に顕著に見られる。(森下)

遺物量が少なく時期比定は困難であるが、13世紀代に埋没したSD17より後出することから、中世に埋没した溝状遺構と思われる。(宮崎)

SD108 (図 278)

D区の中央部西壁前のSD67の下位で検出した緩やかに弧を描く溝状遺構である。断面形態は不整なW字形を呈している。位置と方向からSD67の下部の掘り残しに相当し、SD83に繋がるものと見られる。幅0.6～0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は暗灰褐色系粘質土である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。2061の須恵器甕、2062の須恵器高杯を図化したが、年代の判明する遺物は少ない。(宮崎)

2063は花崗岩製の全面研磨の磨石である。小口部も一様に研磨を施す。(森下)

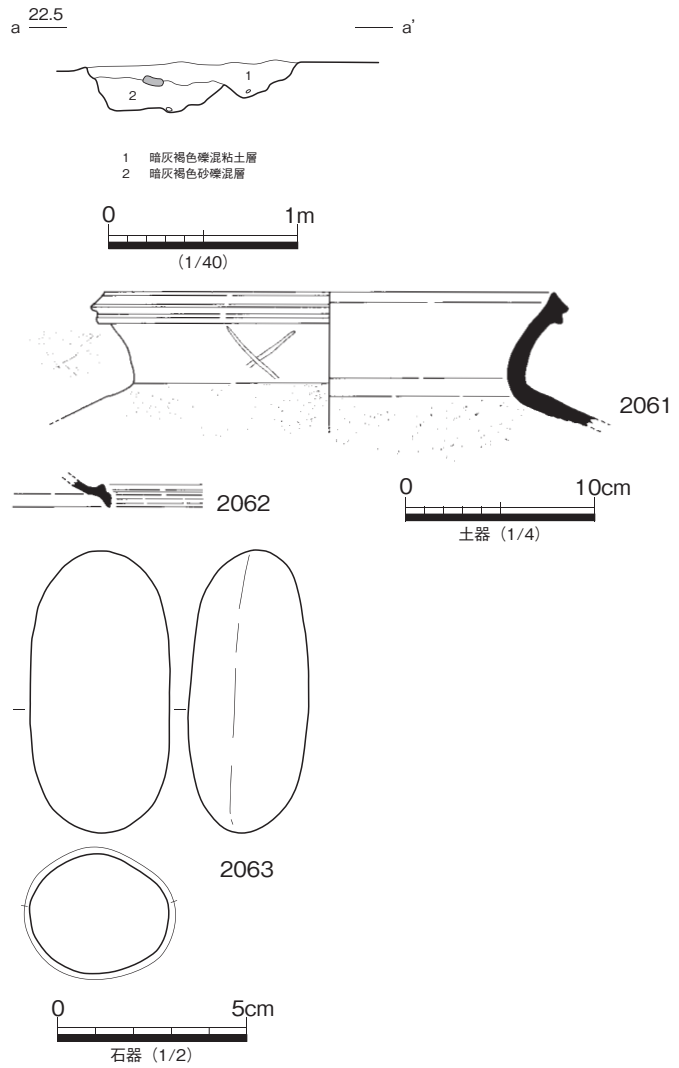


図 278 SD108 断面・出土遺物

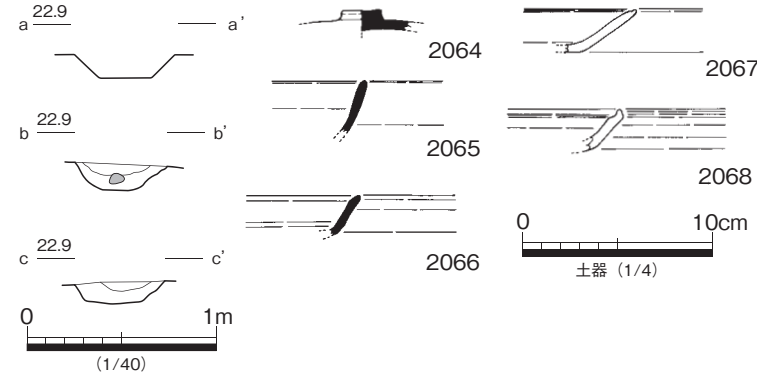


図 279 SD113 断面・出土遺物

時期比定は困難であるが、SD67・83の年代観から7世紀代に機能していた溝状遺構と見られる。(宮崎)

SD113 (図 279)

F区の北西隅付近で検出した、N 60° Eの方向を有する溝

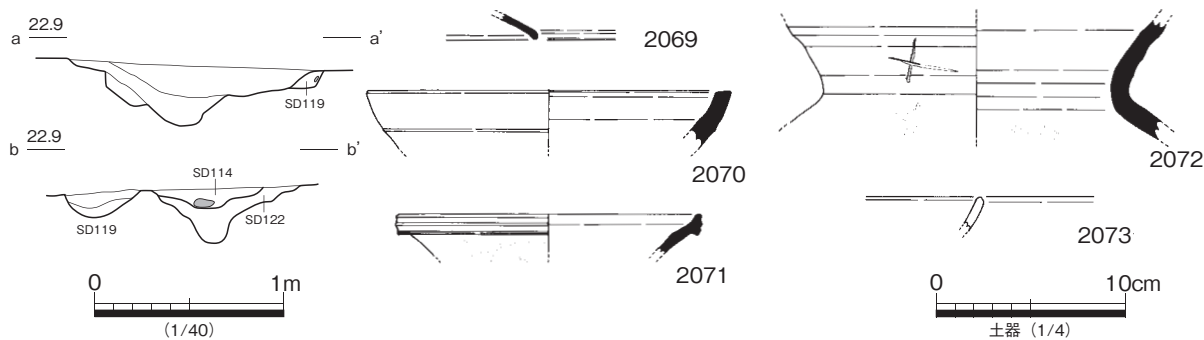


図 280 SD114 断面・出土遺物

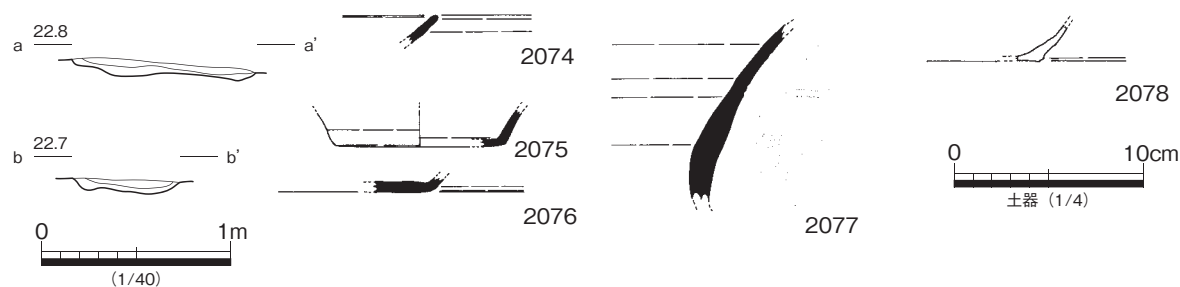


図 281 SD115 断面・出土遺物

状遺構である。位置と方向から、西は以前の調査（旧練兵場遺跡報告書 I・Y 区）の溝状遺構に繋がるものと見られる。SD114 との交差部分付近で SD122 と合流して緩く屈曲して方向を変え、SD114・119 とほぼ並行する。断面形態は逆台形を呈している。幅 0.4～0.5m、深さ 0.1m、過去の調査部分も含めた総検出長は 13.0m を測る。遺構の重なり具合から、SB39・SD114・119 より古いと判断される。埋土は 2 層である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2064 は扁平な摘みを付した須恵器蓋である。2065 は須恵器杯、2066 は須恵器皿である。2067・2068 は土師器杯で、ともに口縁端部内面に凹線 1 条をもち、内外面に赤彩の痕跡が残る。

遺物量は少ないが、土器の年代観から 7～8 世紀代の溝状遺構と思われる。(宮崎)

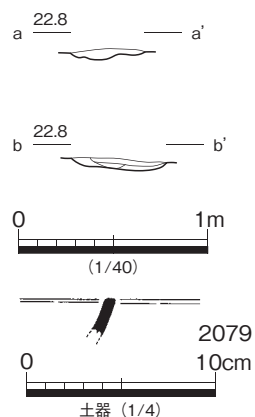


図 282 SD116 断面・出土遺物

SD114 (図 280)

F 区の北西隅から中央部にかけて検出した、N 75°W の方向を有する溝状遺構である。位置と方向から、西は以前の調査（旧練兵場遺跡報告書 I・Y 区）の溝状遺構に繋がるものと見られる。断面形態は不整な逆三角形～浅い皿形を呈している。幅 0.3～0.8m、深さ 0.3m、過去の調査部分も含めた総検出長は 22.8m を測る。遺構の重なり具合から、SB39 より古く SD113・119・122 より新しいと判断される。埋土は単層である。SD119 は遺物の出土はなかったが SD114 と同一の方向をもち、SD114 に先行する溝状遺構である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2069 は須恵器蓋、2070～2072 は須恵器甕である。

2073 は土師器杯である。いずれも 7～8 世紀代のものと思われる。

SD114 の下位には先行する溝状遺構 SD122 が存在しており、そこからの遺物の混入の可能性は高いが、7～8 世紀の溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD115 (図 281)

F 区の中央部北壁寄りで検出した、N 42° W の方向を有する溝状遺構である。西方に位置する SD116 とほぼ並行する。断面形態は浅い皿形を呈している。途中を攪乱によって失っているが、幅 0.6～0.8m、深さ 0.1m、総検出長は 9.2m を測る。埋土は 2 層である。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、黒色土器が出土している。2074～2076 は須恵器の杯である。2077 は須恵器甕で口頸部外面に沈線 3 条を回らし、その間に櫛描き波状文を施す。7 世紀代に位置付けられる。2078 は土師器杯で、形態から中世に属するものと考えられる。

図化できなかったが、内黒、両黒の黒色土器碗の破片も出土しており、遺物の年代は幅をもっている。時期比定は困難であるが、9～10 世紀代に埋没した溝状遺構と判断される。(宮崎)

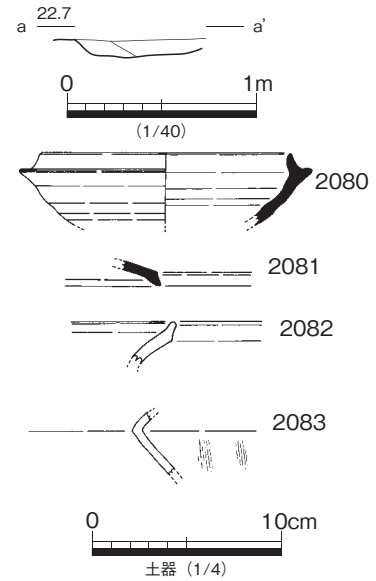


図 283 SD117 断面・出土遺物

SD116 (図 282)

F 区の中央部北壁寄りで検出した、N 37° W の方向を有する溝状遺構である。東方に位置する SD115 とほぼ並行する。断面形態は浅い皿形を呈している。両端を攪乱によって消失している。幅 0.4～0.5m、深さ 0.1m、検出長は 3.5m を測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器がごく少量、出土している。2079 は須恵器鉢の口縁部としたが、甕の可能性もある。

時期比定は困難であるが、古代から中世にかけての時期に属する溝状遺構と考えられる。(宮崎)

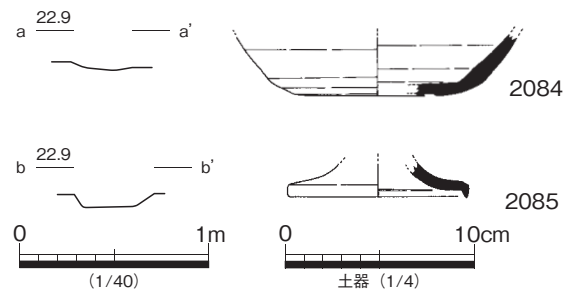


図 284 SD122 断面・出土遺物

SD117 (図 283)

F 区の中央部南壁の前で検出した、N 75° W の方向を有する溝状遺構である。東端を攪乱によって消失している。断面形態は浅い皿形を呈している。遺構の重なり具合から SB44 より古いと判断される。幅 0.3～0.9m、深さ 0.1m、検出長は 5.1m を測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2080 は内面に返りをもつ須恵器杯身である。7 世紀前半に位置付けられる。2081 は須恵器蓋で、口縁端部を短く屈曲させた 8 世紀のものと思われる。2082 は土師器甕で、外面にススが附着している。2083 は混入した弥生土器甕である。

遺物の量は少ないが、8 世紀代の溝状遺構と思われる。(宮崎)

SD122 (図 284)

F区の北西隅付近でSD114・119 とほぼ並行して検出した溝状遺構である。緩やかに蛇行しているが、概ねN 73° Wの方向を有している。位置と方向から、西は以前の調査（旧練兵場遺跡報告書 I・Y区）の溝状遺構に繋がるものと見られる。途中でSD113と合流している。断面形態は浅い逆台形～U字形を呈している。幅0.3～0.7m、深さ0.1m、過去の調査部分も含めた総検出長は19.8mを測る。遺構の重なり具合から、SD113と同時期でSD114・119より古いと判断される。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が少量出土している。2084は須恵器鉢の底部としたが、他器種の可能性もある。2085は須恵器高杯で、短脚の脚部である。

遺物の量は少ないが、遺物の年代観とSD114との先後関係から、7世紀代の溝状遺構と思われる。(宮崎)

SD124 (図 285)

F区中央部南壁前で検出した、N 7° Eの方向を有する溝状遺構である。大半を攪乱によって消失している。断面形態はU字形を呈している。幅0.3～1.1m、深さ0.1m、検出長は8.2mを測る。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2086は須恵器蓋で、口縁端部を短く下方へ折り曲げている。2087は須恵器平瓶の口縁部と判断した。2088～2090は須恵器甕である。2088は内面の見込み部に当て具痕が残る。2091・2092は混入した弥生土器鉢である。

遺物量は少ないが、遺物の年代観から7世紀代の溝状遺構と思われる。

(宮崎)

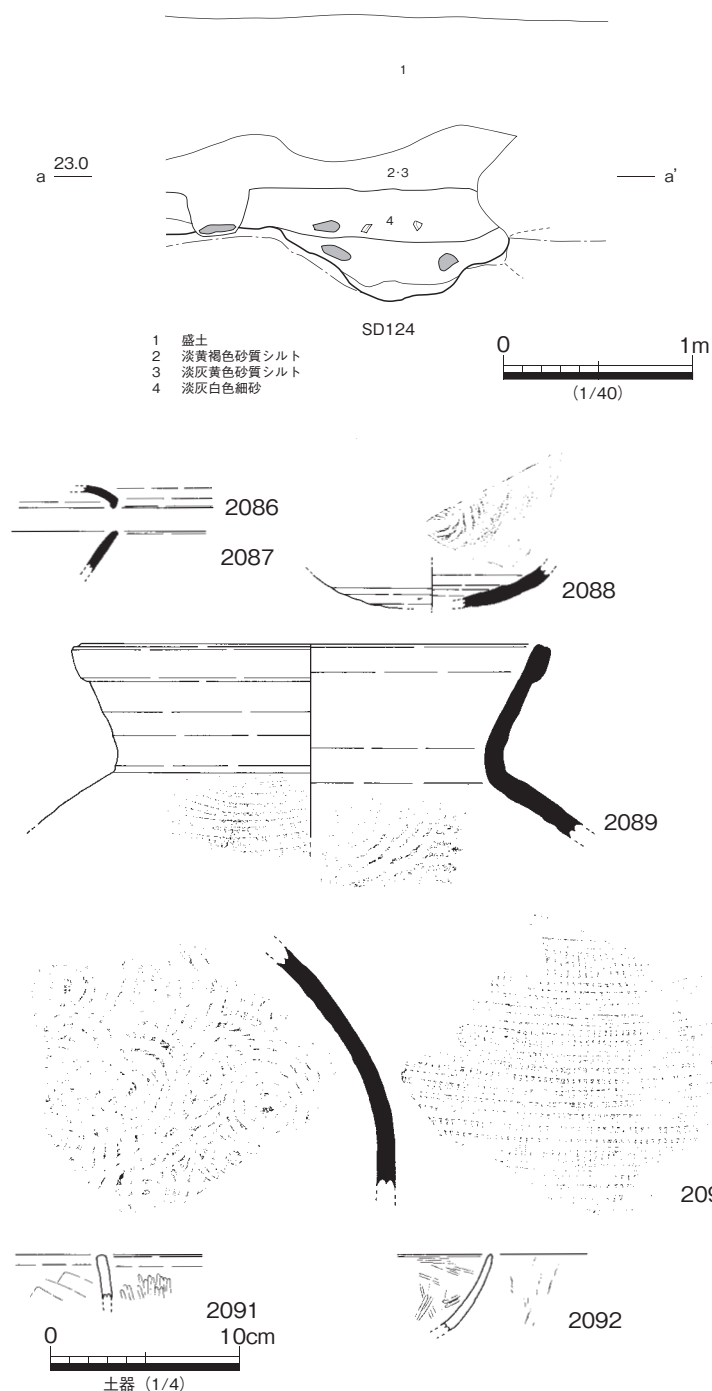


図 285 SD124 断面・出土遺物

SD125 (図 286)

E区の中央部やや南寄りで検出した、N 40° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態はU字形を呈している。遺構の重なり具合から、SD17・24より古いと判断される。幅0.4～0.6m、深さ0.3m、検出長は2.8mを測る。埋土は2層で、上層がラミナを含んだ灰色粘質シルト、下層がブロックを含んだ黄灰色砂質シルトである。

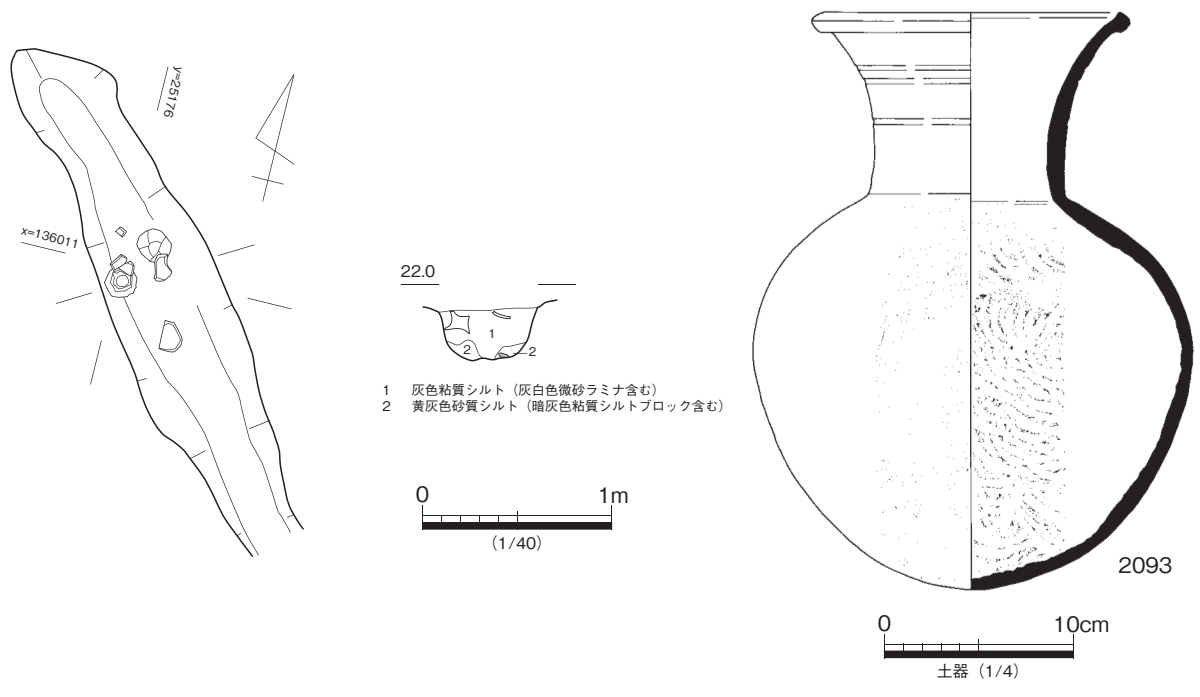


図 286 SD125 平・断面・出土遺物

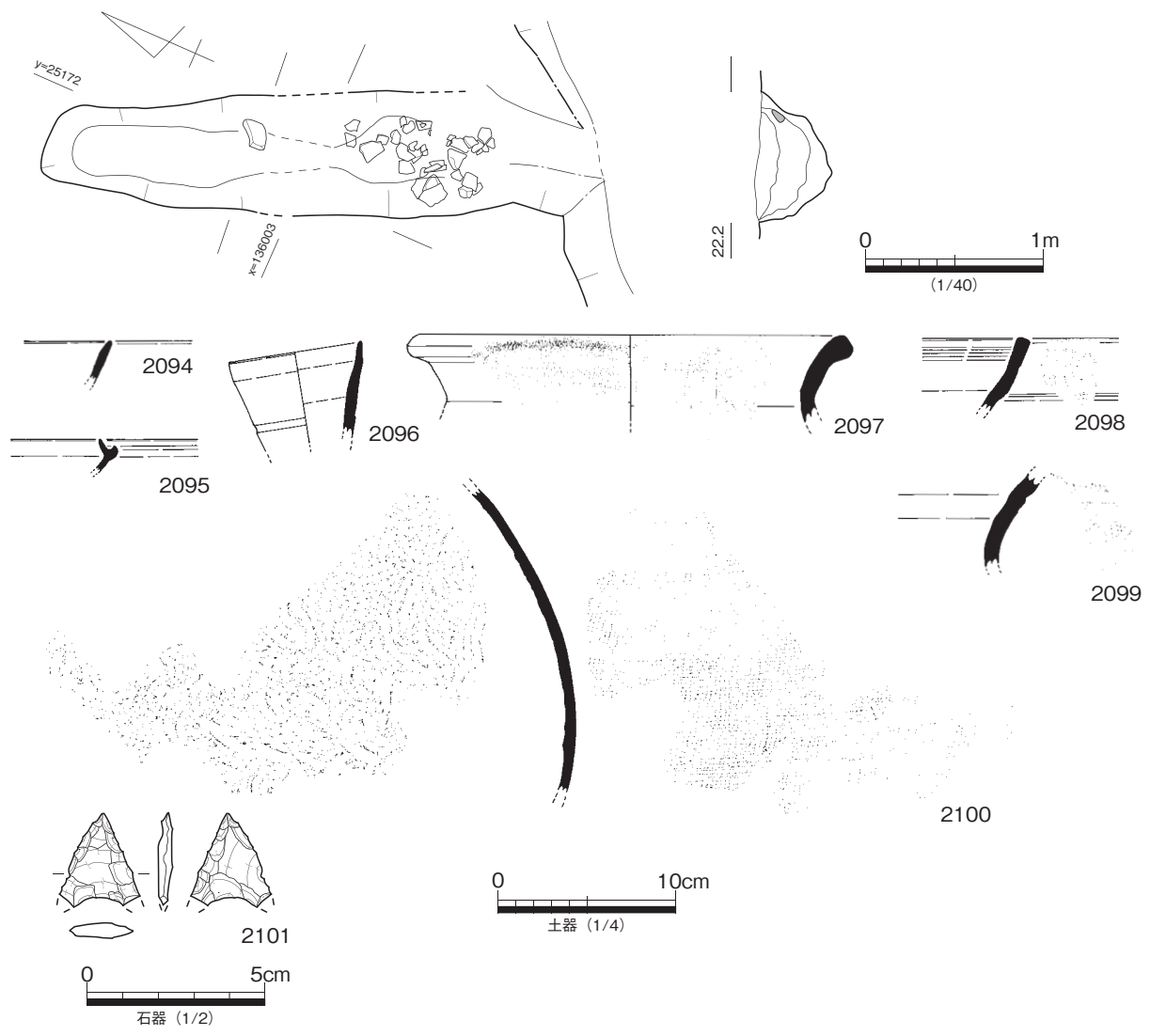


図 287 SD127 平・断面・出土遺物

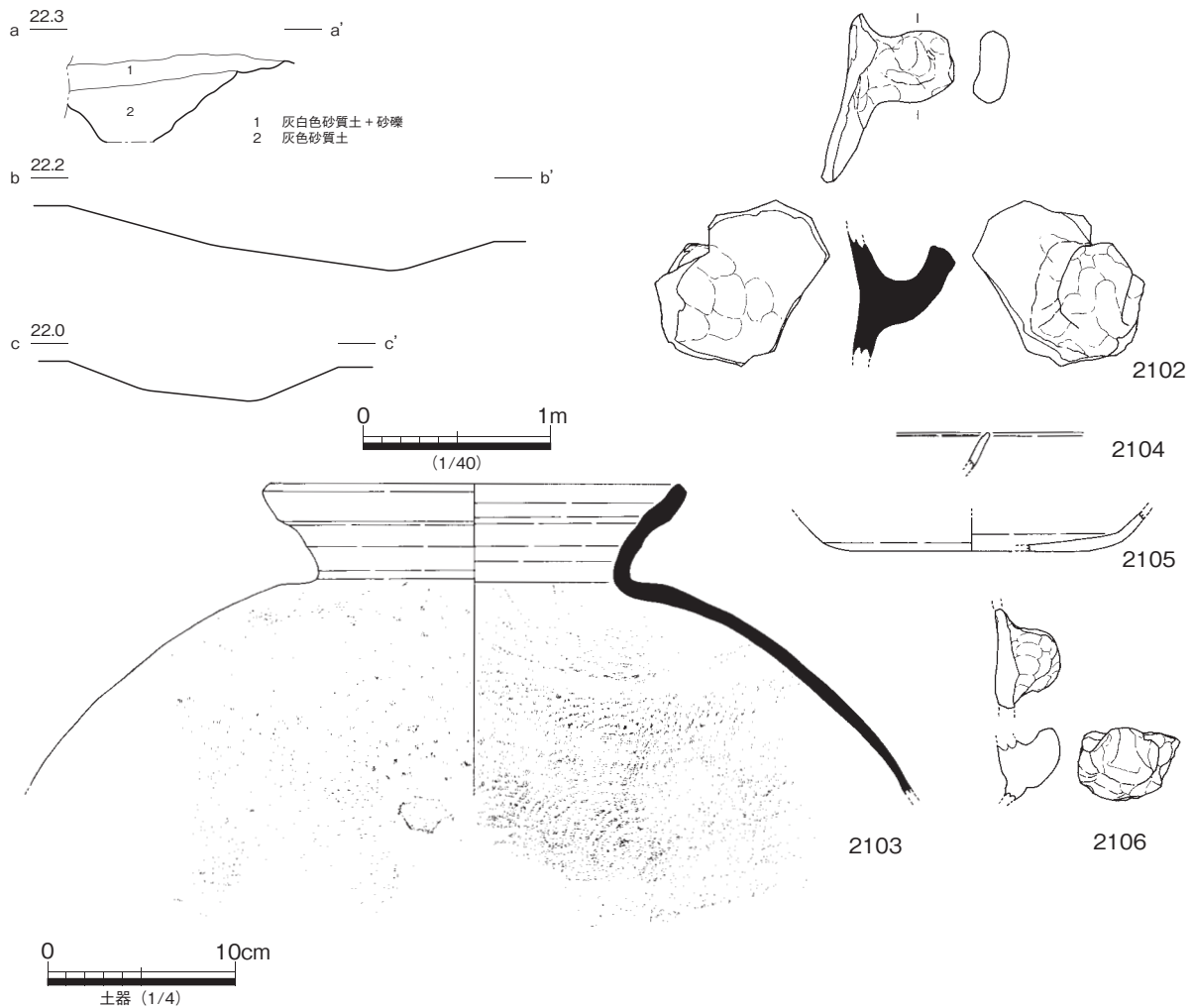


図 288 SD128 断面・出土遺物

遺物は須恵器、土師器、弥生土器が出土している。2093 は須恵器壺である。わずかに偏球形をした胴部に大きく外方へ開く口頸部が付くもので、口頸部には凹線3条を巡らせている。7世紀代に位置付けられる。

遺物量が少なく時期比定は困難であるが、7世紀代のSD24より先行して存在することから、SD125は7世紀代以前の溝状遺構と判断される。(宮崎)

SD127 (図 287)

E区の中央部南壁付近で検出した、N 25° Wの方向を有する溝状遺構である。断面形態はU字形を呈している。攪乱によって南端を削平されているが、位置と方向からSD53・85に繋がる可能性がある。遺構の重なり具合から、SD71・72より古いと判断される。幅0.5～0.7m、深さ0.4m、検出長は3.1mを測る。埋土は3層である。平面形態が長楕円形の土坑状を呈すること等から、この溝状遺構は土坑連結工法によって築かれた可能性がある。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。2094は須恵器杯としたが、平瓶の可能性もある。2095は須恵器杯身で、内面に返りをもつ7世紀前半のものである。2096は須恵器平瓶で、口

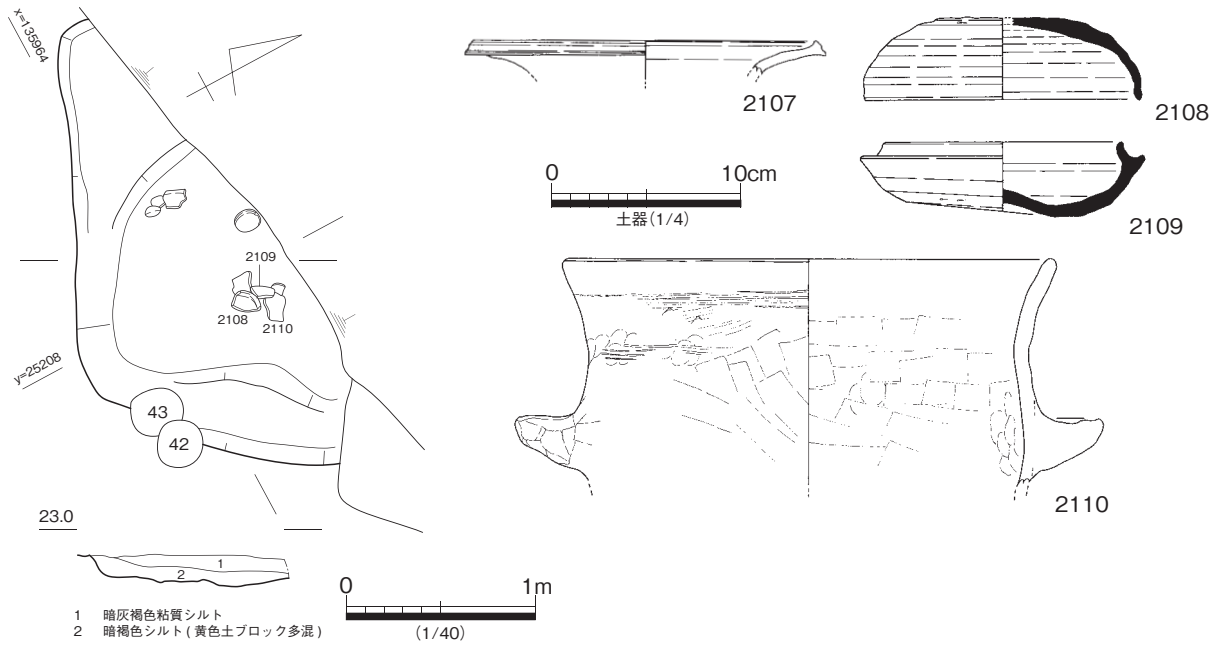


図 289 SX04 平・断面・出土遺物

頸部に凹線 1 条を回らす。2097～2100 は須恵器甕である。2099 は口頸部に沈線を回らし、2 段の刺突文を施している。(宮崎)

2101 は凹基式のサヌカイト製打製石鏃である。逆棘部は左右とも欠損する。先端が鋭く尖る完成品である。(森下)

遺物の年代観から、7 世紀代の溝状遺構と考えられる。(宮崎)

SD128 (図 288)

E 区の南西隅付近で検出した、緩やかに屈曲する溝状遺構である。位置と方向や規模等から、西は以前の調査(旧練兵場遺跡報告書 I・X 区)の溝状遺構に繋がり、東は SD93 に繋がる可能性がある。断面形態は逆台形を呈している。遺構の重なり具合から、SD17・33 より古いと判断される。幅 1.1～2.4m、深さ 0.4m、過去の調査部分も含めた総検出長は 20.6m を測る。埋土は 2 層で、上層に砂礫を含んだ灰白色砂質土、下層に灰色砂質土となっている。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器が出土している。2102・2103 は須恵器甕である。2012 は折り曲げた把手を付している。2104・2105 は土師器皿である。2104 は口縁部内縁に沈線 1 条を回らし、内外面に赤彩の痕跡が残る。2105 は底部外面に赤彩の痕跡が残っているようである。ともに 7～8 世紀代に位置付けられる。

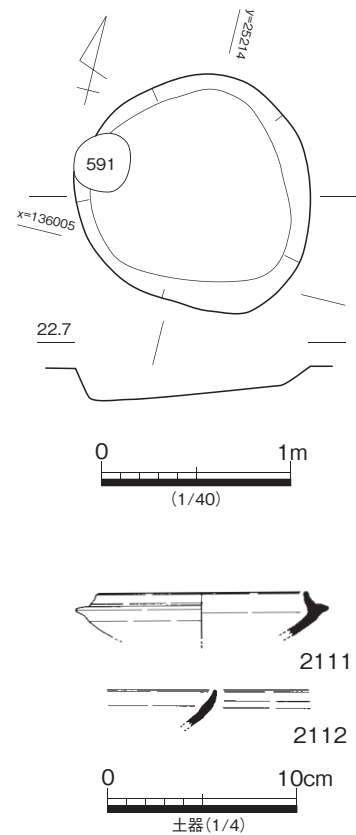


図 290 SX17 平・断面・出土遺物

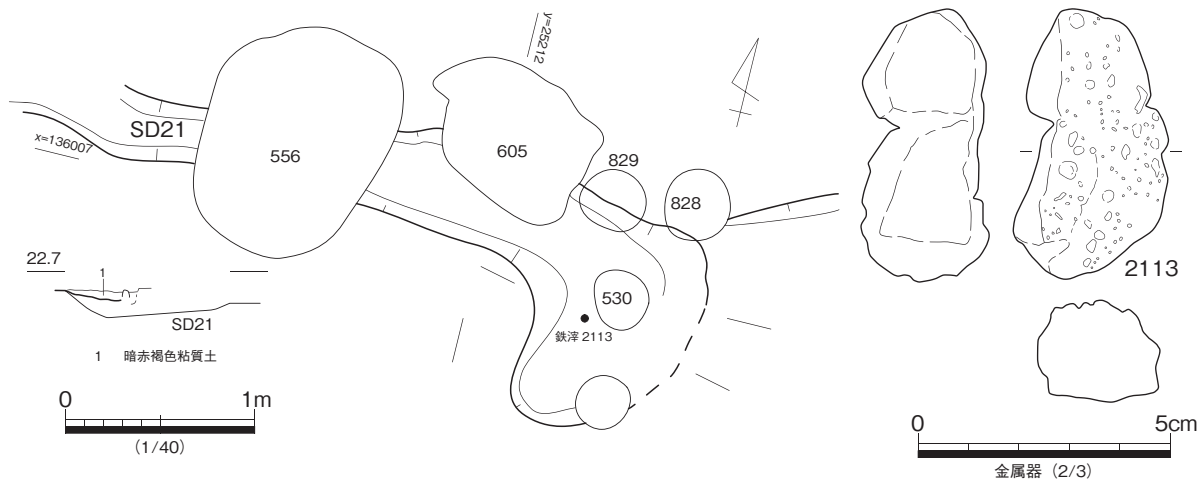


図 291 SX20 平・断面・出土遺物

2106 は土師器の把手である。

遺物の量が少ないが、その年代観から、7～8世紀代に埋没した溝状遺構と判断される。(宮崎)

SX04 (図 289)

A区中央部の南壁付近で検出した遺構である。北3分の2を攪乱により消失するが、平面形態は隅丸方形を呈していたものと見られる。長さ2.5m(東西)、幅1.5m(南北)、深さ18cmを測り、断面形状は浅い逆台形をしている。中央に浅い段落ちを有しており、2層に分かれる埋土の下層には基盤層のブロックが含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。小型の竪穴住居跡の可能性も否定できない。

遺物は須恵器杯蓋(2108)、杯身(2109)、土師器甑(2110)等が中央付近にまとまるように出土した。6世紀後半～7世紀代に位置付けられる。2107は混入した弥生時代終末期の壺である。(宮崎)

SX17 (図 290)

B区南東隅付近の東壁沿いで検出した遺構である。平面形態は楕円形を呈しており、長径1.3m、短径1.2m、深さ18cmを測る。断面形状は歪な逆台形である。

遺物は、須恵器杯身(2111・2112)が出土した。2112は杯蓋の可能性もある。7世紀代に位置付けられる。(宮崎)

SX20 (図 291)

B区南東隅付近の東壁沿いで検出した遺構である。平面形態は基本的に長楕円形を呈しており、長径1.3m、短径0.8m、深さ10cmを測る。断面形状は浅い皿形である。溝状遺構SD21と連続するよう見えるが、SD21の埋没後に東端部の浅い窪みに堆積した長楕円形の遺構と判断できる。

遺物は須恵器、土師器の細片がわずかにあるだけで、時期比定は困難である。鉄滓と見られる金属小塊(2113)が1点出土しているが、SX20で鉄生産を行った痕跡は認められない。(宮崎)

SX39 (図 292・293)

D区南西部付近で検出した遺構である。平面形態は不整な隅丸長方形を呈しており、長径6.3m、短

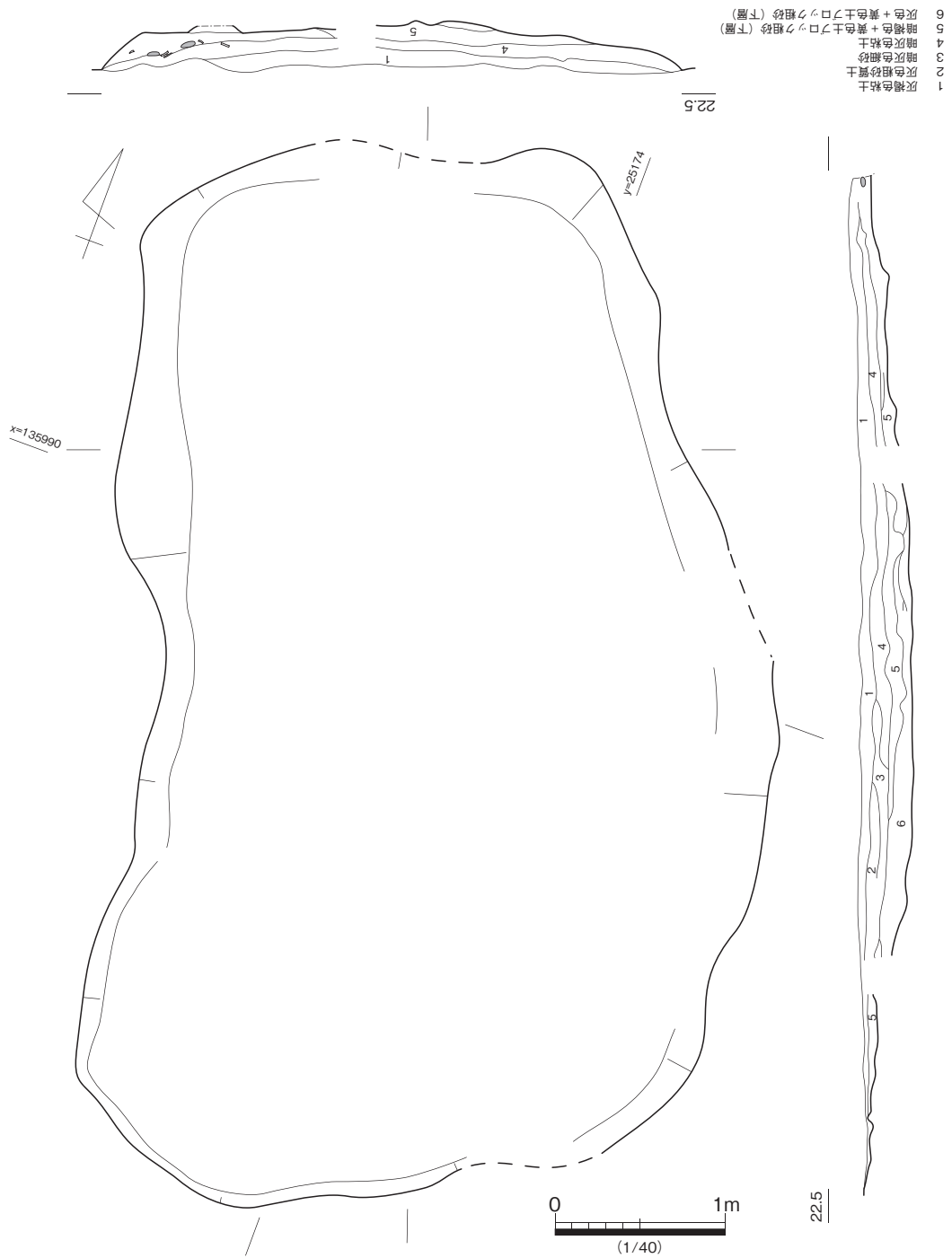


図 292 SX39 平・断面

径 3.6m、深さ 32cm を測る。遺構の大半が攪乱坑の下位で検出しており、本来はもっと深さを有していたものであろうが、現状の断面形態は浅い皿形をしている。埋土はレンズ状に堆積しているが、黄色土ブロックの有無で上下 2 層に大別され、ブロックを含む下層は人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は少量で、須恵器平瓶 (2115)、土師器甕 (2116) に混じって弥生土器壺 (2114) やサヌカイト製スクレイパー (2117)、同楔状石核 (2118)、安山岩製台石 (2119) 等の石器が出土している。2114

は高知県からの搬入品の可能性がある。(宮崎)

2117 は流紋岩の剥片を素材としたスクレイパーである。節理に沿って剥離したやや厚みのある剥片の末端に連続的な加工が見られることからスクレイパーとした。流紋岩製の打製石器は当遺跡では稀である。石質は砥石等と同じく、風化した淡黄色を呈するものを使用する。2118 はサヌカイト製の楔状石核である。図の下縁部に顕著な潰れが残る。素材面に磨滅痕が残る。2119 は黒色頁岩亜円礫を素材とした棒状叩石である。下端の細い小口部と側縁に敲打痕が見られる。側縁の敲打痕は細かいピッチの線状敲打痕で、敲打というより鋭いエッジを擦ったような痕跡である。(森下)

須恵器・土師器の年代観から7世紀代に位置付けられる。(宮崎)

SX41 (図 294)

D区中央付近で検出した遺構である。平面形態は不整な長楕円形を呈しており、長さ2.1m、幅1.3m、深さ24cmを測る。断面形態は浅い逆三角形で、途中で盛り上がる部分も見られる。

須恵器の杯蓋(2120)、杯身(2121)、高杯(2122)、甕(2123)等に混じってサヌカイト製の楔状石核2124が見られる。(宮崎)

2124 はサヌカイト製の楔状石核である。平面形が三角形を呈しており、石鏃または石錐の製作途上の可能性が高い。(森下)

3方向に長方形の透かし穴を施した長脚2段透かし高杯の存在から6～7世紀代に位置付けられる。

(宮崎)

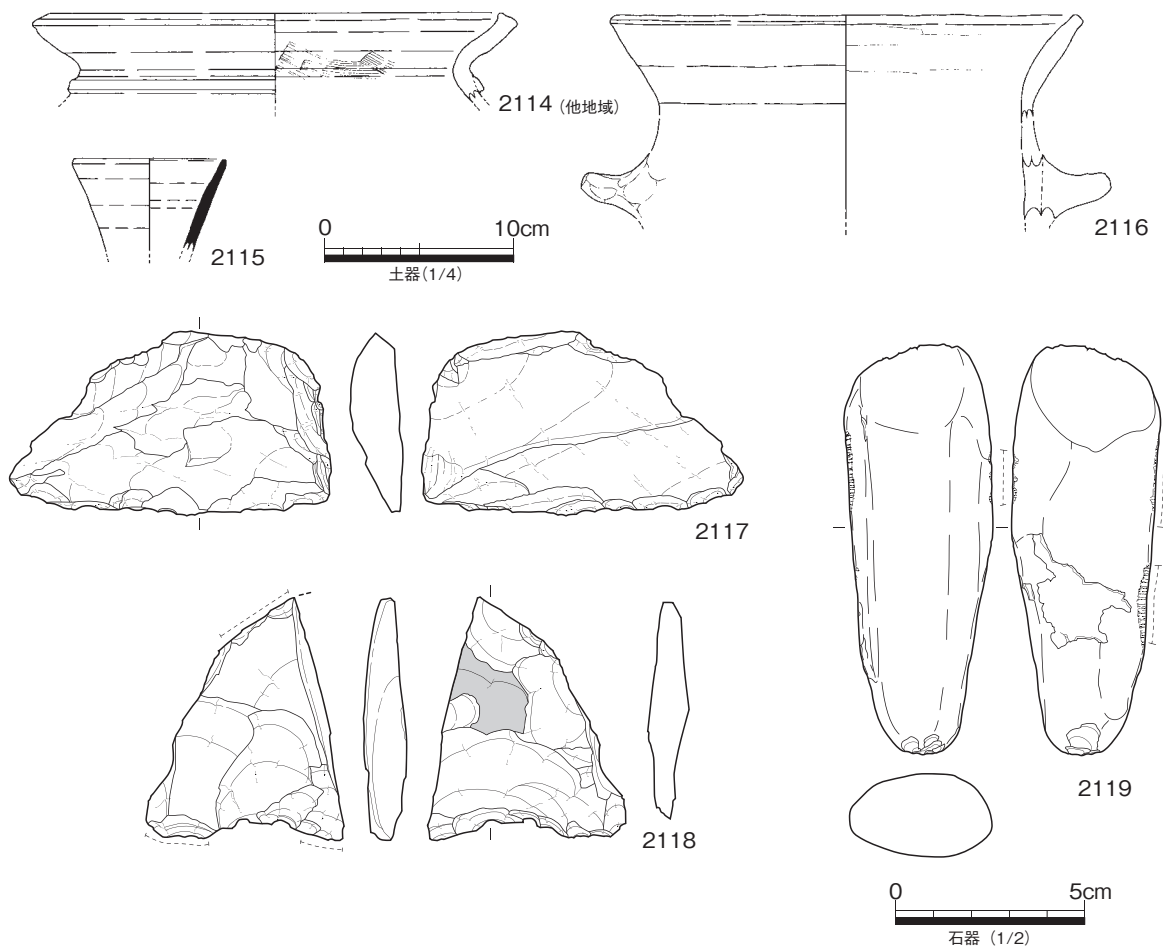


図 293 SX39 出土遺物

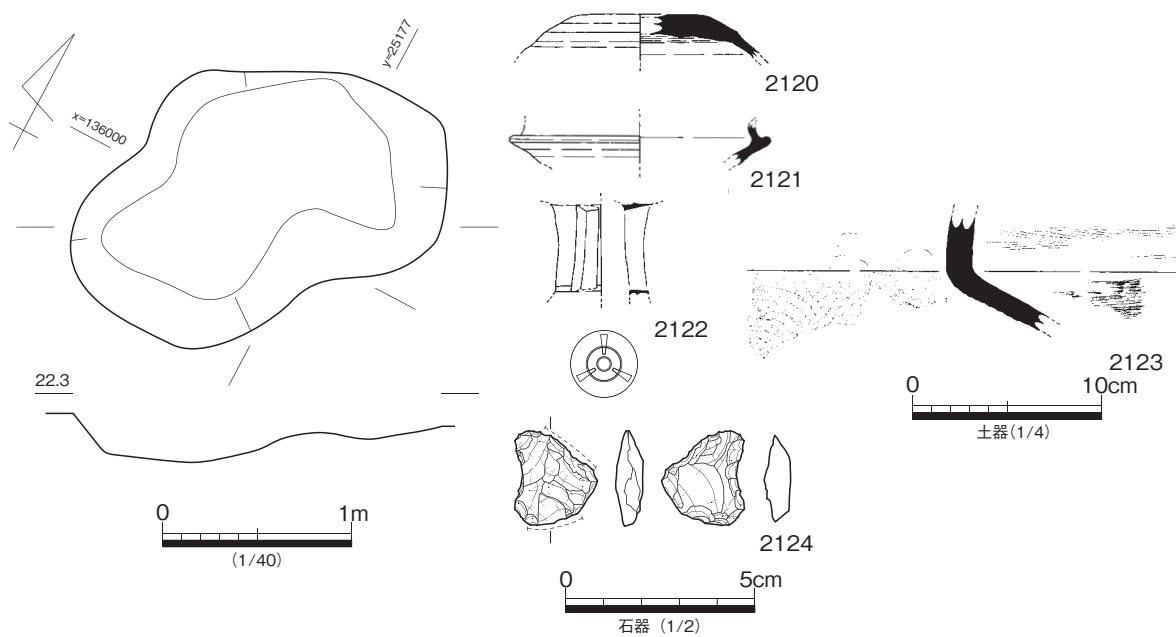


図 294 SX41 平・断面・出土遺物

第6節 近世以後の遺構分布

当遺跡は、「旧練兵場」という遺跡名のとおり、戦前に旧陸軍の練兵場として使われた地区である。今回の発掘調査中にも、そのような近世以後の遺構を多数検出した。弥生時代の集落遺構と重複するこれらの遺構についても、できるだけ記録を残すよう心掛けた。

図 295 に、遺構分布概略図を示した。主な遺構は柱穴跡である。多くは直径 0.4m 程の円形の掘り形を呈し、底面に直径 20～30cm の円形川原石の根石を置き、直径 1cm 程の褐色土ブロックを含む灰白色系砂質シルトで埋没する。また、同様の埋土をもつ土坑や溝跡等も少なからず存在し、現在の建物と同一の方向性をもつ遺構もそれに含まれる。今回の調査で攪乱として取り扱った部分（図 295 の網掛け部）も、ある時期の建物配置を反映したものと考えられる。

ここでは、条里方向の掘立柱建物跡を A 群、現在の病院敷地内の建物方向に一致する掘立柱建物跡を B 群とする。

A 群は約 10 棟の掘立柱建物跡で構成される。建物規模は桁行が 9～11m、梁間は 3m、5.4m、7.2m のものがある。梁間が大きな建物跡には、北か西に貼り出し部が付属する。

B 群は 2 棟の掘立柱建物跡と土坑多数、溝状遺構 1 条がある。B 群の掘立柱建物跡の梁間は、3.2m を測る。調査区南に等間隔に並ぶ長方形土坑は、ガラス片等を含む軟弱な土で埋没しており、主に攪乱として取り扱った。

時期的には A 群から B 群へ推移する。A 群は練兵場跡地の再開発に伴い土地整理を行う前の遺構と推定される。

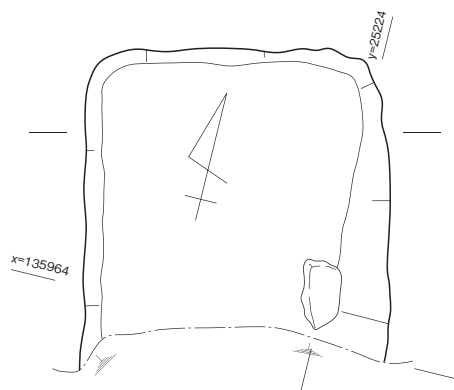
以下、個別遺構を報告する。



図 295 近世以後遺構分布

SK03 (図 296)

遺構 今回の調査範囲南端で東西方向に並ぶ長方形土坑群のひとつである。幅1.6m、長さ1.7m以上、深さは0.36mを測る。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、底場は若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦で、後述するSX03も同じ並びの遺構である。土坑間は約3.3mで現在の病院敷地内の方向性に合致する。埋土からガラス片等が出土した。
土器 2125は須恵質の平瓦片である。古代の瓦の混在品と推定する。(森下)



SD23 (図 297)

遺構 B区で検出した溝跡である。幅1.3m、深さ0.4mを測り、中世に埋没した条里方向の溝状遺構SD17の埋土の上位から掘り込まれる。灰白色系の砂質土で埋没し、西から東に走向する溝状遺構である。埋土中から陶磁器片が出土した。2126～2128は混在品の石器である。
石器 2126はサヌカイト製打製石鏃の未製品である。左右側縁が非対称形である。2127は結晶片岩製の打製石庖丁である。節理に沿って剥離するが、右側縁は抉りの痕跡があり、素材面は磨滅する。2128は流紋岩製のスクレイパーである。柘榴石斑晶が見られることから、天霧山で産出する流紋岩と考えられる。灰色で風化はあ

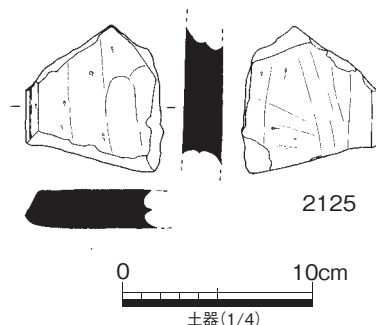
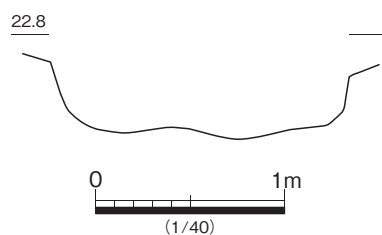


図 296 SK03 平・断面・出土遺物

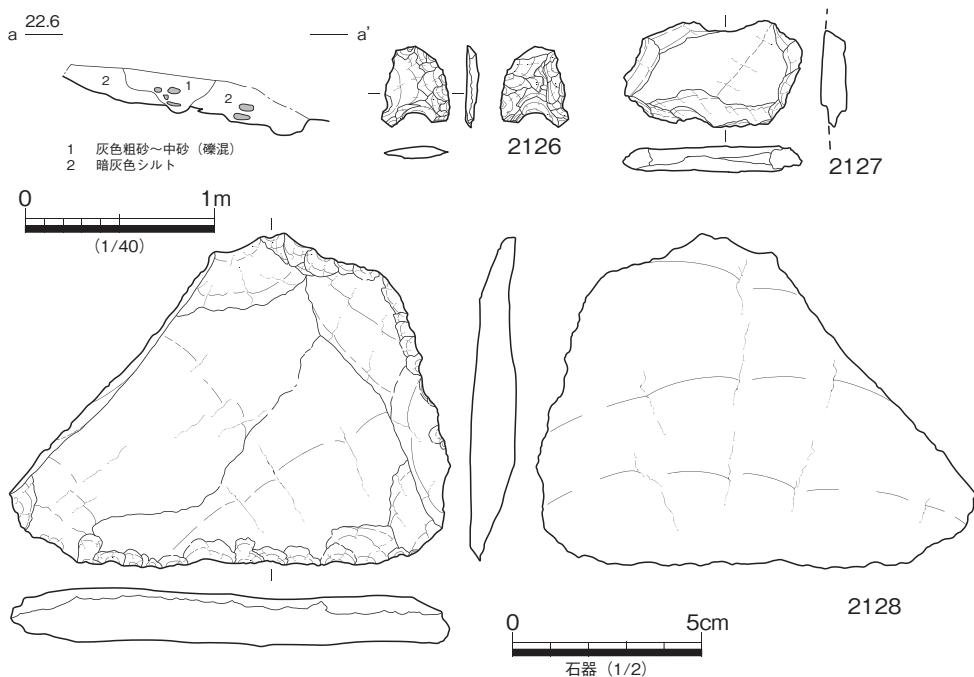


図 297 SD23 断面・出土遺物

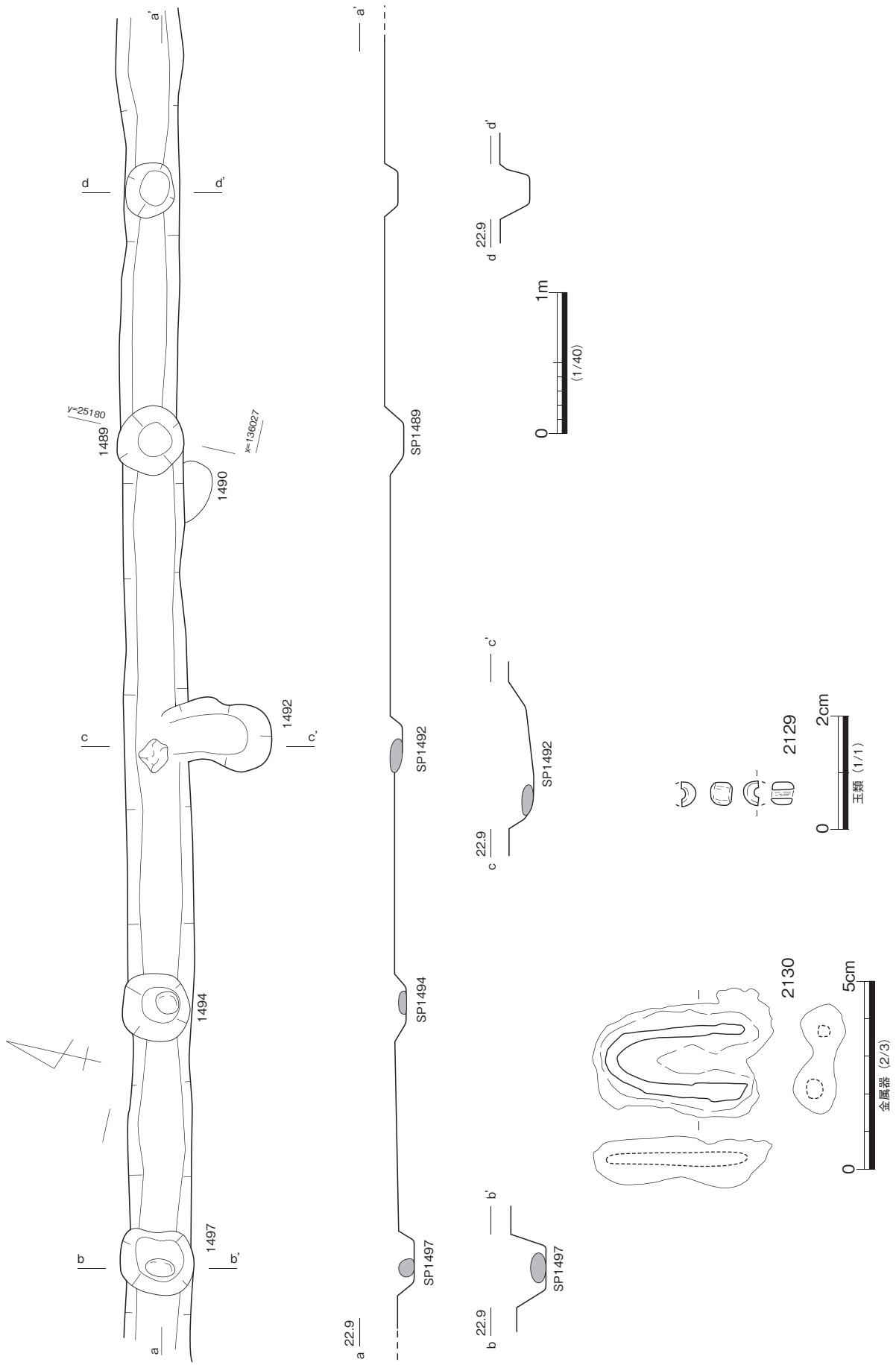


图 298 SD105 平・断面・出土遺物

まり進行していない。下端部に連続的な加工を施す。

2126・2128 は形態的にみて縄文後晩期に、2127 は弥生期に位置付けられる。(森下)

SD105 (図 298)

遺構 E区北側で検出した溝状遺構である。幅0.42～0.48m、深さ0.08～0.24mを測り、約1.8～2.1m間隔で柱穴が備わる。延長9.6mを検出した。柱穴跡内には砂岩の円形根石があり、A群の掘立柱建物跡の柱穴跡と似ているが、溝状遺構の方向はB群に一致する。溝状遺構も柱穴跡も灰白色系砂で埋没しており、同時並存したのは確実であることから、掘立柱建物跡ながら、布掘り状の建物基礎構造が想定される。

金属器 2130 は埋土より出土したU字状鉄器である、明黄色の錆に覆われる。

玉類 2129 は半折したガラス小玉である。直径0.42cm、高さ0.38cm、孔径0.18cmを測り、スカイブルーの色調を呈す。(森下)

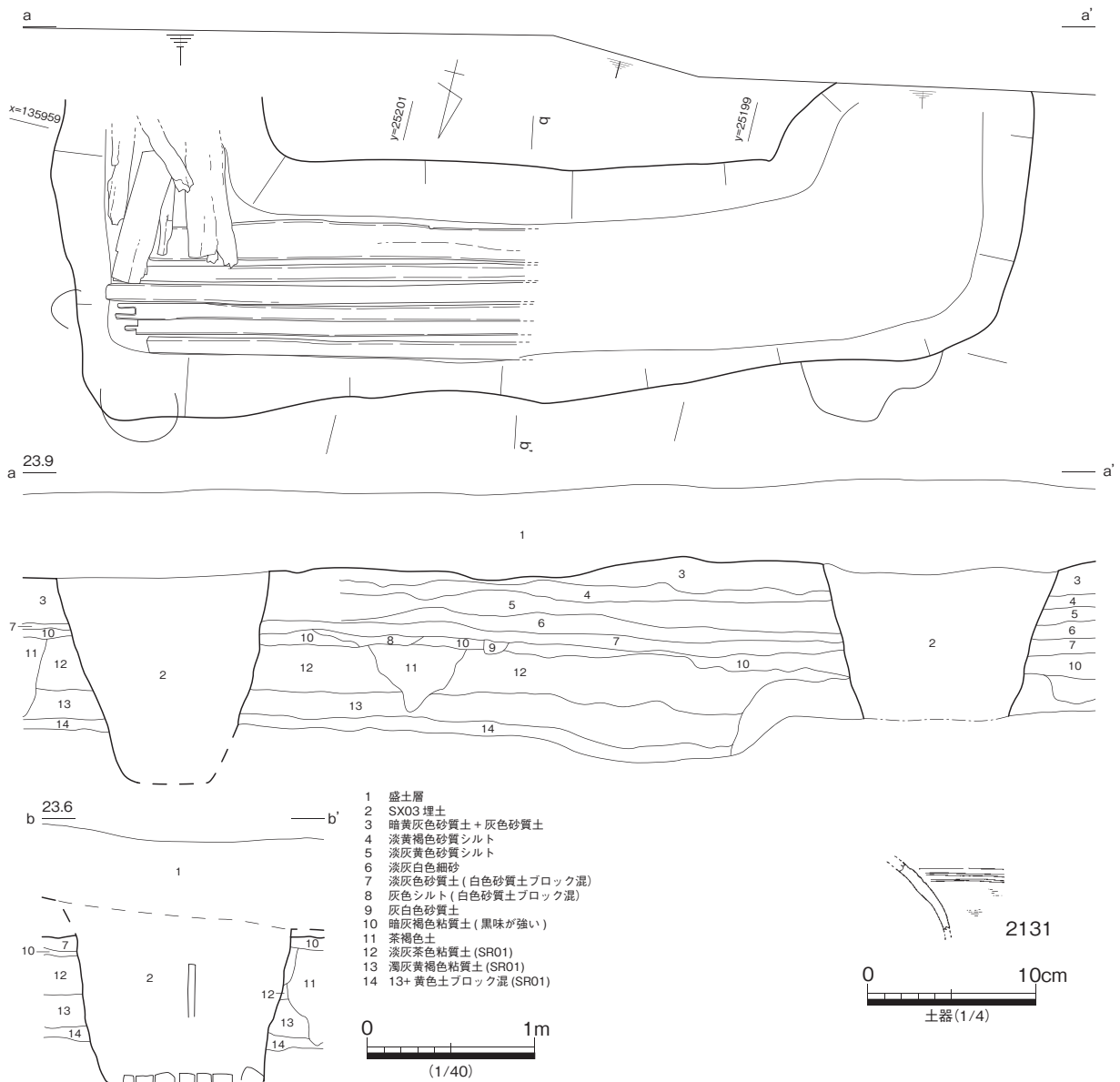


図 299 SX03 平・断面・出土遺物

SX03 (図 299)

遺構 A区南からF区にかけて検出したコの字状土坑である。東西5.8m、南北1.9m以上を測り、深さは1.2mに及ぶ。SX03と同じ並びに属す土坑2基が連結したもので、他の土坑と比べると深い。連結部の底場には建築材を並べ置き、床を作り出す。遺構の位置は弥生前期の河川跡SR01の流路域内に当たる。

土器 2131は弥生前期の壺片である。SR01の混在品である。(森下)

SX06 (図 300)

遺構 A区中央やや東寄りで検出した不定形土坑である。長さ2.0m、幅0.8m以上を測り、中世に埋没した溝状遺構SD03を掘り込むが、図示したのはSD03掘削後の記録である。灰白色系砂質土に直径1cm程の褐色土ブロックが混じる土で埋没する。

石器 2132は安山岩製磨製石庖丁である。曲背直刃形態で、刃部はやや片刃に近い断面形を呈すが、稜線は緩い。(森下)

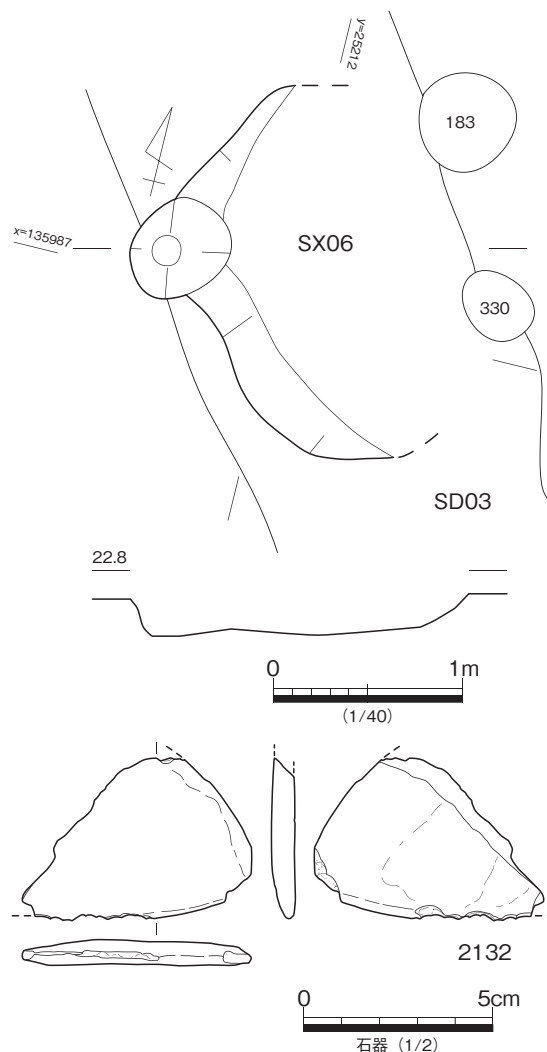


図 300 SX06 平・断面・出土遺物

第7節 柱穴跡の遺構・遺物

これまでに報告した各遺構に所属する柱穴跡は帰属する時代や遺構種別が明瞭だが、建物跡等に復元できなかった柱穴跡が多数存在する。図 301 には、調査区内の柱穴分布状況に加え、弥生時代中期～後期の掘立柱建物跡に所属する可能性が高いと現場で判断しながら、最終的に建物跡に復元できなかった柱穴跡、また須恵器・土師器が出土した柱穴跡を表示し、周辺調査あるいは建物復元に関する再分析のための資料を提示した。

柱穴跡の遺物

実測図を掲載した遺構名については、図 301 に平面的な位置を、遺物実測図との対応や遺物説明については、表 13～15 を参照していただきたい。また、整理作業の過程で、第 3 章第 4 節の弥生時代遺構に伴って報告する遺物が、本節にレイアウトすることとなった遺物がある。2183・2240・2243・2249 は SB10 を構成する柱穴跡からの出土。2267 は SB26 を構成する柱穴跡からの出土。2220 は SH42 の主柱穴跡からの出土である。(信里)



図 301 所属遺構不明の柱穴跡分布

報告書番号	地区	遺構	種別	器種	時期 / 石材	備考
2133	A 区	SP321	弥生土器	短頸広口壺	弥生中期後半(新)	
2134	A 区	SP479	弥生土器	長頸壺	弥生後期前半(新)	
2135	A 区	SP388	弥生土器	広口壺	弥生中期後半(新)	
2136	A 区	SP386	弥生土器	器台	弥生後期前半(中)?	
2137	A 区	SP420	弥生土器	器台	弥生後期前半(古)?	
2138	A 区	SP462	弥生土器	広口壺	弥生後期前半	
2139	A 区	SP274	弥生土器	甕	弥生後期後半(古)	
2140	A 区	SP233	弥生土器	広口壺	弥生後期前半(新)	
2141	A 区	SP443	弥生土器	甕	弥生後期後半?	他地域(備後)
2142	A 区	SP274	弥生土器	甕	弥生後期後半(古)	
2143	A 区	SP421	弥生土器	無頸壺	弥生中期後半(新)	
2144	A 区	SP405	弥生土器	高杯	弥生後期後半	
2145	A 区	SP274	弥生土器	甕	弥生中期後半	
2146	A 区	SP276	弥生土器	甕	弥生中期後半(新)	
2147	A 区	SP284	弥生土器	甕	弥生後期後半?	
2148	A 区	SP301	弥生土器	甕	弥生中期後半(新)	
2149	A 区	SP420	弥生土器	甕	弥生中期後半(中)	
2150	A 区	SP284	弥生土器	甕	弥生中期前半(新)	
2151	A 区	SP100	弥生土器	甕	弥生後期前半(新)	
2152	A 区	SP388	弥生土器	甕	弥生後期前半(古)	
2153	A 区	SP492	弥生土器	甕	弥生後期前半(中)	平面位置不明
2154	A 区	SP388	弥生土器	甕	弥生中期後半(中)	
2155	A 区	SP328	弥生土器	鉢	弥生後期前半(新)	
2156	A 区	SP293	弥生土器	鉢	弥生終末期(新)	
2157	A 区	SP284	弥生土器	鉢	弥生終末期?	
2158	A 区	SP274	弥生土器	台付鉢?	弥生後期後半	
2159	A 区	SP83	弥生土器	高杯	弥生中期後半(新)	
2160	A 区	SP83	弥生土器	高杯	弥生後期前半(中)	
2161	A 区	SP93	弥生土器	裝飾高杯	弥生後期前半	
2162	A 区	SP444	弥生土器	高杯	弥生後期前半(古)	
2163	A 区	SP421	弥生土器	広口壺	弥生中期前半(新)	
2164	A 区	SP01	弥生土器	支脚	弥生後期	
2165	A 区	SP492	弥生土器	甕	弥生前期前半	平面位置不明
2166	A 区	SP381	弥生土器	不明	不明	内面に記号紋
2167	A 区	SP54	須恵器	杯蓋	8c	
2168	A 区	SP394	須恵器	椀	8c	
2169	A 区	SP278	須恵器	杯	9c	
2170	A 区	SP278	須恵器	皿	8c?	
2171	A 区	SP278	土師器	甕		
2172	A 区	SP112	土師器	杯	9c 後半～10c	
2173	A 区	SP263	土師質土器	小皿	14c	
2174	A 区	SP208	土製品	羽口		
2175	A 区	SP454	石器	石鏃	サヌカイト	片面マツ
2176	A 区	SP400	石器	石鏃	サヌカイト	未製品
2177	A 区	SP324	石器	石鏃	サヌカイト	右側縁フクレ
2178	A 区	SP21	石器	石鏃	サヌカイト	
2179	A 区	SP396	石器	砥石	黒色頁岩	下端は擦切り磨製石庖丁に転用か
2180	A 区	SP399	石器	砥石	流紋岩	側縁に自然面及び整形痕
2181	A 区	SP254	石器	叩き石	砂岩	被熱で全体的に赤変。網目部は表面が黒変
2182	B 区	SP884	弥生土器	細頸壺	弥生後期前半(新)～	
2183	B 区	SP790(SB10)	弥生土器	広口壺	弥生中期後半(古)	SB10
2184	B 区	SP798	弥生土器	広口壺	弥生中期後半	
2185	B 区	SP846	弥生土器	壺	弥生後期前半	
2186	B 区	SP664	弥生土器	甕	弥生後期前半(古)	
2187	B 区	SP850	弥生土器	甕	弥生中期後半(中)	
2188	B 区	SP854	弥生土器	甕	弥生後期後半(新)～終末期(古)	
2189	B 区	SP558	弥生土器	鉢	弥生終末期(古)	
2190	B 区	SP758	須恵器	甕	7c～	
2191	B 区	SP746	須恵器	椀	10c～	
2192	B 区	SP746	須恵器	蓋	8c	
2193	B 区	SP786	黒色土器	椀	12c	
2194	B 区	SP657	U 字状鉄器(小形)	毛抜き	鉄	
2195	B 区	SP631	石器	石鏃	サヌカイト	表裏面マツ

表 13 柱穴跡出土遺物一覧 その 1

報告書番号	地区	遺構	種別	器種	時期 / 石材	備考
2196	B区	SP534	石器	石鏃	サヌカイト	片面マツ
2197	B区	SP713	石器	火打石	ハリ質安山岩	
2198	B区	SP543	石器	柱状片刃石斧?	結晶片岩	刃部付近の小片
2199	B区	SP838	石器	砥石	黒色頁岩	
2200	B区	SP955	石器	石錘	結晶片岩	周縁に軽い研磨。側縁に敲打による凹み
2201	B区	SP565	石器	砥石	流紋岩	砥面以外は割れ面
2202	C区	SP1284	弥生土器	広口壺	弥生後期前半(古)	
2203	C区	SP1284	弥生土器	広口壺	弥生終末期(古)	
2204	C区	SP1006	弥生土器	細頸壺	弥生中期前半(新)	
2205	C区	SP1195	弥生土器	短頸広口壺	弥生中期後半(新)	
2206	C区	SP1182	弥生土器	広口壺	弥生中期後半(新)	
2207	C区	SP1210	弥生土器	広口壺	弥生後期後半(古)	
2208	C区	SP1035	弥生土器	広口壺	弥生終末期	
2209	C区	SP1292	弥生土器	壺	弥生後期前半(新)	
2210	C区	SP1210	弥生土器	甕	弥生後期後半	他地域(吉備)角閃石多く含む
2211	C区	SP1006	弥生土器	甕	弥生中期前半(新)	
2212	C区	SP1184	弥生土器	甕	弥生中期後半(新)	
2213	C区	SP1037	弥生土器	甕	弥生中期前半(新)	
2214	C区	SP1006	弥生土器	甕	弥生中期前半(新)	
2215	C区	SP904	弥生土器	鉢	弥生後期後半?	
2216	C区	SP1006	弥生土器	甕	弥生後期前半(古)	
2217	C区	SP1319	弥生土器	鉢	弥生終末期(中)	
2218	C区	SP1032	弥生土器	高杯	弥生後期後半(古)	
2219	C区	SP1159	弥生土器	装飾高杯	弥生後期前半(中)	
2220	C区	SP1162	弥生土器	台付鉢	弥生中期後半	SH42 支柱穴
2221	C区	SP1006	弥生土器	台付鉢	弥生中期後半(古)?	
2222	C区	SP1279	縄文土器	深鉢		
2223	C区	SP921	石器	石鏃	サヌカイト	
2224	C区	SP1001	石器	石鏃	サヌカイト	
2225	C区	SP1200	石器	石鏃	サヌカイト	表裏面マツ
2226	C区	SP1134	石器	石鏃	サヌカイト	表裏面マツ 濃網目部は強いマツ SH35 支柱穴
2227	C区	SP976	石器	石鏃	サヌカイト	表裏面マツ
2228	C区	SP978	石器	打製石庖丁	サヌカイト	表裏面マツ・位置不明
2229	C区	SP984	石器	楔状石核	サヌカイト	折れ面以外は周縁グレ
2230	C区	SP1011	石器	使用痕ある剥片	サヌカイト	左側素材面マツ打製石庖丁に転用か
2231	C区	SP1445	石器	打製石庖丁	サヌカイト	背部グレ 表裏面マツ
2232	C区	SP1271	石器	石核	サヌカイト	下縁に微細剥離痕
2233	C区	SP1162	石器	摩滅ある剥片	ハリ質安山岩(流紋岩)	下端作用部に回転マツ痕回転部最大径:0.8cm 長さ:0.45cm SH42 支柱穴
2234	C区	SP1162	石器	摩滅ある剥片	サヌカイト	下端表裏面マツ SH42 支柱穴
2235	C区	SP997	石器	楔状石核	サヌカイト	上下縁グレ
2236	C区	SP1001	石器	楔状石核	サヌカイト	
2237	C区	SP1203	石器	楔状石核	サヌカイト	上下縁グレ
2238	C区	SP1271	石器	石核	サヌカイト	側・下縁グレ
2239	C区	SP1284	石器	剥片(接合資料)	流紋岩	側縁に加工痕側縁加工後に分割
2240	D区	SP826(SB10)	弥生土器	広口壺	弥生中期前半(新)?	SB10
2241	D区	SP1657	弥生土器	長頸壺?	弥生後期前半(新)?	
2242	D区	SP1397	弥生土器	甕	弥生後期前半	他地域(備後)
2243	D区	SP826(SB10)	弥生土器	壺	弥生中期後半(古)	SB10
2244	D区	SP1685	弥生土器	甕	弥生中期後半(古)	
2245	D区	SP1598	弥生土器	甕	弥生終末期(中)	
2246	D区	SP1684	弥生土器	甕	弥生中期後半(古)	
2247	D区	SP1473	弥生土器	甕	弥生中期後半(新)	
2248	D区	SP1473	弥生土器	甕	弥生中期後半(中)	
2249	D区	SP826(SB10)	弥生土器	甕	弥生中期後半?	SB10
2250	D区	SP1635	弥生土器	甕	弥生終末期(新)	
2251	D区	SP1473	弥生土器	甕	弥生中期後半(新)	
2252	D区	SB17 (SP1671)	弥生土器	甕	弥生後期後半(古)	

表 14 柱穴跡出土遺物一覧 その2

報告書番号	地区	遺構	種別	器種	時期 / 石材	備考
2253	D 区	SP1526	弥生土器	鉢	弥生終末期(古)	
2254	D 区	SP1735	弥生土器	鉢	弥生中期前半(新)	
2255	D 区	SP1684	弥生土器	鉢	弥生中期後半(新)	
2256	D 区	SB17 (SP1653)	弥生土器	甕	弥生中期後半(新)	
2257	D 区	SP1896	弥生土器	甕	中期前半?	
2258	D 区	SP1424	須恵器	杯	8c	
2259	D 区	SP1354	土師質土器	杯	10c?	
2260	D 区	SP1373	石器	石鏃	サヌカイト	
2261	D 区	SP1641	石器	石鏃	サヌカイト	位置不明
2262	D 区	SP1379	石器	楔状石核	サヌカイト	左右側縁アブレ
2263	E 区	SP1897	弥生土器	甕	弥生後期前半(中)	
2264	E 区	SP1876	弥生土器	支脚	弥生後期前半(新) ~後期後半(古)	
2265	E 区	SP1501	土師器	皿	11c	
2266	F 区	SP1720	弥生土器	壺	弥生終末期(新)	
2267	F 区	SP1832(SB26)	弥生土器	壺	弥生中期後半(中)	SB26
2268	F 区	SP1723	弥生土器	甕	弥生中期前半(新)	
2269	F 区	SB20 (SP1772)	弥生土器	甕	弥生中期後半(古)	
2270	F 区	SB20 (SP1772)	弥生土器	甕	弥生中期後半	
2271	F 区	SP1723	弥生土器	鉢	弥生中期後半(古)	
2272	F 区	SP1760	弥生土器	鉢	弥生終末期(新)	
2273	F 区	SP1810	弥生土器	鉢	弥生中期後半(中)	
2274	F 区	SP1755	須恵器	杯	10c	
2275	F 区	SP1822	須恵器	杯	10c	
2276	F 区	SP1757	須恵器	杯	7c 末	
2277	F 区	SP1776	土師器	杯	10c	
2278	F 区	SP1776	黒色土器	椀	12c	
2279	F 区	SP1745	須恵器	広口壺	TK47 型式併行期	

表 15 柱穴跡出土遺物一覧 その3

石器 2175～2178はサヌカイト製打製石鏃である。2175は素材面に磨滅を残す凹基式鏃、2176・2177は剥片の周縁に粗い調整加工を施した石鏃未製品である。2178は有茎式鏃で先端が尖る完成品である。図化していないが、素材面には打製石庖丁特有の磨滅が残る。

2179は黒色頁岩製の小型の砥石である。表裏面に顕著な平坦砥面が残り、下端部は稜線を介して表裏ともに僅かな凹面を留めた左右方向の砥面を備える。表面に丸みのある小型製品の研ぎに使用したことが推定できる。

2180は流紋岩製の砥石である。片面に極めて平滑な砥面が残る。2181は砂岩製の被熱礫である。全体的に赤化し、図化した範囲は黒変する。

2195・2196はサヌカイト製打製石鏃である。2195は基部の削り込みがやや深めの平基式鏃で、先端部は欠損する。素材面に磨滅が見られる。2196は弥生時代中期に通有の下半部が窄まる平面形を呈し、基部の削り込みが浅い。

2197はハリ質安山岩製の火打石片である。図の側縁に顕著な敲打痕が残る。ハリ質安山岩は近隣の香色山に産出する石材である。2198は結晶片岩製の柱状片刃石斧の刃部付近の破片とした。2199は黒色頁岩製の砥石である。先端が尖り、図の左側縁に細い刃部様の砥面が残る。裏面(図の右面)は節理に沿って石材を分割した面を切って線状痕が最大幅4mmの範囲に認められる。刃部は表面側(図の左面)には稜線が残り、裏面側(図の右面)は稜が取れてやや丸くなる。したがって、刃部を垂直に押し当てて研磨した後、本体を右に傾けて最終研磨を行ったことが分かる。研磨対象は工具のサイズから見てかなり小型品であったことが推定できる。

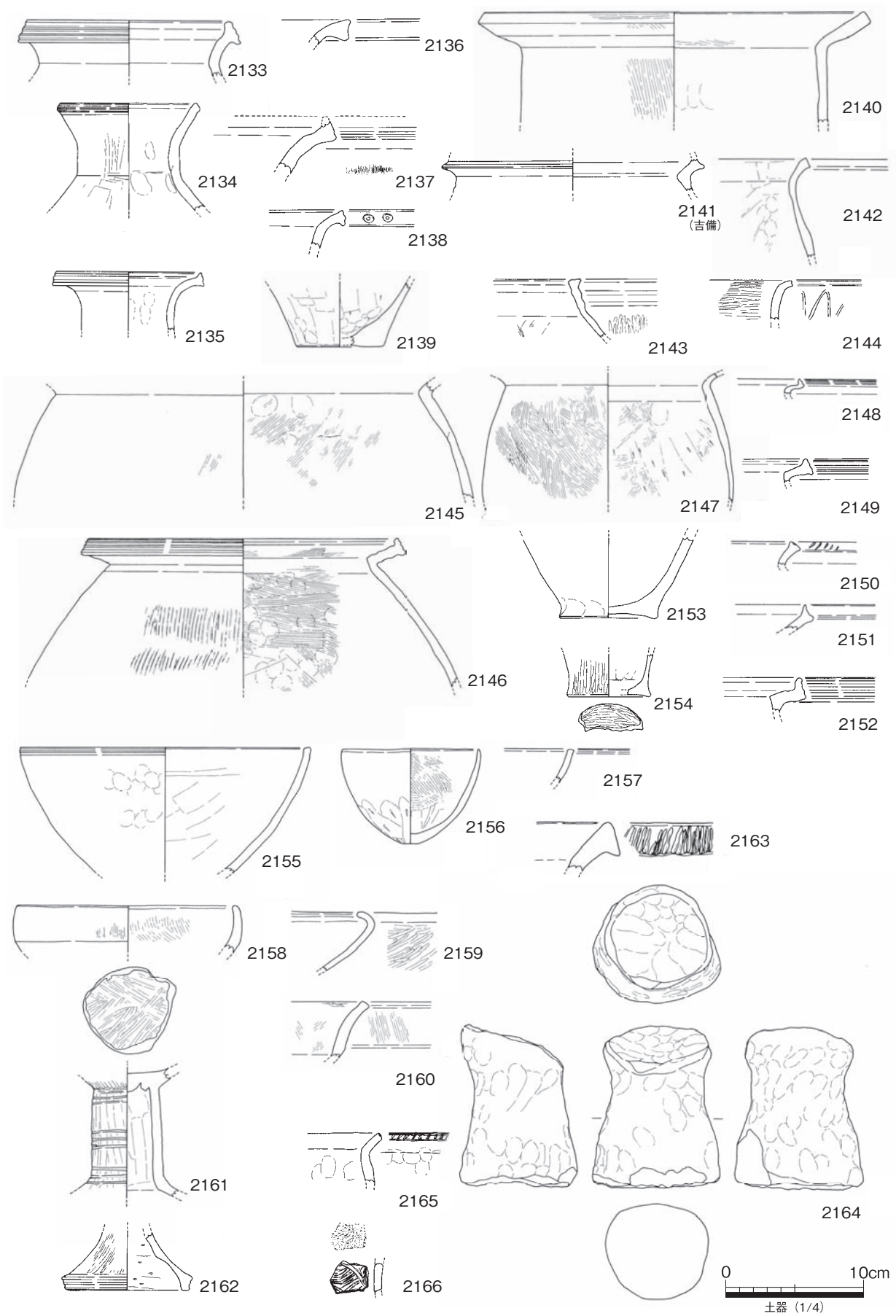


图 302 A区柱穴迹出土遗物 (1)

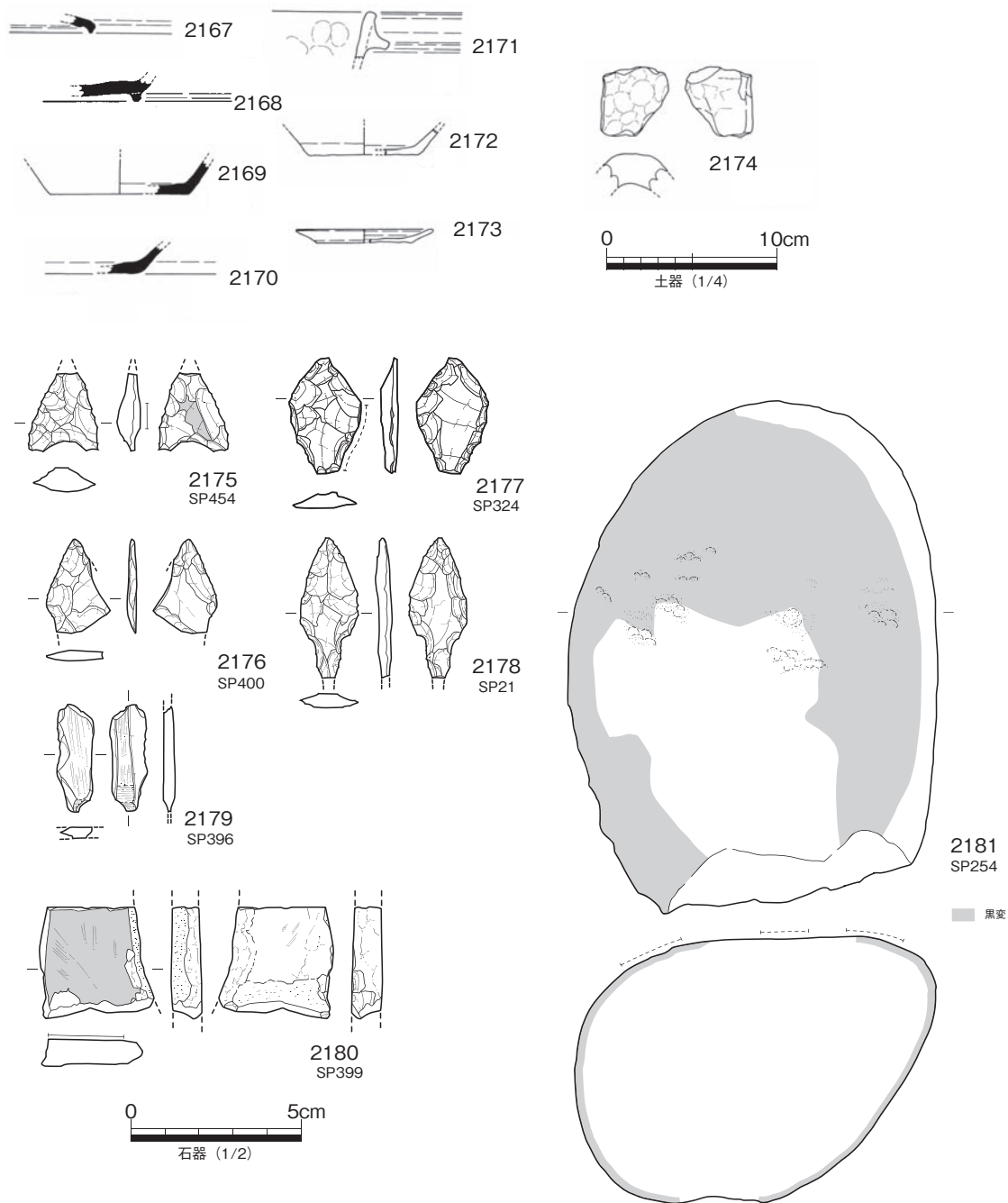


図 303 A区柱穴跡出土遺物 (2)

2200 は結晶片岩製の石錘である、わらじ形に整形した扁平素材の左右側縁に抉りを施す。2201 は流紋岩製砥石の小片である。

2223 ～ 2227 はサヌカイト製打製石鏃である。2223 は下半部が窄まる平面形を有し、先端が尖る完成品である。2224 は基部が欠損するが、先端が尖る完成品である。2225 は打製石庖丁を転用した石鏃で下半部が窄まる平面形を有す。基部の削り込みはないが、先端は尖り、側縁の調整加工も丁寧であることから、完成品と考える。2226 は打製石庖丁及び擦切り具の破片を転用した石鏃未製品である。左右の調整加工に切られて、表裏の素材面は打製石庖丁特有の磨滅がある。また、図の下端は擦切り (研磨) 痕が残る。

2228 はサヌカイト製打製石庖丁片である。2229 はサヌカイト製楔状石核である。図の左側縁に抉りを備える。2230 はサヌカイト製剥片の刃部に微細剥離痕を残し、背部を敲打調整する小型の刃器である。素材の片面に打製石庖丁特有の磨滅が残る。

2231 はサヌカイト製打製石庖丁である。2232 は楔状石核から剥離された剥片で、一部に打製石庖丁特有の磨滅が残る。2233 はサヌカイト製の石錐である。厚みのある剥片の一端に横方向に顕著な線状痕を留めた穿孔痕跡が残る。直径約 10mm の穿孔を施している。2234 は表裏面及び側縁の一部（図の下端）に磨滅痕を留めたサヌカイト製の磨滅ある剥片である。磨滅というより、砥石の砥面に類似し、黒色頁岩製の 2179・2199 の砥石の砥面に近い。縦方向に細かな線状痕が残る。小型品の研ぎに使用したものと推定する。

2235 ～ 2238 はサヌカイト製楔状石核である。2239 は安山岩製の板状礫で、側縁を敲打し分割を行った痕跡が残る。

2260・2261 はサヌカイト製打製石鏃である。2261 は下半部に厚みが残るが、先端及び周縁の調整加工は丁寧に施されることから、完成品と考える。2262 はサヌカイト製の楔状石核である。（森下）

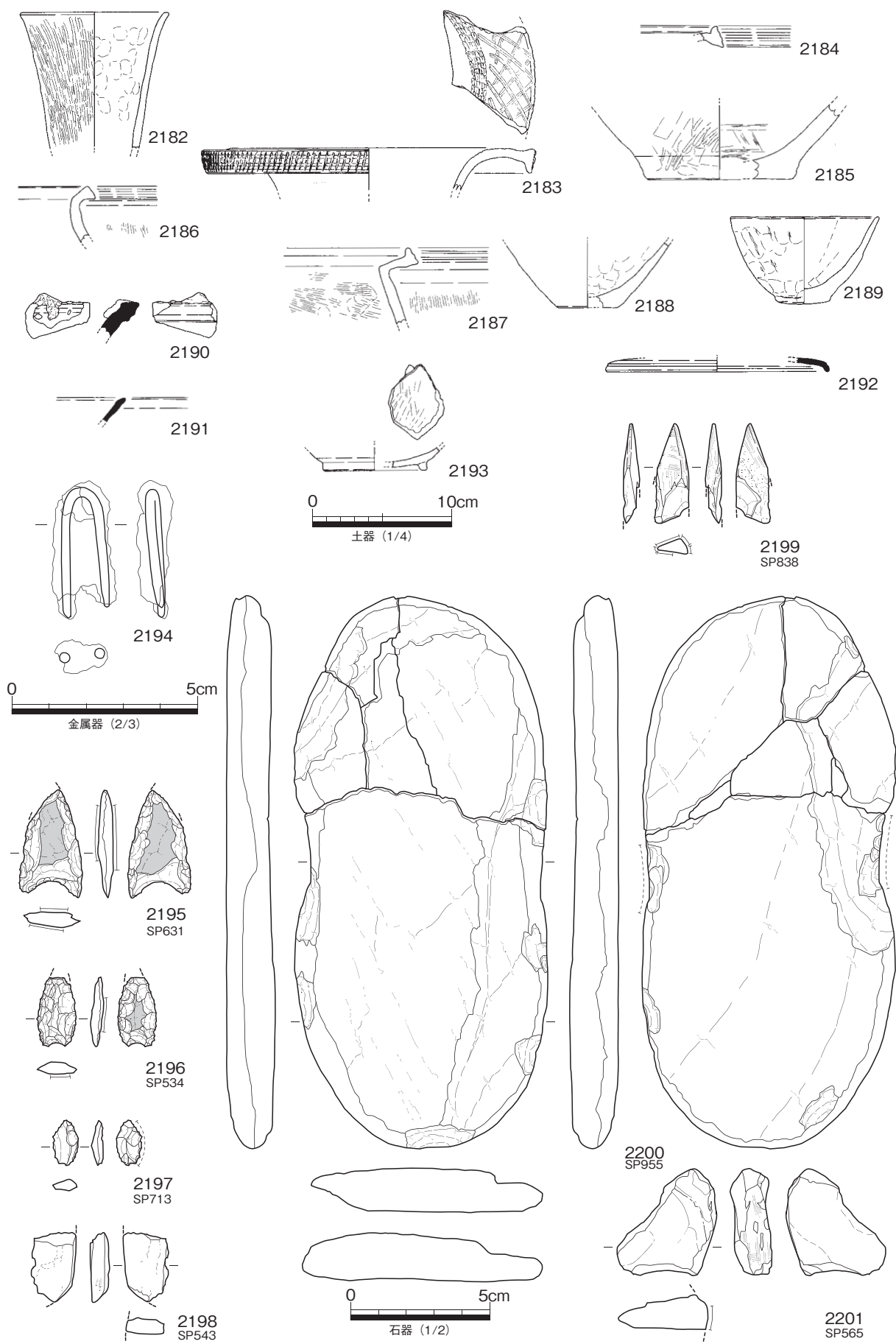


图 304 B区柱穴跡出土遺物

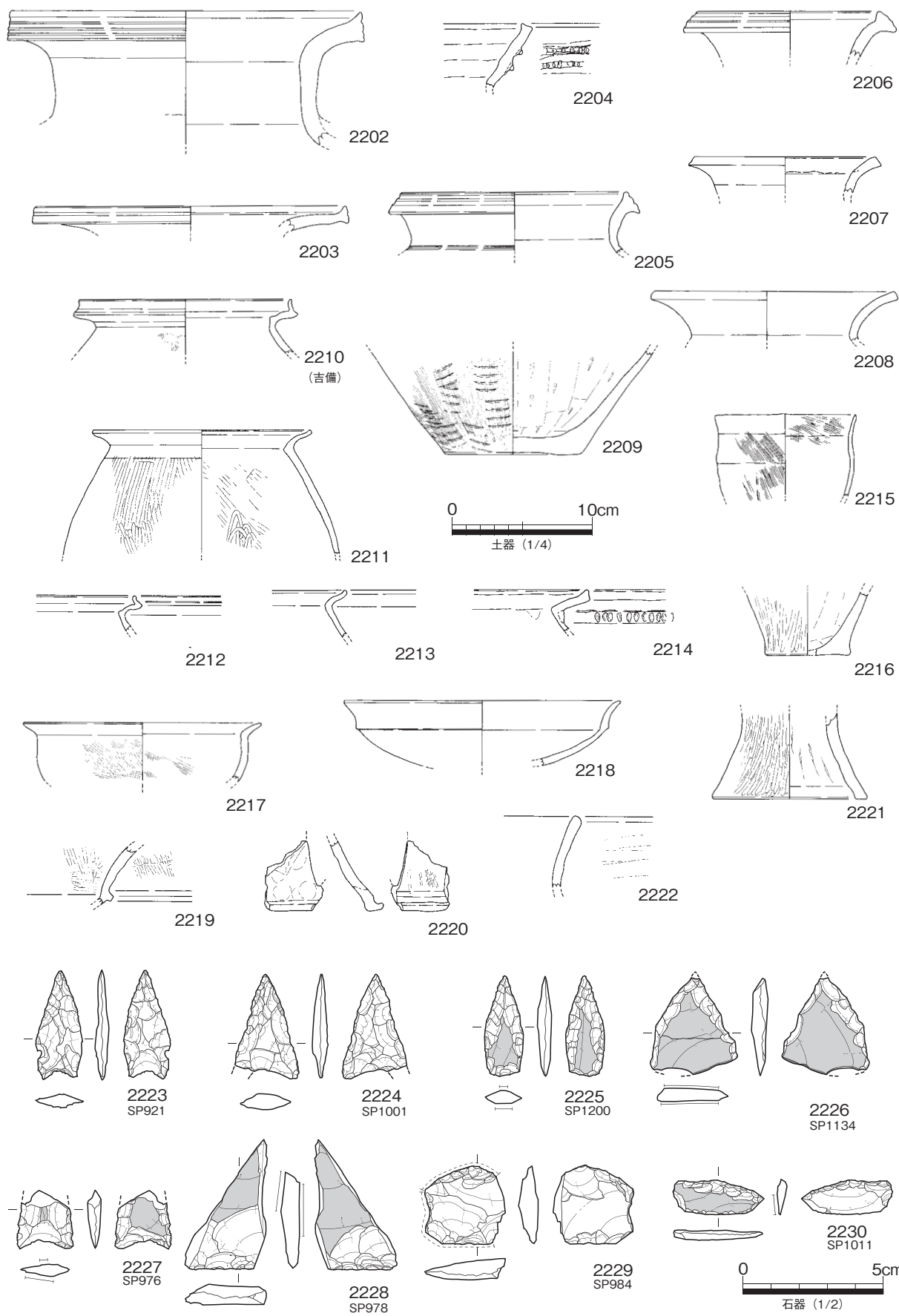


图 305 C区柱穴迹出土遗物 (1)

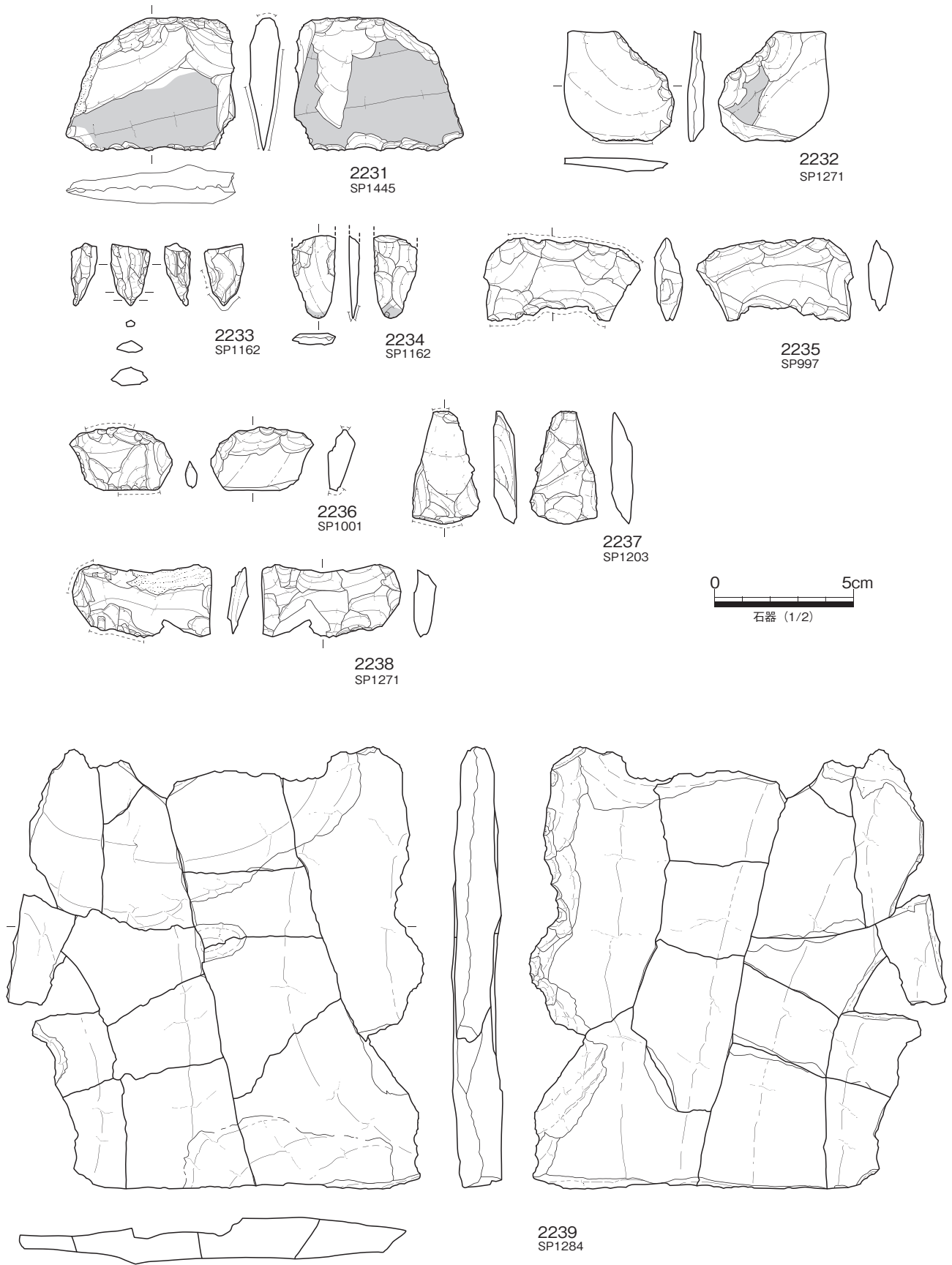


图 306 C区柱穴迹出土遗物 (2)

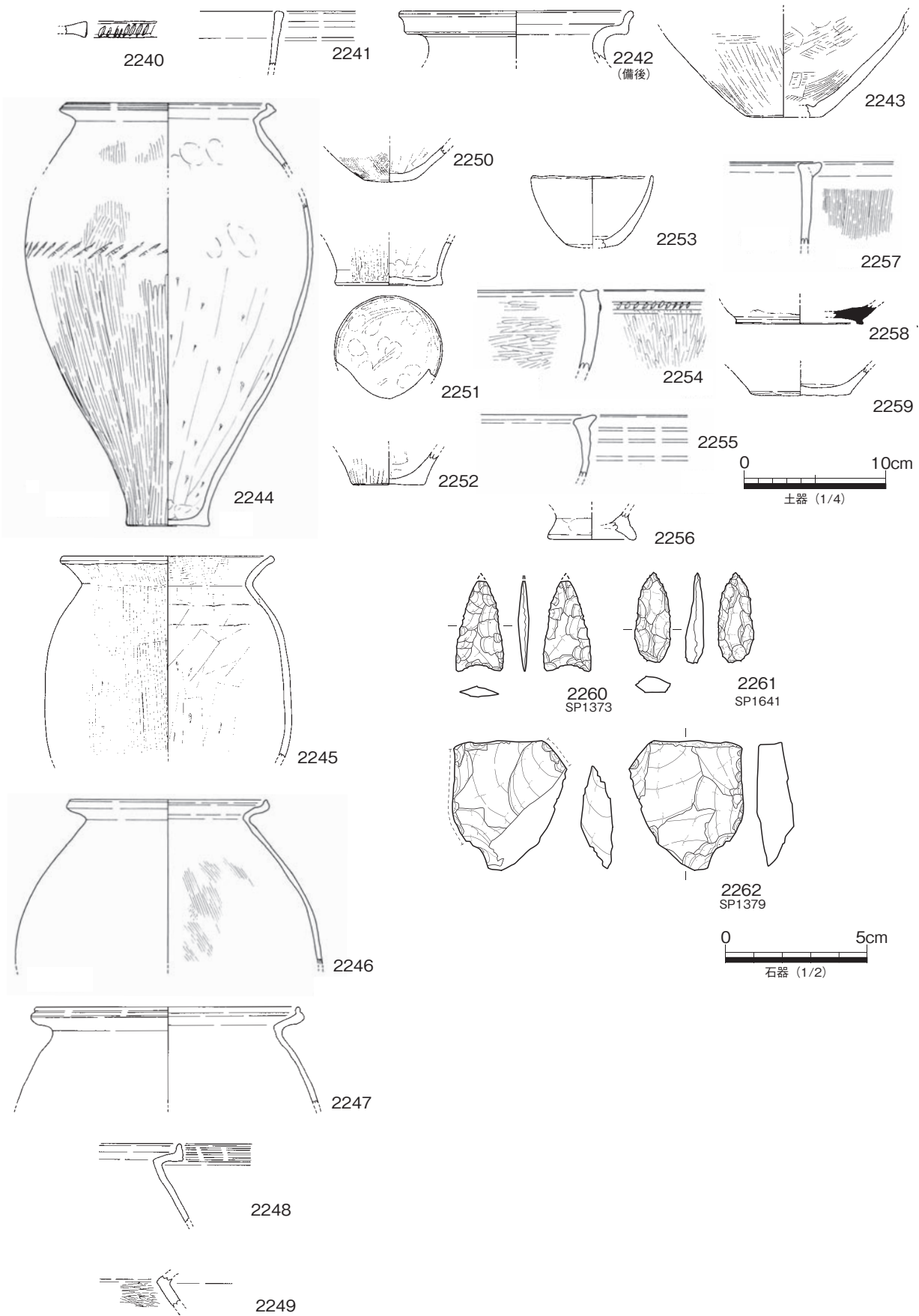


图 307 D区柱穴跡出土遺物

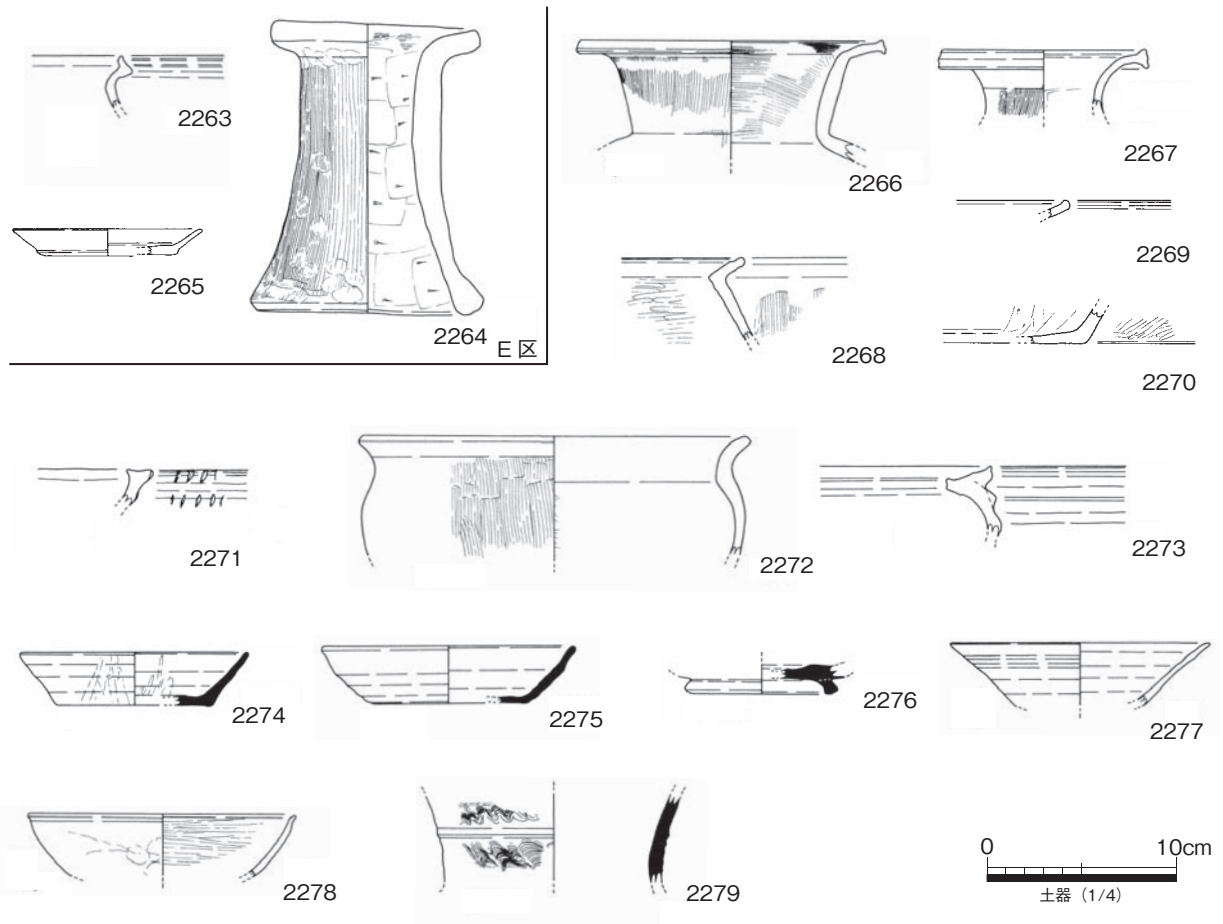


图 308 E区·F区柱穴跡出土遺物

